



宗典
卷二

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.26

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T8J3
1929
v. 26

昭和
新纂 國譯大藏經 宗典部 第二卷

眞言宗聖典 目次

卽身成佛義	弘法大師撰	一
聲字實相義	弘法大師撰	三
吽字義	弘法大師撰	二四
辯顯密二教論	弘法大師撰	四一
般若心經祕鍵	弘法大師撰	六
發菩提心論	龍猛菩薩撰	七四
祕藏寶鑰	弘法大師撰	八三
大毘盧遮那成佛經疏	一行阿闍梨記	一三三
五輪九字明祕密釋	興教大師撰	二六三
御遺告	弘法大師撰	三〇五

目次

遺	誠	弘法大師撰	三九
遺	誠	弘法大師撰	三二
一期大要祕密集	興教大師撰	三三	
孝 養 集	興教大師撰	三五	
光明真言土砂勸信記	明惠上人撰	四五	
祕密安心略章	法住撰	四八	
密宗安心鈔	良基撰	五一	
真言安心和讚		五三	
光明真言和讚		五五	
舍利和讚	融源撰	五七	
弘法大師和讚		五〇	
興教大師和讚		五三	

眞言宗聖典

宗典部
第二卷

生成佛の意なり。【秘密藏】眞言の經典を指す。【二】以下は經證を引きて八證をあげ。

【金剛頂經】金剛頂一字頂輪王瑜伽念誦儀軌のこと。【歡喜地】修行して得る菩薩最初の位を云ふ。

【後の十六生】菩薩の修行に十六の次第ありて其第十六をば後の十六生と云ふ。【法佛の自内證】法身佛の内證、即ち秘密のこと。

【初地】菩薩最初の位。【自家佛乘】眞言宗のこと。【地位品】華嚴經の十地品を指す。【尊】大阿闍梨を指す。

【持明悉地】諸尊中の一尊に就いて正覺を得ること。悉地とは梵語、譯して成就と云ふ。

り尊の所に於て明法を受け、觀察し相應すれば成就を作す。此經に説く所の悉地とは、持明悉地及び法佛悉地を明す。大空位とは法身は大虛に同じて無碍なり、衆象を合じて常恆なり、故に大空と曰ふ。諸法の依住する所なるが故に位と號す。身秘密とは法佛の三密は等覺も見難く、十地も何ぞ窺はん。故に身秘密と名く。又龍猛菩薩の『菩提心論』に説かく、「眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を説く、諸教の申に於て闕いて書せず。是説三摩地とは法身自證の三摩地なり。諸教とは他受用身所説の顯教なり。」又云はく、「若し人佛慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺の位を證す。是の如き等の教理證文に依つて此義を成立す。」

【三】是の如きの經論の字義差別云何ん。頌に曰はく、

六大無碍にして常に瑜伽なり 體

四種曼荼各離れず 相

三密加持すれば速疾に顯る 用

重重帝網なるを即身と名く 無碍

法然に薩般若を具足して、心數心王剎摩に過ぎたり

各 五智無際智を具す、圓鏡力の故に實覺智なり 成佛

釋して曰はく、此二頌八句、以て即身成佛の四字を數す。即是の四字に無邊の義を合せ

り。一切の佛法は此一句を出でず。故に略して兩頌を樹てて、無邊の徳を顯す。頌の文を

【相】本體の流轉

【用】本體の活動

【六】二頌八句の頌文を釋す。初に六大を釋す。

【四】修行中の位。

【了】了別する八

【覺位】覺位。

【智】無明を照す

【此】此の偈。上に引く。大日經の我

【五】五佛の三摩地。

【三】三摩地なり。

【金剛】三摩地の軌跡なり。

【自】諸法本より以下の五大なり

【是】六人の六大法の體生となり

【四】三種法身、三種世間が所生となる義を明す。

【器】山川草木大地等の衆生の住所。

同たり、一切處に自在にして、普く種種の有情及び非情に遍せり。凡阿字は第一命なり。

又囑字を名けて水と爲す。又囑字を名けて火と爲す。又呼字を名けて風と爲す。又字は

虛空に同じ。此經文の初の句に、我即同心位とは所謂心は則ち論智なり。後の五句は即ち

これ五大なり、中の三句は六大自在の用無碍の徳を表す。『般若經』及び『瓔珞經』等に亦

六大の義を説けり。是の如き。六大は隨く一切の佛及び一切衆生器界等の四種法身と三種

世間とを造す、故に大日經、如來變生の偈を説いてのたまはく、

能く隨知形の、諸法と法相と

諸佛と聲聞と、救世の因縁覺と

勤勇の菩薩衆とを生ず、及び人尊も亦然たり

衆生器世界、次第にして成立す

生住等の諸法、常恆に是の如く生ず

此偈は何の義をか顯現する。謂く、六大能く四種法身と曼荼羅と及び三種世間とを生ず

ることを表はす。謂く、諸法とは心法なり。法相とは色法なり。復次に諸法といふは通名を

擧ぐ、法相とは差別を顯はす。故に下の句に諸佛、聲聞、緣覺、菩薩、衆生、器世間、

次第而成立と云ふ。復次に諸法とは法曼荼羅、法相とは三摩耶身なり。諸佛乃至衆生とは

大曼荼羅身なり。器世界とは所依の土を表はす。此器界とは、三昧耶曼荼羅の總名なり。

復次に佛菩薩二乘とは智正覺世間を表はす。衆生とは衆生世間なり。器世界とは即ちこれ

【偈の文】大日經第五秘密曼荼羅品第十一の文。
【人尊】等覺の菩薩。

【三種世間】有情世間、器世間、智正覺世間なり。

【法曼荼羅】諸尊の種子を記したる曼荼羅なり。

【三摩耶身】諸尊の本誓の標示たる輪、蓮花、三股杵等の形を畫きたる三摩耶曼荼羅を云ふ。

【大曼荼羅】諸尊の相好具足せるを畫きたる曼荼羅なり。

【知正覺世間】佛菩薩の世界。

【衆生世間】六道に輪廻する有情の世間なり。

【所生の法】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、佛、菩薩、聲聞、緣覺の十界の依正の法なり。
【四種法身】自性受用、變化、等流

器世間なり。復次に能生とは六大なり、隨類形とは所生の法なり。即ち四種法身三種世間はなり。故に次に又言はく、祕密主、曼荼羅の聖尊の分位と種子と幟幟とを造ること有り。汝當に諦かに聽け、吾今演說すべし。即ち偈を説いてのたまはく、

眞言者圓壇を、先づ自體に置け

足より臍に至るまで、大金剛輪を成じ

此より心に至るまで、當に水輪を思惟すべし

水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり

謂く、金剛輪とは阿字なり、阿字とは即ち地なり、水火風は文の如く知んぬべし。圓壇とは空なり。眞言者とは心大なり。長行の中に謂ふ所の聖尊とは大身なり。種子とは法身なり。幟幟とは三昧耶身なり。羯磨身は三身に各各に之を具す。具に説くことは經文に廣く之を説けり、文に臨んで知んぬべし。又云はく、「大日尊の曰はく、金剛手、諸の如來の意より生じて業戲の行舞を作すことは廣く品類を演べたり。四界を攝持して心王を安住し、虚空に等同なり。廣大の見非見の果を成就し、一切の聲聞辟支佛諸の菩薩の位を出生す。」此文は何の義をか顯現する。謂く、六大能く一切を生ずることを表はす。何を以てか知ることを得る、謂く、心王とは識大なり。攝持四界とは四大なり。等虚空とは空大なり。此六大は能生なり、見非見とは欲色界無色界なり。下は文の如し。即ち是れ所生の法なり。此の如きの經文は皆六大を以て能生と爲し、四法身三世間を以て所生と爲す。此

の四種にして、自性身は諸法に、受用は法相に、變化身は降誕に、等流身は衆生に現す。

【五輪】五輪の一なり。五輪とは地水火風空の五を頂而胸腹足に配分したるものなり。

【大身】大曼荼羅身なり。

【法身】法曼荼羅身なり。

【密身】密曼荼羅身なり。

【又六】大日如來三昧悉地出現第六の文なり。

【色界】色界の想行の五輪を總として三界に生じ、無色界は受想行を總として六處に輪轉す。

【法界】諸佛より器世界に到る迄行悉く六大を體性とすとの意。

【智】智は能緣の廣大、地とは

周生の法は上法身に達し下六道に及ぶまで龜細隨てあり、大小差ありと雖も、然れども猶六大を出でず。前に佛六大を説いて法界體性と爲したまふ。智の顯發の中には四大等を以て非常と爲す。密教には明ち此を説いて如來の三摩耶身と爲す。四大等心火を離れず、心色異なりと雖も、其性即ち同なり。色即ち心、心即ち色、無障無礙なり。智即ち境、境即ち智、智即ち理、理即ち智、無礙自在なり。能所の二生有りと雖も都て能所を絶せり。法身の道理に何の造作もあらん。能所の名は皆是れ密義なり。常途淺略の義を執して體性の較量を作すべからず。是の如き六大法界體性所成の身は無障無礙にして互相に涉入相應し、常住不變にして同く實際に住せり。故に頌に「六大無礙常瑜伽」と曰ふ。無礙とは涉入自在の義なり。常住とは不動不變等の義なり。瑜伽とは歸して相應と云ふ。能涉入は即ち是れ即ちの義なり。

【四】「四輪曼荼羅各不離」とは、大日如來に説かく、「一切如來に三種の秘密身あり。謂く、字印形像なり。字とは法曼荼羅なり。印とは謂く、種種の標幟印ち三昧耶曼荼羅なり。形とは相好具足の身即ち大曼荼羅なり。此三輪の身に各威儀事業を具する、是を總磨曼荼羅と名く、これ四輪曼荼羅なり。若し金剛頂經の説に依らば、四輪曼荼羅とは、一には大曼荼羅、謂く、一一の佛菩薩の相好の身なり。又その形像を經畫するを大曼荼羅と名く、又五相を以て本尊の瑜伽を成ぜり、又大智印と名く、二には三昧耶曼荼羅、即ち所持の標幟刀劍輪寶金剛蓮華等の類是なり、若し其像を畫する、亦是なり。又一手を以て和合し、金

所縁の五大五智なり。【淺略の義】顯教の所談。

【四】以上は六大摩訶の義を釋し、以下は四曼相大の義を釋す。

【威儀事業】威儀とは行住座臥の表相、事業とは捨取用申等の形狀なり。

【金剛頂經の説】教王經及び陀羅尼諸部要日の取意の女。

【佛菩薩の相好】三十二種の相、八十種の好あり。

【大智印】本尊の本誓を表したる根本印を云ふ。

【三昧耶印】諸菩薩の三摩耶形及び印契なり。

【法智印】佛菩薩の相好の印契。

【羯磨智印】佛菩薩の威儀事業の印契なり。

【五】以下は三密用人の釋段なり。

【互相に加入す】

剛縛より發生して印を成ずる、是なり。亦三昧耶智印と名く。三には、法曼荼羅、本尊の種子眞言なり。若し其種子の字を各の本位に書く、是なり。又法身の三摩地及び一切の契經の文義等皆是なり、亦是法智印と名く。四には羯磨智印と名く。即ち諸佛菩薩等の種種の威儀事業若しは鐺、若しは聖等亦これなり。亦羯磨智印と名く。是の如きの四種曼荼羅四種智印その數無量なり。一一の曼虛空に同じ、彼は此を離れず、此は彼を離れず、猶し空光の、無礙にして逆はざるが如し。故に四種曼荼羅各不離といふ。不離は是即の義なり。

【五】「三密加持速疾顯」とは、謂く、三密とは一には身密、二には語密、三には心密なり。法佛の三密は甚深微細にして等覺十地も見聞すること能はず。故に密と曰ふ、一一の尊等しく刹塵の三密を具して互相に加入し彼此攝持せり。衆生の三密も亦復かくの如し。故に三密加持と名く。若し眞言行人あつて、此義を觀察し手に印契を作し、口に眞言を誦し、心三摩地に住すれば三密相應して加持するが故に早く大悉地を得。故に經に云はく、「此毘盧遮那佛の三字の密言、共に一字にして無量なり、適に印密言を以て心を印すれば鏡智を成じて速に菩提心金剛堅固の體を獲。額を印すれば應當に知るべし、平等性智を成じて速に灌頂地の福聚莊嚴の身を獲。密語をもて口を印するるとき妙觀察智を成じて即ち能く法輪を轉じ、佛の智慧身を得。密言を誦じて頂を印すれば成所作智を成じて佛の變化身を證し、能く難調の者を伏す。此印密言に由つて自身を加持すれば、法界體性智毘

一一の尊が互に彼
是往來沙入す。

【三密相融】 佛の
三密と衆生の三密
と相應し沙入す。

【加持】 加とは本
尊が我身に入るこ
と、持とは我が本
尊に入る事。即ち
我我入なり。

【大慈悲】 悉地は
成徳の義。故に成
佛を完成すること。

【金剛頂一字
頂輪王瑜輪念誦儀
軌の支】

【三字の密言】 唯
少欠の三字。

【印】 如來智拳の
印なり。

【眞觀】 第八識を
轉じて得たる大圓
鏡智なり。

【平等性智】 第七
識を轉じて得たる
智なり。

【妙觀察智】 第六
識を轉じて得たる
智なり。

【成所作智】 前五
識を轉じて得たる
智なり。

【法界性智】 第

盧遮那佛の虚空法界の身を成す。又云はく、法身眞如觀に入つて一縁一相平等なり。猶し
虚空の如し。若し能く專注して無間に修習すれば現生に則ち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫
の福智の資糧を集む。衆多の如來に加持せらるるに由るが故に乃し十地等覺妙覺に至つて
薩婆若を具し、自他平等にして一切如來の法身と共に、同く常に無縁の大悲を以て無邊の
有情を利樂し大佛事を作す。又云はく、若し眞盧遮那佛自受用身所説の内證自覺聖智の法
及び大普賢金剛薩埵の他受用身の智に依らば則ち現生に於て曼荼羅の阿闍梨に遇逢ひ、曼
荼羅に入ることを得。爲く、羯磨を具足し普賢三摩地を以て金剛薩埵を引入して、其身中
に入る。加持の威徳力に隨るが故に、須臾の頃に於て當に無量の三昧耶、無量の陀羅尼門
を壽すべし。不思議の法を以て、能く弟子の俱生我執の種子を變易す。時に應じて身中に

一、阿僧祇劫の所集の福徳智慧を集得す。則ち佛家に生在すと爲す。其人一切如來の心よ
り生じ佛口より生じ、佛法より生じ、法化より生じて佛の法財を得。法財とは、謂く、三密

の菩提心の教法なり。これは初めて菩提心戒を授かる時、阿闍
梨の加持方便に由て得る所の益を明す。 薩に曼荼羅を見れば能く須臾

の頃に淨信す、歡喜の心を以て瞻視するが故に、則ち阿頼耶識の中に於て金剛界の種子を
種う。此文は初めて曼荼羅海會の諸
具に灌頂受職の金剛名號を受く、これより以後、廣大

甚深不思議の法を受得して、一乘十地を超越す。此大金剛薩埵五密瑜伽の法門を、四時に
於て行住坐臥の四威儀の中に無間作意し修習すれば、見聞覺智の境界に於て人法二空の執

悉く皆平等にして、現生に初地を證得し漸次に昇進す。五密を修するに由て涅槃生死に

九識を轉じて得たる最上究竟の智。【法界眞如觀】三密平等の觀。【自受用身】自性法身。【他受用身】報、應、化身のこと。【辯摩を具足す】入壇灌頂の時の三摩耶戒の所作事。【普賢二摩地】金剛薩埵の内證。【無量の三摩耶】阿字門に入り一念法界に入り、一心に亂れざる境界。【俱生我執】長年の習慣により心に生ぜし煩惱。【灌頂受職云々】入壇灌頂するとき先づ投花得佛してその名號を受く。【大金剛薩埵五密瑜伽の法門】菩提心を表示する金剛薩埵と煩惱を表せる徳觸愛慢の四菩薩と無二一體なる事を教ふる法門。【理趣】佛と衆生との間に加持感應

於て染せず著せず、無邊の五趣生死に於て、廣く利樂を作し身を百億に分ち諸趣の中に遊んで有情を成就して金剛薩埵の位を證せしむ。此は儀軌法則に依て修行する。又云はく、「三密の金剛を以て増上緣と爲して、能く毘盧遮那三身の果位を證す」。此の如きの經等は皆此速疾力不思議神通の三摩地の法を説く。若し人あつて法則を闕かずして晝夜に精進すれば現身に五神通を獲得す。漸次に修練すれば、此身を捨てずして進んで佛位に入る。具には經に説くが如し。此義に依るが故に三密加持速疾顯といふ。加持とは如來の大悲と衆生の信心とを表はす。佛日の影衆生の心水に現するを加といひ、行者の心水能く佛日を感じるを持と名く。行者若し能く此理趣を觀念すれば、三密相應するが故に現身に速疾に本有の三身を現顯證得す。故に速疾顯と名く。常の即時即日の如く、即身の儀も亦是の如し。【六】「重重帝網名即身」とは、これ則ち譬喩を擧げて、以て諸尊利塵の三密圓融無礙なることを明す。帝網とは因陀羅珠網なり。謂く、身とは我身佛身衆生身、これを身と名く。又四種の身あり、言はく、自性、受用、變化、等流これを名けて身といふ。又三種あり、字印形これなり。是の如き等の身は縱横重重にして、鏡中の影像と燈光の涉入との如し。彼身即ちこれ此身、此身即ちこれ彼身、佛身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ佛身なり。不同にして同なり、不異にして異なり。故に、三等無礙の眞言に曰はく、「凡不可説不可説阿耨多羅三藐三菩提」。

初めの句義をば無等と云ひ、次をば三等と云ひ、後の句をば三平等と云ふ。佛法僧是れ

即身成佛義

あるを知り自身本有の三部の諸尊を影現し得る理なり【本有の三身】佛命、蓮三部の諸尊なり

【六】以下は(帝釋天)因陀羅網の譬を擧げて御身の義を明す

【因陀羅網】帝釋天の寶前にある珠網にして、此が互に相照して八面に鏡面を立てて盡きることなり

【字印影】種字、即影、半像

【三尊無敵の眞言】大日智具餘品に説く眞言

【三尊】心、佛、衆生の三平等なること

【七】以下は成佛の二字を釋す

【一切の本體】本不生の本體の意

【本來成佛の理】何字本不生の理趣

【五佛俱供】本有自性の五智金剛は

なり。身語意又三なり。心佛及び衆生の三なり。是の如きの三法は平等平等にして一なり、一にして無量なり、無量にして一なり、而も終に雜亂せず。故に重重帝網名即身と曰ふ。

【七】「法然具足薩散若」とは「大日經」に云はく、「我は一切の本初なり、號して世所依と名く。設法等比無く、本寂にして上あること無し。謂く、我とは大日尊の自稱なり。一切とは無數を擧ぐ、本初とは本來法然にかくの如きの大自在の一切の法を證得するの本祖なり。如來の法身と衆生の本性とは同じこの本來寂靜の理を得たり。然れども衆生は覺せず知せず。故に佛の理趣を説いて衆生を覺悟せしめたまふ。又云はく、「諸の因果を樂欲するもの彼愚夫能く眞言と眞言の相とを知るに非ず。何を以ての故に、因は作者に非ずと云けば、彼果も期ち不生なり。此因、因すら尚し空なり、云何が果あらんや。當に知るべし、眞言の果は、早く因果、離れたり」上の文に引く所の、我輩本不生乃至因縁の偈及

【法本不生乃至因縁等虚空を遠離す。是の如きの偈は法然具足の義を明す。又一金剛頂に云はく、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩乃至各各に五億俱足の微細法身の念を流出す。かくの如き等の文は亦これ此義なり。法然と言ふは諸法自然に是の如くなることを顯はす。具足とは成就の義、無因の義なり。薩散若とは梵語なり。古く薩云と云ふは誰勝なり。具には薩羅婆俱壞義といふ。翻じて一切智智と云ふ。一切智智とは智とは決簡簡擇の義、一切の佛、各五智三十七智乃至利薩の智を具せり。次の兩句は即ち此

【法本不生乃至因縁等虚空を遠離す。是の如きの偈は法然具足の義を明す。又一金剛頂に云はく、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩乃至各各に五億俱足の微細法身の念を流出す。かくの如き等の文は亦これ此義なり。法然と言ふは諸法自然に是の如くなることを顯はす。具足とは成就の義、無因の義なり。薩散若とは梵語なり。古く薩云と云ふは誰勝なり。具には薩羅婆俱壞義といふ。翻じて一切智智と云ふ。一切智智とは智とは決簡簡擇の義、一切の佛、各五智三十七智乃至利薩の智を具せり。次の兩句は即ち此

【法本不生乃至因縁等虚空を遠離す。是の如きの偈は法然具足の義を明す。又一金剛頂に云はく、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩乃至各各に五億俱足の微細法身の念を流出す。かくの如き等の文は亦これ此義なり。法然と言ふは諸法自然に是の如くなることを顯はす。具足とは成就の義、無因の義なり。薩散若とは梵語なり。古く薩云と云ふは誰勝なり。具には薩羅婆俱壞義といふ。翻じて一切智智と云ふ。一切智智とは智とは決簡簡擇の義、一切の佛、各五智三十七智乃至利薩の智を具せり。次の兩句は即ち此

【法本不生乃至因縁等虚空を遠離す。是の如きの偈は法然具足の義を明す。又一金剛頂に云はく、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩乃至各各に五億俱足の微細法身の念を流出す。かくの如き等の文は亦これ此義なり。法然と言ふは諸法自然に是の如くなることを顯はす。具足とは成就の義、無因の義なり。薩散若とは梵語なり。古く薩云と云ふは誰勝なり。具には薩羅婆俱壞義といふ。翻じて一切智智と云ふ。一切智智とは智とは決簡簡擇の義、一切の佛、各五智三十七智乃至利薩の智を具せり。次の兩句は即ち此

【法本不生乃至因縁等虚空を遠離す。是の如きの偈は法然具足の義を明す。又一金剛頂に云はく、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩乃至各各に五億俱足の微細法身の念を流出す。かくの如き等の文は亦これ此義なり。法然と言ふは諸法自然に是の如くなることを顯はす。具足とは成就の義、無因の義なり。薩散若とは梵語なり。古く薩云と云ふは誰勝なり。具には薩羅婆俱壞義といふ。翻じて一切智智と云ふ。一切智智とは智とは決簡簡擇の義、一切の佛、各五智三十七智乃至利薩の智を具せり。次の兩句は即ち此

【法本不生乃至因縁等虚空を遠離す。是の如きの偈は法然具足の義を明す。又一金剛頂に云はく、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩乃至各各に五億俱足の微細法身の念を流出す。かくの如き等の文は亦これ此義なり。法然と言ふは諸法自然に是の如くなることを顯はす。具足とは成就の義、無因の義なり。薩散若とは梵語なり。古く薩云と云ふは誰勝なり。具には薩羅婆俱壞義といふ。翻じて一切智智と云ふ。一切智智とは智とは決簡簡擇の義、一切の佛、各五智三十七智乃至利薩の智を具せり。次の兩句は即ち此

各各一億俱胝の法
身金剛を流出する
が故に。

【集起】曼荼羅海
會の聖衆。

【執持】具には軌
範任持と云ふ。

【顯家の一智】顯
教は佛智のみを以
て一切の法を知ら
んとする故に一智
と云ふ。

【八】此文は二頌
八句中の第六句を
釋す。

【多一識】心王は
心數の故に一心即
一切心となる故に
多一識と云ふ。

【九】この文は第
七句を釋す。

【一〇】以下の文は
第八句の釋段にし
て成佛の所由を出
す。

【圓明の心鏡】大
日如來の五智を指
す。

【法界の頂き】六
大即ち良如のこと

義を表はす。若し決斷の徳を明すには、則ち智を以て名を得、集起を顯すには、則ち心を以て稱と爲す。執持を顯すには、則ち法門に稱を得、一一の名號皆人を離れず。是の如きの人、數利曉に過ぎたり。故に一切智智と名く。顯家の一智を以て、一切に對して此號を得るには同ぜず。

【八】心王とは、法界體性智等なり。心數とは、多一識なり。

【九】各具五智とは、一一の心王心數に各各に之あることを明す。無際智とは、高廣無數の義なり。

【一〇】「圓鏡力故實覺智」とは、これ即ち所由を出す。一切の諸佛何に由つてか覺智の名を得たまふ。謂く、一切の色像の悉く高臺の明鏡の中に現するが如く、如來の心鏡も亦復かくの如し。圓明の心鏡高く法界の頂きに懸つて、寂にして一切を照して不倒不謬なり。是の如きの圓鏡何れの佛にか有らざらん。故に圓鏡力故實覺智と曰ふ。

即身成佛義 終

即身成佛義

一一

聲字實相義

沙門 遍照金剛撰

一には叙意、二には釋名體義、三には問答、

【一】初に叙意とは、夫れ如來の說法は、必ず文字に藉る。文字の所在は、六塵其體なり。六塵の本は、法佛の三密即ちこれなり。平等の三密は、法界に遍じて常恆なり。五智

同身は、十界に具して缺けたること無し。悟れるものをば大覺と號し、迷へるものをば衆生と名く。衆生癡闇にして自ら覺るに由なし、如來加持して、其歸趣を示したまふ。歸趣の本は名教に非ざれば立せず、名教の興りは聲字に非ざれば成ぜず、聲字分明にして實相顯

る。所謂聲字實相とは即ち此法佛平等の三密、衆生本有の曼荼なり。故に大日如來、此梵字實相の義を説いて、彼衆生長識の耳を驚かしたまふ。若しは顯、若しは密、或は内、或は外、所有の教法誰か此門に由らざらん。今大師の提撕に憑り、此義を抽出す、後の學者も亦心遊意せまくのみ。大意を叙ぶること竟んぬ。

【二】次に釋名體義とは、此に亦二を分つ、一つには釋名、二には出體義。初に釋名とは、内外の風氣縦に發すれば、必ず響くを名けて聲といふなり。響は必ず聲に由る。聲は則ち響の本なり。聲發して虚しからず、必ず物の名を表すを號して字といふなり。名

【當書一卷、弘法大師の撰、其序分に於ては如來の說法は文字による、然も其本原は法身佛の三密なるが故に聲字即實相の義を明し、次に釋義には其名義を釋し、次に佛體義を釋し、終りに經論を引證して問答をあげ、】

【一】法意とは即ち序分にして、此所にては一節の大意を説く、如來の說法は、必ず文字によることを明す。

【二】色聲香味觸は諸法は諸法、法は意密に當る。

【三】法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

【四】身性身、受用身、變化身、輪流身なり。

【十界】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界なり。
 【大師】青龍寺惠果和尚。(或は又大日如來を指すとも云ふ。)
 【一】以下本論、即ち正宗分にして此に釋名と出體義との二分科あり。
 【初に釋名云云】名字を釋す。
 【内外の風氣】内風とは口中の風、(息)が膺輪に至るを云ひ、外風とは即ち出息なり。
 【四大】地水火風ノ四大。
 【五音】音譜にして宮、商、角、徵、羽なり。
 【八音】金、石、絲、竹、匏、土、角木等の樂器より出る音なり。
 【七例】八轉聲梵語の【八轉聲】梵語の聲を除くもの。
 【八轉聲】梵語の

は必ず體を招く、之を實相と名く。聲字實相の三種區別たるを義と名く。又四大相觸れて音響必ず應ずるを名けて聲と云ふなり。五音、八音、七例、八轉皆悉く聲を待つて起る。聲の名を詮ずることは必ず文字に由る、文字の起りは本これ六塵なり。六塵の文字は下に釋するが如し。

若し六離合釋に約せば聲に由て字なり、字は則ち聲が字なりと、依主に名を得。若し實相は聲字に由て顯る、則ち聲字が實相なりと謂ば、亦依主に名を得。若し聲には必ず字を有す、聲は則ち能有、字は則ち所有、よく字の財を有すと、則ち有財に名を得。聲字には必ず實相を有し、實相には必ず聲字を有す、互相に能所たりといふは則ち名を得ること上の如し。若し聲の外に字なし、字則ち聲なりと云はば持業釋なり。若し聲字の外に實相なし、聲字則ち實相なりと言はば亦上の名の如し。此義は大日經の疏の中に具さに説けり、文に臨んで知んぬべし。若し聲字と實相と、極めて相迫近にして避遠なることを得ずと薄ば並に隣近に名を得。若し聲字は假にして理に及ばず、實相は幽寂にして名を絶す、聲字と實相と異なり、聲は空しく響いて詮ずることなし、字は上下長短にして文を爲す、聲と字と異なりと善ば並に相違に名を立つ。帶數は闕けて無し。如上五種の名の中に相違は淺略の釋に約し、持業、隣近は深秘の釋に據る。餘の二は二の釋に通ず。

【三】二に體義を釋する又二つあり。初めには證を引き、後には之を釋す。初めに引證とは、問うて曰はく、「今何れの經に依てか此義を成立する。」答ふ、「大日經」に明瞭ある

【身密は即ち實相】
教王經には「實知
は是れ心密なり、實
相はこれ身密なり
一」と説くに依る
【諸尊の眞言】大
日經の眞言藏品密
印品等に列せる眞
言を指す。

【阿字門】大日經
具緣品所説の四十
二字門なり。

【字輪品】大日經
百字成就品、布字
品等を指す。

【諸尊の相】大日
經具緣品の中に四
重の境及び秘密曼
茶羅の圖位を設け
るものを指す。

【四】以下は正し
く體義の釋なり。
即ち初めに四句の
偈頌を説き聲字實
相の三義を釋す。

【初の一句は云云】
四句の偈頌のうち
今は五大云々の第
一句を釋す。

【五字】
我、延今此を五佛
に配せば次の如

なり。無相品及び諸尊の相を説く。文は並にこれ實相なり。復次に、一字の中に約して此義を釋せば、且く梵木の初めの阿字、口を聞いて呼ぶ時に阿の聲あるは即ち是れ聲なり。阿の聲は何れの名をか呼ぶ、法身の名字を表す、即ちこれ聲字なり。法身は何の義かある。所謂法身とは諸法本不生の義、即ちこれ實相なり。已に經證を聞いて、請ふその體義を釋せよ。頌に曰はく、

【四】五大に皆響きあり、十界に言語を具す
六塵、悉く文字なり、法身はこれ實相なり
釋して曰はく、頌の文を四に分つ。初の一句は聲の體を竭し、次の頌は眞安の文字を極め
三は内外の文字を盡し、四は實相を窮む。初めに五大と謂ふは、一には地大、二には水大
三には火大、四には風大、五には空大なり。此五大に、顯密の二義を具す。顯の五大とは
常の釋の如し。密の五大とは五字五佛及び海會の諸尊是れなり。五大の義は、「即身義」の
中に釋するが如し。此内外の五大に、悉く聲響を具す。一切の音聲は五大を離れず、五大
は即ちこれ聲の本體、音響は則ち用なり。故に皆有響と曰ふ。

次に「十界具言語」とは、謂く、十界とは一には一切佛界、二には一切菩薩界、三には一切緣覺界、四には一切聲聞界、五には一切天界、六には一切人界、七には一切阿修羅界、八には一切傍生界、九には一切餓鬼界、十には一切捺落迦界なり。自外の種種の界等は天鬼及び傍生趣の中に攝し盡す。「華嚴」及び「金剛頂理趣釋經」に十界の文あり。此十界

【五字】
我、延今此を五佛
に配せば次の如

し、大日、阿闍、寶生、輪陀、釋迦となり、五大に配すれば、火、如く空、地、水、火、風に當る。

【海會の諸尊】曼荼羅會上の諸尊を云ふ。

【十界具言】云々、箇句中の第一句を指す。

【佛生界】青生と云ふ。

【持善遊界】天獄のこ。

【金剛頂理趣釋經】理趣釋經のことにして、被教に十智如、十法界、十如來地等を説く。

【圓覺者】護法、安樂等の十大論師を指す。

【羅什師の金剛般若經なり】。

【曼荼羅】輪圓具足と稱す。
【龍樹】龍樹と云うてその所造の大智度論を指す。

所有の言語は、智慧に由て起る。聲に長短、高下、音韻、韻脚あり。此を文と名く。文は名字に由り、名字は文を待つ。故に諸の訓釋者、文即字と云ふものは、蓋し其不離相待を取るのみ。此れ則ち内聲の文字なり。この文字に目く別の別あり、上の文の十界の差別これなり。眞十種の文字の眞實は云何ん。若し堅淺深に約して釋せば、則ち九界は妄なり。佛界の文字は眞實なるが故に、經に眞語言、實語言、如語言者、不誑語言者、不異語言者と云ふ。此五種の語言には曼荼羅等と云ふ。此一音の中に、五種の差別を具するが故に、龍樹は秘密語と名く。眞秘密語を、則ち眞言と名くることは、譯者五つが中の一語を取て翻せまくのみ。眞眞言は何物をか詮する。能く諸法の實相を呼んで、不謬不妄なるが故に眞言と名く。其眞言、云何んが諸法の名を呼ぶ。眞言無量に差別ありと云ふと雖も、彼根源を極むるに、大日如の海印、殊王の眞言には出でず。彼眞言王云何ん。金剛頂及び大日經一所説字輪字母等これなり。眞字母とは、梵書の阿字等、乃至呵字等これなり。眞阿字等は、則ち法身如來の一一の名字密號なり。乃至天龍鬼等も亦この名を具せり。名の根本は法身を根源と爲す。彼より流出して稍く轉じて、世流布の言と爲らまく而已。若し實義を知るをば、則ち眞言と名く。根源を知らざるをば、妄語と名く。妄語は、則ち長夜に苦を受け、眞言は、則ち苦を抜き樂を與ふ。譬へば毒藥の迷語に損益不同なるが如し。問うて曰はく、「龍猛所説の五種の言説と今の所説の二種の言説、如何んが相攝する。」妄、妄、相、夢、妄、無始は妄に屬して攝し、如義は則ち眞實に屬して攝す。已に眞妄の文字を盡き竟

【譯者】金剛智、善無畏廣智等の各三藏を指す。

【海印三昧】大日如來所入の定なり。

【金剛頂】金剛頂經の字輪品を指す。

【大日經】大日經の字輪品を指す。

【字母】五十字の字母にしてこれを攝すれば五大の種子眞言となり、この種子は又阿字に攝せらる。

【阿字等は即ち法身如來の密號】一の字門は阿字は法身の密號なりと同時諸尊の密號となる。

【龍猛】以下の文は釋摩訶衍論所釋の五種の言説と當設所説の眞妄二種の文字との攝在を明す。

【次に内外の文字云云】以下は四句中の第三句を釋するに又四句の偈

【五】第三句を釋するに又四句の偈

んぬ。

次に、内外の文字の相を釋せん。頌の文に「六塵悉文字」とは、謂く、六塵とは、一に色塵、二には聲塵、三には香塵、四には味塵、五には觸塵、六には法塵なり。此六塵に各文字の相あり。初めの色塵の字義差別云何。頌に曰はく、

顯形表等の色あり、内外の依正に具す

法然と隨縁とあり、能く迷ひ亦能く悟る

釋して曰はく、頌の文を四に分つ、初の一句は色の差別を擧げ、次の句は内外の色互に依正と爲ることを表す。三には法爾隨縁の二種の所生を顯し、四には此種種の色は愚に於ては毒と爲り、智に於ては藥となることを説く。初の句に顯形表等色とは、これに三の別あり。一には顯色、二には形色、三には表色なり。一に顯色とは五大の色これなり。法相

家には四種の色を説いて黑色を立てず。「大日經」に依れば五大の色を立つ。五大の色とは一には黄色、二には白色、三には赤色、四には黑色、五には青色なり。此五大の色を名けて顯色と爲す。この五色は、即ちこれ五大の色なり。次の如く配して知れ。影光、明暗、雲煙、塵霧、及び空一顯色を亦顯色と名く。又若し顯了にして眼識の所行なるを顯色と名く。この色に好、惡、俱、異、等の差別を具す。「大日經」には「心非青黃赤白紅紫水精

色非明非闇」と云ふことは此れ心は顯色に非ずと遮す。次に形色とは、謂く、長短、麁細、正不正、高下これなり。又方圓、三角、半月等これなり。又若し色の積集せる長短等の分別

不正、高下これなり。又方圓、三角、半月等これなり。又若し色の積集せる長短等の分別

頤を説きこれを釋す。

【顯形表色云云】顯形表の三色を釋す。

【五大の色】地水火風空の五大には赤黒青の五色を配するを五大の色と云ふ。但し五色の配合には異説あり。

【大日】大日經に「大日經立つ字繁身の義をにつるを云ふ。」

【大日】大日經中、眞言行者淨菩提心觀を説く文を引く。

【瑠璃色の生滅相續】形色の上に生滅相續し又は爲作爲轉するを表色と云ふ。

【變異の因】變異とは生滅相續し或は爲作爲轉するを云ひ、これを因となつて表色をなすなり。

【業用爲作】心内に起る思業なり。故に身證に現はる

の相これなり。『大日經の疏』に「心非長非短非圓非方」と云ふは、此は心は形色に非ずと遮す。三に表色とは、細く、取捨、屈申、行住、坐臥これなり。又即ち此種集色の生滅相續することは變異の因に由る、生處に於て復重ねて生ぜずして異處に轉ず。或は無間、或は有間、或は近、或は遠、差別して生ずるなり。或は即ち此處に於て變異して生ずるこれなり。又業用爲作の相續差別、これを表色と名く。『大日經』に「心非男非女」といふは、赤心は表色に非ずと遮す。これ亦顯形に屬す。又云何が自ら心を知る。謂く、或は顯色、或は形色、若は色受想行識、若しは我、若しは我所、若しは能臥、若しは所臥の中に求むるに不可得なりと云ふは、此は顯形表色の名を問す。顯形は文の如く知んぬべし。自下は即ちこれ表色なり。取捨業用爲作等の故に、是の如く一切の顯形表の色は是れ眼所行、眼境界、眼識所行、眼識境界、眼識所緣、意識境界、意識所緣なり、之を差別と名く。是の如きの差別は即ち是れ文字なり。各各の相則ちこれ文なるが故に各各の文に則ち各各の名字行り。故に文字と名く。此れこの三種は色の文字なり。或は甘種の差別を分つ。前に所謂十界の依正の色は差別なるが故に、『瑜伽論』に云はく、今當に先づ色聚の諸法を説くべし。問ふ、一切の諸法の生ずることは皆自種より而も起する。云何が諸の大種能く所造色を生ずと説くや。云何が造色彼に依り、彼に建立せられ、彼に任持せられ、彼に長養せらるるや。答ふ、一切の内外の大種と及び所造色との種子は、皆悉く内の相續の心に依附す。乃至諸大の種子未だ諸大を生ぜざるより以來、造色種子終に造色を

る動作をば表色と云ふ。

【眼所行】眼根の作用なり。即ち眼根の作用なり。後に所行なるものは即ち作用の意なり。

【二十種の差別】二十種の依報と正報の二種に分つ。故に二十種となる。

【三の文なり】同論第三の文なり。

【色聚】一切の色法は四味四大和合して生ずと云ふ。故に聚の字あり。

【水火風】四大（地水火風）は萬物能生の種子なるが故に大種と云ふ。

【生因】諸の所造の色は自種より生ずと雖も、然も大種を離れなば、必ず起ることを得ず。故に生因と云ふ。

【長養】成長養成なり。

【極微】一切萬物の集成を分解したる最少位即ち今日の所謂原子の如き

生ずること能はざるに由て、要らず彼生ずるに由て、造色方に自種子より生ず。この故に彼能く生ずと説く。彼生じて前導と爲るに由るが故に、此道理に由て、諸の大種彼生因と爲ると説く。云何が造色、彼に依るや。造色生じ已つて、大種の處を離れず、而して轉ずるに由るが故に。云何が彼建立せらるるや。大種損益すれば、彼同く安危するに由るが故に。云何が彼に任持せらるるや。大種に隨つて、等量にして壞せざるに由るが故に。云何が彼に長養せらるるや。飲食、睡眠、修習、梵行、三摩地等に出て、彼に依つて、造色倍また増廣なるに由るが故に、大種を彼が長養因と爲すと説く。是の如く諸の大種を、所造色に望むに、五種の作用あること應に知んぬべし。復次に、色聚の中に於て會て極微生無し、若し自種より生ずる時は、唯し聚集して生ず。或は細、或は中、或は大なり。又極微集つて色聚を成するに非ず、但し覺慧に由て諸色を分析して、極量邊際を分別し、假立して以て、極微と爲す。又色聚に亦方分有らば、極微にも亦方分あるべしや。然も色聚には分あり極微にはあらず。何を以ての故に、極微即ちこれ分なるに由て、此は是れ聚色の所有なり。極微に復餘の極微あるにあらず。是故に極微には分相あるに非ず、又不相離に二種あり。一には同處不相離、謂く、大種の極微と色香味觸等と、無根の處に於て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和

雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり。これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く、即ち此大種の極微と餘の聚集の能造所造の色處と俱なるが故に、之を和雜不相離と名く。又此遍滿聚色は、應に知るべし、種種の物を石をもて磨つて末と爲して

【覺慧】 正徳なる
智恵なり。

【方分】 諸方細分
なり。

【分相】 極微は最
も細分されたるも
のなる故に、分析
せられざることを
云ふ。

【不相離】 大種造
種の關係不相離な
ること。

【通商氣色】 一切
の色法を云ふ。

【十四種】 四微、
四大、乃至及五
根を合して十四種
とす。

【意所行色】 法相
の意によれば意所
行色に五種あり
即ち、極略色、極細
色、受所引、通商
所起、定所引なり。

又俱舍論の意によ
れば無表を以て意
所行色となす。

【十種の色】 瑜伽
論第二には、一云
何が十種の身の資
具、一に食、二に
飲、三に乘、四に

水を以て和合して、互に相離せざらしむるが如し。胡麻、綠豆、粟稗等の聚の如きにはあらず。又一切の所造色は皆即ち大種の處に依止して大種の處量を過ぎず、乃至大種所據の處所に、略の所造色遷つて即ち此に據る。此因縁に由て、所造色は大種に依ると説く。即ち此義を以て、諸の大種を説いて名けて、大種と爲す。此大種その性大なるに由るが故に、種と爲して生ずるが故に。又諸の色聚の中に於て、略して十四種の事あり。謂く、地、水、火、風、色、聲、香、味、觸及び眼等の五根なり。唯し意所行色を除くと云云。又十種の色を立つ、具には彼に是くが如し。是の如きの種種の色の差別は、即ちこれ文字なり。又五色を以て阿字等を書くを亦は色の文字と名く。又種種の有情非情を彰畫するを亦色の文字と名く。錦繡綾羅等亦是れ色の文字なり。『法華』華嚴『智度』等に亦具さに種種の色の差別を説けり。然れども内外の十界等には出でず。此の如きの色等の差別是を色の文字と名く。此れ是文字は、愚に於て能く着し、能く愛して貪瞋癡等の種種の煩惱を發して、具に十惡五逆等を造る。故に頗に能迷と曰ふ。智に於ては則ち能く因縁を觀じて、取らず、捨てずして、能く種種の法界曼荼羅を建立し、廣大の佛の事業を作す。上諸佛を供じ、下業生を利して自利利他茲に因て圓滿す。故に能悟と曰ふ。

【三八】 次に「内外依正具」とは、此に亦三あり。一には内色に顯形等の三を具すること
を明し、二には外色に亦三色を具することを明し、三には内色は定んで内色に非ず、外色
は定んで外色に非ずして互に依正と爲ることを明す。内色と言ふは有情、外色とは器界な

衣、五に莊嚴、六に歡笑舞樂、七に香鬘、八に什物の具、九に照明、十に男女受行」と。
 【法華】第六卷、法師功德品。
 【華嚴】八十華嚴第四十の四十通品同經七十華嚴第二十九の十明品等。
 【智度】大智度論三十三卷。
 【六】以下内外の色が互に依正となることを明す。
 【經】八十華嚴第六如來現相品の文【通照等】華嚴の教主は佛三世間の佛の故に斯く云ふ【七】以下法爾隨緣の二種の所生をあらはす。
 【大日經】第五入祕密曼荼羅品【等至三昧】等至とは三昧の異名。【五寶】金、銀、瑠璃、眞珠、水精。【八功德水】甘、冷、喉軟、輕、清淨、

り。經に云はく、「佛身は不思議なり。國土悉く中に在り、又一毛に多刹海を示現す。一一の毛に現すること悉く亦然なり。是の如く法界に普周す。又一毛孔の内に難思の刹あり、微塵の數に等じて種種に住す。一一に皆遍照尊有りて衆會の中に在して妙法を宣したまふ。一塵の中に於て、大小の刹種種に差別せること塵數の如し。一切國土の所有の塵の一一の塵の中に佛皆入りたまふ。今此等の文に依て、明に知んぬ。佛身及び衆生身大小重重なり。或は虚空法界を以て身量と爲し、或は不可説不可説の佛刹を以て身量と爲し、乃至十佛刹一佛刹一微塵を以て身量と爲す。是の如きの大小の身土、互に内外と爲り、互に依正と爲る。此内外の依正の中に必ず顯形表色を具す。故に内外依正具と云ふ。
 【七】「法然隨緣有」とは如上の顯形等の色、或は法然の所成なり。謂く、法佛の依正これなり。「大日經」に曰はく、「爾時に大日世尊、等至三昧に入りたまふ。即時に諸佛の國土地なること學の如し。五寶間錯し、八功德水、芬馥盈滿せり。無量の衆鳥あり、鴛鴦鸞鶴和雅の音を出す。時華雜樹敷榮し間列せり。無量の樂器、自然に韻に諧ひ、其聲微妙にして人聞かんと樂ふ所なり。無量の菩薩の隨福所感の宮室殿堂意生の座あり。如來信解願力の所生なり。法界標幟の大蓮華王を出現して、如來の法界性身その中に安住せり」と。此文は何の義をか現顯する。謂く、二義あり。一には法佛法爾の身土を明す。謂く、法界性身法界標幟の故に。二には隨緣顯現を明す。謂く、菩薩の隨福所感と及び如來の信解願力所生との故に。謂く、大日尊といふは梵には摩訶毗盧遮那佛陀と云ふ。大毗盧遮那佛とは、これ乃ち

不臭、飲時不須嗽、飲已不傷腹の水な

【法佛法爾】法佛

法爾の身法界は法

界法界なり。法

界法界は法佛法爾

の身なり。これ

即ち法界の體たる

る法界は自性清淨

にして無身に同じ

けり。【一切分無礙

方】上の文は六日

如來の體を用ひ、

今は其用を明す。

五分は五種を攝

す。【八十聖殿】

八十聖殿の

十、如來名號品の

【六日】以下の

此文は觀世音行

果の相を明す。【

山由身】無礙大の

法身如來なり。法身の依生は明く法爾所成なり。故に法然有と曰ふ、若しは謂く、報佛を亦は大日尊と名く、故に信解國力所生と曰ふ。又時に彼如來の一切支分無礙國力は、十

智力信解より生ずる所の、無量の色莊嚴の相なりと云ふ。此文は報佛の身土を明す。若しは謂く、蓮化佛を或は大日尊と名くと、蓮化の光明普く法界を照す、故に此名を得。故に經に「蓮化佛と名け、或は毗盧遮那と名く」と云ふ。【大日尊】に「無數百千

俱、即由佛劫に、六度等の功徳に資長せらるる身なり」と云ふ。此は蓮化佛の行願の身土を明す。若しは謂く、等流身を亦大日尊と名く、今に此義あるが故に經に「即時出現」と云ふは、此文は等流身の實現體を明す。身實に有なり、土實に無らんや。此は等流身

の身及び土を明す。上に云く所の依正土は、兼に四神身に通ず。若し經の義に約せば大小

龜あり。若し經の義に約せば、平等平等にして一なり。是の如きの身及び土並に法爾隨

縁の二義あり。故に法然隨縁有と曰ふ。是の如きの諸式は、皆悉く三種の色を具して、

互に依正と爲る。此は凡らく佛邊に約して釋す。若し業生邊に約して釋せんこと、亦復是

の如し。若しは謂く、業生に亦本覺法身あり。佛と平等なり。此身、此土は法然の有なら

まく而已。三界六道の身及與土は、業縁に隨つて有なり、これを業生の隨縁に名く。又經

に云はく、「彼業生界を染むるに法界の味を以てす」とは、味は即ち色の義なり、加沙味の

如し。これ亦法然の色を明す。是の如きの内外の諸色、愚に於ては毒となり、智に於て藥と爲る。故に「能述亦能悟」と曰ふ。此の如きの法爾隨縁の種種の色等の能述所造云何

は等流身にして四身の中の他の二身は上下共通なり。【平等平等】四身平等のこと。【法爾隨緣】自性身の身上は法爾、受用變化等流三身の身上は隨緣なり。【三種の色】顯形表色なり。【經】大目經具緣品第二の文。【加沙味】袈裟の色即ち雜色なり。【三種世間】衆生世間、智正覺世間、器世間なり。

ん。能生は、即ち五大五色、所生は、即ち三種世間なり。此は三種世間に、無邊の差別あり。これを法然隨緣の文字と名く。已に色塵の文を釋し竟んぬ。

聲字實相義 終

吽字義

遍照金剛撰

【當書一卷、弘法大師の著、吽字は金胎兩部一心理智不二の種子なるが故に此一字を釋するに依り密教の深旨全く顯はるるものとなすなり。然して今は吽の一文字を釋して四字合成一となし、その字相字義を釋するものなり。】

【一】本書は直ちに正宗分に入り、先づ最初に所釋の字を表して相と義を分別す。

【二】以下の交は吽字の字相を解釋す。

【中央の餘め】
【吽字は在る】
【係相】ケイト

【係相】ケイト
バを反せばケイタとなり、更に又ケイタを反せば力となる。

【周の六攝】
【能作俱有、同類、相應】

【一】一の吽字、相と義の二に分つ。一には字相を解し、二には字義を釋す。

【二】初に字相を解すとは又四に分つ、四字分離の故に。【金剛頂】にこの一字を釋するに四字の義を具す。一には賀字の義、二には阿字の義、三には汗字の義、四には麼字の義

なり。一に賀字の義とは、中央本體の體これその字なり。所謂賀字はこれ因の義なり。梵

には係相轉と云ふ、即ちこれ因縁の義なり。因に八種あり、及び因縁の義の中に因に五種

あり。【阿羅漢】に廣く説くが如し。若し訶字門を見るときは即ち一切の諸法は因縁より生

ぜざることなしと知る、これを訶字の字相と爲す。二に阿字の義とは訶字の中に阿の聲あ

り、即ちこれ一切字の母、一は聲の體、一切實相の源なり。凡そ最初に口を聞くの音に

皆阿の聲ありと、若し阿の聲を離れぬれば即ち一切の音説なし、故に業聲の母と爲す。若

し阿字を見れば則ち諸法の空無を知る、これを阿字の字相と爲す。三に汗字はこれ一切諸

法損減の義なり。若し汗字を見れば則ち一切の法の無常苦空無我等を知る、これ即ち損減、

即ちこれ字相なり。四に麼字の義とは梵には恒麼といふ、此に謙じて我と爲す。我に二種

あり。一には人我、二には法我、若し麼字門を見る時は則ち一切の諸法に我人衆生等あり

通行、異熟なり。
【因の五種】上の六種より能作を除く。

【阿毘曇】阿毘曇論第十二、十六、六十卷等を指す。

【増益】人法二我は皆是れ安情の所執り故に増加なり

【三】以下は呼の一字をば阿、阿汗摩の字に差別してその字義を説く。

【四】以下は最初に阿字の字義を釋す。

【無住】阿字の因縁を觀ずれば諸法は悉く不生に歸す故に無住は阿字の本體なり。

【心の實相】衆生の自心の實相なり

【一切種智】如來智即ち一切智智なり

【無因待】因の名は果に對して立てたるものなれば果も從つて因も亦不可得なり

と知る、これを増益と名く。これ則ち字相なり。一切世間は但し是の如きの字相をのみ知て未だ曾て字義を解せず。この故に生死の人と爲す。如來は實の如く實義を知りたまふ、所以に大覺と號す。

【三】二に、字義を解するに四あり。阿阿汗摩の四字差別の故に。

【四】初に阿字の實義とは、所謂阿字門一切諸法因不可得の故に、何を以ての故に諸法は展轉し、因を待つて成ずるを以ての故に。當に知るべし、最後は依なしと。故に無住を説いて諸法の本と爲す。然る所以は、種種の門を以て諸法の因縁を觀するに、悉く不生なるが故に。當に知るべし、萬法は唯心なり、心の實相は即ちこれ一切種智なり、即ちこれ諸法法界なり。法界即ちこれ諸法の體なり、因とすることを得ずして、是を以て之を言はば、因亦これ法界、緣亦これ法界、因縁所生の法も亦これ法界なり。阿字門は本より末に歸して、畢竟して是の如きの處に到る、へんまた阿字門も亦本より本に歸して、畢竟して此の如きの處に到る。阿字は本不生より一切の法を生ず。今亦阿字は無因待を以て諸法の因と爲す、終始同く歸す、則ち中間の旨趣皆知んぬべし。これを阿字の實義と名く。

【五】次に阿字の實義とは三義あり。謂く、不生の義、空の義、有の義なり。梵本の阿字の如きは本初あるの聲なり。若し本初あるは則ちこれ因縁の法なり、故に名けて有と爲す。又阿とは無生の義なり。若し法の因縁を擲て成ずるは則ち自ら性あることなし、是故に空と爲す。又不生の義とは、即ちこれ一實の境界、即ちこれ中道なり、故に龍猛ののたまは

【終始】終は阿、始は阿にして阿も阿も因果不可得の故に共に本不生の本源に歸す。

【五】以下は阿字の實義を釋す。【龍猛】此所に於ては龍猛菩薩の中觀論、智度論等を指す。然して此文は中觀論第四の取意の文なり。

【大論】大智度論八十四の文を取意す。

【般若若】一切智を照す。【一切智】空を照す。【一切種智】有を照す。

【一切法義】一切法とは、阿字の字相の義とはその所詮の義なり。

【本不生際】一切智智によつてのみ認識せらるる絶對の境界なり。

【因縁生の法は亦空亦假亦中なり」と。又「大論」に薩般若を明すに三種の名あり。一切智は二乘と共し、道種智は菩薩と共し、一切種智はこれ佛不共の法なり。この三智それ實には一心の中に得、分別して人をして解し易からしむる爲の故に三種の名を作す。即ちこれ阿字の義なり。又所謂阿字門一切諸法本不生とは、凡そ三界の語言は皆名に依る、而して名は字に依るが故に善惡の阿字亦衆字の母と爲す。當に知るべし、阿字門眞實の義も亦復かくの如し。一切法義の中に遍す、所以は何となれば一切の法は衆縁より生ぜざること無きを以て縁より生ずるものは、悉く皆始あり本あり。今この能生の縁を觀するに亦復衆因縁より生ず、展轉して縁に従ふ、誰をかその本と爲さん。是の如く觀察する時は則ち本不生際を知る、これ萬法の本なり、猶し一切の語言を聞く時に即ちこれ阿の聲を聞くが如く、是の如く一切の法を見る時即ちこれ本不生際を見るなり。若し本不生際を見るものは是れ實の如く自心を知る。實の如く自心を知るは即ち是れ一切智智なり、故に薩盧遮那は、唯し此一字を以て眞言と爲したまふ。而も世間の凡夫は、諸法の本源を觀せざるが故に妄りに生ありと見る。所以に生死の流に隨つて自ら出づること能はず。彼無智の畫師の、自ら衆縁を運んで畏るべき夜叉の形を作し、成し已て還て自ら之を觀て心に怖畏を生じて頓に地に墮るるが如し。衆生も亦復是の如し、自ら諸法の本源を運して三界を畫作して還て自らその中に没し自心熾然にして催さに諸苦を受く。如來有智の畫師は既に了知し已て即ち能く自在に大悲漫荼羅を成立す。是に由て而も所謂甚深秘藏と言はば衆生自

【夜叉】男鬼なり
 女鬼は羅刹と云ふ
 【大悲曼荼羅】佛
 は平等の心地に住
 して、三界六道等
 の種種異類を動ぜ
 ずして四重法界圓
 境の胎藏曼荼羅を
 畫作し給ふ。これを
 即ち阿字不生の
 實義を知るが故なり。
 【經】守護經第九
 卷の文。
 【守護國界主陀羅
 尼經】第二卷陀羅
 品の文。
 【一八】以下は汗字
 の實義を釋す。
 【後次に一心法界
 云云】汗字の別釋
 なり。
 【一心法界】六大
 法身。
 【座敷】本有三身
 【高山】妙高山、
 即ち須彌山のこと
 なるも又凡ての高
 山をも含む。
 【漢】天河。
 【層臺】九層の樓
 閣。
 【劫水】俱舍論十

ら之を秘するのみ、佛の思あるにはあらず、これ則ち阿字の實義なり。又「經」に云はく、「阿字とはこれ菩提心の義、これ諸法門の義、亦無二の義、亦諸法果の義、亦これ諸法性の義、これ自在の義、又法身の義なり。」是の如き等の義は皆これ阿字の實義なり。又「守護國界主陀羅尼經」に説かく、「爾時に一切法自在王菩薩摩訶薩、佛に白して言さく」と。

【六】三に、汗字の實義とは、所謂汗字門は一切諸法損減不可得の故に、これを字義と名く。復次に一心法界は猶し一虛の常住なるが如く、塵數の智慧は譬へば三辰の本有なるが如し。高山漢を干し、曾臺天を切ると云ふと雖も、損減せざるものは大虛の徳なり、劫水地を漂はし、猛火臺を焼くと云ふと雖も、増益せざるは大虚の徳なり、一心の虚空も亦復かくの如し。無明住地は邊際無く、我慢の須彌頭頂無しと云ふと雖も、而も一心の虚空は本より來た常住にして不損不減なり。これ則ち汗字の實義なり。六師外道、因果を撥無すと雖も三密の虚空は本より來た湛然として損も無く減も無し。これを汗字の實義と名く。諸の二乘等無我的利斧を擧げて身心の柴薪を斫る、然れども猶一心の本法は寧ろ損減有らんや。故に汗字の不損減と名く。又大乘空觀の猛火、入法執著の塵垢を焼いて遺餘あることなけれども、三密の不損は猶し火布の垢盡きて衣も淨きが如し。汗字の實義も亦復是の如し。復次に或は遍計の層樓を破し、依他の幻城を壞すれども、三密の本法は豈毀傷あらんや。汗字の實義はかくの如く知るべし。又ある人、有爲の非眞を厭ひ、無爲の譚妄を欣つて、言語の道を廢詮の門に絶し、心行の處を寂滅の津に滅すれども、此三密の本法に於て、

二に所謂三災中の水災を指す。

【燬火】上の火災なり。

【無明住地】根本無明。

【六攝外道】即ち六派の外道一即ち六派若學なり。

【大乘】入法二儀により人法二儀を離する。三法の教理に當る。

【通計の義】心外無別法の法相の教理なり。

【苦空無常無我】十六行觀の中、苦諦の下、四行觀。

【四相】生住異滅なり。

【相待觀】相待俱成の義。

【新】守護經第九の文。

【法身智身】金胎兩部の大目。

【性相】性とは六人、相とは大三法、相の四曼なり。

【體用】體は六大用は三密なり。

【一如】唯一眞如

何ぞ曾て絶滅せん。汗字の實義、應當にこれを知るべし。所謂損減とは苦空無常無我的故に、四相遷變の故に、不得自在の故に、不住自性の故に、因縁所生の故に、相觀待の故に、この六義を以ての故に、諸法損減と名く。今所謂汗字の實義とは、是の如きにはあらず。經に云はく、汗字は單身の義なり。この報とは因縁酬答の報果にあらず、相應相對の故に名けて報といふ。是れ則ち現智相應の故に報といふ。心境相對の故に報といふ。法身智身相應無二の故に報と名く。性相無碍涉入の故に報といふ。體用無二相應の故に報といふ。この故に常樂我淨は汗字の實義なり。損減なきが故に一如不動は汗字の實義なり。異相遷變無きが故に自在是れ汗字の實義なり。罣碍なきが故に不住體性は汗字の實義なり。改持せざるが故に、遠離因縁は汗字の實義なり。本來不生にして虚空に等しきが故に、超過觀待は汗字の實義なり。同一性の故に、復次に因縁生の法は必ず四相を帶す。四相を帶するが故に變壞無常なり。變壞無常なるが故に苦空無我なり。苦空無我なるが故に不得自在なり。不得自在なるが故に不住自性なり。不住自性なるが故に高下相望するに尊卑重なり。若し劣を以て勝に望むに、劣は則ち損と爲す。下を以て上に比するに下は則ち減と名く。是の如きの損減その數無量なり、誠にこれ本に背き本に向ひ、源に違ひ流れに順するの致すところなり。この故に三界六道長く一如の理に迷ひ、常に三毒の事に酔ひて冥野に荒獵して、歸宅に心無く夢落に長眠す。覺悟何れの時ぞ、今佛眼を以て之を觀するに、佛と衆生と、同く解脫の床に住す、此も無く彼も無く無二平等なり、不増不減にして

の理なり。即ち阿字不生の理。阿字本不生の事。阿字本不生の事。

【三毒】貪瞋癡の根本煩惱。

【周圓】生佛不二無差別の義。

【旋陀羅尼門】大疏第七卷には「一字を以て一切の字義を釋し、一切の字を以て一字の字義を釋す。一字の字義を以て一切の字義を破し、一切の字義を以て一字の字義を破す云云」と。

即ち阿字を體文の初めに置き、迦等の字門を能く、これ阿字は能生の根本の故なり。

【離作業】不可得の意。

【如知不可得】生死涅槃は不可得の義。

【法界不可得】諸法は悉く法界を體となす。故に法界無得なり。

【第一義不可得】

周圓周圓なり。既に勝劣増益の法無し、何ぞ上下損滅の人あらん、これを汗字の實義と名く。

復次に旋陀羅尼門に約して釋せば一切諸法不生の故に、汗字門無損滅なり。諸法は離作業の故に汗字門亦無損滅なり。諸法等虚空無相の故に汗字門亦復等虚空無損滅なり。諸法無行の故に汗字門亦復無行なり。諸法無一合相の故に汗字門亦復無一合相なり。諸法離遷變の故に汗字門亦離遷變なり。諸法無影像の故に汗字門亦無影像なり。諸法無生の故に汗字門亦復無生なり。諸法無戰敵の故に汗字門亦無戰敵なり。諸法無慢の故に汗字門亦無慢なり。諸法無執着的の故に汗字門亦無執着なり。諸法如不可得の故に汗字門亦如不可得なり。諸法住處不可得の故に汗字門亦無住處なり。諸法施不可得の故に汗字門亦無捨施なり。諸法界不可得の故に汗字門亦無法界なり。諸法第一義不可得の故に汗字門亦無勝義なり。諸法不堅如聚沫の故に汗字門亦無聚沫なり。諸法縛不可得の故に汗字門亦無縛脫なり。諸法有不可得の故に汗字門亦復無有なり。諸法乘不可得の故に汗字門亦無乘なり。諸法塵垢不可得の故に汗字門亦無塵垢なり。諸法相不可得なるが故に汗字門亦復無相なり。諸法離言説の故に汗字門亦無言説なり。諸法本寂の故に汗字門本來寂靜なり。諸法性鈍の故に汗字門亦復性鈍なり。諸法諦不可得の故に汗字門諦不可得なり。諸法因不可得の故に汗字門因不可得なり。因不可得は則ち本初不生なり。本初不生は則ち不増不減なり。不増不

減なり。諸法無怨對の故に汗字門亦無怨對なり。諸法無長養の故に汗字門亦無長養なり。諸法無怨對の故に汗字門亦無怨對なり。諸法無執着的の故に汗字門亦無執着なり。諸法如不可得の故に汗字門亦如不可得なり。諸法住處不可得の故に汗字門亦無住處なり。諸法施不可得の故に汗字門亦無捨施なり。諸法界不可得の故に汗字門亦無法界なり。諸法第一義不可得の故に汗字門亦無勝義なり。諸法不堅如聚沫の故に汗字門亦無聚沫なり。諸法縛不可得の故に汗字門亦無縛脫なり。諸法有不可得の故に汗字門亦復無有なり。諸法乘不可得の故に汗字門亦無乘なり。諸法塵垢不可得の故に汗字門亦無塵垢なり。諸法相不可得なるが故に汗字門亦復無相なり。諸法離言説の故に汗字門亦無言説なり。諸法本寂の故に汗字門本來寂靜なり。諸法性鈍の故に汗字門亦復性鈍なり。諸法諦不可得の故に汗字門諦不可得なり。諸法因不可得の故に汗字門因不可得なり。因不可得は則ち本初不生なり。本初不生は則ち不増不減なり。不増不

【不堅如聚沫】 諸法の當相は實に水の如きものにして、皆五蘊の集合（業津）なるの意。

【本家】 諸法は本來寂靜なること。

【性鈍】 人智を以て計る利鈍を亡ずれば皆無分別の心なる故に諸法性鈍と云ふ。

【因不可得】 諸法は因と果とが交互に因となり果となる故に云ふ。

【三界の業報云々】 頌文にして彼の十住心の損減に對して實義を顯はす。

【業報】 善惡の行業、苦樂の果報なり。

【分段】 分段段として他へ移ること。

【變易】 微細の生滅。

【藏海】 第八阿頼耶識。

減は則ち大般涅槃の果海なり、大般涅槃の果海は則ち如來法身なり、是を汗字の實義と名く。

三界の業報、六道の苦身、即ち生じ即ち滅して、念念不住なり。

體も無く實も無うして、幻の如く影の如し。

分段變易、因縁生の法は、九百の生滅、焰の如く流の如し。

藏海は常住なれども、七波推轉す。

兩許の無常、能く毀し能く損すれども、此の本有に於ては、何ぞ勞し何ぞ憂へん。

汗字の實義、かくの如く知るべし。

日月星辰は、本より虚空に住すれども、雲霧蔽虧し、烟塵映覆す。

愚者は之を視て、日月無しと謂へり。

本有の三身も、亦復かくの如し。

無始より以來、本より虚空に住すれども、覆ふに妄想を以てし、纏ふに煩惱を以てす。

【七波】前七識。
【事】菩提。
【理】涅槃の理を
知る正體智。

【決定二乘】 定性
二乘の機根。

【決定不定】 定性
と不定性即ち涅槃
を得るに劫限ある
と無きとなり。
【遍空の諸佛】 無
量無數の諸佛。
【化城】 三百山句
の體息所。
【寶所】 五百山句
の一乘の極果。
【不了】 大乘の了
義に對して小乗の
不了小涅槃。
【正因所生】 生滿
の種子より生ずる
意。

吽 字 義

事は鏡に均しく、理は礪珠に同じ
妄者は之を視て、本覺なしと謂へり
愚盲の撥無、損にあらずして而して何ん
彼の本身に於ては、損減不得なり
汗字の實義、かくの如く知るべし
決定二乘、妄りに滅想を生じ
身智を燒滅して、彼大虚に同じ
昧酒に沈酔して、覺らず醒めず
決定不定、輕重差あれども
空く劫數を歴、損これに過ぎたるはなし
本有の三身は、儼然として動せず
遍空の諸佛、驚覺開示したまへば
乃ち化城より起ちて、寶所に廻趣す
草木也成ず、何に沉や有情をや
妄りに不了を執すれば、損を爲すこと是れ多し
汗字の實義、まさに是の如く知るべし
正因所生の、報果の色身は

【報果の色身】正
因より生ずる自受
用報身なりし。
【一向記】生者必
死の如く因果は必
ず一つの業律を保
つ事。

【眞如法性云云】
以下は十住心中の
覺心不生心即ち三
論に約して汗字の
實義を釋す。然し
てこれより以前の
文は法相及二乗に
約して汗字の實義
を釋するものなり

萬德莊嚴、四智圓滿すれども

但し相續のみ有て、是れ凝然にあらす

生ずるものは必ず滅す、一向記の故に

此れ是權劍をもて、能く殺し能く害す

本有の三密は、日の天に麗はしきが如く

如空の四智は、金を地に埋むるに似たり

猛風の因、利鏤の縁

誰か能く之を生じ、誰か能く之を造せん

汗字の實義、まきに是の如く知るべし

眞如法性は、心の實常なり

凡そ心あるもの、誰か此理無からん

心智即理なり、心外の理にはあらす

心理これ一なり、濕塵豈に別あらんや

如性等しく遍すれども、心行狭劣なれば

權に嬰兒を誘ふに、迷者は知らず

此權戟を揮つて、彼眞佛を破す

これを損滅と名く、常遍の本佛は

【三諦圓涉云云】
 以下は八、九、十の
 住心即ち天台、華
 嚴、眞言の教理に
 約して汗字の實義
 を釋す。
 【三諦圓涉】天台
 所説の非有非空中
 道實相の絶對無二
 のこと。
 【十世無碍】華嚴
 所談の重重法界無
 碍無盡莊嚴を云ふ
 【八九】第八、第
 九講のこと。

損せず虧せず、汗字の實義
 汝等まさに知るべし、水の外に波なし
 心内即ち境なり、草木に佛なくんば
 波に則ち濕なけん、彼にあつて此に無くんば
 權にあらすして誰ぞ、有を遮し無を立せば
 是れ損是れ減なり、損減の利斧
 常に佛性を斫く、然りと雖も本佛は
 損も無く減も無し。三諦圓涉にして
 十世無碍なり。三種世間は
 皆これ佛體なり。四種曼荼は
 即ちこれ眞佛なり。汗字の實義
 かくの如く學すべし。二乗は智劣なれば
 爲に六講を説き、大乘は稍勝れば
 乃ち八九を示す、執滯して進まず
 突が無數を知らん、密意を解せずして
 小を得て足んぬと爲す、己有を識らず
 貧これに過ぎたるは莫し、摩利の海會は

【同一にして多如】
 一法界は即ち六大
 一實の位なり。多
 法界は自證の極位
 なり。
 【如如】 多法界は
 心理無量の故に云
 ふ。
 【理理】 胎藏の前
 五。
 【智智】 金剛界の
 第六講大。
 【色心無量】 色は
 理即ち胎藏界、心
 は智即ち金剛界な
 り。

即ち是れ我が寶なり、汗字の寶義

當にかくの如く學すべし、同一にして多如なり

多の故に如如なり。理理無數

智智無邊なり、恆沙も喩へにあらず

刹摩も猶し小なし。雨足多しと雖も

並にこれ一水なり。燈光一にあらずれども

冥然として同體なり。色心無量にして

寶相無邊なり。心王心數

主伴無盡なり。互相に涉入して

帝珠錠光のごとし。重重雜思にして

各五智を具す。多にして不異なり

不異にして多なり、故に一如と名く

一は一にあらずして一なり、無數を一と爲す

如は如にあらずして常なり、同同相似せり

此理を説かざるは、即ちこれ隨轉なり

無盡の寶藏、これに因て耗竭し

無量の寶草、ここに消盡す

【地墨】 大地のこと。
【山毫】 須彌山のこ。

【七】 以下は摩字の實義を釋す。
【所謂摩字門云云】 以下は總釋。
【所謂我に二種以云】 別釋なり。中に於て八段の不同あり。所謂遮情、絶言、表德、妙用難思、平等、圓融の實義之なり。然して、この中に於て上の二は遮情、後の六は表德の義なり。
【吾我不可得】 人法二我は妄情の所執の故に不可得なり。
【金剛已還】 阿字本不生際に徹底して已に金剛身を得たるもの意。
【四種の行人】 法

之を損滅といふ、地墨の四身
山毫の三密、本自より圓滿して
凝然として不變なり、汗字の實義
これをこれ謂ふか

【七】 第四に摩字の實義とは、所謂摩字門一切諸法吾我不可得の故に、是を實義と名く。所謂我に二種あり。一には人我、二には法我なり。人は謂く四種法身、法は謂く一切諸法なり。一法界一眞如一菩提より乃至八萬四千不可説不可説の微塵數の法これなり。かくの如きの四種法身その數無量なりと雖も、體は則ち一相一味にして、此も無く彼も無し。既に彼此なし、寧ろ吾我あらんや、これ則ち遮情の實義なり。このところは則ち金剛已還の四種の行人等は希なるかな夷なるかな、譬の如く盲の如し。絶の又絶、遠の又遠なり。四句も及ばず、六通も亦極まる、これを絶言の實義と名く。『經』に云はく、「摩字とは大日の種子なり、一切世間は我我を計すと雖も未だ實義を證せず、唯し大日如來のみ有つて、無我の中に於て大我を得給へり、心王如來、既にかくの如きの地に至り給ふ、塵數難思の心所眷屬誰かこの大我の身を得ざらん。これ則ち表德の實義なり。『經』に曰はく、「この摩字化身の義とは所謂化とは化用化作の義、遮那如來自受用の故に種種の神變を化作し、無量の身雲を現じ、無變の妙土を興ずる義、之を妙用難思の實義と名く、又云はく、「この摩字とは三昧耶自在の義、無所不遍の義とは三昧耶と言へば唐には等持といふ。等とは平等、持

報應化の四身を得る因行の人。

【四句】 俱非、單、俱是、俱兩。

【六通】 神境、天眼、耳、宿命、他心、漏盡。

【大我】 平等一實。

【表德】 吾我の二に於て邪正を論ぜず、皆本不生なりとするを云ふ。

【守護】 守護國界主。

【羅尼經】 第九卷の文なり。

【三昧耶白名】 一切處の義なり。

【阿字】 阿字のこと。即ち摩訶字に阿字を附したるマン字なり。

【妙德】 古昔蓮なり。即ち衆生各具するの義。

【文殊摩訶】 深慧を以て入法の戲論を離れたることを現はす爲に童子となつて現はれたる文殊菩薩なり。

【二美】 阿智の二門を云ふ。

とは攝持、法身の二密は織芥に入れども違からず、大處に互るも寛からず、瓦石草木を簡ばず、大處を擇はず、何れの處にか過せざる、何物をか攝せざらん。故に等持と名く、これを平等の實義と名く。又云はく、一摩訶字にして歸と名く、即ちこれ妙徳の一字眞言これ圓滿具足の義なり。文殊摩訶身と云ふは、四徳の中の我波羅蜜なり。智として妙にあらざること無く徳として圓にあらざること無し。一美具足し圓轉に湛なり。即ちこれ圓徳の實義なり。又云はく一摩訶字第十一の轉を輪と名く、これはこれ不動尊の心なり。此尊は三世十方一切諸佛の師。四十二地一切菩薩の所依なり。然りと雖も使者の影相を現じて奴僕の垂髮を示し已前の地位を屈して初心の遺穢を浚す、これ則ち高けれども奢らず、損なれども盈を招く、即ちこれ損益物の實義なり。若し摩訶字の吾我門に入りぬれば、之に諸法を攝するに一一の妙として該れざることなし。故に經に云はく、「我則法界、我則法身、我則大日如來、我則金剛持、我則一切佛、我則一切菩薩、我則薩婆、我則聲聞、我則大自在天、我則梵天、我則帝釋、乃至我則龍鬼神八部衆等なり。一切有情衆生摩訶字にあらざることなし、是れ則ち一にして該れ多なり、小にして大を含す、一故に圓融の實義と名く。

【八】 次に合して釋せば、此味は四字を以て一字を成す、所謂四字とは阿訶汗塵なり。阿は法身の義、訶は報身の義、汗は應身の義、塵は化身の義なり。此四種を擧げて、彼諸法を攝するに括らざる所なし、且く別相を以て言はば、阿字門を以て一切の眞如法界法性實際等の理を攝するに攝せざる所無し。訶字門を以て一切の内外大小權實顯密等の教を攝

するに攝せざる所無し。阿字門を以て一切の眞如法界法性實際等の理を攝するに攝せざる所無し。訶字門を以て一切の内外大小權實顯密等の教を攝

【四辯】法、義、詞、樂説の無碍自在辯なり。

【攝】此字即ち塵字に空點を加へたるマン字なり。

【四十二地】十住十行、十廻廻、十地、等覺、妙覺なり。

【八】以上は阿阿行塵の四字を分離して釋するが以下は四字を合して一畔字としての釋なり。

【因陀羅宗】帝釋所造の聲論宗なり。

【伏義の六爻】伏義は支那三皇の第一の帝にして金色の龜の丈一丈二尺にして八卦を負うて出て、天下を治むとの故事あり。爻は易の策の六爻なり。

【龍猛菩薩】今の文は智度論第三十八卷の文なり。

畔字義

するに拵せざるところなし。汗字門を以て一切の行、三乘五乘等の行を攝するに、攝せざるところ無し。塵字門を以て一切の果法を攝するに、攝せざる所無し。理盡く持し事悉く攝するが故に總持と名く。若し通相を以て釋せば、各各に理修行果等を攝して攝せざる所なく盡さざる所なし、猶し因陀羅宗の如くして一切の義利悉く皆成就せり。又伏義の六爻の一一の爻の中に各萬像を具するが如し。復次に、此畔字の中に阿字あり、これ因なり、因縁所生の法はこの法の中に於て、諸の外道二乘及び大乘教等の教網紛紛として各旗鼓を擧げて争つて僞帝と稱す。若しは外道、若しは二乘、若しは大乗、有人、有法、有因、有果、有常、有我と執する、これ等は皆これ塵字點の中に攝す。即ちこれ増益の邊なり。未だ中道を得ず。若し無人、無法、無因、無果、無常、無我と執する等をば即ちこれ汗字點の中に攝す。即ちこれ損滅の邊なり。亦未だ中道に會はず。若し非空、非有、非常、非斷、非一、非異と執する等は阿字の中の非の義の中に攝す。若し不生、不滅、不増、不減等の八不を執する等は又阿字の中の不の義の中に攝す。又若し無色、無形、無言、無説と執する等は亦阿字の中の無の義の中に攝す、亦未だ眞實の義に會はず。並にこれ遮情の邊なり。若し未だ諸法の密號名字の相眞實語、如義語を解せざる者の所有の言説思惟修行等は、悉くこれ顛倒なり、悉くこれ戲論なり、眞實究竟の理を知らざるが故に。

故に龍猛菩薩の云はく、「佛法の中に二諦あり。一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の爲の故には衆生有り」と説き、第一義諦の爲の故には衆生所有なしと説く。復二種あり、

【生遍知者】二諦異ありと雖も、もと煩惱即菩提にして煩惱と菩提とは別あるは畢す。故に此兩者を差別するは偏見なり。故に此偏見を棄きたるものを云ふ。

【五停心観】業息等によつて心の妄用を止むる観法にして此に五行あり。

【七方便】三賢と四善根。

【空點】悉曇文字の上に圓形の點あるを指す。即ち、「ン」一ノ符號なり。

【遮那經】大毘盧遮那成佛神變加持經即ち大日經なり。

【方便云々】内には向上方便の功德を圓滿し、外には向下方便の利他の行を修するを云ふ。

名字の相密號を知らざるもの爲には、第一義の中に衆生無しと説き、名字の相密號を知るもの爲には、第一義の中に衆生有りと説く。若し人あつて能くこの吽字等の密號密義等を知るを則ち正遍知者と名く、所謂初發心の時に便ち正覺を成じ大法輪を轉ずる等は良にこの究竟の實義を知るに由てなり。復次に、此一字に約して三乘の人の因行果を明さば、聲聞の人も明し次に緣覺に約し後に菩薩を明す。初めに聲聞を明すとすは、この吽字の中に訶字あり即ちこれ因の義なり、何等に聲聞乘の種性といふは、これ其因なり。下に汗字あり、是れ其行なり。聲聞の人の四諦の法五停心觀七方便等、これは是れ行なり、これ汗字の字用これそれに當るなり。今聲聞の人は、灰身滅智を以て究竟の果と爲す、此吽字の上に空點あり、この空點は塵字の所生なり、塵字は人法二空の義を象ぬ、その人空の理は即ち聲聞所證の理なり、これを聲聞の人の因行果と名く。次に緣覺を明さば、何等に所謂緣覺乘の種性等は是れその因なり。この吽字の中に訶字あり、これ其因なり。緣覺亦十二因縁四諦方便等を觀ず、この吽字の下に汗字あり、これそれに當るなり。緣覺亦人空の理を證す、これそれ果なり、上に準じて之を知れ。次に菩薩を明さば、遮那經、金剛頂經等に、菩薩の人、菩提心を因となし、大悲を根と爲し、方便を究竟と爲すと説く。今この吽字の本體は訶字なり、これ則ち一切如來の菩提心を以て因とするなり。下に三昧の畫あり、これ大悲萬行の義なり、上に大空點あり、これ究竟大菩提涅槃の果なり。この一字を以て、三乘の人の因行果等を攝するに悉く攝して餘りなし。及以顯教一乘、秘密一

乗の因行等準じて之を知れ。

【法然加持】如來の大悲が衆生に加はる事。持とは衆生よく之を受持することなれば此事が自然に行はるることを云ふ。

【九】以上は能攝所攝に約して別釋し、以下は六種の「復次」の義をなし、卍字に重なる義ある事を明す。即ち擁護、自在能破、滿願、大力、恐怖、等觀、歡喜の六種の義なり。

【高峯觀】中道第一義諦なり。

【菩提心】菩提心が萬行を導くこと

【能滿願】衆生の願は二利の類に通ず最にかく云ふ。

【摩尼】如意寶珠と譯す。

【一切如來誠實の語】卍字は外面には煩惱障を恐怖せしめ、内面には所

次にこの一字を以て通じて諸經論等の所明の理を攝することを明さば、且く『大日經』及び『金剛頂經』に明す所皆この菩提爲因大悲爲根方便爲究竟の三句に過ぎず。若し廣を攝して略に就き、末を攝して本に歸すれば、則ち一切の教義この三句に過ぎず、この三句を束ねて以て一の卍字と爲す。廣すれども亂れず、略すれども漏れず、此れ即ち如來不思議の力法然加持の所爲なり。千經萬論なりと雖も、亦この三句一字に出でず。其一字の中に聞く所の因行果等、前に準じて之を思へ。只卍字に是の如きの義を攝するのみに非ず、所餘の一一の字門も亦復かくの如し。

【九】復次に擁護の義とは、謂く、上に大空點あり、これ法字門なり、即ちこれ大空の義なり、即ちこれ般若佛母明妃の義なり。中に訶字あり、これ因の義なり、此虚空藏の中に於て眞因の種子を合養す、即ちこれ大護の義なり。復次に自在能破の義とは、謂く、上に空點あり、即ちこれ法字門なり。法字門は猶し虚空の畢竟清淨にして所有無きが如し。即ちこれ高峯觀所知の境界なり。中に訶字あり、これ菩提心なり、亦これ自在力なり。この二字相應するを以ての故に、猶し大將の能く怨敵を破するが如し。故に自在能破の義と名く。復次に能滿願の義とは、謂く、訶字門はこれ菩提心の寶なり、法字門の虚空藏と和合するが故に、巧色摩尼を成ずることを得て能く一切衆生の希願を滿す、これを能滿願の義と曰ふ。復次に大力の義とは、謂く、訶字の菩提心の中に一切如來の十力等を具足す。今法字と合す

【金剛】 詞字不生の體なり
 【觀】 生死の五
 【死】 壽命を還
 【大】 義を起し
 【明】 の母 大空
 【果】 佛生の義
 【分】 日 増す
 【字】 の 義 行 次 事 に
 【見】 す こと
 【歡】 喜 字
 は 定 惠 する を 以て
 此 詞 字 を 以て
 自ら 必ず 諸 障 を 摧
 破 して 普く 衆 生 を
 護 る こと を 知る 故
 に 歡 喜 す 又 卍 字
 の 大 空 處 は 果 實 自
 證 の 三 昧 耶 を 覺 し
 下 の 畫 は 大 悲 他
 の 萬 行 表 す 故
 に 自 利 利 他 の 二 德
 は 三 世 の 諸 佛 の 同
 等 の 觀 の 故 に 等 觀
 の 義 あり となす。

るが故に、此の繫縛を離れて復讐碍なし、虚空の中の風の自在に旋轉するが如し、故に大
 力と名く、其大堅固力は本諸佛の金剛種性より生ず。又無量劫より已來常にこの詞字の眞
 因を以て具に法行を修す。法字の萬徳、一切皆金剛の破壊すべからざるが如し、これを大力
 の義と名く、復次に悲愍の義とは、謂く、この卍字は一切如來眞實の語なり。所謂一切諸法無
 因無果本末清淨圓實の義なり。是故に緣に菩提心を發せば卍即ち菩提道場に坐し正法輪を
 轉す。この相續に出るが故に能く一切の佛法を證悟し念念に薩般若智を具し直に究竟に至
 り金剛座に坐す。四魔現前すれば即ち大慈三摩地に入り、四魔等を恐怖し降服す。所謂四
 魔とは蘊魔、煩惱魔、死魔、天魔なり。是の如きの魔軍恐怖し降服せざることなし。猶し
 日輪鏡に攀れば霜鏡消滅するが如し、復次に如來何なる法を以てか諸羣を恐怖するや。謂
 く、即ちこの卍字門を以てするなり、下の三昧の畫は卍即ちこれ具に萬行を修す。上に大空
 點あり、即ち此の以て成の萬徳なり。詞字は卍即ちこれ法幢旗なり、三昧と空點と合するが故
 に卍即ちこれ高峯觀、味なり。上の點はこれ明妃の母なり、下の畫はこれ胎分日に増す。是の
 如きの義の故に適に尊を發する時に魔軍散壞す、即ちこれ恐怖の義あり。復次に等觀歡喜
 の義とは、この卍字の中に詞字あり、これ歡喜の義なり。上に大空あり、これ三昧耶なり、
 下に三昧の畫の字有り、これ亦三昧耶なり。二の三昧耶の中に行するなり、三世の諸佛皆
 この觀に同じたまふ。故に等觀の義と名く。

卍字義終

辯顯密二教論卷上

沙門空海撰

上下二卷。弘法大師の撰。大横には法相、師が顯教の四家大乘と密教とを比較對辯して、その勝劣を極め、遂に四家大乘は釋尊應化の密說なるに對し、密教は彼の顯法に於て、因果不可說となす所も密教に於て、因分可說となるべき由を説けるものなり。

【一】夫れ佛に三身あり。教は則ち二種なり。應化の開說を名けて顯教と曰ふ。言は顯略にして機に逗へり。法佛の談話、これを密藏と謂ふ。言は秘奧にして實說なり。顯教の契經部に百億あり、藏を分てば則ち一十五十一の差あり、乘を言へば則ち一三四五の別あり、行を談すれば六度を宗と爲し、成を告ぐれば三大を限りと爲す。是れ則ち大聖分明にその所由を説きたまへり。

【二】若し『秘藏金剛頂經』の説に據らば、如來の變化身は地前の菩薩及び二乘凡夫等の爲に三乘の教法を説き、他受用身は地上の菩薩の爲に顯の一乘等を説きたまふ、並に是れ顯教なり。自性受用佛は自受法樂の故に自眷屬と與に、各三密門を説きたまふ、之を密教といふ。此三密門とは所謂如來内證智の境界なり、等覺十地も空に入ること能はず、何に況んや二乘凡夫誰か堂に昇ることを得ん。故に『地論』釋名論には、其機根を離れたりと稱し、『唯識』中觀には言斷心滅を歎す。是の如きの絶離は並に因位に約して談ず。果人を謂ふには非ず。何を以てか知ることを得る、經論に明瞭あるが故に。其明證具に列ぬること後の如し。求佛の客庶くは其趣きを曉れ。縱使顯網に觸れて以て羗筈し、

文以下を以て流通分となして序正流通三分を立つる説あれども今は通説に従ひ直ちに本文に入るとす。

【三身】法身、報身、應身なり。

【二種】顯密二教なり。

【成】成佛。

【三大】三大無限即ち三つの無限の時間なり。

【大聖】大日、龍樹等なり。

【二】以下は【一】の秘藏に就いて正しく論證の證據をあけて三身二教の差別を述ぶ。

【秘密金剛頂經】秘密金剛頂經なるも、此所にては一般に眞言秘密の經典と見るべきか。

權關に墜れて以て稅駕す、所謂化域に息むの賓、楊葉を愛するの兒、何ぞ能く無盡莊嚴恆沙の己有を保つことを得ん、醍醐を棄てて而して牛乳を覓め、摩尼を擲て以て魚珠を拾ふが如きに至ては、寂種の人、膏肓の病醫、工手を拱ぎ、甘雨何の益かあらん。若し善男善女あつて、一たび斯芸を驕がば、秦鏡心を照し、權實氷解けなん。所有の明證、經論に至つて多しと雖も、且く一鵬を示す。庶くは童幼を裨ふこと有らん。

【三】問うて曰はく、古の傳法者廣く論章を造つて六宗を唱敷し三藏を開演す、轉廣厦に剩り、人卷舒に備る。何ぞ勞しく斯篇を綴る、利益如何ん。答ふ、多く發揮するにあ

り、所以に纂るべし。先匠の傳ふる所は皆これ顯教なり、此はこれ密藏なり。人未だ多く解せず。是故に經論を支釣して合して一の手鏡と爲す。

【四】問ふ、顯密二教その別如何ん。答ふ、他受用變化身の隨機の説、これを顯と謂ひ、自受用法性佛の内證智の境を説きたまふを、是を秘と名く。問ふ、應化身の説法は諸宗共に許す、彼法身の如きは、色も無く、像も無く、言語道斷し、心行處滅して説も無く示も無し。諸經共に斯義を説き、諸宗亦かくの如く説す。如今何が爾法身の説法を談ずる。其

證安くんか。在るや。答ふ、諸經の中に往往に斯義あり。然りと雖も、文執見に隨つて隠れ、義機根を逐うて現はれまく而して。譬へば天鬼の見別人鳥の明暗の如し。

問ふ、若し汝が説の如きは、諸教の中に斯義あり、若し是の如くならば何が、故にか前來の傳法者斯義を談せざる。答ふ、如來の説法は病に應じて藥を投ぐ、根機萬差なれば針灸

【三乘】聲緣菩薩の

【二乘】二乘と六趣の凡夫なり。

三なり。【他受用身】報身毘盧遮那佛なり。【地上の菩薩】十地の聖者なり。【顯の一乘】今は法華華嚴等を云ふ。【自性受用佛】自性身と受用身。【地論】天親菩薩の十地論。【釋論】龍樹所造の釋摩訶衍論。【唯識】其本頌は世親の造一即ち唯識論なり。【中觀】龍樹作の中觀論なり。【化城】顯教を指す。【毘葉】楊の葉は金色なれども眞の金色にあらず。其如く、顯教は佛教に似て眞の佛教に非ずと喻す。【無盡莊嚴恆沙】密教なり。【秦鏡】秦始皇帝即位の夜、鬼より鏡を得たりと云ふ故事。【三】以下は通妨

辯顯密二教論卷上

千殊なり、隨機の説は、權は多く實は少し。菩薩論を造ること、經に隨つて義を演べ敢て遠越せず。是故に天親の『十地』には「因分可説」の談を馳せ、龍猛の『釋論』には「圓海不談」の説を挾む。斯れ則ち經に隨つて詞を興す、究竟の唱に非ず。然りと雖も顯を傳ふる法將は深義を會して淺に從ひ、秘旨を遺して未だ思はず。師師伏膺して口に隨つて心に藹み、弟弟積習して宗に隨つて談を成す。我を益するの鋒を争ひ募つて、未だ己を損するの劍を訪らふに遑あらず。加之釋教東夏に漸で微より著に至る。漢明を始めと爲し、周天を後と爲して、其中間に翻傳する所は皆これ顯教なり。玄宗代宗の時、金智、廣智の口、密教嚮りに起つて盛りに秘趣を談す。新樂日淺ろして舊痼未だ除かず。楞伽法佛說法の文、『智度』性身妙色の句の如きに至ては胸臆に馳せて文を會し、自宗に驅つて而して義を取る。惜いかな、古賢醍醐を嘗めざること。」

問ふ、「義若し是の如くならば何等の經論にか顯密の差別を説く。」答へて曰はく、「五秘、金峯聖位經。遮那楞伽教王等。菩提智度摩訶衍。かくの如きの經論に簡擇して説けり。問者の曰はく、「請ふその證を聞かん。」答へて曰はく、「然かなり、我當に汝が爲に日輪を飛ばして暗を破し、金剛を揮つて以て迷を摧かん。問者の曰はく、「唯唯として聞かんと欲す。」龍猛菩薩の『釋大衍論』に云はく、「一切衆生に無始より來、皆本覺ありて捨離する時なし、何が故にか衆生先に成佛するあり、後に成佛するあり、今成佛するあり、亦勤行あり、亦不行あり、亦聰明あり、亦暗鈍あつて無量差別なり、同じく一覺あらば皆悉く一時に發

問答。

【三】成實、法相、三論華嚴。此一法は正しく顯明の不同を論ず。

【四】以下は上の問答に引いて法身説法の義を問答す。

【八】八邊の具。大疏第一には、譬如人、心、或以行實、或以爲火、自心見苦、由此離心、之心外無有法也」と。

論第四に詳かなり要するに天鬼、人鳥等の句は學者の異義を論し現す。

【四】因分可説。四位は説くを得べし。の境界は説くに

【四】因分可説。四位は説くを得べし。の境界は説くに

心修行して無上道に到るべし。本覺の佛性強劣別の故に是の如き差別あるか。無明煩惱厚薄別の故にかくの如きの差別あり。若し初の如く言はば此事則ち爾らず、所以何となれば本覺の佛性は過恒沙の諸の功徳を圓んじて増減なきが故に、若し後の如く言はば、此事亦爾らず。所以何となれば、一施斷の義成立せざるが故に、是の如きの種種無量差別は、若無明に依て住持することを得、至理の中に於て關ること無からまく而已。

【五】若し是の如くならば一切の行者一切の惡を斷じ一切の善を修して十地を越え、無上地に到り三身を圓滿し四徳を具足す。是の如きの行者は明とやせん無明か、是の如きの行者は無明の分位にして明の分位に非ず。若し爾れば清淨本覺は無始より來、修行を觀たず、他力を得るに非ず、性徳圓滿し、本智具足せり。亦四句を出で亦五邊を離れたり。自然の言も自然なること能はず、清淨の心も清淨なること能はず、絶離絶離せり。是の如きの本處は明とやせん無明か。是の如きの本處は無明の邊域にして明の分位に非ず、若し爾ば一法界心は百非に非ず、千是を背けり。中に非ず、中に非れば天を背き、天を背すれば演水の談足斷て止まり、審慮の量手亡うして而して住す。是の如きの一心は明とやせん無明か。是の如きの一心は無明の邊域にして明の分位に非ず。三自一心摩訶衍の法は一も一なること能はず、能入の一を假る心も心なること能はず。能人の心を假る實に我の名に非れども而も我に曰く、亦自の唱へに非れども而も自に契へり。我の如く名を立つれども實の我にあらず。自の如く唱を得れども實自に非ず。玄玄として又玄、遠遠として又

言語なけれども相
 對界(顯教)は説く
 を得るの意なり。
 【圓海不談】果界
 (絶對界)は言語道
 斷の所と云ふ意。
 【東夏】震旦即ち
 支那のことなり。
 【漢明】以下は顯
 教顯傳の時代を示
 すものにして、漢
 明とは東漢の第二
 世明帝を指す。
 【周天】周とは唐
 の代。天とは則天
 武后なり。
 【玄宗代宗】以下
 は密教流の事を示
 す。玄宗は唐の第
 七代、代宗は第九
 代の帝なり。
 【金剛眞智】金剛
 智は大寶智前三藏
 にして此の人は師
 資共に明元八年
 (金剛智)以來來唐
 して密教を弘通す
 【問】義若し云ふ
 以下は前案の傳法
 者の法身説法を密
 ぜざるを述べ顯密
 の差別を論議を引
 いて論釋す。

遠なり。是の如きの勝處は明とやせん無明か。是の如きの勝處は無明の邊域にして明の分
 位に非ず。不二摩訶衍の法は唯これ不二摩訶衍の法なり。是の如きの不二摩訶衍の法は明
 とやせん無明か。喩して曰はく、已上五重の問答甚だ深意あり。細心研覈して則ち能く極
 に詣すべし。一一の深義紙に染むる能はず、審かんじて之を思へ。又曰はく、「何が故に
 不二摩訶衍の法は因縁無きや。この法は極妙甚深にして獨尊なり、機根を離れたるが故に。
 何が故に機を離れたる、機根無きが故に。何ぞ建立を須ふる、建立に非るが故に。この摩訶
 衍の法は諸佛に得せらるるや、能く諸佛を得ず。諸佛は得すや、否なるが故に。菩薩二乘一
 切異生も亦復かくの如し。性徳圓滿海これなり。所以何となれば機根を離れたるが故に。教
 説を離れたるが故に、八種の本法は因縁より起る。機に應ずるが故に。機に應ずるが故に。
 何が故にか機に應ずる、機根あるが故に。是の如きの八種の法の諸佛は得せらるるや、諸佛
 は得せらる。諸佛を得すること否なるが故に、菩薩二乘一切異生も亦復かくの如し。修行
 種因海是なり。所以何となれば、機根あるが故に、教説あるが故に。」又云はく、「諸佛甚深廣
 大義とは即ちこれ通想攝前所説の門なり。所謂通じて三十三種の木數の法を攝するが故に。
 此義云何。諸佛と言ふは、即ちこれ不二摩訶衍の法なり。所以何となれば、此不二の法を
 彼佛に形ふるに、其徳勝れたるが故に。大本華嚴契經の中に是の如きの説を作す。その
 圓圓海徳の諸佛は勝れたり。その一切の佛は、圓圓海を成就すること能はず、劣なるが故
 に。若し爾れば何が故にか一分流華嚴契經の中に、是の如きの説を作す。盧遮那佛は三

【五】 以下は明無明の義を釋するに五重の問答をなすに於て初めに初重を明す。

【普し附れば】 清淨云云。五重問答中の第一重を明す。

【有無】 有無、非有非空の義を明す。

【五重】 増益、損減、相違、愚癡、瞋の五法は俱に首重の法に依るに由る故に五重と云ふ。

【自然の言】 是は言語道斷心行所滅の義を明す。

【若し】 若し、一法界心云云。第三重の問答を明す。

【一法界心】 一體一心なり。

【百非に非ず】 一切を空なりと遮斷すること。

【下是】 一切を有なりと肯定すること。

【中】 非有非空の中道。

【天】 第一義天なり。

種別間をその身心と爲す、三種世間は法を攝するに餘なし、彼佛の身心も亦復攝せざる所あることなし、虚空那由は三世間を攝すと雖も、而も攝と不攝との故に、是故に過なし。喻して曰はく、「所謂不二摩訶衍及び圓圓海徳の諸佛とは、即ち是れ自性法身なり。」これを秘密藏と名け、亦金剛頂大教王と名く、尊覺上地等も見聞すること能はず、故に秘密の號を得。其には「金剛頂經」に説くが如し。

【六】 「華嚴五教」の第六の卷に云はく、「今將に釋迦佛の海印三昧一乘教義を闡かん」とするに略して十門を作す。初に建立業を明さば、然もこの一乘教義の分齊を聞いて二門と爲す。一に別教二に同教、初の中に亦二つ。一にはこれ性海果分、これ不可説の義に當る。

何を以ての故に。教と相應せざるが故に。即ち十佛の自境界なり。故に「地論」に「因分可説果分不可説」と云ふはこれなり。二には是れ縁起因分、即ち普賢の境界なり。又中卷の「十玄縁起無碍法門義」に云はく、「夫れ法界の縁起は乃ち自在無窮なり。今要門を以て略攝して二と爲す。一には究竟果證の義を明す。即ち十佛の自境界なり。二には縁に隨ひ因に約して教義を辯す、即ち普賢の境界なり。初の義とは圓融自在にして一切、一切即ち一なり、其狀相を説くべからずまくのみに、「華嚴經」の中の、究竟果分の國土海及び十佛の自體嚴義等の如きは即ちその事なり、因陀羅及び微細等を論せず。是れ不可説の義に當れり。何を以ての故に。教と相應せざるが故に。故に「地論」に「因分可説果分不可説」と云ふは即ち其義なり。問ふ、「義若し是の如くならば、何が故に經の中に、乃ち佛不思議

り。即ち第一義諦のこと。
【濁水の談】 言語道斷。

【三百一心摩訶衍云云】 第四重の問答を明かす。

【三百一心摩訶衍法】 空、有、非空非有を一心に集めたる絶対唯一心の法

【不二摩訶衍云云】 第五重の問答にして果分の法體を明

【不二摩訶衍の法】 眞言密教の法。

【論して曰はく云云】 弘法大師の意見なり。

【又曰はく】 釋摩訶衍論第一の文。

【性徳圓滿海】 不二果海のこと。即ち眞言密教の教法なり。

【八種の本法】 以下は因海の問答。

【又云はく】 釋摩訶衍論第十の本數【三十三種の本數の法】 立義所説の法の數多なること

辯顯密二教論卷上

義品等の果を説きたまふや。答ふ、「この果の義は、これ縁に約して形對して因を成せんが爲の故にこの果を説く、究竟自在の果に據るに非ず。然る所以は不思議法品等は因位と同會にして説くが爲の故に知んぬ。形對せまくののみ。」又云はく、問ふ、「上に果分は縁を離れて不可説の相なり。但し因分を論ずと言ふは何が故にか十信の終心に即ち作佛得果の法を辨ふるや。」答ふ、「今作佛と言ふは但し初め見聞より已去乃至第二生に解行を即成し、解行の終心に因位窮滿するもの、第三生に於て即ち彼究竟自在圓融の果を得るなり。此因の體は果に依つて成するに由るが故に、但し因位滿するもの勝進して果海の中に即没す。これ證の境界とするが故に不可説ならまくのみ。」諭して曰はく、「十地論一及び「五教」の性海不可説の文と、彼龍猛菩薩の不二摩訶衍の圓同性海不可説の言と懸に會へり。所謂因分可説とは顯教の分齊、果性不可説といふは、即ちこれ密藏の本分なり。何を以てか然か知る」とならば、「金剛頂經」に分明に説くが故に、有智のもの審に之を思へ。「天台止觀」の第三の卷に云はく、「此三諦の理は不可思議にして決定の性なし、實に説くべからず。若し縁の爲に説かば三の意を出です。一には隨情說語なり。即ち隨他意に隨智說語なり。即ち隨自意に隨情說語なり。二には隨情智說意語なり。三には隨智說語なり。云何が隨情說の三諦、旨の乳を識らざれば、爲に貝鉢雪鶴の四の譬を説く、四旨各各に解を作して執して四の譬ひを起すが如く、凡情の愚翳も亦復是の如し。三諦を識らざれば大悲方便もて爲に有門、空門、空有門、非空非有門を説きたまふ。この諸の凡夫終に常樂我淨の眞實の相を見ること能はず。各空有を執して相互に是非すること

【一切の佛】顯教眞如門の佛なり。【三種世間】智正覺世間（佛の世界）衆生世間（一切衆生の世界）器世間（山川國土等、非情の世界）。

【六】以下は四家大乘に對して顯密二教の差別を對辯す。

【海印三昧】大海は空中の一切を影する如く、佛の心に一切の機根の印する状態を云ふ。【一乘教】華嚴經所説の教義を指す。

【十門】所化の根に應じて十種の三昧門を立つる意。

【別教】漸入者の爲に三乘と一乘とは別なりと説く。【同教】漸入者の爲に一乘と三乘とは同一なりと説く。

【性海果分】因果の中にして眞如は大海の如しと喩ふ。【回轍自在】果分

彼の四首の如し。所以に常途に三諦を解するもの二十三家なり、家家不同にして各各に異見し、自を執し、他を非す。甘露を飲むと雖も命を傷つて早く夭すと云云。隨智説の三諦とは、初住より去た但し中を説くに現悲を絶するのみに非ず。眞俗も亦然なり。三諦玄微にして唯智の所照なり。示すべからず、思ふべからず、聞くもの獨惟しなん。内に非ず、外に非ず、難に非ず、易に非ず、相に非ず、非相に非ず、これ世法に非ず、相貌あること無し。百非洞達し、四句皆亡す。唯佛と佛とのみ乃ち能く究盡したまへり。言語同斷し、心行處滅す。凡情を以て圖想すべからず。若は一、若は三、皆情望を絶す。尚し二乘の測る所に非ず。何に況や凡夫をや。乳の眞色眼開けたるは乃ち見、徒に言語を費せども盲は終に識らざるが如し。是の如きの説をば名けて隨智説の三諦の相と爲す。即ちこれ隨自意語なり。喩して曰はく、この宗の所觀は三諦に過ぎず。一念の心中に即ち三諦を具す。これを以て妙と爲す。彼の百非洞見し、四句皆亡し、唯佛與佛乃能究盡の如きに至ては、此宗他家これを以て極と爲す。これ則ち顯教の關樞なり。但し眞言藏家には、此を以て入道の初門と爲す。是れ秘奥にはあらず、仰覺の薩埵、思はずんばあるべからず。楞伽經に云はく、「佛大慧に告げたまはく、我れ曾菩薩の行を行せし。諸の聲聞等の無餘の涅槃に依るが爲に授記を與ふ。大慧我聲聞に長記を與ふることは怯弱の衆生をして勇猛の心を生ぜしめんが爲なり」と、大慧この世界の中及び餘の佛國に、諸の衆生菩薩の行を行じて而して復聲聞法の行を棄ふあり。彼心を轉じて大菩提を取らしめんが爲なり。應化身の佛

に驚ふるもの。
【二諦】 眞俗の二諦。

【十三家】 梁の昭明太子の序に二諦を解する人二十三人ありと云ふ。

【一心の心中】 一念に三千を觀じ、一心に一切心を具するを云ふ。

【此宗】 天台宗。他宗 華嚴、三論、法相なり。

【楞伽經】 同經第八卷。

【無染涅槃】 身心都滅の要身滅智の境。

【受記】 拾少求大の注意。

【聲聞法の行】 四諦の理を觀する行法。

【慈思法師云云】 以下は法相の二諦安立に就いて顯密對辯す。

【世間世俗諦】 宅舎は外面より見れば宅舎なれども内面より見れば椽梁等の集合なり。然

して言語道斷し深く佛法に入る。心通無碍にして不動不退なるを無生忍と名く。これ助佛道の初門なり。又三十一に云はく、「復次に有爲を離れて則ち無爲なし、所以何となれば有爲の法の實相は即ちこれ無爲なり。無爲の相は則ち有爲に非ず。但し衆生の顛倒せるが爲の故に分別して有爲の相とは生滅住異なり。無爲の相とは不生、不滅、不住、不異なりと説く。これを入佛道の初門と爲す。龍猛菩薩の『般若燈論』の觀涅槃品の頌に曰はく、

被第一義の中には、佛は本より説法したまはず

佛は無分別者なり。大乗を説くこと然らず

化佛説法すとは、是事則ち然らず

佛は説法に心なし。化言は是れ佛にあらす

第一義の中に於て、彼亦説法せず

無分別性空にして、悲心あること然らず

衆生無體の故に、亦佛體あること無し。

彼佛無體の故に亦悲愍の心無し。

分別明菩薩の譯に云はく、此中に第一義を明さば、一相の故に所謂無相なり。佛も無く亦大乘も無し。第一義とは是れ不二智の境界なり、汝が説く偈は正しく是れ我が佛法の道理を説けり、今當に汝が爲に如來の身を説かん。如來の身とは無分別なりと雖も先に利他の願力を種えしを以て大誓の莊嚴重修するが爲の故に、能く一切衆生を攝して一切時に於て

して今は其外面觀なり。故に偏計所執に當る。

【道理世俗諦】是は前の宅舍の例によれば其内面觀。

【勝得世俗諦】上の例に就て尙深く觀察すれば椽等と雖も之は悉く五蘊十二處、十八界の集合なり。然るに此集合の形成を看取する所を云ふ

【勝義世俗諦】上の例に於て、尙深く觀察すれば宅舍も亦唯心の緣起なりとの義。

【智度論第五六六】以下は智度論、般若密論を引證して顯密二教を對辯す今宗に約せば三論宗に當る。

【不生不滅等】三論宗の八不正觀。

【又三十一に云はく】以下は十八空中の有爲空、無爲空の義を説く。

【佛は無分別者】法身は心所滅者

化佛の身を起す。此化身に因て文字章句あつて、次第に聲を出す、一切の外道聲聞辟支佛に共せざるが故に、而も爲に二種の無我を開演す。第一義波羅蜜を成就せんと欲ふが爲の故に、最上乘に乗する者を成就せんと欲ふが爲の故に、名けて大乘と爲す。第一義の佛あるが故に、彼佛に依止して化身を起す。此化身より説法を起す。第一義の佛説法の因と爲るに由るが故に、我が所立の義をも壞せず、亦世間の所欲をも壞せず。又云はく、第一義の中には幻の如く化の如し。誰か説き誰か聽かん。これを以ての故に如來は處所なし、一法として爲に説くべきこと無し。又觀邪見品に云はく、『般若』の中に説かく、佛、勇猛極勇猛菩薩に告げたまはく、『色は見を起す處に非ず、亦見を斷ずる處に非ず、乃至受想行識も見を起す處にあらす。亦見を斷ずる處にあらすとは、是を般若波羅蜜と名く。』今起等の差別緣起なきを以て開解せしむることは、所謂一切の戲論及び一異等の種種の見を息めて悉く皆寂滅なるこれ自覺の法なり、これ如虛空の法なり、これ無分別の法なり、これ第一義の境界の法なり、かくの如き等の眞實の甘露を以て開解せしむる、是れ一部の論宗なり。喩して曰はく、今この文に依らば明かに知んぬ。『中觀』等は諸の戲論を息めて寂滅絶離なるを以て宗極と爲す。是の如きの義の意は皆これ遮情の門なり、これ表徳の謂にはあらず。論主自ら入道の初門と斷じたまへり、意あらむ智者心を留めて之を九思せよ。龍樹菩薩の『大智度論』の卅八に云く、『佛法の中に一諦あり、一には世諦、二には第一義諦なり、世諦の爲の故に衆生ありと説く、第一義諦の爲の故に衆生所有なしと説く、復二種あり名

なる故此言あり。
【無分別性空】心
行所滅なるが故に
其本性は空寂なり
と云ふ。

【色は具を思はず云】
【云】是は正しく經
の文にして、諸の
外道小乘等は五蘊
の法に於て生滅斷
常一異去來の偏見
を起す故、今之を
論ず。

【修行行】色空
なるは修行も亦空な
るなり。

【依り】佛を辨する顯
發經を佛無生の
義なり。

【表德】遮情が顯
發なるに對しこれ
は密教なり。即ち
不二界論には佛あ
り衆生あり、悉く
法界曼荼羅をなす
を云ふ。

【初習行】顯の修
行。

【久習行】密の修
行。

【不著者】顯。

【不著者】密。

字の相を知りあり、名字の相を知らざるあり。譬へば軍の密號を立つるに知る者あり知らざる者あるが如し。復二種あり、初習行あり、久習行あり、著者あり、不著者あり、知他意あり、不知他意のものあり。言辭ありと雖もその奇言を不知名字相初習行著者不知他意のもの爲の故に衆生無しと説き、知名字相久習行不著者不知他意のもの爲の故に衆生ありといふ。喩して曰はく、初重の二論は常の談と同じ。次の二論に八種の人あり、不知名字相等の四人の爲には眞諦の中には佛なし衆生なしと説き、後の四人の爲の故に眞諦の中に佛あり衆生ありと論く。審にこれを思へ。所謂密號名字相等の義は、眞言教の中に分明にこれを説けり、故に『善觀場經』に云はく、文殊佛に白して言さく、「世尊幾所の名號を以てか世界に於て轉じたまふ。佛の言はく、「所謂帝釋と名け、梵王と名け、大自在と名け、自然と名け、地と名け、寂靜と名け、涅槃と名け、天と名け、阿蘇羅と名け、空と名け、野と名け、義と名け、不實と名け、三摩地と名け、悲者と名け、慈と名け、水天と名け、靈と名け、藥叉と名け、仙と名け、三界主と名け、光と名け、火と名け、鬼主と名け、有と名け、不有と名け、分別と名け、無分別と名け、蘇嚧盧と名け、金剛と名け、常と名け、無常と名け、眞言と名け、大眞言と名け、海と名け、大海と名け、日と名け、月と名け、雲と名け、大雲と名け、人主と名け、大人主と名け、龍象と名け、阿羅漢審類憍と名け、非異と名け、非不異と名け、命と名け、非命と名け、山と名け、大山と名け、不滅と名け、不生と名け、眞如と名け、眞如性と名け、實際と名け、實際性と名け、

【不知他意】 密。是は菩提場所説一字頂輪王經。不空譯。今は第三卷の文なり。

【阿摩羅】 (Amala) 卽ち阿修羅にして、非天と譯す。

【三摩地】 (Samadhi) 卽ち十持と譯す。

【蘇彌盧】 (Sūmire) 須彌山卽ち妙高山なり。

【如來は功用なし】 如來は無分別性空なるが故に何等の功用なし。

【龍樹の云云】 以下は言語心量の離不離について顯密の差別を明かす。

【契經異説】 楞伽經及三昧經等を指す。

【言文】 能く名によりてその體を顯はすこと。

【文語】 文字に依りその體を表すること。

法界と名け、實と名け、無二と名け、有相と名く。文殊師利、我この世界に於て、五阿僧祇百千の名號を成就し、諸の衆生を調伏し、成就せり。如來は功用なけれども、無量種の眞色力事の相をもて轉じたまふ。龍樹の『釋大衍論』に云はく、「言説に五種あり、名字に二種あり、心量に十種あり。契經異説の故に、論じて曰はく、言説に五あり。云何が五とする。一には相言説、二には夢言説、三には妄執言説、四には無始言説、五には如義言説なり。」「楞伽契經」の中にかくの如きの説を作す。大慧、相言説とは所謂色等の諸相に執著して而も生ず。大慧、夢言説とは本受用虚妄の境界を念ず、境界に依て夢る、覺め已て虚妄の境界に依て不實なりと知て而も生ず。大慧、執著言説とは本所聞所作の業を念じて而も生ず。大慧、無始言説とは、無始より來た戲論に執著する煩惱の種子動習して而も生ず。」「三昧契經」の中に是の如きの説を作す。舍利弗の言さく、一切の萬法は皆悉く言文なり、言文の相は卽ち義とするにあらず、如實の義は言説すべからず、今は如來云何が説法したまふ。佛の言はく、我が説法とは汝衆生、生にあつて説くを以ての故に不可説と説く、この故にこれを説く、我が所説とは、義語にして文にあらず、衆生の説とは文語にして義にあらず、義語にあらずるものは、皆悉く空無なり、空無の言は義を言ふことなし、義を言はざるものは皆これ妄語なり、如義語とは實空にして不空なり、空實にして不實なり、二相を離れて中間にも中らず不中の法は三相を離れたり、處所を見ず如如如説の故に、かくの如きの五が中に、前の四の言説は虚妄の説なるが故に眞を談すること能

【義理】 法身の如

【二相】 空と不空

【三用】 空、實、

【處所】 空實二邊

【眼識心等六六】

【末那善心】 六識

【總合義なり】 然

【下三識は統一の總

【合識にして智信意

【十一に到りては心

【即眞如の識とな

る。

【】

はず、後の一の言説は如實の説なるが故に眞理を談ずることを得、馬鳴菩薩は前の四に據るが故に、かくの如きの説を作して離言説相といふ。心量に十あり。云何が十と爲す。一には眼識心、二には耳識心、三には鼻識心、四には舌識心、五には心識心、六には意識心、七には末那識心、八には阿梨耶識心、九には多一識心、十には一一識心なり。是の如きの十が中に初めの九種の心は眞理を縁せず、後の一種の心の眞理を縁じて而も境界とすることを得。今前の九に據てかくの如きの説を作して離心縁相といふ。喩して曰はく、言語心量等の離不離の義はこの論に明に説けり。顯教の知者詳んじて迷を説け。金剛頂發菩提心論に云はく、「諸佛菩薩昔因地に在して、この心を發しして、勝義、行願、三摩地を成と爲す。乃し成佛に至るまで時として暫くも忘るることなし、惟し眞言法の中のみ即身成佛するが故に、これ三摩地の法を説く、諸教の中に於て闕して書せず。」喩して曰はく、この論は龍樹大聖の所造、千部論の中の密藏肝心の論なり。この故に顯密二教の差別淺深及び成佛の遲速勝劣皆この中に説けり。謂く、諸教とは他受用身及び變化身等所説の法の諸の顯教なり。是説三摩地法とは自性法身の所説の祕密眞言三摩地門これなり。所謂金剛頂十萬頌の經等これなり。

辯顯密二教論卷上 終

辯顯密二教論卷下

沙門空海撰

【一】以下は六波羅蜜經の文を引證し此文に一一解釋を施し乍ら顯密二教の得益の淺深を説く。【法寶】諸佛の説き給ふ如來藏心なり。【客塵】客は眞如座は煩惱染汚なり。【常樂我淨】佛果證得に閑隨する四徳なり。【戒定智慧】戒は規律、定は禪定、智慧は佛智に等しき智慧なり。【三十七菩提分法】四念住、四正斷、四神足、五根、五力、七覺分、八聖道等にして清淨法身を得る爲に修する法。【素怛𩵱】經藏。【毘奈耶】律藏。【阿毘達磨】論藏。

【一】六波羅蜜經の第一に云はく、

法寶は自性恒に清淨なり、諸佛世尊是の如く説きたまふ

客塵煩惱に覆はるること、雲の能く日の光明を翳すが如し

無垢の法寶は衆徳を備へて、常樂我淨、悉く圓滿せり

法性の清淨なるをば云何が求めん。無分別智のみ而も能く證す

第一の法寶とは即ちこれ摩訶般若解脫法身なり。第二の法寶とは、謂く、戒定智慧の諸

の妙功德なり。所謂三十七菩提分法なり、乃至此法を修するを以て、而も能く彼清淨法

身を證す。第三の法寶とは、所謂過去無量の諸佛所説の正法と及び我が今の所説となり。

所謂八萬四千の諸の妙法續なり、乃至有縁の衆生を調伏し、純熟す。而も阿難陀等の

諸大弟子をして、一たび耳に聞き、皆悉く憶持せしむ。攝して五分となす。一には素怛

纒、二には毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門なり。この五

種の藏を以て有情を教化し、度すべき所に隨つて而も爲にこれを説く。若し彼有情、山林

に處し常に閑寂に居して靜慮を修せんと樂ふには、而も彼が爲に素怛纒藏を説く。若し彼

【般若波羅蜜多藏】
般若經

【四重】 犯姦、犯
盜、殺人、大妄語
の四なり。

【八重】 四重は男
僧にもなるも、尼
僧に於ては以高
僧の律に摩觸重
處、八事以重、覆
尼重處、隨罪重
を加ふる八重を科
すなり。

【五重】 犯門
地獄に墮する五重
罪即ち犯け、其
殺、破、淫、盜、身
血、破、淫、盜、身

【方等】 大乘
教を信ぜしむること

【二重】 雙重
して觀、信、信不
具足と云ふ本末或
佛の周を缺く無性
有情のこゝ

【悲氏】 羯勒菩薩
なり。

有情、威儀を習て正法を護持し、一味和合にして久住することを得しめんと樂ふには、而も彼が爲に毘奈耶藏を説く。若し彼有情、正法を説いて性相を分別し、循環研製して甚深を宣竟せんと樂ふには、而も彼が爲に阿毘達磨藏を説く。若し彼有情、大乗眞智の智慧を得て、我法執着の分別を離れんと樂ふには、而も彼が爲に般若波羅蜜多藏を説く。若し彼有情、契經開伏對法教若を受持すること能はず、或は彼有情諸の惡業の、四重、八重、五無間罪、誘方等經、一闍提等の種種の重罪を造れるを、誦滅することを得しめ、速疾に解脫し、眞淨慧すべきには、而も彼が爲に誦の隨念尼藏を説く。この五法は、譬へば乳薄生蘇然蘇、及び醍醐の如し。契經は乳の如し。開伏は蘇の如し。對法教は彼生蘇の如く、大乘般若猶は熱蘇の如し。總持門は譬へば醍醐の如し。醍醐の味は乳薄蘇の中に於て最も第一にして、能く諸病を除き、諸の有情をして身心安樂ならしむ。總持門は契經等の中に最も第一たり。能く重罪を除き、諸の衆生をして生死を解脫し、速に涅槃樂業の法身を證せしむ。復次に悲氏、我が滅法の後に阿毘陀をして、所説の素怛纒藏を受持せしむべし。其の波羅蜜をして、所説の毘奈耶藏を受持せしめ、迦多衍那をもて所説の阿毘達磨藏を受持せしめ、曼殊室利菩薩をして、所説の大乗般若波羅蜜多を受持せしめ、其金剛手菩薩をして、所説の高深微妙の經の總持門を受持せしむべし。喩して曰はく、今この經文に依らば、佛五味を以て五藏に配當して、總持をば醍醐と稱し、四味をば四藏に譬へたまへり。眞且の人國等、醍醐を爭ひ盜んで各自宗に名く。若この經を聽みば則ち掩

【南大國】南印支(南天竺)なり。龍猛菩薩は此南天竺の鐵塔中より大目經及び金剛頂經の兩部大經を感得したりと云ふ。
 【大乘無上の法門】眞言秘密の法門。
 【楞伽經の第九云】初に密教の懸記を明し、次に法身說法の義を説く【法佛の報佛】法身如來が大悲の故に假りに報身の佛となるを言ふ。
 【自相同相】法身自受用の境界は他相にあらざるが故に自相なり、報佛の所説の法は是れ有爲無漏の共相の故に同相と云ふ。
 【三摩拔提】等至と譯す。初地より等至に至るまでの行位なり。
 【聖智】無分別智なり。

耳の智、割割を待たじ。『楞伽經』の第九に云はく、我が乘たる内證智は妄覺は、境界にあらず、如來滅世の後雜か持して我が爲に説かん。如來滅度の後未來に當に人あるべし。大慧、汝諦に聽け、人あつて我が法を持すべし。南大國の中に於て大徳の比丘あり、龍樹菩薩と名けん。能く有無の見を破して人の爲に我が乘たる大乘無上の法を説くべし。喩して曰はく、我が乘内證智と言ふはこれ則ち眞言秘密藏を示す、如來、明に記したまへり。若の如き人説通すべし。有智の人狐疑すべからず。『楞伽』の第二に又云はく、復次に大慧、法佛の報佛の説は一切の法の自相同相の故に。虚妄の體相に執着するを以て分別心動着するに因るが故に。大慧、これを分別虚妄の體相と名く。大慧、これは報佛說法の相と名く。大慧、法佛の説法とは心相應の體を離れたるが故に。内證、理行の境界なるが故に。大慧、これを法佛說法の相と名く。大慧、應化佛の所作、應佛の説は施滅忍精進禪定智慧の故に、陰界入解脫の故に。識想の差別の行を建立するが故に、諸の外道の無色三摩拔提の次第の相を説く。大慧、これを應佛の所作、應佛說法の相と名く。復次に大慧、法佛の説法とは縁を離れ、能觀所觀を離れたるが故に、所作の相、量の相を離れたるが故に、諸尋問、縁覺、外道の境界に非るが故に。又第八の卷に云はく、大慧、應化佛は化衆生の事を作すこと眞實相の説法に異なり、内所證の法、聖智の境界を説かず。喩して曰はく、今此經に依らば三身の説法に各分齊あり。應化佛は内證智の境界を説かざること明なり。唯一法身の佛のみ有つて、此内證智を説きたまふ。若し後の文を攪ば、斯理即ちこれを決すべし。『金

【金剛頂五秘密經云云】金剛頂五秘密經の文を引證して法身佛が自内證の境界を説き給ふの相を明かす。

【毘盧遮那佛云云】大日經所説の眞言法なり。

【大普賢金剛等】金剛頂經解説の眞言法なり。

【俱生我執の種子】人我、法執の執着を云ふ。

【金剛名號】灌頂の時に投花得佛する金剛稱號。

【大甚深不思議の法】法身の三密に云く、以下は法身内證の境界を説く文を示す。

【五智】大日如來の無量智を五つに分類したるものにして、即ち法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の五智なり。

【金剛頂五秘密經】に説かく、「若し顯教に於て修行するものは久しく三大無數劫を経て然して後に無上菩提を證成す。その中間に於て十進九退す。或は七地を證して所集の福德智慧を以て聲聞緣覺の道果に趣向して仍し無上菩提を證すること能はず。若し毘盧遮那佛自受用身所説の内證自覺聖智の法及び大普賢金剛薩埵他受用身の智に依らば則ち現生に於て曼荼羅、阿闍梨に遇達、曼荼羅に入ることを得て爲に羯磨を具足し、普賢三摩地を以て金剛薩埵を引入してその身中に入る。加持の威徳力に由るが故に須臾の頃に於て當に無量の三昧耶、無量の陀羅尼門を證すべし。不思議の法を以て能く弟子の俱生我執の種子を變易して時に應じて身中の一大阿僧祇劫の所集の福德智慧を集得しつれば則ち佛家に生在すと爲す。纔に曼荼羅を見るときは則ち金剛界の種子を種るて具に灌頂受戒の念を起すべし。

これより已後廣大甚深不思議の法を受得して二乘十地を超越す。喩して曰はく、顯教所談の言斷の境とは所謂法身毘盧遮那内證聖智の境界なり。若し『寶珠經』に依らば毘盧遮那はこれ理法身、眞如那耶は則ち智法身、釋迦をば化身と名く。然れば則ちこの金剛頂經所談の毘盧遮那佛自受用身所説の内證自覺聖智の法とは、これ則ち理智法身の境界なり。又『金剛頂經』に云はく、「金剛界遍照如來五智所成の四種法身を以て、本有金剛界金剛心殿の中に於て、自性所成の眷屬、乃至微細法身の秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛と與なり」等との如し云云。又云はく、「諸地の菩薩能く見ることあることなし、俱に覺知せず、云云。又一分別聖位經」に云はく、「自受用佛は心より無量の菩薩を流出す。皆同一性

【四種法身】自性法身、受用法身、變化法身、等流法身の四なり。是れ即ち大日如來の發現の方面を四分したるもの。
 【自受法樂】自ら説法して其を自ら聽聞して樂しむこと。
 【一】以下は分別聖位經の文を引いて三身説法の差別淺深、成佛の遲速勝劣を明かす。
 【眞言陀羅尼宗云】以下眞言宗の大意を明す。
 【海會の壇】曼荼羅なり。
 【五智三十七】大日如來の無量智を四分し、其を又各各四方面より分類して三十七とす。
 【不共】他に比類なきの意。
 【然も如來の變化身云云】以下は三身の説法得益の相を説く。
 【三乘の教法】四

なり、謂く、金剛の性なり、是の如きの諸佛菩薩は自受法樂の故に各自證の三密門を説きたまふ、云云。是の如き等は竝にこれ自性自用、理智法身の境なり。この法身等は自受法樂の故にこの内證智の境界を説きたまふ。彼楞伽の法身は内證智の境を説き、應化は説かずといふ文と冥に會へり。これ則ち顯教の絶離する所のところなり。若し有智の人纔に斯文を日ば雲霧忽に朗にして闕鑰自ら開けん。非底の鱗、速に巨海に泳ぎ、菩薩の翼、翰く寥廓に飛ばん。百年の生盲乍ちに乳の色を辨へ、萬劫の暗夜頓に日光を察げん。

【二】『金剛頂分別聖位經』に云はく、「眞言陀羅尼宗とは一切如來秘奧の教、自覺聖智修證の法門なり、亦これ一切如來の海會の壇に入て菩薩の職位を受け、三界を超過して佛の教勅を受ける三摩地門なり。この因縁を具すれば頓に功德廣大の智慧を集めて無上菩提に於て皆退轉せず、諸の天摩一切の煩惱及び諸の罪障を離れ念念に消融して佛の四種身を證す。謂く、自性身、受用身、變化身、等流身なり。五智三十七等の不共の佛の法門を満足す。これは宗の大然も如來の變化身は闍浮提摩竭陀國の菩提道場に於て等正覺を成ず。地前の菩薩、聲聞、緣覺、凡夫の爲に三乘の教法を説き、或は他意趣に依て説き、或は自意趣にして説きたまふ。種種の根器種種の方便をもて説の如く修行すれば人天の果報を得、或は三乘解脱の果を得、或は進み、或は退いて無上菩提に於て三無數大劫に修行し、勤苦して方に成佛することを得、王宮に生じ變樹に滅して身の舍利を遺す。塔を起て供養すれば人天勝妙の果報及び涅槃の因を感受す。これは略して釋迦如來の報身の毘盧遮那、色界頂第四

講、十二因緣六度の教法なり。即ち小乗と惟大乘とに相當す。

【雙輪】 雙輪雙輪なり。即ちクシナカキ族の邊の釋尊入滅の場所を指す。

【受用報身】 他受用報身なり。

【受用佛性】 色

【佛性】 皆自受用佛と同一の性を有するもの。

【如持の教勅】 未

【出世間】 世は

【五種】 五種の解

【如來内】 如來内

【十三昧】 本誓な

【三】 以下の文は眞言宗にては普通「不讀」として未

【河邊陀吒天宮】 實集せる毘盧空海法界の一切の諸佛、十地滿足の諸大菩薩證明とて身心を覺して、觀に無上菩提を證するに同ならず。此れは他受用身の自受用佛は心より無量の菩薩を流出す再同一性なり。謂く、金剛の性なり。遍照如來に對して灌頂の職位を受く。彼等の菩薩、各三密門を證いて、以て毘盧遮那及び一切如來に獻じて佛如持の教勅を請す。毘盧遮那佛の言ひたまはく、汝等將來に無量の世界に於て、最上乘者の爲に、現生に世出世間の悉地成就を得しむ。彼諸の菩薩、如來の勅を受け已て佛足を頂禮し、毘盧遮那佛を回繞し已て、各本方本位に遷つて五輪と爲て本誓本職を持せり。

若しは法、若しは聞、若しは輪廻に入りぬれば、能く有情の五趣輪廻の生死の業障を離し、五解脫の中、於て一佛より一佛に至るまで供養承事して皆無上菩提を獲得して決定の性を證せしむ。彌勒金剛の沮壞すべからざるが如し。此れ即ち毘盧遮那の衆衆集會なり。便ち現前本都婆塔となる。一一の菩薩、一一の金剛、各本三昧に住して自解脫に住す。諸大悲隨力に住して廣く有情を得す。若しは見、若しは聞、悉く三昧を證して功德智慧頓集成就す。此れは自性身自受用身の。喻して曰はく、眞經に明に三身の諸法の差別、淺深成佛の遲速勝劣を説けり。彼一楞伽の三身諸法の相と義合へり。顯學の智人皆法身說法せずと辨ふ。この義然らず。顯密二教の差別此の如し。審に察し、審に察せよ。

【三】 金剛頂一切瑜祇經に云はく、「一時薄伽梵金剛界遍照如來、此れは總句を以て、五智所成の四種法身を以て智、五には法界性智なり、即ちこれ五方の佛なり、次いで之の如く東南西北中に

灌頂の者には素直
すら許さざるもの
なり。されば高野
山の宥快師の鈔等
には此箇處の註釋
なし。

【薄伽梵】 能破者
と譯す。即ち佛な
り。

【大圓鏡智】 水性
の澄寂にして一切
の色相顯現するが
如きを云ふ。

【平等性智】 萬像
水に顯現して高下
なく平等なるが如
き智を云ふ。

【妙觀察智】 水中
に一切の色相差別
顯現するが如きを
云ふ。

【成所作智】 一切
の情非情の類水に
よりて滋長するが
如き智を云ふ。

【法界體性智】 其
水遍せざる所なき
が如き智を云ふ。

【不壞金剛】 身密
【光明心】 意密。

【中】 語密。

【十六大菩薩】 慈
銅愛慢の四菩薩よ

觀して之を知れ。四種法身とは、一には自性身、二には受用身、三には變化身、四には等流身なり。この四種身に毘盧の二義を具せり。毘盧は即ち自利、堅は即ち利他なり。深義は更に問へ。本有金剛界、體性智を明す。自在大三昧耶妙觀察智、自覺本初智。大菩提心普賢滿月智。不壞金剛光明心殿の中に於て、謂く不壞金剛とは慧に語尊の常住の身を歡ず、光明心とは心の覺邊の義なり。これはこれ三密なり。彼五邊百非を離れて、獨非中の中に住す。等覺于地も見聞す。此とは能はず、所謂法身自證の境界なり。亦これ成所有智なり。三密の業用皆これより生じて已上の五句は慧じて住所を明す、任意の名は即ち五佛の秘號妙徳なり、密意知るべし。自性所成の眷屬金剛子等の十六大菩薩及び四攝行天女使金剛内外の八供養金剛天女使と與なり。各各に本誓加持を以て自ら金剛月輪に住し、本三摩地輕轍を持せり。皆以て微細法身秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛なり。これ三根本自性法身の内、各五智の光明、峯杵に於て五億俱胝の微細の金剛を出現して、虚空法界眷屬智を明す。

【遍滿せり】 諸地の菩薩能く見ることあることなし。俱に覺知せず。熾然の光明自在の威力あり。これは三十七尊の根本の五智に各恆沙の性徳を具することと明す。若し次第につねに於て不壞の化身を以て有情を利樂して時として暫くも息むことなし。謂く三世とは三密を表す。化とは業用なり。言はく常に金剛の三密の業用を以て、阿闍佛の光明遍照の印。清淨て三世に互つて自他の有情をして妙法の樂を受けしむ。金剛自性の印。光明遍照の印。清淨不壞身の印。種種業用の印。方便加持の印。とを以て、有情を求度し徳なり。金剛乘を演じたまふ。説法の唯一の金剛智慧なり。能く煩惱を斷ず。利智の徳なり已上の九句は即ち四徳を具す。自受用の故に常恆に此甚深秘密心地普賢自性常住法身を以て、諸の菩薩を攝す。これは自性法身の自眷屬を攝することと明す。又唯此佛刹は、盡く金剛自性清淨を以て成ずる所の密嚴華嚴なり。謂く密とは金剛の三密なり。華とは開敷覺華なり。嚴とは種種の徳を具す。言はく恆沙の佛徳塵數の三密を以て身土を莊嚴する、これを

【約すれば出現の文あり】 若し本有に據らば俱時に是の如きの諸徳を圓滿す。常に三世

【謂く三世とは三密なり】 謂く三世とは三密なり。謂く三世とは三密なり。謂く三世とは三密なり。

【謂く三世とは三密なり】 謂く三世とは三密なり。謂く三世とは三密なり。

【謂く三世とは三密なり】 謂く三世とは三密なり。謂く三世とは三密なり。

自性法身の説法とせらるるなり。

【時】に彼菩薩云云以下は愛用身等三

身の説法を明かす故に今は此より上

を以て自性會とし以下を以て瑞相

の三身と見るべし【毘盧遮那佛云云】

以下は瑞相三身の中、變化法身の説法を明かす。

【又執金剛云云】以下は等流身説法の文なること弘法大師の註によつても明かなり。

【五】以下は大日經第六卷の百字果相應品の如來引證して大日如來勅作佛事の義を明かす中に於て初めに大日經を引證す。

【三昧耶】三密が各各平等なることを云ふ。

【隨順の法界】大日如來等流身の三昧なり。

【守護國界陀羅尼經云云】上に於て

勢知んぬべし。

【五】又云はく、「爾時に毘盧遮那世尊、執金剛祕密主に告げたまはく、若し大覺世尊の大智灌頂地に入りぬれば、自ら三三昧耶の句に住することをみる。祕密主、薄伽梵大智灌頂に入りぬれば、即ち陀羅尼形を以て佛事を示現す。爾時に大覺世尊隨つて一切の諸の衆生の前に住して佛事を施作し、三三昧耶の句を演説したまふ。佛の言はく、祕密主、我が語輪の境界を觀するに廣長にして遍く無量の世界に至る清淨門なり。その本性の如く隨順の法界を表示する門なり。一切衆生をして皆歡喜することを得しむ。亦今は釋迦牟尼世尊の無盡の虚空界に流遍して諸の刹土に於て佛事を勅作するが如し。此の文は大諸の世界に通じて佛事を作すこと亦釋迦の三身の如くなることを明す。『守護國界陀羅尼經』の第九に云はく、佛、祕密主に告げて言はく、善男子、此陀羅尼は毘盧遮那世尊、色究竟天に於て、諸の國王及汝等が爲に略して、此陀羅尼門を説くと。

【六】『智度論』の第九に云はく、佛に三種の身あり。一には法性身、二には父母生身、この法性身は十方虚空に満ちて無量無邊なり、色像端政にして相好莊嚴せり、無量の光明無量の音聲あり、聽法の衆も亦虚空に満ちり。これは衆も亦これ法性身にして生死常に種種の身、種種の名號を出し、種種の生處にして種種の方便をもて衆生を度す。常に一切を度して、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

て、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受く

大日經を引證し、次に此守護國界經の文を引證して、身說法の義を明す。【六】以下は初めには智度論第九の文を引證して、法の色相說法の義を明し、後には慈じて上來引證の論の意を註釋す。

【又云はく】智度論第九の文なり。

【又云はく】智度論第九の文なり。

【密迹金剛經】大寶積經第十の文。

【七】以下は諸教の中に秘密惣持の名号あることを問答決釋す。

【小教】四阿含等の小乘教典なり。

【外人の説】外道の説なり。

【一乘】法華華嚴等なり。三を簡ぶ聲聞、緣覺、菩薩の三を撰びす。

【總持】眞言陀羅尼は一切の總持の故に斯く云ふ。

るを度するものは是れ生身の佛なり。生身の佛は次第に說法すること人の法の如し。又云はく、法身の佛は常に光明を放つて常に說法す。而るを罪を以ての故に見ず。聞かざることを譬へば日出づれども盲者は見ず、南無地を撫へども聾者は聞かざるが如し。是の如きの法身は常に光明を放つて常に說法すれども、衆生、無量劫の罪垢厚重なること有て見ず、聞かざること明鏡淨水の面を照すときは見、垢翳不淨なるときは所見無きが如し。是の如く衆生の心清淨なる時は則ち佛を見、若し心不淨なるときは則ち佛を見ず。又云はく、「密迹金剛經」の中に説くが如し。佛に三密あり、身密、語密、意密なり。一切の諸の人は皆解らず、知らず。上來の經論等の文は、並にこれ顯密の差別法身說法の

【七】 問ふ、若し所説の如きは、法身内證智の境を説きたまふを名けて秘密と曰ひ、自外をば顯といふ。何が故にか釋尊所説の經等に秘密藏の名あるや、又彼尊の所説の陀羅尼門をば何れの藏にか攝するや。 答ふ、顯密の義重重無數なり。若し淺を以て深に望むれば、深は則ち秘密、淺略は則ち顯なり。所以に外道の經書にも亦秘密の名あり、如來の所説の中にも顯密重重なり、若し佛小教を説きたまふを以て外人の説に望むれば即ち深密の名あり、大を以て小に比すれば亦顯密あり。一乘は三を簡ふを以て秘の名を立つ。總持は多名に擇んで密號を得。法身の説は深奥なり、應化の教は淺略なり、所以に秘と名く。所謂秘密に且一義あり。一には衆生秘密、二には如來秘密なり。衆生は無明妄想を以て本性の眞覺を覆藏するが故に衆生自秘と曰ふ。應化の説法は機に返つて藥を施す言は虚からざ

るが故に、所以に他受用身は、内證を秘して其境を説かず。則ち等覺も希夷し、十地も離絶せり。これを如來祕密と名く。是の如く、祕の名重重無數なり。今祕密といつば、究竟最極法身の自境を以て祕藏と爲す。又應化所説の陀羅尼門は、これ同く祕藏と名くと雖も、然れども法身の説に比すれば權にして實ならず、祕に權實あり、應に隨つて攝すべき而し。

般若心經秘鍵 序并せたり

遍照金剛撰

【一】 文殊の利便は諸教を通つ、覺母の梵文は調御の師なり

（傳説の眞言を稱すとす、諸教を各處せる陀羅尼なり）

【二】 無邊の生死を何んが能く斷つ、唯摩訶と正思惟とのみあつてす

（眞言の三摩は仁讀らず、我れ今誦述す、莫悲を垂れたまへ）

【三】 夫の佛法道にあらず、心中にして即ち近し、眞如外にあらず、身を棄てて何んか

求めん、迷悟我に在れば、莫心すれば即ち到る、明暗他にあらざれば、信修すれば忽に證

す。哀れなるかな、哀れなるかな、長眠の子、苦しいかな痛いかな狂醉の人、痛狂は醉は

ざるを笑ひ、醉睡は覺者を嘲ける。曾て轉王の毒を誘らばすんば、何れの時にか大日の光

を見ん、暗暉の輕重、覺悟の遲速の著きに至つては、機根不同にして性欲即ち異なり。遂

んじて二教體を殊んじて手を金蓮の場に分ち、五乘鏡を並べて蹄を幻影の埒に跳がつ。

其解毒に請つて藥を得ること即ち別なり。慈父導子の方大綱此に在るか。

【四】 大般若波羅蜜多心經一といへば即ちこれ大般若菩薩の真心眞言三摩地法門なり。

文は一紙に缺けて行は則ち十四なり。謂ふべし、簡にして要なり、約にして深し。五藏

弘法大師が本書を製作したる因縁は、末文に載するが故に今は略す。即ち本書は般若心經をば密教の意に依つて譯せしものなり

【一】 以下四句は調御の師なり。

【二】 文殊所持の利便は諸教を斷するが故に何れを以て其表示とす。

【三】 覺母 般若菩薩に用ひし

【四】 眞言 眞言菩薩の三昧の門にして「チ」マンの眞言を指す

【五】 眞如 眞如任

【六】 我なり

【七】 以下の四句は多起序なり

【八】 眞言と譯す、佛念を除くこと

【九】 正思惟 正觀なり

【十】 般若の三摩地 般若

【十一】 般若の内の意なり

【十二】 以下は大綱

字中に於て初に大
 【二】法身の説
 法なる金剛新藏の
 金剛指す
 【金剛】金は金剛
 界、金は金剛
 界なり
 【四】以下は大意
 行は十四
 【五】波若の波若
 波若は、陀羅尼なり
 【七】律、戒、定、禪、般若
 の七宗のこと
 【觀在薩埵】觀白
 在菩薩
 【三】佛、道現未三
 世の諸佛
 【色空】色は事物、
 空は理なり
 【不生】諸法の不
 生不滅
 【諸法】諸法は一
 識の所現にして心
 外無別法と云ふこ
 と
 【魔智】能證の智
 と所達の境とを亡
 ずるなり

の般若は一句に陳んで飽かず、七宗の行果は一行に觀んで足らず。觀在薩埵は則ち諸乘の
 行人を擧げ、度苦涅槃は則ち諸教の得樂を盡ぐ。五蘊は横に迷境を指し、三佛は豎に當心
 を示す。色空と言へば則ち普賢、願を圓融の義に解き、不生と談すれば則ち文殊、願を絶戲
 の觀に成る。之を色空に離れば簡持手を拍ち、之を境智に泯すれば、歸一心を快くす。
 十二因緣は生滅を顯角に指し、四諦の法輪は苦空を羊車に類かず。況んや復氣貫の二字は
 諸處の行果を吞み、三寶の兩言は、顯密の法教を孕めり。一一の聲字は應劫の法にも響き
 ず、一一の名實は摩滴の仰も極めたまふことなし。是故に誦持講供すれば、則ち其苦與樂
 し、修習出離すれば、則ち得道起通す。甚深の稱誡に宜しく然るべし。余童を教ふるの次
 いでに聊か鈔要を擧つて、彼五分を釋す。釋家多しと雖も、未だ此函を釣らず、翻譯の同
 異、顯密の差別、並に後に釋するが如し。

【五】 或人問うて云はく、「般若は第一未了の教なり、何ぞ能く三顯の經を吞まん。」如
 來の説法は一字に五乘の義を含み、一念に三藏の法を説く。何に況んや一部一品に何ぞ置し
 く何ぞ無からん。龜卦爻者萬象を含んで盡ることなく、帝淵聲論諸義を吞んで窮らず。一難
 者の曰はく、「若し然らば前來の法匠何ぞ斯言を吐かざる。答ふ、「聖人の藥を投ぐることに機
 の深淺に隨ひ、賢者の黙然は時を待ち人を待つ。吾未だ知らず、蓋し言ふべきを言はざるか、
 言ふまじければ言はざるか、言ふまじきを之を言へらん。失智人斷りたまはまくのみ。」
 【六】 佛說摩訶般若波羅蜜多心經とは、此題額に就いて二つの別あり。梵漢別なるが故

【苦空】苦性無常無我の四

【羊車】第一、羊車、牛車、鹿車を指す

【五】以下は大意序のうち、善妙高著なり。

【帝釋釋論】帝釋天所造の聲論は一言中に多言を藏すること因陀羅摩訶の如き故に帝釋と云ふ。

【一〇】以下は正しく正宗文にして、先づ題義を釋す。

【一〇】印度のこと

【ボタハシヤ等】ボタハシヤ、ハシヤ(鹿)マヒ(大)ハラシヤ(二慧)ハラミタ(到彼處)カマダ(心)ワタラン(經)

【貫線攝持】新詮の義理を貫き、所化の衆生を攝持して三途に墮せしめざることを以て經となす。

【法性の深號】一

【法性の深號】一の文字に字相字義あり、字相をば

に、今佛經の字相若波羅蜜多心經といへば胡漢雜へ擧げたり。諸心經の三字は漢名なり、餘の九字は胡漢なり。若し具なる梵名ならば互にハシヤマヒハラシヤミタカマダワタラン(因)有をそめんと曰ふべし。初の二字は、開滿覺者の名。次の二字は、密藏を開悟し、甘露を施すの稱なり。次の二字は、大勝勝に就いて義を立つ。次の二字は、定慧に約して名を樹つ。次の三つは、所作已辯に就いて號と爲す。次の二つは、處中に據つて義を表す。次の二つは、貫線攝持等を以て字を顯す。若し經の義を以て説かば行人法喻を具す。斯れ則ち大般若波羅蜜多心經の名なり。即ち是れ人なり。此菩薩に法曼荼羅眞言三摩地門を具す。一一の字は則ち法なり。此一一の名は、普世間の淺名を以て、法性の深號を表す。即ち是れ喻なり。此三摩地門は、佛能峰山に在して、梵子等の爲に之を説きたまへり。此經に數多の翻譯あり。第一に羅什三藏の譯、今の所説の本これなり。次に唐の遍覺三藏の翻には、題に佛說摩訶の四字なし、五藏の下に、等の字を加へ、遮羅の下に、一切の字を除く、陀羅尼の後に、功能無し。次に大因の義譯三藏の本には、題に摩訶の字を省き、眞言の後に、功能を加へたり。又法月及び般若兩三藏の翻には、並に序分流通あり。又『陀羅尼集經』の第三の卷に、此眞言法を説けり。經の題、羅什と同じ。般若心と言へば、此菩薩に身心等の陀羅尼有り。是經の眞言は、即ち大心呪なり。此心眞言に依て、般若心の名を得。或が云はく、「大般若經の心を略出するが故に心と名く、是れ別會の説にあらず」と云云。所謂龍に蛇の鱗あるが如し。

世間の淺名、字義をば法性の深遠となす。

【鷲峯山】 即迦摩羅陀國王舍城附近

【羅什三藏】 姚秦の鳩摩羅什のこと

【遍覺三藏】 支那三藏のこと

【法月三藏】 東印度の人、法勝、法相と云ふ

【般若】 北天竺の梵迦毘闍耶の人

【或が云はく】 法相の慈恩、華嚴の香象等を指す

【七】 以下正しく經文に就て五分の釋ある事を明す

【第一の入法六六】 以下五分のうち、第一の入法總通分を明す

【入法總通】 能く人材によつて修する所の法門の意

【因行證入】 因は因種、行は行業、證は證菩提、入は入涅槃、時、時分

【三生】 雜行者が經する所の時、即

【七】 此經に總じて五分あり。第一に入法總通分、「觀自在」といふより「度一切苦厄」に至るまで是れなり。第二に分別諸乘分、「色不異空」といふより「無所得故」に至るまで是れなり。第三に行人得益分、「菩提薩埵」といふより「三藐三菩提」に至るまで是れなり。眞

第四に總歸持明分、「故知般若」といふより「眞實不虛」に至るまで是れなり。第五に秘藏言分、「不可說不可說」といふより「般若」に至るまで是れなり。第一の入法總通分に、五つあり、因行證入時これなり。觀自在と言へば能行の人即ち此人は本覺の菩提を因と爲す、

深般若に能所觀の法即ち是れ行なり、照空は則ち能證の智、度苦は則ち所得の果、果は即ち入なり。彼教に依る人の智無量なり。智の差別に依つて時亦多し、三生、三劫、六十百

妄執の差別これを時と名く。頌に曰はく、觀人智慧を修して、深く五衆の空を照らす

歷劫修念の者は、煩を離れて一心に通ず

第二の分別諸乘分に亦五つあり。建絶相二一是れなり

初めに建といへば所謂建立如來の三摩地門是れなり。「色不異空」といふより「亦復如是」に至るまで是れなり。建立如來とは即ち普賢菩薩の威號なり。普賢の圓因は圓融の三法を以て宗と爲す。故に以て之に名く。又是れ一切如來菩提心行願の身なり。頌に曰はく、

色空本より不二なり、事理元より來た同なり

無礙に三種を融ず、金水の喻其宗なり

具聞、解行、證
果海なる。

【六十】六十劫。

【百】百劫、此縁
修修の功なり

【五人】蓋自在菩薩

【五華】五蓮のこと

【一】煩悩のこと

【一心】定慧理智
の一心なり。

【第二】の分別諸乘
分六云

【分別諸乗とは諸法
を分別して絶

相を立する法門
を絶するなり。

【建、絶、相、二、二】
これは大小乗を五

分す。即ち普賢、
文殊、彌勒、二乘、

總音なり。

【金水】金は金獅
子の喙。水とは水

波の龍、共に華嚴
宗の法門に當る

【八不】八迷を斷
じて現はされたる

不生、不滅、不斷、
不常、不一、不異、

不來不來の八不中

二に絶といへば所謂無戲論如來の三摩地門これなり。是は諸法空相といふより『不增不減』に至るまでこれなり。無戲論如來と言へば即ち文殊菩薩の密號なり。文殊の利劍は能く八不を揮つて彼妄執の心を絶つ、是故に以て名く。頌に曰はく、

八不に諸教を絶つ、文殊はこれ彼人なり
觀空畢竟の理、並用最も高貴なり

三つに相といへば所謂摩訶多羅地薩担轉の三摩地門これなり。是故空中無色といふより『無意識界』に至るまでこれなり。大慈の味は、真樂を以て宗と爲し、因果を示して誠と爲す。相性別論し、唯識境を絶す、心ただ此に在りや。頌に曰はく、

一我何れの時にか斷つ、三教に法身を證す
阿訶は是の識性なり、幻影は即ち名實なり

四つに二といへば唯蘊無我拔萃因種これなり。これ即ち二乘の三摩地門なり『無無明』といふより『無老死盡』に至るまで、即ち是れ因縁の三昧なり。頌に曰はく、

風華に因縁を知る、輪廻幾くの年にか覺る
露花に種子を除く、羊鹿の號相連れり

『無書集滅道』此れ是一句五字は、即ち依體得道の三昧なり。頌に曰はく、
白骨に我何んか有る、青瘀に人木より無し

吾師はこれ四念なり、羅漢亦何ぞ處まん

道なり。

【獨空】眞理は絶對にして不待空の故に斯く云ふ。

【義用】物理の法體妙相の用なり。

【摩訶衍】摩訶(大)悔多羅(慈氏)智地(覺)薩

相(有情)。

【大慈三昧】彌勒の衆生九億の三昧

【相性】出は有爲、性は無爲なり。

【境を離す】心外無別法のこと。

【阿陀那】阿陀那と云ふ。即ち第八識。

【唯眞獨我】五蘊法のみにて實我の實なきこと。

【拔業田】煩惱を抜き十二因縁の種子を植へつける

【因縁傳】縁覺のこと。

【羊窟】犍闍と縁繩を以て羊車と鹿車に喩ふ。

【依聲得道】如來の法言を聞き聲聞道の果を得ること

【毒瘡】焦枯せる

五つに一といへば阿哩也。路積帝冑地薩相。薩の三摩地門なり。『無智』といふより『無所得故』に至るまで是れなり。此得自性清淨。如來は、一道清淨妙蓮不染を以て衆生に開示して、其苦厄を抜く。智は能達を擧げ、得は所證に名く。既に理智を泯すれば強ちに一の名を以てす。法華涅槃等の攝末歸本の教、唯此十字に含めり、諸派の差別、智者之を察せよ。頌に曰はく、

蓮を觀じて自淨を知り、菓を見て心徳を覺る

一道に能所を泯すれば、三車即ち歸默す

【八】第三の行人得益分に二つあり。人法是れなり。初の人に七つあり。前の六つ後の一つなり。乘の差別に隨つて薩埵に異なるが故に、又薩埵に四つあり、愚識金智これなり。

次に又法に四つあり。謂く、四行證入なり。般若は即ち能因能行、無礙離障は即ち入涅槃、能證の覺智は即ち證果なり。文の如く思智せよ。頌に曰はく、

行人の數は是れ七つ、重二彼法なり

圓寂と菩提と正依何事か乏しからん

【九】第四の總歸持明分に又三つあり。名體用なり。四種の呪明は名を擧げ、眞實不

虚は體を指し、能除諸苦は用を顯はす、名を擧ぐる中に何れの『是大神呪』は、聲聞

の眞言。二は緣覺の眞言。三は大乗の眞言。四は祕藏の眞言なり。若し通の義を以ていは

ば、一一の眞言に皆四名を具す。略して一隅を示す。圓智の人三自歸一せよ。頌に曰はく、

【一】を字と云ふ。
 【二】最後に龍藏眞言を明す。
 【法如】大日法身の如理を云ふ。
 【會初】三界が客舎の如しと智解するを云ふ。
 【本居】本來具足のこと。
 【一】以下問答釋古への三。
 【二】古への三。羅什、玄奘等を指す。
 【諸の疏家】慈恩香象等を諸師を指す。
 【多名句】密教以外の經典を指す。
 【無畏】善無畏三藏。
 【廣智】眞言宗付法の第六祖。
 【三】以下流通分【翳眼の衆生】煩惱に覆はるる凡夫【曼儒般若】文殊の智慧と般若の空觀なり。
 【紛】煩悩。
 【甘露】般若心經を指す。
 【三】當書製作の因縁を説く。

り。一「醫王の目には途に觸れて皆藥なり、解寶の人は磁石を寶と見る、知ると知らざると何ぞ誰か罪過ぞ。又此尊の眞言儀軌觀法は、佛一金剛頂」の中に説きたまへり。此れ秘が中の極秘なり。應化の釋迦は給孤園に在して、菩薩天人の爲に畫像著法眞言手印等を説きたまふ、亦これ秘密なり。一「陀羅尼集經」の第三の卷これなり。顯密は人に在り、聲字は即ち非なり。然も猶顯が中の秘、秘が中の極秘なり、淺深重重ならまくのみ。

【二】我秘密眞言の義に依つて、略して心經五分の文を讀す。

一字一文法界に遍じ、無終無始にして我が心分なり

翳眼の衆生は盲ひて見えす、曼儒般若は能く紛を解く

斯甘露を灑いで迷者を霑す、同く無明を斷じて魔軍を破せん

般若心經秘鍵 終

【一】時に弘仁九年の春、天下大疫す。爰に帝皇自ら黄金を筆端に染め、紺紙を爪掌に握つて般若心經一卷を書寫し奉りたまふ。予講讀の選に飽つて、經百の宗を續る。未だ結願の詞を吐かざるに蘇生の族途に在む。夜夢じて日光輝輝たり。これ現身が波徳に非ず、金輪御信力の爲す所なり。但し神舎に詣せん輩、この秘鍵を誦し奉るべし。昔予鷲峯說法の筵に陪つて親り是深文を聞く、豈に其義に達せざらんや。

入唐沙門空海上表

金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論

亦是瑜伽修持教門說菩提心觀行修持義と名く

大寶善寺の三藏沙門大僧官不空法師奉けて譯す

龍 猛 菩 薩 造

【一】高書一卷、龍猛菩薩の作、不空三藏の譯、智證大師は不空三藏の著とす。其内容は密教の教旨により菩提心を求むんとするもの心符を説きたるものにして、初めには菩提心の大意を述べ、然る後勝義、行儀、三摩地を次第に説く。す。【二】(一)菩提心は、法華の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三】(二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四】(三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五】(四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六】(五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七】(六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八】(七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九】(八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十】(九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十一】(十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十二】(十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十三】(十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十四】(十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十五】(十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十六】(十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十七】(十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十八】(十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【十九】(十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十】(十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十一】(二十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十二】(二十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十三】(二十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十四】(二十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十五】(二十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十六】(二十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十七】(二十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十八】(二十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【二十九】(二十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十】(二十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十一】(三十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十二】(三十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十三】(三十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十四】(三十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十五】(三十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十六】(三十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十七】(三十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十八】(三十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【三十九】(三十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十】(三十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十一】(四十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十二】(四十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十三】(四十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十四】(四十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十五】(四十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十六】(四十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十七】(四十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十八】(四十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【四十九】(四十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十】(四十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十一】(五十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十二】(五十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十三】(五十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十四】(五十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十五】(五十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十六】(五十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十七】(五十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十八】(五十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【五十九】(五十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十】(五十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十一】(六十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十二】(六十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十三】(六十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十四】(六十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十五】(六十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十六】(六十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十七】(六十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十八】(六十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【六十九】(六十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十】(六十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十一】(七十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十二】(七十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十三】(七十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十四】(七十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十五】(七十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十六】(七十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十七】(七十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十八】(七十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【七十九】(七十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十】(七十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十一】(八十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十二】(八十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十三】(八十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十四】(八十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十五】(八十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十六】(八十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十七】(八十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十八】(八十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【八十九】(八十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十】(八十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十一】(九十)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十二】(九十一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十三】(九十二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十四】(九十三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十五】(九十四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十六】(九十五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十七】(九十六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十八】(九十七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【九十九】(九十八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百】(九十九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇一】(一百)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇二】(一百〇一)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇三】(一百〇二)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇四】(一百〇三)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇五】(一百〇四)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇六】(一百〇五)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇七】(一百〇六)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇八】(一百〇七)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百〇九】(一百〇八)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百一〇】(一百〇九)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。【一百一〇】(一百一〇)菩提心の第一義、佛性、百千の初時、心空の波、心符に生ずる。

【一】大阿闍梨の云ひたまはく、若し上根上智の人育つて、外道二乘の法を樂はず、大度量有つて功取にして感なからんもの、宜しく修業を修すべし。まさにかくの如きの心を發すべし。我今阿耨多羅三藐三菩提を志求して、離果を求めじと誓心決定するが故に、魔宮害動し、十方の諸佛菩薩悉く證知したまふ。常に人天に在つて勝快樂を受け、所生の處に懷持して忘れず。若し瑜伽の中の諸菩薩の身を成さんと願ふものを亦發菩提心と名く。何んとならば、次いでたる諸尊皆大毘盧遮那佛身に同なり。人の名官を食するものは、名官を求むる心を發して、名官を理むる行を修す。若し財寶を食するものは、財寶を求むる心を發して、財寶を經營する行を作すが如し。凡そ人の善と惡とを爲さんと欲するには皆先づ其心を標して、而して後に其志を成す。所以に菩提を求むる者は、菩提心を發して菩提の行を修す。

【阿耨多羅三藐三菩提】無上正等正覺と譯す。
【魔宮震動】發菩提心の爲に魔の族怖畏すること。
【瑜伽】(一)こと。相應と譯す。今は兩部曼荼羅の諸尊なり。

【發菩提心】大日を成ぜんとする菩提心(心王)と諸尊を成ぜんとする菩提心(心數)となり。
【一】以下は菩提心の行相を明す。
【二】菩提心の行相の内、初に行願を釋す。

【眞如智慧】衆生の心中には理と行との佛性あり。即ち眞如は理佛性に當り、智慧は行佛性に當る。
【一切智】煩悩を斷ずる時に顯はるる始覺智なり。
【自然智】有情が本來具足する自然

【二】既に是の如きの心を發し已つて、須く菩提心の行相を知るべし。其行相とは三門を以て分別す。諸佛菩薩昔因地に在して、この心を發し已つて勝義行願三摩地を成ず。乃し成佛に至る迄、時として暫も忘ることなし。惟し眞言法の中にのみ、即身成佛するが故に是れ三摩地の法を説く、諸教の中に於て闕して書るさず。一には行願、二には勝義、三には三摩地なり。

【三】初に行願とは、爲く、修習の人常に是の如きの心を懷くべし。「我當に無餘の有情界を利益し安樂すべし」と。十方の含識を觀すること猶し己身の如し。言ふ所の利益とは、爲く、一切有情を勸發して悉く無上菩提に安住せしむ。終に二乘の法を以て得度せしめず。今眞言行人應に知るべし。一切有情は皆如來藏の性を含じて皆無上菩提に安住するに堪任せり。是故に二乘の法を以て得度せしめず。故に華嚴經に云はく、一衆生として眞如智慧を具足せざるは無し。但し妄想顛倒業者を以て證得せず。若し妄想を離んぬれば、一切智、自然智、無礙智則ち現前することを得。言ふ所の安樂とは、謂く、行人既に一切衆生畢竟成佛すと知るが故に敢て輕慢せず。又大悲門の中に於て、尤も宜しく拯救すべし、衆生の願に隨つて之を給付せよ。乃至身命をも吝惜せず、其をして安存せしめ、悅樂せしめよ。既に親近し已んぬれば、師の言を信任せん。其相親むに因んで亦教導すべし。衆生愚

【四】二に勝義とは、一切の法を自性無しと觀す。云何が自性無き、謂く、凡夫は名聞利養

【無礙智】本覺。覺即ち本覺智。始覺の昧不合一して障礙せず不二一體なるの智なり。

【四】以下は勝義の菩提心を釋す。

【一切の法】以下此勝義菩提心を明すに二枝の釋あり初に其行相を示す。

【自性】本性のこと。

【三毒】貪瞋癡。

【五慾】色聲香味觸の五境に對して起す煩惱。

【十二因緣】苦集滅道行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二を云ふ。

【四大】地水火風。

【五陰】色受想行識。

【定性】必ず成佛すべき佛性あるもの。

【廻心向大】小より大に、淺より深りに心を向上せしむること。

生の具に執着して務むに安身を以てし、恚に三毒五欲を行はず、眞言行人誠に厭患すべし、誠に棄捨すべし。又諸の外道等は具身命を戀んで或は助くるに藥物を以てして仙宮の住壽を得、或は復天に生ずるを究竟と以爲へり。眞言行人彼等を觀すべし、業力若し盡きぬれば、未だ三界を離れず、煩惱尙存し、宿殃未だ殄びず、惡念發起す。彼時に當つて、苦海に沈淪して出離すべきこと難し。當に知るべし、外道の法は亦々夢陽焰に同じ、又二乘の人聲聞は四諦の法を執し、緣覺は十二因緣を執す。四大五陰畢竟斷滅すと知つて深く厭離を起して衆生執を破して、本法を勤修して其果を刺證す、本涅槃に趣くを究竟と已爲へり。眞言行者當に觀すべし。二乘の人は人執を破すと雖も猶し法執あり。但し意識を淨めて、其他を知らず、久久に果位を成じ、灰身滅智を以て其涅槃に趣くこと大虛空の湛然常寂なるが如し。定性有るものは、發生すべきこと難し。要らず劫限等の滿を待つて方に乃ち發生す。若し不定性のものは劫限を論ずること無し、緣に遇へば即ち廻心向大す。化城より起つて三界を超えたりと以爲へり。謂く、宿佛を信せしが故に乃ち諸佛菩薩の如持力を蒙つて而も方便を以て遂に大心を發す、乃し初め十信より下遍く諸位を経て三無數劫を経、難行苦行して然して成佛することを得。既に知んぬ、聲聞緣覺は智慧狭劣なり、亦樂ふべからず。又衆生有て大乘の心を發して菩薩の行を行す、諸の法門に於て遍修せざること無し。復三阿僧祇劫を経て、六度萬行を修し、皆悉く具足して然して佛果を證す。久遠にして而して成ずることは、斯れ所習の法教致むね次第あるに由てなり。

【十信】 佛果修行の階梯なり。

【三無量劫】 三大阿僧祇のことにし

て十信三賢は第一劫初地より七地ま

ては第二劫、第八地より十地までは

第三これだけを經て成佛す。

【又深く一切法云云】 勝義著提心の旨陳の釋段なり。

【言より用を起す】 眞如法身の體より報應二身の用を起すを云ふ。

【勝義の菩提心】 此心は諸法無相の空觀を起すを以て其行相とす。

【當に知るべし云云】 勝義、行願二種の菩提心を總釋す。

【心體自如】 諸法本不生の道理を知らば能觀の心體も自然に本不生の義あらはる。

【最勝の心】 信解清淨心。即ち勝義行願の菩提心なり。

今眞言行人前の如く觀じ已るべし。復無餘の衆生界の一切衆生を、利益し安樂する心を發すもの、大悲決定するを以て、永く外道二乘の境界を超ゆ。復瑜伽勝上の法を修する人は、能く凡より佛位に入るものなり。亦十地の菩薩の境界を超ゆ。又深く一切法は自性無しと知る。云何が自性無きや、前には相説を以てし、今は旨陳を以てす。夫れ迷途の法は妄想より生ず、乃至展轉して無量無邊の煩惱を成じて、六趣に輪廻す。若し覺悟し已んぬれば妄想止除して種種の法滅す、故に自性無し。復次に諸佛の慈悲は眞より用を起して衆生を救攝したまふ。病に應じて藥を與へ、諸の法門を施して、其煩惱に隨つて迷津を對治す。筏に遇うて彼岸に達しぬれば法已に捨つべし、自性無きが故に「大毘盧遮那成佛經」に云ふが如し。諸法無相なり、爲く、虚空の相なりと。是觀を作し已るを勝義の菩提心と名く。當に知るべし、一切の法は空なり、已に法の本無生を悟んぬれば、心體自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失無からしむ。妄心若し起らば、知つて隨ふこと勿れ、妄若し息む時は心源空寂なり。萬德斯に具し妙用無窮なり、所以に十方の諸佛勝義行願を以て戒と爲す。但し此心を具する者能く法輪を轉じて自他俱に利す。華嚴經に云ふが如し。悲を先として慧を主と爲し、方便共に相應し信解清淨の心、如來無量の力あり無礙智現前し、自悟にして他に由らず、具足して如來に同じて、此最勝の心を發す。佛子始めて是の如きの妙寶の心を發生すれば、則ち凡夫の位を超えて佛の所行の處に入り、如來家に生在し、種族に瑕玷無く佛と共に平等なり、決んで無上覺を成すべし。纒に

【初地】 歡喜地。位下地の初地

【南無純陀身】 釋尊入滅に際し最後供養を捧げし番

【我】 人法二執を我を離れたる故に云ふ。又眞我とは佛性に於ては常樂我淨の四徳ある故に

【五】 以下は三摩地の菩提心を釋す此菩提は普通不讀として未灌頂の人は讀まざることを

【法】 自然法性

【大菩提心】 日月輪の如き菩提心なり

【五智の中】 五智の中法體體性智に當る

【無覺了】 本有の

是の如きの心を生ずれば即ち初地に入ることを得、心樂動すべからざること譬へば大山王の如し。又『華嚴經』に云ふに唯せば初地より乃至十地に至るまで、地位の中に於て皆大覺を以て主と爲す。無量壽觀經に云ふが如し。佛心とは大慈悲是なり。又『涅槃經』に云はく、南無純陀身は人身なりと雖も心は佛心に同じ。又云はく「世間を憐愍したまふ。大醫王の身及び智慧俱に寂靜なり。無我の法の中に眞我あり。是故に無上尊を敬禮す。我心畢竟二つ別なること無し。是の如きの二心は先心を難しとす。自ら未だ度を得ず。先づ他を度す。是故に我初發心を離す。初發心に人天の師と爲て、聲聞及縁覺に勝り出せり。是の如きの發心は三摩地を過えたり。この故に最無上と名くることを得」。大毘盧遮那經に云ふが如し。菩提を因と爲し大悲を體と爲し、方便を究竟と爲す。

【五】 第三に三摩地といふは、眞言行人是の如く已つて、云何が能く無上菩提を證する。當に知るべし、法門に普賢大菩提心に住すべし。一切衆生は本有の薩埵なれども、貪瞋癡の煩惱の爲に離せらるるが故に、諸佛の大悲善巧智を以て、此甚深秘密輪を説いて、修行者をして内心の中に於て、日月輪を觀せしむ。此觀を作すに由つて本心を照見するに、湛然として清淨なること猶し滿月の光の虚空に遍じて分別する所無きが如し。亦是無覺了と名け、亦是淨法界と名け、亦是實相般若波羅蜜海と名く、能く種種無量の珍寶三摩地を含すること、猶し滿月の潔白分明なるが如し。何んとなれば、爲く、一切有情は悉く普賢の心を含せり、我自心を見るに、形月輪の如し。何が故にか月輪を以て喻へ

菩提心。【淨法界】本有の菩提心は其體清淨となる故に云ふ淨は即ち性の意なり【實相般若】眞如の理を云ふ。【二十六分】月は晦日に於ては日月同所なるも後一日毎に光明を加へて十五日に至る。されば月光全くなきに十五分(日)を加へて十六分となる

【十六の義】内空、外空、空空、大空、勝義空、畢竟空、無爲空、畢竟空、無際空、無變易空、本性空、自相空、一切法空、無性空、無性的自性空、無性的自性空の十六の義なり。

發菩提心論

と爲るとならば爲く、滿月圓明の體は則ち菩提心と相類せり。凡そ月輪に一十六分有り、瑜伽の中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで十六大菩薩者有るに喩ふ。三十七尊の中に於て五方の佛位に各一智を表す。東方の阿闍佛は大圓鏡智を成ずるに由つて亦是金剛智と名く。南方の寶生佛は平等性智を成ずるに由つて亦是灌頂智と名く。西方の阿彌陀佛は妙觀察智を成ずるに由つて亦是蓮華智と名け。亦是轉法輪智と名く。北方の不空成就佛は成所作智を成ずるに由つて亦是羯磨智と名く。中方の毘盧遮那佛は法界智を成ずるに由つて本と爲す。已上の四佛智より四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩は即ち金寶法業なり。三世一切の諸の聖賢生成養育の母なり。是に於て印成せる法界體性の中より四佛を流出す。四方の如來に各四菩薩を攝す。東方の阿闍佛に四菩薩を攝す。金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛善哉を四菩薩と爲す。南方の寶生佛に四菩薩を攝す。金剛寶、金剛光、金剛幢、金剛笑を四菩薩と爲す。西方の阿彌陀佛に四菩薩を攝す。金剛法、金剛利、金剛因、金剛語を四菩薩と爲す。北方の不空成就佛に四菩薩を攝す。金剛業、金剛護、金剛牙、金剛拳を四菩薩と爲す。四方の佛の各の四菩薩を十六大菩薩と爲す。三十七尊の中に於て、五佛四波羅蜜及び後の四攝八供養を除いて但し十六大菩薩の四方の佛の所攝たるを取らるなり。又一摩訶般若經の中に内空より無自性空に至るまで亦十六の義あり。一切の有情の心質の中に於て一分の淨性有り。衆行皆備はれり。其體極微妙にして、皎然明白なり。乃至六趣に輪廻すれども亦變易せず、月の十六分の一の如し。凡そ月の其一分の明相、若し合宿の際に

成身觀は堅に行者が佛位に到るの順序を觀するものなり。

【故佛】修生顯得の大目を指す。即ち三世常住の本有の大目なり。
【三摩地】三密、五相成身等の觀を指す。

【散善門】一乘は定中の説、三乘は然らず。故に斯く云ふ。此所にては他縁大乘覺心不生心の分齊を指す。

【一切義成就菩薩】釋迦如來が因位にありて菩薩たりし時の名。

ば、一には是れ通達心、二には是れ菩提心、三にはこれ金剛心、四には是れ金剛身、五には是れ無上菩提を證して、金剛堅固の身を獲るなり。然も此五相具に備はれば、方に本尊の身と成る、其圓明は、則ち普賢の身なり、亦これ普賢心なり、十方の諸佛と之れ同じ。亦乃ち三世の修行證に前後有れども達悟に及び已ぬれば去來今無し。凡人の心は含運華の如く佛心は滿月の如し。此觀若し成ずれば十方國土の若しは淨、若しは穢、六道の含識、三乘の行位及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、三世の諸佛、悉く中に於て現じ、本尊の身を證して普賢の一切の行願を満足す。故に『大毘盧遮那經』に云はく、「是の如きの眞實心は故佛の宣説したまふ所なり。」問ふ、「前に二乘の人は法執有るが故に成佛することを得ずと言ふと。今また菩提心を修せしむる三摩地とは、云何が差別なる。」答ふ、「二乘の人は法執有るが故に、久久に理を證し沈空滯寂して、限るに劫數を以てし、然して大心を發し又散善門の中に乘じて無數劫を經。この故に厭離すべきに足れり、依止すべからず。今眞言行人は既に人法の上執を破して能く正しく眞實を見るの智なりと雖も、或は無始の間隔の爲に未だ如來の一切智智を證すること能はざるが故に、妙道を欲求し次第を修持して凡より佛位に入るものなり。即ちこの三摩地は能く諸佛の自性に達し、諸佛の法身を悟り、法界體性智を證して大毘盧遮那佛の自性身、受用身、變化身等に流身を成す。爲く、行人未だ證せざるが故に理宜しく之を修すべし。故に『大毘盧遮那經』に云はく、悉地は心より生ず。『金剛頂瑜伽經』に説くが如し。一切義成就菩薩、初めて金

【菩提心】三摩地の菩提心の行相にして五種大身の月輪觀を撰す。
 【佛性】一切智智なり佛如實知自心の體なり。
 【父母所生の身】吾等が現在の肉身を指す。
 【大覺の位】大日如來の位なり。

闍に座し、無上道を取證して、遂に諸佛の此心地を授くることを蒙つて、然して能く果を證す。凡そ今の人、若し心決定して教の如く修行すれば、座を起たずして三摩地現前し、ここに本尊の身を尊貴すべし。故に一大毘盧遮那經供養次第法に云はく、若し勢力を廣く増益する無くんば、法に住して但し菩提心を觀すべし。佛真中に萬行を具し、淨白純淨の法を満足すと説きたまふ。此菩提心は、能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現すれば則ち一切の導師と爲る。若し本に歸すれば則ち是れ密嚴國土なり。座を起たずして能く一切の佛事を成ず。菩提心を讃じて曰はく、

若し人佛性を求めて、菩提心に通達すれば
 父母所生の身に、速に大覺の位を證す
 金剛頂瓊翰の中に阿耨多羅三藐三菩提心を發すの論なり。

金剛頂瓊翰中阿耨多羅三藐三菩提心論 終

秘藏寶鑰卷上 序并せたり

沙門遍照金剛撰

【一】一部三卷。弘法大師の撰、本書は彼の二教論が廣に顯密二教を對辯するに對し、これに對し、この大要をなす。その大要は當時行はるる内外大小一乘三乘の一切の教法を、一日九經の意によつて九顯一密の意により、各教の次第淺深を分別し、十住心最極の境界とするものにして、同じく弘法大師の撰にかゝる十住心論とは、廣略の關係にあるものと見るべし。即ち彼は廣説にして之は略説なり。

【一】以下は序分に總じて教義多端なることを明すとす。
【雜補】書帙のことなり。
【牛頭】支那の炎帝神農氏のこと。
【斷菑】支那の周藥を設けて種種の迷を指す。意これにあるか。於焉三綱五常を修すれば則ち君臣父子の道

秘藏寶鑰卷上

公はのこと。
【空華眼を眩し云云】
上住心の大意を示す。

【龜毛】
水龜に毛ありと見ること。

【空華、龜毛等俱に空無】
實有と執着することの譬喩。

【塵境】
六塵の境界なり。

【提提無】
一觸提無佛性種の徒なり。

【六行】
苦盡障淨妙證なり。即ち有漏智の證なり。今此證を修して、四禪四無色定を發得して命終と共に色無色界等と共に故に六行四禪は第三住心に當る。

【唯靈】
以下は第四住心の行相を別す。即ち聲聞乘なり。

【八解】
八解脫。

【因緣に身を云云】
以下第五住心緣覺乘なり。

【種を抜く】
業煩惱の種を抜くなり。

【無緣に悲を云云】

序あつて亂れず。六行四禪を習へば則ち厭下欣上の觀勝進して樂を得。唯靈に我を遮すれば八解六通あり、因緣に身を修すれば空智種を抜く。無緣に悲を起し、唯識境を遣れば則ち二障伏斷し、四智轉得す。不生に心を覺り、獨空慮絶すれば則ち一心寂靜にして不二無相なり。一道を本淨に觀すれば觀音慈愍し、法界を初心に念へば普賢微妙したまふ。心外の礦垢ここに悉く盡き、曼荼の莊嚴この時漸く開く。靈吒の惠眼は無明の昏夜を破し、日月の定光は有智の薩埵を現す。五部の諸佛は智印を擧げて森羅たり、四種の曼荼は法體に住して駢蹟たり。阿遮一觀すれば業壽の風定まり、多劫三喝すれば無明の波洶れぬ。八供の天女は雲海を妙供に起し、四波の定妃は滿掩を法樂に受く。十地も究竟すること能はず、三自も高接することを得ず。秘中の秘、覺中の覺なり。吁吁自責を知らず、狂迷を覺と謂へり。愚にあらずして何ぞ。孝慈心に切なり。教にあらずんば何ぞ濟はん。藥を投ぐることに此れにあり、服せずんば何ぞ瘥せん。徒に論じ、徒に誦すれば國王呵叱したまふ。爾れば乃ち九種の心藥は外塵を拂つて迷を遮し、金剛の一宮は内塵を拂いて實を授く。藥と不樂と得と不得と、自心能く爲す。母にあらず、社にあらず、我心自ら證せまく而已。求佛の薩埵知らずんばあるべからず。摩尼と燕石と、驢乳と牛乳と、察せずんばあるべからず。察せずんばあるべからず。住心の深淺經論に明かに説けり。具に列ぬること後の如し。頌に曰はく、

金剛内外の壽と、離言垢過等空の因と

以下第六住心の行相を明す。

【不生に心を云云】以下第七住心の總頌を明す。

【一道云云】以下第八住心を明す。

【法界云云】以下第九住心を明す。

【心外の礦垢云云】第十住心の内證法を述ぶ。

【慶吒】慶は月の種子、吒は日の種子。

【有智の薩埵】金剛薩埵なり。

【阿遮】不動尊業壽の風。不動尊の利劍を揮つて業壽無窮の命を斷じて大空不生を得ること。

【多婁】降三世明王のこと。

【八供天女】金剛界内外の八供養天女使のこと。

【三百】釋論に所謂「三百一心摩訶衍」のこと。

【頌に曰はく云云】歸敬序なり。

作遷慢如眞乘の寂と、制體經光連貝の仁と日幢華眼鼓の勃駄と、金寶法業歌舞の人と

捏鐺刻業威儀等との、丈夫無碍にして刹摩に過ぎたまへるを歸命し 上る

我今詔を蒙つて十住を撰す。頓に三妄を越えて心眞に入らしめん

霧を褰げて光を見るに無盡の寶あり、白他受用口に彌新なり

如來明にこれを説きたまへり。十種にして金場に入る

已に住心の數を聴いつ、請ふ彼名相を開け

心の名は後に明に列す。諷讀して迷方を悟れ

第一 異生羶羊心 凡夫狂醉して吾非を悟らず、但し姪食を念ふこと彼羶羊の如し。

第二 愚童持齋心 外の因縁に由つて、忽に節食を思ふ、施心萌動して殺の縁に遇ふが如し。

第三 嬰童無畏心 外道天に生じて暫く難息を得、彼嬰兒と犢子との母に隨ふが如し。

第四 唯蘊無我心 但し法有を解して我人皆遮す、羊車の三藏悉く此句に攝す。

第五 拔業因種心 身を十二に修して、無明種を抜く、業生已に除いて無言に果を得。

第六 他緣大乘心 無縁に悲を起して大悲初めて起る、幻影に心を觀じて唯識境を遮す。

第七 覺心不生心 八不に戲を絶ち、一念に空を觀ずれば、心原空寂にして無相安樂なり。

第八 如實一道心 一如本淨にして境智俱に融ず、この心性を知るを號して遮那といふ。

【金剛内外の壽】

大、阿字・内は有情外は壽壽、阿字

根なるが故に内外壽と云ふ。

【水大】

【火大】

【風大】

【地大】

【空大】

【水大】

【火大】

【風大】

【地大】

【空大】

【水大】

【火大】

【風大】

【地大】

【空大】

【水大】

【火大】

【風大】

【地大】

【空大】

第九極無自性心 本は自性なし、風に遇うて即ち波たつ、法界は極にあらず、誓を蒙つて忽に進む。第十秘密莊嚴心 禪樂は塵を拂ひ、眞言は塵を隔く、祕寶忽に陳じて萬徳即ち證す。

【二】 第一異生羝羊心

異生羝羊心とは何ぞ。凡夫狂醉して善惡を辨へず、愚童癡闇にして因果を信ぜざるの名なり。凡夫種種の業を作つて種種の果を感ず、身相萬種にして生ず、故に異生と名く。愚癡無智なること、彼羝羊の劣弱なるに均し。故に以て之に喩ふ。夫れ生は吾が好むにあらす、死は亦人の惡むなり。然れども猶生れゆき生れゆいて六趣に輪轉し、死に去り死に去つて三途に沈淪す。我を生ずる父母も、生の由來を知らず、生を受くる我身も、亦死の所去を悟らず。過去を思れば冥冥としてその首を見ず。未來に臨めば漠漠としてその尾りを尋ねず。三辰頂に戴けども、暗きこと狗の鼻に同く、五藏足を載すれども迷へること羊の目に似たり。日夕に驚怖として衣食の鼠に繋かれ、遠近を起り遂て名利の坑に墜つ。加以磁石鐵を吸へば即ち乘馳せ逃む、方諸水を招げば即ち父子相親しむ。父子の親親たる親の親たることを知らず、夫婦の相愛たる愛の愛たることを覺らず。江水相續ぎ飛龍相助く。徒に妄想の繩に縛られて空しく無明の酒に酔へり。既に夢中に遇へるが如し。還て逆旅に逢ふに似たり。一一道より畏生し萬物之に因て森羅たり。自在能く生し、梵天の所作なりと云ふが如きに泊ては未だ生人の本を知らず、誰か死者の起りを談せん。遂に乃ち豺狼虎は毛物を咀嚼し、鯨鯢犀兕は鱗族を吞食す。金翅龍を食み、羅刹人を喫ふ。

【金剛】第十住心
 【羊車の三載】羊鹿牛の三車(聲緣、菩薩の三乘)のこと。
 【八不】十二因緣のこと。
 【二】以下は正宗文。中に於て最初に第一住心を明す【三途】地獄(火)餓鬼(血)畜生(刀)なり。
 【三辰】日月星。
 【五嶽】嵩高、華山、泰山、恒山、衡山。
 【磁石】夫婦の情愛の親切なるに喩ふ。
 【二道より云云】老子に「道一混元一氣を生ず。一、二天地を生ず。二、萬物を生ず。三、萬物の意を取れるものなり。」
 【摩竭】摩伽羅即ち鯨魚なり。
 【羅刹】速疾鬼或

人畜相呑み、強弱相噉ふ。況や復弓箭野を互れば猪鹿の戸種を絶ち、網罟澤を籠れば魚鼈の郷族を滅す。鷹隼飛べば鶩鵲涙を流し、豺犬走れば狐兔腸を斷つ。禽獸は盡れども心には未だ飽かず、厨屋には満てども舌には厭はず。強竊二盜は珍財に迷つて戮を受け、和強兩劍は娥眉に惑つて而して身を殺す。四種の口業は舌に任せて斧を作り、三箇の意過は心に縦にして、自ら毒なり。無慚無愧にして八萬の罪盡く作り、自作教他して塵沙の過常に爲す。都て一一の罪業三惡の苦を招き、一一の善根四徳の樂に登ることを覺知せず。あるが云はく、「人は死して氣に歸る、更に生を受けず」と。此の如きの類をば斷見と名く。あるが云はく、「人は常に人たり、畜は常に畜たり、貴賤常に定まり、貧富恆に分れたり」と。此の如きの類をば常見と名く。或は牛狗の戒を持ち、或は恆河に投死す。此の如きの類をば邪見といふ。邪見外道その數無量なり、出要を知らず、妄見を祖とし習へり。かくの如き等の類は皆悉く羶羊の心なり、頌に曰はく、四讃

凡夫は善惡に盲ひて、因果あることを信せず
 但し眼前の利を見る、何ぞ地獄の火を知らん
 羞づることなくして十惡を造り、空しく神我ありと論す
 執着して三界を愛す。誰か煩惱の鎖を脱れん
 問ふ、「何れの經に依てかこの義を建立する。」答ふ、「大日經なり。彼經に何が説く、經に曰はく、『祕密主、無始生死の愚童凡夫は、我名我有に執着して無量の我分を分別す。祕密

は可畏と得ず。暴悪、人を喰ふ鬼なり。

【魚鱗なり】鱗は榮なり。

【四種の口業】兩舌、綺語、妄語、惡口の四なり。

【二種の意過】貪欲、瞋恚、愚癡。

【八萬の罪】八萬四千の煩惱より生ずる罪。

【人は死して云云】人は常に人たり。

【云云】宝篋印第三の文を云ふす。

【即ち五具の内】遠見に當る。

【或は生物の戒云云】八十重禁第三の六等の戒の意にして以下は別意を明す。

【問ふ所の】問云云以下は引續中にて初には問答。次には正しく經論の文を引證す。

【住心品の中の余剛】大目第一

主若し彼我の自性を觀せざれば則ち我我所生ず。餘は復時と地等の變化と、瓊瑤の我と建立の淨と、不建立の無淨と乃至聲と非聲と有りと計す。祕密主、是の如き等の我分は昔より以來分別と相對して順理の解脫を希求す。祕密主、愚童凡夫の計は猶し羶羊の如し」と。
龍猛の「菩提心論」に云はく、「謂く、凡夫は名聞利養資生の具に執着して、務むに安身を以てし、恚に三毒五欲を行す。眞言行人、誠に厭患すべし、誠に棄捨すべし。」

【三】 第二愚童持齋心

夫れ悉なる樹定んで禿なるにあらず、春に遇ふときは則ち榮え華さく。増れる水何ぞ必ず氷ならん。夏に入るときは則ち津け注ぐ。殺身濕ひを待ち、芥葉時に結ぶ。戴淵心を改め、周鼎忠孝あつきが如きに至ては、礪石、忽に珍なり。魚珠夜を照す。物に定れる性なし。人何ぞ常に惡ならん。緣に遇ふときは即ち庸愚も大道を庶幾ふ。教に順ずるときは則ち凡夫も賢聖に齊しからんと思ふ。羶羊自性なし、愚童も亦愚にあらず。この故に木覺内に薫じ、佛光外に射して歡顔に饒食し、數數に檀那す、牙種兜藥の善樹積して生じ、數華結實の心探湯不及なり。五常漸く習ひ、十善鎮仰す。五常と言へば仁義禮智身なり。仁をば不殺等に名く、己を恕つて物に施す。義は則ち不盜等なり、積んで能く施す。禮は曰はく不邪等なり、五禮序あり。智はこれ不亂等なり、密に決し能く理はる。信は不妄の稱なり、言つて而して必ず行す。能く此五を行する時は、則ち四序玉燭し五才金鏡なり。國に之を行へば、則ち天下昇平なり、家に之を行へば、則ち路に遺を拾はず、名を擧げ先を

乎九問の中の第三
心續生の文なり。

【二】以下第二住
心の釋段なり。

【廣陵】字は若思
廣陵の人なり。初
め盜心ありしも後
改めて將軍の位に
昇る。

【周處】字は子隱
義興、義の人なり
初め惡人なりしも
後に忠孝の心を起
す。

【探湯不及】不及
は善を修すること
力及ばざる如きを
云ふ。即ち惡を去
ることの疾きに喩

【四序】四時共に
和することなり。

【五才】木火土金
水の五行。

【經】智度論、超
世經等の文なり。

【南嶺】南嶺、南
嶺の略。四大洲の

【勝身園】東勝身
園、四大洲の一

【西翟陀尼】西翟陀
尼、四大洲の一

【生貨】生貨、生
貨、四大洲の一

【即ち四大洲の一

顯すの妙術、國を保ち身を安んずるの美風なり。外には五常と號し、内には五戒と名く。

名異にして義融じ行同うして益別なり。斷惡修善の基漸脫苦得樂の濫膺なり。故に經に

云はく、「下品の五戒は瞻部洲に生じ、中品の五戒は勝身園、上品は生貨、上上と及び無我と

は瞿曇越なり」と。廣く之を説けり。四洲の人民に各王者あり。王は五種あり。粟散と四

輪王となり。この五種の王は必ず十善に乗じて來御す。故に「仁王經」に云はく、「十善の善

薩大心を發して長く三界の苦輪海を別る。中下品の善は粟散王、上品の十善は鐵輪王、習

種は銅輪にして二天下なり。銀輪は三天性種なり。道種堅徳の轉輪王は七寶の金輪四天下

なり」と。今この文を案するに王者及び民必ず五戒十善を行じて人中に生ずることを得

未だあらじ之を棄てて能く得るものは、前生に善を修して今生に人を得。此生に修せず

んば還て三途に墜ちなん。春の種を下さずんば秋の實何んが獲ん。善男善女仰がずんばあ

るべからず、十惡十善の報、聖王凡王の治、具には「十住心論」の如し。頌に曰はく、三韻

愚童少しき貪瞋の毒を解して、歎爾に持齋の美を思惟し

種子内に熏じて善心を發す。牙抱相續して英軌を尙ふ

五常十善漸く修習すれば、粟散輪王も其旨を仰ぐ

問ふ、「此住心は亦何れの經に依てか説く。」答ふ、「大日經」なり。彼經に何んが説く。

經に曰はく、「愚童凡夫或時に一法の想生ずることあり、所謂持齋なり。彼この少分を思惟

【壽單】 北俱盧洲、即ち四大洲の一。

【英散王】 仁王經の壽に衆多なること猶し英散の如しと。故に喻に從つて立名するか即ち輪王より以下一國一州を領するものを云ふ。

【四輪王】 鐵、銅、金、銀の四種の輪王なり。

【英】 善法なり

【問ふ此住心云云】 以下第二住心の引證の文。即ち今の住心結の金剛手九問の中の第一心續中の問の中八心相續中の初の六心なり。

【尊宿】 舉行兼備高尙にして世の師表となるべきものなり。

【四】 以下第三住心大乘の體成なり

【非局】 無色界の第四禪天なり。

以て因となして、六畜日に於て父母男女親戚に施與する、是れ第二の牙種なり。復この施を以て非親戚のものに授與する、これ第三の施種なり。復此施を以て、器量高德の者に與ふる、これ第四の華種なり。復此施を以て、歡喜して伎樂の人等に授與し、及び尊宿に獻する、これ第五の最華なり。また此施を以て、親愛の心を發して而もこれを供養する、是れ第六の成果なり。

【四】 第三要章無畏心

要章無畏心とは外道人を厭ひ、凡夫天を厭ふの心なり。上非想に生じ、下偏宮に住して身量四萬由旬、壽命八萬劫にして下界を厭ふこと瘡癩の如く、人間を見ること蟬蟬の如し、光明、日月を蔽し、輻輳輪王に超えたりと云ふと雖も、然れども、猶彼大聖に比すれば、劣弱愚蒙なること、此孩兒に似たり。小分の厄縛を脱するが故に無畏なり。未だ涅槃の樂を得ざるが故に要章なり。問ふ、聞く薄く、淮大高く踏み費龍遠く飛ぶこと並にこれ藥力の致す所、師術の爲す所なり。今此天等は何れの教により、誰の師に就いてか、能くかくの如きの自在光明の身、壽命長遠の樂みを得る。又天に幾種かある、請ふ、その名を示せ。高問來り叩く鍾谷何を歎さん。嘗試にこれを論ぜん。夫れ狂毒自ら解けず、醫王能く治す。摩尼自ら寶にあらず、工人能く營く。所謂醫王と工人と豈に異人ならんや。我が大師薄伽梵その人なり。如來の徳は萬種を具せり。一一の徳は即ち一法門の主なり。彼の一一の身より機根草に從つて種種の法を説いて衆生を度脱したまふ。故に『大日經』

【由旬】(Yojana) 支那の里程(六町一里)にして、或は四十里或は三十里と云ふ。

【劫】(Kalpa) の略、通常(通常)の年月日時を以て算し能はざる遠大の時節を分別する語。

【問ふ聞く云ふ】 以下の文は問答釋なり。

【准犬】 支那の淮南王、仙薬を服して仙人となり、その仙薬の餘器甕中にありしを獵犬嘗めて同じく仙を得て雲上に昇ると。

【費龍】 支那の費長房、靈公に従ひ仙術を得んとせしも許されず、其の歸路一つの竹竿を與へたる、長房これに乘り家に歸り河に投ず河化して龍となり飛び去ると。

【五通智道】 五通仙の道なり。

に云はく、如來應正遍知、一切智智を得て無量の衆生の爲に廣演分布して、種種の趣、種種の性欲に隨つて種種の方便道を以て一切智智を宣説したまふ。或は聲聞乘道、或は緣覺乘道、或は大乗道、或は五通智道、或は願つて天に生じ、或は人中及び龍夜叉乾闥婆に生じ、乃至摩羅羅刹に生ずる法を説きたまふ云云。今この文に依らば三乘及び人天乘の教は並に皆如來の所説なり、若し教に依て修行するものは必ず天上に生ず。問ふ、若し然らば

諸の外道等の所行は皆これ佛法か。答ふ、これに二種あり。一には合、二には違なり。合とは如來の所説に契合するが故に。違とは佛説に違乖するが故に。元はこれ佛説なりと云ふと雖も、然も無始の時より來た展轉相承して本旨を違失せり。或は自見に隨つて牛狗等の戒を持つて以て生天を求む。是の如きの類は並に本意を失せり。問ふ、若しこれ佛説ならば宜しく直に佛乘等を説くべし。何ぞ天乘等を説くことを用ふる。一、機根契當の故に。餘

の薬は益なきが故に。二、問ふ、一已に師及ぶ教を聞きつ。請ふ天の數を示せ。一、天に三種あり。謂く、欲、色、無色界これなり。初の欲界に六天あり、四天王、忉利、夜摩、都史樂變化、他化これなり。色界に十八あり。此に四の別あり。四禪各別の故に初禪に三あり。梵衆、梵輔、大梵これなり。二禪に三あり。少光、無量光、極光淨これなり。三禪に又

三あり。少淨無量淨、遍淨これなり。第四禪に九あり。無雲、福生、廣果、無想、無煩、無熱、善見、善現、色究竟これなり。無色界に四あり。空無邊、識無邊、無處有處、非想、非非想これなり。これこの廿八種の天、海を去る遠近身量の大小壽命の長短等は具には

非非想これなり。これこの廿八種の天、海を去る遠近身量の大小壽命の長短等は具には

非非想これなり。これこの廿八種の天、海を去る遠近身量の大小壽命の長短等は具には

【乾闥婆】(Gandharva) 香神等と譯す。八寶衆の一即ち樂神の名。

【摩睺羅伽】(Mahoraga) 八部衆の一。新羅界第三院の一尊にして釋迦如來の普賢なり。

【四天王】四王天に居り佛法を護る四王、即ち持天(東)、增長天(南)、廣目天(西)、多聞天(北)。

【四利】(Prajapati) 三十三天、欲界六天中の第二天を云ふ。

【夜摩】(Yama) 欲界六天中の第三天の名。

【那史】(Nāga) 釋史多の略。兜率天のこと。

【業變化】欲界六天中の第五重の天

【四吠陀】波羅門所傳の經典にして即ちリグ、吠陀、(Rig-veda) サーマ

吠陀(Sama-veda) ヤジニル吠陀(Ya-

「十住心論」の如し。衆を恐れて述べず。問ふ、「既に天の名數を聞きつ。重ねて請ふ。彼の行相を示せ。答ふ、前の外道等も亦三寶三學等の名を立つ。梵天等を覺寶と爲し、四吠陀論等を法寶と爲し、傳授修行者を僧寶と爲し、十善業等を戒となす、四禪那は即ち定なり。

この定は六行に由て而して得六行とは言はく、苦離障、淨妙離これなり。下界を厭うて苦離障の想ひを作し、上天を欣つて淨妙離の觀を作す。この觀に由るが故に展轉上生し、他

主空三昧に由て空患發生す。此三學に由て、上天の妙樂を得。然りと雖も道究竟にあらざるが故に生死を出でて涅槃を得ること能はず、上非想を射すれども還て地獄に墜つること

譬へば箭を虚空に射るに力盡きて即ち下るが如し。この故に樂求すべからず。問ふ、「諸の外道何く三學を修して、彼二界に生じ。空三昧を證して言亡慮絶す、何に由てか煩惱を斷

じ涅槃を證することを得ざる。答ふ、「觀二邊に著し、定二見に帶するが故なり。問ふ、「同く非有非無を觀す、何ぞ一邊二見に墮するか。二他主に繫屬して因縁の中道を知らざるが

故たり。」「因縁の中道その意云何ん。」「因縁の有を觀するが故に斷邊に墮せず、自性を觀すゝが故に常見に墮ちず、有空即ち法界なりと觀すれば、即ち中道正觀を得。この中道

正觀に由るが故に早く涅槃を得。外道邪見の人はこの義を知らず。この故に眞の圓寂を得ず。若しこの理を聞かば即ち羅漢を得ん。問ふ、「戒を護つて天に生ずるに幾種か

ある。」「生天に四種あり。一には外道、前の説の如し。二には二乘亦天上に生ず。三には大乘の菩薩、必ず十天の王となるが故に。四には應化の諸佛菩薩化して天王と作るが故に。具に

の菩薩、必ず十天の王となるが故に。四には應化の諸佛菩薩化して天王と作るが故に。具に

Juwa-veda) アタル
ルア吠陀 (Atharva-
veda)

【他主空三昧】他

主は我の異名。外

道は自身の外に常

一主宰の我あつて

これに依り無想及

び非想等の唯我の

み存して我所作の

一切因果生滅等を

空無する定を云ふ

【空惠發生】他主

空三昧に依つて空

定と相應する有漏

世間種種の勝智を

發起すること

【龍尊】外道の信

本する諸大龍王。

【五熱】外道の苦

行に四面と頂上に

火を聚めて身を炙

る苦行を云ふ。

【問、入心】住心

云云。引證の經文

等を示す。

【那羅延天】(Nara-
yana) 天上の力

異名なり。

【商羯羅天】(Sri-
Siva) 大白在天の

異名。

は『十住心論』に説くが如し。頌に曰はく、

外道發心して天の樂を願ひ、虔誠に戒を持して歸依を覓む

大覺圓滿者知らず。豈に梵天龍尊の非を悟らんや

六行修 觀して無色に生じ、身心五熱して徒に自ら陵む

斷常空有に勝住を願つて、若し世尊に遇ひたてまつらば我邊を覺らん

問ふ、『今この住心は亦何れの經論に依てか解説する。』答ふ、『大日經菩提心論』なり。

『彼經に何んが説く。』彼經に云はく、『秘密主、彼戒を護つて天に生ずるは、是れ第七の受

用種子なり。復次に秘密主、この心を以て生死に流轉するに、善友の所に於て是の如きの

言を聞く。此はこれ天なり、大天なり。一切の樂を與ふるものなり。虔誠に供養すれば

一切の所願皆滿つ。所謂自在天、梵天、那羅延天、商羯羅天、自在天子、日天、月天、龍

尊等、乃至或は天仙大闍陀論師なり。各各に善く供養すべしと。彼是の如くなるを聞いて

心に慶悅を懷いて、感重に恭敬し隨順し修行す。秘密主、これを愚童異生の生死に流轉す

る無畏依の第八の嬰童心と名く」と。又云はく、『復次に殊勝の行あり、彼所說の中に隨つ

て殊勝に住して、解脱を求むる惠生ず。所謂常無常空なり。かくの如きの説に隨順す。秘

密主、彼空と非空とを知解するに非ず、常と斷となり。非有非無、俱に彼分別を無分別と

す。云何が空を分別せん、諸法の空を知らざれば、彼能く涅槃を知るに非ず。この故に、

空を了知して斷常を離るべし」と。空有の教は角を持つて乳を求むるが如し。若し因縁の空を知

らば眞言に解
脱を得べし。

又云はく、「唯菩薩、無罪の障累及び業、若は生、若しは滅、他主に繫屬して空三昧生ず、こ
れを世間の三昧道と名く。」又云はく、「若し諸天世間の眞言法教の道、かくの如きの勤勇者
衆生を得せしむるの故なり。」と。此は眞言の「菩提心論」に云はく、「諸の外道等はその身
命を燃して業は助くるに、功徳を以てして仙宮の住處を得、或は復天に生ずるを以て究と以爲
へり。眞言行人業縁を断ずべし。業力若し盡きぬれば、未だ三界を離れず煩惱尚存し、
宿殖未かなびず、悪業徒起す、彼時に當つて、苦海に沈淪して出離すべきこと難し。當に
知るべし、外道の法は空幻を闍始に同じし。」

秘藏寶輪卷上終

秘藏寶鑰卷中

【一】上卷に於ては世間三種の住心を釋し終る此中卷に於ては小乘二の住心(聲聞、緣覺)を釋する其内、今は先づ第四の住心の釋段なり。【若しそれ鉛刀云云】當住心の綱要及び住心得名を明かす。

【鉛刀、泥蛇云云】此一は世間に譬へ、聲聞、應龍は出世間に比す。【珠鼠】昔、鄉人乾きたる鼠を以て瑛となすと。

【勝數の諦の名】勝論師が六諦、數論派の二十五諦のこと。

【梵延】梵天、那羅延天。

【長爪】長爪梵志この外は一切不受の心を以て實相と計す。

【犢子外道】犢子外道は無言を以て爲行とす、故に絶言と

【一】第四唯蘊無我心

若しそれ鉛刀終に蓋耶が續なし、泥蛇豎に應龍の能あらんや。燕石珠に濫し、璞鼠名涉る、名實相濫すること由來尙し。然れば則ち勝數が諦の名、梵延が佛の號、長爪が實相、犢子が絶言、徒に解腕の智を勞して未だ涅槃の因を知らず。この故に大覺世尊この羊車を説いて三途の極苦を拔出し、八苦の業縛を解脱したまふ。その教たらく、三藏廣く張り、四諦普く觀す、三十七品は道の助けたり、四向四果は即ち人の位なり。識を言へば唯し六つ、七八無し。成を告ぐれば三生六十劫、非を防ぐは即ち二百五十、善を修するは即ち四念八背なり。半月に罪を説いて持犯立どころに顯れ、一夏意に隨つて凡聖乍に別る。禿頭割衣し、鐵杖銅盃あり。行くとときんば安徐して虫を護り、坐するるときんば低頭して息を數ふ。これ則ち身の標儀なり。殺を言ひ收を言ふに即ち知淨の語あり。行雲回雪には即ち死尸の想ひあり。斯れ乃ち心口の灰屑なり。塚間に目を閉ち白骨に心を在く、聚落に分衛して魚飯想ひを吐く。樹葉雨を遮す、誰か聖室を顯はん。糞掃風を防ぐ、何ぞ必ずしも綺ならん。生空三昧に神我の幻陽を知り、無生盡智に煩惱の後有を斷す。その通は則ち日月を虧蔽し天地を顛覆す。日には三世を徹し、身には十八を現す。石壁無碍にして虚空に

云ふ。

【西向因果】 頤流一來、不遷、應供の四位に各各向と果とあり。

【非を非ぐ】 身口七支の非を防止すること。

【四念八背】 四念史とは身、受、心、法の四境に身不淨受無常、心無常、法無我の觀をなし散去すること。八背とは八背捨即ち八觸のことなり。

【半月に罪を説く】 布薩の義を説く。毎月十五日と晦日に犯罪を自白して懺悔する故に云ふ。

【一夏云云】 一夏九旬の夏安居のことなり。

【息を數ふ】 氣息斷のこと。
【白骨に心を在く】 骨鎖觀のこと。
【善持風を防ぐ】 善持衣(下品の衣)を著ること。

【生空三昧】 人無

能く飛ぶ。その徳は則ち輪王頂長し、釋梵隨依し、八部供承し四象欽仰す。遂に乃ち五藏の泡露を厭うて三途の塗炭を惡み、等持の清涼を欣つて廓大虛に同じ。湛然として無爲たり、何ぞ具れ樂なるや。身智の灰滅を尙ふ、乘の趣きたる大體かくの如し。法を存するが故に唯慈なり。人を迷するが故に無我なり。簡持を義とするが故に唯慈なり。

覺國の公子、玄關法館に問うて曰はく、今聲聞乘の人及び法を聞くに、既に道、人天よりも妙に一人、釋輪に超えたることを知んぬ。六通具足し、三明圓滿せり。人天の仰ぐ所、願同これ惡みあり、現世に然るべし。所以に前來の聖帝賢臣、廣く伽藍を建てて僧人を安置す。萬戸を割いて而して鉢を鳴らし、千頭を開いて鼎食す、惡み仰ぐこと他にあらず、

只國家を擁護し衆元を利濟するにあり。然るに今あらゆる僧尼は頭を割つて欲を割らず、衣を染めて心を染めず、戒定智慧は觸角よりも乏しく、非法濫行は龍鱗よりも夥なり。日夜に經營して頭を臣妾の履に叩き、朝夕に苞苴して膝を僕隸の足に屈す。釋風これに因つて陵替し、佛道之れに由て毀壞す。早濤存に至り、疾厲年に起る。天下の版圖、公私の善惡として此由なり。若かじ、一切に度を停めて、供を絶たんには。若し羅漢得道のものあらば身を屈して頂敬し、鬪を傾けて、供給せまく而已。師の曰はく、「善哉、この

問。多く利益あり。宜しく子倫倫が尊耳を聞き、顔子が放心を借つて諦に聽き善く思へ、且く一二を擧げて子が迷を塞げん。夫れ蟬は、大鵬の翼を見ず、蠅蚊何ぞ難隨が、蠅を知らん。觸角は、穹昊の頂を衝くことを得ず、僂僂何ぞ能く溟渤の底を踐まん。生盲は日月を

我なり。

【十八】十八變化

以下は末代無智者の三寶を撻難するを會し兼て三寶不斷の教を明かさんが爲に假に實主を立てて十四の問答をなす。

【愛國の公子】之

は去國法師と共に假立の人物なり。

【早は早】早は早

【政道は先】政道は先

【度は廢壞するの意】度は廢壞するの意

【支那黃帝】支那黃帝

【類下】類下のこ

【文母】周文王の

母にして、徳を備へ仁義を行じてよく文王の聖徳を助

【元凱】八元八凱

なり。即ち伯翳、仲

堪、叔蒙、季仲

伯豹、仲應、叔

季狸（八元）と若

見ず、聲は雷鼓を聞かず。愚少の分蓋しかくの如し。又夫れ物に善惡あり、人に賢愚殊

なり。賢善のものは希に愚惡のものは多し。麒麟鳳凰は禽獸の奇秀たるものなり、摩尼金

剛は金石の靈異たるものなり。人の挺粹たるものは賢聖、帝の稱首たるは堯舜、後の美な

るは文母、臣の敷ぜらるるは元凱なり。麟鳳一たび見ゆれば則ち天下太平なり。摩剛一た

び日ゆれば則ち萬物聲に應ず。聖君世に出づれば四海無爲なり。賢臣機を輔くれば一人垂

拱す。然りと雖も聖君には遇ふこと希なり、千載に一たび御す。賢佐は得難し、五百に一

たび御す。摩尼は空く名をのみ聞く、麟鳳誰か實を見る。然れば則ち麟鳳を見ざれども羽

毛の族を絶つべからず、如意を得ざれども金玉の類を抛つべからず。堯舜再び生れざれ

ども天下の主何ぞ無らん。元凱更に出でざれども牽土の臣豈に休せんや。孔麟既に擯んし

かども好儒の輩邦毎に袂を連ね、季牛已に西せしかども求道の徒、縣ごとに肩を備たつ。

代に扁華なけれども醫道何ぞ斷えざる、時に琴養絶えたれども武術誰か廢るべき。師鍾、

天の絲綺に感じ、義猷、袖の龍管に應ず。その人既に往く、其術誰か得たる。然れども猶

彈指耳に聒すしく、書札目を汗す、所以は並に皆罷むことを得ずしてこれを爲すこと猶賢

ればなり。然れば則ち羅漢の聖果は一生に得難し。この故に鈍根は六十劫、利智は則ち三

生なり。修練正行して乃し聖位を證す。向果の賢聖なしと雖もその道何ぞ絶えんや。公子が

曰はく、一賢聖に遇ひ難きこと誠にそれ然かなり、持戒智慧何ぞ其れ未だ聞思ざる。師の十

はく、一時に増減あり、法に正像あり、増劫の日は人皆十善を思ひ、減劫の年は家毎に十惡を

遺教、壽廣、天臨、
 龍宮、庭堅、神宮
 八、
 老、のこ
 と。

【白華】 同、と、
 他、の二人を指す、
 俱に支那古代の明
 暗なり。

【二人】 聖、
 古、の武、
 子、の二人。俱に支
 那古代の書家な
 り。

【増減】 増減二却
 を指す。
 【五濁】 壽(命)劫
 の五濁なり。

【雨斗】 星のこと
 【三人】 微子、箕
 子、比干の三人、
 殷の紂王は萬民を
 戮す、雖も此三人
 のみは賢仁の名を
 得と。

好む。正法千年の内には持戒得道のもの多く、像法千載の外には護禁修徳のもの少し。今に當て時はこれ濁惡、人は根劣鈍なり。その道に依稀たり、その風に髣髴たり。妙道鑽り難く、輕毛風に隨ふ。これ乃ち昔天西に傾く群星何ぞ東せん。黃輿震裂す、草木何ぞ靜ならん。公子が曰はく、「若し還り答ふるが如きは時機に奉かれて逆流猶難し。若し然らば五濁惡世には定んで持戒定慧の人なしや。師の曰はく、「何すれぞ其れ然らんや。夫れ圓蓋は西に傳ずと雖も日月は東流す。雨斗は隨ひ運れども北極は移らず、冬天は盡く殺せども松柏は凋まず、陰氣水を凍らせども濁潭は氷らず、紂民戸を閉んで戮すべし、然れども猶三人は仁と稱せらる。堯戸は扉を並べて封すべし、然れども猶四凶は殛を受けたり。火曰に物を燒けども布直中に遊ぶ、水能く人を漂らせども龍窟内に泳ぐ、これを以てこれを觀れば同じきものありと云ふと雖も亦和せざるものあり。これに由つて言はば、時は濁濫なりと雖も何ぞ其人無からんや。公子が曰はく、「既に人あることを知んぬ、其人安くんか在る。師の曰はく、「大方は圓なし、大音は聲なきなり。大白は辱れたるが若し、大直は屈したるが若し、大成は缺けたるが若し、大盈は沖しきが若し、玄德玄同なり、聖にあらずんば孰か知らん、人を知ることの病きこと古聖も亦覆くせり。公子が曰はく、「和光同塵は、抑前聞あり、然れども猶山は玉を藏めて而して草木茂し、嶽は鐘を收めて而して光彩衝く、颯を尋ねて形を知り、輝を見て火を悟る、有智有行何ぞ必ずしも知り難からん。師の曰はく、「物は心無きが故に相を現す、人は心を含むが故に辨へ叵し。公子が曰はく、「既に聖賢の辨へ易から

【四囚】堯帝に誅せられし四人の逆臣。

【鐵策】鐵は馬を衝つことなり。

【五經】周易、尙書、毛詩、禮記、春秋なり。

【三史】史記、漢書、後漢書なり。

【九牧】大唐は九州に分つて其長を九牧と云ふ。
【七道】我が國の東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道なり。
【五畿】は大和、山城、河内、攝津

ざることを聞きつ、然れども猶佛法は國に蠶じたり、僧人蠶食す、その益安んかある。師の曰はく、『有益無益は後に更に陳答せん。且く大綱を擧げて道俗の損益を示さん。今子が問ひを聞くに佛法の流傳を思はず、只國家の損益を憂ふるにあり、並に忠臣義士は誠に然るべし。夫れ國を建て職を設け君を樹て民を御むる所以は、本天下を宰めて君王に供し、海内を屠つて臣佐に給はんが爲にはあらず。當に天下の父母と與んじて萬人の塗炭を渡んと以爲へり。然れば則ち馬を御むるの法、鑣策にあらざれば能はず。人を馭むるの道、教令にあらざれば得ず。この故に五常の法を垂れて四海の人を導く、五經三史その正路を示し、金科玉條その邪逸を防ぐ、君使主上これを行へば則ち天下無爲なり、黎下これに遵へば則ち宇内無事なり、君臣父子の禮序あり、上和下睦の義缺ることなし。然れども今詩を誦するもの温惠淳和の心なく、禮を讀むもの恭儉揖讓の志を忘れたり。惡を懲らし善を勸むるは『春秋』の宗とする所、潔精精微は『周易』の尊ぶ攸なり。代を擧つて披誦すれども誰か孔丘の誠めに契ひ、周公の勸めに合へる。能く誦し能く言ふこと鸚鵡も能く爲す。言うて行はざれば何ぞ狷狷に異ならん。又それ百工天に代り九牧人を馭む、七道五畿の長、三百六十の守、縣縣の令尉、郷郷の里正、家家の父子、門門の百姓、その數無量にして貴賤無邊なり。然れども猶仁義を行ふもの幾何ぞ。忠孝を修むるもの幾許ぞ、禮信を讀み守るもの幾くかある。律令を犯さざるもの幾人ぞ、並に皆上下文を讀んで、その行を愼まず、貴賤日には是すれども心行は悉く非なり。諺に曰はく、『孝經』を擧げて母の頭

自唐の五胡なり。

【三十八】大徳

【三十九】唐を

【四十】元は民な

【四十一】元は民な

【四十二】元は民な

【四十三】元は民な

【四十四】元は民な

【四十五】元は民な

【四十六】元は民な

【四十七】元は民な

【四十八】元は民な

【四十九】元は民な

【五十】元は民な

【五十一】元は民な

【五十二】元は民な

【五十三】元は民な

【五十四】元は民な

【五十五】元は民な

【五十六】元は民な

【五十七】元は民な

【五十八】元は民な

を打つと。蓋しこれを之れ謂ふか。曾て自己法教に乖越することを顧りみず、還つて他人

の經法に違犯することを謀毀す。所謂己が確脚を蔽して、他の腫足を後はずものなり。公

子が論ずる所の如きは、天下に有ゆる百工令長並に皆法に乖けるもの多く、率主に所有

元忠孝なるは聞ゆること希なり。三教は皆これ一人の弘傳する所なり、何を以てか釋繙の

違史をば毛を吹いて環を太め、儒素の罪非をば合弘して糺さざる。又それ諸寺の封戸は一

萬に出でず。僧尼の禮敬は一鉢に過ぎず。經を讀み佛を禮して國家の恩を報じ、觀念坐禪

して四恩の徳を嘗す。然るを今俗素の衣食は或は萬戸の侯を食み、或は千乘の國を費す、

百里の宰三公の職、尸坐高臺し頓鼠尾閣なり、空しく人祿を食み、徒に人官を受く、八

元の美、五臣の徳、伊井鼎を負ひ、公守釣を垂る、張良が三略、陳平が六奇、かくの如

きの功、かくの如きの徳何を以てか酬えざる。若し僧尼の一鉢を責めば何ぞ俗素の多くの

費えを檢へざる。於是公子茫然として言ふこと無し。嗚然として良久しうして曰はく、僧

官の信祿は官位の當る所なり、加以、星みえて出で星みえて入り、風に櫛り雨を淋し

て日夜に公に在り、何を以てか酬還せん。僧尼の經を讀み佛を禮するが如きに至つては堂

上に宴坐して意に任せて修行す。何ぞ能く一卷の經若を讀み、一佛の名號を禮して國家の鴻

恩を報じ四恩の廣徳を嘗せん。師の曰はく、一公子が言ふこと是に似たりと雖も、然れども

未だ法を知らず。それ法をば諸佛の師と名く、佛は則ち佛法の人なり。一句の妙法は億劫

にも邁ひ難く、一佛の名字は變星も喩にあらす。この故に雪童身を投げ精進皮を剝ぐ、滿

【五十九】元は民な

【六十】元は民な

【六十一】元は民な

【六十二】元は民な

【六十三】元は民な

むるに身を以て床となすと。
【喜見】薬王菩薩なり。此菩薩求法のために油を身に塗つて燒き光明となすと。

【十惡】身三語四意三の十惡なり。

果の財寶は一句の法に如かず、恆沙の壽命は四句の偈に比せず、輪王床となり、喜見身を燒く。良に以あるかな。一佛の名號を稱して無量の重罪を消し、一字の眞言を讀じて無邊の功德を獲、何に況や一鉢の龜飯四種の恩德何を以てか剛いざらん。公子が曰はく、「此言迂誕なり、未だ信受するに足らず。吾が師孔李曾て言を吐かず、若し經を誦するを功と爲し佛を禮するを績とせば、吾も亦五經三史の文を誦し、周且孔丘の像を禮す、これと何ぞ別ならん。又五經の文、三藏の字文字これ同じ、誦持何ぞ異ならん。師の曰はく、「公子が言ふこと乍ちに聞けば是に似たれども、熟思へば天に殊なり。深義乍ちに信じ難し。且く譬を以てこれを説かん。それ勅語の官符と臣下の往來と文字これ同じけれども功用大だ別なり。勅書の一命の如きは則ち天下奉行して賞を施し罰を施すに百姓喜懼す。如來の經法も亦復かくの如し。菩薩聲聞天龍八部何れの人か信ぜざらん。當に知るべし、外書は百姓の文の如く、佛經は天子の勅の如し。この故に釋帝これを誦して修羅の軍を摧き、閻王これに跪きて受持の人を禮す。未だあらじ、五經を誦して罪を消し、三史を讀んで災を抜くこと。公子が曰はく、「轉迦は辯にして功德を説き、孔丘は謙にして自ら伐らず。師の曰はく、「斯言善こと莫れ。孔甫自ら西方の衆を稱禮し、李老も亦復吾師の談を吐けり、大聖妄語したまはず、謗すれば即ち深坑に墮つ。公子が曰はく、「十惡五逆を作るものは理として地獄に墮つべし、人を謗し法を謗する何に由てか然るべき。師の曰はく、「子未だ療病の法を聞かずや。身病を治するには必ず三の法に資る。一には醫人、二には方經、三には妙

【阿鼻獄】無間地獄なり。

藥なり。病人若し一人を以て方藥を信じ心に至して服餌すれば疾即ち除瘥す。病人若し醫人を罵り方藥を信せず妙藥を服せずんば疾疾何に由つてか除くことを得ん。如來衆生の心病を治したまふことも亦復かくの如し。佛は國王の如く、教は方經の如く、理は妙藥の如し。理の如く思惟するは猶し藥を服するが如し、法に依て藥を服すれば罪を滅し果を證す。然るを今重罪の愚人人を誘し法を誘す、重罪何ぞ脱れん、法は人に資て弘まり、人は法を待つて昇る。人法は一體にして別異なることを得ず。この故に人を誘するは則ち法なり、法を毀るは則ち人なり、人を誘し法を誘すれば定んで阿鼻獄に墮せん、更に出づる期なし。世人この眞を知らずして舌に任せて輒く談じて深害を顧りみず、寧ろ日夜に十惡五逆を造るべきも一言一語も人法を誘すべからず。殺盜を行するものは現に衣食の利を得、人法を誘するもの我に於て何の益かあらん。公子が曰はく、「既に人法を誘すべからざることを承はんぬ。然れども後敢て違犯せず、公子が曰はく、「既に人法を誘すべからざることを承はんぬ。然れども未だ委しうせず、人法に幾種かある、爲當深淺ありや。師の曰はく、「大にこれを論ずるに二種あり。一には顯教の法、二には密教の法なり。顯教の中に又二つ。言はく、一乗二乘別なるが故に、一乗とは如來の他受用身、十地より初地に至るまで現じたまふ所の報身所説の一乗の法これなり。三乗とは應化の釋迦、二乘及び地前の菩薩等の爲に説きたまふ所の經これなり。密教とは自性法身大毘盧遮那如來、自眷屬と自受法樂の故に説きたまふ所の法これなり。所謂眞言乘とはこれなり。是の如く諸の經法はその機根に相當して並に皆妙藥

【龍遮】大薩遮尼
【十輪】地藏十輪
乾子經受記經。

なり。其經教に隨つて菩薩論を造り、人師疏を作る、末代の弟子この經論に依て讀誦し修行す。これ乃ち人法の別なるを知らぬ。然るを今諸の論疏を造るもの、皆他を破して自を立つ。謗法と成らずや。師の曰はく、「菩薩の用心は皆慈悲を以て本となし利他を以て先と爲す。能くこの心に住し淺教を破して深教に入るは利益尤も廣し。若し名利の心を挾んで淺教を執して深法を破せばこの尤を免れず。」公子が曰はく、「既に提擲を蒙つて心霧忽に消えぬ。然れども猶心中に未だ決せざるものあり。何となれば既に得道のもの無しと雖もその道絶つべからず、戒慧を具せるものは辱の如く昧の若しと承んぬ。然るを今世間を見るに逃役のもの衆く、奸盜のもの多し、代を御むる聖皇、時を佐くる賢臣、この彌縫を見て黙し忍ぶこと能はず、佛教と王法と相和すること如何。」師の曰はく、「これに二種あり。一には悲門、二には智門、大悲の門には開して遮することなし、大智の門には制して開することなし。制門は「涅槃」薩遮」等の經の如し。悲門は「十輪」等の經の如し。相和に與奪あり、坐贓をも圖はらまく而已。又人王の法律と法帝の禁戒と事異にして義融ぜり。法に任せて控馭すれば利益甚だ多し。法を托けて心に隨へば罪報極めて重し、世人この義を知らず王法を細しくせず、佛法を訪らはず、愛憎に隨つて浮沈し貴賤に任せて輕重す。これを以て代を馭む、後報何ぞ免れん。慎まざるばあるべからず、慎まざるばあるべからず。又公子が先に談ずる所の早滯疫癘天下の版蓋僧人の招く所なりとは、これ亦然らず。子未だ

【九】易に俄れ
 其間一毫として
 陰九度あり。此
 陽九度の厄を云
 【百六】黃帝の時
 の甲子を始めとし
 て百六日に陽九
 年の厄起ると謂
 厄とは御草薙なり
 陰の厄とは洪水な
 り。
 【孝婦云云】黃書
 に孝婦を三年間
 雨降らずと。
 【五行志】五行大
 記なり。

大道を見ずして妄りに斯言を吐く。今當に秦鏡を攬て、子が面に臨むべし。若し災は非法の僧尼に由るといはば、堯の代九年の水、湯の時の七載の旱、かくの如きの旱澇誰の僧に由るか興りし、彼時に僧無し、何ぞ必ずしも僧に由らん。夏の運、顛覆し、殷の祚、夷滅し、周の末絶廢し、秦の嗣早く亡せしこと、並に皆禍三女より起り、運天命に隨ふ。その日僧無かりき、豈に佛法に預けんや。それ実禍の興りに略して三種あり。一には時の運、二には天の罰、三には業感なり。時の運とは所謂陽九百六なり、堯の水、湯の旱これに當れり。この故に聖帝實に出でて機を見て逆備せり、滅劫五濁亦これなり、天の罰とは教令理に乖くに由て天即ち之を罰す、孝婦雨をふらさつし誅、忠臣霜を降すの囚、かくの如きの類これなり。業感とは惡業の衆生同く惡時に生じて業感の故にかくの如きの災を招く、かくの如きの論は其には歴代の「五行志」等及び「守護國經」「王法正化論經」等の如し、子曾て斯義を知らずして、横に狂言を吐く、理當るべからず。師の曰はく、「有縁無益は後に當に陳答すべし」とは、それ病無きときは則ち藥無し、障ある時は則ち教あり、妙藥は病を悲んで興り、佛法は障を懸んで顯る。この故に聖人の世に出づること必ず慈悲に由る。大慈は樂を與へ、大悲は苦を抜く。投苦與樂の本源を防がんには如かず。源を防ぐの基、教にあらざるべ得ず、疾に輕重有れば藥、則ち強弱あり。障に厚薄あれば教、則ち淺深なり。増劫には病輕ければ輪王人を御し、滅劫には障厚ければ如來教を垂れたまふ。五濁惡世の衆生は病重く、三海辭に興つて八苦身を迫め、福德薄少にして貧病極

【釋】或は出家功徳經と云ひ、或は賢愚經の文意なりと云ふ。

めて多し。これ即ち前世惡因の報感なり。遂に乃ち味を嗜むものは生命を殺して腹に填て、財を食するものは他物を奪つて衣食す。色に耽る飛蛾は炎を拂て身を滅ぼし、酒を好む猩猩は瓮の邊に縛せらる。かくの如きの邪見の行、勝げて計ふべからず。此生に惡業を作て後に當に三途に墜つべし。三途の苦は劫を經とも免れ難し。如來の慈父、この極苦を見て其因果を説きたまふ。惡の因果を説きて其極苦を救き、善の因果を示して、その極果を授く、その教を修するものに略して二種あり。一には出家、二には在家なり。出家とは頭を剃り衣を染むる比丘、比丘尼等これなり。在家とは冠を戴き纓を絡へる優婆塞、優婆夷等これなり。上天子に達し、下凡庶に及ぶまで五戒十善等を持つて佛法に歸依するもの皆これなり。菩薩といへば、かくの如きの在家の人十善戒を持つて六度の行を修するものこれなり。出家して大心を發すものも亦是れなり、惡を斷ずるが故に苦を離れ、善を修するが故に樂を得。下人天より上佛果に至るまで、皆これ斷惡修善の感得するところなり。斯兩趣を示さんが爲に大聖教を設けたまふ。佛教既に存せり、弘行人にあり。この故に法を知るものは出家して燈を傳へ、道を仰ぐものは道に入て形を改む。經に云はく、「若し國王父母あつて人民男女等に放して出家入道せしむる所得の功德無量無邊なり」と、偈尼あるが故に佛法絶えず。佛法存するが故に人皆眼を開く。眼明にして正道を行す、正路に遊ぶが故に涅槃に至る。加以、經法のある所諸佛護念し諸天守衛す。かくの如きの利益勝て計ふべからず。『公子が云はく、「知法弘道のものには利益灼然なり、非法非經のもの何ぞ其

【六群】僧祇律によれば一闍陀、二迦留陀夷、三文陀連多、四摩離沙連多、五馬師、六滿宿の六群なり。衆を極めて群となす者。威儀の事をなす者。

【天授】提婆達多のこと。

【建立と無淨】建立と無淨、不建立無淨の二計なり。

【内外の我】神我及梵天自在天等なり。

れ國に充つるや。師の曰はく、大山徳廣ければ禽獸争ひ歸し、藥毒雜り生ず。深法道大なれば魚鱗生り注ぎ龍鬼並び住む。寶珠の道には必ず惡鬼あつて附違す。寶藏の側には定んで盜賊あつて重害す。美女は招かされども好醜の男争ひ逐ひ、醫門は召さされども疾病の人投歸す。國內には賊集り、城尾には賊聚る。聖王の言はされども萬國歸つて王に歸し、巨擘思はされども千流各朝宗す。富人は呼ばされども貧人集り、智者はこれを隠せども童蒙聚る。明眼蒙きて濁れば妍蚩の像これに現じ、清水溢み漚ふれば大小の相これに影る。大慮心なければも萬言これに容る、大地念ひなければも百草これより出づ。堯の子は不肖なりしかども父は敬なりき、舜の父は殺さんと欲せしかども子は孝なりき。孔子の門徒はその數三千なれども述者は則ち七十、その餘は則ち誥さず。釋尊の弟子は無量無數なりしかども六群天授善星比丘は濫行極めて多し。如來の在し日すら純善なることを得ず。何に況や末代の高をや、然れども彌伽來の慈悲は三界に父たり、賢愚善惡何ぞ嗚嗚せざらん。物の理かくの如し、何ぞ惟しむに足んや。然りと雖も毒を鑿じて藥と爲し鐵を化して金と爲す、堯戸封すべく、桀民誅すべし。これ乃ち時の運のいたす所、皇風の染むる所なり。迦葉如來明に所由を説きたまふ。事具に『守護國經』に見えたり。文煩しければ抄せず、要覽の者闕かんのみ。頌に曰はく、

建立と無淨と、深しと雖も未だ煩を斷ぜず
空しく内外の我を談じて、生死の樊に輪轉す

【羊乘】 聲聞乘なり。

【五停】 五停心觀にして七方便の第一なり。

【四念處】 身受心法の四念處なり。

【二百五十戒】 具足戒のこと。

【問】 以下の心は云云。以下は引證の經文を別記す。

【二】 以下は第五住心の釋段にして今は發覺乘に當る。

【鱗角】 無佛世に出でて飛花落葉を觀じて無常を悟る者獨一無二なれば鱗角に喩ふ。

【佛の十二因縁】 佛の十二因縁を説くを聞き道を悟るもの衆多の類あつて行ずる故に斯く云ふ。

【四五】 四大蘊の假和合せる無常の依身なり。

【爪鬚】 長爪梵志の爪なり。

【蘊處界】 五蘊十二處、十八界なり。

大聖、羊乘を開きたまへり、修觀すれば涅槃を得。五停四念處、六十三生に觀す。二百五十の戒、これを持すれば八難を離る。人空無漏の火、智を滅して身心を彈す。儼如來の警めに遇ひぬれば、菩薩の寔に廻心す。

問ふ、「この心は亦何れの經論に依てか建立する。」答ふ、「大日經『菩提心論』なり。彼經論に何んが説く。經に云はく、「謂く、かくの如く唯蘊無我を説き、根境界に淹留修行す。」又云はく、「聲聞衆は有緣地に住して生滅を識り、二邊を除いて極觀察智を以て不隨順修行の因を得、これを聲聞の三昧道と名く。」又云はく、「若し聲聞所説の眞言は一一の句安布せり。」『菩提心論』の證文は下の文と心雜へ舉たり。故に別に抄せず。行相下に臨んで知んぬべし。」

【二】 第五拔業因種心

拔業因種心とは、鱗角の所證淨行の所行なり。因縁を十二に觀じ、生死を四五に厭ふ。彼華葉を見て、四相の無常を覺り、この林落に住して三昧を無言に證す。業惱の株杙これに猶て抜き、無明の種子これに因て斷ず。爪鬚逢に望めども近づかず、建標何ぞ窺窺することを得ん。満寂の潭に游泳し、無爲の宮に優遊す。自然の戸羅授かることたうして具し、無師の智慧自我にして獲。三十七品は他に由らずして悟り、蘊處界善は聽を待たずして色

【經に云はく】大日經第一、第三なり。

【又云はく】大日經第二具緣品なり。

【等持】三昧なり、即ち三三昧なり。

【等至】八等即ち四禪四無色定なり。

【名色】名は心法色は色法なり。

【六處】六根なり。

【奢摩他】能調能減又は寂滅と云ふ一切の煩惱を止息と云ふ。

【毘鉢舍那】正見と云ふ。諸法を明かに達見すること。

あり、身通を以て人を度して言語を用ひず、大悲闍けて無れば方便具せず。但し自ら苦を盡して寂滅を證得す。故に經に云はく、「業煩惱の株根無明の種子の十二因縁を生ずるを抜く」と、又云はく、「この中に辟支佛は復少しきの差別あり。謂く、三昧分異にして業生を淨除す」と、釋して云はく、「謂く、十二因縁とは、守護國土に云はく、「復次に善男子、如来は一切の髡髮髡脫等持等至に於て煩惱を伏滅し生起する因縁皆實の如く知りたまへり。佛云何が知りたまふ。謂く、衆生の煩惱の生起することは何の因を以て生じ、何の縁を以て生ず。惑を滅して清淨なること何の因を以て能く滅し何の縁を以て能く滅すと知りたまへる。この中に煩惱の生ずる因縁とは、謂く、不正思惟なり、これを以て其因と爲し、無明を縁と爲す、無明を因と爲し行を縁と爲す。行を因と爲し識を縁と爲す。識を因となし、名色を縁となす。名色を因となし、六處を縁と爲す。六處を因と爲し、觸を縁と爲す。觸を因と爲し、受を縁と爲す。受を因となし、愛を縁と爲す。愛を因と爲し、取を縁となす。取を因と爲し、有を縁と爲す。有を因と爲し、生を縁となす。生を因となし、老死を縁となす。煩惱を因と爲し、業を縁と爲す。見を因となし、貪を縁と爲す。隨眠煩惱を因となし、現行煩惱を縁と爲す。これは是れ煩惱の生起する因縁なり。云何が衆生の諸の煩惱を滅する所有の因縁とならば、二種の因あり。二種の縁あり。云何が二とする。一には他に從つて種種の隨順の法聲を聞き、二には内心に正念を起すなり。復次に二種の因あり、二種の縁あり。能く衆生をして清淨に解脱せしむ。謂く、奢摩他心、一境の故に、毘鉢舍那能善巧の故

【不來智】 自性の
智なり。
【如來智】 化他の
智なり。

【問ふ、この住心は
云云】引證の經文
を列擧す。
【經に云はく緣覺
云云】大日經第一
住心品第一の文な
り。以下の三文は
第二具緣品第二の
文なり。

に。復次に二種の因あり、二種の緣あり。不來智の故に、如來智の故に。復次に二種の因緣あり。微細に無生の理を觀察するが故に、解脫に近きが故に。復次に二種の因緣あり。具足行の故に、智慧解脫現在前の故に。復二種の因緣あり。謂く、盡智の故に、無生智の故に。復二種の因緣あり。隨順して眞諦の理を覺悟するが故に、隨順して眞諦の智を獲得するが故に。此はこれ衆生の煩惱を除滅する清淨の因緣なり。如來悉く知りたまへり。復次に善男子、煩惱の因緣數量あることなければ、解脫の因緣も亦數量あること無し。或は煩惱有て、能く解脫の與に以て因緣と爲る實體を觀するが故に。或は解脫あつて、能く煩惱の與に以て因緣と爲る執着を生ずるが故に。頌に曰はく、

緣覺の鹿車は言說無し、部行と麟角と類不同なり

因緣の十二深く觀念し、百劫に修習して神通を具す

業と煩惱と及び種子とを抜き、灰身滅智して虚空の如し

湛然として久しく三昧に醉臥せり、警めを蒙つて一如の宮に廻心す

問ふ、「この住心は亦何れの經論に依てか説く。」答ふ、「大日經『菩提心論』なり、彼經論に何か説く。經に云はく、「緣覺は業煩惱の林伐無明の種子の十二因緣を生ずるを抜き、建立宗等を離れたり。かくの如きの湛寂は一切外道の知ること能はざる所なり、先佛宣説したまへり、一切の過を離れたり」と。又言はく、「緣覺は深く因縁を觀察し無言説の法に任して轉ぜずして言説なし、一切の法に於て極滅語言三昧を證す。これを緣覺の三昧道と

【定性、不定性】
縁覺には無餘涅槃を證するを以て、此に至極とするも、此に定性と不定性の二類あり。

爲す。又云はく、**總密主**、若し縁覺聲聞所證の眞言に住すれば諸過を操害す」と。又云はく、**聲聞所證の眞言は**、一一の句安布せり。この中に辟支佛はまた小しきの差別あり。謂く**三昧分異**にして業生を淨除す」と、龍猛菩薩の**「菩提心論」**に云はく、**又二乘の人**、聲聞は四諦の法を執し、縁覺は十二因縁を執す。四大五陰畢竟斷滅すと知て、深く厭離を起して衆生執を破す。本法を勤修して、その果を尅證し本涅槃に趣くを究竟と已爲へり。眞言行者當に觀すべし。二乘の人は人執を破すと雖も、猶し法執あり、但し意識を淨めて其他を知らず。久久に果位を成じ、灰身滅智を以てその涅槃に趣くこと大虚空の如くして湛然常寂なり、定性あるものは發生すべきこと難し、要す劫限等の滿を待つて方に乃ち發生す、若し不定性のものは劫限を論することなし、縁に遇へば便ち廻心向大す、化城より起て三界を越えたりと以爲へり。謂く、**宿佛を信せしが故に**、乃諸佛菩薩の加持力を蒙て方便を以て遂に大心を發す、乃し初め十信より下過く諸位を歷て三無數劫を經、難行苦行して然して成佛することを得、既に知んぬ聲聞縁覺は智慧狹劣なり、亦樂ふべからず。一十住論に云はく、若し聲聞地及び辟支佛地に墮す。若し爾らばこれ大なる衰患なり、助道法の中に説くが如し。

若し聲聞地、及び辟支佛地に墮するをば
これを菩薩の死と名く、則ち一切の利を失す
若し地獄に墮するは、是の如きの畏を生ぜず

若し二乘地に墮するをば、即ち大怖畏と爲す
地獄の中に墮するは、畢竟じて佛に至ることを得べし
若し二乘地に墮すれば、畢竟じて佛道を遮す
佛自ら經の中に於て、是の如きの事を解説したまへり
人の壽を食するものは、首を斬るを大なる畏とするが如く
菩薩も亦かくの如し、若し聲聞地
及び辟支佛地に於て、應に大怖畏を生ずべし

祕藏寶鑰卷中終

秘藏寶鑰卷下

【一】以下は第六住心を明す。即ち第四、五の兩住心は小乗教に當るに對し、此第六住心よりは、大乘教に入るなり。その内この第六、第七兩住心は菩薩乘に相當す。

【六士】菩薩のこゝと。當住心は菩薩大士の所行の法なるが故に大士と云ふ。

【建爪を越え】外道の邪見を越えてなり。

【二空三性】人法二空と依他起性、圓成實性、遍計所執性の三性なり。

【自覺】上の人法一執と三性となり。

【四執】慈悲喜捨なり。

【四攝】布施、愛語、利行、同事なり。

【施那】第八阿頼耶識のこと。

【五等の爵】公侯伯子男の世間五爵に喩ふ。

【一】第六他緣大乘心

粵に大士の法あり。樹て他緣乘と號す。建爪を越えて高く昇り、聲緣を超えて廣く運ぶ。

二空三性、自執の塵を洗ひ、四量四攝、他利の行を齊ふ。陀那の深細を思惟し、幻焰の似心に專注す。於是芥城竭きて還つて滿ち、巨石礪いで復生す。三種の練磨は初心の退せんと欲するを策まし、四弘願行は後身の勝果を仰ぐ。等持の城を築いて唯識の將を安じ、曠甸の仗陣を征して煩惱の賊帥を伐つ。八正の軍士を整へて縛るに同事の繩を以てし、六通の精騎を走せて殺すに智慧の劍を以てす。勞績を封するに五等の爵を以てし、心王を叩くに四徳の都を以てす。勝義勝義、太平の化を致し、廢詮談旨無事の風を煽ぐ。一眞の臺に垂拱し、法界の殿に無爲たり。三大僧祇の庸。於是帝と稱せられ、四智法王の號本無くして今得たり。爾れは乃ち藏海には七轉の波を息め、蘊落には六賊の害を斷つ。無分の正智は眞常の函に等しく、後得の權慧は諸趣の類に遍す。三藏の法令を製つて三根の有情を化し、十善の格式を造つて六趣の衆生を導く。乘を言へば即ち三つ、識を談すれば唯し八つなり。五性に成不あり、三身は即ち常と滅となり。百億の應化は同く六舟を汎べ、千葉の牟尼は等しく三駕を授く。法界の有情を緣するが故に他緣なり、聲獨の羊鹿に簡ぶが故

【四徳の都】 四智の菩提と相應し涅槃の四徳を證するが故に云ふ。

【藏海】 第八識。七轉。七轉識なり。

【蕪落】 五蘊の聚落なり。

【六賊】 六塵の境界なり。

【北宗】 法相宗なり。俱舍法相は大唐江北流傳の宗。故に北宗と云ふ。

【沈淠】 沈淠、流轉の義。

【問ふ】 この住心云以下第六住心の建立に對する所の依の經論をあぐ。

に大の名あり。自他を圓性に運ぶが故に乗と曰ふ。此れ乃ち君子の行業菩薩の用心なり。此れ北宗の大綱、蓋し此の如し。頌に曰はく、七韻

心海湛然として波浪なし、識風鼓動して去來を爲す
凡夫は幻の男女に眩着し、外道は蟹の樓臺に狂執す

白心の天獄たることを知らず、豈に唯心の禍害を除くことを悟らんや
六度萬行三劫に習ひ、五十二位一心に開く
煩惱所知已に斷じて淨ければ、菩提涅槃これ吾が財なり

四三點の徳今具足す。覺らずして外に求むる甚だ悠なるかな
言亡慮絶して法界に遍せり。沈淠の一子尤も哀むべし

問ふ、「この住心は亦何れの經論に依てか建立する。」答ふ、「大日經」「菩提心論」等なり。云、「彼經等に何んが説く。」答ふ、「大日經」に云はく、「祕密主、大乘の行あり、無緣乘の心を發して法に我性なし、何を以ての故に。彼往昔にかくの如く修行せしもの如きは蘊の阿頼耶を觀察して自性は幻陽微影響旋火輪乾園婆城の如しと知る。龍猛菩薩の『菩提心論』に云はく、「又衆生あつて大乘の心を發して、菩薩の行を行す、諸の法門に於て遍修せざること無し、復三阿僧祇劫を経て六度萬行を修し、皆悉く具足して然して佛果を證す。久遠にして成ずることは、斯れ所習の法教致次第あるに由てなり」と。問ふ、「二障を斷じ四徳を證す。かくの如きの没駄は究竟とやせん。かくの如きの行處は未だ本源に到らず。」

【二】以下は第七住心の釋段なり。第七住心は宗に配すれば南宗たる三論宗の教義に當る【千品】萬象に同じ。

【水波の不異】眞俗二諦の不一、不異等の喻を示す。

【金莊の不異】金莊の喻を以て空有不二の義を示す。

【四中】對偏の中、盡偏の中、絶待の中なり。

【四魔】煩惱魔、陰魔、死魔、天魔なり。

【一道の乘に三駕を馳す】一乘を開いて三乘の機に與ふるの意。

【絶中】絶待の中道なり。

【南宗】三論宗のこと。即ち此宗は江南の地に弘まりしが故に南宗と云ふ。

何を以てか知ることを得る。龍猛菩薩の説かく、「一切の行者一切の惡を斷じ、一切の善を修して十地を超え、無上地に到て三身を圓滿し、四徳を具足す。かくの如きの行者は無明の分位にして明の分位にあらず」と。今この證文に依らば、此住心の佛は未だ心原に到らず。但し心外の迷ひを遮して秘藏の寶を開くことなし。

【二】第七覺心不生心

夫れ大虛寥廓として萬象を一氣に含み、巨壑泓澄として千品を一水に孕む。誠に知んぬ、一は百千が母たり。空は即ち假有の根、係有は有に非ざれども、有有として森羅たり、絶空は空に非ざれども、空空として不住なり。色は空に異ならざれば、諸法を建てて宛然として空なり。空は色に異ならざれば、諸相を泯じて宛然として有なり。この故に色即ちこれ空、空即ちこれ色なり。諸法も亦爾なり。何物か然らざらん。水波の不離に似たり。金莊の不異に同じ、不一不二の號立ち、一諦四中の稱顯る。空性を無得に觀じ、戲論を八不到に越え、時に四魔戰はざるに面縛し、三毒殺さざるに自降す。生死即涅槃なれば更に階級無し、煩惱即ち菩提なれば、斷證を勞すること莫し。然りと雖も無階の階級なれば五十一位を壞せず。階級の無階なれば一念の成覺を碍へず。一念の念に三天を経て自行を勤め、一道の乘に三駕を馳せて化他を勞す。唯識の無性に迷へるを悲み、他縁の境智を阻てたるを救く。心王自在にして本性の水を得、心數の客塵動濁の波を息む。權實二智は圓覺を一如に證し、眞俗兩諦は教理を絶中に得。心性の不生を悟り、境智の不異を知る。これ乃ち南宗の綱領な

【吉藏法師】 嘉祥大師の本名なり。胡國の人。
 【二諦方言】 吉藏法師、二諦章三卷を著して中道を明す。又同師の撰大乗玄論の中に二諦義ありて、その中に三種の方言あり。
 【佛性】 同上大乘玄論の第三卷には佛性義あり。

り。故に大日尊、祕密主に告げて言はく、「祕密主、彼かくの如く無我を捨てて、心主自在にして自心の本不生を覺る。何を以ての故に。祕密主、心は前後際不可得なるが故に」と。釋して曰はく、心主とは即ち心王なり、有無に滯らざるを以ての故に、心に罣碍なうして所爲の妙業、意に隨つて能く成ず。故に心主自在といふ。心王自在とは即ちこれ淨菩提心の更に一轉の閒明を作して、前劫に倍勝することを明すなり、心王は猶ほ池水の性の木より清淨なるが如く、心數の淨除は猶ほ客塵の清淨なるが如し。この故に此清淨を證する時即ち能く自ら心の本不生を覺る。何を以ての故に。心は前後際俱に不可得なるが故に。譬へば大海の波浪は、縁より起するを以ての故に、即ちこれ先にも無く後にも無し。而も水性は爾らず、波浪の縁より起する時、水性はこれ先に無きにも非ず、波浪の因縁盡くる時水性はこれ後に無きにも非ざるが如く、心王も亦復かくの如し、前後際無し、前後際斷ずるを以ての故に、復境界の風に遇うて縁に隨つて起滅すと雖も、而も心性は常に生滅無し、この心の本不生を覺るは、これ漸く阿字門に入るなり。かくの如きの無爲生死の縁因生壞等の義は『勝鬘經』『寶性佛性論』等の中に廣く明すが如し。謂く、本不生とは兼ねて不生不滅不斷不常不一不異不去不來等を明す。三論家にはこの八不を擧げて、以て究極の中道と爲す。故に吉藏法師の『二諦方言、佛性』等の章に盛りてこの義を談す。頌に曰はく、五韻

因縁生の法は木より無性なり、空假中道都て不生なり
 波浪の滅生は但しこれ水なり、一心は木より湛然として澄めり

【五邊】著邊の法にして中道實相と相應せざるものなり。即ち第一は生、第二は滅、第三は不生不滅、第四は亦生亦不生滅、第五は亦非亦不生滅の五句

【心亭】第八、第九の住心なり。經に云はく「秘密主云云」以下引證

【那伽羅樹】(Nāgārāja)龍樹(新譯には龍猛)著龍の梵名

【三】以下は第八住心の釋、此の住心は大日經所説の三劫の中には第三劫の初心、六無畏の中は第六の無畏、三乘の中は一乘に相當し、宗に約せば天台法華宗に當る

【百會】釋迦如來【華胥】印度【一乘三草】法華一乘を分別して三

色空不壞にして智能く達す、眞俗宛然として理分明なり。八本の利刀戲論を斷つ、五邊而縛し自降して平かなり。心通無碍にして佛道に入る、此初門より心亭に移る。

經に云はく「秘密主、彼かくの如く無我を捨てて、心主自在にして自心の本不生を覺る。何を以ての故に、秘密主、心は前後際不可得なるが故に、かくの如く自心の性を知るは、これ二劫を超越する瑜祇の行なり」と、「菩提心論」に云はく「當に知るべし一切の法は空なり、已に法の本無生を悟んぬれば、心體自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失無からしむ。妄心若し起らば知つて隨ふこと勿れ、妄若し息む時は心源空寂なり」と。

【問ふ】諸の戲論を絶つて寂靜無爲なり、かくの如きの住心は極底に到るや否や。【那伽羅樹那菩薩の説かく「清淨本覺は無始より來た修行を觀たず、他力を得るにあらず、性徳圓滿し本智具足せり。亦四句を出でて亦五邊を離れたり、自然の言も自然なること能はず、清淨の心も清淨なること能はず、絶離絶離せり、かくの如きの本處は無明の邊域にして明の分位に非ず。】

【三】第八一道無爲心又は如實知自心と名け。若し夫れ孔宣雲日に出でて、五常を九州に述べ、百會華胥に誕れて一乘を三草に開く。於是狂醉の黎元は住まつて進まず、癡闇の黔首は往いて歸らず、七十の達者は頗るその堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口を信ず。度内の五常は方圓合はず、界外の一草は大小入ら

【一乘三草】法華一乘を分別して三

【百會】釋迦如來【華胥】印度【一乘三草】法華一乘を分別して三

【一乘三草】法華一乘を分別して三

【一乘三草】法華一乘を分別して三

【一乘三草】法華一乘を分別して三

【一乘三草】法華一乘を分別して三

【一乘三草】法華一乘を分別して三

【一乘三草】法華一乘を分別して三

【一乘三草】法華一乘を分別して三

乗を説くこと。
 【界外の一事】 大白牛車を云ふ。
 【三七に樹を觀じ】 法華經第一に所謂「三七日中思惟」なり。
 【四十に機を待つ】 釋尊四十年の説法は終に法華の機根を待つと。
 【會三歸一】 三乘の方便攝教を會して法華一乘の眞實教に歸入せしむること。
 【指本遮末】 釋尊の證果を遮して久遠の本地に入ること。即ち拂迹顯本の義なり。
 【寶塔云云】 法華經寶塔品涌出品の意。
 【曇珠云云】 同安樂普門兩品の意。
 【利智の發云云】 同譬喻、涌出兩品の意なり。
 【一實の理云云】 同方便品の意。
 【露牛】 長者大白牛車を露地に與へ

す。この故に三七に樹を觀じ、四十に機を待つ。初には四諦方等を轉じて人法の垢穢を洗ひ、後には一雨の圓音を灑いで、草木の芽葉を露ほす。蓮華三昧に入つて、性徳の不染を觀じ、白毫の一光を放つて、修成の遍照を表するが如きに至つては、會三歸一して佛智の深多を讚じ、指本遮末して成覺の久遠を談じ、寶塔騰踊して二佛同座し、娑界震裂して四唱一處なり。曇珠を賜ひ、瓔珞を獻す。利智の驚子は吾が佛の魔に變ぜるかと思ひ、等覺の彌勒は子の年の父に過ぎたることを惟しむ。一實の理、本懷をこの時に吐き、無二の道、満足を今日に得。爾れば乃ち羊鹿麋れて露牛疾し、龍女出でて象牛迎ふ。二種の行處は身心の空宅に宿り、十箇の如是は止觀の宮殿に安ず。寂光の如來は境智を融じて心性を知見し、應化の諸尊は行願を顧みて、分身、相に隨ふ。寂にして能く照せり、照にして常に寂なり、澄水の能く鑿るに似たり、瑩金の影像の如し。濕金即ち照影、照影即ち金水なり。即ち知んぬ、境即ち般若、般若即ち境なり。故に無境界といふ。即ちこれ實の如く自心を知るを名けて菩提と爲す。故に大日尊、祕密主に告げて云はく、「祕密主、云何が菩提とならば謂く、實の如く自心を知るなり、祕密主、この阿耨多羅三藐三菩提は乃至佛法として少分も得べきことある無し、何を以ての故に、虚空の相はこれ菩提なり、知解のものも無く、亦閃爍のものも無し。何を以ての故に。菩提は無相なるが故に。祕密主、諸法は無相なり。謂く、虚空の相なり。爾時、金剛手復佛に白して言さく、「世尊、誰か一切智を尋求する。誰か菩提の爲に正覺を成ずる者、誰か彼一切智智を發起する。」佛の言はく、「祕密主、

し譬なり。即ち一乗のこと。

【龍女】法華經提婆品の意、龍女は八歳の龍女成佛せしを云ふ。

【象王】文殊なり

【二種の行處】安樂品の意、彼の品の四種安樂中の第一身安樂の段にある行處、近處の二種を明す。

【故に大日尊云云】以下の文は大日經第一卷淨菩提心觀の相を説くの文なり。

自心に菩提及び一切智を尋求す。何を以ての故に。本性清淨なるが故に。心は内にあらず、外にあらず、及び兩中間にも心不可得なり。秘密主、如來應正等覺は青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、紅に非ず、紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず、短に非ず。圓に非ず、方に非ず、明に非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず。秘密主、心は欲界と同様に非ず、色界と同様に非ず、無色界と同様に非ず、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人、趣と同様に非ず。秘密主、心は眼界に住せず、耳鼻舌身意界に住せず、見に非ず、顯現に非ず、何を以ての故に、虚空相の心は諸の分別と無分別とを離れたり、所以何となれば、性、虚空に同なれば、即ち心に同なり。性、心に同なれば、即ち菩提に同なり。かくの如く秘密主、心と虚空界と菩提との三種は無二なり。これ等は悲を根本と爲して、方便波羅蜜滿足す。この故に、秘密主、我諸法を説くこと是のごとし、彼諸の菩薩衆をして、菩提心清淨にして、其心を知識せしめんとなり。秘密主、若し族姓の男、族姓の女、菩提を説知せんと欲せば、當にかくの如く自心を説知すべし。秘密主、云何が自心を知るとならば、謂く、若し分段、或は顯色、或は形色、或は境界、若は色、若は受想行識、若は我、若は我所、若は能執、若は所執、若は清淨、若は界、若は處、乃至一切の分段の中に求むるに不可得なり。秘密主、この菩薩の淨菩提心門を、初法明道と名く。釋して曰はく、謂く、無相虚空相及非青非黄等の言は、並にこれ法身眞如一道無爲の眞理を明す、佛これを説いて初法明道と名けたまふ。智度には

【無畏三藏】善無畏三藏にしてこの文は大日經疏第二卷に出づ。

【問ふ云云】以下引證。

入佛道の初門と名く。佛道と言つば金剛界宮大目曼荼羅の佛を指す。諸の顯教に於てはこれ究竟の理智法身なれども、眞言門に望めばこれ即ち初門なり。大日世尊及び龍猛菩薩並に皆明かに説きたまへり、疑惑すべからず。又下の文に云はく、所謂空性は根境を離れて相も無く境界もなし、諸の戲論を越えて虚空に等同なり、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離るとは、亦これ理智法身を明す。無畏三藏の説かく、行者この心に住する時、即ち釋迦牟尼の淨土毀せずと知り、佛の壽量長遠、本地の身と上行等の從地涌出の諸の菩薩と一處に同會すと見る。對治道を修するものは、迹徧處に隣ると雖も然れども一人をも識らず、是故に此事を秘密と名く、此理を證する佛を亦常寂光土の毘盧遮那と名く。天隋の天台國清寺の智者禪師この門に依つて止觀を修し、法華三昧を得て、即ち法華二中論二智度_二を以て所依と爲して一家の義を構ふ。この乘の趣き大體かくの如し。頌にははく、四韻

前劫の菩薩は戲論と作る、この心の正覺も亦眞に非ず

無爲無相にして一道淨く、非有非無にして不二を陳せり

心境絶泯して常寂の土なり、語言道斷して遮那の賓なり

身心也滅して大虚に等し、隨類影現して變化の仁あり

問ふ、かくの如きの一法界一道眞如の理をば、究竟の佛とや爲ん。龍猛菩薩の説かく、「一法界心は百非にあらず、千是を背けり。中にあらず、中にあらざれば、天を背けり。天を背きぬれば、洪水の談足斷つて止り、審慮の量手亡じて任ず。かくの如きの一心は無

明の邊域にして明の分位にあらず。一

【四】第九極無自性住心

極無自性心とは、今この心を釋するに、二種の趣きあり。一には顯略趣、二には祕密趣なり。顯略趣とは、それ甚深なるは慶噓、峻高なるは虛空、久遠なるは芥石、然りと雖も芥石も竭き腐き、虛空も量りつべし、蘇迷は十六萬、慶噓は八億那なり。近うして見難きは我が心、細にして空に遍するは我が佛なり。我が佛思議し難し、我が心廣にして亦大なり。巧藝心迷つて竿を擲ち、離律眼盲うして見ることを休む。禹が名舌斷え、夸が歩み足崩る。聲縁の識も識らず、薩埵の智も知らず、奇哉の奇、絶中の絶なるは、其れ只自心の佛か。自心に迷ふが故に、六道の波鼓動し、心原を悟るが故に、一大の水澄靜なり。澄靜の水影萬像を落し、一心の佛諸法を覺知す。衆生この理に迷つて輪轉絶ゆる能はず。蒼生太だ狂醉して自心を感じること能はず。大覺の慈父その歸路を指し示したまふ。歸路は五百山旬、この心は則ち都亭なり。都亭は常の舎にあらず、縁に隨つて忽に遷移す。遷移定れる處なし。この故に自性無し。諸法自性なきが故に、卑を去け尊を取る。故に眞如受熏の極唱、勝義無性の祕告あり。一道を彈指に驚かし、無爲を未極に覺す。等空の心ここに於て始めて起り、寂滅の果、果還つて因と爲る。この因この心、前の顯教に望めば極果なり。後の秘心に於ては初心なり、初發心の時に、便ち正覺を成ずること、宜しく其れ然るべし。初心の佛その徳不思議なり。萬徳始めて顯れ、一心稍現す。此心を證す

【四】以下は第九住心の釋段。此住心は顯教の極果。故に教の分齊に約せば華嚴宗に當る。【慶噓】水と譯す即ち海水のことなり。【蘇迷】須彌山のこと。前註。【八億那】水輪は十一億二萬山旬にして、此内三億二萬山旬は凝結して金となる。故に残る所の水輪分は八億山旬なり。【華】六藝の一、即ち算數なり。【離律】離は離朱なり。黃帝時代の人。即ち日の明かなるもの。律は阿那律にして天眼通を得たる人。【夸】夸父にして足の早き人なり。【歸路】第九住心の爲に歸路を示すなり。

【十箇の量】八十
 華嚴等には十三ヶ
 量等の身を説くも
 今は満數を以て十
 箇の量とす。
 【七處】人中の三
 處、天上の四處な
 り。
 【八會】第一會は
 菩提樹下、第二は
 普光法堂、第三は
 初利天、第四は夜
 摩天、第五は兜率
 天、第六は他化自
 在天、第七は普光
 法堂、第八は給孤
 獨園なり。
 【九世】三世に各
 三世を分つ故に九
 世となる。
 【帝網】帝釋天の
 羅網なり。
 【錠光】燈光。
 【五位】信、住、
 行、向、地の五位
 なり。
 【十身】融三世間
 の十身なり。
 【杜順和上】支那
 華嚴宗の第一祖な
 り。終南山に住む
 【五教】五教止觀
 【智儼】第二祖

る時、三種世間は即ち我が身なりと知れり。十箇の量等は亦我が心なりと知れり。盧遮那
 佛、始め成道の時、第二七日に普賢等の諸大菩薩等と廣くこの義を談じたまへり、これ即ち
 所謂華嚴經なり。爾れば乃ち華嚴を苞ねて以て家と爲し、法界を籠めて國とす。七處に座
 を莊り、八會に經を開く。この海印定に入て法性の圓融を觀じ、彼山王の機を照して心佛の
 不異を示す。九世を刹那に攝し、一念を多劫に舒ぶ。一多相入し、理事相通す。帝網をその重
 重に譬へ、錠光をその隱隱に喻ふ。遂に覺母に就いて以て發心し、普賢に歸して證果す。
 三生に練行し百城に友を訪ふ。一行に一切を行じ、一斷に一切を斷す。初心に覺を成じ、十
 信に道圓なりと云ふと雖も、因果異ならずして五位を経て車を馳せ、相性殊ならずして十身
 を擲けて同歸す。これ即ち華嚴三昧の大意なり。故に大日如來祕密主に告げてのたまはく、
 「所謂空性は根境を離れて相も無く境界も無し。諸の戲論を越えて虛空に等同なり、有爲無
 爲界を離れ諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生す」と。善無畏三藏の
 説かく、「この極無自性心の一句に悉く華嚴教を攝し盡す」と。所以何となれば、華嚴の大
 意は始を原ね終りを要むるに眞如法界不守自性隨緣の義を明す。杜順和上はこの法門に依
 つて「五教華嚴三昧法界觀」等を作り、弟子の智儼相續し、智儼の弟子法藏法師又五教を
 廣して、巨歸綱目及び疏を作れり。即ちこれ華嚴宗の法門一一の義章なり。頌に曰はく、六觀
 風水龍王は一法界、眞如生滅この峯に歸す
 輪華能く體大等を出す、器衆正覺極めて甚深なり

【法藏法師】第三祖。賢首大師のこと。

【風水龍王】生滅所入の名にして第九住心に當る。

【輪華】輪多聚華即ち明珠と譯し性淨本覺に喩ぶ。

【五相成身】佛身を成ずる五種の觀念方法なり。一は

通達菩提心、二は修菩提心、三は成金剛心、四は證金剛身、五は佛身圓滿なり。

【經に云はく云云】以下經文を引く。

即ち大日經、金剛頂經、守義經、菩提心論、釋論等を引證するなり。

【經に云はく】大日經第三劫の文なり。

【阿婆婆那伽三摩地】無識身等持と云ふ。此定に入る者は能く散亂等の障を對治す。

緣起の十支は五に主伴たり、五支を呑流するは海印の音なり

重重無礙にして帝網に喩ふ。體隱たる圓融は鏡光の心なり

華嚴三昧は一切の行なり、果界の十尊は諸刹に臨めり

この宮に入ると雖も初發の佛なり、五相成身追うて尋ねべし

經に云はく「有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて、極無自性心生ず。等虚空無邊の一切の佛法、これに依つて相續して生ず。祕密主、かくの如きの初心をば佛成佛の因と説きたまふ。業煩惱に於て解脱すれども、而も業煩惱の具依たり」と。金

剛頂經に説かく「薄伽梵大菩提心普賢大菩薩、一切如來の心に住したまふ。時に如來、この佛世界に満ちたまふこと猶し胡麻の如し。爾時に一切如來雲集し、一切義成就菩薩摩訶

薩の菩薩場に坐したまへるに於て往詣して、受用身を示現し、咸くこの言を作したまふ。善男子、云何が無上正等覺菩提を證する。一切如來の眞實を知らずして諸の善行を忍ぶや。

時に一切義成就菩薩、一切如來の菩薩に由て、即ち阿婆婆那伽三摩地より起つて一切如來を禮して白して言さく、世尊如來我に教示したまふ、云何が修行せん、云何がこれ眞實なる。

かくの如く説き已つて、一切如來異口同音に彼菩薩に告げて言はく、善男子、當に觀察自心三摩地に住して自性成就の眞言を以て自ら恣に誦まべし」と。守護國經に云はく、「その時に釋迦牟尼佛の音はく、祕密主、我無量無數劫の中に於て是の如きの波羅蜜多を修集して、最後身に至つて六年苦行せしかども、阿耨多羅三藐三菩提を得て、大毘盧遮那とならざ

りき。道場に坐せし時、無量の化佛猶し油麻の如く虚空に遍満したまふ。諸佛同聲にして我に告げて言はく、善男子、云何が成等正覺を求むる。我佛に白して言さく、我はこれ凡夫なり、未だ求處を知らず、唯し願くば慈悲して、我が爲に解説したまへ。この時に佛同く我に告げて言はく、善男子、諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。汝今宜しく應當に鼻端に於て月輪を想ひ、月輪の中に於て唵字の觀を作すべし。この觀を作し已つて、後夜分に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。善男子、十方世界の如恆河沙の三世の諸佛、月輪に於て唵字の觀を作さずして成佛することを得といはば、是處あること無し、何を以ての故に、唵字は即ちこれ一切の法門なり、亦この八萬四千の法門の寶炬闍闍なり。唵字は即ちこれ毘盧遮那の眞身なり。唵字は即ちこれ一切陀羅尼の母なり。これより能く一切如來を生ず、如來より一切菩薩を生ず、菩薩より一切衆生を生ず、乃至少分所有の善根を生ず」といふ此なり。龍猛の「菩提心論」に云はく、「夫れ迷途の法は妄想より生ず、乃至展轉して無量無邊の煩惱を成じて、六趣に輪廻す。若し覺悟し已んぬれば、妄想止除して種種の法滅す。故に自性あること無し。復次に諸佛の慈悲は眞より用を起して衆生を救攝したまふ。病に應じて藥を與へ、諸の法門を施してその煩惱に隨つて迷津を對治す。後に遇うて彼岸に達しぬれば法已に捨つべし。自性無きが故に、乃至妄若し息む時んば、心源空寂なり、萬徳ここに具し、妙用無窮なり。但し自心性を具し、この心を具するもの、能く法輪を轉じて白他俱に利す。」又云はく、「性淨本覺は三世間の中に皆悉く離れずして、彼三

【問ふ云云】 當住心の極不を問答す
 【三自一心】 三自とは自體、自相、自用の三自、一心とは三大一味なるを云ふ。

【五】 以下は第十住心の釋段。即ち第九住心は顯教の至極なるも此第十住心に對すれば淺略にして、此住心初めて佛教の至極なることを明す。
 【四曼】 四種曼荼羅なり。

つを重習して一覺と爲して一大法身の果を莊嚴す。この故に名けて因熏習鏡と爲す。云何が名けて三種世間とする。一には衆生世間、二には器世間、三には智正覺世間なり。衆生世間とは謂く、異生性界なり。器世間とは謂く、所依止の土なり。智正覺世間とは謂く、佛菩薩なり。これを名けて三と爲す。此中の鏡とは、謂く、輪多梨華鏡なり。輪多梨華を取つて一處に安置して、周く諸物を集むるに此華の熏に由て、一切の諸物皆悉く明淨なり。又明淨の物、華の中に現前して皆悉く餘無く、一切の諸佛の中に、彼華現前して亦復餘無きが如く、因熏習鏡も亦復かくの如し。一切の法を熏じて清淨覺として悉く平等ならしむ。問ふ、「是の如きの一心の本法は至極の住心か。」
 『龍猛菩薩の説かく、「三自一心」の法は、一も一なること能はず。能入の一を假る。心も心なること能はず、能入の心を假る。實に我の名に非れども我に目く。亦自の唱へに非れども自に契へり。我の如く名を立つれども實の我に非ず、自の如く唱へを得れども實の自に非ず、玄玄の又の玄、遠遠の又の遠なり。かくの如きの勝處は、無明の邊域にして、明の分位にあらず。』

【五】 第十秘密莊嚴心 六頌

九種の住心は自性無し、轉深轉妙にして皆これ因なり

眞言密教は法身の說、祕密金剛は最勝の眞なり

五相五智法界體、四曼四印この心に陣す

刹塵の渤駄は吾が心の佛なり、海滴の金蓮は亦我が身なり

【四印】 四智印なり。

【金蓮】 金は金剛界、蓮は胎藏界。即ち兩部なり。

【一刀金】 三昧耶曼荼羅なり。

【經】 大日經なり。

【又云はく】 大日經第二卷具緣品第二の文なり。

【百字論】 五五の字に各各四點を加ふるが故に百字と照觀なり。

【十二字】 字輪品の説、悉曇十六點の前後の四字を除いて十二字とす。

【瑜伽】 (योग) 物と相應する義なり。(これは男聲にして呼べば瑜祇(よぎ)となる。)

【又龍猛菩薩云云】 眞言宗にては此文以下を以て傳授を要するものとして普通の席に於ては講義せざるものなり。

一一の字門萬像を含み、一一の刀金皆神を現す

萬徳の自性輪圓して是れり、一生に莊嚴の仁を證することを得べし

經に云はく、「復次に祕密主、眞言門に菩薩の行を修行する諸の菩薩は、無量無數百千俱那那庾多劫に積集せる無量の功德智慧と、眞さに諸行を修する無量の智慧方便とを、皆悉く成就す」と。解して云はく、「此は、初めて眞言に入る菩薩の功德を歎す。」又云はく、「爾時に毘盧遮那世尊、一切如來一體速疾力三昧に入つて、自證の法界體性三昧を説いて言ひたまはく、我本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脫することを得、因縁を遠離し、空は虚空に等しと知つて、如實相の智生ず。已に一切の暗を離れぬれば、第一實無垢なり」と。

解して云はく、「此頌は文約にして義廣く、言浮んで心深し、面にあらずんば詭き難し。又百字論十二字等の眞言觀法三摩地門、及び金剛界三十七尊四智印の三摩地あり、即ちこれ大日如來の極祕の三昧なり、文廣くして具さに述ぶること能はず。又訛謔菩薩の「菩提心論」に云はく、「第三に三摩地と言へば、眞言行人かくの如く觀じ已つて、云何が能く無上菩提を證する。當に知るべし。法爾に應に普賢大菩提心に住すべし、一切衆生は本有の薩埵なれども貪瞋癡の煩惱の爲に縛せらるるが故に、諸佛の大悲、善巧智を以て此甚深祕密瑜伽を説いて修行者をして内心の中に於て日月輪を觀ぜしむ。此觀を作すに由て、本心を照見するに湛然清淨なること、猶し滿月の光、虚空に遍して分別する所無きが如し。亦是無覺了と名け。亦是淨法界と名け、亦是實相般若波羅蜜海と名く。能く種種無量の珍寶三摩地

を合すること、猶し、満月の潔白分明なるが如し。何となれば爲く、一切有情は悉く普賢の心を合せり。我自心を見るに形月輪の如し。何が故にか、月輪を以て喩と爲すとならば、爲く、満月圓明の體は、則ち菩提心と相類せり。凡そ月輪に一十六分あり。瑜伽の中の金剛埵薩より金剛等に至るまで、十六大菩薩あるに喩ふ。三十七尊の中に於て、五方の佛位に各一智を表す。東方の阿闍佛は、大圓鏡智を成ずるに由る、亦金剛智と名く。南方の寶生佛は、平等性智を成ずるに由る、亦灌頂智と名く。西方の阿彌陀佛は、妙觀察智を成ずるに由る、亦蓮華智と名け、亦轉法輪智と名く。北方の不空成就佛は成所作智を成ずるに由る、亦羯磨智と名く。中方の毘盧遮那佛は法界智を成ずるに由て本と爲す。已上の四佛智より四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩は即ち金寶法堂なり。三世一切の諸の聖賢生成生育の母なり。於是印成せる法界體性の中より四佛を流出す。四方の如來に各四菩薩を攝す。東方の阿闍佛に四菩薩を攝す、金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛善哉を四菩薩と爲す。南方の寶生佛に四菩薩を攝す、金剛寶、金剛光、金剛幢、金剛笑を四菩薩と爲す。西方の阿彌陀佛に四菩薩を攝す、金剛法、金剛利、金剛因、金剛語を四菩薩と爲す。北方の不空成就佛に四菩薩を攝す、金剛業、金剛護、金剛牙、金剛拳を四菩薩と爲す。四方の佛の各の四菩薩を十六大菩薩と爲す。三十七尊の中に於て、五佛四波羅蜜及び後の四攝八供養を除いて、但し十六大菩薩の四方の佛の所攝たるを取るなり。又一摩訶般若經の中に、内容より無性自性空に至るまで亦十六の義あり、一切有情は心質の中に於て一分

の淨性あり、衆行皆備れり、その體極微妙にして皎然明白なり。乃至六趣に輪廻すれども亦變易せず、月の十六分の一の如し。凡そ月の其一分の明性、若し合宿の際に當んぬれば、但し日光の爲に其明相を奪はる。所以に現せず、後起つ月の初より、日日漸く加して十五日に至つて圓滿無礙なり。所以に觀行者、初に阿字を以て本心の中の分の明を發起して、只し漸く潔白分明ならしめて無生智を證す。夫れ阿字とは一切諸法本不生の義なり。『毘盧遮那經』の疏に准ぜば、阿字を釋するに具に五義あり、一には阿字（短聲）これ菩提心なり、二には阿字（引聲）これ善提行なり、三には暗字（短聲）これ證菩提の義なり、四には惡字（短聲）これ般若涅槃の義なり、五には惡字（引聲）これ具足方便智の義なり、又阿字を將て『法華經』中の開示悟入の四字に配解す。開の字とは佛知見を開く、即ち雙て菩提心を開く初の阿字の如し、佛知見を悟え。第三の暗字の如し、これ證菩提の義なり。入の字とは佛知見に入る、第四の惡字の如し、これ般若涅槃の義なり、總じて之を言へば具足成就の第五の惡字なり、これ方便善巧智圓滿の義なり。即ち阿字これ菩提心の義なることを證する頌に曰はく、

八葉の白蓮一肘の間に、阿字素光の色を炳現す
 禪智俱に金剛縛に入れて、如來寂靜智を召入す

扶れ阿字に會ふものは、皆これ決定して之を觀すべし、當に圓明の淨識を觀すべし。若し纔に見るをば、則ち眞勝義諦を見ると名け、若し常に見れば、則ち菩薩の初地に入る。若し轉漸く增長すれば、則ち廓法界に周く、量虚空に等し、卷舒自在にして當に一切智を具すべし。凡そ瑜伽觀行を修習する人は、當に須く具に三密の行を修して、五相成身の義を證悟すべし。所言の三密とは、一に身密とは契印を結んで聖衆を召請するが如きこれなり。二

に語密とは密に眞言を誦じて、文句をして了了分明ならしめて、謬誤無きが如きなり。三に
 意密とは輪廻に住して白淨月の圓滿に相應し菩提心を觀するが如きなり。次に五相成身
 を明さば、一にはこれ通達心、二にはこれ成菩提心、三にはこれ金剛心、四にはこれ金剛
 身、五にはこれ無上菩提を證して金剛堅固の身を獲るなり。然も此五相具さに備ふれば方
 に本尊の身と成る、その開明は則ち普賢の身なり、亦これ普賢の心なり、十方の諸佛と之
 れ同じ。亦乃ち三世の修行證に前後あれども、迷悟に及び已んぬれば去來今なし。凡人の
 心は含蓮華の如く、佛心は滿月の如し。此觀著し成ずれば、十方國土の若は淨、若は穢、
 六道の含識、三乘の行位、及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、
 三世の諸佛悉く中に於て現じ、本尊の身を證して普賢の一切の行願を滿足す。故に『大
 毘盧遮那經』に云はく、「是の如きの眞實心は故佛の宣説したまふ所なり」と。問ふ、「前に
 二乘の人は法執あるが故に、成佛することを得ずと言ふ。今復菩提心を修せしむる三摩地と
 は云何が差別なる。答ふ、「二乘の人は法執あるが故に、久久に理を證し、沈空滯寂にして
 限るに劫數を以てし、然して大心を發し、又散善門の中に乘じて無數劫を經、この故に厭離
 すべきに足れり、依止すべからず。今眞善行人は、既に入法の上執を破して、能く正しく眞實
 を見るの智なりと雖も、或は無始の間隔の爲に未だ如來の一切智智を證すること能はず、
 故に妙道を欲求し次第を修持して凡より佛位に入るものなり。即ちこの三摩地とは能く諸
 佛の自性に達し、諸佛の法身を悟り、法界體性智を證して大毘盧遮那佛の自性身、受用身

變化身、等流身を成ず。爲く、行人未だ證せざるが故に理宜しくこれを修すべし。故に、『大毘盧遮那經』に云はく、悉地は心より生ずと、『金剛頂瑜伽經』に説くが如し。一切義成就菩薩初めて金剛座に坐し、無上道を取證し、遂に諸佛のこの心地を授くることを蒙つて然して能く果を證す。凡そ今の人、若し心決定して教の如く修行すれば、座を起たずして三摩地現前し、於是本尊の身を成就すべし。

故に『大毘盧遮那經供養次第法』に云はく、

「若し勢力の廣く増益する無くば、法に住して但し菩提心を觀すべし。佛の中に萬行を具して淨白純淨の法を満足すと説きたまふ。此菩提心は能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現すれば則ち一切の導師と爲る。若し本に歸すれば則ちこれ密嚴國土なり。座を起たずして能く一切の佛事を成ず。」菩提心を讚じて曰はく、

若し人佛慧を求めて、菩提心に通達すれば父母所生の身に、速に大覺の位を證す

問ふ、「已に頌の詞を聞きつ、請ふその義を説け。」答ふ、「眞言教法は一一の聲字、一一の言名、一一の句義、一一の成立、各無邊の義を具せり。劫を歴とも窮盡し難し。又一一の字に三義を具せり。所謂聲字實相なり。又二義を具す。字相字義これなり。又一一の句等に淺略深祕の二義を具す。帥爾に談じ難し。若し實の如く説かば小機は疑を致し謗を生じて、定んで一闍提無間の人と爲らん。この故に應化の如來は祕して談ぜず、傳法の菩薩

【問ふ云云】當住心最初の頌文「九種住心無自性云云」の六韻の義について問答釋なり。

は置いて論せず、意これにありや。故に『金剛頂經』に説かく、「この毘盧遮那摩地の法は未滿頂のものに向つて一字をも説くことを得ざれ。若し本尊の儀軌眞言は縱令同法の行者なりと雖も輒く説くことを得ざれ。若し説かば現前には天に中り殃を招き、後には無間獄に墮せん」と云云。

「譯んで勸誡を承はるは、敢て違越せず。重ねて請ふ、初の頌の文を示説したまへ。」
 「九種住心無自性、深轉妙皆是因」と云へば、この二句は前の所説の九種の心は、皆至極の佛果に非ずと遮す、九種と言へば、異生羶羊心乃至極無自性心これなり。中に就て初の一は、凡夫の一向行、惡行不修微少善を擧ぐ。次の一は人乘を顯し、次の一は天乘を表す。即ちこれ外道なり。下下界を墮ひ、上生天を感つて、解脫を顯棄すれども、遂に地獄に墮す。

巴上の三心は皆これ世間の心なり、未だ出世と名けず。第四の唯蘊已後は瓊果を得と名く、出世の心の中に唯蘊持掌はこれ小乘教、他縁以後は大乗の心なり。大乘に於て前の二は菩薩乘、後の二は佛乘なり。是の如きの乘、自乘に佛の名を得れども後に望めば戲論と作る。前前は皆不住なり、故に無自性と名く。後後は惡く果にあらず、故に皆これ因といふ。轉轉相望するに各各に深妙なり、所以に深妙といふ。眞言密教法身説とは此一句は眞言の教主を顯す、極無自性以外の七教は皆これ他受用應化佛の説く所なり。眞言密教兩部の秘藏はこれ法身大毘盧遮那如来と自眷屬の四種法身と金剛法界宮及び眞言宮殿等に

住して自受法樂の故に演説したまふ所なり。十八會の指歸等にその文分明なれば更に成證を引かず。祕密金剛最勝眞とは、此一句は眞言乘教の諸乘に超えて究竟眞實なることを示す。

祕藏寶鑰卷下終

大毘盧遮那成佛經疏卷第一 一本

沙門 一行阿闍梨の記

入眞言門住心品第一

【一】第二十卷これ
 は善無畏三藏が唐
 の開元十三年に梵
 本一六日經一を漢
 譯せしに、同時に
 其意時に講説し、
 口づ其法けたる所
 を捕ひしものを、
 一行阿闍梨の筆記
 するものにして、密
 教の理論的説明は
 此書を以て嚆矢と
 す。

【住心品】 大日經
 は一節三十六品あ
 り。其初品を一入
 眞言門住心品一と
 云ひ、三密方便の
 門に入りて無相の
 義を説く。然して
 此住心品を釋する
 當に住心品は、
 古來教相書となし
 之を又、日ノ端に
 と稱して、藏論に
 講説し得るものと
 せり。第二具緣品
 以下はこれを、與
 ノ疏一と稱し、事
 相の書となし相傳
 傳授の部に屬せる
 ため一般に講説す

【一】「大毘盧遮那成佛神變加持」とは、梵音の毘盧遮那とは、是れ日の別名即ち除暗
 通明の義なり。然るに世間の日は則ち方分あり、若し其外を照らすときは内に及ぶこと能
 はず。明、一邊に在つて一邊に至らず。又暗し晝のみあつて光、夜を燭さず。如來智慧の
 日光は、則ち是の如くにあらず。一切處に遍じて大照明を作す。内外方所晝夜の別あるこ
 と無し。復次に日、閻浮提を行くに一切の青木叢林その性分に隨つて各增長することを
 得。世間の衆務これに因つて成ずることを得。如來の日光も遍く法界を照らして亦能く平
 等に無量の衆生の種種の善根を開發し、乃至世間、出世間の殊勝の事業これに直つて成辨
 することを得ざるなし。又重陰昏蔽して日輪隱没すれども亦壞滅するにあらず。猛風雲を
 吹いて日光燦照すれども、亦始めて生ずるに非るが如く、佛心の目も亦復是の如し。無明
 煩惱戲論の重雲の爲に覆障せらるると雖も而も滅する所なく、諸法の實相三昧を究竟じて圓
 明無際なれども而も増する所なし。是の如き等の種種の因縁を以て、世間の日、喩とすべ

る事を憚れるものなり。

【一】以下經題を釋す。

【毘盧遮那】梵語(Amitayus)目の別名、故に大目と云ふ。

【眞言門】曼荼羅を云ふ。

【方分】方處分限なり。

【重陰】密雲の太陽の光線を蔽ひかくすこと。

【無明、煩惱、戲論】無明は根本無明、煩惱は枝末の百六十心、戲論は本末に通ず。共に煩惱なり。

【實相三昧】阿字不生の理。

【衆生數】衆生は有情、故に十界の正報を指す。

【非衆生數】非情物、故に十界の依報を指す。

【有常】無爲の法即ち眞如實相なり。

【無常】有爲の法即ち生住異滅の四

からず。但し其少分相似を取るが故に、加ふるに大の名を以てして摩訶毘盧遮那といふなり。

「成佛」とは、具足の梵音には成三菩提といふべし。是れ正覺正知の義なり。謂く、如實智を以て過去未來現在の衆生數、非衆生數、有常無常等の一切の諸法を知る。皆了了に覺知するが故に名けて覺と爲す。而も佛といふは即ち是れ覺者なり。故に省ける文に就いて但し成佛といふなり。

「神變加持」とは、舊譯には或は神力所持といひ、或は佛所護念といふ。然も此自證の三菩提は一切の心地を出過して現に諸法の本初不生を覺る。この處は言語盡、竟し心行亦寂なり。若し如來威神の力を離れぬれば、則ち十地の菩薩なりと雖も尙し其境界にあらず。

況んや餘の生死の中の人をや。爾時に世尊往昔大悲願の故に而もこの念を作したまふ。若し我れ、但し是の如きの境界に住しては、則ち諸の有情これを以て益を蒙ること能はじ。

この故に自在神力加持三昧に住して、普く一切衆生の爲に種種の諸趣所意見の身を示し、種種の性欲所宜聞の法を説き、種種の心行に隨つて觀照門を開く。然も此應化は毘盧遮那の身、或は語或は意より生ずるにあらず。一切の時處に於て、起滅邊際俱に不可得なり。

譬へば幻師の咒術力を以て藥草を加持して、能く種種未曾有の事を現じ、五情の所對に衆心を悅可せしむ。若し加持を捨つるときは、然して後に隱沒するが如く、如來金剛の幻も亦復かくの如し。緣謝すれば則ち滅し、機興すれば則ち生ず。事に即して而も眞なり。終盡

相に従つて常なきものを指す。
【自在神力加持三昧】自在法身に大なる智の定にして、法身如來が此三昧(定)に入つて當經を説く。

【所常見】 好み見多所。

【心行】 心の行く所なり。

【觀照門】 觀照了照の門 行者能入の徑路なるが故に門と云ふ。

【五情】 眼、耳、鼻、舌、身の五情を云ふ。

【千日】 帝釋の位を得れば千日を具足して、三十三天に下たるが故に云ふ。即ち帝釋天の事。

【二】 以下、品號を擧げる。

【龍樹の釋論】 龍樹(舊譯)は眞言宗には龍猛(新譯)と云ひ、眞言宗所持八祖中の初祖。行倫とは大品般若の

あることなし。故に「神力加持經」といふ。若し梵本に據らば具に題して、「大廣博經因陀羅王」といふ。「因陀羅王」とは帝釋たり。言はく、此經は是れ一切如來必要の藏、大乘衆教に於て威德特尊なること、猶し千日の釋天の主たるが如し。今經の題太だ廣きことを恐る、故に具に存せず。

【二】 「入眞言門住心品」とは、梵本に具に二の題あり。初には「修眞言行品」といひ、

次には「入眞言門住心品」といふ。竊に入住の義を謂へば、修行を兼修るを以ての故に煩文を離れて、但し其一を著す。眞言といふは、梵には漫恒羅といふ。即ち是れ眞語如語不妄不異の音なり。龍樹の「釋論」には、之を秘密號と謂ひ、舊譯には咒といふ。正翻にはあらず。此品は經の大意を純論す。所謂衆生の自心品は、即ち是れ一切智智なり。實の如く了知するを名けて一切智者と爲す。是故に此教の諸の菩薩は、眞語を門となして自心に菩提を發し、即心に萬行を具し、心の正等覺を見、心の大涅槃を證し、心の方便を發起し、心の佛國を嚴淨す。因より果に至るまで、皆無所住にして而も其心に住するを以ての故に、「入眞言門住心品」と曰ふなり。「入眞言門」に略して三事あり。一には「身密門」、二には「語密門」、三には「心密門」なり。この事は下に當に廣く説くべし。行者この三方便を以て自ら三業を淨むるときは、即ち如來の三密の爲に加持せられて、乃至能く此生に於て地波羅蜜を滿足す。復劫數を経歴して備に諸の對治の行を修せず。故に「大品」に云はく、「或は菩薩初發心の時に、即ち菩薩の位に上つて不退轉を得るあり、或は初發心

釋論たる「大智度論」を指す。今の文は第三十八卷ノ二右にあり。

【入眞言門云々】「入眞言門」に三事あることを明かす。

【地波羅蜜】十波羅蜜の事、即ち十地所修の波羅蜜行なるが故に。即ち佛果を満足することなり。

【助教】三大阿僧祇劫の數なり。

【大品】大品般若の第二卷三、往生品第四の文なり。

【不退轉】初地に入ること。

【三】以下は順序なり。これに順序と別序とあり。その内、今は順序なり。

【薄伽梵】梵語、今は教主大日如來を指す。

【第一度】大智度論第一卷。

【阿耨梨】善無畏三藏を指す。以下之に同す。

の時に、即ち無上菩提を得て便ち法輪を轉ずるあり。一龍樹の以爲く、如し人遠く行くに羊に乗じて去るものは久久にして乃ち到り、馬は則ち差速し、若し神通に乗ずる人は發意の頃に於て便ち所詣に至る。發意の間に云何が到ることを得るといふことを得じ、神通の相は爾なり。疑を生すべからず。則ち此經の深旨なり。

【二】「一經」に「如是我聞一時薄伽梵住如來加持法界宮」といふは、經の初の五義は「智度」の中に廣く明すが如し。然も此經の梵本に闕いて通序なし。阿耨梨の云はく、「毘盧遮那の大木に十萬の偈あり。浩廣にして持し難きを以ての故に、傳法の聖者その宗要を探るに凡そ三千餘頌あり。眞言行法は文義略周せり。『大經』の正本にあらざるを以ての故に、通序を題せずと雖も、今例を以て之を加ふるに、義に於て傷ることなし。」

薄伽梵とは、論師の所解に具に六義あり。今この宗の中には、薄伽梵といふは是れ能破の義なり。人の利器を執持して摧伏するところ多し、其れ本より未だ此名あらざれども、世議つて其事迹を觀るが故に、號して能破者とするが如く、世尊も亦爾なり。大智の明を以て一切識心の無明煩惱を破したまふ。此等は本より無生にして亦相貌もなし。然れども慧日出づるときに暗惑自ら除く、是故に義を以て名けて破と爲す。『釋論』に亦云はく、「婆伽をば破と名け、婆をば能と名く」能く好怒癡を破するが故に婆伽婆と名く。二乘は三毒を破すと雖も亦了了に盡くさず。香を盛る器の餘氣故存するが如し。又草木の薪火の力薄きを以ての故に灰炭盡きざるが如し。如來は劫燒火の一切都盡して烟もなく炭もなきが如し。

【傳法の聖者】龍猛菩薩を指す。

【薄伽梵とは云々】以下薄伽梵の六義を明かす。

【論備】天親菩薩の春、親光菩薩を指す。今の所解は彼師所造の一佛地經論ノ一を指す。

【釋論】智度論第二卷ノ十七取意の文なり。

【劫燒火】三災劫末の火を云ふ。

【聲論】帝釋(天王)創めて一萬頭の聲明記論を造ると云ふ。

【智度論】第二卷十六の文なり。

【大日經】以下之に同す。

【四】即ち教主の體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。

【經】即ち教主の體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。

【智度論】第二卷十六の文なり。

故に婆伽婆と名く。復次に帝釋の「聲論」には、「女人を謂つて薄伽と爲す」これ欲求の因縁あれば能く煩惱を息むる義なり。又これ所從生の義なり。「金剛頂宗」には即ち此義を翻じて「女人」と訓ふは、即ち是れ般若佛母なり。無礙知見の人皆ごとごとく是れより生ず。其れ志女の因縁あつて與に相應することを得れば、煩惱戲論皆ごとごとく永く息む。世間の欲熱の小さく息すと雖も而も實に更に増すが如きにはあらず。密教は直に宣ふべからざるを以ての故に、多く是の如きの談話あり。學者當に類に觸れて之を思ふべし。又薄伽梵とは即ち有の聲を尊す。人多く資財を有するをば持資財者と名け、金を有するを以ての故に持金者と名くるが如く、如來は殊勝の徳を具するを以ての故に、持衆徳者と名く。「釋論」に亦云はく、「婆伽をば徳といひ、婆をば有といふ、是を育徳と名く。婆伽をば名聲と名け、婆をば有といふ。これを有名聲と名く」一切世間に育徳名聲の佛のごとくなるもの無し。則ち其義なり。「釋論」の中に多く譯して世尊と爲す、是れ數徳の總稱なり。西方の諸法、言尊者に及ぶをば收て直に其名を斥さずして先づ其功徳を叙す。大智舍利弗、神通口持説、頭陀大迦葉、持律優波羅等といふが如し。故に此經の中に偈して薄伽梵毘盧遮那といふ。今此方の文勢に順じて或は世尊を以て下に居くなり。

【四】「經」に「薄伽梵住如來加持」といふは、薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり。次に如來といふは是れ佛の加持身、其れ所住の處なり。佛の受用身と名く。即ち此身を以て佛の加持住處と爲す。如來心王諸佛住にして、而も其中に住したまふ。既に遍一切處の加

【釋論】智度論第二卷十六の文なり。

【大日經】以下之に同す。

【四】即ち教主の體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。

【智度論】第二卷十六の文なり。

【大日經】以下之に同す。

【四】即ち教主の體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。

【智度論】第二卷十六の文なり。

【大日經】以下之に同す。

【四】即ち教主の體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。即ち當體を定む。

加持身説を持す。而して此兩説の相違に依つて當段の文、其訓み方大いに異なる。今は暫らく古義相傳の説による。

【薄伽梵は即ち云】此文は古義の今若し新義の訓み方に従へば一薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり。次に如來と云ふは佛の處なり。佛の受用身と名くとな

【次】に又加持住處云云。住處成嚴の總表を明かす。【釋論】智度論第四十七卷に百八三昧を説き、其中の第十を金剛三昧と云ひ、第二十三を金剛輪三昧と云ひ、第四十八を如金剛三昧と云ふ。【宮】廣大金剛法界宮を指す。【古佛】過去久遠

持力より生ず。即ち無相法身と無二無別なり。而も自在神力を以て一切衆生をして身密の色を見、語密の聲を聞き、意密の法を悟らしむ。其根性に隨つて種種に不同なり。即ち此所住を加持處と名く。次に又加持住處を釋敷するが故に、廣大金剛法界宮といふ。大は謂く、無邊際の故に、廣は謂く、不可數量の故に。金剛といふは實相智に喩ふ。一切語言心行の道を過ぎたり。適に所依なし。諸法を示さず初中後なし。不盡不壞にして、諸の過罪を離れたり。變易すべからず、破毀すべからず。故に金剛と名く。世間の金剛寶に三事の最勝あるが如し。一には不可壞の故に、二には寶中の上の故に、三には戰具の中に勝れたるが故に、此れ「釋論」の三種の金剛三昧の中の喩と意大に同なり。法界とは廣大金剛の智體なり。此智體とは所謂如來の實相智身なり。加持を以ての故に即ち是れ眞實の功德に莊嚴せらるる處の妙住の境、心王の所都なるが故に宮といふ。此宮は是れ古佛成菩提の處、所謂摩醯首羅天宮なり。「釋論」に云はく、「第四禪の五種是那舍の住處なり。淨居天と名く。是を過ぎて以往に十住の菩薩の住處あり、亦淨居と名く。號して大白在天王と曰ふこれなり」今此宗の明す義は自在加持神心の所宅なるを以ての故に名けて自在天王宮と曰ふ。謂く、如來有應の處に隨つて此宮にあらざること無し。獨三界の表に在るにあらず。「一切持金剛者皆悉集會」といふは、次に妙眷屬を明すなり。如來この宮の中に在すとき獨處すとやせん。眷屬ありや。故に此中に乃ち無邊の眷屬あつて常に集會する所なりといふ。所謂執金剛等なり。梵に伐折羅陀羅と云ふ。此伐折羅は即ち是れ金剛杵なり。陀羅は是れ

【大空】 本不生の智なり。此智を得んがためには先づ空有の二見を斷ずべきなり。

【如來信解云云】 住處成就の別説の文を廣説す。

【信解】 十地を指す。

【踊躍】 菩薩、地に昇進するの義なり。

【遊戯、神變】 遊戯は喻に約し、神變は法に就く。

【願行】 願は五大願、行は三密、六度の行なり。

【衆生を成就す】 衆生を化導して佛果を成就せしむること。

【一體速疾力三昧】 一體は阿字、阿字は萬法歸一の體性にして無量の萬徳を具し、一切の福智を速疾に集め得る故に阿字の三昧をば斯く云ふ。

【善知識】 曼荼會

るものとする。

哩拏多といふは是れ踴躍の義、遊戯の義、神變の義なり。謂く、初發心より以來、深く善根を種ゑて種種の願行を起し、佛土を莊嚴し、衆生を成就して恆に殊に勝進して休息せざるが故に即ち是れ超昇騰躍の義なり。掉動鼓舞して能く善巧の三業を以て普く衆心を悦ばしむるが如し。故に此騰躍を即ち遊戯と名く。是の如きの遊戯は、即ち是れ菩薩の自在神通なり。毘盧遮那もと菩薩の道を行せし時、一體速疾力三昧を以て無量の善知識を供養し、遍く無量の諸度門を行じ自利利他の法皆具足して能く是の如きの如來智寶の集成する所の祕密莊嚴法界樓觀を得たまへり。一切實報の所生に於て最も第一たり。猶し眞陀摩尼に諸寶の王たるが如し。故に「遊戯神變生大樓閣寶王」といふ。それ高にして窮りなし。當に知るべし、廣にして亦無際なり。邊不可得なるを以ての故に、亦復中もなし。此は是れ過一切處の身の所住の處なり。當に知るべし、是の如きの樓觀も、亦一切處に過せり。次に樓觀莊嚴の相を明す。猶し人あつて、種種の雜色の金剛を以て金剛を單飾するに然も其體性は差別あること無きが如く、今も亦是の如し。還つて如來種種の功徳寶王を以て樓閣寶王を問飾せり。何を以ての故に、更に法として是の加きの寶性を出るものあること無きが故に、然も此第一寂滅の相は、如來加持神力を以て應度のものをして諸の法門の表像に隨つて若し見聞觸知すべきには、即ち此を以て門となして法界に入らしむ。善財童子の彌勒の宮殿に入つし因縁の如し。此中に廣く明すべし。菩薩之身為師子座」とは上に金剛法界宮と説く、即ちこれ如來の身なり。次に「大樓閣寶王」といふ、亦即ち是れ

【諸尊聖衆なり】

【一切實報】一切實相の理を滿觀して無漏智に依りて得たる果報、

【眞陀摩尼】思惟寶、即ち如意寶珠の事なり。

【寶性】阿字六大の體性を云ふ。

【第一藏滅相】諸法發生の本源にして差別を離れ一切の物を絶したる相、即ち阿字本不生にして六大體大を意味す。

【善財童子】華嚴經第七十九卷入法界品に現はれる修行者。

【第十一地】極界を指す。

【釋迦】智度論第七卷の十三。

【勇健】勇勤と意義同なり。

【五】以下衆成就の別説たる十九執金剛の文を廣説す。

【問うて曰はく佛

如来の身なり、今師子座といふ。當に知るべし。亦爾なり、菩薩の身といふ所以は、謂く、

本菩薩の道を行せし時、次第に地波羅蜜を修行して乃し第十一地に至る。當に知るべし、

後地は即ち前地を以て基とするが故に、如来、菩薩の身を以て師子座と爲すと云ふ。釋迦、

に曰はく、「譬へば師子の衆獸の中に於て獨歩無畏なるが如く、佛も亦是の如し。九十六種

の外道の中に於て一切降伏して無畏なるが故に人中師子と名く。其所座の處若しは牀、若

しは地、皆師子座と名く。今此宗の明す義は師子といふは即ち是れ勇健の菩提心なり。初

發意より以來、精進の大勢を得て怯弱あること無きこと、猶し師子の執縛する所に隨つて

必ず獲て遺ふことなきが如し。即ち是れ「自在度人無空過」の義なり。若し淺略の釋なら

ば、言はく、諸の菩薩、深心に法を敬つて、乃至身を以て佛を荷戴するは師子座なり。

故に「菩薩之身爲師子座」と曰ふ。

【五】「其金剛名曰、虚空無垢執金剛、乃至、金剛子秘密主、如是上首、十佛刹微塵數等、

持金剛索、俱及普賢菩薩、慈氏菩薩、妙吉祥菩薩、除一切蓋障菩薩等、諸大菩薩、前後圍

繞、而演說法」とは次に同聞衆を明すなり。問うて曰はく、「佛所説の經に何が故に先づ住

處眷屬を明すや。」答へて曰はく、「譬へば國王若し政令あるときは、必ず先づ外朝に出居し

て制斷刑賞す。時の史、著記して某の時の王、某の處に在して某甲の大臣等と集議して、

是の如きの教命ありしといふことは、境内をして信伏し之を行ふに疑はざらしめんと欲す

るが故なるが如く、法王も亦爾なり。將に大法を説かんとするには必ず大眷屬の菩薩衆の

所説云云。同開衆を明す問答。初めに問。

【答へて曰はく】警答説。【大衆四屬】四大菩薩を指す。今は十九執金剛を略するも勿論合めて見るべし。内眷屬は佛の智門を司り、大眷屬は佛の悲門を司る。共に佛自證の徳を指す。

【虚空無垢執金剛】以下(二十一)までは十九執金剛なり。今は十九執金剛中の第一金剛なり。此金剛は本有の菩提心の徳を司る。【執淨戲論】一切の煩惱を指す。

【復次に云云】第二金剛の三義を明かす。

【虚空無垢執金剛】といふは即ち云【以下五轉縁起の相を喻を以て示す。即ち第一金剛は中央發心の徳な

中に於て證明を作さしむ。是因縁を以て聞くもの信を生ず。信心に由るが故に、能く是の如きの法の中に入つて修行し得證して倍復信を生ず。故に先づ衆を列ぬるなり。「虚空無垢執金剛」とは即ち是れ菩提心の體なり。一切の執淨戲論を離れて淨虚空の障翳あること無く、無垢無染にして亦分別なきが如し。此の如きの心は、即ち是れ金剛智印なり。能く此印を持するを「虚空無垢執金剛」と名く。復次に「虚空遊歩執金剛」とは、遊歩は是れ不住の義、勝進の義、神變の義なり。淨菩提心は一切の法に於て、都て所住なきを以て而も常に進んで萬行を修し大神通を起す、故に虚空遊歩といふ。復次に一虚空無垢執金剛」といふは、即ち阿字門平等の種子なり。無住の行を修するは、譬へば種殖の方便をもて根牙漸く生ずるが如し、故に次に發行の金剛印を明すなり。

第三に「虚空生執金剛」とは、前牙已に生じて四大時節を縁と爲し虚空塵へずして念に磁長するが如く、菩提心も亦復是の如し。無所得を以て方便として萬行を縁と爲して眞實生を得。眞實生とは所謂大空生なり。故に虚空生と名く。

第四に「被雜色衣執金剛」とは、前牙増長して莖葉花實漸次に滋繁なるが如く、菩提心の樹王の萬徳、開敷することも亦復是の如し。故に具種種色といふ。復次に種種の法界の色を以て、此無垢の菩提心を染めて大悲曼荼羅を成す、故に被雜色衣と名く。

第五に「善行步執金剛」とは、此善の字、梵には毘質多羅といふ。端嚴の義、種子の義あり。譬へば已に果實を得て復還つて種子となるが如し。善行歩とは即ち是れ諸佛の威儀

【無住の行】第二金剛を指す。即ち修生の菩提心の行を指す。

【修行】東方修行の徳なり。

【虚空生執金剛】此金剛は南方證菩提の徳。

【被色衣表成金剛】此の金剛は西方入華樂の徳を指す。

【法界の色】青、黄、赤、白、黒の五大の色を指す。

【善行歩執金剛】此の金剛は北方の方便究竟の徳を示す。

【佛事】化他の業なり。

【任一切法平等執金剛】この金剛は一尊に五轉の徳を具足することを明かす。

【上來五句】これは第一より第五に到る金剛を指す。

【第六金剛】次の説は第六金剛をも含むと云ふ。

なり。謂く、善く時宜の可度不可度等の種種の通塞を知つて、身口意の方便を以て群機に俯應し、曲に屈曲に中へて皆佛事を成す。故に以て名となすなり。

第六に「任一切法平等執金剛」とは、謂く、一切の佛の平等の性に住するなり。謂く、因果自他有爲無爲等の一切の諸法此如實智の中に入りぬれば、究竟平等にして同一實際なり。能く此智印を持す。故に以て名となす。然も上來の五句は亦皆これ如來眞實の功德なり。深淺の味なけれども、分別して解し易からしめんと欲ふが爲の故に、次第の説を作すのみ。

第七に「哀愍無量衆生界執金剛」とは、この哀愍亦是救度と名く。謂く、已に平等の法性に住して、自然に一切衆生に於て同體大悲の心を發す。諸の衆生界無量なるが故に、是の如き大悲も亦限量なし。此は是れ如來の一の功德なり。故に能く持するものに因んで以て名となす。

第八に「那羅延力執金剛」とは、已に哀愍の心を發して、若し大勢を具するときは則ち能く救護す。故に次に明す。『經』の中に「六十の象の力を按量するに一の香象の力に如かず。乃至木後の那羅延の力最勝なり。佛の生身の一一の毛孔は皆那羅延の力に等し」故に以て法界身を那羅延力に喩ふ。

第九に「大那羅延力執金剛」とは、謂く、秘密神通の力を持するなり。一闍提必死の疾に二乘實際作證已死の人の如きは、諸佛の醫王明に如來の性を見たまふが故に則ち能く必

【哀愍無量衆生界】大悲の徳を司る。執金剛は一般には智徳を司るにも、この金剛は特に大悲の中に具するものと見るべきか。

【那羅延力執金剛】那羅延は梵語堅固と翻す。同體大悲の哀愍の力の強きよりこの金剛をば之に喩ふ。

【經】涅槃經、增一阿含經等を指す。

【香象】交尾期にある象。

【大那羅延力執金剛】以上の第七、八、九の三金剛は何れも同體大悲の徳について立つ。其中第七は大悲を起すを云ひ、第八は勇猛心を起す精進の大勢力を現はし、第九は別して濟度する秘密神通力を有するを指す。

【已死】二乘已死

定師子吼して救療の因縁に於て心怯弱せず、諸の菩薩は尙し爾ること能はず。故に復不共一切の摩訶那羅延力を明す。

第十に「妙執金剛」とは、妙をば更無等比、更無過上の義に名く。猶し醍醐の融妙にして已に極めて亦増すべからず。常に變易せず無間無難なるが如く、如來も亦爾なり。一切の功德ごとごとく皆無比無上なり。諸そ有ゆる所作、亦唯し此一事の因縁の爲なり。故に妙執金剛と名く。

第十一に「勝迅執金剛」とは、勝は謂く、大空なり。大空は即ち是れ遍一切處なり。故に能く速疾神通を起す。此乘に住するものは、初發心の時に即ち正覺を成ず。生死を動ぜずして涅槃に至る。故に勝迅と名く。

第十二に「無垢執金剛」とは即ち是れ一切の障を離れたる菩提心なり。譬へば眞金の體性純淨にして若し種種に鍍治し衆寶をもて磨瑩すれば倍復光明あるが如し。則ち知んぬ。初質は尙し微垢と共住す。能く此畢竟淨の金剛印を持すれば因んで以て名と爲す。

十三に「双迅執金剛」とは、此刃の字、梵文には是れ忿中の忿、利中の利なり。義をもて翻すれば猶し刀刃の如し。此金剛利智を持して一切の難斷の處悉く斷じ、難滅の處悉く滅す。故に以て名と爲す。

十四に「如來甲執金剛」とは、如來甲は所謂大慈なり。此に由つて身を嚴るが故に、衆生を攝護し佛事を施作す。一切の煩惱の爲に傷けられず。能く降伏し沮壞するものなし。

と云ふ、即ち二乘の人を空を證作とし、無身滅已する故に已死と云ふ。

【勝運執金剛】此金剛は蓮華神通の徳を司る。

【遍一切處】諸法本不生の智は遍法界無所不至の故に云ふ。

【無相真金剛】此金剛は佛生の善觀心の徳を司る。

【初賢】本有の菩提心を指す。

【密中】如來の堅固の勝利の智、能斷煩惱の徳なり。

【眞運執金剛】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

【如來印】此金剛は蓮科蓮華の徳を司る。

故に以て名と爲す。

十五に「如來句生執金剛」とは、句をば住處に名く、即ち大空生なり。諸佛自證の功德は如來の性より生ず、此如身は如來自證の功德より生ず、阿字門を離れざるを以ての故に如來句生と名く。

十六に「住無戲論執金剛」とは、所謂大空の住する慧なり。謂く、緣起の實相は無生無滅不斷不常亦去來一異にあらず。是處は諸の戲論息んで、法涅槃の如しと觀す。是の如きの智印を持するが故に、以て名とすることを得。

十七に「如來十力生執金剛」とは、謂く、佛の方便智なり。是の如きの妙權は何れの處よりか生ずる。謂く、如來の十智力より生ず。是の如きの印を轉するが故に、以て名となすことを得。

十八に「無垢眼執金剛」とは、即ち如來の五眼なり、菩提心畢竟淨なるを以ての故に一切種を以て一切の法を觀するに了了に見聞覺知して障礙する所なし。能く是の如きの金剛印を持す。故に以て名と爲す。

十九に「金剛手秘密主」とは、梵に攝尼といふ。即ちこれ手掌なり。掌に金剛を持すると手に執ると義同なり。故に經の中に「右五に出すなり。西方には夜叉を謂つて秘密となす。其身日意速疾隱密にして了知すべきこと難きを以ての故に、舊翻には或は密造といふ。若し淺略をもて義を問まば秘密主といふは即ちこれ夜叉王なり。金剛杵を執つて常に佛を

【形色】形は照怡
忿怒の形、色は青
黄、赤、白等の色
【性欲】欲を積ん
て性をなす故に斯
く云ふ。
【次に菩薩衆云云】
以下は偶大眷屬を
指す。

【般若】大品般若
【阿毘跋致】不退
【一生補處】彌勒
菩薩を指す。即ち
佛處に補すべき等
覺なり。

【普門】一門に對
する語。無量の方
便門を云ふ。門は
能入の門なり。

【如來事】化他の
事業。
【普賢菩薩云云】
此菩薩は、菩提心
の徳を司る。初地
自證同極の位を指
す。

【慈氏菩薩】此菩
薩は慈悲喜捨の四
無量心を司る。
【妙吉祥菩薩】文

殊室利の事。此菩
薩は化他説法の徳

法門相對するに亦十佛刹微塵の衆あり。加持を以ての故に、各法界の一門より現じて一善知識の身となることを得たり。又「般若」の「釋論」には「一身身の佛成道の時は、阿難密迹力士等これを内眷屬と名け、舍利非口捷連等の諸の聖人、及び彌勒文殊の諸の阿毘跋致の一生補處の菩薩等、これを大眷屬と名く。」今謂く、佛の加持身も亦復是の如し。諸執金剛の各如來の密印を持するを内眷屬と名け、諸菩薩の大悲方便普門をもて、無量衆生を攝受し法王を輔佐して如來の事を行するを大眷屬と名く。故に「大品」に云はく、「諸佛の内眷屬と爲らんと欲ひ、大眷屬を得んと欲はば、當に般若波羅蜜を學すべし。」「普賢菩薩」とは、普は是れ遍一切處の義、賢は是れ最妙善の義なり。謂く、菩提心所起の願行、及び身口意悉く普平等にして一切處に遍せり。純一妙善にして備に衆徳を具す。故に以て名と爲す。慈氏菩薩とは謂く、佛の四無量心なり。今慈を以て稱首と爲す。この慈は如來種姓の中より生じて、能く一切世間をして佛家を斷ぜざらしむ、故に慈氏といふ。上に普賢といふ、是れ自證の徳なり。本願已に満じて衆生を化して此道を得しめんと欲ふが故に、次に之を明す。「妙吉祥菩薩」とは、妙は謂く、佛の無上の慧なり。猶し醍醐の純淨第一なるが如し。室利を翻じて吉祥と爲す。即ち是れ衆徳を具する義なり。或は妙徳といひ、亦是妙音といふ。言はく、大慈悲力を以ての故に、妙法音を演べて一切をして聞かしむるが故に、彌勒に次いで之を明す。「除一切蓋障菩薩」とは、謂く、障をば衆生の種種の心垢と爲す。能く如來の淨眼を翳して閉明すること能はず。若し無分別の法を以て、諸の戲論を滅するは

を司る。

【衆徳】 三密莊嚴の衆徳。

【除一切蓋障菩薩】 隨惑又は大定の徳を司る菩薩。

【如來の淨眼】 衆生本有の淨眼佛智を云ふ。

【四徳】 普、慈、文、除の四菩薩の徳。即ち大願、大慈、大智、大定の四徳。

【大事】 開示悟入の四佛知見を指す。

【大勇】 金剛薩埵の密號を云ふ。

【大道】 三密行、兼めては六度の行をも含む。

【最大の處】 佛果名。

【大邪見】 煩惱の名。

【大愛】 貪煩惱。

【大我】 我慢、瞋恚等を指す。

【瑜伽宗】 金剛頂宗のこと。

【化城】 法華經の化城喻品の譬による。小乘無餘、有餘の涅槃を指す。

雲霧消除して日輪顯照するが如し。故に除蓋障といふ。如來の諸有所作ごとく皆此一

事の因縁の爲なり。故に妙音に次いで之を明す。復次に行人、般若波羅蜜を學すと雖も若し禪定なければ猶し盲者の日光に遇ふと雖も能く爲す所なきが如し。故に文殊の妙慧に次いで除蓋障三昧を明すなり。この四菩薩は即ち是れ佛身の四徳なり。偏闕するところあれば則ち無上菩提を成ずること能はず。是故に上首たるを列ねて以て摩沙の衆徳を統ぶるなり。諸大菩薩」とは、具に梵文を出さば、摩訶菩提薩埵といふべし。釋論に云はく、「菩提をば諸佛の道と名け、薩埵をば衆生と名け、或は勇心と名く。」是人ごとく諸佛の功德を得んと欲つて、其心斷ずべからず、破すべからず。金剛山の如し。是を薩埵と名く。復次に此人、心能く大事の爲に退せず、轉せず、大勇心あるが故に、多くの衆生の中に大慈悲を起し、大乘を成立し、能く大道を行じて最大の處を得るが故に、必ず能く說法して一切衆生の大邪見、大愛、大我の心等の諸の煩惱を破す、故に名けて摩訶薩埵と爲す。阿闍梨の云ひたまはく、「具に正義に據らば、當に菩提要素といふべし。」此要素とは、是れ忍樂、修行、堅持不捨の義なり。然も聲明に是の如きの法あり、若し文字を論すれば、其義正しと雖も、音韻或は流便ならざれば便を取つて之を安ずることを得。故に世の論師、謂つて薩埵と爲す。傳習のもの其辭に隨順せり。『瑜伽宗』に就いて云はば、「薩埵に略して三種あり。一には愚童薩埵、謂く、六道の凡夫なり。實諦の因果を知らず、心に邪道を行じ、苦因を修習し、三界に戀著し、堅執して捨てず。故に以て名と爲す。二には有識薩埵、即ち二乘なり。

【前後】 前後、左右、四方八方を指す。

【六】 以下、歡經の文を釋す。此文は通序にもあらず別序にもあらず。

【佛日】 大日經の如來日を指す。

【初中後分】 序の如く晨朝を初夜、日中を夜半、日没を後夜と云ふ。

【三十時】 三十須臾を一晝夜とするが故に。

【代謝】 次第に移り行くこと。

【三際】 過去、現在、未來の三際。

【淨眼を以て云云】 以下、如來開明目を明かす。

【然も佛の神力云

經に生死の過患を覺知して、自ら出離を求め涅槃に至ることを得。化城に著保して滅度の想を興し、如來の功德に於て、未だ願樂の心を生ぜず。故に以て名を爲す。三には菩提薩埵、無上菩提は、一切の願度戲論種種の過失を出過せり。是は一向純善白淨微妙にして、譬類すべからざるの義なり。即ち是れ衆生の本性不思議の心なり、能く是の如きの成道の事を忍んで、願樂し修行し堅固にして動ぜず。故に菩提素多と名く。是の如きの人の中に於て、功業最大にして一切衆生に轉授するに堪能なり。故に名けて摩訶薩埵と爲す。これ等の大衆前後に大日世尊を圍繞して、無量の身口意を以て供養恭敬す。聽法の爲の故なり。

【一八】 次に群機嘉會の時に、同じく聞く所の法を明して、即ち經に「所謂越三時、如來之日、加持故、身語意、平等句、法門」といふ。然も此經、闍浮提に流布するに、略して千萬の偈あり。若し十佛刹微塵の大衆、各各に廣く身口意の差別の法門を演べば、即ち限量なし。此說法の時分復當に云何ん。故に結集者、その時に佛日に住して、而も演説すと云ふものなり。世間の時分の如きは則ち過去未來現在長短の劫量種種の不同あり。且く日四天下を行くに約せば、一周の晝夜に、各初中後分あり。乃至卅時等剎那不住にして代謝相推す。淨眼を以て之を觀するに三際の相了に不可得なり。無終無始にして亦去來なし。即ち此實相の日は圓明常住にして湛なること虚空の若し。時分修短の異なること無し。然も佛の神力を以ての故に、瑜伽行者をして無量劫に於て、食頃の如く謂はしめて、或は食頃を演べて、以て無量劫と爲す。延促自在にして、威く樂機に適へり。定相として得べきこと無し。故に如

【云】以下、如來の加持目を明かす。【食頃】食事をなすが如き短時間。【第一實際妙極の境】阿字不生眞體不二摩訶衍を指す。

【句逗】讀なり。【道迹】先佛の道迹。即ち三密の行なり。

【三平等】佛の身語意三平等なり。【妙觀】因分の不思議すべからざるが故に妙と云ふ。

【不行】本有本覺門。【而行】始覺修生門。

【七】以下、別序を明かす。此段は佛の瑞相印現はす故に又瑞相段とも云ふ。【普門の境界】普く種種維多の佛身を現する故に斯く云ふ。大日普門の意にはあらず。

來日と云ふ。此の如きの時の中に、佛何の法をか説きたまふ。即ちこれ身語意三平等句の法門なり。言はく、如來種種の三業は皆第一實際妙極の境に至れり。身は語に等しく、語は心に等し。猶し大海の一切處に遍して、同一鹹味なるが如し、故に平等といふなり。句とは梵には鉢曇といふ。正翻には足と爲す。『聲論』には是れ進行の義、住處の義なり。人の進歩するに足を舉げ足を下す、其迹の所住の處を之を鉢曇と謂ふが如く、言辭句逗の義も亦是の如し。故に同一の名のみ。今此宗に就かば、謂く、是の如きの道迹を修し、次第に進修して、三平等の處に住することを得るが故に名けて句と爲す。即ち平等の身口意秘密加持を以て所入門と爲す。謂く、身平等の密即語平等の眞言心平等の妙觀を以て、方便と爲るが故に、加持受用身を速見す。是の如きの加持受用身は、即ち是れ毘盧遮那遍一切身なり。遍一切身とは、即ち是れ行者平等の智身なり。是故に此乘に住するものは、不行を以て行じ不到を以て到る。而も名けて平等句とすることは、一切衆生皆其中に入りぬれば、而も實に能入のものも無く、所入の處も無し。故に平等と名く。平等の法門は則ち此經の大意なり。

【七】「時彼菩薩、普賢、爲上首、諸執金剛秘密主、爲上首、毘盧遮那如來加持故、奮迅示現身無盡莊嚴藏、乃至、有情類、業壽種除、復有牙種生起」とは、謂く、將に此平等の法門を説かんとするが故に、先づ自在加持を以て大衆を感動して悉く普門の境界、秘密莊嚴不可思議未曾有の事を現す。彼疑問に因つて之を演説したまへば、則ち聞者、信樂倍増して深く語義に入る。『法華の序分』『從地涌出品』の因縁の如し。此中に當に廣く之を

【語義】 本不生の義。
 【從地涌出品】 法華經第十五品にして、本門の序分なり。
 【復次に云云】 權人は用なきことを明かす。
 【仁者】 菩薩の譯名。

【如來秘密慧】 義釋には無量義と云ふ。即ち如來の秘密慧なり。然るを今は名とす義釋の方、取るべきか。
 【恆河沙】 印度がナンダス河の砂の無量なる如く無量無數なるに喩ふ。

説くべし。復次に普賢秘密主等の上首の諸の仁者は、即ち是れ毘盧遮那の差別智身なり。是の如きの境界に於て、久しく已に通達せり。然も此諸の解脫門所現の諸の善知識、各無量の當機衆を引いて同じく法界曼荼羅に入らしむ。此初めて法門に入る實行の諸菩薩を饒益せんが爲の故に、如來加持をもて大威神力を奮迅示現したまふ。獅子王の將に震吼せんと欲するとき必ず先づ其身を奮迅し神力を呈現して然して後に體を發するが如く、如來も亦爾なり。將に必定歸乎就して、一切智門を宣説せんと欲ふが故に、先づ無盡莊嚴衆を奮迅示現したまふ。所謂莊嚴とは、普く、一平等の身より普く一切の威儀を現す。是の如きの威儀、密印にあらざること無し。一平等の語より、普く一切の音聲を現す。是の如きの音聲、眞言にあらざること無し。一平等の心より、普く一切の本尊を現す。是の如きの本尊、三昧にあらざること無し。然も此一一の三昧差別の相皆邊際なし。度量すべからず。故に無盡莊嚴と名く。如來秘密菩薩に云はく、除蓋障菩薩、法會の中に於て佛身の量を知らんと欲ふが故に、大日變通をして之を尋ねしむ。日連上梵宮に至つて猶し如來を觀たてまつるに目の前に對するが若し。佛身の威儀設法の音聲、本と異なること無し。乃至その神力を盡して、他方の佛土に往詣するに、亦梵宮に異ならず。爾時に除蓋障菩薩、日連を以てして測ること能はざるが故に、即ち自ら往いて觀察す。十方各の如恆河沙の世界を過ぎて皆如來を見たてまつるに、座を起たずして法を演説したまふ。乃至周く十方を極め、其神通勢力を盡せども、亦復是の如し。然して後に還歸て方に除疑天女を見るに、佛を去ること遠から

【胡麻油】胡麻の一粒中に油充滿して間餘なきが如く過滿の義をば云ふ【復次の諸の云云】以下、瑞相を現はすことを明す。

【般舟三昧】般舟三昧經に由づ、行者此三昧(出づ)を修する時は十方諸佛出現して吾等の眼前に立つを見る。般舟は譯して佛立、故に此三昧を佛立三昧と云ふ。

【父母】生身のこと即ち此現在の身のこと。

ずして見んに三昧に入る。便ち是念を作す。我聞く、此天女は無量の三昧門を通達せりと。我當に之を觀すべし。今何の定にか住すると。又心力を盡して之を觀するに、其心の所行の處を測らず、無量の天鼓を聚集すること、一一に皆須彌山王の如くして、神力を以て同時に聲を發して出定せしめんと欲すれども、而も得ること能はず。乃至佛の言はく、我未だ菩提心を發さざりし時、この天女已に能く此三昧に住せりと。即ち是れ無邊際之義なり。是の如く毘盧遮那、普く十方一切の世界に於て、一一に皆佛の加持身を現じたまふ。是一一の身に各十佛刹微塵數等の菩薩金剛の大衆あり。此諸の大衆の諸根相好亦復無邊なり。胡麻油の如くして法界に遍滿し、中に於て空際之處なし。又國王に大庫藏あり。若し須ひて人に示すときは則ち自在に開發して之を陳布するが如し。故に莊嚴藏と曰ふなり。復次に諸の大衆は、但し佛の威神力を以ての故に、是の如きの不思議の境界を見ることを得、如來若し加持を捨つるときは即ち現前せず。其自心の限量の能く及ぶ所にあらず。如し行者内に般舟三昧を修し、外に神力護持を蒙るときは能く父母生身を以て十方の佛を見ること、晴夜の雲なきに仰いで衆星を觀るが如し。法音を聽聞することも了了無礙なり。然も此境界は行者の心淨に由るが故に生ずるか、佛の加持に由るが故に生ずるか。若し内心に由るといはば即ち是れ自性より生ず。若し佛力に由るといはば即ち是れ他性より生ず。ことごとく皆外道の論議に異ならず。自他無なるを以ての故に、和合も亦無なり。又復因緣無うして成就することを得るにあらず。何を以ての故に、内内外縁隨つて闕する所あれば即ち現前

【軌匠】工匠の如法に器を作る如く如来説法の方便によりて衆生の菩提心を修成すること
 【普賢蓮華手】觀世音菩薩のこと、

【因陀羅網】帝釋天の羅網。此羅網には結目、此結目にして影を寫し、相交錯して盡きずと
 【三聖者】凡そ觀音菩薩を云ふ
 【三點】法身、般若、解脫なり。次

せず。故に當に知るべし、是の如きの莊嚴の相は顯るるときも所從來なく、隱るときも亦所去なし。畢竟平等にして如を出でざるが故に。『經』に「非從毘盧遮那佛身、或語或意、生一切處起滅、斷不可得、毘盧遮那、一切身業、一切語業、一切意業、一切處、一切時、於有情界宣說眞言道句法」といふ。これは佛の莊嚴藏を轉釋するなり。無盡無邊際なる所以は、如來の遍一切處常住不滅の身に異なりざるを以てなり。常に起滅なしと雖も、而も能く一切の三業を以て、普く十方三世の一切時處に於て最實の道を説き、群生を教化し其心を軌匠し佛道に至らしむ一經に、又現觀金剛、普賢蓮華手菩薩等像貌、普於十方宣說眞言道句法、所謂初發心、乃至十地次第、此生滿足、緣業生增長有情類、業壽種除、復有牙種生起」といふは、又前の相を廣するなり。言はく、但し佛身を示現して十方一切の世界に充滿するのみにあらず。所現の金剛菩薩等の身も亦復一切處に遍せり。且十佛刹微塵數のもろもろの觀金剛菩薩等の身も亦復一切處に遍せり。是の如き一一の本尊像の眷屬も、皆毘盧遮那の如く十方一切世界に充滿して因陀羅網の互に相照せざるが如し。今略して三聖者を擧げて以て稱首と爲す。觀音は蓮華三昧門に對する降伏の方便なり。普賢は如如法身門に對する寂災の方便なり。觀音は蓮華三昧門に對する増益の方便なり。此三點を擧ぐれば、則ち無量不思議の妙用、皆已に其中に攝在す。故に特に之を言ふ。云ふ所の等とは、乃至諸天八部五通の神仙なり。外現の曼荼羅の表示する所を以て例して知んぬべし。是の如き等の種種の因緣、無數の方便普門應現して群生を教化す。深淺不同に

の如く、自性清淨
智、自在の三徳に
して、佛、金、蓮
の三尊なり。
【乃至】聲縁二乗
を指す。

【八部】天、龍、
夜叉、乾闥婆、阿
修羅、乾樓羅、緊
那羅、摩睺羅伽の
八を指す。

【五通】天眼、天
耳、他心、宿命、
神境の通力なり。
【外境の曼荼羅】
現圖曼荼羅。

【實相印】清淨知
見即ち阿字不生
の理なり。
【愛見】我、法二
執の上につき推求
心なり。

【密偈】眷屬。
次に又釋して云
云。以下は頓成の
益を現はす。内に
於ては顯密對辯す
【餘乘の菩薩】顯
教三、一乘の菩薩
を指す。

【無數阿僧祇劫】
三大無數劫のこと
【復次に行者云云】

して龜細異なることありと雖も、然も其實事を究むれば、祕密加持にあらざることなし。各
能く如來の清淨知見を開示す。若し是の如きの實相印を離れぬれば、餘は皆愛見所生な
り。天魔外道のために諸の營侶と作る。豈に名けて、清淨句義とすることを得んや。
次に又釋して所謂といふ。清淨句とは即ち是れ頓覺成佛神通乘なり。餘乘の菩薩の如き
は無上菩提を志求し、種種に勤苦して身命を惜まず、無數阿僧祇劫を経て或は成佛するあ
り。或は成佛せざるものあり。今この眞言門の菩薩は若し能く法則を虧かずして方便修行
するときは、乃至此生の中に於て無盡莊嚴加持の境界を逮見す。但し現前するのみにあら
ず、若し佛地に超昇して即ち大日如來に同せんと欲はば亦致しぬべし。復次に行者初發心
のときに阿字門に入ることを得るときは、即ち是れ如來金剛の性より牙を生ず。當に知るべ
し、此牙一たび生じて運進増進して更に退の義なし。乃至菩提を成ずれば行として増すべ
きことなし。然して後に停息す。故に「次第此生満足」といふ。此中の次第とは、梵音に不住の
義、精進の義、遍行の義あり。謂く、初發心に菩薩の位に入らんと欲ふが故に、此眞言法要
に於て方便修行して、初地に至ることを得。爾時に無所住を以て進心息まず、第二地を滿せ
んが爲の故に、復眞言法要に依つて方便修行して第三地に至ることを得。爾時に無所住を以
て進心息まず、第四地を滿ぜんが爲の故に、復眞言法要に依つて方便修行して五地に入る
ことを得。是の如く次第に乃至十地を満足するまで、唯し一行一道を以て正覺を成ず。若し
異の方便門に於て密意を開顯すれば、亦皆是の如きの寶乘を離れざるなり。緣業生とは、

以下は密教の意を示す。

【異の方便】 身所就の法門。

【六趣】 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六。

【慧門】 三平の三密を以て衆人の門となす。

【四不生】 自、他、俱、無因の四不生を指す。

【復次に如來所現】 以下は總じて現瑞相を現するの文を結ぶ。

【開儀續貫】 權方便の門を開いて眞實の門を示す。

【八】 以下正宗分

【如來自證の智は云云】 隨文解釋のうち金剛手の疑問と如來の答説とを明す。

【衆會】 内、大二眷屬等を云ふ。

【乃至】 この二字

謂く、有情擬愛の因縁の爲に身口意の種種の虚妄不清淨の業を造つて、是の如きの業に乗じて六趣の身を生じ輪廻を増長して備に諸苦を受く。今平等の三業清淨の慧門を修すれば、一切の覆の阿頼耶の業の種子、皆ことごとく焚滅して虚空無垢大菩提に至ることを得。一切如來平等の種子悲蔵の中より法住の牙を生じ、乃至華葉花果もろもろの法界に遍論して、萬徳開敷の菩提樹王を成す。然も四不生の義を以て之を觀するに、都て所起も無く亦起處も無し。當に知るべし、此生は即ち是れ大空生なり。故に「有情類業壽種除復有牙重生起」といふ。復次に如來所現の十佛刹微塵數等の諸の善知識、及び法界門假令次第に親聽せば、則ち無量無邊阿僧祇劫にも周遍すべからず。佛日の加持を以ての故に、會坐の頃に於て、皆悉く現前せり。即ち是れ時に此經を説かんとして、不可思議の神通の瑞相を示す。文衆師利、白毫所照の萬八千士の諸の菩薩の種種の内縁は、皆これ菩薩の道を行すと觀見して、即ち諸佛轉に開灌顯實して法華經を説かんと欲すと知るが如く、當に知るべし、金剛手等も亦復是の如し。普く加持世界にして、唯し平等の法門を説くを見て、即ち如來將に遍一切乘自心は佛の教を演べんとすと知る。故に下の文に問ふところ、此に乗じて生ずるなり。

【八】「爾時、執金剛祕密主、於彼衆會中坐、白佛言世尊、云何、如來應供、正遍知、得一切智智、乃至、如是智慧、以何爲因、云何爲根、云何究竟」とは、如來自證の智は設ひ神力加持を以ても、亦人に示すべからず。前に奮迅示現無盡莊嚴藏といふは、普外用の迹の

の中に大目經本文二百九十四字を含ましむ。
【人】瑞相段の機根なり。
【前】序分の瑞相段を指す。
【照俗の權】俗諦門差別を照らす權方便、即ち化他の智。
【契實の境界】眞諦門自證の根本智を指す。

【安樂の性】常、樂、我、淨の四徳の一を出して他の三を兼ねぬ。即ち眞如の理性なり。

み智者その條末を見て則ち其宗本を喻ること、象迹の衆群に超絶して其踴踐するところ倍復深廣なるを觀て其形を觀すと雖も當に此象の身力必ず大なりと知るべきが如く、又迅雷の雨を澍いで能く鳥獸をして震死せしめ、百川奔湧して山を懷ね陵に襄るとき、其本を測らずと雖も當に此龍は威勢必ず大なりと知るべきが如く、今もろもろの大衆も亦復是の如し。如來無盡の身口意能く一時に普く法界の衆生に應じて、妙に根宜に合ひ曲に伸事を成すと觀るを以て則ち知んぬ。如來の智力は必ず一念に於て普く群機の本末の因縁を鑑み、究竟じて無礙なり。照俗の權すら尚し爾なり。其契實の境界當に復云何ん。若し法然らざれば、則ち微迹の尋ぬべきあらんや。我已に盡く觀る、然るを是法は何に従つて之を得と知らず。故に執金剛手衆會の疑心に因つて、佛に問うて言さく、「云何が如來應供正遍知、この一切智智を得たまへる」と、梵本に恒他掲多といふは、恒他は是れ如の義なり、掲多は是れ來の義、知解の義、説の義、去の義なり。諸佛の如實の道に乗じて來つて、正覺を成じたまふがごとく、今の佛も亦かくの如く來たまふが故に如來と名く、一切の諸佛、法の實相の如く知解し、知り已つて亦諸法の實相の如く衆生の爲に説きたまふ。今の佛も亦かくの如し。故に如實知者と名け、亦は如實説者と名く。一切の諸佛かくの如きの安樂の性を得て、直に涅槃の中に至れり、今の佛も亦かくの如く去りたまふ故に如去と名く。「釋名論」には具に四義を含めり。然るを「古譯」には多く「如來」といひ、「有部の戒本」には「如去」といふ、阿闍梨の意は、如去如説を存せり、今且く古きに順じて題するなり。梵本に阿羅訶といふは、阿

【後世田】生死の

後有なり即ち生死輪廻の田地を田と云ふ也

【鼓皮】鼓は杖末の皮、皮は根本無明を指す

【最上の供養】菩薩乃至鬼神等の供養

【一相、異相、漏相、無漏相】は序の如く、同相、異相、有漏相、無漏相なり

羅は是れ煩惱なり、訶は是れ害の義、除の義なり。「釋論」には之を「殺賊」と謂ふ。佛は忍進の鎧甲を以て持戒の馬に乗り、定の弓、慧の箭をもて外には魔王の軍を破し、内には煩惱の賊を滅す、故に以て名と爲す。又阿をば名けて不と爲し、羅訶をば生と名く。謂く、佛心の種子、後世田の中に生ぜず。無明の鼓皮脱るるが故に、復次に阿羅訶といふは、是れ應受供養の義なり、是の如きの功德あるを以ての故に、天人最上の供養を受くべし。故に以て名と爲すなり。梵本に三藐三佛陀といふは、三藐をば正と名け、三をば過と名け、佛陀をば知と名く、故に正過知と曰ふなり。「釋論」に云はく、「若し人あつて何を以ての故にか、但し佛のみ如實證如來如去の故に、最上の供養を受くべきや。」といはば、佛は正過智慧を得るを以ての故なり。正をば諸法の不動不壞の相に名け、過をば一法二法とするにあらざるに名く、故に悉く一切の法を知つて餘なきを以て、是を三藐三佛陀と名く。然も此宗の中には佛陀を覺と名く、是れ開敷の儀なり。謂く、自然の智慧に由つて、遍く一切の法を覺ること、盛に開敷せる蓮華の點汗あること無きが如し、また能く一切衆生を開敷す、故に佛と名く。

梵に薩婆若那といふは、即ち是れ一切智なり。「釋論」にはく、「薩婆若多とは即ち一切智なり。」一切は謂く、名色等の無量の法門に各一切の法を攝す。是の如く、無量の三四五六等乃至阿僧祇の法門に一切の法を攝す。是一切の法の中の一相、異相、漏相、非漏相、作相、非作相等と、一切の法の各各の相、各各の力、各各の因縁、各各の果報、各各

【作相、非作相】有爲と無爲なり。

【菴摩勒果】印度産の果實、梨に似て其味甘酸なりと

【釋迦菩薩】大智度論四卷によれば

過去の釋迦佛が初阿僧祇劫間修行せ

し時、燃燈佛(定光佛)を供養せしが、

此時定光佛より當來世に於て佛とな

るべき旨を記別せらるゝと。

【種種の趣】六道の凡夫。

【性欲】過去の性質により現世に欲を生ず。即ち性不本然の欲なり。

【解脫味】本の醜味。

【毘婆沙】大毘婆沙論。

【摩訶衍】大乘。俱胝(千萬)の數を以て一俱胝とす。孫陀羅(好愛)即ち端正なり。

の性、各々の得、各々の失とを、一切智慧力の故に、一切世の一切種をことごとく遍く知解す。これを薩婆者と名く。今一切智智といふは即ち是れ智中の智なり。但し一切種を以て一切の法を知るのみにあらず。亦この法の究竟實際常不壞の相は不増不減にして猶し金剛遍くの如しと知る。是の如きの自證の境は説者も無言なり、觀者も無見なり、手中の菴摩勒果の他人に轉授すべきには同せざるなり。若し言語を以て人に授くべくば、釋迦菩薩、定光の授決を蒙つしとき、即ち成佛すべし。何が故ぞ具に方便を修し要す無師自覺を待つて方に佛と名けんや。又目に世人を觀るに、刀杖の爲に傷けらる。復その受苦を信じて疑惑すべきことなしと雖も、然も種種に説かしむるに終に證知せず、若し自身に觸受するとき乃ち明了なることを得るが如くならまくのみ。問の意に言はく、「云何が我等をして是の如きの自覺の慧を逮得せしめん。」云何が此慧を得已つて、能く無量の衆生の爲に廣演し分布して種種の趣、種種の性欲に隨つて、種種の方便道をもて一切智智を宣説せん。所謂無量乘を安立し、無量の身を示現し、各々に彼音音に同じ、彼威儀に住せん。而も此一切智道は猶し同一味なり。所謂如來の解脫味なり。此妙方便は復云何が得んとなり。この中の種種趣とは梵には娜衍といふ、亦是名けて行と爲し、亦是名けて道と爲す。下に大乘道等といふ義同なり。「毘婆沙」には「五道」ありと説き、摩訶衍の人は多く六道を説く、是の如く廣く行ぶれば、乃至この世界の中に已に卅六俱胝の衆生趣あり、何に況んや十方の一切世界をや。性欲とは、欲をば信喜好樂に名く、孫陀羅難陀は五欲を好み、提婆達多是名聞を好む等との

【眞陀】 計、即ち行脚なり。
【毘尼】 具には毘奈耶、律と譯す即ち戒律なり。

【復次に此中の云】 以下曼荼羅の略を詳す。
【四重】 曼荼羅の中、八葉を第一重とし、遍智知、觀音、金剛手、持明の四院を第二重とす。文殊、除蓋障、地藏、虚空藏の四院を第三重とし、釋迦能及び四方の外部を第四重とす。但し、此四重に諸説あり。
【韋陀梵志】 吠陀梵志即ち事火外道

如く乃至もろもろの得道の人に、亦各好むところあり、大迦葉は頭陀を好み、舍利弗は智慧を好み、彌波多是坐禪を好み、優婆塞は毘尼を知らんと好み、阿難は多聞を好む等との如く當に廣く之を説くべし。性をば積習に名く、性は性より生ず、欲は性に隨つて行を作す、或時には欲より性を爲す、欲を習つて性を成ず、性をば染心に名く、染心、事を爲すに欲の名あり、緣に隨つて起る。この事は「釋論」の中に具に明せり。種種方便道とは、龍樹の云ひたまはく、般若と方便と本體これ一なり。而も所用に異あり。譬へば金師の巧方便を以ての故に、金を以て種種の異物を作るに皆これ金なりと雖も、而も各異名あるが如く、今毘盧遮那も亦復かくの如し。能く遍一切處の眞金の智體を以て、種種の采を造りたまふ。復次に此中の間の意は即ち是れ大慈胎藏曼荼羅を發起するなり、薩婆若平等の心地に於て、諸佛菩薩乃至二乘八部等の四重法界圖を書作す、この一一の本尊の身請心印は皆これ一種の差別業なり、且く人あつて五通智道を志求するが如し、即ち大慈胎藏より韋陀梵志の形を現じて、爲に空羅備等の眞言行法を説きたまふ、行者精勤すること久しからずして此佛の身を成じ、更に方便を轉じて即ち毘盧遮那の身と成る、是の如く或は佛身を現じて種種の采を説き、乃至非人の身を現じて種種の采を説く、隨類の形聲、悉く是れ眞言密印なり、或は久、或は近、毒鼓の四縁にあらずといふこと無し、故に「統一」に一皆同一味所謂如來解脫味」といふ、然る所以は一切衆生の色心の實相は本體より、已來常に是れ毘盧遮那の平等智身なり、是れ菩提を得るとき、強に諸法を空じて法界と成さしむるに

なり。

【單曇仙】 胎藏曼

茶羅中の外金剛部

五仙人の一にして

火天の眷屬なり。

【持鼓】 淨業經第

九卷にあり。

【佛平等の心地】

衆生と佛陀と平等

なる心地、即ち自

性會にして中衆八

業の本地身。

【衆生平等の心地

云云】これは衆生

本有の曼茶羅を指

す。

【復次に執金剛云

智】以下は一切智

の德をば譬喩を

以て讚歎せるもの

なり。

【五種】 自身本具

の曼茶羅がよく妙

行を發起する事は

五字五大を體とす

る故なり。故に今

は五大の譬喩を取

る。

【顯形色】 青、黄

赤、白等の顯色と

長短方圓等の形色

を云ふ。今の文、虚

あらす、佛、平等の心地より無盡莊嚴藏大曼茶羅を開發しじつて還つて、用て衆生平等の心地の無盡莊嚴藏大曼茶羅を開發したまふ。妙感妙應皆阿字門を出でず。當に知るべし、感應の因縁所生の方便も亦復阿字門を出でず、譬へば大海の中の波濤の相激て遂に能所たれども、然も亦同一味なるが如し、所謂鹹味なり。

復次に執金剛、佛の神力を承けて、大悲胎藏の秘密方便を發起せんと欲ふが爲の故に、復五種の譬喩を説く、所謂虚空地水火風なり。初の句に「譬如虚空界、離一切分別、無分別、無無分別、如是一切智智、離一切分別、無分別、無無分別」といふは、此の如きは即ち是れ「毘婆沙」の義なり。虚空は過も無く徳も無し。今如來の智身は、一切の過を離れて萬徳成就す、云何が稱讃することを得るや。但し其少分相似を取つて、以て大空に況せまくのみ。此中の相況に三義あり。一には虚空は畢竟淨の故、二には無邊際の故、三には無分別の故なり。一切智心の性も亦かくの如し。故に世間易解の空を以て、羅解の空に譬ふるなり。初に離一切分別といふは、梵には劫跋といふ。次に無分別といふは、梵には劫跋夜帝といふ。重ねて言ふ所以は、是れ分別の上に更に分別を生ずる義なり。例せば尋伺の略觀の時をば尋と名け、諦察をば伺と名くるが如く、又眼識の生ずるときは龜分別あり。次に意識生すれば、是れ細分別あるが如し。「舊譯」に或は云はく、劫跋を以て妄執と爲す、唯の意の云はく、猶し虚空は妄れ分別なきを以ての故に分別も無く亦無分別も無きが如し。又虚空は種種の顯形色の相を離れて造作するところ無けれども、而も能く萬像を合容す、一切の

空は種種の顯形色を離る云云は造情智門を現はし、後の一而も能く萬德智門を示す。【妙業】業は本來不生の故に妙と云ふ。

【八風】利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の八法よく人心を揺動する故に八風と云ふ。【火界】火大は形を以て現はせば三角、銳利にしてよく一切のものを破す、故に今は一切の煩惱を破るに標す。

草木これに因つて生長し、有情の事業これに依つて成ずるを得るが如く、佛智の虚空も亦復是の如し。一切の相を離れて常に分別起作なしと雖も、而も無量の廈門種種の妙業皆成辨することを得、故に以て喩と爲す。第二の句に「譬如大地、一切衆生依、如是一切智、天人、阿修羅、依」といふは、世間の百穀衆業卉木藥林その性分に隨つて無量に差別なれども、皆大地に従つて而も根芽を生じ、乃至莖葉花果次第に成就し、一切衆生の爲に依止處と作り、之を養育すれども亦是念を作さず、我今一切世間を荷負すと、恩德を念せず、勞倦あること無く、これを増すれども喜ばず、これを減すれども憂へず、深廣にして潤り難く、傾動すべからざるが如く、一切智地も亦復かくの如し。大悲曼荼羅の一切の種子の出生する所なり。即ち此れ諸衆の無量の事業の所依止の處なり。生死涅槃に於て其心平等なり。世間の八風も動揺すること能はず。是の如き等の少分相似を以ての故に、以て喩と爲す。第三の句に「譬如火界、燒一切薪、無有厭足、如是一切智智、燒一切無智薪、無厭足」といふは、譬へば火種の假使薪を積んで世界に充滿せること皆須彌山王の如くして、次第に之を焚けども、怯弱あること無く、是念を作さず、我當に爾所の薪を燒き、爾所の薪を燒かざるべしと、熾然息まず勝進して厭ふこと無し、要す焚く所盡き已んぬれば、然して後に隨つて滅するが如く、如來の智火も亦復かくの如し。一切の戲論煩惱の薪を燒き盡し、乃至緣待皆盡きぬれば、即ち此慧光も亦所依なし。復次に世間の火は貴賤同じく用ふる所なり。能く暗夜に於て照明を作して、迷惑顛墜のものに感く正路を得しめ、又ことごとく能く一

【異生】凡夫なり

【風】風には下の文の如く能壊能長の能衰能壞能の數徳あり故に此風をば「煩惱塵」と云うて北方淨樂の位に置くの三辰日月星の三なり。

【淨穢】にこり、けがれなり。即ち煩惱に喩ふ。
【眞法界】六大清淨法界なり。
【等持】定のこと
【道法の法】三十三道品、六度、十波羅蜜等を指す。
【大果實】菩提、淨樂二轉の妙果。

切の諸物を成就するが如く、是の如く一切智火の聖者、異生に平等に之あり。無始の大火の中にして諸の行人をして如實の道を見しめ、次第に一切の佛法を成就す。故に以て喩と爲す。

第四の句に、「譬如風界、除一切塵、如是一切智智、除去一切諸煩惱塵」といふは、大風の起るとき烟雲塵霧一切消除して、大虚澄廓にして三辰炳現し、蔚蒸熱惱の衆生皆清涼なることを得。能く芥木藁林をして閉塞し增長せしめ、亦能く一切の物類を摧壞するが如く、又風性の遍く所依なうして自在に旋轉し能く障礙することなきが如く、如來の慧風も亦復是の如し。一切の障蓋煩惱の遊塵を滌除して、涅槃清涼の法性を證せしめ、又復能く一切世出世間の善法をして增長せしめ、無明の大樹を摧壞して其根本を抜く、而も此無障礙力は都て所依なし。故に以て喩と爲す。第五の句に、「譬如水界、一切衆生、依之、觀樂、如是一切智智、爲諸天、世人利樂」といふは、水大の高より下に赴いて饑益するところ多く、能く草木を潤して華葉を生じ、又復本性清潔にして垢も無く濁も無く、悉く能く飢渴の衆生を満足せしめ、諸の滓穢を洗ひ、熱惱を消除し澄深難入にして測量すべからず。坑培の處に於て性皆平等なるが如く、如來の智水も亦復かくの如し。眞法界より世間に流趣して諸の等持を潤し、助道の法を生じて大果實を成じ群生を利益す。體、煩惱なきが故に清潔なり。能く諸惑を離るるが故に無垢なり。一相にして異にあらざるが故に無濁なり。諸そ之を得ることあれば、思願悉く息み、清涼の定を獲て塵勞を洗除し、湛寂にして

【平等の性】阿字本不生。

【復次云】以下は以上の五喻をば深秘の義を以て釋す。

【所謂不可思議云】以下の文は因根、究竟三句の文を解す。

【大會生層】大集會の衆人をして五字門の義を解せしめんが爲に機をを作るなり。

【葦葦】葦は葦の中の白皮なれば今は葦に作るべし。今葦は即ち米の殻カラなり。

離思なり。平等の性を證す、故に以て喩と爲すなり。復次に、金剛手この五喻を説くことは、即ち是れ下の文の五字の義を發起す。凡阿字門を地と爲し、五字門と水と爲し、又羅字門を火と爲し、五字門を風と爲し、何字門を空と爲す。又世間の地水火風を縁と爲し、虚空處へ字して然して後に生ずることを得、隨つて一縁も圓すれば遂に増長せざるが如く、一切智智の如來の種子も亦復かくの如し。即ち一切智門の五義を用て自ら衆縁となして能く菩提常性の妙果に至る。所謂不可思議不生不滅の因縁なり。金剛手、如來の獨一法界加持の相を顯知して、心に推付するところ必ず將に是の如きの法門を説かんとすと知るが故に、先づ其功德を喩として大會生解の機を發起し、然して後に佛に問ひたてまつる。是の如きの智慧は何を以てか因とし、云何が根とし、云何が究竟とするやと。此れより已後は如來智印を以て即ち其心を定め、廣く分別して説きたまふ。例せば、彌勒菩薩の佛の神通の瑞を觀て、即時に憤憤悱悱として心に疑ふところあり。是道場所得の法を説かんとや爲る、菩提記を授けんとや爲ると。文殊、名體を發揮して指して妙法蓮華といふ。然して後に如來印するに實相を以てし、機に乗じて演説して動執の徒をして、疑網を離るることを得しむるが如く、譬へば、春陽の始に前種甲坼け、雷風鼓動し、時雨潤灑すれば葦葦を翻るることを得、苗よく出生するが如し。若し無機の人ば、即ち際會に遇ふと雖も深益を發起すること能はざるなり。

大毘盧遮那佛經疏卷第一本 終

大毘盧遮那成佛經疏卷第一 末

沙門 一行阿闍梨の記

入真言門住心品第一の餘

【一】以下の文は三句に對する如來の答説の文段なり【執金剛手秘密主云】佛、金剛秘密主の間に對して初めには之を讚歎し、後に又誠しめ給ふを釋す【聖心】如來の御心【淺行の諸の菩薩】密教地前の菩薩を指す。

【釋論】大智度論第一卷ノ二十二。

【二】「毘盧遮那佛、即告持金剛秘密主言、善哉善哉、執金剛、善哉、金剛手、汝問吾、如是義、汝當諦聽、極善作意、吾今說之、乃至、諸法無相、謂虛空相」とは、執金剛手秘密主豫め如來加持の深意を測り、又能く時の衆を發起して生解の因縁を作すを以て、仰いで聖心を測り機會を失せざるが故に重ねて善哉善哉と言ふ。我れ一切の天人、沙門、婆羅門乃至淺行の諸の菩薩を観るに、能く世尊の前に於てかくのごときの間を發すもの無し。所以いかにとなれば、此三句の義の中に、悉く一切の佛法秘密神力甚深の事を攝するを以ての故に復數じて、善哉、金剛手、汝能く吾に是のごとき義を問ふと言ふなり。如來の善哉の言音に加持せらるるを以ての故に、其時に金剛手無量の功德倍増す。復所受の法に於て終に漏失なきことを明して、次に即ち誠めて「汝當諦聽極善作意吾今說之」と言ふ。亦未來の弟子の爲に此囑へを明す耳。深心をもて法を受くるの儀式なり。故に「釋論」に云はく、「若し人心善直信ならば、この人は法を聽くべし」若しこの相なくば、即ち

【端身】身心一如の故に身正しき時は心正し。故に端身と云ふ。

【渴飲】求法の念強きこと。

【無患意經】四卷あり。支婁迦讖の譯。但し七卷本は竺法護の譯。

【二十の功徳】智度論の第四十八卷には明法に二十種の功徳ありと説く

【二】以下正しく三句を總釋す。

【中智】中道正觀の智、即ち阿字不生の智なり。

【心の實相】譯者提心の如實の相。

【内證の所行】佛果の三密即ち本有功徳なり。

【薩婆若の心】一切智智の心、初地「眞生の生」なり。菩提心の生なり。【覺へば人あつて云云】華嚴經第七卷二十二の文。【白淨信心】無疑慮心なり。即ち、

修すること能はじ、働を説いて云ふが如し。聽者端身にして渴飲の如くし、一心に語義の中に、入り踊躍して法を聞き、心に悲喜せん、かくの如きの人には爲に説くべしと。及び「無盡意經」には、用心聽法に二十の功徳あり。當に廣く之を説くべし。

【二】經に「佛告金剛手、菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟」といふは、猶し世間の種子の四大業縁に續るが故に根を生ずることを得。是の如く次第に乃至果實成熟するを名けて究竟と爲るが如きは、然も中智を以てこれを觀するに畢竟じて不生不滅なり。この故に因果の義成ず。若し法然らざるば、生滅斷常の相あつて、則ち戲論に墮し、皆悉く破すべし、因果の義成ぜず。今行者心の實相を觀することも亦復かくのごとし。一切の眞諦を出過して淨虚空の如し。内證の所行に於て深信の力を得、薩婆若の心堅固にして動せず、不受の生を離れて眞性の生を成就す。萬行の功徳これより增長す。故に菩提心爲因と曰ふ。此菩提心は後の二句の因たり。若し生死の中の所積の善根に望むれば則ち名けて果とす。佛法の前相を觀るを以ての故に。譬へば人あつて善知識の言を聞くに、汝が今の宅中に自ら無事寶藏あり。自ら方便を動修して而もこれを開發せば、一國に周給すとも常に匱乏なかるべしと云ふ如し。彼人聞き已て即ち誦信を生じて證の如く行じ乃至功を施すこととします、漸く前相を見る。其時の寶藏の功徳に於て、疑惑の心を離れて殊勝の加行を發起するに堪能なるが故に、菩提心は即ちこれ白淨信心の義なり。「釋論」に亦いはく、「佛法の大海には信を能入とす。」梵天王の轉法輪を請せし時、佛偈を説いて言ふがごとし。

大度量勇銳無惑の
人が決定諦信する
なり。

【釋論】 大智度論
第一卷ノ十九の
文。

【甘露味】 般若經
の甘露味即ち不生
の故に不老不死
の法味。

【我が第一】 大日
如來の本不生の理
を指す。

【甚深の法】 等覺
十地も見聞するこ
と能はぬ最極の法

【無量無數】 言語
道斷心行所滅の意
【華葉華】 萬行の
こと。

【自の善根】 以我
功徳力即ち自己の
功徳力にして三密

修行の善根力なり
【法界力】 法性平
等の力。法界は衆
生及諸法也。

【無住の心】 法界
に遍するが故に無
住所。即ち大悲心

の運。 五大の加
持によつて自然に

【任運】 五大の加
持によつて自然に

われ今甘露味門を開かん。若し信を生ずるものあらば歡喜を得んと。此偈の中には施戒多
聞忍進禪慧の人能く歡喜を得とは言はず。獨り信人のみを説けり、佛意かくの如し。我が
第一甚深の法は微妙にして無量無數不可思議なり。不動不倚不着にして無所得の法なり。

一切智人にあらずば則ち解すること能はじ。故に信力を以て初めとす。慧等に由つて能く
初めて佛法に入るにはあらずと。かくの如きの淨信心をして堅牢增長ならしめんが爲に、

「經」の中に次に「大悲爲根」と説く。根はこれ能執持の義なり。猶し樹根の華葉花菓を
執持して傾拔せざらしむるが如し。梵音には悲しみを謂つて迦盧拏とす。迦はこれ苦の義

なり。盧拏はこれ剪除の義なり。慈は廣く嘉苗を植うるが如く、悲は草穢を芸ひ除くが如
し。故にこの中に悲といふは即ち兼ねて大慈を明すなり。且く行者俱養を修するときはの如

きは、若しは一花或は塗香等をたてまつるに、即ち遍一切處の淨菩提心を以て供養雲を興し
普く佛事を作して悲願を發起し、群生に廻向して一切の苦を抜き無量の樂を施す。自の善根

と及ぶ如來の加持と法界力とに由るが故に、所爲の妙業皆成就することを得。即ちこれ普
く一切智地と乃至無餘の有情界とに於て、皆悉く根を生ずるなり。行者無住の心を以て

修するところの萬行に隨つて、即ち大悲の地界に執持せらるるに由るが故に、大悲の火界
に溫育せらるるが故に、大悲の水界に滋潤せらるるが故に、大悲の風界に開發せられて生ず

るが故に、大悲の虚空障礙せざるが故に、其時に無量の度門任運に開發すること、由し牙莖
に莊嚴するが如し。即ちこれ一切の心法に於て因縁を具足するの義なり。方便爲究竟とは

に莊嚴するが如し。即ちこれ一切の心法に於て因縁を具足するの義なり。方便爲究竟とは

に莊嚴するが如し。即ちこれ一切の心法に於て因縁を具足するの義なり。方便爲究竟とは

に莊嚴するが如し。即ちこれ一切の心法に於て因縁を具足するの義なり。方便爲究竟とは

に莊嚴するが如し。即ちこれ一切の心法に於て因縁を具足するの義なり。方便爲究竟とは

開發すること。

【藥物の權】衆生に應同する權方便

【規製權による】規製は規矩製造。

「權に中る」とは其製品の鈞合よく取れたること。

【摩訶般若】大般若經第一卷又は大般若經第四百二卷に十八空等を云ふ

【十八空】内空、外空、空空、大空等の十八空。

【三昧道品】三昧は百八三昧、道品は三十七道品なり

【總持門】陀羅尼門なり。

【三】以下三句の別篇段なり。

【自心】行者の自心なり。

【寶藏】所求の菩提。

【愚童凡夫】愚童薩埵即ち六道の衆生なり。今もし十住心につけば、初二三の住心なり。

枝葉の次第、詳く、萬行圓極して復増すべきことなく、應物の權能事を究盡す。即ち醍醐の妙果三密の源なり。又淨菩提心とは、猶眞金の本性明潔にして諸の過患を離れたるが如し。大悲は工巧を習學して諸の藥物を以て種種に鍊治し、乃至鏡徹柔軟にして屈申自在なるがごとし。方便は巧業成就して造作するところあれば意に隨つて皆成ず。規製權に中つて衆伎に出過せり。故にその得意の妙は、以て人に授くべきこと難きが如し。『摩訶般若』に明すところの六度、十八空、三昧道品、總持門等のごときは、皆大悲の句の中に入る。即ち彼萬行所成の一切智慧の果を説いて方便と名く。内に方便を具するに由るが故に、方便の業は即ちこれ利他なり。これを以て梵音に耶波娜といふは亦發起と名く。種子より果を生じ、果還て種となるが如し。故に以て名となす。

【三】經に「秘密主、云何菩提謂如實知自心」といふ、即ちこれ如來の功德寶所を開示するなり。人の寶藏を聞いて意を發して勤求すといへども、若し其所在を知らざれば進趣するに由なきが如し。故に復指して如上に明すところの第一甚深微妙の法は、乃至一切智人にあらざれば、則ち解すること能はじとは、この法は何のところよりか得るや。即ち是れ行者の自心なりと言ふ耳。若し能く實の如く觀察して、了了に證知する、これを成菩提と名く。それ實に他に由て悟らず、他に從つて得ず。問うて曰はく、『若し即心これ道ならば何が故ぞ衆生生死に輪廻して成佛することを得ざるや。』答へて曰はく、『實の如く知らざるを以ての故なり。所謂愚童凡夫、若しこの法を聞けば少しく能く信することあり。識性

【濫性二乘】聲聞緣覺二乘を指す。即ち第四、五の住心なり。

【長者の家の窮子】法華經信解品にある譬喩なり。

【客作】家なき流浪者を客と云ひ、雇はれたる人を雇作と云ふ。

【七微】四方上中下の七極微合して初めて一微塵を生ずと。

【譬へば虚空の云】以下譬喩に虚空の七義を出して無相の菩提心を示す。

【無量無邊】無盡莊嚴極沙の性徳を云ふ。即ち六大四曼三密の無邊の性徳なり。

【遍喩】全分の喩意を得て空を忘れよ。意を空を忘れよ。義。莊子の文なり。

【戲論分別】言語心量なり。

の二乗は自ら觀察すといへども未だ實の如く知らず。若し實の如く自ら知るは、即ちこれ初發心の時に便ち正覺を成ず。譬へば長者の家の窮子のごとし。若し自ら父を識る時に豈にまた是れ客作の賤人ならんや。その時に行者正しく心の實相を知るが故に、一切の法は悉く甚深微妙にして無量無數不可思議なり。不動不倚不著にして都て所得なし。畢竟じて菩提の相の如しと見るが故に『經』に復「秘密主、是阿耨多羅三藐三菩提、乃至、彼法小分無有可得」といふ。無上正遍知の義は前に已にこれを説く。この中に小分と言ふは梵には阿耨といふ。即ちこれ七微合成なり。從緣生の色に於て最も微小なりとす。故に以て喩とす。彼法と言ふは此無相の菩提心を離れて外に更に一法も無きなり。經の中に次に因縁を説いて「何以故、虚空相、是菩提、無知解者、亦無聞曉、何以故、菩提無相故」といふは、譬へば虚空の一切處に遍じて畢竟淨なるが故に一切の相を離れて動も無く、分別もなく變易すべからず。破壞すべからざるがごとし。かくの如き等の小分相似を以ての故に、以て無相の菩提心に喩ふ。然もこの中に復無量無邊の秘密甚深の事あり。實には世間の虚空の能く遍喩するところにあらず。翼くはもろもろの學者意を得て空を忘れん耳。又虚空の戲論分別を遠離するが故に知解の相も無く聞曉の相もなきが如く諸佛自證の三菩提も當に知るべし。亦爾なり。唯しこれ心自ら心を證し、心自ら心を感じる。この中には知解の法もなく、知解のものもなし。始めて聞曉すべきにあらず。亦聞曉のものもなし。若し小分の能所を分別して猶し微塵の如きも、即ち法と非法との相を取らば、我人衆生

【金剛の慧】 不動不轉、本不生の慧なり。

【釋論】 大智度論第二十一卷ノ二十四

【常明の十六】 是は外道の十四、中の十二を出す。即ち常、無常の見に四種、邊無邊の見に四種、如去不如去の見に四種、身と神との見に二種あり。十四等のこと智を論じ及び大品經の佛母品等にあり。

【有相無相】 薩婆多摩訶止立する常見、有相の體是(無相)なり。

【虚空相】 心虚空界、其三種無二の故に無相無境界にして首截處を越えて虚空の如し。

【四】 此段は圓行の二轉、證入の二轉及び方便究竟の展轉の問答を釋す。

壽命を離れず、豈に名けて金剛の慧となすことを得んや。復次に經の中に自ら轉轉して、一何以故菩提無相故一と言ふ一釋論にいふが如し。佛の智慧は清淨なるが故に諸

觀の上に由て諸法の常相、無常相、有邊相、無邊相、有去相、無去相、有相、無相、有

清淨、無漏相、有爲相、無爲相、生滅相、不生滅相、空相、不空相を觀せず、常に清淨にして無量なること虚空の如し。この故に佛智は無礙なり。若し生滅を觀するものは不生

滅を觀することを得ず。不生滅を觀するものは生滅を觀することを得ず。若し生滅實なら

ば不生滅は不實なり。若し不生滅實ならば生滅は不實なり。かくのごとき等の諸觀皆礙な

りや。是の如きの淨菩提心は諸礙を出過して、業相を離れたるを以ての故に、一切の法に於て礙なきことを得たり。譬へば虚空の相は亦無相なるが故に、萬像皆悉く空に依れ

ども空は所依なきが如く、是の如く萬法皆淨心に依れども淨心は邊に所依なし。即ちこの諸法も亦復菩提の相のごとし。所謂淨虚空の相なり。故に經に復「秘密七、諸法無相、

謂虚空相一」と云ふなり。

【四】 一時、金剛手、復白佛言、世尊。尋求一切智誰爲菩提、成正覺者、誰發起、彼一切智智、佛言秘密主、自心尋求菩提、及一切智、何以故、本性清淨故、乃至、無量功

德、皆悉成就」といふは、時に釋金剛、佛の所説の義の薩婆若の慧は唯しこれ自心なり。

乃至小法として此心を出でたるものあることなしと聞いて、未來の衆生に疑惑を斷ぜしめんが爲の故に、而も佛に問うて言さく、菩提心をば名けて一向志求一切智智とす。若し一

【一向志求一切智】一途に一切智を求む即ち勝義の菩提心。

【人間の淨水云云】一水四見の譬喻なり。即ち人間の水を餓鬼は火と水魚は住居と見、天人は寶莊嚴の池と見る。此文、阿毘達摩經にあり。【瑜伽行人】眞言行者。【三寶の實相】三法は煩惱業苦の三道。實相は本不生。【復次に世尊云云】以下は菩提の實相を明かす。

一切智即ちこれ菩提心ならば、此中に誰をか能求とし、誰をか所求とし、誰をか可覺とし、誰をか覺者とせん。又復心を離れて外に都て一法なくば、誰か能く此心を發起して、妙果に至らしむるものぞ。若し法因縁あること無うして而も成就することを得といはば、一切衆生亦方便を假らずして自然に成佛すべし。故に佛答へて、「祕密主、自心尋求菩提、及一切智、何以故本性清淨故」と言ふ。衆生の自心の實相は即ち是れ菩提なり。有佛無佛常に自ら嚴淨なりといへども、然も實の如く自ら知らざるが故に即ち無明なり。無明顛倒して相を取るが故に、愛等の諸の煩惱を生ず。煩惱に因るが故に、種種の業を起して種種の道に入り種種の身を獲、種種の苦樂を受くること、蠶の絲を出すに所因なけれども自ら己れより出して而して自ら纏裏して燒煮の苦を受くるがごとし。譬へば人間の淨水を天鬼の心に隨つて或は以て寶とし、或は以て火として自心自ら苦樂を見るがごとし。之に由て當に知るべし。心を離れて外に一法あることなし。若し瑜伽行人正しく三法の實相を觀するるとき、即ちこれ心の實相を見るなり。心の實相とは即ちこれ無相の菩提なり。亦一切智と名く。復諸の因縁を離れたりと雖も、亦因なうして而も成就を得るにあらず。復次に世尊、衆生をして實の如く自心を知らしめんと欲ふが故に、更に方便を以て分別し演説したまふ。然る所以は、若し但し自心は不生不滅なりと言ふは、所因なきを以ての故に、義則ち解しがたし。故に先づ其著處を示す。經に「心不在内、不在外、及兩中間、心不可得」といふは「摩訶般若」の如きは、無量の門を以て諸法の實相に入る。今その宗要を擧げんと欲して、但し

【摩訶般若】大般若經百八十二卷より二百八十四卷に至る初分難信解品の中に五蘊等の八十一科の法門を説く。

【内外の十二處】眼耳鼻等の内の六處と六塵なる外の六處のこと。即ち六根と六境との十二なり。

【即離相】義釋には即離相在とあり即ち即觀、離相及び相在を云ふ。皆外道の執計なり。

【珠力の譬云々】涅槃經第二卷の文【非青非黃等云々】是は顯、形、表の三色を對して心の不可得を明かす。

【眞我】外道所執の眞我。

内外の十二處を觀するに、即ち一切の法を攝す。行者の心、無始より來た多く内法に於て心に取着するが故に、先づ内の六處に於て、即離相當の方便を以て一一に諦觀するに、心不可得なり。無生無相處所あることなし。而もこの念を作す。この心或は外にありや、復外に六處に於て實のごとく之を觀するに、心亦生相無うして處所あること無し。猶し錯誤せんことを恐れて、更に合して之を觀するに兩中間に於ても亦不可得なり。即ちこの心の實性は、本より無生無滅なりと悟りぬれば、畢竟常淨にして戲論雲披る。譬へば珠力の故に水清し。水清きが故に珠現す。定んで餘處より來らざるが如し。

『經』に「祕密主、如來應正等覺、非青、非黃、非赤、非白、非紅紫、非水青色、非長、非短、非圓、非方、非明、非暗、非男、非女、非不男女」と云ふは、前には一切の法に約して心の實相を明し已んぬ。今復眞我に約して心の實相を明す。此宗に辯ずる義は、即ち心を以て如來應正等覺とす。所謂内心の大我なり。有一類の外道の如きは、自心を了せざるが故に而もこの言を作す。我眞我を觀るに、其色正しく青し、餘人は見るに能はざる所なりと、或が言はく、正しく黃なり。正しく赤なり。或が言はく、鮮白なり。或が言はく、臙脂の色如し。今義をもて紅紫といふ。或が言はく、我眞我を見るに其相極めて長く、極めて短く、乃至男子の相等の如し。唯し此のみ是實なりと。餘は皆妄語なり。然れども此等の業相は、ことごとく縁より生じて自性あることなし。云何が眞實の我と名くることを得んや。是の如きの種種の觀に對するが故に、佛、如來應正等覺は青色等にあら

【黒月】暗夜を云ふ。印度の歴法にて一日より十五日迄を白日と云ひ、十六日より晦日迄を黒月と云ふ。【大象】内心の大火。

【眞體】淨菩提心の體に喩ふ。

【次に秘密主云云】以下は三界六趣を擧げて心の實相を明かす。

【非想處】無色界の最頂なる非想非非相天を云ふ。【三界】欲界、色界、無色界なり。

すと説きたまふ。所以何となれば、是青相は畢竟して不生なるが故に則ち非青とす。青の實相は不壞なるが故に而も亦非青にあらず。當に知るべし。如來應正等覺は一定の相として説くべきこと無く、亦是の如きの諸相をも離れず、有る外道阿闍梨の如きは黒月の夜に於て、もろもろの弟子を引いて大象の前に至つて之に告げて言はく、我れ今に於て汝に眞我を示さんと。時に彼の衆人、或は目を以て視、或は身を以て觸る。其れ形を視るものは則ち言はく、我れ今己に眞我を識んぬ、その色甚だ白し、杪然として高大なりと。それ牙に觸るるものは則ち言はく、眞我は戈の如しと。耳に觸るるものは則ち言はく、眞の如しと。足に觸るるものは則ち言はく、柱の如し。尾に觸るるものは則ち言はく、素の如し。各遇ふところに隨つて情計不同なり。復更相に是非すといへども、終に其眞體を識ること能はず。若し瑜伽行者、心明道を開發するとき、心王の如來を照見すること、大明の中に目に衆色を視るが如くして、則ちかくの如きの諍論を生ぜざるなり。

次に「秘密主、心非欲界同性、非色界同性、非無色界同性、非天龍夜叉、乃至、人非人趣同性」といふは、亦これ諸の妄執に對して、自心の變易なきことを顯示するなり。故に説いて此心は三界と同性にあらずと言ふ。有る諸の外道の計すらく、我性は則ち欲界に同なり。或は色無色界に同なり。乃至非想處は即ちこれ涅槃なりと謂ひ、或は梵王毘紐天等、一切の法を生ずといふ。然もこの三界は皆ことごとく衆緣より生ず。其自性を求むるに都て不可得なり。況んや心性をして彼性に同ぜしめんや。次に廣く無量のもろもろの

【毘紐天】色界の正なり。譯して遍勝、遍聞、遍淨と云ふ。
 【八功德水】甘、冷、臭、軟、輕、清淨不臭、飲時、不損喉、飲已不傷腹の八功德を具したる水なり。

【寶玉の眞性】淨菩提心の如意寶の如き本不生。

【經】に久祕密主云云以下は今六根六境、六識、十八界の法門を説いて經文を釋するに蘊處界の三科は一具の法門なれば十二入を三處（内外中間）に約して説く經文を承來せるものなり。

衆生趣を分別して、一一にこれを言ふに、皆彼と同性にあらず。譬へば虚空の中より八功德水を甬すに、一味淳淨なれども所受の器に隨つて種種に差別なるが故に、或は辛く、或は酸く、或は温に、或は濁れり。然も八功德の性は彼と同せず。溫解け濁息むときには清涼なること故の如くして、未だ嘗て變異せざるが如し。又眞陀摩尼の自ら定相なうして、物に遇へば即ち其色を同すれども、然も其寶性は彼と同せず。若し彼と同性ならば是色、縁に隨つて生滅するるとき寶性も亦生滅すべきが如し。復次に世尊、將に大慈胎藏生曼荼羅を開示せんと欲ふが故に、先づ正しく心の實相門を開示す。何を以ての故に、行者の本尊三昧の中に顯現男女等の相、及び普門示現の六趣の身ありと説くが如きは、恐らくは諸の行人、心の因縁生を了ぜざるが故に、寶玉の眞性に於て戲論を生ぜん。故に佛説いて、如來は青にあらず。黄にあらず。乃至この心は三界六趣と同性にあらずと言ふ。もし能かくのごとく觀察するときは則ち菩提心を降へざるなり。

「經」に又一祕密主、心不住眼界、不住耳鼻舌身意界、非見非顯現」といふは、前に三處にあらずと説くに、已に一切の法を攝すれども未悟のもの爲に復一一に法に歷て分別す。若し心諸趣と同性にあらずんば眼界等に住すとやせん、乃至意界に住するか。若し心眼界に住すといはば、眼は衆緣より生ずるが故に性相自ら空なり、住處あること無し。況んや復心の實相は眼の中に住在せんや。眼界の如きは乃至陰入の諸法も皆廣く説くべし。復次に前に已に種種の外道を破す。今諸法に住せずと説くことは、邊見の聲聞を破せんが爲の故

【陰入】 五蘊十二處なり。

【童子】 小乘二十部の一にして説一切有部より別出せるものなり。

【阿毘曇】 對法と譯す。即ち經律論三藏中の論部のことなり。

【五事】 五蘊のことなり。

【不可説藏】 童子部には五法藏を立つ。即ち三世(有爲)と無爲と不可説藏となり。此宗にては不可説藏には我體實有と執する其我をば攝する。

【説一切有道の入】 小乘薩婆多部の入を指す。此宗は三世實有法體恆有と云ふ。

【藏界入】 五蘊、十八界、十二處を云ふ。

【戲論】 實我實法の計。

【佛智見の性】 三乘所談の眞如の理

【世諦】 凡夫所知

なり。「童子」「阿毘曇」の中に説くが如し。譬へば四大和合して眼法あるが如く、是の如く五衆和合して人法あり。この人法は不可説藏の中にありと。「説一切有道人」の言はく、「神人は一切の法門の中に求むるに不可得なり、兎角龜毛の常に無なるがごとし、而して陰界入は實に自性あり」と。是の如きの戲論の法を以ての故に其心を識らず、若し能く心は諸法に住せずと觀するときは、則ち心行處なうして戲論皆盡くるなり。非見非顯現とは、有人の言ふが如し。一切衆生は本より佛智見の性あり。但し無明の翳障除くとき自ら能く理を見るとき。或は有人の言はく、是の如きの當理は造作すべきにあらず。但し覆蓋を除いて雲霧除くとき日輪自ら現すと。皆世諦を以てこれを言ふのみ。若し淨智提心これ可見可現の法ならば即ち有相とす。凡そ有相のものは皆これ虚妄なり。云何が能く無上菩提を見ん。又「經」の中に自ら因縁を説けり。何を以ての故に、虚空相の心はもるもろの妄執を離れ、亦分別なしといふは、猶し虚空の畢竟淨なるが故に、一切の色像の能く之を染汗するもの無きがごとく、心性も亦爾なり。一切の分別の能く之を染汗するもの無し。

若し分別なきは即ちこれ一切の相を離るるなり。

「經」に「所以者何、性同虚空、即同於心、性同於心、即同菩提、如是秘密主、心虚空界、菩提、三種無二、此等悲爲根本方便波羅蜜滿足」といふは、如上の種種の入海淨門は、皆自心に菩提を求むる義を發明せんが爲なり。今また結して虚空無垢は即ちこれ心なり。心は即ちこれ菩提なり。本より同一相にして三名ありと言ふ耳。即ち此一法界心は、因縁畢

の理。

【虚空想】無相菩提心。

【一法界心】阿字本初の心地を指す。

【因縁】因は菩提心、縁は大悲萬行なり。

【諸菩薩衆】自性會の中の諸實行衆を指す。

【一切の作多羅】生身の轉運如來一代所説の經文を指す。作多羅は經と譯す。

【經に秘密主云何云云】以下心の不可得を明かす。

【一切の經】大小乘經の全體。

【或は諸蘊和合等云云】小乘の説。

【或は諸法は縁より生ず云云】大乘の説。

竟じて不生なりと雖も、而も因縁の實相を壞せず。不生を以ての故に則ち能所の異なし。

不壞を以ての故に、亦悲を根本となして方便波羅蜜滿足することを得。即ちこれ究竟不思議

の中道の義なり。【經】に「秘密主、我説諸法、如是令彼、諸菩薩衆、菩提心清淨、知識

共心」といふは、佛已に淨菩提心を開示したまふに、略して三句の大宗を同じ竟んぬ。即

ち一部の始終を統論するに無量の方便、皆諸の菩薩をして菩提心清淨にして、其心を

知識せしめんが爲なり。此經にいふがときは當に知るべし。一切の修多羅の意皆同く

此にあり。釋迦如來所説の法のごときは、當に知るべし。十方三世の一切如來の種種の因

縁をもて、宜しきに隨つて演説したまふ法も、此三句の法門のためにあらざること無し。

究竟同歸して本より異轍なし。故に「我説諸法、如是、乃至知識共心」といふなり。

【經】に「秘密主、云何知自心、謂若分段、或顯色、或形色、或境界、若色、若受想行

識、若我若我所、若能替、若所替、若清淨、若界、若處、乃至一切分段中、求不可

得」といふは、世尊前に已に廣く淨菩提心の如實の相を説きたまふに、衆生未だ意を得て

懸に悟ること能はざるを以て、復方便を作して此頓覺成佛の入心實相門を説きたまふ。亦

十方三世の一切の佛法を決了せんが爲の故なり。一切の經の中に、或は諸蘊和合の中に我

不可得と説き、或は諸法は縁より生じて都て自性無しと説くが如きは、皆これ漸次に實相

門を開く。彼に諸法の實相と言ふは即ち是れこの經の心の實相なり。心の實相とは即ちこ

れ菩提なり。更に別の理なし。但し薄福の衆生の自ら作佛を信すること能はざるが爲なり。

【薄福の衆生】 聲聞等の機根。

【即心の印】 法華經法便品の説。即心も亦眞如なりと云ふ意。

【分段】 諸の有爲の色の法は或は一期の生滅、或は刹那の生滅と分段にして前滅後易の二生死あり。

【從縁生の法】 一切の有爲法。

【六情】 六識能業のこと。

【六塵】 六境のことなり。

【聚沫、泡、炎、芭蕉、幻化】 序の如く、色、受、想、行、識なり。

自ら作佛を信ずるものは甚だ得難しとす。故に世尊且く諸の垢障を淨めしめ、其心を將護して要す時義をして契合せしめ、然して後に爲に即心の印を説く。今の經は則ち是の如くにはあらず。直に諸法に約して其心を識らしむ。所以に秘要の藏とす。

初の句に「謂若分段」といふは是れ總じて從縁生の法を擧ぐるなり。法の因縁を待つて成ずるは、必ず差別の相あるを以ての故に、行者當に知つて是の如く觀察すべし。今この分段の中には何ものか是れ心なるや。乃至分析し推求するに都て不可得なり。即ち知んぬ。此心は衆相を出過して、諸の因縁を離れたり。心性は常に是の如しと知るを以ての故に、爾時に、一切の諸法自然に心に異ならざるなり。顯色は謂く、青黄等なり。形色は謂く、方圓等なり。境界は謂く、六情の所對即ち六塵なり。人をして解し易からしめんが爲の故に復法に歴て觀察す。今この顯形衆色の中にも何ものか是れ心なるや。色は木より非情なり、覺知の相なし。況んや是中に於て心として得べきことあらんや。顯形をいふが如きは、當に知るべし。一切の色塵も亦是の如し。色塵の如きは、乃至聲香味觸法も亦是の如し。行者外塵の中に於て心不可得なり。復内身の五蘊を觀するに亦聚沫、泡炎、芭蕉幻化の如し。自ら性實を求むるに尙し所有なし。況んや其中に於て心あることを得んや。是の如く龜より細に至り、廣を去け略に就くに、乃至現在一念の識も亦住時なし。又復衆縁より生ずるが故に即空即假即中なり。一切の戲論を遠離して本不生際に至る。本不生際とは即ちこれ自性清淨心なり。自性清淨心といふは即ち是れ阿字門なり。心阿字門に入る

【我所】 具には我所有なり。凡夫は我器(我器)備僕(我備)三種のもつをば我身に繫屬するもの如く執す云ふ。

【我人】 外道所計の我と凡夫所執の人なり。

【下】 下の經に出す三十外道中の第七建立淨外道の事。

【長爪梵志】 印度の波羅門にして舍利の門なりと云ふ。長爪なるが故に此名ありと。

【摩訶般若】 一切法清淨なりと見る空慧。即ち長爪梵志の一切法を空に同するなり。

【毘婆沙】 毘婆沙等なり。

【摩訶般若】 大般若經、小品般若經等なり。

を以ての故に、當に知るべし、一切の法悉く阿字門に入るなり。已に諸法の實相を觀ることを説きつ。次に我想を觀することを明す。故に「若我、若我所、若能執、若所執、若清淨」といふ。如上には諸陰の中に於て、種種の方便をもて心を觀するに而も不可得なり。何に況んや我人壽者等の法をや。本より以來但し假名のみあり、而も其中に於て心として得べきことあらざるや。清淨とは即ち外道の所計なり。最極清淨の處を涅槃と以爲へり。

「長爪梵志」の一切の法を受けずして而して、是見をのみ受けしが如く、今も亦是の如し。觀空の智慧に取著して、是清淨の想を生ず。即ち是の如きの想の中に於て正しく自心を觀するに生處あることなきをもて、眞淨の菩提心に入ることを得。以上は廣く五陰に對す。

次に復十八界、十一處、乃至一切分段の中に求むるに不可得なりと説きたまふ。陰、界、入の義は「阿毘曇」の中に廣く明せり。此三法は已に一切の法を攝すれども、復乃至一切分段の中に求むるに不可得なりといふは、即ちこれ「摩訶般若」等の中に、法に歷て廣く明すものこれなり。

陰界入に於て分析して心を求むるに心不可得なるが如く、當に知るべし、六度萬行乃至一切の慧持三昧門の中に、種種に心を求むるに亦不可得なり。心不可得なるを以ての故に、是心の常我淨、非常業我淨等の相も亦復是の如く不可得なり。復次の聲聞の人の、初めて陰、界、入を觀するるとき、陰に即して我を求め、陰に離して我を求むるに皆、不可得なり。

相在も亦不可得なり。その時に八直道の中に於て遠離離垢して、正法眼生ずるが如く、眞言門の菩薩も亦是の如し。初めて陰、界、入を觀するときに、陰に即して

【八正道】八正道なり。即ち正精進正念、正定、正見正思惟、正語、正業、正命の八なり。【遠塵】見惑を斷ずること。【正法眼】人空智慧の眼なり。

【頓悟の法門】即事而眞の故に事理各別の漸に對して今は斯く云ふなり。【經に秘密主】此菩薩云々。觀心得益文を明す内に初めに菩提を門とし、頓に除蓋障三昧を得ることを明す。【譬へば云云】華嚴經入法界の文なり。【樓閣】毘盧遮那莊嚴藏樓閣なり。

心を求め、陰に離して心を求むるに皆不可得なり。相在も亦不可得なり。故に即時に懸かに自心の木不生際を悟る。如來知見の大菩提道の中に於て遠塵離垢して法眼淨を得。若し是の如きの方便を作し、先づ著處より之を觀ぜずして而も但し是心は遍一切處にして畢竟無相なりと言はば、則ち一切衆生悟入するに由なし。當に知るべし、此觀を最も必要の法門とす。餘の方便を遠離するもろもろの菩薩のごときは、漸次に戒定智慧を修習して、無量劫に於て種種の門を以て入法二空を觀ずれども、猶し未だ心の影像を遠離すること能はず。今眞言行者は、初發心の時に於て直に自心實相を觀じて不生を了知するが故に、即時に入法戲論淨なること虚空の若し。自然覺を成じて他に由つて悟らず。當に知るべし、此觀を復頓悟の法門と名く。

『經』に「秘密主、此菩薩淨菩提心門、名初法明道、菩薩住此修學、不久勤苦、便得除一切蓋障三昧」といふは、佛の智慧に入るに無量の方門あり。今此宗は直に淨菩提心を以て門とす。若し此門に入るものは即ちこれ初めて一切如來の境界に入る。譬へば彌勒、樓閣の門を閉いて善財童子を内れ、この中に具に無量の不思議の事を見しめんが如し。言を以て宣べがたし。但し入るもののみ自ら知るのみ。法明とは心の木不生際を覺るを以て、其心淨住にして大慧の光明を生じ、普く無量の法性を照らして諸佛所行の道を見る。故に法明道といふなり。菩薩この道に住するるとき、妄想の因縁に従つて有ゆる煩惱業苦皆悉く清淨に除滅す。譬へば人あつて暗の中に利寶の爲に傷けられて謂うて蛇毒とす。

【血塗の相】 迷へる自心にも又隨縁の徳あるを云ふ。

【除蓋障三昧】 自心の光を覆ふ所の人法二執の惑を斷じて一切の蓋障を除くの定なり。即ち初地入心の前半の利那は初法明道にして、後半の初那にこの三昧を得る。即ちこの三昧を得れば名けて地前三賢となす。

【煩惱の實相】 實相は不生の故に煩惱の本體とも見るべし。

【寶樂門】 淨菩提心の如意寶。

【宿世の煩惱】 世世業習の煩惱。

【道機】 佛道の機なり。

【方等】 諸大乘教のこと。

【方等】 諸大乘教のこと。

毒想を作すを以ての故に、その心執着して便ち劣氣を成じ散體に過入す。命終せんと欲するときに、重ねて自障あつて之を捨て其本末を噴して、即時に引いて傷處に至り、明燈を以て之を照らして猶し所傷の實を見るに血塗の相あり。其人苟に非すと了知して毒氣亦除き玩好の具なりと分別して喜樂を生ずるが如く、行者も亦復是の如く、淨菩提心に因つて諸法を照明するが故に、少しき功力を用て便ち除蓋障三昧を得。八萬四千の煩惱の實想を見るに八萬四千寶樂門と成る。故に「經」の次に「菩薩、住此修學、不久勤苦、便得除一切蓋障三昧、若得此者、則與諸國菩薩、同等住」といふ。この中の障に五種あり。一には煩惱障、謂く、根本の煩惱、乃至、八萬四千の上中下品の障、淨心を蓋ひ及び宿世の偏習に由るが故に道機を妨礙して佛法に入らず。二には業障、謂く、過去及び現在世に諸の重罪を造り、乃至、方等經を誦するなり。この人は得道の因縁ありと雖も先の業障未だ除かざるを以ての故に、種種の留難ありて佛法に入らず。三には生障、謂く、是人若し勝上無難の生處を得ば必ず當に道を悟るべし。然れども前業に乗じて更に無暇の身を受く、即ち報生を障とするを以て佛法に入らず。四には法障、謂く、此人已に無障の生處を得、又悟道の機あれども、先世に曾て障法等の縁あるを以ての故に善友に逢はず、正法を聽聞することを得ず。五には所知障、謂く、この人、乃至、善知識に遇うて正法を聞くことを得。然れども種種の因縁あつて、兩不和合にして般若波羅蜜を修することを妨ぐ。【大品】の「魔事品」の中に廣く明すがごとし。亦これ先世に或は曾て他の道機を差へしが故に、

【無暇】地獄、餓鬼、畜生、北俱盧世、長壽天、生盲、世智、淨總と佛前後の八難處のこと。【般若波羅蜜】今は三密の法を云ふ。【大品】大品般若經の第十五卷。【廣事品】第四十六又は第十六の文。【佛會の因縁】諸佛と同じく會集する因縁。【究竟妙覺大牟尼】即ち初地の一位に於ても、然かも成佛の外迹は所化の機の熟するを待つ可き故に、大覺位を得たりと雖も化他の正覺を成ぜざるが故に此文あり。【又行者如來云云】以下は經文の「當發五神通、獲無量語言、善陀羅尼、知衆生心行、諸佛護持、雖處生死而無染著、爲法界衆生不辭勞倦、成就住」

意んで此障を生ず。行者已に淨除五障三昧をえつれば、爾時に自心の中に於て常に十方一切の諸佛の妙相湛然なるを見ること明鏡を觀るが如し。乃至もろもろの威儀、去來、睡寤に於て皆かくのごときの佛會の因縁を離れず。時にもろもろの聖者、常に勝妙の方便を以て其心を啓悟し梵音をもて慰諭して爲に疑網を決したまふ。行者、聞に隨つて隨喜し悟り已つて網障隨つて除き、久しからずして一切の佛法を成就す、故に若得此三昧者、即與、諸佛菩薩、同等住」といふ。當に知るべし。行人は即ちこれ位、大覺に同なり。それ自ら心を覺るを以ての故に、便ち佛の名を得、然れども究竟妙覺大牟尼の位にあらず。猶し淨月の體に増減なしと雖も、然も亦明漸漸に増して乃至第十五日に方に能く大海の潮を動ずるがごとし。又行者、如來と共に同等にして住するに猶て、即ち能く方便力を以て五神通を起し本心を動せずして諸佛の刹に遊び、種種の身語意を現して種種の供養奉を興し、無盡の大願を以て廣く諸度を修す。復意根淨に由るが故に次に無量の語言音を解する諸陀羅尼を得。且く一世間の中の卅六俱胝趣の彼上中下の性の種類若干の方言の言辭、各各の差別に隨つて皆その旨趣を曉り、應ずるに隨類の音を以てす。一世界をいふが如きは一切の世界も亦是の如し。梵木に瞻多といふは是れ大聲なり。囉尼多といふは是れ小聲なり。涅羅衫とは是れ長聲、また多の聲を兼ねたり。具足して之を言ふ所以は、總持の境界は了せざるところ無きことを顯さんと欲ふなり。此方の文字に對して以て具に翻じ難し。陀羅尼を得るを以ての故に能く一切衆生の心行を知る。謂く、是の如きの衆生は願行は偏多

【白四羯磨】白は告白なり。凡そ授戒等の重法を行ふ時には僧衆に向つて授者其事を告白す。これを一白と云ひ、次に授者より三度此可否を問うて事を決する。之を三羯磨と云ふ。合せて四羯磨なり。

【八顯】常、樂、我淨、非常、非樂、非我、非淨なり。顯は轉倒にして本眞の事理を正しく見る能はざる妄見なり。

【二邊】斷常の二

提心は其性法爾にして金剛のごとくなるが故に、是のごときの極堅固の性は即ちこれ師に從て得ず。無爲戒に住す。無垢無濁にして破傷すべからず。戒とは梵には尸羅といふ。これ清冷の義なり。譬へば水性の常に冷にして薪火の因縁に遇うて則ち能く諸佛を灼爛すと雖も、然も其自性は終に遷るべからず、薪を除き火を息むるときは、自然に清冷なること本の如くなるが若し。眞言行者も亦かくのごとし。除蓋障三昧を獲るときは心の本性即ちこれ尸羅なり。造作の法にあらず。他に由つて得ず。故に住無爲戒といふなり。聲聞の淨戒のごときは要す白四羯磨、衆縁、具足に由つて方に始めて生ずることを得。又方便を須ひて守護すること利刺を防ぐがごとし。一期の壽盡くれば戒も亦隨つて亡す。この戒は則ち是の如くにあらず。世世の生處に恒に與俱に生じて受持を假らず、常に突犯なし。又斯戒に住するに由るが故に、實智増明にして不思議の中道甚深の緣起を達見し、八顯を制止し、二邊を遠離す。故に「經」の次に「遠離邪見、通達正見」といふ。迦葉亦これより以前は我等を皆邪見の人と名くとのたまふ。是中の慧は不正の故に説いて邪見と名く。凡夫二乘は決擇して正しく自心の實相を知ること能はざるに由つて、諦實の理に於て乃至空を不空と謂ひ、不空を空と謂つて古佛所行の大菩提の路を見ず。今この菩薩は心明道を照見するを以ての故に即時に無礙智生ず。一切の法に於て皆悉く現前に通達して錯謬あることなし。猶し明日のもの日光の中に於て種種の諸色を觀見するがごとし。無量の天魔皆悉く佛身を化作し、各相似の波羅蜜を説くと雖も、終に其小分疑網の心を動ず

【迦葉】迦葉菩薩
【彌寶の理】本不生の理

【古佛】本有本覺の佛

【餘の無量の佛法】十八不共の法、三念處、三不闍等の法又は三密の妙業等を指す

【龍樹】大智度論三十二卷ノ九の文を取意す

【五】智證大師の一「心口」にはこの文以下を以て正宗文なりとし、弘宗大師の「開題」にはこれを以て正宗文の中の廣説となす。今は後義につく。然して文中の「乃至」に於て經文の七百四十一字を省略す

【この中】中に略して云云、以下は三句を聞いて、更に九

ること能はず。故に「經」の次に「復次秘密主、住此除一切蓋障菩薩、信解力故、不久勤修、満足一切佛法」といふ。是のごときの正見は猶し金剛の若くなるを以てなり。即ちこれ最上の堅信解力なり。これに依つて如實の巧度を進修するが故に、諸佛の力無所畏解脫三昧を得、及び餘の無量の佛法皆就く成悉するなり。龍樹の以爲らく、「治人のごときは種種の方便を以て鐵石を消融して然して後に金と成す。若し神通のものは能く土木の類をして即ち金銀と成さしむ一故に「不久勤修便得満足」といふ。この菩薩は初發心のとき即ち佛と名くるを以ての故に、眞實の功德度量すべからず。假使、如來無量無邊阿僧祇劫に於て分別し演説したまふとも、猶し盡すこと能はず。故に佛の言はく、要を取つて之を言はば是善男子善女人は無量の功德皆成就するなり。

【五】一闍時、其金剛秘密主、復以偈問佛、乃至、不知諸空、非彼、能知涅槃、是故應了知空、慧於斷常一とは如上に佛、經の大旨を説きたまふに心の實相門略して已に周佛せり。時に金剛手、未來の衆生をして方便を具足し、復餘の疑ひなからしめんが爲の故に、偈を以て佛に問して、世尊廣く其義を演べたまへと請す。この中に略して九句あり。云何世尊、説此心菩提生」とは、即ち是れ菩提心の生なり。「華嚴經」の如きは廣く發菩提心の功德を歎す。今この中には直に心の密印を問ふ。云何が此心に菩提の種子發生することを了知する。若し已に發生する其性云何ん。第二の句に「復以、云何相、知發菩提心」といふは、相は謂く、性、内に成ずれば必ず相外に彰ることあり。「般若」の中に廣く阿毘跋致の相

句の問を起す。九句とは一、菩提心、二、心續生、三、心相、四、功徳聚、五、時、六、八、異熟心、九、心殊心なり。【般若】大品般若經の第二十四卷、智度論の七十三卷等のこと。【阿毘拔致】譯して不退轉なり。

【異熟の識心】善惡等の因に依つて無記の果生ずるが故然か云ふ。指す今は第八識を指す【殊異】功徳品類差別の義なり。即ち淨菩提心の功徳種種なるを云ふ。これば次第轉昇の功徳を指す。

貌を明すが如し。今この中に亦菩提心生ずるときは、何なる相貌かあると問ふ。

『經』に「願識心、心勝、自然智生説」といふは、これ實のごとく佛の功徳を數じて前の

二句の義を敷演したまへと請するなり。初に識心といふは、これ心自覺の智なり。次に又

心といふは即ちこれ心の實相なり。意は境智俱に妙にして無二無別なることを明す。故に

重ねて之をいふ。自然智といふは、是れ即ち如來の常智なり。唯しこれ心自ら心を證す。

他に從つて悟らず。言は佛は既に識心の人の中に於て最も第一たり。必ず能く此菩提の發

生と及び其微相を知りたまふべし。唯し願くは之を説きたまへとなり。第三の句に、

「大勤勇、幾何次第心續生」といふは、大勤勇は即ちこれ佛の異名なり。徳を數じて而し

て復問を發す。幾くの心の次第あつてか而も是心を得ると。第四、第五の句に「心諸相與

時、願佛廣開演」といふは、此諸の心差別の相と、及び相續して勝進するに、凡そ幾

くの時を経てか而も究竟の淨菩提心を得と問ふ。第六の句に「功徳聚亦然」といふは、言

はく、この心の微妙の功徳亦願くは世尊廣く之を開演したまへと。故に亦然といふなり。

第七の句に「及彼修行」といふは、次に當に何の行を以て云何が修行して而も能く無上

の悉地を獲得すべきと問ふなり。亦分けて二句とすべし。第八第九の句に「心有殊異、

唯大牟尼説」といふは、謂く、衆生の異熟の識心と瑜伽行者の殊異の心と、亦願くは世尊

分別して廣く説きたまへとなり。牟尼とはこれ寂默の義なり。言はく、佛の身語心は皆究竟

寂滅にして語言の地を過ぎたり。二乗の小寂に對して譬とすべからざるを以ての故に、大

【諸音の地】 四妄
言説の處なり。

【下の支の入大悲】
藏曼荼羅等云云
細文の具縁品等の
第三の處なり。經
文なれば具縁品第
二なり。これ行の
の品が行者進修の
方便三密の供養行
門を明す故に修行
の句の解説となる
【百字果】 經の百
字果明品第二十
を指す。これは勿
論一説百字生息
百字成持品、百字
成持品、百字
眞言法品を合
むと知るべし。
【法大】 初心凡
夫なり。雖も所乘
の法は大目所乘に
異なれば、深門
となれば、深門
には二界依正相通
して入佛の徑路と
なるが故に此意あ
り。

牟尼といふなり。阿闍梨の言はく、是のごときの九句或は分ちて十句とすべし。これより以後、經の終に至る迄、皆これ如來、九問の意を酬いて廣く分別して説きたまふ。然も佛其時の衆生を觀じて勝いで意を得、宗を求めしめんとして或は後の問を先に答へて文定に准なし。或は轉經問を生じて以て支流を盡す。下の文の「入大悲藏曼荼羅」等のごときは即ちこれ修行の句を答し、「百字果」等は即ちこれ殊異の心及功徳の句を答したまふ。其餘は相應の處あるに歸つて外顯を以て之を觀じて義、知んぬべし。次に如來金剛手に答したまふ偈の中に「善哉佛眞子、廣大心利益」とは如來の種性より生じ佛の身慧心より生ずるを以ての故に眞子といふ。前に大目世尊の廣大加持の境界を現したまふがごとく、今秘密主も亦善く是の如く、無量の難度の衆生の爲に速に大行を成じ、大疑團を突き、同じく三平等句の無盡莊嚴を授しめんと欲ふが故に、佛歎じて、善哉佛子、汝今能く廣大の心を以て、無量の衆生を利益せんが爲の故に、是のごときの問を發すと云ふなり。次に「勝上大乗句、心續生之田、諸佛大秘密、外道不能測」といふは略して七義あり。故に大乘と名く、一には法大を以ての故に、謂く、諸佛の廣大甚深秘密の議は毘盧遮那遍一切處大人の所乘なり。二には發心大の故に、謂く、一向に平等の大慧を志求して無盡の悲願を起し當に普く法界の衆生に授けんと誓ふなり。三には信解大の故に、謂く、初て心明道を見るとき、無量の功徳を具足し能く遍く恒沙の佛刹に至り、大事の因縁を以て衆生を成就す。四には性大を以ての故に、謂く、自性清淨心の金剛寶藏は缺減あることなく、一切衆生に等し

【三時】過去、現在、未來の三時。

【心續生云云】以下は心續生の答釋なり。

【不生にして生じ云云】有無の二邊を遠離すること。【秘密】法爾隨緣は二にして不二なる故に斯く云ふ。【次の偈に云云】以下は菩提心生の答釋なり。【百六十の相續心】三劫妄執を指す。

く共に之あり。五には依止大の故に、謂く、かくの如きの妙乘は即ち法界衆生の大依止處なり。猶し百川の海に歸き芥木の地に依つて生ずるがごとし。六には時大を以ての故に、謂く、諸量長遠にして三時を出脱し、師子退秘密通の用未だ嘗て休息せず。七には智大を以ての故に、謂く、諸法無礙の故に等虚空の心自然の妙慧も亦復無礙なり。實相の原底を窮むること譬へば函蓋稱せるがごとし。是の如きの七の因縁を以ての故にもるもろの大乗の法門に於て猶し醍醐の淳味第一なるがごとし。故に最勝大乘といふなり。乘をば超越に名け、句をば止息の處に名く。故に大乘句といふなり。心續生の相とは此心は畢竟常淨にして猶し虚空の一切の相を離れたるが如くなりと雖も、而も亦因縁より起して心相生することあり。猶し大海の波浪のこれ常有にもあらず、亦常無にもあざざるが如くなり。若し常有ならば風颺止息するとき澄然として靜なるべからず。若し常無ならば風颺纒に起するるとき鼓怒相續すべからず。當に知るべし、是心は縁より起するが故に、即ちこれ不生にして生じ、生にして不生なり。無相の相は相常に無相なり。甚深微妙にして了解すべきこと難し。諸佛秘密の印なり妄に宣示せず。是故に凡夫二乘兩種の外道は但し無生滅の心を識らざるのみにあらず。亦復生滅の心をも識らず。故に「諸佛大秘密、外道不能識、我今悉開示、一心應諦聽」といふなり。次の偈に「越百六十心、生廣大功德其性常堅固、知彼菩提生」といふは、是は略して初の問の云何んが即ち菩提心生を知るといふを答するなり。今佛告げて言はく、百六十の相續の心を越ゆるは、即ちこれ淨菩提心なり

【佛樹】 修生の菩提心。
【牙】 初地。

【次に一偈半云云】
以下は菩提心相の答釋なり。

【八方の大風】 刹、寶、雲、華、雨、の義を八風と云ふ。

と。如し人あつて云何が此乳の中より醍醐生ずることを知ると問はば、答へて言ふべし。乳、酪、生熟、蒸、魚湯、醍醐の相、悉く已に醍醐にして復淨穢なきがごとし。當に知るべし。即ちこれ醍醐の生なり。行者最初に金剛寶藏を開發するとき、是心性は淨虚空のごとく、諸の數量を超えたりと見る。爾時に圓業生を離れて佛樹の牙生ず。此牙生ずる時に已に法界に遊す。何に混んや枝葉花果をや。故に生廣大功德といふ。心行戲論を過ぎたるを以ての故に、破すべからず、轉すべからざること、猶し閻浮檀金の能くその過惡を説くことなきが若し。故に其性常堅固といふ。若し自心に是の如きの印ありと知るは當に知るべし、是れ菩提生なり。次に一偈半あり。略して菩提心の相貌を答す。世間に更に法として以て淨菩提心の相を表示すべきものあることなし。唯し大虚空の喻への小分相似を除くを以ての故に無量如虚空といふ。譬へば虚空の朝雲霞霧のために染汙せられず。其性常住にして一切の因縁を離れたり。假使八方の大風、世界を吹き盡すとも、亦それをして動せしむること能はず。本初より以來常に自ら寂滅無相なり。今述べたるにあらざるが如く心相も亦爾なり。無始より以來本より不生なり。本不生を以ての故に一法として能く染汙し動搖せしむることあること無し。常住不變にして永寂無相なり。故に「不染汙、常住諸法不能動、本來寂無相」といふ。爾時に行入此寂光のために照らされて、無量の知見自然に開發すること蓮華の敷たるが如し。故に「無量智成就」といふ。此智成就は即ちこれ毘盧遮那の心佛現前するなり。故に「正等覺顯現」といふ。梵本には三藐三佛陀

【佛已に略して云】以下は修行句の答釋なり。

【下の文】經の第五卷八、疏の第十卷十二を指す。

【四種の不生】自他、共、無因の四不生を指す。

【三種】身語意の三密。

【中道正觀】龍樹の中觀論に、四不生、中道等の義を説くが故に。

【龜毛兔角】本來無一物の説を示す【失】斷無の局見を指す。

【淨菩提心】初地【大悲萬行】第二地已上。

【神變加持不思議の業】第十一地の方便究竟。

現といふなり。佛已に略して是の如きの心の實相印を説きたまふ。若し行者これと相應するときは、當に知るべし。已に堅固の信力を具せりと。然も此信力は本眞言門の供養儀軌行法によつて説の如く修行して、淨菩提心に至ることを得。故に「供養修行、從是初發心」といふは、此中の供養に二種あり。一には外の供養、二には内の供養なり。下の文に當に廣く説くべき耳。或が説いて言はく。但し心性は無相無爲なりと觀じて、種種に紛動して菩薩の道を行すべからずと。此説は非なり。四種の不生を以て鑛の中の金性を觀するに、復因にあるにも果にあるにも常に自ら減なく増なしといへども、若し方便を以て淨穢を消融せざれば則ちこの不生の金得べきに由なきが如く、行人も亦復是の如し。若し三種の祕密方便の供養行門を以て百六十心の鑛石の垢を消融せずんば何を以てか此淨菩提心を得ん。龍樹阿闍梨の「中道正觀」は正しく從緣起を以ての故に無生の義成す。而も汝龜毛、兔角を謂つて無生とす。この故に失處に墮在す。又世人の眞金の百鍊すれども移らざるを觀て妙性窮極すと以爲へり。若し五通の仙人は諸の藥物を以て種種に鍊冶し、能く土石の類を化して盡く金寶とす。それ之を服食するものあれば住壽長遠にして神變無方なり。當に知るべし、眞金の性の中に自らは是の如きの力用ありといふことを、但し世人は祕密方便なきが故に得ること能はざるがごとし耳。淨菩提心も亦復是のごとし。若し大悲萬行を以て種種に鍊冶すれば、神變加持不思議の業を成ずることを得。故に未得を得と謂ひ、初心を保ちて極果と爲すべからず。

【經に秘密主無始云云】以下は心續淨の答言なり。

【以下逆理の迷心を示さんため三十種の外道を明す。】

【愚童】第一住心。心續にて説けり。

【智度】智度論第三十一卷の二十三

【十六類見】六品。智度論第三十二卷に明かす。即ち我、衆生、壽者、命者、生者、養育、使作者、思者、使起者、受者、使受者、智者、見者、の十六な別名。

【經に復計有時云云】以下は時を道の其計を明かす。

一經一に「秘密主無始生死、愚童凡夫、執著我名我有、分別無量我分、秘密主、若彼不觀我之自性、則我我、所生一といふは、以下は心相續の義を答す。淨心最初の生起の由を明さんと欲ふが故に、先づ愚童凡夫の逆理の心を説く。無始生死とは一智度一に云はく、「世間の若しは衆生、若しは法、皆始めあることなし。」一經一の中に佛の言はく、「無明に覆はれ、愛に繋がれて生死に往來して、始め不可得なり。乃至菩薩は無始も亦空なりと觀じて有始見の中に墮せず。愚童の義は前に説くが如し。凡夫とは正理には、異生といふべし。謂く、無明に由るが故に實に隨つて報を受けて自在を得ず。種種の趣の中に墮して色心像類各各別なり。故に異生といふなり。その所計の我は但し當時の我のみあつて而も實事なし。故に執著我名といふ。我有といふは即ちこれ我所なり。是の如きの我我所は十六知見等の事に隨つて差別無量にして不同なるが如し。故に名けて分と爲す。次に虚妄分別の所由を釋す。故に「秘密主若彼不觀、我之自性、則我我所生」といふなり。若し彼れ諸蘊は皆悉く衆緣より生ずと觀ず。この中に何ものか是れ我ならん。我は何れの所にか住する。蘊に即し蘊に異し相在すとせんや。若し能く是のごとく請求せば當に正眼を得べし。然るを彼自ら觀察せず。但し俱轉相承して久遠より以來、この見を祖とし習つて我は身中にあつて能く所作及び長養あり。諸根を成就す。唯しこれのみ是れ究竟の道なり。餘は皆妄語なりと謂へり。これを以ての故に名けて愚童と爲すなり。「經一に「復計有時」といふは、謂く、一切の天地の好醜は、皆時を以て因とすと計す。彼偽にいふが如し。時來れば衆

即ち是れ三十種外道の一なり。

【彼備】大品般若經の在なり。

【更に入あつて言はく云云】百論下十六、智度論第一卷二十八等の説なり。

【地等變化】地水火風空の五大を執する外道、是れ亦三十種外道の隨一なり。

【瑜伽我】相應外道の所執なり。

【建立淨不建立不淨】建立、不建立の二外道は斷常二見に相當す。即ち是れ相待的の外道

生熟す。時至れば催促す。時能く人を覺悟せしむ。是故に時を因とす。更に有人の言はく、一切の人物は時の所作にあらずといへども、然も時はこれ不變の因なり。是れ實有の法なり。細の故に見るべからず。花實等の果を以ての故に時ありと知るべし。何を以ての故に、果を見て因ありと知るが故に、此時法は不壞なるが故に常なり。亦時の自性を觀ぜざるを以ての故に、是のごときの妄計を生ずるなり。

【經】に「地等變化」といふは、謂く、地水火風虚空なり。各各に執して眞實とするものあり。或が言はく、地は萬物の因たり。一切衆生、萬物は地に依つて生ずることを得るを以ての故に、地の自性は但し衆縁和合によつて有なりと觀せざるを以ての故に、而も是見を生じて地を供養するものは當に解脫を得べしと以爲へり。次に或が計すらく、水は能く萬物を生ず。火風も亦爾なり。或が計すらく、萬物は空より生ず。謂く、空はこれ眞の解脫の因なり、宜しく供養し承事すべしと。皆廣く説くべし。【經】に「瑜伽我」といふは、謂く、定を學するもの、此内心相應の理を計して眞我と以爲へり。常住不動にして眞性湛然なり。唯しこれのみ是れ究竟の道なり。因果を離れたり。心の自性を觀ぜざるが故に是の如きの見を生じて眞我と以爲へり。但し此理に住するを即ち解脫と名く。

【經】に「建立淨、不建立無淨」といふは、是中に二種の計あり。前の句は、謂く、一切の法を建立するものあり。これに依つて修行する、之を謂つて淨とす。次の句は、謂く、此建立は究竟の法にあらず。若し建立なきは所謂無爲なり。乃ち眞我と名く。亦前の句の所

にして共に三十種外道の中なり。

【若自在天云云】

以下は自在天、流出、及び時の三種の外道を出す。共に十種外道の中なり。此らに共に自在天一類の計執なるが故に一處に現はす。

【一類外道】

自在天外道なり。

【十二門】 龍樹造撰什論の十二門論第二十六卷。

【彼論】 十二門論

【陶師子】 瓦器を造る人なり。

【埴埴】 土をこねて器を作ること。

修の淨を離る。故に無淨といふ。我の自性を觀せざるに由つて、是のごときの見、生ずることあり。廣く説くこと上のごとし。『經』に「若自在天、若流出及時」といふは、謂く、一類の外道の計すらく、自在天はこれ常なり、この自在者能く萬物を生ずと。『十二門』の中に難じていふが如し。若し衆生、これ自在の子ならば唯し樂を以て苦を遮すべし。苦を與ふべからず。亦但し自在を供養せば則ち苦を滅して樂を得べし。而も實には爾らず。但し自ら苦樂の因縁を行じて而も自ら報を受く、自在天の作にはあらず。又若し自在、衆生を作すといはば誰か復此自在を作す。若し自在自ら作すといはば、然らず、物の自作にあらざるがごとし。若し更に作者ありといはば、則ち自在と名けじ。彼論に廣く説くがごとし。「計流出」とは建立と大に同なり。建立は心より一切の法を出すがごとし。此中の流出は手の功に従つて一切の法を出すがごとし。譬へば「陶師子」の埴埴無間にして種種の差別の形相を生ずるがごとし。次に時といふは、前の時外道の宗計と小しく異なり、皆自在天の種類なり。

大毘盧遮那成佛經疏卷第一末 終

大毘盧遮那成佛經疏卷第二 一本

沙門 一行阿闍梨の記

入眞言門住心品第一の餘

【尊貴】 第九の那羅延天を示す。是れ三十種外道の一なり。

【天祠】 梵天那羅延天の社なり。

【西天】 印度のこと。

【相入】 我が四大を以て彼の四大と相入すること。

【自然】 第十の自然外道を明かす。三十種外道のうちなり。この外道は因果を濫無するの計を有す。

『經』に「尊貴」といふは、これは是れ那羅延天なり。外道の計すらく、此天は湛然常住して不動なり。而も輪相あつて萬物を造成す。譬へば人主の無爲にして而も治するに有計命を受けて之を行するが如し。能造の主は更に尊貴するところのものあること無きを以ての故に尊貴といふ。又此の計すらく、尊貴とは一切の地水火風空處に過せり。昔論師ありき。彼宗計を伏せんと欲ふが故に天祠に往詣して彼天像の身上に於て坐して而も飲食す。西方には飲食の殘を極不淨とするを以て皆共に忿怒す。論師の言さく、「所宗の如くならば豈に一切處の地水火風空界に遍する相にあらずや。」答へて言さく、「是の如し。論師の言さく、「彼即ち地水火風ならば我も亦是のごとし。之を以て相入するに何の不可なるところあつてか而も忿怒するや。」彼衆默然として報を加ふること能はず、亦我の自性を觀ぜざるに由るが故に是のごときの妄計を生ず。

『經』に「自然」といふは、謂く、一類の外道の計すらく、一切の法は皆自然にして而も有な

り、造作のもの無し、蓮華の生じて色の鮮潔なるがごときは誰か染むるところぞ、棘刺の刺き痛、誰か削り成せる所ぞ。故に知んぬ。諸法は皆自爾なり。有脚羅じて云はく、「今日に世人を觀るに舟船室宅の類を造作するは皆業縁によつて而も有なり。自然成にはあらず、云何か自爾ならんや。若し有なりと雖も而も未だ明了ならざるが故に、人功を須つて之を發はずと謂はば、是れ亦然らず、既に人功を須つて之を發はさば、即ち是れ縁に従る自然有にはあらず。

「内我」といふは、有が計すらく、身中に心を離れて外に別に我性あり、能く此身を運動して諸の事業を作す。經者の云はく、「若し是の如くならば我は即ち無常なり、何を以ての故に、若し法の是れ因なると及び因より生ずるとは、皆無常なるが故に、若し我無常なりといはば、則ち罪福果報皆悉く斷滅すべし。是の如き等の種種の論義は按量の中に至つて廣く明すべし。

「經」に「人量」といふは、謂く、神我の量は人身に等し、身小なれば亦小なり、身大なれば亦大なりと計す。「智度」に云はく、「有が計すらく、神の大小は人身に隨ふ、死壞するときに神亦前に出づ」と、即ちこれと同なり、然るを彼宗は我を以て常住自在の法とす、今既に身の大小に隨ふといはば、即ちこれ無常なり。故に知んぬ、然らざるなり。

「經」に「遍嚴」といふは、謂く、この神我は能く諸法を造す。然も世間に尊勝遍嚴なるの事は、これ我の所爲なりと計す。自在天の計と小しき異なり。論の中に自在を破して云ふが

【内我】 これも亦十種外道の一なり
 【經者】 十二門論二十五の意を云ふ
 【人量】 是亦三十種外道の中なり
 【智度】 智度論第十八卷の全文なり
 【死壞】 人死すれば身壞滅する故に死壞と云ふ
 【遍嚴】 是れ亦三十種外道の隨一なり
 周遍端嚴の法は皆我の所生なりと計するが故にこの名

あり。
【論】 十二門論のこと。

【苦壽者】 以下壽者、これ又三十種外道の隨一なり。

【一支】 耳鼻、手足等の支分を云ふ。

【補特伽羅】 此れ又三十種外道の隨一なり。補特伽羅は譯して人(舊譯)或は驚取趣者(新譯)と云ひ、驚取諸趣に往來するの因を造り、其果を取るが故に此名あり。

【三種の法印】 諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜なり。

【若識】 識、これ一も三十種外道の隨一也。上の外道は人體について識神を計し、これは直ちに心を取つて我と執す。

如し。自在天何が故にか、盡く樂人を作し、盡く苦人を作さずして而も苦者樂者ある。當に知るべし。愛憎より生ず、故に自在にあらずと。今過嚴とは既に能く諸の福業を造すといはば、而も樂を以て苦を遮すること能はず。何ぞ遍常自在と名けんや。

『經』に「若壽者」といふは、謂く、有る外道の計すらく、「一切の法乃至四大草木等皆壽命あり。草木の伐り已つて續生するが如きは、當に知るべし、命あり又彼夜は則ち卷合す。當に知るべし、亦情識あり、睡眠するを以ての故に」難者の云はく、「若斬伐せられて還つて生ずるを見て、以て命ありとせば、則ち人の一支を斷つに復増長せず、豈に命なからんや。合昏木の眠あるがごとくならば、則ち水の流れて晝夜に息まざる、豈に是れ常に覺たらんや」皆我の自性を觀ぜざるに由るが故に種種の妄見を生ずるなり。

『經』に「補特伽羅」といふは、謂く、彼宗計に「數取趣者」ありといふは皆これ一我なり。但し事に隨つて名を異んずるのみ。若し今世より後世に越くことあらば是れ則ち識神、常なりとやせん、識神若し常ならば云何か生死あらん。死をば此處に滅すと名け、生をば彼處に出づと名く。故に神常なりと言ふことを得ざれ。若し無常ならば則ち我あること無し。

佛法の中の犢子道人及び説一切有者の如きは此兩部は三世の法ありと計す。若し定んで過去未來現在あらば則ち數取趣者あるに同じて佛の三種の法印を失す。西方の諸の菩薩種種の量を作つて彼宗計を破す。

『經』に「若識」といふは、謂く、有る一類の執すらく、此識は一切處に遍ぜり、乃至地水火風

【阿頼耶】これ又三十種外道の隨一にして阿頼耶は眞我なり。即ちこれは第八識を以て我と執するなり。

【知者見者】これ又三十種外道の隨一。此所には二種の執計(前五護を以て我と計し、眼識を以て我と執す)をあげ。
【六】一。根なり。

【能執所執】この二種の執計も又三十種外道の中なり

虚空界にも識皆その中に遍滿せりと、此れ亦然らず。若し識神遍常ならば、獨り能く見聞覺知すべし。而も今要す根、和合するに由つて方に識生することあり、則ち汝が識神は所用無しとす、又若し識神、五道の中に遍せば云何が復死生あるや。故に知んぬ、爾らざるなり。

「經」に「阿頼耶」といふは、是れ「執持含藏」の義なり。亦これ室の義なり。此宗の説かく、阿頼耶あり。能く此身を持せり、造作する所あつて萬像を含藏す。之を攝すれば則ち所有なし、之を翕ぶれば則ち世界に滿つ、佛法の中の第八識の義に同ならず。然も世尊密意をもて如來心を説いて阿頼耶となしたまふ。若し佛法の中の人、自心の實相を觀せずして分別し執すれば、亦我見に同す。

「經」に「知者見者」といふは、謂く、有る外道の計すらく、身中に知者あり、能く苦樂等の事を知ると。復有るが計すらく、能見者即ちこれ眞我なりと。「智度」に云はく、「目に色を觀るを名けて見者とし、五識を以て知るを名けて知者とす。皆これ我計なり。事に墮つて名を異んず。」難者の云はく、「汝能見これ我なり」といはば、而も彼能聞能觸知者も是れ我なりとやせん。不や。若し皆是たらば六根の境界五に相知らず。一は六を作すべからず。六は一を作すべからず。若し我にあらざるものありといはば、これ亦疑に同す。故に知んぬ、根塵和合して知見する所あり、別の我無し。

「經」に「能執所執」といはば、謂く、有る外道の言さく、身中に識心を離れて別に能執者あり

【内外】 俱舍の頌疏に曰はく、一身を内と名はく、所餘の他身非情を外と名く。」と。

【内知外知】 この二種の執計も亦三十種外道の隨一なり。

【社怛梵】 これ又三十種外道の内なり。

【若摩奴闍】 これ又三十種外道の内なり。經の本文には「意生」として譯語を出す。

唐の三藏 玄奘三藏のこと。此三藏所翻の大般若、婆沙論等には意生と譯す。

【摩納婆】 これ又三十種外道の中に於て、經の本文はこれを譯語「僇童」に作る。

【毘紐天】 那羅延天なり。

り、即ちこれ眞我なり、能く身口意を運動して、諸の事業を作すと。或は有が説いて言はく、能執者は但し是れ識心なり、其所執の境界を乃ち眞我と名く、この我は一切處に遍ぜりと。然も内外の身受心法の性は皆縁より生じて自性あることなし。この中の所執能執すら尚し不可得なり。何に況んや我をや。亦我の自性を觀ぜざるに由るが故に是説を作す。

【經】に「内知外知」といふは、亦これ知者の別名なり。分つて二計とす。有が計すらく、内知を我とす。謂く、身中に別に内證のものあり、即ちこれ眞我なり、或は外知を以て我とす。謂く、能く外塵の境界を知るもの、即ち是れ眞我なり。

【經】に「社怛梵」といふは、謂く、知者外道の宗計と大に同なり。但し部黨別異なるが故に特に之を出すのみ。

【經】に「若摩奴闍」といふは、「智度」には翻じて「人」と爲す。即ち是れ人執なり。具に譯せば當に「人生」といふべし。此は是れ自在天外道の部類なり。人は即ち人より生ずと計するが故に以て名と爲す。唐の三藏の「意生」といふは非なり。末那はこれ意なり。今は末奴といふ聲轉じて義別なり。誤れるのみ。

【經】に「摩納婆」といふは、是れ毘紐天外道の部類なり。【正翻】には「勝我」といふべし、言はく、我は身心の中に於て最も勝妙なりとす。彼常に心中に於て、我は一寸ばかりなるべしと觀す。【智度】に亦云はく、「有が計すらく、神は心中にあり、微細なること芥子の如し。清淨なるを名けて淨色とす。或は豆麥のごとし、乃至一寸なり、初に身を受くる時、

【像骨】 本像の骨

【常定生】 此れ又

【常非生】 二種の

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

【常生】 外道の計すらく、

【常不生】 外道の計すらく、

最も前に在つて受く。譬へば像骨のごとし、及び其身を成ずるは像の已に莊れるが如し。

唐の三藏翻じて「儒童」とするは非なり。儒童具には摩拏婆といふ。此中には納といふ義別

なり、説れるのみ。此の二名はこれ非

「經」に「常定生」といふは、彼外道の計すらく、我は是れ常住なり、破壊すべからず。自

然に常に生じて更に生ずること有ること無し。故に以て名となす。

「經」に「常非生」といふは、聲は即ち是れ「常論外道」なり。若し聲顯者の計すらく、聲の體

は本有なり、縁を待ち之を顯はす、體性常住なり。若し聲生者の計すらく、聲は本生

なり、縁を待つて之を生ず、生れ已つて常住なり、彼中に復自ら異計を分つ餘處に廣く

釋するが如し。非聲とは前の計と異あり、彼は實はこれ過常なりと計す。此宗は悉く撥

して無となして無善惡の法に墮在す、亦斷字なき處これを以て實とす。

「經」に「秘密主、如是等我今自昔如來、分別相慶、希求願理解脫」といふは、「經」の中に

は略して卅の事を擧ぐ、若し類に隨つて差別せば則ち無量無邊あり。人の坐して四禪を得

るが如きは即ち此法を計して眞實の常理とす。或は是念を生ず、我はこれ禪を得たるもの

なりと、是の如き等は皆これ我分と相應す、例して知んぬべし。皆我の實相を觀ぜざるに

由るが故に、但し久遠より以來未だ相承して此見を祖とし習へり。各各に自ら大師薄伽梵

あり、一切知見者なり、善く瑜伽を修するを以ての故に、現に此法を覺つて而も世間の爲に

之を説く、唯し此のみ是れ究竟の道なり、更に餘の道なしと謂へり。劫初の時のときは獨

【或は是念を生ず】 凡夫は有所得の故に多生味着してこれ實我なりと思ふ

こと。

【梵界】 初禪梵輔天なり。

【上界の天】 極光淨天なり。

【先生者】 梵王のこと。

【次に最初順理云】

【六】これは結前生後の文。即ち上は違理の迷情異生、羝羊心の開心を明す。今は順世の八心を明す。

【六】以下は順世の八心を明かす。

【羝羊】 羝は牡羊の三歳なるを云ふ。此を以て愚童凡夫に喩ふ。

【後の時云云】 以下は正しく順世の八心を説く。順世の八心とは種子心、芽種心、抱種心、葉種心、敷華心、結實心、受用心、無畏心なり。

【弘法】はこの中の前六心によつて第一の愚童持齋心を

一りの天あり、先づ梵界に生じて而も是念を作す。若し更に衆生あつて來つて、我と共に

せんに豈善からざらんやと。時に上界の天あつて命終して此中に來生す。先に生ずるもの

即ち之に謂つて言はく、我が念力に由るが故に、汝ここに生ずることを得、汝は即ち我が

所生なりと。彼亦この念を作す、彼尊能く我等を生ぜり、便ち相隨順して計して最初に我

者ありとす。これより以來た是梵天王能く世間を造すと謂へり。是の如きの展轉して異見

を生ずること勝て記すべからず。希求順理解脱とは、順理は梵音に瑜祇なり、即ちこれ古

昔に瑜伽を修せし行者なり。彼眞の解脱を得る、これ萬物の宗なりと謂へり。今彼行に順

して、解脱を希求するが故に然いふなり。已上は皆これ内外の因果を破壊する違理の心な

り。次に最初順理の心を明す。順は即ちこれ世間の八心なり。

【六】「經」に「秘密主、愚童凡夫類、猶如羝羊、或時、有一法想生、所謂持齋、彼思惟、此少分、

發起歡喜、數數修習、秘密主、是初種子、善業發生」といふは、羝羊はこれ畜生の中に性

最も下劣なり。但し水草及び姪欲の事を念じて餘は知るところ無し。故に西方の語法に順

じて以て善惡の因果を知らざる愚童凡夫に喩ふるなり。世間に久遠より來た展轉相承して

善法の名あり。然も違理の心を以て種種に推求すれども得ること能はず、後の時欻然とし

て自ら念生することあり。我今節食持齋せんと、即ちこれ善法なり、然れども猶し未だ

是れ佛法の中の八關戒にはあらず。彼節食し自戒するに由るが故に、即ち緣務減少にして

我をして飲食足り易く、馳求の勞苦を生ぜざらしむと覺る。その時に即ち少分不着の心を

立てらる。

【八關戒】八齋のこと。即ち不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、不花鬘、不塗脂身、不坐高床及び睡伎樂、不非食時なり。

【善心】一念善心の起ること。即ち八心の第一なり。

【經に復以此爲因云云】八心中の第二芽種心を明かす。

【六齋日】毎月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日の六日は一日食を取らざること。

【復以此施乃至三施】八心中の第三施種心を明かす。

これ善心の漸く深くなるを施種に喩ふ。

【慧捨】慈悲心を以て財物を喜捨するなり。

【復以此施乃至葉種】八心中の第四葉種心を指す。

更らに生長して葉

生ず、其心歡喜して而も安穩なることを得。この利益を見るに由るが故に、數數に之を修習することあり、即ちこれ最初に微しき善惡の因果を識るが故に種子心と名く。

【經】に「復以此爲因、於六齋日、施與父母、男女親戚、是第二牙種」といふは、此六齋日は即ち是れ「智度」の中に上代の五通の仙人勸めて此日をして斷食せしむ。既に善法に順し又鬼神の災横を免かる、彼に廣く説くが如し。貪求を止息するに、内に利樂を獲と見るに由るが故に、此法を修習して増長することを得しめんと欲ふが故に、持齋の日に於て己の財物を捨てて以て六親に與ふ。自ら我守護の憂なし、而も他人をして愛敬せしめ、孝義の譽れを獲と念ず。この因果を見るを以ての故に轉歡喜を生ず、歡喜を生ずるが故に善心稍く増す、由し種子より芽を生ずるがごとし。

【經】に「復以此施、授與、非親識者、是第三施種」といふは、謂く、此守齋の善法を成せんと欲して無貪慧捨の心を修習す、數習ふに由るが故に善心漸く増長して復能く非親識の人に施與す。この平等の施心の功德利益を見るが故に、爾時に善前倍復増廣なり。猶し芽莖の滋く盛にして未だ華を生ぜざる時のごとし。故に施種と名く。

【經】に「復以此施、與器量高德者、是第四葉種」といふは、謂く、己に能く慧捨を習行す。これを因とするに藉て漸く能く所施の境を寬擇す。此の如きの人は德行高勝なり、我今宜しく親近して之を供養すべしと。即ち是れ慧性漸く開けて善知識に遇ふ由漸なり。

【經】に「復以此施、歡喜、授與伎樂人等、及獻尊宿、是第五敷華」といふは、謂く、慧性

を生ずる如く施心
更に進むに喩ふ。
【復以此施乃至敷
華】敷華心を現
す。八心の中の第
五なり。施心更に
進むを敷華に喩ふ。

【復以此施乃至成
果】八心中の第六
結實心なり。即ち
施心愈醇熟せるを
華より結實に至る
に喩ふ。

以上の六を以て第
二住心の分齋とす
【復次秘密云云】
これは第七の受用
心を明かす。即ち
果實成熟して受用
するに至るをば施
心の功德により死
後天に生ずるに喩
ふ。

【秘密主以此心云
云】これは八心中
の第八無畏心にし
て、弘法大師は前
の受用心とこの心
とを以て第三住心
の嬰童無畏心を建
立す。

漸く開け復所施の境を甄別して其利他の益を見るに、伎樂の人能く大衆を化して其をして
歡喜せしむるを以ての故に其功を賞するなり。凡そ此の如きの類衆多なり、これを以て等
といふなり。尊宿といふは耆舊にして見聞するところ多く、及び學行高く尙うして世の師
範とするところなり。其れ選利するところ多きを以ての故に、誠を推して歡喜して之を施
與す。亦我施の時の心をして、倍歡喜せしむるが故に即ちこれ花種なり。

【經】に「復以此施、發親愛心、而供養之、是第六成果」といふは、謂く、所習醇熟して
直に歡喜するのみにあらず、復能く親愛の心を以て尊行の人に施與す。又前の施の因縁に
由つて法利を聞くことを得て、彼内に勝徳を懷くと知り、能く欲等を出離せりと謂つて狎
習視附して之を供養す。初の種子に望めば、即ち是れ成果の心なり。

「復次秘密主、彼護戒生天、是第七、受用種子」とは、謂く、已に能く齋施を造り其利益
を見て即ち知んぬ。三業の不善は皆これ衰憊の因縁なり、我當に之を捨てて戒を護つて仕
すべし。戒を護るに由るが故に、現世には諸の善利を獲、大名聞あつて身心安樂なり。
倍復増廣にして賢善なり、命終して天に生ずることを得。譬へば種果已に成じて其實を
受用するが如し。故に受用種子といふ。又云はく、一の種子より百千の果實を成す。是一

一の果實復若干を生ず。展轉滋育すること勝て數ふべからず、今此受用果の心復つて後心
の種子と成ること亦復かくの如し。故に受用種子と曰ふ。
【經】に「秘密主、以此心、生死流轉、於善友所、聞如是言、此是天、大天、與一切樂者、

【商羯羅】以下は經文の一自在天等乃至一の文を釋す經文には自在天の次に梵天那羅延天をあげてその次に商羯羅天を出す【摩醯首羅】これには三種あり。即ち初禪の主たる商羯羅（今はこれに當る）欲界の主たる伊舍那、色界の主たる毘舍遮なり【波頭摩】赤蓮華なり。これ龍の名にしてその色に依り名く。

若くは、佛養一切所願皆滿、所謂自在天等、乃至、彼聞如是、心懷慶悅、懇重恭敬、隨順修行、秘密主、是名摩訶摩訶生、生死流轉、無畏依、第八嬰童心。といふは、已に尊行の人在しく親近し供養すべしと知り、又持戒にして能く善利を生ずるを見る。即ち是れ漸く因果を講る。今復善知識の此大天あり。能く一切の樂を與ふ。若し虔誠に供養すれば所願皆滿つと言ふを聞いて、即ち能く歸依の心を起す。未だ佛法を聞かずと雖も然も此諸天は善行を作するに因つて此善報を得と知り、又漸く勝田を信解し甄別す。復佛法の殊妙を聞かば必ず能く歸依し信受すべし。故に世間の最上心とす。問うて曰はく、「前に自在天等は皆これ計なりと説く、今復これ等に歸依するは是れ世間の勝心なりといふ。前と何の異かある。答へて曰はく、「前は是れ因果を講らざるの心なり。但し諸法は是れ自在天等の所造なりと計す。今は善根熟するに由るが故に、生死流轉の中に於て無畏依を求め彼行因を效つて、善つて勝果を成せんと欲ふが故に前の計には同ならず。商羯羅といふは、是れ摩醯首羅の別名なり。黒天といふは梵音には摩捺羅といふ。是れ自在天の眷屬なり。龍尊といふは是れ諸大龍なり。俱吠囉等は皆世の宗奉する所の大天なり。梵天后といふは、是れ世間の奉尊する所の神なり。然も佛法の中には梵王は離欲にして后妃あること無し。波頭摩より以下は所謂得又迦龍、和修吉龍、商佉龍、羯旬搗劍龍、大蓮華龍、俱里劍龍、摩訶泮尼龍、阿地提婆龍、薩陀龍、羅陀等の龍は、皆これ世間の奉尊する所の神なり。天仙といふは、謂く、諸の五通の神仙なり。其數無量なり。故に名を列ねず。『陀陀』は是れ梵

【四圍陀典】四吠陀のことなり。四吠陀はりク吠陀(Kṛg Veda)クアーマ吠陀(Arma-Veda)ヤジュル吠陀(Yajur-Veda)アタル吠陀(Atharva-Veda)なり。吠陀は明智、明分と譯して波羅門所傳の經典なり。

【十二部經】一切經を分類して、契經、應頌、諷頌、因緣、本事、本生、未曾有、譬喻、論議、自說、方廣、論授記の十二とせるものを云ふ。

【秘密主復次云云】以下は二種の心(殊勝心、決定心)を明かす。

【三寶】佛法僧の三寶なり。

王所演の四種の明論なり。大圍陀論師といふは、是れ彼經を受持する能教授の者なり。能く出欲の行を開示するを以ての故に歸依すべし。彼部類の中に於て梵王は猶し佛の如し。『四圍陀典』は猶し『十二部經』の如し。此法を傳ふるものは猶し和合僧のごとし。時に彼是の如き等の世間の三寶を聞いて歡喜し、歸依し、隨順し、修行す。これ第八の生死凡夫の無畏依なり。

『經』に、「秘密主、復次、殊勝行、隨彼所說中、殊勝住求解脫、慧生等」といふは、謂く即ち此第八の無畏依の中に復殊勝の心あるなり。既に如上所說の世間の諸の薄伽梵に宜しく供養し歸依すべしと聞いて後に遂に心を生ず。この諸の三寶には何者が勝れたりとする。我當に其善者を選んで隨順し修行すべし。前の善根力に由るが故に彼所說の法の中に隨つて殊勝に住することを得。解脫を求むる智生することあり、然れども未だ緣起の法を知らざるを以ての故に、所有の觀空の智慧、斷常を離れず。故に常無常空と曰ふ。但し是の如きの說に隨順して勤めて修學す。此中に復二種あり、若し解脫を求むる智生するをば殊勝心と名け、已に空法に於て作證するをば決定心と名く。若し離分して之を説かば前に并して凡そ十心あるなり。世尊出世間觀空の智慧に對明せんと欲ふが故に、次に説いて言はく、秘密主、彼空と非空との義を知解し斷常を了知するにあらず。非有非無平等の觀を作し、諸の戲論を絶すと雖も、然も亦雙べて是見を離ること能はず。彼未だ正因緣を解せざるに由るが故に然も佛法の中には因緣の有を知るを以ての故に、則ち無の見を離

る。自性空を觀するを以ての故に有の見を生ぜず。若し有無の見を離れぬれば即ち斷常に墮せず。若し是の如きの空の義に達せざれば復有無に着せず、言を離れ、相を絶すと雖も終にこれ分別の想を以て此無分別の心を作す。猶し長爪梵志が諸法の實相を觀するに一切の法を受けずして是見をのみ受けしが如し。夫れ眞空は分別を離れたり。云何が空を分別せんや。若し空の義を離せざれば復一心に精進して對めて解脫を求むと雖も、彼能く涅槃を知るにあらず。是故に佛の言はく、汝涅槃を求めんと欲はば緣起の空を了知して斷常を離るべしと。彼初の種子心、少分の食垢を減損するに由つて即ち少分の淨心に順す。これより以後漸く増す。即ち是れ淨心の勢力漸く萌動することを得るなり。この熏習に由つて則ち能く所歸依の處を覺擇し、解脫を求むる慧生することあり。若し善緣に遇はざれば還つて斷常空より淨見に退入す。然も其八心の種子終に敗亡せず。若し佛法を聞けば但し斷常空に於て緣起の空を觀じて即ち正道に入らしむ。若し是れ未だ種子を生ぜざる無機の人とは種種に爲に説くと雖も終に信解すること能はず。又如し行者第八の心に於て生死の無畏依を求むる時、若し善知識の爲に三寶の眞の歸依處を説くに遇へば、彼漸く現世の因果を讀るに由るが故に、即ち能く信受す。復是事を置く、彼齋を修する時の如きは是人若し善知識に遇ふに、告げて言はく、汝何の利を觀るが故にか此齋戒を爲す。彼即ち答へて言はく、我食米保護の因縁は種種の憂苦あり、少欲にして施を行すれば、歡喜安樂の住を得と觀るが故にと。時に善知識告げて言はく、善哉、善男子、佛の所説の如し。衆生は

【劫初】 宇宙成生の初を云ふ。成劫には二十の増減あり第一増減の時、初禪天より下地獄界までの器世界を成じ、第二増減より次第に光音天より有降生すと云ふ【小劫終竟】 小劫に一増一減あり減劫の末に遂に人壽十歳の時至る。これ小劫の終劫なり。刀兵炎起つて互に殺害す。その時衆生厭離の念を生じ漸く共に十善を行ふ。

慳貪を以ての故に現世には種種の憂苦あり。命終しては此因縁を以て惡趣の中に墮す。心に慳貪の垢を離るるを以ての故に、現世には安樂にして大名稱あり。命終しては天に生じ、後には涅槃を得。この故に汝今更に勝上の心を以て、八齋の法を受くべし。彼聞き已つて即便ち信受して説の如く修行す。若し無機の人には但し世間の苦樂は皆これ自在天の造なり。或は地等の變化なり。時を以て因とすと説いて即ち是の如きの八齋の少分の安淨を聞けども尙し信すること能はず。何に況んや餘の深事をや。問うて曰はく、是の如きの八心最初の種子は復何を以てか因とする。答へて曰はく、「世間に久遠より以來た善惡の名あるに由つて種子これより生ずるなり。劫初の衆生の地肥を食食するが如きは、爾時に即ち多食のものを以ては不善として小食のものを善とす。或人あり多食の因縁もろもの過患を起すを見て便ち是念を作す、我今少しく此味を食し、常に自ら誠節せんに亦善からざらんや。然も此衆生亦未だ因果後世の報を識らず。但し展轉相承して仁義、慚愧等を謂つて以て善法とす。能く是の如く行するものあれば世間世に之を稱譽す。又小劫終竟の時の如きは衆生忽爾に發心す。世間の惡法は過患なりと知つて更相に勸導し共に善事を行す。爾時に亦善知識の勸導の然らしむるなし。當に知るべし。皆これ自心の實相の熏習する因縁力なり。最初の種子微塵計りの心垢を離るる時、即ち微塵計りの如くなる淨心の勢力を顯はすが如きは、善の種子生ずといふと雖も其れ實には即ち是れ不生の生なり。是れ堅固の性なるを以ての故に衆生の識心に在つて終に敗亡せず。未だ自心の實際大金剛輪に至らざ

る中間には更に住處無うして果復つて種と成り展轉滋長すと雖も然も亦阿字門を出でず故に「最上大乗句、心滅生之相、諸佛大秘密、外道不能知」といふ。「法華」の「藥草喻品」亦意此に在り。復次に行者三寶に歸依し、如來の律儀に隨順して一日の中に於て八齋の法を受く、戒に防護せらるるに由るが故に寂靜安樂なり。安樂を以ての故に則ち賢聖の善行を信じて數數に修習す。是を種の種子と名く。此善をして増長せしめんが爲に而も善善を修す。乃至、或醇淨なるに由つて、決定して天に生じ、後には涅槃に至る。是を受用種子と名く。復善知識に親近するに由るが故に、正法の利を聞いて異の歸依心を起さず、是れ生死流轉の凡夫の第八の眞實の無畏依なり。又此中に於て殊勝に住して解脱を求むる慧生することあり。思惟し觀察して決定の想を生ず。此より即ち聲聞の菩提の初の種子心を發す。皆前の文に准じて、廣く分別して説くべし。乃至三乘の一一の地に皆十心を具す。第十地に迄るまで亦種子菩提華花果等を具し佛地を求むる智生じて畢竟空を觀じ、金剛藏に至ることを得ることあり。

【七】以下は前問の中の諸心相の答を釋する文段なり。この中に六十種の染心を示せり但し經文には五十種をあげるのみ然るにこの疏は善無畏三藏の大本の意を汲んで發顯心を加へて六十心となせり。

【七】一爾時、金剛手、復請佛言、唯願世尊、説彼心、如是說已、佛告金剛手、秘密主言、秘密主、諸總心相、謂貪心、無貪心、瞋心、慈心、癡心、智心、乃至、云何受生心、謂諸有修習、行業彼生、心行是同性的といふは、此れ前の問のなかの諸心相の句を答するなり。初には六十心の名を列ね次に其相を釋す「秘密主、彼云何貪心、謂諸染法」とは、謂く、前の地に染著す。即ちこれ淨心を染汙するなり。若し此法に隨順し、修行するを有貪

【穢草】六十心に
喩ふ。

【嘉苗】八心に喩
ふ。

【第二に云云】無
貪心。

【第三に云云】瞋
心。

【第四に云云】慈

心。【慈無量心】大乘
の菩薩の修する觀
法に慈悲喜捨の四
無量心あり。今の
心はその隨一。

心と名く。心法は微細にして識り難きを以て、但し彼所爲の事業を觀するに必ず相外に彰
るることあり。譬へば烟の牀貌を鑿て即ち火性を以て比知すべきが如し。故に諸句多く順
修を以て義を明す。以て例すべきこと然なり。此等は皆これ未だ出世の心を得ざるより以
來、善と種種に雜起するの心なり。若し行者善く眞偽を識て、猶し農夫の務めて穢草を除
き、以て嘉苗を輔くるが如くすれば則ち淨心の勢力漸漸に增長す。これ因縁の事相なりと
謂うて至言を輕忽し、心をして其中に没して自ら覺知せざらしむることなかれ。

【第二に云云】無貪心、謂隨順無染法」とは、謂く、前の心と相違せり。乃至進求すべき所
の善處にも亦復願樂を生ぜず、是故に善法に染せず、俱に善前を障ふ。無染汗の心と名同
うして事異なり。最も須らく觀察すべし。是故に行者但し貪心の實相を觀するに自然に貪
して心を染せず、是の如きの無慧不貪の行を起すべからず。

【第三に云云】瞋心、謂隨順怒法」とは、怒は謂く、瞋心發動して事外に彰はる。心の法は
識り難きを以ての故に怒法に順修するを以て之を釋す。若し數かくの如きの不寂靜の相
を起すは即ち知んぬ。是れ瞋心の相なり。但し是衆縁の中に於て觀察するに瞋心自ら所
住無うして則ち此障生ぜず。

【第四に云云】慈心、謂隨順修行慈法」とは、此慈は亦これ瞋と相違せり。愛見心垢の慈な
り。善種所生にはあらず。上の慈の字は内心に據り下の慈の字は是れ外相所爲の事業なり。
既に覺知し已んぬれば、但し妨道の失を治す。轉轉して慈無量心を修する。即ち是れ對治

【第五に云云】 癡心。

【第六に云云】 智心。

【世智辨聰】 佛法に入るに困難なる處八箇處あり。今はその隨一なり。
【第七に云云】 決定心。
【第八に云云】 疑心。

なり。

第五に「云何癡心、謂顛修不觀法」とは、謂く、前の言の善惡是非を觀ぜず。遇へば便ち信受す。凡そ所爲の事業先づ慧心を以て甄別して是非を籌量すること能はず。是の如き等諸の誤失多し。皆これ癡心の相なり。

第六に「云何智心、謂順修殊勝、増上法」とは、謂く、是人種種の所説の中に於て皆智を以て此は勝たり、此は劣なり、此は受くべし、此は受くべからずと簡擇して其勝上の者を取つて而して後に之を行するは即ち是れ無癡の相なり。然も道人の法は智力の籌量の能く及ぶ所にあらず。唯し信するもののみ能く入るのみ。この故に世智辨聰の難を觀察する。是れ彼對治なり。

第七に「云何決定心、謂尊教命如說奉行。」

第八に「云何疑心、謂常收持、不定等事」とは、今先づ疑心を釋することは決定心の相をして解し易く明了ならしめんが故なり。謂く、此人聞く所あるに隨つて便ち不決定の心を生ず。受戒の時の如きは、便ち自ら疑心を生ず。我今定んで戒を得し、爲し得せざるべしや。或は師を疑ひ、法を疑ふ。諸事例して爾なり。人の道を行くに疑惑を以ての故に前進むこと能はざるが如し。「智度の偈」に云はく、乃至、譬へば岐路を觀て好利の者の逐ふべきが如し。これ彼對治なり。又決定心とは、謂く、善友等の如法の教命を聞くに隨つて便ち疑慮を生ぜず、心を至して奉行す。然も亦當に慧を以て觀察して正決定の心を生ず

【第九に云云】 闇心。【種種の憶度】 或は人、或は鬼等の商量なり。

【第十に云云】 明心。この心は正慧ありと雖も偏増あるを以て尖となす

【第十一に云云】 積聚心。

【第十二に云云】 闘心。

べきなり。

第九に「云何闘心、謂於無疑慮法、生疑慮解」とは、謂く、四諦不淨無常等の如きは世間の智者疑ひを生ずべからず。然も彼之を聞いて心に猶豫を懐くこと、夜寐冥を見て種種の憶度の心を生ずるが如し。若し見に是の如きの相あらば當に知るべし、暗心の然らしむるなり。

第十に「云何明心、謂於無疑慮法、無疑慮、修行」とは、謂く、決定の法印の疑慮すべきにあらざるの法に於て、彼聽聞する所に隨つて即ち能く懸かに信ず。當に知るべし、是れ明心なり。然も是中に若しは過ぎ、若しは及ばざる、即ちこれ道を障ふるの心なり。更に中慧に處する、是れ彼對治なり。

第十一に「云何積聚心、謂無量爲一爲性」とは、謂く、此人一事に隨つて信解を生じ已つて更に種種の殊異の法を聞いて皆合集して一とす。人の一三昧を學得し已つて餘の經教無量の法門、差別の勝事を見て皆此定心を説く、此を離れて外に更に餘法なしと謂ふが如し。故に積聚心と名く。

第十二に「云何闘心、謂互相是非、爲性」とは、謂く、他の所説の言教を聞いて常に好んでは非を辯論す。謂く、この義は爾るべし。この事は然らず、假使言ふところ理に合へども亦種種の方便を以て其長短を伺求し失處に墮在せしめんと欲ふ。設ひ他來つて問ふときにも亦復その長短を求めて此問は乖僻せり。我答ふべからずと言ふ。是の如きの相、現す

【第十三に云云】
諍心。

ることあるは當に知るべし、是れ闕心なり。
第十三に「云何諍心、謂於自己、而生是非」とは、謂く、内に是非の心を懐く、自ら一義を思惟し、覺つて、驕り復自ら異端を設けて、其失を推求し、善心をもて人に諍受して、既に領受し、已ると雖も、還つて自ら得失を推求し、此事は爾るべし、此は爾るべからずと請ふが如し。多く是の如きの相現することあるは當に知るべし、是れ諍心なり。

【第十四に云云】
無諍心。

第十四に「云何無諍心、謂是非俱捨」とは、覺木の轉轉に准ぜば、云はく、六十心の下に於て、皆爲性の字ある合し、在して知るべし。謂く、其心向背を懐かず、先に宗習する所に是の如きの見解を作すと雖も、更に異言の違を以て理に合するを聞いて、即ち之を受行し、業は先には以て是とすれども他の以て不善とするを聞いて、即ち能く之を改む。情に所執無うして、是非俱に捨つ。是の如きの相あるが如きは、當に知るべし、是れ無諍心なり。無記無諍の心を覺知して、諸法の實相無諍の心を修する、是れ彼對治なり。

【第十五に云云】
人心。

第十五に「云何天心、謂心思、隨念成就」とは、諸天の先世の果報を以ての故に、若し所須あれば、功力を加へざれども心に隨つて生ずるが如し。數是の如きの願業を起すは當に知るべし。是れ天心なり。亦曾し上界に生ぜしに由るが故に、此習あり。若し眞言行人、遠大の果を期せずして、但し自心の爲に、率かるれば、能く淨菩提心を障ふ。當に自ら覺知して、世間の悉地を貪することなかるべし。これ彼對治なり。

【第十六に云云】
阿修羅心。この心は世の樂に耽着する心なり。六趣の中に修羅は殊に生死の果報に樂着するが故に、これを相を明かす。

第十六に「云何阿修羅心、謂樂處生死」とは、阿をば名けて非とし、修羅をば天と名く、其

【第十七に云云】
龍心。この心は資財に執着すること上の阿修羅心と異なるが故に已得の果報に於て厭離する所なし。

【第十八に云云】
人心。

【第十九に云云】
女心。

果報、天に似たれども而も行業住處不同なるを以ての故に以て名とす。此れ解脱の利ありと知れども但し深く生死の果報快樂を樂つて進趣すること能はず。若し行人この相貌あらば當に知るべし、修羅心と名く、亦先世に曾し此趣に生ぜしに由るが故に此習あり。無常苦等を觀察するに是れ彼對治なり。

【第十七に云何龍心、謂思念、廣大資財」とは、謂く、屢この念を作す。我當に何れの方便を以てか、是の如きの廣大の資財勝妙の珍寶を獲べき。此多貪無厭の想あるはこれ龍心の心なり。亦木龍趣の中より來るが故に此習を生ず。煮んで行人をして世間の悉地を願求せしめて出世の淨心を障ふ。少欲知足無常等を思惟する是れ彼對治なり。

【第十八に云何人心、謂思念他利」とは、謂く、好んで追求し思念すらく、某甲は我に於て恩あり、我當に是の如きの方便を以て大利を得しむべし。某甲は曾し我がところに於て不僥益あり、今當に之を報すべし、及び種種に人を理り物を利するの計、皆これ人心なり、當に自ら心行を觀じて、早く法利を求め、紛紜として他縁を思慮すべからずと念すべし。是れ彼對治なり。

【第十九に云何女心、謂隨順欲法」とは亦これ人趣の心なり。但し多欲を以て異とせまくののみ。『經』に説いて言ふが如し。女人は多欲なること男子に百倍せり。常に所經の樂事を念じ、或は他の容色姿態等を想ふ、能く行者をして淨心を障蔽せしむ、亦これ多生に曾し女人と作りしをもて猶し本習あり。是中には不淨念處等を以て身の實相を觀する、是れ彼

對治なり。

第二十に「云何自在心、謂思惟、欲我一切如意」とは、自在は即ち外道の事ふる所の天神

【第二十に云云】
自在心。

【此法を修する】

外道は自在天法を修す。

なり、彼宗の計すらく、自在天は能く念に隨つて諸の衆生及び苦樂等の事を造すと。此法を修するもの亦常に念を保けて其本尊の如くなることを得せんと願ふ。若し眞言行人、是の如きの惡地を念じ、我れ念に隨つて成就せんと念ずるは、當に知るべし、是れ自在心なり。亦先智の然らしむるなり。當に諸法は皆悉く衆因縁に屬せり、自在あることなしと観ずべし。これ所對治なり。

【第二十一に云云】
商人心。

第二十に「云何商人心、謂順修初收聚、後分折法」とは世の商人の先づ務めて貨物を儲

聚して然して後に之を思惟し、分析して此物をば某の處の用に當て、彼物をば某の處の用に當てて、大利を得べしといふが如く、若し行人も内外の學問を務めて、周備せしめ已つて方に復籌量すらく、此はこれ世典なり、此の如きの處の用に當つて、此は二乗の法なり、用て其人を接すべし、此は大乗の資糧なり、是れ其縁の所要なりと。此を商人心と名く、亦先習に由つて然らしむるなり。捷疾の智を修する。これ彼對治なり。謂く、何れの法を聞くに隨つても即ち彼因縁の事用を觀すべし。豈に多聞の蓄聚を待つて方に用處を求めんや。

【捷疾の智】 疾く速かなるの智、即ち速かに究竟に至る智なり。

【何れの法】 五種三昧道等なり。

【第二十二に云云】
農夫心。

第二十二に「云何農夫心、謂隨順初廣聞、而後求法」とは、稼を學ぶ者の老農に詢問すらく、何んが地の良美を知り、云何が耕植し、耘耨する。云何が時を候ち、云何が獲り藏む

【道品】 三十七道品。

【三農の月】 春夏秋のこと。

【第二十三に云云】 河心。

【第二十四に云云】 陂池心。 提也。

【乳の糜】 乳を入れて煮たる粥なり

【第二十五に云云】 井心。

是の如く一に知り已つて方に功力に就くが如く、此心も亦爾なり。先づ務めて智者に請承し、廣く道品を聞いて然して後に之を行す、皆宿習の然らしむるなり。利智を以て所對治とす。諸蘊無常なりと聞くが如きは即ち界入縁起等も其相、例して皆爾なりと知る。又毒箭體に入るが如きは、豈に三農の月を竣つて廣く問うて、而して後に之を抜くことを得んや。

【第二十三に云云】 河心、謂順修、依因二邊法」とは、此心の性は雙べて二邊に依る。或時には常を修し、或時には斷を修し、或は復邪正兼信す。河水の雙べて兩岸に依り、其漂流する所の物亦定んで一邊に係らざるがごとし。此中の對治は謂く、行人心を一境に専らにすれば則ち能く至到するところあり。若し心定守せずして能く事業をして俱に辨ぜしむといはば此理なし。

【第二十四に云云】 陂池心、謂隨順渴、無厭足法」とは譬へば陂池の若し。衆水流入すれども終に厭足なきが如く此心も亦爾なり。若し名利眷屬等の事、その身に來集すれども終に厭足なし。乃至所學の法に於ても亦爾なり。已に乳の糜を得て務めて速に食せずして更に復濁して餘味を望むが如し。この中には少欲知足を以て對治とす。

【第二十五に云云】 井心、謂如是思惟、深復甚深」とは、謂く、俯して井水を闔るに、淺深の量知り難きが如く、此心の性も亦是の如し。凡そ思惟する所好んで尙し深遠なり、所有の善不善の事皆人をして測量すること能はず。共住同事にも亦その心行を譏らざらしめん

【第二十六に云云】守護心。

【龜の六】龜の四足、或は六を體内に藏護して他を損せしめざるを云ふ。

【第二十七に云云】懼心。

【第二十八に云云】狸心。

と欲ふ。當に知るべし、是れ非心なり。緣起の法門及び善人の相は、皆顯了にして知り易し。是れ彼對治なり。

第二十六は「云何守護心、謂唯此心實、餘心不實」とは、世人の己が身の財物等を護らんが爲の故に、乃至塔を周し圍を重ね種種に防守して他の爲に傷られしめざるが如く、此心も亦爾なり。常に身心を守護すること乃至龜の六を藏め外境をして傷られしめざるが如し。謂く、唯し此行のみ實と爲つて諸餘の有作の務め皆不實なりとす。聲聞を學するもの多く此心を生ずるなり。兼ねて他人を護るを以て所對治とす。又人あつて自ら所解を保つて他の種種の異論に傷られしめんと欲はず。餘の見解は悉く皆不實なりと謂ふ亦是れなり。第二十七に「云何懼心、謂隨順爲己、不與他法」とは、謂く、この人の諸有所作皆ことごとく自身の爲の故なり。財物、伎藝、乃至、善法皆好んで秘惜して以て人に惠まず、此相あるものは知んぬ。これ懼心なり。施及び無常等を念ずるを以て所對治とす。當に念ずべし、財物、伎能、無常に設ふ時には我に隨つて去るものあること無し。然も今この身念念に自ら保つべからず。云何が此を惜まんやと。

第二十八に「云何狸心、謂順修、徐進法」とは狸狸の禽鳥を伺ひ捕るに息を屏して靜に仕して務めて速に進まず、度内に望み至つて然して後に之を取るが如く、此人も亦爾なり。種種の法要を聞くに遇うて但し作心して領受し記持すれども而も進行せず。良縁の會合を待つて則ち當に勇健に闘んで之を行すべしと冀ふ。又狸狸の種種の慈育を蒙れども亦恩

【第二十九に云云】
狗心。

【第三十に云云】
迦樓羅心。迦樓羅
は鳥の名。翅鳥又
は妙翅鳥等と譯
す。常に龍を捕へ
て食すと。八部衆
の一なり。

【第三十一に云云】
鼠心。

分を識らざるが如く、若し人但し他の慈悲善言を受くれども而も報を念ぜざるは是れ狸心なり。時處を待たずして、聞くが如く輒ち行じ、常に恩徳を念ずるを以て所對治とす。

第二十九に「云何狗心、謂得少分、以爲喜足」とは狗は薄福の因縁を以て所期下劣なり。故に少分鹿蹄の食を得るに遇うて便ち喜足を生ず。若稍く此に過ぐれば則ち木所望にあらざるが如く、此心も亦爾なり。少分の善法を聞いて便ち行せんに盡くべからずと以爲つて復更に勝事を求めず。此は聲聞の種習の所生なり。増上の意樂を以て所對治とす。乃至心は大海の少けれども亦拒まず、多けれども亦溢さざるがごとし。

第三十に「云何迦樓羅心、謂隨順、朋黨羽翼法」とは此鳥は常に兩翅を恃み其身を挟み輔けて所往意に隨つて以て大勢を成す。假ひ一羽も少けぬれば則ち能く爲すところ無し。此心も亦爾なり。常に多く朋黨と輔翼と相資くることを得て事業を成げんと念ふ、又他の所作に因つて而して後に心を發して獨り進むこと能はず。如し人の善を行するを見ては便ち彼尚し能く行ず、我れ何ぞ爲さざらんと念ふ。當に念すべし、勇健の菩提心は師子王の如くして助伴に藉らざるを所對治とす。

第三十一に「云何鼠心、謂思惟、斷諸繫縛」とは、鼠は他の箱篋繩係等を見て輒ち好んで非理に損壞す、亦念を作さず。此を斷ずるに由るが故に我をして是の如きの利を得しむと。但爾趣なうして之を爲すが如く、此心も亦爾なり。所有の繫屬と及び成事とに好んで間隙を爲して之を沮敗す。

【第三十二に云云】
歌詠心。

【梵本】大日經三
千頌の略本のこと
【阿闍梨】善無畏
三藏。

【内證自然の慧】
初地本不生の智。

【第三十三に云云】
舞心。

【第三十四に云云】
擊鼓心。この心は
祖、前の歌詠心と
相似たり。彼は音
曲を習ひこれは辯
説を習ふのみを相
異とす。これは自
證の得悟を思はず
して徧へに他を驚
覺する事を喜ぶ故
にこれを擇ぶ。
【無礙辯才】法、
義、辭、樂の四無
礙辯を云ふ。

【第三十五に云云】
室宅心。

第三十二に「歌詠心」梵本に文缺けて釋せず。阿闍梨の言はく、此は傳法の音に喩ふるなり。世人の曲を他より度して善巧を得已つて復他人の爲に之を奏するに種種の美妙の音を出し聞くもの歡喜するが如く、此心も他に從つて正法を聽聞し、我當に轉衆生の爲に種種の文句を以て莊嚴し、分別し、演說して此妙音をして處處に聞知せしめんと欲ふ。多くこれ聲聞の宿習なり。亦能く淨心を降ふ。當に念すべし。我當に内證自然の慧を得て然して後に普現色身をもて而も之を演說すべしと。是れ彼對治なり。

第三十三に「云何舞心、謂修行如法我當上昇、種種神變」とは世人の支分散動するを説いて名けて舞とするが如く神變も亦爾なり。種種の未曾有の事を現じて前の人をして心淨く眼を悅ばしむ、多く是れ五通の餘習なし。若し偏に是のごときの悉地を尙び方便をもて願求する、亦淨心を降ふ、當に除蓋障三昧をもて心に散動無く神通をもて滅定を起たすし加持神變を作さんと念じて世間の小驗を貪ることなかるべし。これ所對治なり。

第三十四に「云何擊鼓心、謂修願是法、我當擊法鼓」とは、鼓は能く衆生を警誡して覺悟を得しむ、若し行人かくのごときの念を作す、衆生、長夜に昏寢す、我當に種種の無礙辯才を習ひ大法鼓を擊つて而も之を警悟すべしと。亦能く淨心を妨礙するなり。當に念すべし、早く無量の語言陀羅尼を證して天鼓の妙音を以て普く一切衆に告げんと。世間の小利を以て大事の因縁を妨ぐるることなかれ。これ彼對治なり。

第三十五に「云何室宅心、謂順修、自護身法」とは、人の舍宅を造立して其身を庇し衛り、

【自ら防護す】他の譏嫌を助け、自の安隱を護る。

【第三十六に云云】師子心。師子心とは極大橋慢の心なり。

【第三十七に云云】偏留心。偏留はミミツクなり。

【六情爽利】眼耳鼻舌身意の六識の明かにさときと

【昏憤】心開く亂るる事。

【禪觀】禪定を修すること。
【第三十八に云云】鳥心。

寒、熱、風、雨、盜賊、惡蟲等の種種の不徳益の事を免るることを得るが如く、此心も亦爾なり。我當に戒を持し善を修して自ら防護するを以て、今世後世をして惡道の衆苦を遠離せしむ、多くこれ聲聞の習なり。當に一切衆生を救護せんと念じて獨り一身にあらざるべし。是れ所對治なり。

【第三十六に云何師子心、謂修行一切無怯弱法】とは、師子の諸獸の中に於て所至の處に隨つて皆勝れて怯弱あること無きがごとく、此心も亦爾なり。一切の事の中に於て皆一切の人に勝れ心怯弱ならざらしめんと欲ひ、自心に難事あることなく能く我と共に優劣を稱ぶるものなからしめんと謂へり。若し自ら覺知し已りなば當に釋迦師子の心を發すべし。當に一切衆生をして遍く勝れて優劣あること無からしむべし。これ所對治なり。

【第三十七に云何偏留心、謂常、暗夜思念】とは、この鳥は大明の中に於ては能く爲すところ無く、夜は則ち六情爽利なり。若し行者晝日は所聞ありと雖も誦習するに昏憤にして其善巧を得ず、暗夜に至んぬれば所爲の事を思憶し重ねて復籌量するに便ち明なることを得、乃至禪觀等を修するに亦暗處を以て勝れたりとす、若し覺知し已らば當に等しく明暗に於て作意するところ晝夜の別なからしめんと念すべし。これ所對治なり。

【第三十八に云何鳥心、謂一切處、驚怖思念】とは、鳥鳥は若し人善心をもて附近し惠養し、或時には其便りを伺求するに俱に猜畏の心を生じ、一切時に性、常に是の如くなるが如く、此心も亦爾なり。善友の饒益を爲さんと欲ひ、及び之を陷誤するものなりと雖も

【第三十九に云云】
羅刹心、

【第四十に云云】
刺心。

【惡作爲性】
には一惡作を發起する性」となり。
【惡作】
他罰の心なり。

【第四十一に云云】
刺心。

【五欲自恣】
色聲香味觸の五境即ち五根の欲求する所自己の恣なる所を云ふ。

一觀に猜阻して妖羅を懐き、乃至戒を恃し善を修する時にも亦生死に於て驚怖の心を懐く、若し覺知し已りなば當に安定無畏の心を修すべし。是れ彼對治なり。

【第三十九に云何羅刹心、謂於善中、發起不善」とは、如し人の善事をなすを見ては皆不善の意解を作す、他もろもろの答酬を造るものは無量の福を得と説きたまふ。而るを彼反つて是言を作す。これに由るが故に、横に無量の小蟲を損じ地主を煩擾す、特に何の益する所がある、常に苦報を蒙くべしと、發起といふは、謂く、是の如き等の不善の心を生起するなり。この中には但し功德利益を觀て後短を念せざるを以て所對治とす。

【第四十に云何刺心、謂一切處、惡作爲性」とは、對し緣縁は一切處に於て損妨する所多く、近づくものをして不安ならしむるが如く、此人の心も亦爾なり。若し善事を行するに大難障の如きは既に作し已つて便ち後悔の心を生ず。若し惡事を作し竟つて復つて自ら思惟して亦後悔を抱く、この故に常に惡作を慎いて動慮不安なり。此中の對治の法は若し犯あらば、速に悔いて懺除して後悔を生ずることなかれ。所爲の善事を自ら思惟して慶幸の心を生ずべし。

【第四十一に云何刺心、謂顛倒爲人、窟法」とは、謂く、諸能阿修羅等は皆地下の或は海底深窟の中に在り、多く龍仙の諸業あつて能く長壽自在を得、行者或は彼中に多く美女あり、端正にして諸天に同じ、天遁の憂なく五欲自恣なるべしと念ひ、或は彼中に留住して劫壽を得、未來の諸佛を見たてまつるべしと念する皆これ窟心なり。當に念すべし、法の如

【第四十二に云云】
風心。

【石田】 世天三乘
等。

【不毛】 淨菩提心
を生ぜざる種子。

【良美の福田】 眞
言の三密。

【第四十三に云云】
水心。

【第四十四に云云】
火心。

く修行して此生に於て法明道を見、乃至成佛すべし。枉路に稽留して此世仙の法を念すべからずと。是れ彼對治なり。

【第四十二に「云何風心、謂遍一切處、發起爲性」とは風性は散亂なり。不住に由るが故に此人の心も亦爾なり。一切處に於て遍く善根を種う。謂く、世間の外道種種の天尊及び三乘の諸行の中に於て皆分あらしむ。而も是念を作す。多くの種子をもて一切處に於て之を遍すれば會す成するものあるが如しと。當に知るべし、是れ風心なり。當に念すべし、石田は不毛なり、虚しく種子を費す。當に良美の福田膏腴の處を求めて專意耕耨すれば所獲必ず多かるべしと。是れ彼對治なり。

【第四十三に「云何水心、謂順修、洗濯、一切不善法」とは、水性の清潔にして暫く諸垢の爲に汙さると雖も之を澄ませば則ち淨く又能く垢穢を洗除するが如く、此人の心も亦爾なり。常に垢惡を發露し三業の衆罪を懺洗せんと欲ふ。これ垢、これ淨なり。我是の如く行すべしと見るを以て、則ち能く淨心を障礙す。但し當に心の實相を觀じて本より來た垢法不生なりと了し、自ら能く一切の蓋障を除くべし。これ彼對治なり。

【第四十四に「云何火心、謂熾盛、炎熾爲性」とは火性の赫奕として躁疾なるが如く、此人の心も亦爾なり。若し善を造る時には須臾の間に於て能く無量の功德を成じ、惡を造るにも亦少時に極重の業を成す。此中の治行は猛暴の心は敗傷するところ多し、柔和慈善の水を以て方便をもて滅せしめ、而も熾然の善事を務めて恒に久しからしめんと思惟すべし。

【第四十五に云云】泥心。これは分別の慧なきの心なり。上の癡心は、便に遇うて信愛し、今の心は全く分別なき心なり。

【第四十六に云云】顯色心。素絲。白色無染の絲のこと。

【第四十七に云云】板心。これは廣大の意樂なき心なり

【承上】 往古。

これ彼對治なり。

第四十五に「泥心。覺本に文缺けて釋せず。阿闍梨の言はく、此はこれ一向無明の心なり、乃至目の前の近き事も亦分別し記憶すること能はず。故に律に猶し泥濁の如しといふ。又泥濁の滓弱なるが故に越度を事とし難きを以て要す由藉するところありしむ。謂く、橋梁等を假りて方に能く之を越ゆるが如し。若し此方便ありと覺んぬれば必ず須らく善友に歸愚して方便をもて開發して、乃ち能く漸く無知を去け還つて慧性を生ぜしむべし。

第四十六に「云何顯色心、明類彼爲性」とは、譬へば青黄赤白等の染色に若し素絲之を入る時には便ち與に色を同するが如く、此人の心も亦かくのごとし。善法を見聞しては亦彼に隨つて行じ、惡事を見聞しては亦依隨し修學す。乃至無記も亦爾なり。種種の境界に對して事に隨つて而も遷る。行人自ら覺知し已りなば、當に念すべし、自證の法を專求するには他に由つて悟らず、他縁の爲に轉ぜられずと。是れ彼對治なり。

第四十七に「云何板心、謂順修隨量法、捨棄餘善故」とは、板の水中に在るに其分量に隨つて諸物を受け、眼に過ぐるときには則ち勝ふること能はず、終に亦傾けて之を棄つるが如く、此人の心も亦爾なり。善法を簡擇して己が力分に隨つて一事を行じ已つて便ち是語を作す。我れ承上以來唯しこの法をのみ行じて其他を知らず、乃至八齋を習行しても即ち捨離せず、更に餘善を行ぜんと慕はず、以て廣大の心を發し菩提の行を學する。是れ所對治なり。

【第四十八に云云】
迷心。

第四十八に「云何迷心、謂所執異、所思異」とは、人の迷の故に意には東に向ふと欲つて而も更に西に向ふが如く、此人の心も亦是のごとし。意には不淨觀を學すと欲へども而も反つて淨相を取つて自ら我れ今不淨觀を修すと謂へり。若し無常無我を修するときは反つて常我倒の中に行じて我れ今無常無我を修すと謂へり、心散亂するに由るが故に然らしむるなり。當に念すべし、其心を專一にし審諦安詳にして無倒に觀察せんと。是れ彼對治なり。

【第四十九に云云】
毒藥心。これは無因無果に修入する心なり。

第四十九に「云何毒藥心、謂順修無生分法」とは毒は謂く、龍蛇藥草もろもろの惡毒なり。人の毒に中つて悶絶し轉死地に趣いて生分あることなきが如く、此人の心も亦爾なり。善心をも生ぜず、亦惡心をも生ぜず。乃至一切の心をも生起すること能はず。但し任運に行じて漸く無因無果の中に入る。故に無生分の法と名く、行人自ら覺知し已りなば大悲の衆善を發起して斷滅の空を離るべし。即ち是れ所治の甘露の妙藥なり。

【第五十に云云】
縋索心。この心は斷見を縛す。

第五十に「云何縋索心、謂一切處、住於我縛爲性」とは、人の縋索の爲に縛せられて乃至手足支節動轉することを得ざるが如く、此心も是の如し。斷見我縛の中に墮す。この見は能く行者の心を縛す。乃至一切處に於て常に爲に拘へられて自ら出づること能はず。最も是れ重障なり。既に覺知し已りなば速に緣起正慧の刀を以て障蓋を決除すべし。是れ所對治なり。

【第五十一に云云】
械心。

第五十一に「云何械心、謂一足止住爲性」とは、手に在るを杻といひ、足に在るを械とい

【静思】静は入定意は出定の別なり

【第五十二に云云】
【西方の夏三月】

【西方の夏三月】
即ち於ては夏三ヶ月は雨期なり

【滯淫昏墊】滯淫は滯り淫ふなり、昏墊は暗く潤ひ濁るるなり

【第五十三に云云】
田心

【第五十四に云云】
彌心

一人の心の中に持らへしるる水故に、二足持して前進むことを得ざるが如く、此心も亦雨なり。常に水中を好み、寂然に住立して而も定心を修し、及び法義を觀察して此が爲に往へらるるが故に名けて滅心とす。この中の修行は常に一切時處に於て思惟に修習して静亂無間ならしむべしと。これ所對治なり。

第五十二に「云何云心、常伴、降魔思念」とは、西方の夏三月の中の如きは、然雨時に甚しうして常に滯淫昏墊なるを以ての故に時俗樂樂思慮の心前勝溢く多し。故に降雨の時の思念を作すといふ。覺知しじりなば則ち常に捨心を行じて世間の樂喜を離れ法喜に隨順すべし、これ所對治なり。

第五十三に「云何田心、常常如是、能事自身」とは、人の良美の田あるに常に修治し耕鋤して雑草を去除し、種種の肥料を以て清潔なることを得しむるがごとく、此人も亦彌なり。常に好んで其身に事ふることを修するに、香花滋味等を以て灌漑し奉養し、務めて光潔好ならしむ。覺知しじりなば常に念すべし。此功方の其心に事ふることを修するを勵して是の如きの諸の供養の具を以て福田に播植して勝果を資成せんと。これ彼對治なり。

第五十四に「云何彌心、謂所思念、彼復増如思念」とは、鹽性の鹹らしくして凡そ所入の處あるに皆鹽味を増すが如く、此人の心も亦是の如し。所思の事に於て復思念を加す。慾色を憶想するのときの如きは、適に此意を生じて還つて復自ら推求すらく、是心は難に由つてか爾も生ずる、何の相貌をか作す。これを觀する心未だ決せざるに復此推求の慮は何の

【諦理】 眞實の勝義諦を云ふ。諦理に安住するは初地淨書提心の位なり

【第五十五に云云】 剃刀心。これは自ら分限を立つる心なり

【賢聖】 三賢十聖なり

【無明住地】 能生の根本無明。三毒は入法二執に通ず

【第五十六に云云】 彌盧等心

【高舉】 高きに居る心にして高慢心を云ふ

【第五十七に云云】 海等心

因縁かあると念ず。是の如く則ち窮盡無し。既に覺知し已りなば當に一向に心を諦理に安じて務めて穿徹ならしむべし。又心性は念を離れて憶度の能く知るにあらず、分別の上に於て更に心數を増ぜざれ

【第五十五に云何剃刀心、謂唯如是依止剷除法】とは、鬚髮を剷除するは是れ離俗出家の相なり。謂く、此人心に但し是念を作す。我已に俗相を剷除して、惡法をして復滋きことを得ざらしむ。更に何の求むるところかあらんと。當に知るべし。此心は最惡なり、自ら分限を作すを以ての故に能く所有の善根を剷除して生ずることを得ざらしむ。當に念すべし、一切賢聖の斷すべき所のものは、謂ゆる無明住地三毒の根なり、若し能く此を剷つて妄想をして生ぜざらしむるを乃ち眞の出家と名く。

【第五十六に云何彌盧等心、謂常思惟心、高舉爲性】とは、須彌山の高くして業空に絶え、能く其上に出づるもの無きが如く、此人の心も亦爾なり。常に高舉を以て性とす、乃至師僧父母等の尊敬すべき所の處にも皆意を下すこと能はず。猶し高幢の屈撓すべからず、若し之を撓めんと欲すれば、要必ず當に折れぬべきが如くして終に其常操を改めず、忍辱謙卑を以て一切衆生に於て大師の想を作すを所對治とす。

【第五十七に云何海等心、謂常如是、受用自身而住】とは、譬へば大海の百川之に歸すれども呑納して限り無きが如く、この心も亦爾なり、一切の勝事に於て皆之を已れに歸せしむ、餘人を嫌うて比するものあること無からしめんと謂へり。常に自ら是の如きの衆多の

【三賢十聖】 十住十行十觀尚を三賢と云ひ、十地を十聖と云ふ。
【第五十八に云云】 穴等心。

【第五十九に云云】 受生心。これは諸業を離行して樂非せざるの心なり。
【白黒の業】 白は十善、黒は十惡、即ち善惡の實なり。
【醜陋の妙果】 醜陋は密曼茶羅。

【第六十に云云】 猿猴心。

所縁を轉入して前此を受用して前も住す。前の心は務め高し、此心は務め廉し、故に海と等閑なりと云ふ。行者覺知し已りなば當に念すべし、三賢十聖等の無量の大功徳海は展轉して深廣なり、自ら心行を起するに會て其其勝徳を得ず、大慢の心を起すべからずと。

第五十八に「三何心、謂先決定、彼復復、變改爲性」とは、譬へば完璧の器の後に若し縁に遇うて穿穴するときは其堪任するところ無きが如き、此心も亦爾なり、初時には受持する所多く後に稍穿漏す。或は初め發心受戒せしときには具足して缺けたること無く久しからずして漸く漏法を生ず。已數の器に同じて法水停まらず、凡を此の如きの側背穴心と名く。故に行者當に所爲の事をして皆終始あらしむべし。又性多く變改するは最も能く堅固の菩提心を障礙すと知るを破對治とす。

第五十九に「三何受生心、謂諸善、修習行業發生、心如是同性」とは、人の白黒の業に由つて善惡の報を受け、所作種種に雜するに由るが故に、彼彼の無量差別の身を受くるが如く、此心も亦爾なり。所修の諸行は受生に爾向せんと欲ふ。當に知るべし、得果にも亦善惡を兼ぬ。故に行者當に念すべし、善惡を離擇して不善を除去し純ら白法を修し此善の中に就いて又復善を以て更に魚鱗を去つて、是の如く次第に乃至純一清淨の醜陋の妙果を成ずることを得んと。これ所對治なり。

第六十の心は甘木に文映けたり。阿闍梨の云はく、一の猿猴心少けたり。猿猴の性は身心散亂して常に暫くも住せず、行人も亦爾なり。その性躁動して不安なるが故に攀緣す

るところ多し。猶し猿猴の一を放ちて一を捉るが如し。大略これを言はば衆生は盡く然
 なり。今偏盛なるに就いて而も言ふ。此中には動散の想に隨はずして縁を一境に繋ぐるを
 以て是れ所對治なり。猶し猿猴の若し。之を柱に繋げぬれば則ち復情を肆にして蹶擲騰
 躍せざるが如し。これ所治なり。然も此六十心は、或時には行者の本性偏多なり。或は道
 を行する用心に由つて先習を發動す。或は一時に雜起し、或は次第に而も生ず、當に一切
 時に於て心を留めて覺察すれば自然に淨菩提心に順することを得べし。若し阿闍梨、弟子
 の爲に心地を平治せん時亦當に一一に簡去すべし。

大毘盧遮那佛經疏卷第一本 終

大毘盧遮那成佛經疏卷第二 末

沙門 一行阿闍梨の記

入眞言門住心品第一の餘

【八】以下は心相及び心殊異の答説として三劫十地を明かす。内に於て初に三劫を釋す。

【五見】身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見なり。

【此五根本云云】以下は五根本の煩惱を數ふれば百六十心となることを明かす。

【二法】斷常有無等の二法なり。

【塵勞】煩惱のこと。

【八】「經」に「總持主、一、二、三、四、五、再數、凡百六十心、越世間三妄執出世間心生、乃至四分之一、度其信解」といふは、亦これ諸心相及び心殊異を答す。無明あるに由るが故に五根本の煩惱の心を生ず。深く、貪瞋癡慢疑なり。五見を離かざる所以は屬見の煩惱多く六十心の中に在るを以てなり。此五根本の煩惱初に再數すれば十と爲り、第二に再數すれば二十と成り、第三に再數すれば四十と成り、第四に再數すれば八十と成り、第五に再數すれば百六十心と成る。故に「一、二、三、四、五、再數、成百六十心」といふ。衆生の煩惱の心は常に二法に依つて中道を得ざるを以ての故に事に隨つて名を異んず。輒ち分つて二とす。此二が中に就て、復更に展轉して細しく之を分つ、其名相は具に十萬の塵勞の中に説くが如し。若し更に上中下九品等に約すれば乃至八萬の塵勞と成る、廣すれば則ち無量なり。塵勞は一種子より五根本を生じ、一の根本に於ては皆破して二枝とす、第五の破に至つて則ち百六十の小枝と成る、此より復更に離分すれば則ち餘塵勞計すべからざるが如し。又

【阿含】長阿含經
第二十二卷。

【越世間云云】能
所越の相を明かす
内に初に越劫成佛
の相を明かす。
【常途】顯教なり

【佛慧】眞言の初
地顯教の佛果なり
【然も第一重云云】
以下は三劫の第一
重を明かす。
【唯無我】唯五
蘊のみ存して人我
あることなしの意

劫初の時の如きは人皆化生にして念を以て食とし、身光自然にして安樂無慮なり。然れども心の實相を知らざるを以ての故に稍く地肥を食著す。食味の多小に由つて色貌随つて異なり、是非勝負の心此に着つて生ず。憍慢の心あるを以ての故に新利衰滅して地肥罷没し乃至地膚層層亦復現ぜず。次に自然の粳米を食するに結めて男女の類あつて姦盜殺妄等の種種の非法次第に而も起る。是事は阿含の中に廣く明せり。是より以來種種の族性種種の方俗あつて、種種の業煩惱の結を起し、種種の業生趣を成じ種種の五陰の身を造す。一切智人にあらざるよりは則ち其條末を究むること能はじ。諸の阿闍梨此喻を爲す、所以は一無明の心事に随つて離分すれば即ち阿僧祇の妄執と成ることを表せんと欲ふなり。

「越世間三妄執、出世間心生」とは、若し淨菩提心を以て出世間の心とせば即ち是れ三劫を超越する瑜祇の行なり。梵に劫跋といふに二義あり。一には時分、二には妄執、若し常途の解釋に依らば三阿僧祇劫を度して正覺を成ずることを得。若し秘密の釋ならば一劫を超越する瑜祇の行といふは、即ち是れ百六十心等の一重の麤妄執を度するを二阿僧祇劫と名く。二劫を超越する瑜祇の行といふは、又百六十心等の一重の細妄執を度するを二阿僧祇劫と名く。眞言門の行者復一劫を越ゆといふは、更に百六十心等の一重の極細妄執を度して佛慧の初心に至ることを得。故に三阿僧祇劫成佛と云ふ。若し一生に此三妄執を度すれば即ち一生に成佛す。何ぞ時分を論せんや。然も第一重の内に就いて最初に唯無我を解了する時を即ち出世間心生と名く。世間の六十心を度して我倒所生の三毒の根本を離るるを

【六識界】眼耳鼻舌身意の六識界なり。

【三果の學人】一來、不還、阿羅漢の三果の聲聞なり。

【無學聖人】緣覺なり。即ち第五住心に當る。

【下地の三執】聲聞地をば下地と云ふ。三執は三妄執なり。即ち根境界所起の三妄執なり。【十二因緣】六入行、識、名色、六入觸、受、愛、取、有、生、老死の十二なり。【稻芋】佛說稻程經一卷。譯者不明。

越三妄執と名く、復次に三妄執あり。所謂根境界淹留修行なり。根は六根、境は謂く、六塵、界は謂く、六識界なり。内外の十二界の如きは即ち是れ根境なり。故に合して之を言ふ。これは是れ三果の學人の所留滯の處なり。故に淹留修行といふ。復次に三妄執あり。所謂業煩惱の柱石と及び無明の種子となり。即ち是れ無學聖人の所斷最離斷處なり。凡そ三種の三妄執あり。

學摩訶衍の人、初めて出世の初心を得るは小乘の見道と適に齊し。然れども聲聞の正位に墮せず。爾る所以は彼れ初發心より即ち心性は但し我偶の爲に覆はれて未だ現前することを得ずと知るに由つて、爾時に諍に陰界人等は悉く緣より生じて無常變異なり。是中に何者か是れ轉ならんやと觀ず。是の如きの推求を作すとき即ち神の本不生を了し、無量の見觀を度して淨菩提心少分増明す。菩提心の勢力を得るに由つて、所以に二乘地に墮せず。然も彼行者法執あつて心に當つて若し禪定道品種種の諸度を修するるとき中に於て諸の我倒を起さずと雖も、而も心、禪慧等の法に住して稽留淹滯して遠に菩提に至ること能はず。如實の巧度にあらざるを以ての故に淹留修行と名く。然も亦積く下地の三執を離れて能く業煩惱の根本無明の種子十二因緣を生ずるを抜く。是の如きの甚深の法は有佛、無佛、性相、常爾なりと知る。前の所説の如く、建立の淨不建立の無淨等の種種の宗計皆相應せず。乃至長爪梵尼諸大論師等、自心の智慧利根にして諸法の實相を推求すれども皆亦圖度すること能はず。此十二因緣の義は「稻芋等の經」に廣く明すが如し。湛寂とい

【三獸】 兔、馬、香象。今は次で、の如く聲緣宮の三乘に喩ふ。此譬喩は優婆塞戒經の説なり

【辟支佛】 緣覺なり。

【清潭】 無生の空理。
【無量の寶王】 俗諦の功德、若し之を密教の人に約せば本有の功德なり。
【火宅】 生死界即ち欲、色、無色の三界に喩ふ。
【法障】 五蘊實有と執する妄見なり

ふは、寂は是れ不生の義、謂く、五根本の煩惱及び百六十の隨煩惱等皆畢竟不生なるが故に名けて寂とす。湛といふは是れ甚深の義、譬へば清潭萬仞にして澄恬鏡徹せるを之を臨み視るもの淺深を測らざるが如し。故に説いて三獸河を渡るに各足迹の所至の處に隨ふ。獨り大香馬王のみあつて能く漸次に深く入つて其源底に到ると云ふのみ。此中に三乘の人あつて同く無言説の道を以て諸法の實相を得。然も聲聞は法性に入ること最も淺し。故に生死を厭怖して自ら已に涅槃を得と謂つて滅度の想を生ず。辟支佛は所入甚深し。故に生死に於て甚だ念遠せず。然も方便力を以て大悲を發起すること能はず。菩薩は是の如きの法を悟る時即ち是心垢漸く除く。所以に淨心漸く現すと知る。爾時に便ち菩提心の勢力を得て能く不住の道を以て種種の度門を學す。故に同共一法の中にして而も昇沈異なることあり。

『經』に「一切外道、所不能知」といふは、此宗の中に兩種の外道ありと説く。外の外道は猶し清潭を覩見して、逆め怖畏を生じ、敢て習近せざるが如し。内の外道は能く其中に游泳して熱を適め垢を除いて清涼の樂を得と雖も、然も是中に無量の寶王ありといふことを覺らず。一は則ち入らずして識らず。二は則ち入つて而も識らず。故に一切外道不能知といふ。「先佛宣説、離一切過」とは、言はく、十方三世の諸佛は唯し此一門のみあつて群迷を誘進し火宅を出したまふ。この處は復障無く戲論生ぜず、故に種種の因量の諸師能く其過を出すもの無し。然も未だ法障を度せざれば未だ眞淨の菩提心と名けず。蓮華の已に濁

【四句】 四不生の
 ことし 物々自まり
 も生ぜず、他より
 も生ぜず、自他俱
 因より生ぜず、
 又無因より生ぜ
 ざるを云ふ。
 【精華】 六歳六境
 なり

【講處】 微塵なり
 【行位】 行位のこ

泥を離れたれども尙し未だ水を出でざるが如し。故に「經」に「彼出世間心、住蘊中」といふ。行者瑜伽の中に於て湛寂の心已に明顯なりと雖も然も事に涉るとき俱應證等猶尙し心に當るを以て有爲を厭怖するに由るが故に無爲の法に著す。然れども菩提心の勢力を以て自然に他教に由らず。是の如きの菩薩つて生ずることあり。能く道等に於て其心を發起して離著の方便を修するに五種の譬喩に於て無性空を觀察す。初の句に塵沫を觀察すとは水上の浮沫は日視つべく種種の影ありと雖も性質を推求するに了に不可得なるが如く色陰も亦爾なり。若しは魚、若しは網、衆緣より生ぜざることなし。緣生の生は無性なり、即ちこれ色の本不生なり。次の句に浮泡とは夏時の暴雨には水上に浮泡あり、亦但し衆緣に屬す。四句をもて之を觀するに都て起滅なきが如く受陰も亦爾なり。諸の苦樂等は善情塵和合に從つて生ず。從緣は無性なり。即ちこれ受の本不生なり。次の句に陽炎とは春月の地氣日光之に望むに水の如し、湛湛のもの企求の心を生じて著趣す。徒に勤めて去り之くに無きが如く、衆生も亦爾なり。緣起の性空を知らずして有法の想を生ず。若し實相を悟るは即ち想の本不生なり。次に芭蕉とは、人芭蕉の中の堅實を求めて乃至分分に之を披斬し隣虛に至るに亦不可得なるが如く、行數も亦爾なり。一微塵境に涉るに衆緣より生ぜざることを無し。緣生は無性なり。即ちこれ行の本不生なり。次に幻事とは世情の呪術藥力の人の心を迷惑して種種未曾有の事を現するが如く、識陰も亦爾なり。一念の無明より玄心初めて三界に出づ。其源本を究むるに、都て生滅去來なし。當に知るべし。衆緣より生ず

【聲聞經】小乘經のこと。即ち增一阿含及び雜阿含等には五喻を出せり。【性空】緣生無性なり。天台所立の空體觀なり。【六入】六大なり。【大般若】大般若經を指す。

るは自性なきが故に亦復本不生なり。「聲聞經」の中には此五喻を説くと雖も而も意は無我を明せり。今この中の五喻は意蘊の性空を明す。五蘊を觀するが如きは、當に知るべし。十二入、十八界、六入、十二緣等、皆廣く分別して説くべし。大般若の中の説の如し。行者かくの如く觀察するとき無性門より諸法の即空に達し、一重の法例を離れて心性了知することを得。是の如く蘊、界、處、能執、所執の爲に動搖せられず。故に證寂然界と名く。此寂然界を證するとき漸く二乗の境界を過ぐ。蓮華の未だ開敷せずと雖も而も稍く清流の上に出づるが如く、行者も亦爾なり。復心蘊の中に没せず、故に出世間心と名く。若し正譯に據らば當に上世間心といふべし。

「祕密主、彼離遠順、八心相續、業煩惱網」とは、前の所説の如く種子根境等及び三寶に歸依し、人天乘の爲に齋施の善法を行するを皆順世の八心と名く。若し三乗の初發道意より業煩惱の根本無明の種子の十二因縁を生ずるを抜くに至迄を遠世の八心と名く。或は見道修道等の諸位に就いて之を分つに、各自ら八心あるべし。大乘の行者諸蘊の性空を了達するが故に、一切法の中に於て都て所取もなく、亦所捨もなし。變べて遠順の八心と我蘊兩例二種の業煩惱の網とを離るるを是を一劫を超越する瓊紙の行と名く。瓊紙といふは譯して相應とす。若し女聲を以て之を呼ばば則ち瓊紙といふ。所謂相應とは即ちこれ觀行應理の人なり。常途の解釋に依らば是菩薩發心より以來た一大阿僧祇劫を経て、方にはのごときの寂然界を證す。今祕密宗には但し此一重の妄執を度する即ちこれ一阿僧祇劫を

超ゆるなり。行者未だ此劫を過ぎずして群支那の位と齊しきときを名けて極無言説處とす。爾時に心無爲の法相に滞る。若し方便を失すれば多く二乘地に墮し小涅槃を證す。然も菩提心の勢力を以て過つて能く悲願を發起す。此より以後三乘の経路始めて分る。然も所觀の人法俱空、成實諸宗と未だ甚だ難に絶えず、難し偏眞の理に約して此平等の觀を作すのみ。故に三乘の上中下の出世間の心を以て一偈紙劫に合論す。第二偈紙に至つて乃ち二乘と異なり。

【九】 以下は三劫の中の第二重を明かす。此中には他縁覺心住心あり。今の文は第六他縁大乘心の本指の義なり。

【阿陀那】 譯して執持と云ふ。
 【對治悉檀】 四悉檀の第三なり。
 悉檀とは世界悉檀爲人悉檀、對治悉檀、第一義悉檀なり。悉檀は成就の義なり。
 【濫方廣道】 大乘方廣不可得空と相濫するを云ふなり。

【九】 經に「復次祕密主、大乘行、發無緣乘心、法無我性、何以故、如彼往昔、如是修行者、觀察諸阿頼耶、知自性如幻、陽焰影響、旋火輪、乾闥婆城」といふは、即ちこれ第一二重に法無我性を觀することを明す。梵音に茶鉢羅といふは是れ無の義なり。亦これ他の義なり。所謂他縁乘とは、平等の大誓を發して法界衆生の爲に菩薩の道を行す。乃至もろもろの一闍提及び二乘の未入正位のもの亦當に種種の方便を以て折伏攝受して普く同くこの乘に入れしむべし。此無緣の大悲に約するが故に他縁乘と名く。又無緣乘とは此偈祇に至つて始めて能く阿陀那深細の識を觀察し、三界は唯心なり、心の外に更に一法として而も得べきもの無しと解了す。此無緣の心に乘じて而も大菩提の道を行す。故に無緣乘と名く。此無緣乘の心は即ち是れ法無我性なり。行者初劫に觀行を修せしとき心蘊の中に沒するを以ての故に五種の無性空門を以て法無我を觀す。然も縁生の中道に望むるは猶し對治悉檀に屬す。若し般若の方便を失すれば即ち斷滅に墮して惡取空のもの濫方廣道人と

【楞伽】 楞伽經第
 二卷、第八卷等。
 【解深密】 解深密
 經第一、第二卷等。
 【八識】 眼、耳、
 鼻、舌、身、意、
 末那、阿頼耶の八
 識なり。
 【三性】 遍計所執
 性、依他起性、圓
 成實性なり。
 【三無性】 諸法相
 無自性相、生無自
 性、勝義自性性。
 【大乘莊嚴論】 法
 相所依の六經十一
 部論の一にして十
 五卷あり。無著著
 薩の著なり。
 【求真實の頌】 上
 の論の中に四句の
 頌文あり。今は其
 中の前二句を引用
 す。
 【離二】 遍計所執
 【迷依】 依他起性
 【無說無戲論】 圓
 成實性なり。

名く。今大乘不可得空の相は空相も亦不可得なり。諸法は所有なしと觀すと雖も然も亦諸
 法に於て所空なし。故に離有離無の道を須つて法無我性を觀す。智障を淨除せんと欲ふが
 爲の故に古昔の諸の菩薩の修學に隨順して蘊の阿頼耶を觀す。即ち「楞伽」「解深密」等の
 經の八識、三性、三無性、皆これ此意なり。「經」に「知自性」といふは、即ちこれ三界唯心
 を知るなり。幻陽焰、影響、旋火輪、乾闥婆城の六喻の如きは皆これ變べて有無を結じて
 蘊の阿頼耶の別緣起の義を明すなり。前劫の上の五喻の無性空を觀する意と復殊なること
 あり。阿頼耶といふは義には含藏といひ、正翻には室とす。謂く、諸蘊の中に於て生じし、
 この中に於て滅す。即ちこれ諸蘊の巢窟なり。故に以て名とす。然も阿頼耶に三種の義あ
 り。一には分別の義、二には因縁の義、三には眞實の義なり。「大乘莊嚴論」の「求真實
 の偈」の中にいふがごとし。離二と及び迷依と無說無戲論とを以ての故に、知るべし三性
 俱に眞實なり。云ふ所の離二とは、謂く、分別性の眞實なり。能取、所取、畢竟して無なる
 に由るが故に。迷依とは、謂く、依他性の眞實なり。此に由つて、諸の分別を起すが故に。
 無說無戲論とは、謂く、眞實性の眞實なり。自性無戲論に由るが故に。次に求真實の譽喻を
 説く。偈に云はく、彼幻を起す師の如く譬をもて虛分別を説く。彼諸の幻事の如く譬を
 もて二種の迷を説く。釋して曰はく、幻師の呪術力に依つて木石等を變じて以て迷因とする
 がごとく、是の如く虛分別の依他性も亦爾なり。種種の分別を起して顛倒の因とす。又幻
 像の金等の種種の相貌顯現するが如く、是の如く所起の分別性も亦爾なり。能取所取の故

【偽】本論にはこの偽以下に六類あり。初四類は通計所執を、次二類は依他起を明かす。

に二迷初時に顯現す。次の偽に云はく、彼れ無體の如くたるが故に第一義に入ることを得、彼れ可得のごとくなるが故に世諦の實を通達す。此中の意の言はく、彼幻者と幻事との實體あること無きが如きは、此れ依他分別の二相の亦實體なきに譬ふ。この道理に由つて即ち第一義諦に通達することを得。又幻者と幻事との體亦得べきが如きは此をもて虚妄分別に譬ふること亦爾なり。此道理に由つて即ち世諦の實を通達することを得。又「偽」に云はく、

彼事無體の故に、即ち眞實の境を得
是の如く轉依の故に、即ち眞實の義を得

釋して云はく、若し人彼幻事無體なりと了すれば、即ち木等の實境を得。若し謂く、菩薩彼二迷無體なりと了して轉依を得る時に即ち眞實性の義を得るなり。又偽に云はく、

この事彼處に有なり、彼有體亦無なり

有體有なること無きが故に、この故に是れ幻と説く

此偽は幻事有にして而も非有なることを明す。何を以ての故に、有といふは、謂く、幻像の事彼處に顯現するが故に、非有といふは、謂く、彼體不可得たるが故に。是の如く有體と無體と無二なり。此義に由るが故に彼れ是を幻と説く。又偽に云はく、

無體、無體にあらず、無體にあらざるは即ち體なり

無體と體と無二なり、是故にこれ幻と説く

此偽は幻事非有にして而も有なることを明す。何を以ての故に、非有といふは、謂く、彼

【彼偽】本論には
二偽あり。

幻事無體なり。實體なきに由るが故に而有といふは、謂く、幻事、無體にあらす。像顯現するに由るが故に、是の如く無體と有體と無二なり。この義に由るが故に彼れ是を幻と説く。此幻は即ち諸蘊に譬ふ。この故に當に知るべし、虛妄分別は有にして而も非有なり。何を以ての故に、彼二影顯現すれども而も實體不可得の故に、故に色等の有體即ちこれ無體なりと説く。復次に虛妄分別は非有にして而も有なり。何を以ての故に、彼れ二つながら都て實體なけれども、然も影顯現することあるが故に、故に色等の無體と有體と無二なりと説く。この有と無と不二なるに由つて能く建立と誹謗と及び小乗の寂滅に趣くとを遮す。然る所以は、無體に由つて無體を知るが故に安立すべからず。有體に由つて世諦を知るが故に誹謗すべからず。又彼二つ別なきを以ての故に、體を厭ひ小涅槃に入るべからず。彼偽に又云はく、

幻像と及び取幻とは、迷の故に二ありと説く

是の如く彼二つ無けれども、而も二あることを得つべく

骨像と及び取骨と、觀の故に亦二と説く

無二なれども而も二と説く、得つべきこと亦是のごとし

前の偽の意の云はく、迷人は幻像と及び取幻とに於て迷を以ての故に、能取所取の二事ありと説く。彼二つ無しと雖も而も二を得つべし。迷に由つて顯現するが故に、後の偽の意の云はく、觀行人も亦爾なり。骨像と及び取骨とに於て觀に由るが故に能觀所觀の二事

ありと説く。彼二つ無しと雖も而も二つ亦得つべし。觀に由つて顯現するが故に。問うて曰はく、『是の如く觀じしつては何れの法をか所治とする。』故に彼復二偈を説いて云はく、

知るべし、所治の體は、謂く、彼法の迷相なり

是の如きの體無體にして、有と非有と如幻なり

知るべし能治の體は、念處等の諸法なり

是の如きの體無相なり、如幻なること亦是の如し

前の偈の意の云はく、何なるか所治の體、即ちこれ迷法の相なり。迷法の相とは、謂く、是の如く是の如きの體の故に然も是の如きの體は説いて有とすべし。虚妄分別に由るが故に亦非有と説く。能取所取の二體と非體と別なきに由るが故に、是の如く有も亦如幻なり。無も亦如幻なり。故にこの相如幻なりと説く。後の偈の意の云はく、能治の體は即ちこれ諸法なり。謂く、佛所説の念處等も是の如く是の如きの體の故に彼體も亦皆如幻なり。何を以ての故に、諸の凡夫の所取の如きは是の如く是の如き有體の故に、諸佛の所説の如きは是の如く是の如き無體の故に、是の如きの體は無相なれども而も佛世尊、入胎、出生、踰城、出家、成等正覺を示現したまふ。是の如く無相なれども而も影、顯現す。この故に如幻なり。問うて曰はく、『若し諸法同く如幻ならば何の義を以ての故にか一をば能治とし、一をば所治とする。』彼偈に答へて言はく、『譬へば強幻王の餘の幻王をして退かしむるが如く、是の如く清淨の法は能く染法をして盡さしむ。此義に由るが故に菩薩は衆行

【彼論】大莊嚴論なり。但し上には三性を明せども未だ頼耶の所具なりと云ふことを明しず。今はかの宗は頼耶の體について明せるを以て規範とす。

【唯識無境體法難解の空】三界唯一心外無別法をば唯識無境と云ひ、直ちに其體を空するが故に體法空と云ふ。

【〇】以下は覺心不生心を明かす。即ち弘法大師が十住心の第七住心を建立せしは此文を本據とせるなり。

【一轉の開明】他緣大乘より更に一轉向上したるの意【前劫】聲緣二乘なり。

を修すと雖も而も無所得なり。彼論に蘊の阿頼耶を觀察して自性如幻なりと了知すること
を明す。最も此經と符會せり、故に具に之を出だす。當に知るべし、陽燄、影響、旋火輪、乾
闥婆城も亦かくの如く廣く説くべし。前劫の五噓に泡沫、芭蕉あり、此中に論ぜざる所以
は、此三事猶し析法を帶して無性空を明せり。然も此中の幻燈等の喩の意は唯識無境、體
法難解の空を明す。即ちこれ龜相轉融するが故に論ぜざるなり。行者諸蘊唯心と解すると
きは即ちこれ法の自性を知る。未だ是の如きの自性を了せざるときには有所得に墮せんこ
とを畏るるが故に理を盡くして有を觀すること能はず。斷滅に墮せんことを畏るるが故に
理を盡くして空を觀すること能はず。但し有を見ることの明ならざるのみにあらず、亦
復空を見ることも未だ盡さず。今如幻等の門を以て有空不二を照らして、而も人法二空の
相亦心に當らず。乃ち眞に法空に入ると名く。唯識の性を悟るが故に。」

【二〇】『經』に「秘密主、彼如是、捨無我、心主自在、覺自心、本不生」といふは、心主は
即ち心王なり。有無に滯らざるを以て心に罣礙なく、所爲の妙業意に隨つて能く成ず。故
に心主自在といふ。心主自在といふは即ちこれ淨菩提心の更に一轉の開明を作して前劫に
倍勝せるを明すなり。心王は猶し池水の性の木より清淨なるが如し。心數は淨除すること
猶し客塵の清淨なるが如し。是故にこの性淨を證するるとき、即ち能く自ら心の本不生を
覺る。何を以ての故に、心は前後際俱に不可得なるを以ての故に。譬へば大海の波浪の縁よ
り起するを以ての故に。即ち是れ先にも無く後にも無し。而も水性は兩らず。波浪の縁よ

【阿字門】阿字の字即ち阿字門の字なり

【根本無明の上】起る無量の煩悩なり

【勝鬘經】寶性論三ノ九

【佛性】佛性論二ノ十九

【然れども上】來六云以下は第三劫を明かす

【二】以下正しく第三劫を明かす。中に於て初めに第三劫の無明を斷ずる位をもち、眞言の修業を示す。【佛教の菩薩】三乗教の菩薩。

【淨菩提心門】初見なり。

り起するときに水性は是れ先に無きにもあらず。波浪の因縁盡くるときに水性はこれ後に無きにもあらざるが如く、心王も亦復是のごとし、前後際なし。前後際斷ずるを以ての故に、後境界の風に遇うて縁に従つて起滅すと雖も而も心性は常に生滅なし。此心の本不生を覺るは即ち是れ漸く阿字門に入る。爾時に復百六十心等の塵沙の上煩惱の一重の微細妄執を斷るるを第二阿僧祇劫と名く。故に「經」に「知自心性、具足是、一劫證修行」といふなり。此中の無爲生死の緣因生壞等の義は、勝鬘寶性佛性論の中に廣く明すが如し。今且く宗義を明すが故に、詳に説かず。然れども上來は始を原ね終りを要むるに、一毫の善を積すより以て人法有無の二尊を超越するに至るまで、宗極極著にして轉轉深なりと雖も猶し是れ心外の垢を對治して、尙し未だ此心中秘密種種不思議の事を開かず。此より以後方に乃ち之を説くべし。若し此の如きの對端を作さずんば、則ち常情、各先習を、翫んで其微妙を覺ること難はじ。

【二】「經」に「復次覺密主、眞言門、修行菩薩行、諸菩薩、無量無數、百千俱胝、那由多劫、種集無量、功德智慧、具修諸行、無量智慧方便、皆悉成就」といふは、即ちこれ第三劫を超ゆるの心を明さんと欲して、見聞者をして信樂し尊重せしめんと欲ふが故に先づ其功徳を數すまくのみ。知るべし。餘教の中の菩薩の如きは方便對治の道を行じて次第に漸く心垢を除き無量阿僧祇劫を経て或は菩提に至ることを得るあり。或は至らざるものあり。今この教のもろもろの菩薩は即ち是の如きにはあらず。直に眞言を以て淨として淨菩提心

【心明道】 初地淨
善提心なり。心明
とは能證の智、道
證の道、即ち本不
生の理なり。

【輪王の太子】 金
輪王即ち佛地なり

【衆用】 衆德本具
即ち三十二相を具
備すること。

【四洲】 須彌の四
洲（東勝身洲、南
閩浮洲、西牛貨洲
北俱盧洲なり。）

【七寶】 金輪寶、
象寶、馬寶、如意
寶、玉女寶、居士
寶、主兵寶の七な
り。

【龍神兆庶】 龍神
は八部衆の隨一、
兆庶は數多の意。

【釋迦牟尼云】 法華經壽量品の文
をかりて云ふ。

大毘盧遮那成佛經疏卷第二

門に超入す。若し此心明道を見るときには、諸の菩薩の無數劫の中に修する所の福慧自然に具足す。譬へば人あつて舟車を以て跋渉し、險難惡道を経て五百山旬に達することを得。更に一人あつて直に神通に乗じて空を飛んで度す。その經過するところ及び至到のところ、則ち異なしと雖も、而も所乘の法に殊あるが如く、又世尊、先に廣く如上の諸の心相を説きたまふ所以は眞言門の諸の觀行人をして若し是の如きの境界に行至せんとし、則ち須らく明に識つて未到を到と謂うて中路に於て稽留することを得ざらしめんが爲なり。復次に輪王の太子の如きは初めて護育するるとき衆相備足して缺減するところ無し。未だ能く遍く衆藝を習ひ四洲を統御せずと雖も、然も已に能く七寶を任持し、聖王の家業を成就す。何を以ての故に、即ちこれ輪王の具體なるを以ての故に。眞言行者の初めて淨善提心に入ることも亦復是のごとし。未だ無數阿僧祇劫に於て具に普賢の衆行を修し、大悲方便を満足せずと雖も、然も此れ等の如來の功德皆已に成就す。何を以ての故に、即ち是れ毘盧遮那の具體法身なるが故に、これを以て『經』に「無量無數劫、乃至、智慧方便、皆悉成就」といふなり。又王子の始めて生ずるとき又已に龍神兆庶の宗歸するところなるが如く、初發淨善提心も亦復かくのごとし。已に天人世間の正道を迷失せるもの爲に大歸依と作る。若常途の諸論に明す所はこの心を證するときに能はざれば、『經』に「所謂出過、一切聲聞、辟支、聞緣覺その智力を盡せども、測量すること能はざれば、『經』に「所謂出過、一切聲聞、辟支、佛地」といふなり。以に行者この心を得るとき即ち釋迦牟尼の淨土毀せずと知り、佛の壽

【上行】法華經の千界地涌の無量の菩薩の上首に上行無邊行一淨行、安立行の四人あり。今は一をあけて他を含む。

【補處】等覺なり

【大威徳】梵釋等四王のこと。

【釋提桓因】須彌山頂の初利天即ち三十三天の主たる帝釋天なり。

【四天王】持國、增長、廣目、多聞の四天なり。これ共に帝釋天の外將なり。

【二】以下は空性の相を明かす。即ち弘法大師が第八住心を建立せし本據は此所に存するなり。

【前劫】第二劫なり。

【根塵】六根六境の十二處を云ふ。然して之に諸法を該攝するなり。

量長遠本地の身、上行等の從地涌出のもろもろの菩薩と一處に同會すと見る。對治道を修するものは遠補處に隣ると雖も然も一人をも識らず。是故に此事を名けて秘密とす。又この菩薩能く畢竟淨心の中に於て、普く十方法界の諸佛菩薩を集會せしめ、亦自ら能く普く十方に詣して諸の善知識を供養し正法を詢求す。唯し獨り自ら明了にして諸天人は能く知ること莫し。此因縁に由つて復秘密と名く、前二劫の中に二乘地を度すといふと雖も須菩提等猶し能く佛の威神を承けて人法俱空を宣説すと雖も、而も此秘密一乘に於ては心に驚疑を生じ、所纏を知らざれば乃ち直に聲聞辟支佛地を過ぐと名く。時に大威徳の諸天菩薩の心の所依處を見ざれども成く敬信を生ず。故に釋提桓因かくの如きの願を作して言さく、今この上人久しからずして成佛すべし。若彼れ成佛の時には、我當に吉祥草を奉るべし。四天王亦この念を生じて言さく、若此菩薩成佛のときには我當に鉢を獻すべしと。梵天王亦この念を生ず。若此菩薩成佛のときには我當に轉法輪を請すべしと。故に親近敬禮といふなり。

【二二】已に入眞言門の功徳を盡く竟んぬ。然も行者復何れの法を以てか此門に入るや。故に經の次に「所謂空性」といふ。空性といふは即ちこれ自心等虚空の性なり。上の文に「無量如虚空、乃至、正等覺顯現」といふ、即ちこの心を喻せり。前劫には萬法唯心にして心の外に法なしと悟る。今はこの心即ち是れ如來の自然智なり。亦これ毘盧遮那の遍一切身なりと觀す。心かくの如くなるを以ての故に諸法も亦かくの如し。根塵皆阿字門に入る。

【等虚空等云云】眞言の本有不生の功德なり。

【般若】大般若經の第三百五、三百六の兩卷なり。

【二二】以下は第九住心を明かす。弘法大師の第九極自性心を建立せしは之に依るものなり。
【前一劫】弘法大師は之を以て他緣一道の兩住心と見る。
【後二心】弘法大師は眞言門の根、究竟の二心と見る。

故に「離於根境」といふ。影像常寂滅光を出でず。故に無相といふ。心の實相智を以て心の實相を覺る。境智皆これ般若波羅蜜なり。故に無境界といふ。此中の十喻を前の十喻に望むに復戲論と成るを以ての故に、越諸戲論といふ。第三重の微細の百六十心の煩惱業壽の種を除いて復佛樹の牙生ずることあり。故に「等虚空無邊一切佛法依此相續生」といふ。既に因縁を壊せずして即ち法界に入る。亦法界を動せずして即ちこれ縁起す。當に知るべし。因縁の生滅は即ちこれ法界の生滅なり。法界の不生滅は即ちこれ因縁の不生滅なり。故に「離有爲無爲界」といふ。若は如來の出世にも、若は不出世にも、諸法法爾にして是のごとく住す。故に「離諸造作」といふ。『般若』の中にいふが如し。一切の法、眼に趣きぬれば是趣に過ぎず。猶し百川の海に趣きぬれば更に去處なきが如し。この故に當に知るべし、眼即ち是れ第一實際なり。第一實際の中には眼すら尙し不可得なり。何に況んや趣不趣をも、耳鼻舌身意も亦是のごとし。故に「離眼耳鼻舌身意」といふ。行者是の如きの微細の慧を得る時一切の染淨の諸法を觀するに、乃至少分、猶し隣虛の如きも縁より生ぜざるもの無し。若縁より生ずるは即ち自性なり。若し自性なきは即ちこれ本不生なり。本不生は即ちこれ心の實際なり。心の實際も亦復不可得なり。

【二三】故に「極自性心生」といふなり。この心を前一劫に望めば、猶し蓮華の盛に敷きたるがごとし。若後二心に望めば、即ちこれ果復つて種と成る。故に「如是初心、佛說成佛因故、於業煩惱解脫、而業煩惱具依」といふ。この中に佛說といふは世尊、十方三世の

【三劫の始終を云云】以下は寶藏の喻を取つて三劫を得ず。
 【始終】世間の八心
 【如意寶】第一住心
 【寶を別くる云云】第一、三住心
 【即ち之を識つて云云】四五住心
 【既ニ寶玉に近く云云】第六、七住心

佛を以て證としたまへり。言はく、此一事の因縁を以て衆生の爲に淨知見を聞きたまふ。其道玄に同なり。行者一切の業煩惱を解脱するとき即ち一切の業煩惱は佛事にあらざること無しと知る。本より縛あること無し。誰をして解脱せしめんや。良醫の毒を變じて藥と爲して用て業縛を除くがごとし。又虚茶の衆相を出過すれども前も萬像の具依たるがごとし。若此不思議解脱に住する時は即ち是れ眞の阿羅漢なり。有爲無爲に著せず一切世間に廣大の供養を受くべし。故に「經」に「世間宗奉常隨供養」といふなり。復次に「阿闍梨」この應供の義を明さんと欲ふが故に、一劫の始終を執論するに寶珠の譬喩を作す。猶し如意寶あつて石礦の中に在り。世人識らざるを以ての故に衢路の間に棄て在いて瓦礫と異なること無し。然るを寶を別くるものは、微相あつて眞に累の外に彰はるるを見て即ち之を識つて先づ利劍を用て眞石を鑿り去く。既に寶玉に近づきぬれば、具石漸く軟なり。復諸藥を以て之に食うて塵穢をして消化せしむ。而も復その質を傷らす。その時に龜垢已に除いて尚し細垢あり。既に洗ふに灰水を以てし、啗くに淨盥を以てし、種種の方便をもて之を瑩發す。既に光顯なることを得つれば之を高幢に置いて能く一切の所求に隨つて普く衆物を雨す。その時に世人奇特の想を生じてこの寶を尊重すること猶し大天の如し。能く希願を充滿するを以ての故に然も此寶は一時の間に於て普く衆心に應ひ具所得に隨つて各各差別なり。然も此衆物は寶の中に於て先よりありとせんや、先より無しや。若先より有りといはば即ちこの小球に何ぞ能く顯に衆物を藏めん。若先より無しといはば、又何ぞ能く顯に衆物を

【三歸】三寶に歸依する戒。即ち五戒、八戒、十善戒等なり。
【三種の三心】初劫の中の三經三妄能斷の智。

【神力を以て云云】善提心の本末に約して釋す。
【四】以下は十地の釋段なり。
【信解行地】密教にては淨信を以て證となすが故に十地を信解行地と名く。
【經宗】大日經宗なり。

を雨さんといはんか。即ち此世間の寶性すら已に不可思議なり。何に況んや衆生の菩提心の寶をや。この故に諸の善知識義に衆生の世間の八心の適めて前動するを見るとき即便ち是れ眞寶なりと識り曇るべきの理ありと知ること彼相者の會て多く名寶を識るを以て、この以に遇へば便ち之を識るがごとし、諸佛菩薩も亦爾なり、久しく已に觀り一毫の善より自ら大菩提の道に致ることを證知したまへり。この故に彼情機を鑑みて即ち人に歡喜して方便をもて誘進して三歸を受けしむ。前に已に分別して説くがごとし。雲へば彼頂石を收めて家中に置在くが如し。次に三種の三心を以て業煩惱の根無明の種子を抜くは利鐵をもて開き鑿つて其惡業を去るが如し。次に無緣乘の法無我性を觀するは漸く軟處に至り藥物を以て消化して、之を傷らざるがごとし、次に極無自性心を生ずるは灰水を以て塗拭して極光淨ならしむるがごとし、爾時に佛家に生ずるをば高幢に置在して種種の寶を雨すと名く。この因縁を以ての故に世間廣大の供養を受くるに堪へたり、若行者直に眞言門に従つて心寶を見ることを得るは仙人の咒術に善くして神力を以て之を取るが如し、巧拙難易不同なりと雖も寶を獲ること終に異路なし、故に此經に淺より深に至るまで廣く心相を明すことは、皆善提心の本末の因縁を開示せんが爲なり、若し常途の法相に依らば則ち諸佛大祕密我今悉開衍といふことを得じ。

【四】『經』に「祕密主、信解行地、觀察三心、無量波羅蜜多、慧觀、四攝法、信解地、無對無量、不思議、建立十心、無邊智生」といふは、此經宗は淨菩提心より以上の十住地は

【十住地】三賢位の中、十住には非ず。十地のことなり。

【諸波羅蜜】施、戒、忍、進、禪、慧、方、願、力、智の十波羅蜜なり。

【力】十力なり。

【無所畏】十無所畏なり。

【不共】十不共なり。

【十無盡界】衆生世界、虚空、法界、涅槃、佛出世、諸佛智慧、心所縁、起智、世間轉法輪の十不可盡なり。即ち華嚴經十地品の説なり。

【十大願】供養、受持、轉法輪、修行二、成就衆生、淨土、不離衆事、或正覺の十大願、即ち華嚴經十地品の説なり。

【四攝法】布施、愛語、利行、同事なり。

皆これ信解の中に行なり、唯し如來をのみ究竟一切智地と名く。華嚴の中にいふが如し。初地の菩薩は能く如來本行の所入を信じ諸波羅蜜を成就することを信じ、諸の勝地に入ることを信じ、力を成就することを信じ、無所畏を具足することを信じ、不可壞の自共の佛法を生長することを信じ、不思議の佛法を信じ、無中邊の佛の境界を出生することを信じ、隨つて如來の無量の境界に入ることを信じ、果を成就することを信ずと。是の如きの諸事に於て其心畢竟じて破壞すべからずと。復他縁に隨つて轉せざるが故に、信解行地と名け、亦は到於修行地と名く。觀察三心といふは即ち是れ因根究竟の心なり、若信解地を通論せば則ち是れ初地の菩薩は此虚空無垢菩提心を得るとき、自然に十無盡界に於て十大願を生じ乃至百萬阿僧祇の大願を満足す。此を以て即ちこれ菩提心を因とす。二地より以て去は大悲萬行を増修す。即ち是れ無盡の大願、十法界に於て根を生ずるなり、乃至漸次に增長して第八地に至るより以て去を皆方便地と名く。一理性論に云はく、八地以上は境界皆同なり、但し方便に約して階降を爲さまくのみ。若一一の地を觀すれば亦自ら三心あり、衆多の十因縁を以て初地に入ることを得るが如きを名けて因縁とす、既に安住し已つて種種の大悲萬行を以て是地を淨治するを名けて根とす。淨治地の果相と及ぶ方便の業とを説いて究竟と名く。餘は皆此に准ぜよ。此經の無量波羅蜜多四攝法といふは即ち是れ治地なり、行者これより待對あること無く心量を出過せる不思議地なり。十心あり無邊の智生ずといふは、即ちこれ初地の果相なり。『華嚴』に云はく、十大願を發し已つて、即ち利益心、

【三心】因、根、究竟の三なり。

【二心】最勝、決定の二心。

【金剛寶藏】本有常板の無盡の功德なり。即ち佛果の功德なり。

柔歡心、隨順心、寂靜心、調伏心、寂滅心、謙下心、潤澤心、不動心、不濁心を得。次に又十種の淨諸地の法を成就す。所謂信と悲と慈と捨と疲厭あること無きと、諸の經論を知らんと、善く世法を解すると、慙愧と及び堅固力と、諸佛を供養し教に依つて修行すると、復次に是地に住し已つて善く諸地の障を知り、善く地の成壞を知り、善く地の相果を知り、善く地の得修を知り、善く地の法清淨を知り、善く地の轉行を知り、善く地の處非處を知り、善く地の殊勝智を知り、善く地の不退轉を知り、善く一切の菩薩地を淨治し、乃至如來地に轉入することを知る。是の如き等の衆多の十心あり。若廣く分別すれば即ち百萬阿僧祇の度門あり。故に無邊智生といふ。更に前の三心に約して十心を作して之を説くべし。信解地を通論せば則ち初地を種子とし、三地を芽とし、三地を胎とし、四地を葉とし、五地を花とし、六地を果とし、七地を受用種子とし、八地を無畏依とす。所謂果中の果なり。九地をば進んで佛地を求むる慧生することありとす。これ最勝心なり。十地には此心決定せり。此二心は別の境界なし。還つて是れ第八心の中に於て方便に約して轉じて之を開出せまくのみ。若一一の地の中に亦自ら此十心を具す、且く初地に住するるとき諸地を淨治する法を成就すると及び諸地の相を知るとの如きは、即ちこれ先づ一地を解すること竟んぬ。これに藉つて因として智慧增長す。更に二地を解すること十心を以て類例して之を推して知んぬべし。『華嚴』に衆多の十法門あり。亦當にこれに准じて次第に廣く分別して説くべし。然も此經宗は初地より即ち金剛寶藏に入ることを得るが故に、

【阿耨梨の所傳】善無畏三藏の口訣

【金剛頂云】金剛頂經の十六大菩薩等の深秘の義を釋せば自ら當經所説の十地の深秘の義は知らるべしとの意。

【餘の無量の修多羅】華嚴、大集、寶積、般若、涅槃の五大部及び法華等の經典なり。

【無記心】緣起の事法を見ざるが故に。

「十地の經の一一の名音、阿闍梨の所傳に依らば皆頌く二種の釋を作すべし。一には諸經の釋、二には深秘の釋なり。若是の如きの密咒を達せずして但し文に依つて之を説かば則ち因縁の事相、十佳品に往き渉る。若し金剛頂の十六大菩薩生を解せば自ら當に諳知すべし。

「經に「我一切、諸有所造、皆依此、而得」といふは、如上の一切知地の無盡莊嚴の境界と及び餘の無量の修多羅に佛の稱したまふ所の一切の行果とは此に因つて之を得ずといふこと無し、この故に餘經には是の如く廣く娑羅樹王の華葉華果を敷す。今この經の中には唯し此樹王の種子及び空音の因縁を明せり、若此因縁を離れて能く彼果を成ずといはば是處あること無し。「六日經王」と稱する所以は此が爲にあらすや。「經」に復益を擧げて勸修して「是故智者、常思惟、此一切智、信解地、復越一劫、早住此地」といふは、即ちこれ初めて此信解地に入るなり。これ復百六十心の一重の細惑を越ゆるを三大阿僧祇劫を度すと名く。行者初めて空性を觀するとき、一切の法皆心の實際に入ると覺る。下衆生として度すべきを見ず。上諸佛として求むべきを見ず。爾時に萬行休息して究竟をなすと謂へり。若此に住するときは即ち退いて二乘地に墮せず、進んで菩薩地に上ることを得し、名けて法愛生とし亦無記心と名く。然も菩提心の勢力と及び如來の加持力とを以て復能く悲願を發起す。爾時に十方の諸佛同時に現前して之を勸諭したまふ。佛の教授を蒙るを以ての故に轉じて極無自性心を生ず。乃至心の實際も亦不可得なり。一切の業煩惱を解脫すと

雖も而も業煩惱具に存せり。此不思議地に至るを乃ち眞に二乗地を離ると名く。前の三句の義の中に就いて更に佛地を開きて上上方便心とす。此第四の心に至る時を究竟一切智地と名く。故に此四分の一に信解を度すと曰ふなり。

大毘盧遮那成佛經疏卷第二末終

大毘盧遮那成佛經疏卷第三

沙門 一行阿闍梨の記

入眞言門住心品第一の餘

【一】經に「爾時觀金剛、祕密主、白佛言、世尊、願救世者、演說心相、菩薩有幾種、得無畏處、乃至、當得一切法、自性平等無畏」と云ふは、猶し是れ前の心相の句を答す。

「金剛手、既に此教の諸の菩薩は直に眞言門に乗じて菩薩地に上ると聞くを以ての故に、世尊、此菩薩、道を行する時には幾く種の無畏處を得ることあると問ひたてまつる。」佛還つて復前の三劫に約して差降を作して對明したまふ。「梵音の阿濕縛婆、正譯には當に蘇息處といふべし。人の強力の者の爲に喉を扼せられて氣を閉ぢ將に悶絶せんとするに垂として忽に放捨を蒙つて還つて亦蘇ることを得るが如く衆生も亦復かくの如し。妄想業煩惱の爲に纏はされ縁に觸れて皆閉ぢらる。此六處に至るは再び生ずることを得るが如し。故に蘇息處と名く。亦險惡道を度る時その心泰然として畏懼するところ無きが如し。故に無畏處と名く。」佛言祕密主、彼愚童凡夫、修諸善法、善不善法、當得、善無畏」とは善の義は淺深に通ず。いまこの中の意は十善業道を明す。世人の如きは十善道の因縁を以て

【一】重ねて心相を答釋する文のうち、初めに六無畏を明かす。然してこれは眞言行者轉昇の次位を明かすものと知るべし。

【六無畏】善無畏、身無畏、無我無畏、法無畏、法無我無畏、一切法自性平等無畏の六を云ふ。

【金剛手既に云云】初めに問答の由をあげ、續いて問答の意をば大體に述べ。

【六處】六無畏處のこと。

【佛言祕密主云云】以下は如來答說の文を解釋す。然し

てこの文は最初に六無畏中の第一、善無畏を別釋す。三住心に相當す。【三途】地獄、餓鬼、畜生の三道を云ふ。

【經】に若知實知我云云。以下は第二、身無畏の別釋なり。これは小乗教の身受心法の四念處觀によつて心の扼縛を解脱する位なり。

【循身觀】行者の身を循觀して萬淨等の相を觀するなり。

【三十六物】次に出る五種不淨中の身、不淨より開く【五種の不淨】種子、住處、身體、自相、究竟の五種の不淨なり。

【經】に若於取蘊云云。以下は第三無我無畏を釋す。これは聲聞の行者の入空無漏の智を證する位。

惡趣に漂流して窮已あることなし。後に順世の八心を得。也漸く三歸戒を受け無量世に於て人天の中に生じ後に涅槃に至る。三途の劇苦を免離するを以て最初の蘇息處と名く。若し眞言行者初めて三昧耶に入り、三密の供養に依つて修行する位此と齊等なり。

【經】に「若、如實知我、當得身無畏」といふは、循身觀を修するときのごときは、此身は卅六物の集成するところ五種の不淨惡露充滿すと見て、終に此が爲に貪愛を生ぜず。次に復受心法を觀じて我性を觀ぜず。四種の顛倒を離るることを得るときには身の諸の扼縛に於て蘇息處を得、若し眞言行者本尊の三昧の衆相現前する時の位これと齊し。

【經】に「若於、取蘊所集我身、捨白色像觀、當得無我畏」といふは、謂く、唯蘊無我を觀ずるとき陰界入の中に於て種種に分析し推求するに我不可得なり。此自の色像を捨つとは、譬へば樹に因つて則ち樹の影現することあり、若し樹なきときには影なみに由てか生せんと云ふが如く、今五蘊すら尙し緣より生じて都て自性なし。何に況んや此積集の中に而も我あらんや。如上の所説に乃至湛寂の心を證して一切の過を離るといふは、是れ我の扼縛に於て蘇息處を得るなり。若し眞言行者瑜伽の境界一切分段の中に於て、能く心不可得なりと觀じて愛慢を生ぜざる位これと齊し。

【經】に「若害蘊、住法攀緣、當得法無畏」といふは、謂く、行者の心蘊の中に住する時、離著を發起せしめんと欲ふ。その時に幻焰等の喻をもて諸蘊の即空を觀察して違順の八心を離れ、寂然界を證することを得、然して蘊の扼縛を離れて法に於て蘇息處を得、法は謂

を離れ、寂然界を證することを得、然して蘊の扼縛を離れて法に於て蘇息處を得、法は謂

三劫中の第三劫にて十住心に就すれば第八、第九の二住心に當る。

【在經出經】 港悟なり。

【如來の五眼】 密共に五眼あれども、これは緣教所談の佛果なり。五眼とは肉、天、慧、法、佛の五眼なり。

【二】 以下は九句の答説中の第七修の句を釋する内に、初に十喻を明かす。十喻とは十緣生句のことなり。即ち上に註する十なり。

【然も此品云云】 然も此品の三種を明かす。

【三】 即空、即心、即不思議の三なり。これは次で、初に二、三劫の所觀なり。

今經文を見るに初劫には五喻、二劫には六喻、第三劫には十喻をあぐ。然し實際は三劫共

行、通達作證、乃至如實遍知、一切心相一といふは、是れ略して前の間の中の修行の句を答するなり。下の文の萬行の方便の中の如きは、此十緣生句に藉つて心垢を淨除せざるこ

となし、この故に當に知るべし。最も旨要と爲す。眞言行者特に宜しく意を留めて之を思ふべし。然も此品の中の十緣生句を結論するに略して三種あり。一には心蘊の中に没する

を以て實法を對治せんと欲ふが故に、此十緣生句を觀ず、前の所説の如く即空の幻これなり。二には心法の中に没するを以て境界の攀緣を對治せんと欲ふが故に、此十緣生句を觀

ず。前の所説の如く蘊の阿賴耶の即心の幻これなり。三には心、心の實際の中に没するを以て有爲無爲界を離れんと欲ふが故に此十緣生句を觀ず、前の所説の如く一切の業煩惱を

解脫すれども而も業煩惱の具依たり、即ち不思議の幻なり。「摩訶般若」の中の十喻に亦具に三の意を含ぜり。今この中に深修觀察といふは、即ち此意は第三重を明すなり。且く

行者豫觀の中に於て自心を以て感と爲す、佛心を應と爲して、感應の因緣即時に眞實那所意見の身を現じ所宜聞の法を説きたまふが如きは、然も我が心亦畢竟淨なり、佛心亦

畢竟淨なり、若し我心に望みては自と爲し佛心に即しては他と爲す、今この境界は自ら生ずとやせん、他より生ずるか、共より生ずるか、無因より生ずるか、「中論」に種種の

門を以て之を觀するに生不可得なり。而も形聲宛然として即ち是れ法界なり、幻と論ずれば即ち幻なり。法界と論ずれば即ち法界なり。遍一切處と論ずれば即ち遍一切處なり。

幻と論ずるが故に下可思議と名く。復次に深修と言ふは、謂く、淨心を得るより已去、大悲

に十喻宛あるなり。

【摩訶般若の中云】以下は大日經のみならず餘經にも又十喻ある事を明かす。

【毘盧遮那所意見】毘盧遮那は自性身、所意見は受用、變化、等流の三身なり。

【第三重】第三劫十喻。

【四諦】苦集滅道の四聖諦なり。

【一念】初地一念心。然して今は初地をあけて二地以上を兼ね。

【三法】有空中の三諦なり。

【源底】無盡法界の源底。

【無垢】第六、無畏。

【三】以下は十縁生句の別釋の文なり。

根を生ずるより乃し方便究竟に至るまで其間の一一の縁起皆當に十喻を以て之を觀すべし。所證轉深きに由るが故に深觀察と言ふ。且く四諦の義の如きは直に婆娑世界に已に無量無邊の差別の名ありと示す。又混んや無盡法界の中の返機の方便何ぞ窮盡すべき。今行者、一念の淨心の中に於て、是のごときの摩沙の四諦を通達す。空といへば即ち畢竟不生なり。有といへば則ち其性相を盡くす。中といへば則ち舉體皆常なり。三法は定相なきを以ての故に名けて不思議幻となす。四諦をいふが如きは、餘の一切の法門も例すべきのみ。是故に唯し如來のみいまして、乃ち能く此十喻を窮じて其源底に達したまふ。此經に無垢の菩提心に次いで即ち十喻を明す所以は、始終を包括し諸地を綜該するなり。既に縁に對れて觀を成す、縷さに續くべからず。今日く「釋論」に依つて其大歸を明すべきのみ。

【三】「經」に「云何爲十、謂如幻陽焰、夢影、乾闥婆城、響水月淨池、虛空花、旋火輪、乃至云何爲幻、謂如呪術藥力、能造所造種種色像、惑自眼故、見希有事、展轉相生、往來十方、然彼、非去非不去、何以故、本性淨故、如是眞言幻、持誦成寐、能生一切」といふは、佛藥力の不思議を説きたまへり。人藥力を以ての故に、空に昇り、形を隠し、水を履み、火を踏むが如きは、此事もろもろの論師等の能く因量を建立して其所由を出すにあらず。亦疑を生じて、定んで爾るべし或は爾るべからずと謂ふべきにあらず。是の如きの籌度の境界を過ぎたり。唯し觀し此業を行じて執持行用するもののみ。乃し證知する

【釋論に云はく云云】十論の中に於て今は初に幻を別釋す。

【四句】自、他、俱、無因の四不生なり。

のみ。又藥術の因縁をもて能造所造の種種の色像を显现するが如きは、衆縁の中に於て一に諦求するに都て生處なしと雖も、而も亦五情の所對に明了に現前す。展轉相生して十方に往來すと雖も然も亦去にあらす、不去にあらす、是事は亦籌度思量の境にあらす。【釋論】に云はく、「佛、徳女に問ひたまふ。譬へば幻師の種種の事を幻作するが如きは、汝が意に於て云何ん。是れ幻の所作内に有りや否や。答へて言さく、不なり。又問ひたまはく、外に有りや否や、内外にありや不や、先世より今世に至り、今世より後世に至るや不や、幻の所作は生者滅者ありや、不や、實に一法として、是れ幻の所作なるありや、不や。皆答へて言さく、不なり。佛の言さく、汝頗る幻の所作の、伎樂を見聞するや、不や。答へて言さく、我亦見亦聞く。佛の言さく、若し幻空ならば、欺誑にして無實なるべし、云何が幻より能く伎樂を作さん。女の言さく、大徳これ幻相は法爾なり、根本なしと雖も而も聞見しつべし。佛の言はく、無明も亦是の如し、内有にあらす、乃至生滅者なしと雖も、而も無明の因縁をもて、諸行生ず。若し無明盡くれば、行も亦盡く。乃至廣説せり。今この眞言門の持誦者に喩ふことも、亦復是の如し。下の文に廣く説くが如し。三密の修行に依つて一切奇特不思議の事を成ずることを得、一一の縁の中に諦求するに、畢竟じて四句を離れたりと法爾なることは是の如し。淨心に異ならずして、而も自在神變宛然として謬らず、此事は亦諸大論師等の聰辨利根のもの能く測量する所にあらす、獨り方便具足して悉地を成ずることを得るもののみあつて自ら證知するのみ。

【四】以下十論中の第一陽炎を別釋す。

【結使】迷妄に隨緣して生死の果を結集すること。即ち煩惱なり。

【人想等】想の字、論には相と有る。又等の字には我壽命等の相を含む。論には男相女相と云ふ。

【五】十論の中、第三の夢を別釋す。

【半呼栗多】一晝夜の十分の一なり。即ち一萬六千刹那に當る。

【四】『經』に「復次秘密主、陽能性空、彼依世人、妄想、成立所有談議、如是眞言相、唯是假名」といふは、『釋論』に云はく、日光に風塵を動するを以ての故に曠野の中に動ずること野馬の如し、無智の人初めて之を見て水と爲へり。衆生も亦爾なり。結使の煩惱の日光に諸行の塵雜憶念の風に動するをもて生死の曠野の中に於て轉ず。無智慧のもの謂つて一相をば男とし一相をば女とす。復次に若し遠くして之を見て謂つて以て水とす。近づけば則ち水の相なし。是の如く聖法に達きものは無我と及び諸法の空とを知らざれば陰界入の性空の法の中に於て人想等を生ず。若し聖法に近づけば則ち諸法の實相を知る。是時に虚誑種種の妄想盡く除く。其『經』の意の云はく、世人遠く曠野に望み、遠くして之に望むもの徒に此炎を見て炎の相に於て強ひて假名を立つれども其實事を求むるに都て不可得なるが如し、故に「妄想成立有所談議」といふなり。眞言行者、瑜伽の中に於て種種の殊特の境界乃至諸佛海會無量莊嚴を見るが如きは、爾時に此陽儀の觀をなし唯し是れ假名なりと了知して慢著を離るべし。轉心地に近づくと時には則ち加持神變種種の因縁は但し是れ法界の儀なりと悟るのみ。故に「如是眞言、相唯是假名」といふ。

【五】『經』に「復次秘密主、如夢中所見、晝日半呼栗多、刹地歲時等住、種種異類受諸苦樂、覺已都無所見、如是夢、眞言行、應知亦爾」といふは、『釋論』に云はく、「夢中に都て實事なけれども之れ實ありと謂つて、覺め已つて無なりと知つて還つて自ら笑ふ」が如く人も亦是の如し、もろもろの結使の眠の中に實なけれども而も著せり。道を得、覺る時

【種種の國土】淨穢倒側山崗河形等の國土を指す。
【衆生族類】六趣四生鱗蹄羽毛の昆蟲等を指す。

【普現色身】毘盧遮那普門法界所現の本體なり。

【六】以下十輪中の第四影の別釋。

乃ち無なりと知つて覺つて亦復自ら笑ふ。又眠力を以ての故に無法に而も法を見、無喜の事に而も喜び、無瞋の事に而も瞋り、無怖の事に而も怖るるが如く衆生も亦爾なり。無明の眠力の故に瞋喜憂怖すべからざるに而も瞋喜憂怖等を生ず。故に今復此夢事の不思議の邊を明す。夢中の如きは自ら住壽一日二日乃至無量歳にして種種の國土及び衆生族類あり。或は天宮に昇り、或は地獄に在つて諸の苦樂を受くと見る。覺むるときには但し一念の間なるのみ。覺心に於て眠法の因縁の中に四句をもて之を求むるに了に不可得なり。而も夢事照然として憶持して謬らす。一念を以て千萬歳とし、一心を以て無量境とす。此事は世間の智者の憶度壽量して能く其源底を盡くすにあらず、亦疑ふべきところにあらず、獨り夢みるもののみ。親り證知するのみ。今此眞言行者の瑜伽の夢も亦復是の如し。或は須臾の間に備に無量加持の境界を見、或は座を起たすして多劫を經、或は遍く諸佛の國土に遊び、親近し、供養し、衆生を利益す。此事、諸衆の因縁の中に觀察するに、都て所起なく、一念の淨心を出でず、然も亦分別すること謬らさず、此事誰か能く思議して其所以を出さん。然も實に獨り證するもののみ自ら知る、行者是のごときの境界を得んとき、但し當に夢の輪を以て之を觀じて心に疑惟せず、亦著を生ぜざるべし。即ち普現色身の夢を以て無盡莊嚴を作す。故に深修十句といふなり。

【六】「經」に「復次祕密主、以影喻、解了眞言、能發悉地、如面緣於鏡、而現面像彼眞言悉地、當知如是」といふは、この中に影といふは即ち是れ「釋論」の鏡中の像の喻なり。

【三】 大智度論云

彼一面に正しく、鏡中の像の如きは鏡の作にもあらず、面^{めん}の作にもあらず、鏡を執るもの
 の作にもあらず、自^{みづか}の作にもあらず、亦無^な因縁^{いんげん}の作にもあらず、何を以てか鏡の作にあらざる。
 若し面^{めん}だ鏡に到^{いた}りされば則ち像なきが故に何を以てか面^{めん}の作にあらざる。鏡なければ則
 ち像なきが故に何を以てか鏡を執るもの、作にあらざる。鏡なく面なければ則ち像なきが
 故に何を以てか自^{みづか}の作にあらざるとならば若し未だ鏡にあらず。未だ面あらざれば則ち像
 なし、像は鏡を得ち面を得つて然して後に有なるが故に亦無^な因^{いん}にあらずとならば、若し因
 縁なくば常有なるべく常無^{じょうむ}なるべし、若し鏡を除き面を除くも亦自ら出づべし。是を以
 ての故に因縁なきにあらず。當に知るべし諸法も亦復かくの如し。我不可得なるを以ての
 故に一切の因縁生の法は自在^{じざい}にあらざるが故に諸法は因縁に屬^{ぞく}するが故に自作にあらず。
 若し自^{みづか}あたれば像も亦無なるが故に他作にあらず、若し他作なりといふは則ち罪障力を失
 す、亦自作にあらず、二の道あるを以ての故に亦無^な因^{いん}にあらず、先世の業因と今世の善惡の
 行縁と是に従つて苦樂を得るが如く、一切の諸法必ず因縁あり、愚癡を以ての故に知らざる
 のみ少兒^{せうじ}の鏡中の像を見、心に在りて受^う苦^くす、失^うしに^しつて鏡を破して求索するに智人之を
 笑ふが如く、樂^{たのしみ}みを失して更に求むることも亦復是の如し、亦得道の衆人の爲に笑はると、
 今眞言門の中には、如來の三密の淨身を以て鏡とし、自身の三密の行を以て鏡中の像の
 因縁とし、惡業生することあるは斷し而像の如し、若し行者悉地成就の時より乃至五神通
 を起し住壽長遠にして、滿り十方の國土を見、諸佛の刹に遊ぶに至るまで皆この喻を以て

【三密淨鏡の身を
觀察す】道場觀、
入我入觀をなす
ことなり。

【七】十喻中、第
五の乾闥婆城の喻
を別釋す。
【乾闥婆城】譯し
て尋香城と云ふ。
假現の嚴飾せる宮
殿。

【聲聞經】小乘教
の經典のこと。

この事を觀察すべし、自より生ずるか他より生ずるか、若し他の三密の加持能く是果を授くと謂はば則ち衆生未だ修行せざる時も佛の大悲平等なり。何が故にか成就せしめざる。若し自の如説の行能く是果を得と謂はば何を用てか三密淨鏡の身を觀察して加持を求むるや。若し共より生ずるといはば二の過あり、何を以ての故に。若し我心を因とし彼衆縁を待つて方に成就することを得と謂はば、即ち此因の中に先より悉地の果ありや、先より無しとせんや、若し先より之あらば業縁則ち所用なし、若し先より之なくんば業縁復何の所用ぞ。然も是悉地成就は亦復因縁なきにあらず、故に「智論の鏡像の偈」に云はく、「有にあらず亦無にあらず、亦復有無にあらず。此語亦受けず。是の如くなるを中道と名く、彼小兒の妄に取著を生ずるが如くなるべからず、若し是の如きの觀を作すが故に、行者の心所得なし、戲論を生ぜざるが故に「應如是知」と曰ふ。

【七】「經」に「復次秘密主、以乾闥婆城譬、解了成就、悉地宮」といふは、「釋論」に云はく、日初めて出づる時城門樓櫓宮殿あつて行人出入すと見ゆ、日轉高ぬれば轉滅す。此城は但し眼に見るべきものにして而も實有なし、人の初めより未だ曾て見ざるに有つて意に實と謂ひ樂つて疾く行き之に趣くに近づくは愈失し日高ぬれば遂に滅す。飢渴悶極して熱氣の野馬の如くなるを觀て之を謂て水とす。復往いて之に趣き乃至之を求むるに疾極して所見なし、思惟して自ら悟んぬれば渴願の心思むがごとく行者も亦爾なり。若し智慧を以て我も無く實法なしと知る時には、是時に顛倒の願息む。「聲聞經」の中には此乾闥

【密嚴佛國】無量

の三密金剛佛徳を以て莊嚴せる佛國土を云ふ。即ち大日如來(自受用)の修生の智法身)の淨土なり。

【十方の淨嚴】十

方世界の佛國土即ち他受用身の淨土なり。

【八】十喻の中第

六の響を別釋す。

【憂陀那】丹田の

こと。臍の下二寸の所を云ふ。

婆城の喻なし、又城を以て身に喩へて此業縁は實有なり、但し城はこれ假名なりと説く。吾我を破せんが爲の故に菩薩は利根にして深く諸法の空の中に入るが故に乾闥婆城を以て喩とすと。此中に悉地宮といふは上中下あり。上は謂く、密嚴佛國、三界を出過して二乗の所得見聞にあらず。中は謂く、十方の淨土、下は謂く、南天修羅宮等なり。若し行者、三品の具明仙と成るとき、是の如きの悉地宮の中に安住せば當に此喩を以て觀察すべし、海氣日光の因縁をもて邑居巖窟にして層臺人物儼然として觀すべきが如く、彼愚夫の妄に貪著を生じて其實事を求むるには同すべからず、此因縁を以て種種の譬妙の五塵の中に於て淨心獲得するところなし。

【八】一經に「復次密言、以響喩、了眞言響、如縁聲有響、彼眞言者當如是解」と

は「一經」にいはいはく、若しは深山峡谷の中、若しは深池の淵の中、若しは空夫の舎の中に語言の響と相擊つとを以ての故に聲に從つて聲あるを名けて響とす。無智の人は謂うて實なりとす、智者は心念すらく、是聲は人の作すことなし。但し聲傳するを以ての故に更に響聲あつて人の耳根を誑す。人語せんと傳するとき亦響口の中に風あり憂陀那と名く、還り入つて臍に至り響を出すときに、頂及舌、齒、唇、舌、喉、胸の七處に觸れて退く、是を語言と名く。愚人は解せずして三處を生じ智者は了知して心に所著なく、但し諸法の實相に隨ふ眞言行者、若し輪迦の中に於て種種の八風の逆順の音を聞き、或はもろもろの聖者無量の法音を以て現前に教授し或は舌根淨に由るが故に能く一音を以て世界に遍滿

【密嚴莊嚴】諸法無
行經下に説く。
【九】十喻の中第
七の水月を別釋
す。

【密嚴海會】密嚴
は秘密莊嚴。海會
は衆多なり。

す。此もろもろの境界に遇ふとき亦當に響の喻を以て此を觀察すべし。但し三密の衆縁に從つて有なり。是事は生にあらす、滅にあらす、有にあらす、無にあらす、この故に中に於て妄に戲論を生ずべからず。その時に自ら音聲慧の法門に入るなり。

【九】「經」に「復次秘密主、如因月出故、照於、淨水、而現月、影像、如是眞言、水月喻、彼持明者、當如是説」といふは、「釋論」に云はく、「月虚空の中に在つて行くに影水に現す。實法性の月輪如法性實際虚空の中にあり。而して凡夫の心水には我我所の相のみ現することあり。又小兒水中の月を見て歡喜して取らんと欲す、大人これを見て則ち笑ふが如く、無智者も亦爾なり、身見の故に吾我ありと見、實智なきが故に種種の法を見る。見已つて歡喜して諸相を取らんと欲す。得道の聖人これを笑ふ。復次に譬へば靜水の中に月の影を見る。水を擾くときには則ち見えす。無明の心の靜水の中に吾我憍慢のもろもろの結使の影を見る。實智慧の杖をもつて心水を擾くときには則ち見えす。これを以ての故にもろく誑の菩薩、法は水中の月の如しと知ると説く。持明行者も亦是の如し。三密の方便に出つて自心澄淨なるが故に、諸佛の密嚴海會ごとく中に於て現じ、或は自ら如意珠の身を以て一切衆生の心水の中に於て現す。その時に諦にこれを想觀すべし。今此密嚴の相は我が淨心より生ずるか。佛の淨心より生ずるか。自他の實相すら尚し自ら畢竟じて不生なり。何に況んや相違の因縁をもて而も所生あらんや。又一切の江河、井池、大小の諸器に月も亦來らず。水も亦去らざれども淨月能く一輪を以て普く衆水の中に入るが如く、

我れ今亦復かくのごとし。衆生の心も亦來らず、自心も亦復去らざれども而も見聞して益を蒙ること皆實にして虚しからず。故に當に慧杖を以て之を撻て無實なりと知らしめ、彼嬰童の方便を作して、之を取つて以て玩好の具となさんと欲ふが如くなることを得ざらしむべし。既に能く自ら其意を靜め、復當に如如不動にして人の爲に之を演説すべし。故に

【十】十喻の中第八浮泡（泡）の喻を別釋す。
 【善問經】增一阿含經、雜阿含經等の經典に五藏の中の受を以て浮泡に喩ふる文を引く。
 【般若】大品般若經第二十二卷。
 【十句】初品十喻の文。

【十四の變化】初釋に二（初、微界）第二（微）に三（微）

【十】一經に「彼次秘密主、如天、降雨生泡、彼眞言悉地、種種變化、當知亦爾」といふは「聲聞」には受を以て浮泡に譬へ、「般若」の中にも泡を以て喩とす。實性なしと雖も而も因縁生じこれ實法なり。故に十句の中には如化のみあつて而も泡の喩を明さず。今この經の譬は意また殊なり。夏時の雨水のごときは雨水の中より滴りの大小に隨つて種種の浮泡を生じ、而も各異なり、然も水性は一味なれども自ら因縁となる。四句をもて推求するに別の所生の法なし。是故に此泡は、擧、縁に從ふ。泡の起りは即ち是れ水の起りなり。泡の起るは即ち是れ水の滅なり。故に是を以て即心の變化に喩ふ。行者即ち自心を以て佛と作つて、違つて心佛示悟の方便を蒙り、無量の法門に轉入することがとし。又心を以て曼荼羅を爲すに、此境心の興に縁となりて能く種種不思議の變化を作す。是故に行者浮泡の喩を以て之を觀じて自心を離れざることを了知す。故に差を生ぜざるなり。「釋論」に又云はく、修定のものに十四の變化あり。天龍鬼神亦能く化を作す。化生は先より定まれるもの無し。但し心生すれば便ち有なり。心滅すれば則ち滅するを以て是法は初中後なし。

界、初禪、二禪）
 第三禪に四（初界
 と初二禪）第四
 禪に五（欲界と初
 二三四禪）の十四
 變化心を云ふ。此
 の變化を能く八種
 の變化をなす。
 【四大河】屍伽河、
 信渡河、縛芻河、
 徒多河の四なり
 【二】以下は十喻
 の中第九虚空華を
 別釋す。

【種種の魔事】天
 台止觀に所謂魔事
 境、煩惱境、病患
 境等なり。

生ずれども是れ所從來なく、滅すれども亦所至なきが如く、當に知るべし、諸法も亦是のごとし。復次に變化の相の如きは、清淨なること虚空の染著するところなく、罪福の爲に汚されざるが如く諸法も亦爾なり。法性の如實際は自然にして常に淨なること、譬へば闍浮提に四大河あり。一一の河に五百の小河あり、以て眷屬とす。此水種種に不淨なれども大海の中に入りぬれば皆悉く清淨なるが如く、泡の喻と意同なり。

【二】「經」に「復次祕密主、如空中、無衆生無壽命、彼作者、不可得、以心迷亂故、而生如是、種種妄見」といふは、「釋論」に云はく、如虚空とは、謂く、但し名のみあつて、而も實法なし、虚空は可見の法にあらざれども遠く視るが故に眼光轉じて縹色を見る。諸法も亦是のごとし、空にして所有なければども人無漏の實智慧に遠きが故に、實相を棄てて彼我、男女、屋舍、城郭等の種種の雜物を見る。心著すること小兒の仰いで青天を視て實色ありと謂ふが如し。人あつて飛び上ること極遠なれば而も所見なし。又虚空の性は常に清淨なれども人陰障を謂つて不淨とするが如く諸法も亦是の如し。性常に清淨なれども姪欲瞋恚等の障の故に人不淨なりと謂へり。此經に心迷亂といふは、人疾病非人等の種種の因縁を以て、其心迷亂して妄に淨虚空の中に種種の人物形相ありと見て、或は怖畏すべく或は貪著すべきが如し。若し本心を得るときは則ち此事生ずる時にも虚空を染せず。滅する時にも亦過つて淨なるにあらず。本來た虚空を碍へず、亦空に異ならずと知る。行者觀行を修するるとき、若種種の魔事、種種の業煩惱の境あらば皆當に心を此喻に安じて淨虚空の

【二】以下十箇の中、第十箇火輪の別釋をなす。

【愚少】愚癡なる小兒なり。

【廣轉無礙】諸法不生の故に廣轉自在なり。

【結使の煩惱】人法・法なり。

【火燄】燄は焦なり。

如くすべし。無量劫の中に於て地獄に處すと雖も、爾時に意軍亂なきこと、神通を得るもの空一顯色の中に於て自在に飛行するがごとくして、人法妄想の爲に塵汚せられず。

【二】「無」に一復次秘密主、譬如火燄、若人觀持、在手而以、旋轉空中、有輪像生」といふは、人の火燄を持って空中に旋轉して種種の相を作すこと或は方、或は圓、三角、半月、大小、長短、意の所爲に隨ふ。愚少は之を觀て實事と以爲て念著を生ず。然も實には都て法住すること無し。但し手中の速疾力、能く一火を速くで無量の相を成ずるが如きのみ。眞言行者若論偈の中に於て心の所運に隨つて成就せざること無し。乃至一の阿字門に於て旋轉無礙にして無量の法門を成ず。爾時に當に斯觀を造すべし。但し淨菩提心の一體速疾力の功用の然らしむるに由つて、中に於て種種の見計を作し、勝妙なりと爲うて而も戲論を生ずべからず。「釋」には火輪の喩なり。別に影の喩あつて云はく、影の見るべけれども、而も捉るべからず。如く、世法亦是の如し。眼耳鼻、見聞覺知すれども實には又影の光を映ずるときには則ち現れ映せざれば則ち無きが如く、諸の結使の煩惱、正見の不可得なり。光を遮るときには則ち我相法相あり。又影の、人去れば則ち去り、人動すれば則ち動じ、人住すれば則ち住するが如く、善惡の業の影も亦是の如し。後世に去るときには亦去り、今世に住するときには亦住す。報酬せざるが故に罪福熟する時には則ち出づ。然もこの影は物にあるにあらず。但しこれ誑眼の法なり。火燄を旋らして疾く轉すれば輪と成れども、亦實有にあらざるが如しと、喩の意大いに同なり。

【二三】この段は行を勤じ、修め、勤むる釋文にして最初に六句を釋するなり。

【この十喻は云云】大乘句。

【心の實性には云云】心句。

【如來の智慧は云云】無等等句。

【諸佛の云云】諸佛の云云。

【この中道正觀云云】正等覺句。

【深修觀察を云云】漸次大乘生句。

【心の實性】唯心に約す。故に第六觀心に當る。

【心佛】第五句の正等覺顯現は第八住心を指す。今は第九住心を指す。

【定、力、覺、道、禪、解脫】序の如く、五根、七等覺支、八正道支、四禪、八定、八解脫なり。

【法界門】十佛刹座數の諸尊の内證三摩地を指すなり。

【二三】「秘密主、應如是、了知、大乘句、心句、無等等句、必定句、正等覺、漸次大乘生句」とは、梵音には句を謂つて鉢曇とす。義前に釋するが如し。此十喻は皆これ摩訶衍の人の甚

深の緣起なり。聲聞緣覺の安足の處にあらず。故に大乘の句と名く。心の實性には更に一

法として以て之を顯示すべきものなし。亦人に授くべからず。但しかくの如く深く觀察す

るとき降蓋雲披れて自ら當に證知すべきのみ。故に心の句と名く。如來の智慧は一切の法

の中に於て譬類すべきもの無く亦過上なし。故に無等等と名く。而も心の實性は、これと喩

蓋相稱して間として異際なし。故に無等等と曰ふ。若し緣生を以て心處を了知するときに

は則ち其中に安住す。故に無等等の句といふ。諸佛の十緣生の義を以て必定師子吼して

如來性の心の實相印を説きたまふ。若し能く信解するものあらば、假使十方世界の一切の

諸魔皆化身作佛して相似の般若を説くとも、亦その心を變易して法相をして是の如くなら

ざらしむること能はじ。故に必定句といふ。この中道正觀を以て有爲無爲界を離れ、極

無自性、心生ずるは即ちこれ心佛の顯現なり。故に正等覺の句といふ。深修觀察を以ての故

に大海に入るに漸次轉深なるが如く、乃至毘盧遮那上上智觀を以て方に能く其源底を盡し

たまふ。故に漸次大乘生の句といふ。當に知るべし是の如きの六句は次第相釋し、次第相生

するなり。毘盧遮那即ち此十緣生句の不思議法界を以て無盡莊嚴藏を作したまふ。十世界

微塵數のよろもろの法界門より常に根、力、覺、道、禪、定、解脫の諸寶を出生して遍

く衆生に施したまふに猶尙し置しからず。故に具足法財といふ。一切如來の智業これに由

つて具足す。故に出、生、行、種、工、巧、大、神、慧、といふ。若一念の心中に於て明に十縁生の義を
 見るときには明ら上無盡法界を窮め、下無盡衆生界を極めて其中の一切の心相皆能く了了
 に覺知す。持縁より起するを以て御察、即假、即中なるが故に、故に「如實遍知一切心
 相」といふ、阿闍梨の言はく、行者荷めて觀行を修して、境界現前するとき内因外縁の
 力に由るが故に自然に緣起智生することあり。常途の習定の功力、苦に至つて而して後に
 通徹するには同也。

【持法者】一には
 兼猛と云ひ、一には
 は龍智と云ふ、即ち
 大本を略して三千
 餘頌となすの
 人を指すなり。

梵本の中に此より以後は、次に眞言者の持誦の次第如法の悉地如法の果生することを説
 くと。此はこれ持法者の所記なり。故に經の中に於て具に其大意の言を出さず。已に淨菩
 提心の諸心相を説き竟んぬ。これより以下は、進修の方便及び悉地の果生することを明す
 なり。

大毘盧遮那成佛經疏終

此秘釋一卷覺護上人興教大師がよ空三藏の口訣によつて苦練修行し餘蓋障三昧を獲得せし覺悟の内證をば衆生を哀愍の餘り製作したるものにて、眞言宗正所被の大小二機を攝して卽身成佛の要路を開示し又廣く縁の傍機のためにも順次往生の要道を指導せるものなり

【一】以下は序詞。
 【二七】の曼荼羅
 【二七】とはアビラウケン、ツンアマミリタテイヒイカラウンの十四字の梵字(悉曇)を指すものにて此の内、初めの五字(アビラウケン)は大日如来普門法界の法曼荼羅、後の八字(ツンアマミリタテイヒイカラウン)は阿彌陀如来一門の法曼荼羅なり

【總見】二七の眞言の色塵の文字を

五輪九字明祕密釋一卷

亦是頓悟往生秘觀と名く

興教大師撰

【一】竊に惟れば二七の曼荼羅は、大日帝王の内證、彌陀世尊の肝心、現生大覺の普門、順次往生の一道なり。所以何となれば、纔見鏡聞の類は、見佛聞法をこの生に遂げ、一觀一念の流は離苦得樂を卽身に果す。況やまた信根清淨にして慇懃に修行すれば、これ卽ち大日如来の覺位、證得を反掌に取り彌陀善逝の淨土、往生を稱名に期す。稱名の善猶かくの如し。觀實の功德豈虚からんや。顯教には釋尊の外に彌陀あり。密藏には大日卽ち彌陀、極樂の教主なり。當に知るべし。十方淨土は皆これ一佛の化土、一切如来は悉くこれ大日なり。毘盧彌陀は同體の異名、極樂密嚴は名異にして一處なり。妙觀察智の神力加持を以て、大日の體の上に彌陀の相を現す。凡そ是の如きの觀を得れば、上諸佛菩薩賢聖を盡し、下世天龍鬼八部に至るまで、大日如来の體にあらざること無し。五輪門を聞いて自性法身を顯はし、九字門を立てて受用報身を標す。既に知んぬ、二佛平等なり。豈終に賢聖差別あらんや。安養都率は同佛の遊處、密嚴華藏は一心の蓮臺なり。惜いかな古賢難易を西土に諍ふこと、悦ばしいかな今愚往生を當處に得ること、重ねて秘釋を述ぶる意ただ此にあり。往生の難易、有執の然らしむるなるのみ。

見聞すれば文字般若の兼習力に依つて阿頼耶の心田に淨菩提心の精華種子を植うる故に罪障消滅して現世に利益を得ると云ふなり。

【善惡】如来に同じ、佛の十號中の一なり。

【善惡華嚴】眞言宗にて十方淨土の總攝を智に約すれば(金剛界)密嚴淨土と云ひ、理に約すれば(胎藏界)蓮華藏世界と云ふ。

【十門あり】以下十門中の第一門を指す。

【八萬四千】五根本類番を攝めとして五變再數すれば百六十心となり、これを又九品に約して總分すれば八萬四千の煩惱となる。

【四重八重】四重とは邪淫、偷盜、

【二】方に今この眞言を釋するに、略して十門を作す。擇法權實同趣門、正入秘密眞言門、所辨功德無比門、所作自成密行門、總修一行成多門、上品上生現證門、覺知魔事對治門、即身成佛眞行門、所化機人差別門、發起問答決疑門。

【一】第一に一擇法權實同趣門とは、若この最上秘密不二大乘に入て修行せんと欲するものは、先づ深く深般若の心を發起すべし。然して後に當に秘密の行を修すべし。若善男善女あつて總にこの門に入れば、則ち八萬四千の迷軍は黨を牽して歸伏し、一百六十の豪賊は作を引いて逃走す。四重八重の群由は風に隨つて飄去し、三障五障の衆海は波に隨つて消滅せん。これに由て法體生死の業縛は解脫を刹那に證し、沈淪苦海の因縁は破壞を須臾に壞す。加之、五種有爲の妄風は無はざるに自滅し、三部無相の覺寶は求めざるに忽ち得。眞に妙ならざるんや、快からざるんや、是の如きの深義、何れの經論に依てか此心の義を説くや、頗に口はく、

佛道權實の岐を偷擇して、劣を捨て勝を取るを勝義と名け

法界淺深の區を分別して、妄執を起すこと無きを般若と稱す

自性法身遍照尊、受用變化諸佛陀

金剛薩埵妙德尊、古佛龍尊菩薩等

かくの如きの變化の佛菩薩の、所説の經論に分別して説きたまへり

若頓悟成佛せんと欲するものは、眞當にこの心に依て修行すべし

雜生、妄語にして
 八重とは摩訶、八
 事、覆藏、比丘を
 隨順被擧、比丘を
 四重罪に加へたる
 ものなり。然して
 四重禁戒は比丘尼
 の戒なり。
 【三障五障】見思、
 塵沙、無明(三障)
 煩惱障、業障、生
 障、法障、所知障
 (五障)
 【問ふ佛道云云】
 佛道の數を十住心
 の順序に配列す。
 【問ふ前の云云】
 十住心中の前九と
 第十との差別を明
 す。即ち顯密對辯
 す。
 【教道の佛】教道
 の佛と證道の尊
 との別は顯教には
 成佛の說も衆生
 教化のために説く
 ものなれば眞實の
 成佛ならざるが故
 に教道と云ふ。こ
 れに對して密教は
 實に成佛する故に
 證道と云ふ。

問ふ佛道に何等の數あつて、幾くか權、幾くか實、何れか淺、何れか深なる。頌に曰く、

異生羗羊は惡に耽る基、愚童持齋は善を修する始め

嬰童無畏は即ち天乘、唯蘊無我はこれ聲聞

拔業因種は緣覺の城、他緣大乘は法相の家

覺心不生は三論の宗、一道無爲は法華の宮

極無自性は華嚴の教、祕密莊嚴は眞言の法なり

前の九の住心を淺權と名け、後の一の心佛を深實と號す

各妙覺と稱すれども實の佛にあらず。水中の圓鏡何の實かあらん

並に圓教と名くれども皆半乘なり。池上の玉泡その眞なし

淺より深に向ふ次第の路は、劣を捨て勝を取る相續の位なり

問ふ、前の九種の教道の佛と、後の一種の眞言證道の尊と、何の差別がある。頌に曰は

顯佛は俱に無明にして明にあらず、密佛は迷妄を盡くして餘なし

顯教は應化二身の說、密教は法身一佛の說なり

顯教は隨他意の教を立て、密は判じて隨自意の教と爲す

顯教は方便權施の教、密教は眞實理盡の教なり

【四五】 四は四種法身、五に五種法身なり。
【五】 無量の法身を立つること。

【四分】 佛果を證する所の境界、即ち四門なり。
【果分】 佛果の境界、即ち絕對門なり。

【一心眞如】 眞如は心す色來。
【二密】 密教は色心不二なり。

【四弘】 願教は四弘誓願を立つ。即ち衆生無量阿僧祇劫、法門無量阿僧祇劫、佛道無量阿僧祇劫。
【五密】 密教には

願教は三劫を経て成就し、密教は一生に佛道を證す

願は一二の法身の名を盡き、密は略すれば四五、廣すれば無際なり

願は一分の理を盡くに似たり、密は事理俱密の如を盡く

願は密格門の義を盡くに似たり、密は兼て具に法表の徳を盡く

願教をば名けて散善門と爲す 眞言は唯三摩地を盡く

願は四分可證の境、眞言は果分可證の境なり

願教は修行種因論、眞言は性修圓滿論なり

願は一心眞如の本を説き、密は三密平等の行を盡く

願は二心眞如の一心を説かず、密は無量の一一心を説く

願は無量の如を説かず、密は重重無量の理を盡く

願は理を以て衆色の本と爲し、密は色を境せずして是れ理なりと説く

願は理を定めて言詰なしと説き、密は理に無量の語ありと説く

願教は法身說法せず、密教は四身同く說法す

願は四弘を説いて行願を盡し、密は五誓を立てて行願と爲す

願は法身獨にして眷屬なし、密は四種法身の伴を具す

願は理智の佛に利生なし、密は信に三世に衆生を度す

願佛は一眞如の理を證し、密は過遠重重の理を證す

五大願を立つ。即ち衆生無邊誓願、度福智無邊誓願集、法門無邊誓願覺、如來無邊誓願事、菩提無上誓願證。

【四印】六、三、法、親の四種曼荼羅なり。

【五相】五相成身觀のこと、通達菩提心、修菩提心、成菩提心、證菩提心、佛身圓滿なり。

【一觀成佛】菩提心のみを憑じて成佛すること。

【四】十門中の第二門を釋す。之に三門あり。

顯は重障を具すれど佛を見ず。密は設ひ具すと雖も必ず佛を見る

顯は智觀にあらざれば成佛せず、密は唯呪を誦じて亦成佛す

顯宗は菩薩人師の說、密藏は四種法身の說なり

顯教は正像末の興廢あり。眞言は常住不變の教なり

顯教は因緣所生の法、密教は法爾自性の法なり

顯教は多名句を以て一を説き、密は一字門に諸義を合す

顯教は他受應化の說、密教は自受法樂の說なり

顯は理事多の義を説き、密教は俱同俱別の談なり

顯教は鏡に字相門を説く。密教は字相字義の理なり

顯は四印を説かず密は説く。顯は五相を説かず密は説く

顯は五智を説かず密は説く。顯は六大は淺く密は深廣なり

顯は三密に暗く密は明明なり。顯は三部に暗く密は能く達す

顯は兩界を闢し密獨説く

顯は一觀成佛の義なし、顯は觀字成佛の門なし

顯は結印成佛の義なし、顯は五百塵點の始を指し

密は本不生の成道を談す。如上の差別を勝義と名く

【四】第二に「正入祕密眞言門」とは此に三門あり。一には身密修行門、二には語密修

【語密修行門につ
いて云云】三門中
の第二語密門を釋
す。然して此門に
又三門あり

【二總攝其力】一
即ち六大法界體性
を云ふ。六大は一
切法に周遍して平
等無碍なるが故に
一と云ふ。六大
體性三摩地に住す
れば心傳樂生平等
なるが故に遠疾に
成佛するなり。故
に此三昧の力用を
示して遠疾力と云
ふ。

【日く法身門とは
五智法身門を指
す。即ち以上の語
密修行門の中に語
字門、觀字門、解字
門の三門あり。そ
の文解字門の中に
は略有各各字義と
總攝法界法身門と
あり。今の五輪五
智法身門とは、初め
の二門の内、初めの
略釋各各字義門

【語密修行門につ
いて云云】三門中
の第二語密門を釋
す。然して此門に
又三門あり

行門、三には意密修行門なり、今且く語密修行門について亦三門あり。一には誦持門、二には觀字門、三には解字門なり。誦持門とは慧にその明を暗誦して文句をして謬誤せしめざるが故に。觀字門とは明の字字の真相を觀するが故に鼻端の字字を觀じて後夜分に於て菩提を得るが如くなるが故に。解字門とは一一の字門の如實の義門を解了するが故に。この解了字義門の中に就いて亦分ちて二と爲す。一には略釋各各字義門、二には總攝法界法身門なり。初は五輪五智法身門、後は九字九品報身門なり。日く法身門とは摩訶毘盧遮那本地法身、一切如來一體遠疾力三昧に入て法界體性三昧を説いて曰はく、我本不生を覺り語言の道を出過し諸過解脫を得。因縁を遠離し空は虚空に等しと知る。又毘盧遮那佛略伏四魔金剛三昧に住して四魔を降伏し六邊を解脫する滿足一切智智金剛の句を説きたまふ。スモサマアアアアアア又云、この五字は即ち是れ四魔降伏する眞言の句なり。初の句は歸命三寶等の義、次字は是れ行の義、本不生なり。傍の二點はこれ淨除の義、能く四魔を降伏し一切の苦を防ぐ。廣く釋すること下の如し。地の萬物を生ずるが如く咒字大地の六度萬行を出生することも亦復是の如し。地とは堅固の義なり。大菩提心堅固不退にして必ず萬徳の果を結ぶ。若し眞言行者、投華を得る時に於て咒字の心地本有の菩提心の上に於て解覺の菩提心の種を播きて永く痲病等の横障の因を離れて速に無上菩提に至る當に知るべし、この人は一字頂輪王の種姓なり。故に己身を離んせしめて菩提の行を行すべし。この眞言法に於ては擬謗の逆緣猶三乘教の隨行に勝れたり。何に況んや投華を

に當る。
【投花】 萬行修生の花。

【八萬の塵勞】 八萬四千の煩惱。

【四涅槃】 本來清淨涅槃、有餘依涅槃、無餘依涅槃、無住處涅槃の四涅槃を云ふ。

【五大五輪】 五大(大は無邊の義)即五輪なり。(輪は圓滿の義)五輪即六大法界なり。六大は十界に周遍して毫も漏らす所な

得るをや。何に況んや修行の行人をや。これ則ち須字生長の義なり(須字はこれ縛なり)。畫はこれ無礙三昧なり。即ち不思議解脱なり。夏字は水大、能く煩惱の塵垢を洗つて心身精進して菩提の萬行散亂せず。夏字は水大不散の義、これ則ち性徳圓海なり。夏字は六根を淨むる義、能く業煩惱の薪を焼いて六根の罪障を淨除し菩提の果を證す。泰字に三義あり、夏字なり、具には卽字義の如し。また三解脱門なり、風大の能く輕重の塵垢を掃ふが如く、夏字の風大も能く八萬の塵勞を掃つて四涅槃の理を證す。夏字因縁の風止息する時これを大涅槃安樂と名く。須字は天空の義、周遍法界等空無礙の義なり。空大の能く萬有を障へずして生長するが如く須字の空大も淨穢の國に遍じて能く凡聖の依正を成ず。善無畏三藏の云はく、金剛頂の肝心、大日經の眼精、最上の福田、殊勝の功徳、ただ五字金剛の眞言にあり。若受持することあれば所獲の功徳、比量すべからず。永く災障及びもろもろの病苦なく重罪を消滅し衆徳を雲集す。又父母所生の身に速に大覺の位を證す。若日に一遍を誦じ或は二十一遍乃至四十九遍を誦す。一遍を授量するに藏經一百萬遍十二分教を轉するが如しと。これ眞言の能讀の文なり。

五大、五輪、六大法界、十界輪圓、一切衆生、色心實相、自身成佛の圖に云はく、

盡上方世界

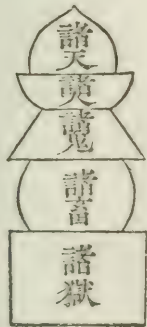
安立器世界

盡下方世界

を五の報智はな身如この衆なし、
 示は各義なとの依り成來六の故生り、
 ず。各をる正の正。佛。大色に。故に
 五。具示は報を不世。本が心實六に
 智。五。し依と示二界依。成。が即の相大十
 の。大。正。地。す。各。具。の。本。に。大。相。り。一
 義。各。二。の。依。五。國。佛。自。日。た。る。切。回



大曼



五趣



法曼



三曼



上方

下方

豎三世
 橫十方

五輪を五部と爲し、
五部を五智と爲し、
五智を五方と爲す。



空輪の二點は肉髻なり。



曼羯



智拳印は金剛界を標し、定印は胎藏界を標す。これ兩部不二の曼荼羅なり。

右五輪の名また頂輪、面輪、胸輪、腹輪、膝輪と名くるは行者によつて名を立つ。金剛界には「字」の一字を以て變じて五輪を成じ、胎藏界には「形」の一字を以て五輪を現す。或は共じて「五」の字を以て五輪世界を成す。若行者に約せば白淨信心を以て五輪の種子と爲す。白淨信心とは淨菩提心なり。これ則ち如實知自心なり。堅には十重の淺深を顯はし、横には塵數の廣多を示す。余生圖を出でし時の如きは三毒の罪業羶羊の妄想に任せば三途八難に墮すべし。實の如く自心の惡業を知て無明の父母の家を別れしより已來更に名利の心を捨てて深く無盡莊嚴恆沙の己有を信す。これ則ち一重の如實知自心なり。周處が三害を離れ未生の三途を悔いしが如きは、實の如く持齋節食の理を知て時時八關を受け倍倍成果を願ふ。然りと雖も紫宸殿は前生の舊所、五欲の妙境は眼前に厭ふ所と、實の如く自心を知る。初禪の高臺は過去の慢所、離生喜樂は久しく受けて新ならずと。實の如く

【圖に云はく、云云】
以下は五大即五藏
五藏即五智の理を
圖を以て釋す。

嬰帝の自心を知り、漸く火宅の薪を知て轉縁の空に眠る。實の如く二乗の小減を知て生空の理に昧著することなし。佛縁の廢詮は料に差別あり、覺心の不生は獨空慮絶す。實の如く有病空寂を知て三大の遠路を出で芥石の蓋きんことを期す。法華の本佛は猶五百の始を指し、菩薩の果佛は亦不談の眞に留る。これ分の如實知自心にして未だ滿の如實知自心ならず。五相五智の秘密、智界理界の莊嚴、自覺本初の住心これを自然覺と名け、又は如實知自心と名く。深義更に問へ。一切衆生の色心の實相は無始本際より毘盧遮那の平等智身なり。色とは色蘊、聞いて五輪と爲す。心とは識大、合して四蘊と爲す。これ則ち六大法身法界體性智なり。五輪各衆徳を具す。故に名けて輪と爲す。體相廣大なれば稱して大名と爲す。五佛は自覺覺他の故に名けて佛と爲す。五智は簡擇決斷の故に名けて智とす。色は心に離れざれば五大即ち五智なり。心は色に離れざれば五智即ち五輪なり。色即是空なれば萬法即ち五智なり。空即是色なれば五智即ち萬法なり。色心不二なるが故に、五大即ち五藏、五藏即ち五智なり。圖に云はく、



肝の藏は眼を主どる。阿頼耶識、大圓鏡智、
寶幢佛、阿闍、藥師、發菩提心、
東、木、春、青。



肺の藏は鼻を主とする。意識、妙觀察智、轉法輪智、無量壽、證菩提果、西、金、秋、白。



心の藏は舌を主とする。末那識、平等性智、華嚴敷、寶生、多寶、行菩提行、南、火、夏、赤。



腎の藏は耳を主とする。五識、成所作智、不空成就、釋迦、天鼓音、入涅槃理、北、水、冬、黒。



脾の藏は口を主とする。奄摩羅識、法界體性行、毘盧遮那佛、具足方便、中央、土用、黄。

已上善無畏三藏の傳

土、地、鎮星、中央、黃、土公、堅牢地神。

水、水、辰星、北方、黑、水天、龍神、
江河水神。

火、火、熒惑星、南方、赤、火天、火神。

金、風、太白星、西方、白、金神、風天。

楨木、空、歲星、東方、青、木神、虛空天、
空神。

已上、不空三藏の徳。

乳白心發菩提、大圓鏡智、寶幢、阿闍、
東方。

契即心具萬行、平等性智、華鬘、寶生、
南方。

真見心正等覺、妙觀察智、阿彌陀佛、
西方。

契證心大涅槃、成所作智、天鼓、不空、釋迦、
北方。

秀髮起心方便、法界體性智、大毘盧遮那佛、
中央。

密嚴淨土理智不二の五佛五智、金剛界に即してこれ胎藏の五佛五智なり。

發菩提心、大圓鏡智、阿闍、
寶幢。

行菩提行、平等性智、寶生、
華鬘。

成菩提果、妙觀察智、阿彌陀佛。

入涅槃理、成所作智、不空、
天鼓、釋迦。

添方便具足、法界體性智、大日如來。

を持す、其種子不淨を棄せば、地識動取して能く愛有を招く。風空は能犯の體、大地は所
 犯の門なり。水空識の種子を下して子宮の中に住して悉く五藏と成る。この五藏ござうに依る。藏軀には陰
 の中の識陰の心、發するが故に地と名く、此色法なり。今肝は地を主どる。魂神の氣を
 東方と木精と爲す、青色なり、空は青なり、その青色は木より生ず、木は水より生ず、肝
 は青氣及び腎より生ず、その精蓮華葉の如し。その中間に關係を善く、齒肉は胸の左にあ
 り。肝出でて眼と爲る、筋を主どる。筋窮つて爪と爲る。覺禪師の覺禪師二十八に出づ。云はく、
 肝華は八葉青色にして五色を具すと。ま字は華部阿彌陀佛、筋の蓮華を主どる。所謂
 れ字はこれ第十一の轉體なり。眞字はこれ第三の轉なり。即ち大日如來の智水、彌陀の大
 悲、水輪の種子なり。神通自在の法なれば法身と名く。招攝相對なれば亦報身と名く。蓮
 華部の曼荼羅なり。筋の藏は魄を主どる。脾神の形體は、それ鼻體の如し。如鼻體に
如華に自る。
 西方金行なり。秋を主どる、其色白色なり。肺鼻の中に自然に風息あり、即ちこれ風大なり。
 現在の五果なり。深く、無明行より識名色等を生じて妄想展轉して輪轉無際なり。即ちこれ
 十二因縁なり。肺の藏、意識を主どる。意識、妄想を生ず、妄想の因縁を以て輪轉す。白
 氣及び肺、辛き味多く肺に入れれば筋を増し肝を損す、苦味の中に魄神なければ恐怖癡病し、
 心、肺を害し病を成す。火の金を尅するが若く、心強く肺弱ければ當に肺を心に止むべ
 し。白氣を以て赤氣を攝取すれば肺病。則ち差ゆ。白氣とは肺の名字なり。肺華は三葉白

色にして半月の形なり。第三の推の左右一寸五分これ所在なり。文字は寶部寶生尊、心の藏口内を主どる。所謂文字はこれ大日如來の智火、寶生の大悲、福德身の曼荼羅、火大の種子なり。一切衆生の無垢の間隔無明妄執の塵垢を焚燒して菩提心の芽種を出生す。即ちこれ如來福德の身、實智の火を以て貧窮の業因を燒き、福德自在ならしむ。心火は夏を主どる。その色赤し、赤色より火を生ず、火は木より生ず、五陰の中の受陰の心、火を持す。受心は想心より生ず、又心は赤氣及び肝より生ず。心出でて舌と爲る血を主どる。血窮つて乳と爲る。又耳識を主どる。鼻喉鼻梁額頤等を轉じて苦香味多く心に入れば心を増し肺を損す。若心の中に神なければ、多く前後を妄失す。腎、心を害して病を成す、水の火を尅するが若しく、腎強く心弱ければ當に心を腎に止むべし。赤氣を以て黒氣を攝取すれば心病則ち差ゆ。赤氣とは心の名字なり、心華は赤氣にして、氣、宗鏡錄に三角の形あり、第五の推の正しき左右一寸五分所在なり。氣字は羯磨部不容成梵佛、腎胃を主どる。所謂氣、軌に依字はこれ氣字の十一の轉聲なり。廣く釋すること餘の如し。三五の摩多に通ず。則ち大日如來常住の壽量、釋迦の本地、大悲風大の種子、三解脱門三際不可得の義、羯磨身の事業曼荼羅なり。風は則ち想陰の心、五藏六府の海水を持す。肺風鼓動して生死の海と爲る。五藏とは肝、肺、心、脾、腎なり。胃とは六府の一名なり。胃はこれ肚、これ脾の府なり。五藏六府の海水は皆胃の府に入る。五藏六府流れて皆胃に稟けて五味、各走流して、その嘉味胃に入るが故に、腎は胃を稟くるなり。第十二の推の下兩方各一寸

【五大】地、水、
火、風、空、
【五根】眼、耳、
鼻、舌、身。

半にあり。腎は第十四の推の兩方各一寸半にあり。又臍腰の下の左を腎と名け、右を命門と名く。腎は心腹に敷いて窮寢して米に作る。精を寫す。志を主どる北方及び水と爲る。水は冬を主どる。その色黒し。五陰の中の行陰の心、水を持す。行心は受心より生ず、受心は想より生ず。腎は黒及び肺より生ず、耳を主どる。腎出でて骨と爲る、髓を主どる。髓窮つて耳乳と爲り、骨窮つて齒と爲る。鹹らき味多く腎に入れば腎を増し心を損す。若腎の中に志なければ多く脾哭す。脾、腎を害して病を成す。土の水を尅するが若く脾強く腎弱ければ當に腎を脾に止むべし。黒氣を以て黄氣を攝取すれば腎病則ち差ゆ。黒氣とは水の名字なり。腎字は虛空部上方毘盧遮那大日如來、脾の藏舌識を主どる。所謂腎字は則ち大日如來の無見頂相、五佛頂輪王、大空智處寂滅眞如、十方三世の諸佛所證の菩提、最上殊勝の曼荼羅なり。脾の藏は奄摩羅識を主どる。中央と爲す。土、季夏を主どる。その色、黄色、黄色、黄色、黄色、黄色は地より木を生じ、木より火を生ず。五陰の中の識陰の心、地を持す。或は木藏と爲す。木は青し、これ空なり。脾は黄氣及び心より生じて口を主どる。志と爲す。志軌の一本に甘き味多く脾に入れば脾を増し腎を損す。若脾の中に意神なければ多く觸惑して肝脾を害して病を成す。木の土を尅するが若く肝強く脾弱ければ當に脾を肝に止むべし。黄氣を以て青氣を攝取すれば脾病則ち差ゆ。黄氣とは脾の名字なり。脾華は一葉黄色にして四隅あり。五藏は蓮華の下に向ふが如し、内の五藏、外の五行に出でて形體を成す、これ則ち名色なり。色は則ちこれ五大、五根、名は

【五字の眞言】ア、
 ビ、ラ、ウン、ケ
 の五字。
 【五印】 五鉛印な
 り。
 【四身】 自性、受
 用、變化、等流の
 四身。
 【三密】 身、口、
 意の三業。
 【四聖】 聲聞、緣
 覺、菩薩、佛なり。
 【六凡】 地獄、餓
 鬼、畜生、修羅、人
 間、天上の六道
 の凡夫を指す。

即ち想等の四陰の心なり。色心は即ちこれ六大法身、五智の如來、五大菩薩、五大明王なり。凡そ日、月、五星、十二宮、二十八宿、人の形體を成す。山島大地は氣字より出生し、河海萬流は氣字より出生し、金玉、珠、珍に作る。寶、日、月、星、辰、火珠、光明は氣字より出生し、五穀萬果、衆華の開敷は氣字によつて結成し、秀香、美人、人畜の長養、顔色滋味、端正の相貌、福德富貴は氣字より莊嚴す。氣字の意甚深空寂の體にして、これを取るに取るべからず、これを捨つるに捨つべからず、萬法能生の理母、灌頂本源の智體なり。氣字を論ずるが如く餘字も亦復かくの如し。凡そ毘盧遮那經及び金剛頂經に簡要を採集する深妙最上殊勝の福田、甚深難解功德の本體なり。應化所説の大乗小乘、一切の經典はただ五字にあり、若一遍を誦すれば獲るところの功德比量すべからず、不可思議なり、乃至息災、增益、調伏、敬愛、鈎召の蒙徳、皆悉く成就す。五字の眞言は諸佛の通呪、五印は薩埵の總印なり。これを修する行者、かくの如く當に知るべし。永く災難を止めて諸病生ぜず。五佛の鬘珠、五智の深底、十方如來の利生の理母、三世賢聖の能護の智父なり。加之、六大四曼の總體、四身三密の別相、四聖六凡の所歸、五趣四生の實相にして四魔を降伏し、六趣を解脱す。氣字は金剛の地、金剛の座處を觀じ、氣字は金剛の水、心蓮華臺を觀じ、氣字は金剛の火大、日輪觀を成じ、氣字は金剛の慧風、月輪觀を作し、氣字は金剛の定空、大空觀を造し、大空位に遊歩して身秘密を成す。これ則ち無生甘露の極に作る。漿、醍醐佛性の妙藥なり。一字五藏の中に入れば萬病萬惱

【五趣】六凡より修羅を除く。
 【四生】胎、卵、濕、化の四生なり。
 【四魔】煩惱魔、死魔、餘魔、天魔。
 【大師】弘法大師なり。

【海會】諸佛出現の道場を云ふ。

【天羅鬼神】阿修羅。

【制底】塔のこと。

【芬荼利華】蓮花のこと。

【舍利】佛骨のこと。

【大我】大日如來のこと。

【我が心の曼荼羅】金胎兩部の曼荼羅なり。

【五部三部】五部は金剛界の五部即ち不生を得。故に大師の釋の中に、一字入藏萬病不生といへり。若日月輪を觀すれば、凡夫即ち成佛す。復次に凡人の汗栗駄心は形猶し合蓮華のごとし、筋脈あり八に分る。これ八葉の心蓮華、八分の肉團これなり。この心蓮華に於て觀じて開敷八葉の白蓮華と作る、臺上に莖字を觀じて金剛の色に作せ、これ則ち方便具足究竟心王、大日如來、法界體性智、常寂滅相本地法身、華臺の總體にして蓮葉を超えて方に心言の境に非ず。唯し佛と佛とのみ乃し能くこれを知りたまへり。この方便を以て大空に同じて、衆像を現す、中臺の心は空にして一切の色を具し、無相法身にして色相を現す。即ちこれ加持十方世界の曼荼羅普門の海會なり。とてころとして至らざる無く遍く法界に應ず。皆これ大日如來一體の色身なり。衆徳を具足するが故に佛陀なり。佛陀は皆これ大日薩埵なり。薩埵は悉くこれ毘盧なり。天羅鬼神もこれ法身の相なり。故に死をぬ、五字は諸佛の總呪なり。若衆生あつてこの教法を傳へて當に供養をいたすべきこと、猶し制底の如くすれば應供の徳を備ふ。何に況んや信修をや。これ人中の芬荼利華、これ法身の舍利なり。毘盧の四身を積集す、即ちこれ自性清淨諸佛の五智に等同なり。我性の九識は、依正不二にして相性同如なり。眞言の大我は、三密平等にして大虚空の如し。法界を宮とすれば處るところの道場密嚴にあらざることなし。六大本尊なれば衆生、即ちこれ本尊にあらざることなし。本尊者本來平等なれば、我本初を覺す。我はこれ古佛なり、智界理界は我が心の曼荼羅、五部三部は即ちこれ我が身なり。能く五大に迷へば三界の域を作して五藏五行生死に流轉

ち、佛部、金剛部、蓮華部、寶部、羯磨部なり。三部は胎藏界即ち佛部、金剛部、蓮華部なり。

【無盡莊嚴大曼荼羅】自身法界滿德圓滿の毘盧遮那佛身となること。【那洛迦】地獄のこと。

す。五字を迷本として苦を受くること無窮なり。能く五大を悟れば四曼の相を造して五佛五智、涅槃を證得す。即ちこれ本初なり。萬法總歸して一の五字に入りぬれば、地獄、天堂、佛性、闍提、煩惱、菩提、生死、涅槃、邊邪、中正、空、有、偏、圓、二乘、一乘、苦樂の相、皆これ六大業因果報なり。既にこれ六大の所作を因と爲す、還つて六大の所受を以て果と爲す。實智に由るが故に能く六大を悟る。五智、四身、四曼、三密、善心を熏修して能く顯はし能く證して無盡莊嚴大曼荼羅を成す。妄執に由るが故に能く五趣に迷ふ。生死、煩惱、四重、八重、五逆、謗罪、惡心を熏習して能く受け、能く悲みて大苦果大那洛迦を感ず。迷悟已にあり執なうして到る。餘字も亦然なり。所謂「五至五至、これは金剛界に約して又五藏を明す。即ち肝、心、脾、肺、腎なり。肝の藏は色青し木を主どる。五字を以て本覺と爲す。五字を以て能破と爲す。何となれば五字はこれ木行、即ち肝の藏の種子なり。五字はこれ金行、肺の藏の種子なり。金は能く木を剋するが故に、肺も亦肝を剋す。故に知んぬ五字を以て能破と爲し、五字を以て所破と爲す。行者當に五字の字義を觀すべし。白色の觀を作して即ち本不生の理を思惟すれば、金變じて智劍と爲つて五字の字相の無明妄想所生の五障百六十心等の三重の青色妄執の木性を截破し都て盡くして即ち更に五字の字義の本不生の五智、金剛の大菩提心の木沙羅樹王に生長す。その色漸漸に増長して大圓鏡智阿闍如來と爲て即ち金剛、菩提心の三摩地門を見現せしむ。心の藏は色赤し、火を主どる。至字を以て本覺と爲す。至字を以て能破と爲す。何となれば水性は

【百六十心】 根本煩惱を細分して百六十心となす。

【八功德水】 清淨水なり。八種の功德あり。

火を尅すれば腎も亦心を尅す。然れば則ち疋字の字義を以て至字の字相を破すれば、この故に本不生の五智黑色の水を以て無明妄想所起の五障百六十心等の三重の赤色妄執の火を沃滅して、更に至字の本不生の五智福德聚の金剛赤色の火を出生して漸漸に増長し、智火熾燃にして平等性智寶生如來と爲つて即ち福德金剛三摩地門を見現せしむ。脚の藏は色白し金を主どる。即ち疋字を以てその本覺と爲す。至字を以て能破と爲す。何となれば火性は金を尅すれば心も亦肺を尅す。至字の字義を以て疋字の字相を破す。この故に本不生の五智金剛の赤色の火を以て無明妄想所起の五障百六十心等の三重の白色妄想的荒金を燒鍊して變じて本不生の五智、金剛の慧眞實の白色の金と爲つて漸漸に増長し成就して妙觀察智無量壽如來智慧金剛三昧地門と爲る。腎の藏は色黒し、水を主どる。疋字を以て本覺と爲す。至字を以て能破と爲す。何となれば土性は水を尅すれば脾も亦腎を尅す。至字の字義を以て疋字の字相を破す。この故に本不生の五智金剛不壞黄色の地を以て無明妄想所起の五障百六十心等の三重の黑色の水を埋み、更に本不生の五智金剛の黑色の八功德水を涌流して漸漸に滲溢して成所作智不空成就如來の身羯磨金剛三摩地門を出生す。脾の藏は色黄なり、土を主どる。至字を以て本覺と爲す。至字を以て能破と爲す。何となれば木性は土を尅すれば肝は脾を尅す。至字の字義を以て至字の字相を破す。この故に本不生の五智金剛の木を以て無明妄想所起の五障百六十心等の三重の黄色妄想的土を破壞して更に泰山木不生の五智金剛不壞那羅延黄色の本覺の土を出生して漸漸に増長して法界體性智

【撰】撰教大師、
是上人のこと。
【灌頂】眞言宗に
て阿闍梨職位を受
くる儀式。

何定聞入無一自所著自同常無一
況類此無量切心有是在人利有闍
餘無功量眞印曼心密神三衆少提
人聞律乘言契荼念印力味生罪等

能不修若若若自聞見三無即無
撰至書觀論結三口聞世有身量
佛信妙一一如一摩發秘諸聞成重
性者觀念遍度地聲密佛斷佛罪

諸當若定亦即萬悉摩自十永若
佛知有勝過越德是手受方離悉
無是衆三恆常妙眞動法如生斷
救人見生世沙結用言足樂來死滅

相違す。仍てこれを寫さす。この頌は肺の一藏の處なり。この頌他人の傳ふるところと頗る文義
已上五輪具足即身門畢る。
已上の頌は鑿が灌頂のとき傳ふるところなり。この頌は肺の一藏の處なり。この頌他人の傳ふるところと頗る文義

【五輪具足即身門】これは五輪五智法身門のことか。
【六】解字門の中の第二の九品報身門（總攝法界法身門）を釋す。
【七】九字九品往生門（九品報身門）中に二門を分つ句義門と字義門なり。

【六八の大願】彌陀の四十八願なり。
【八】以下は九字中の最後なる「呼」字の釋段なり「呼」字は阿訶汗麼の四字合成なり。されば初に阿字を釋す

【六】次に「九字九品往生門」此門の中に二あり。一には「句義門」、二には「字義門」なり。

【七】初に「句義門」とは所謂「九字九品往生門」の九字に於て略して五句あり。第一の字に三義あり。一には三身の義、二には歸命頂禮の義、三には廣大供養の義なり。廣は

「守護經」の如し。次の三字は甘露の義、十甘露の釋の如し。次の二字に六義あり。一には大威徳の義、六臂の威徳を具するが故に。二に大威光の義、遍照光明を具するが故に

三には大威神の義、神境通を具するが故に。四には大威力の義、六六の威力を具するが故に。五には大威猛の義、速滅怨家の徳を具するが故に。六には大威怒の義、怒入地の菩薩

の徳を具するが故に。次の二字にまた六義あり。一には作佛の義、この心作佛して久來始

覺の如くなることを得るが故に。二には作業の義、來迎引接間斷なきが故に。三には作用

の義、神力自在あるが故に。四には作念の義、十念の衆生を迎ふるが故に。五には作定の

義、妙觀察智の三摩地上に入るが故に。六には作願の義、六八の大願を發すが故に。

【八】最後の一字は四字合成す。九字ろまなり。摧破の義、佛法の怨家を破するが故に。

能生の義、能く無量の眞如を生ずるが故に。恐怖の義、天魔外道を恐れしむるが故に。【奏

字義】の釋具なり。これを用ふべし。九字は前の如し。また一百の義は經の如し、且く

三諦の義に就いて略して十種あり。中に於て有諦に一重の諦を出さば、空に曰はく、

緣起の三諦即空諦、緣起の三諦即假諦、緣起の三諦即中諦、無量の一心即空諦。

緣起の三諦即空諦、緣起の三諦即假諦、緣起の三諦即中諦、無量の一心即空諦。

無量の一身即有諦、無量の一心即中諦、法界の三密不生諦、法界の三密本有諦、法界の三密即中諦、法界の三密曼荼羅

かくの如きは顯教の中には無い、また其一義をも知らず、何に況んや具足して十諦の深

義を知らんや。前の三諦は顯教所立の三諦の上に於て不思議の三諦の妙觀を作す。即ちこれ連轉の三諦なり。次の三諦は密教淺略門の中に於て且く一心に約して不思議の三諦無量の名言を成立す。前の諸教は若しは一乘若しは一乘、皆悉く未だ一心の位に無量の數量

【六識】眼、耳、鼻、舌、身、意の六識。

【八識】上の六識に第七末那識第八阿頼耶識を加ふ。

【九識】上の八識に第九庵摩羅識を加ふ。

【九】以下は汗字の釋段なり。

あることを知らず。或は六識を知り或は八識を知り、或は九識を知る、或は十識を知る。第二の三諦の中に無量の三諦を置くのみ。第三の三諦は直に事理に約して廣く三諦の理を談ず。第三の三諦の中に事理法界を攝して説く、猶これ諸法を攝すべし。未だ事理秘密自性不動の諸法ならざるが故に、今は直に本來平等にして能所あることなき自性不生の離一離多の法佛の三密に約して三諦の名義を建立す。第四の一諦は本有法界體性智自性法身に約す。不二大乘の曼荼羅深密の體相用の上の妙諦の義なり。

【九】次に「五」字は一切諸法損減不可得なるが故に、六義を以ての故に諸法損減と名く。所謂苦空無常無我的故に、四相遷變の故に、不得自在の故に、不住自性の故に、因縁所生の故に、相觀待の故に、今この「五」字の實義かくの如くかくの如し。當に知るべし、一切諸法本來常樂我淨なれば、一如不動にして罣礙あることなく自性に安住して無來無去なり、

【二〇】以下は廢字の釋段なり。

因縁を遠離して本來不生なり。性虛空に同なるが故に同一性なり。故に經に云はく、**五**字は報身の義なり。また次に九種の損滅あり、所謂前の九種の住心は未だ無邊の三密無盡の數量を知らざるが故に。

【二〇】後の**又**字は一切諸法吾我不可得の義なり。謂く、我とは自在の義、二種の主宰の義なり、**自**我は已なり、吾我は一切の凡夫なり、外道二乘、三乘同教一乘、別教一乘等皆この吾我の執あつて皆自乘を計して究竟自在の果佛のごとくすれども、眞言門に於ては初心とするが故に。また次に一切諸法本來平等不二智の境界は能生にあらず所生にあらず能遍にして所破にあらず、唯これ三密の一心なるが故に、既に二相なし、何ぞ吾我あらん。我とは他に對するが故に、而るに他相を離るるが故に、我も亦不可得なり。又**又**字は化身の義なり。

【二一】第三の**又**字門はこの字二合なり。謂く、**又**字に**り**字を加ふ。染不可得の義なり。或は神通不可得の字これを書く。**又**字は化身の義なり。神通變化の義、化身の義に近きが故にこの義を以て勝と爲す。また**り**字はこれ一切諸法本性清淨にして染淨を遠離する義なり。また三昧の義なり。妙觀察智蓮華三昧なり。

【二二】第四の**又**字門は一切諸法如不可得の故に。『中論』に曰はく、涅槃の實際と及び世間の際とは是の如きの二際は毫釐の差別なし、差別なきを以ての故に、一切諸法、怨對なし、怨對なきが故に執持なし、執持なきが故に亦如如解脱なし。

【二三】第五の**又**字門は加ふる所の**又**字は、これ即ち求不可得の字なり、彼頌に曰ふが如

【二二】九字中の第三字「ミ」字の釋段。

【二三】九字中の第四字「タ」字の釋段。

【二四】同上第五の「テイ」字の釋段。

し。同一を知と名く、多の故に如如なり、理理無數、智智無邊なり、恆沙も喻にあらず、刹塵も猶少し、兩足多しと雖も並にこれ一水なり、燈光一にあらざれども冥然として同體なり、色心無量にして實相無邊なり、心王心數主伴無盡なり、互相に涉入して帝珠、鏡光の如く重重羅思にして各五智を具す、多にして不異、不異にして多なり、故に一如と名く。一は一にあらずして一なり、無數を一と爲す。如は如にあらずして常なり。同同相似せり。この理を説かざるは即ちこれ隨轉なり。無盡の寶藏これに因て耗竭し、無量の寶草ここに於て消盡す、これを損滅といふ。地墨の四身、山毫の三密、本より自ら圓滿して凝然として不變なりと、求不可得の義とは、頌に曰はく、

六道四生のもろもろの衆生は、本來無盡の徳を具足せり

行住坐臥皆密印、甚細の言語悉く眞言なり

若しは惰、若しは迷、これ般若。或は沈、或は動、即ち三昧なり

萬徳已に我に具して遠からず、何を以てか更に他處に求めん

【一四】九字中第六の「セイ」字の釋段。

【一四】第六の「穽字門」は穽にまた三點の畫を加ふるなり。穽字とは一切諸法諦不可得の

故に。穽とは梵に薩踰といふ。ここに翻して諦と爲す。諦は謂く諸法の眞相の如く知つて不

倒不謬なり。日は冷かならしむべく、月は熱からしむべくとも、佛の説きたまふ苦諦は異な

らしむべからず。集は眞にこれ因なり。更に異の因なし。因滅すれば則ち果滅す。滅苦の道

は即ちこれ眞の道なり。更に餘の道なしと説くが如く、また次に『涅槃』に云はく、苦を

【二五】九字中第七の「カ」字の釋段。

苦なしと解す。この故に苦無くして眞諦あり。餘の三も亦爾なり。乃至四諦を分別するに無量の相及び一實諦あり。『聖行品』の中にこれを説くが如し。これを字門の相と爲す。然も一切の法は本不生なり。乃至畢竟無相なるが故に、語言斷道の故に、本性寂靜の故に、自性鈍の故に、當に知るべし、見も無く斷も無く證も無く修も無し。かくの如きの見斷證修は悉くこれ不思議法界なり。亦空亦假、亦中なり、實にあらす、妄にあらす、定相として示すべきなし。故に諦不可得といふ。點畫は上の如し。

【二五】第七の「可字門」は一切諸法因不可得の故に、梵に係恒縛といふ。即ちこれ因の義なり。若し可字門を見れば即ち一切の諸法は因縁より生ぜざること無しと知る。これを字相と爲す。諸法は展轉して因を待つて成ずるを以ての故に、當に知るべし、最後は因縁無きが故に無住を説いて諸法の本と爲す。然る所以は『中論』に説くが如し。種種の門を以て諸法の因縁を觀するに、悉く不生なるが故に、當に知るべし。萬法は唯心なり。唯心の實相は即ちこれ一切種智なり。即ちこれ諸佛の法界なり。法界は即ちこれ諸法の體なり、因とすることを得べからず。以てこれを知るに因もこれ法界、縁もこれ法界、因縁所生の法も亦これ法界なり。前に説く可字門は、本より末に歸して畢竟じて是の如きの處に到る。今亦可字門は亦末より本に歸して畢竟じて是の如きの處に到る。一本及可次の如く從末歸本義に可字は本より不生なれども一切の法を生ず。今も亦可字無因を以て諸法の因と爲す始終同歸す。則ち中間の旨趣皆ことごとく知んぬべし。

【是の如きの處に到る】本不生實際の義なり。

【二六】九字中の第八「ラ」字の釋段なり。
 【六情】眼耳鼻舌身意の六情なり。
 【六塵】色、聲、香、味、觸、法の六境なり。

【二七】九字中の最後「神」字の釋段なり。

【二六】第八の「又」字門には一切の諸法は一切の塵染を離るるが故に梵に羅逝と云ふ。これ塵染の義なり。塵はこれ妄情所行の處なり。故に眼等の六情、色等の六塵を行すと説く。若し又字門を見れば即ち一切の見聞觸知すべき法は皆これ塵相なりと知る。猶し淨衣の塵垢の爲に染せらるるが如く亦遊塵鈴動して太虚を昏濁し日月を明ならざらしむるが如し。こゝを字相と爲す。「中」に見法を尋求するに見者あることなし。若し見者なくんば誰か能く見法を以て外色を分別せん。見と可見と不可見と見法と無なるが故に、隨處受愛の四法も皆無なり。愛なきを以ての故に十二因縁の分も亦無なり。この故に眼に色を見るとき即ちこれ涅槃の相なり。後も例するに亦爾なり。復次に一切の諸法は悉くこれ毘盧遮那の淨法界なり。豈に如來の六根を染汙せんや。毘盧摩羅經一に云はく、爾は常眼具足して滅なきを以て明に常色を見たまふ、乃至意法も亦かくの如し等。これ又字門の眞實の義なり。

【二七】第九の「又」字門には三身の義を具す。極略してこれを説かば神はこゝに字體報身なり。中に眞の體あり。これ法身。ろはこれ應身、ろはこれ化身なり。法身にこれを攝するに略して四種あり。一には自性身、二には受用身、三には變化身、四には等流身なり。この四種身共に法身と名くることは何の由ぞ。頌に曰はく、

六大は普くもろもろの凡衆に隨じて、平等に成立して増減なし。
 一心は法身自性の佛、一體は報身受用身。

一相は變化化身の佛、一用は平等流身なり

能化の義に約すれば四種身、所化の邊に就いては六凡夫なり

能化の三密は所化に具し、所化の四曼は能化に渉る

一一互融して輪圓具足せり。三三平等にして即ち成佛す

三密の金剛法界に遍じて、佛界非佛界を簡はず

五祕の瑜伽、心宮に住して、密嚴非密嚴を別つことなし

また次に法身に五種あり。前の四身に法界身を并するが故に、曼荼羅に五種あり。前の

四曼に法界曼荼羅を加ふるが故に、『聖位經』の偈に曰はく、「自性及び受用、變化并に等流

佛德三十六、皆同く自性身なり。」法界身を并するが故に、三十七と成る。また『禮懺經』

に自性身の外に法界身を立つ。これ等の證文に依るに四身の外に法界身あり。法界身とは

六大法身なり。また次に九字の眞言は「ワ「ア「イ「ウ「エ「オなり。常に觀じて心を誠にせよ。

心中に咒字あり、七寶の樓觀と成る。先づ水の觀を凝し、次に地地の觀を作せ。瓔珞

幡蓋を垂れ、摩尼鬘を飛ばす。天は妙衣服を雨し、人は瞻蔔香を燒く。華は四珍の色

を染め、鳥は六種の韻を發す。雲露と樹下とに樂あり、内殿と外庭とに舞ふ。說法句句妙

にして、曼陀曼殊を散じ、入定窟窟靜にして、二六の定水を湛ふ。玉流八德澄めり。幢

樂、六律に會ひ、池水、六度を説く。寶瓶、五莖を開き、燈明、五智を燃す。中臺、八葉

を開き、上に九の我字を觀す。臺上に觀自在いまし、葉上に八佛定にしています。次の八

【樓觀】七寶莊嚴
の法界塔婆なり。

【中臺八葉】九品
の彌陀なり。
とは上品、上品
品、上品、上品、
品、中上品、中上
品、中上品、中下

【字印形】種字と印契と形像となり。

【一念の阿字】阿字本生の理に體達すれば即心に萬徳を成ずることを得て即身成佛す。

【七】以下は大別十門中の第五門を釋す。

密誦の明力、觀念力の故に、還つて清淨と成る。纔にこの門に入れば即ち三大僧祇を一念の咒字に越え、無量の福智を三密の金剛に具し、八萬の塵勞變じて醍醐と爲り、五蘊の旃陀、忽に佛慧と爲る。開口發聲の眞言、罪を滅ぼし舉手動足の印契、福を増す。心の所起の妙觀、自ら生じ、意の所趣の等持即成す。貧女の穢庭に忽に如意の幢を建て無明の暗室に乍ちに日月の燈を懸ぐ。四種の魔軍旗を塵かして面縛し、六境の猶賊黨を牽へて入附す。心王の國土無爲の樂しみ輝を旋らすに期しつべし。四種法身恆沙の徳、即身に自ら得、また「瑜伽經」の持誦眞言の功能に云はく、一切の佛心の如く、一切の佛の化身の如く、百千俱胝不可説不可説の佛説利羅の如く、佛の眞身の如く、佛の學念の如し。所作の事業皆一切の佛に同じ、所出の言語便ち眞言と成り、支節を舉動すれば便ち大印契と成り、目に觀るところの處は便ち大金剛界と成り、身の觸るところの處、便ち大印と成る。是の如きの證文その數非一なり。一を以て萬を知れ。願くは有智の人、疑惑を生ずることなかれ。

【七】第五に「穢修一行成多門」とは彌陀の一法を修して現當の悉地を期す。問ふ、眞言教の中所有の行業その數無量なり。金剛胎藏各無量の門法あり。唯一部一界は入て修行する尙以て無量なり。何に況んや三部、五部、二十五部等の若干の行業、何ぞ能く修行すべけん。然れば則ち唯一行一法を修して成佛し、又淨土に往生せんと欲すれば教の意趣に違背すと爲さんか。「答ふ、全く以てこの教の意趣に違背すべからず。『金剛頂經』、『大日經』

【八】以下は大別十門中の第六門を釋す。

【斷末魔】末期のこと。

【金剛合掌】この印は右の五指は佛界の五指を表し左の五指は衆生界の五指を表す。二手合掌するは生佛不二を表するなり。

【金剛縛】この印は五利使五鈍使の十支の煩惱を縛する義。十支の煩惱は往生を障害するものなり。

等に皆この理趣を説く、衆生の根機種種不同なり、或は一門一尊の三昧に入つて一印一明一觀にして悉地を成ずるあり。正像末の異を論ずること無く、これを修する時これ即ち正法なり。悉地、時を簡はず信修この時なり。

【八】第六に「上品上生現證門」とは、高く大日の悲願を仰ぎ深く彌陀の本願を信ぜば更に以て往生の異路なし。韋提、月蓋は現身に往生を遂げ、龍樹、護法は順次の往生を期す。問ふ、「但念密行の行人、何等の心願を以てか往生の大願を遂ぐるや。」答ふ、「四種の廻向、これ則ち往生の親因なり、一には四無量の眞言を誦してこの功德を以て一切衆生と共に四大菩薩に等同ならしめんと欲して至心發願深信廻向す。二には佛法の滅相を見て大師の興隆佛法の大願に等同ならしめんと欲して至心發願深信廻向す。三には法界の一切衆生をして即ち無上大菩提の果を證せしめんが爲に至心發願深信廻向す。四には自他所有の善根をして臨終正念にして極樂に往生せしめんが爲に至心發願深信廻向す。五輪九字を念誦し、兼て臨終の四印明を結誦して志を極樂に懸け、相續の心を止めて當に斷末魔水のときを待つべし。往生この時なり。臨の四印明とは金剛合掌、金剛縛、開心入智、各眞言往生の祕事なり。問ふ、「眞言行者の往生極樂とは九品の中には何れの品ぞや。」答ふ、「多くはこれ上品上生なり。經に現世證得歡喜地と云ふ。龍猛菩薩、既に初歡喜地を證す。問ふ、「極樂に往生するに幾くの業ありや。」答ふ、「三歸五戒これ往生の業なり。六行四禪十善無我の觀等往生の業なり。四諦十二因縁の觀往生の業なり。他縁の行者は護法、戒具、

【開心入智】開心は淨土の門を閉づる十支の結縛を斷じて性徳の心蓮（九品蓮臺の淨土）の門を開くなり。入智とは菩提心論に一禪智俱に金剛縛の智を召入す。心とある印にして、開心の位に於て淨土門を閉鎖する十支の煩悩を摧破し次に金剛薩埵を淨土の蓮臺に召入するなり。

【九】以下は大別十門中の第七門を釋す。

往生の人なり。覺心不生の行者は、樹那、提婆往生の人なり。一道無爲の行者は凡そ三の三字の觀に於て、空假中これを觀ず。南嶽、天台往生の人なり。極無自性法界の行者は香象、清凉、往生の人なり。秘密莊嚴は、內證三密の行者往生の人なり。謂く、實慧、眞然は先に極樂に生じ後に都率に往く。雜學心を感して一生をして空しく過さしむることなから。ただし雜學の善根を以て極樂に廻向すれば定んで懈慢の淨土に生じて娑婆に還らずして進んで極樂に生ぜん。自の善根に於て疑惑の心を生じて極樂に廻向すれば又邊地の淨土に生じて進んで極樂に生ぜん。問ふ。大日經所説の住心品十住心は諸經論の淺深の義を以て擬屬せん爲の故か、また眞言次第の行者の漸次轉證の所經の位の爲なりや。答ふ。正くは、眞言漸次行者の所經の位の爲、兼ては能く經論の淺深の義を攝せんが爲なり。覺心不生の行者、八不の猶暗きを捨て、一道の轉明なるを求め無爲の寂光を見て本地常心を證す。靈山常住にして劫火にも焼かれず、曼陀曼殊晝夜に雨る。淨行菩薩の地より涌出するを見ると云云。轉證次第所經顯然せり。求覺の薩埵永く擬慮することなかれ。天台の別教の有教無人の如くにはあらず。若し經ずんばこの處あること無きのみ。次第の行者必ず住心を経ること初地に住して二地の位に轉するが如し。

【九】第七に「覺知魔事對治門」とは、魔事に四種あり。一には魔衆、二には外道、三には惡鬼、四には惡神なり。魔とは魔羅、具なる語なり。これ障難を作すものなり、譯して殺善といふ。善行を障礙するを名けて魔羅と爲す、惡行を作さしむるを外道と名く。身

【問ふ若し云云】魔事對治の問答、これを四種の門に分つて釋す。
【初めの對治とは云云】魔事對治の四門中今は初めに隨順隨轉對治門を釋す。

【教令輪身】強剛難化の衆生を濟度せんがために忿怒形を現じ給ふを云ふ。

【第二に云云】魔事對治の四門中、第二相違相違對治

を障へて佛道を退轉せしむるを鬼と名く。善心を障礙して深を棄てしむるを神と名くるなり。乃至或は佛菩薩二乘天人等を現じ、或は顯教一乘等の相似の佛法を説いて修行者を退せしめ、常の觀行を棄て、忽に他の行法に移り、乍ちに辯進を至し、乍ちに憍怠を至させしむ。又禪定を好み又論議を好む。かくの如く常にあらざる、これ魔の所爲なり。一大般若經一の魔事品兩卷これを持しこれを安ぜよ。若し魔便りを得れば即ち能く一切の佛法もろもろの世間の善を障礙して一向に惡趣に墮在せしむ。問ふ。若しかくの如き魔事あるの時何んが當に對治すべき。答ふ。四種あり。一には隨順隨轉對治門、二には相違相違對治門、三には俱行對治門、四には俱非對治門なり。初めの對治とは當に一切三世常住の佛界魔界皆これ法身本有の三密なりと觀すべし。是の如きの三密互相涉入して一味平等なり。魔羅の三密と我が三密と本來不二なり、既に二法なし、豈障礙あらんや。三密と三密と本來平等にして本不生なるが故に諸佛衆魔同一法界なり。瑜伽の三密互相に輪圓して損を離れ滅を離れ、諍なく怨なし。所有の忿怒即ちこれもろもろの教令輪身なり。動靜威儀契にあらざることなく、所出の音聲皆これ眞言なり。所念の意趣、悉く是れ禪景なり。所有の隨順可愛の諸相は、また如來の自性輪身なり。所説の言語、總持にあらざること無し。行住坐臥、悉く是れ印相なり。所思所覺、亦是智亦是定なり。これを密教の願對治の相と名く。第二に「相違相違對治門」とは、若しは手に印を結んでこれを遮除すべし。若しは陀羅尼を誦じて加持してこれを治し、心に觀智を作してこれを滅す。觀法を作すこと云

門の釋段。

【天龍八部】天龍、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人

【第三に云云】同上の第三俱行對治門の釋段。
【第四に云云】同上第四の俱非對治門の釋段なり。

何。

頌に曰はく、

我はこれ持明者なり。魔は即ち破戒の類なり
諸佛菩薩業、聲聞諸賢聖

善の天龍八部、所持の法を護るに由て

皆ことごとく我を加護す。暫くも捨離する時無し

何れの時にかその便りを得て、能く我が眞道を障へて

魔は無明より生ず。我が行は本より佛道なり

行者は光明の如く、魔事は黑暗の如し

明暗の並ばざるが如く、薪火の順ぜざるに同じ

魔事は本より不生なり、幻の如く夢境の如し

空華の有名に似たり、龜毛の無體に均し

暗、光明を消せず。妄何ぞ眞道を障へん

これを逆對治といふ

第三に「俱行對治」とは、順逆の二治並べて、共にこれを用ふ。第四に「俱非對治」

とは頌に曰はく、

諸法本より不生なり。自性言説を離れたり

清淨にして垢染なし、因業なり虚空に等し

『大日經』の頌に曰はく、

心自性無きが故に、因縁を遠離せり
業生を解脱して生、虚空に等同なり

また云はく、

諸趣は唯相名のみあり、佛相も亦復然なり

佛界諸法本より清淨なれば、常樂我淨これ眞實なり、我及び魔事等畢竟空寂にして所有無く、念なく、慮なく、著取なく、増なく、減なく、彼此なく、體なく、形なく、相用なく、解なく、障なく、礙なく、自他なし。虚空、虚空を礙へず。實相何ぞ實相を評はん。

【二〇】 以下は大別十門中の第八門を釋す。
【深智相應印明行】 無相勝慧の機根の行なり。
【事觀相應結誦行】 有相劣慧の機根の行なり。

【二〇】 第八に「即身成佛行異門」とは、凡そ即身に大覺位處を證得するの行、別に略して四種あり。所謂「深智相應印明行」、「事觀相應結誦行」、「唯信作印誦明行」、「隨於一密至功行」なり。第一の行は内證甚深の智慧皆悉く相應具足して能く印明行を修行して即身成佛するが故に。第二は深智の觀慧なしと雖も慇懃に手に印を結び口に明を誦して字印形の三種の中に於て隨つて一事を觀修して即身成佛するが故に。第三の行は如上の二種の智觀なしと雖も、ただ深く信解して印を結び明を誦じて自然に頓に成佛すべきが故に。第四の行は設ひ餘の二行及び廣智なけれども、唯一義を觀じ一法を解して至心修行の故に。即身成佛するが故に。設ひ且一法の智慧及び餘の二行なけれども唯信を以て門と爲して一字形を觀じて成佛し、一印形の三摩耶形を觀じて成佛し、一尊形相の一相を觀じて

【二】以下は大別十門中の第九門を釋す。

【現身門に云云】第九門をば所化の機を現身往生、

順次往生の二類とす。今は初めに現身往生を釋す。

【本有の五輪の種子】五輪の觀は胎藏法の五輪成身觀にして直往の體の

所修なり。これを金剛界に約すれば五相成身觀とな

る。或字は通達菩提心なり。故に本有にして無莊嚴の

阿字なり。又婆字は修菩提心にして

成修生の智。羅字は證金剛心、法日は佛身圓滿なり。

佛身圓滿なり。

成佛し、及び餘行なければども唯「明」一字を誦じて成佛し、并に印契を結び且餘の密行なければども唯相應すれば必定して即身成佛するが故に總じて爾いふなり。問ふ、「正成佛の一刹那の時に三密相應して成佛すと爲さんや、爲當云何。」答ふ、「正成佛の時は必定三密相應して即身成佛するなり。問うて曰はく、「若し三密相應して即身成佛すと言はば爲當云何。」答ふ、「彼二行一行等に依て成佛すとはこれ正成佛のときにあらず。且餘の二行を修する不思議の加持力に由るが故に忽に餘の二密等を出生して三密具足して即身成佛するなり。問ふ、「何等の經論に分別して即身成佛の義を説くや。」答ふ、「即身義に説くが如し。」

【二】第九に「所化機人差別門」とは、この所化の機に於て總じて二類あり。一には現身往生、二には順次往生なり。現身門に於て又二の別あり。一には大機の即身成佛、二には小機の即身成佛、また二に於て各二あり。利鈍別なるが故に、謂く、大機の利根は直に法界體性三昧に入て横に法界を觀じて即身成佛す。所謂一切衆生は本有の薩埵なり。法爾に普賢大菩提心に應住す。本有の或字は所觀の體、本不生の智は能觀の體なり。能所一體、心一境、靜にして本不生の理を覺りて言語道斷し、本不生の理を覺りて諸過解脫を得。本不生の理を覺りて因業不可得なり。本不生の理を覺りて等空不可得なり。能觀緣慮の一心、所觀字相の一境、能所一體にして空理を證する時即身成佛す。これを大機横觀の三摩地と名く。大機の鈍根は堅に法界體性三昧觀に入りて本有の五輪種子を觀す。この五字は即ち十五種の金剛三昧なり。一字即ち十五字、十五字即ち一字、一字即ち五字、五字即ち一

【十六大菩薩】王、愛、喜、寶、光、幢、咲、法、利、因、語、業、護、牙、拳の十六菩薩を云ふ。

字なり。この字門に於て八門を以てこれを觀す。一字攝多門、多字攝一門、一字釋多門、多字釋一門、一字成多門、多字成一門、一字破多門、多字破一門なり。順觀旋轉すると十二遍すれば、十二の流轉に於て字ごとに觀察すれば生死の源を盡くす。逆觀旋轉すること十二遍すれば十二の還滅に於て字ごとに觀察すれば涅槃の理に至る。理とは本不生なり。十五の金剛三昧に入て能く理の本不生を觀じて能所俱に絶す。凡字本不生なるが故に、又字言語不可得なり。言語道斷なるが故に、又心染淨不可得なり。解脱を得るが故に、又字因業不可得なり。無自性を得るが故に、又字染淨不可得なり。首尾ともに亡じて本心を見る時、即身成佛す。これを漸豎の觀と名く。以上共に、心玉の機、小機利根は心數の別の本尊に就く。且く觀音の行者に約してこれを釋せば、本有の九重の飛字は一切衆生の本有の觀音の種子なり。慙愧不可得の義に依て能く自性清淨、妙蓮不染を信じて蓮華を覺悟して四時に於て間斷せしめず。三密の行を修して聞敷蓮華の印に住して、又又又の明を誦して慙愧不可得の理に住して本初の覺蓮を證見す。これを小機觀の即身成佛と名く。小機の鈍根は蓮華三昧に入て、又又又の四字を觀じて四時の中に於て是の如きの勝三摩地に於て四種の威儀暫くも放捨せざるべし。この生に次第に十六大菩薩の位を經。慙愧清淨の菩提心を發して、薩王愛喜の位を經て、又又又菩提心の義を觀じて四種位を證し、次に四種の菩提行を修して寶光幢咲の位を經て、又又又の理を證し、次に四種の智慧門を修して法利因語の位を經て、又又又の智を得。次に四種の精進門を修して業護牙拳の位を經て四の

【菩薩】護法、清辯等の論師を云ふ。

【三】以下は大別十門中の第十門を釋す。

獨譬を得。第十六生に於て本有の心蓮を顯す。先づ蓮華三昧を證して更に方便を轉じて即ち大毘盧遮那佛と成る。觀自在を論するが如く餘尊も亦復是の如し。問ふ、世間の眞言行者竝に道心者の但念のものを見聞するに未だ必ずしも皆淨土に往生せず。何なる用心を以てか今度往生の願を遂げん。既に一念十念を以て往生の親因と説く。心あらん男女何ぞ往生の思ひを絶たん。答ふ、多の因縁あり。能く能く當に用心すべし。謂く、或は眞言行を修し、或は但念佛を至し、他人の見聞を思うて佛陀の知見を信ぜず、この行は願因にあらず。或は他人の恭敬を求めて後世の苦行を作す。亦願因にあらず。或は名利を以て「法華經」等を讀誦する亦願因にあらず。或は名聞の持戒亦願因にあらず。或は自是非他また願因にあらず。或學人の云はく、十念の願因は別時意趣なりと、當に知るべし方等經を謗するに同じ亦願因にあらず。或は顯密の行業、自を執し他を非するもの亦願因にあらず。或は彌陀彌勒の行者互に是非を爲す。これ即ち地獄の業因なり。二諦を論ぜし菩薩の如し。若しかくの如きの用心を知らば誰れ人か往生せざらん。大師の云はく、迷悟已れにあれば執無うして到るといへり。

【三】第十に「發起問答決疑門」とば、問ふ、「五輪門に依る機に幾く種かある。」答ふ、「二種の機あり。一には上根上智即身成佛を期す。二には但信行淺、願次往生を期す。この行者に就いて亦多あり。正しくは密嚴淨土に往生し、兼ては十方淨土を期するあり。」問ふ、「何が故に大日を念誦して十方淨土の親因と爲るや。」答ふ、「この五字の眞言は十方諸佛

の總呪、三世薩埵の肝心なり。故にこの眞言を持誦すれば思ひに隨つて十方淨土乃至彌勒の所及び阿修羅等に往生することを得。同く九字の眞言行者も其の眞言の名稱に於て更に淺略の思ひを作すことなかれ。若し眞言門に入るときはもろもろの言語皆これ眞言なり。何に況んや其の眞言をや。この所立は三句の法門を以てもろもろの行業を攝す。日く三部を擧げて攝して一切の尊を知らしめば、其の眞言の一字門は菩提爲因、次の二字は大悲爲根、後の一字は方便爲究竟なり。其の眞言の初めの字を以て因と爲す。次の二字を根と爲す。後の一字を究竟と爲す。又其の三句分別前の如し。總じて諸佛菩薩金剛天等皆本種子あり。その字四轉を具するが故に、亦三句を具す。無量の三句皆これ順次往生の親因なり。問ふ、二語教に亦三業の修善を以て往生の業と爲す。今の宗の三密具足その義如何。法佛の三密は甚だ深細なり。顯教の妙覺も知るところにあらず。智身の六人は極めて玄廣なり。密宗の圓智のみ獨り能く證す。一道無爲の寂光の佛、驚怖し希哉して言語を斷つ。三白本覺の帝珠の尊、恭敬し證を棄て眞覺を求む。報佛の如來は默して答へず。變化の善逝は祕して談せず。補處の等覺その境に迷ひ、飲光の受職かの域を隔つ。形體の色質即ち身密なれば、動寂の威儀これ密印なり。音韻聲響皆語密なれば、蠶細の言語悉く眞言なり。染淨の心識皆心密なれば、迷悟の分別、智にあらざることなし。說默情意亦意密なれば、輪圓具足して法界に遍す。事理もとより不二なれば、邪正の觀念、定にあらざることなし。色色心心白ら異なること無れば、圓融涉入して虛空に等し。密行を托

【二三】此一文は一般論疏に對すれば所謂流通分にも比すべきものなり。

げて見聞せしむることなかれ。祕法は妄りに傳受せしむることなかれ。淺智は顯に濫して福を失ふが故に。劣慧は均しく争うて罪を得るが故に。根なければ饑を泉の底に祕す。信ぜざれば定めて實際を摧くが故に。幾にあらざれば談を喉の内に閉づ。疑ひを生ずるは必ず無間に墮するが故に。嬰兒に莫耶を惜むにあらず。唯恐らくは妄想の此生を害せんことを。顯人に瑜伽を祕するにあらず。偏に非す。不信の只災を招かんことを。輕んずることなかれ。疎んずることなかれ。三部の寶、重んずべく崇ぶべし。三密の珍、能歸は深く心蓮の海に入り、大信は玄かに覺月の空を仰ぐ。」

【二三】右書の中多く灌頂の文を載す。未灌頂のものは師に受けて聞くべし。就中五藏の秘義これ大事なり。能く能く受學して之を修せよ。

そもそも此祕釋を記して後三摩地に入る。忽然化現して寶生房の云はく、「崑崙一度崩れて金石即ち一物なり。毘彌兩觀凡聖無二なり。吾はこれ金色世界の古衆、汝は亦密嚴淨土の新人なり。若しこの瞻蔔林に入るときは誰人か異熏あらんや。」終にこの說者幻のごとくして見えす。ここに於て覺えずして涙落ち、慚愧熾盛なり。忽に密嚴の有相を見て生死の絶えんことを知る而已。

五輪九字明祕密釋 終

弘法大師の御遺告と稱するもの。即ち此二十五條の御遺告と眞然大徳等遺告せられたるもの。諸弟子等の遺告（以上三本は其に承和三年三月十五日）及び住山弟子等に對する遺告（承和元年十一月十五日）となり。其内此二十五條の御遺告は眞言宗の末裔一般に對して大師御入滅後の事を教へ定められたるものなれば、今は特に之を擇ぶ。

【中洲】一本には中國に作る。

【眼肝】一本には眼精に作る。

【妊胎】一本には任胎に作るも今は其の意を重んじて妊胎に作る。

御遺告 (二十五條)

諸の弟子等に遺告す。

東寺眞言宗家の後世内外を勤め護るべき事。管合して二十五條の狀

竊かに以れば大法味ひ同じけれども興廢機に任せたり。師資代を累ねて付法人に在り。

鷲峯に視聽して中洲に傳流す。鐵塔の傳を鳥卵に利見す。流れを探り、源を尋ね、冕を

鑿みて本を討ぬ。大唐の曲成に既に血脈あり。日本の末葉何ぞ後生無からん。仍て之を示

さん。

一、初めに成立の由を示す緣起第一 遺告を寫し持たしむること勿れ、守り惜むこと眼肝の

如くせよ。

夫れ以れば昔昔し生を得て、父母の家に在りし時、生年五六の間、夢に常に八葉蓮華

の中に居坐し、諸佛と共に語すと見き。然りと雖も専ら父母に語らず。況んや他人に語

らんや。此間、父母偏へに悲んで字して貴物と號す。多布度毛能土年始めて十二なりき。

爰に父母の曰はく、「我が子は是れ昔の佛弟子なるべし。何を以て之を知る。夢に天竺國よ

り聖人の僧來つて我等が懐に入ると見き。是の如くにして妊胎して産生せる子なり。然

弘法大師

【外戚】一本には今は外戚として其意を通じ易からしむ。
 【從】一本には從に作るも今は意を取つて從に作る。

れば則ち此子を齋て將に佛弟子に作さんとす。と。吾若少の耳に聞き、喜んで泥土を以て常に佛像を作り、宅の邊に草堂を造つて、彼内に安置して、禮し奉つるを事としき。此時に吾が父は佐伯の氏、讃岐の國、多度の郡の人なり。昔敵毛を征て、斑土を被れり。母は阿刀の氏の女なり。妾に外戚の男に阿刀の大夫等の大夫等が口はく、敬ひ佛弟子となるとも、知字大學に出でて、文章を習つて身を立てしめんには。と。此教言に任せて俗典少書等及ぶ史傳を受け、兼ねて文章を學ぶ。然して後、生年十五に及んで入京し、初めて百淵贈僧正大阿に逢うて、大虛空藏一並に「龍滿虛空藏」の法昌を受け、心に入れて念持す。後大學に經遊して直講味酒淨戒に従うて「毛詩」「左傳」「尚書」を讀む。「左氏春秋」を岡田博士に問ふ、經史を博觀して専ら佛經を好む。恆に思ひき、我が習ふ所の上古の俗教は、眼前都て利動なきを、況んや一期の後、此風已に止みなん。眞の福田を仰んには如何か。此によつて「三教指歸」「三經」を作つて、近士と成て聲をば無空と稱す。名山絶巖の處、嵯峨孤岸の原、遺然として墮り向ひ、流留として苦行す。或は阿波の大瀧の嶺に上つて修行し、或は土佐の室生門の崎に於て寂誓す。心觀すれば明星、口に入り、虛空藏、光明照し來つて、菩薩の威を顯し、佛法の無二を現す。嚴苦節は、則ち嚴冬の深雪には藤衣を被きて精進の道を顯し、炎夏の極熱には穀葉を斷絶して、朝暮に懺悔すること二十の年に及べり。妾に大師、石淵贈僧正名し奉りて、和泉の國檜尾山寺に發向す。此に於て鬚髮を剃除して、沙彌の十戒七十二の風儀を授け、名を教海と稱し、後改めて如空と稱す。此時

【織】一本には「織」となすも其意を取りて織となす。

【天應】天皇か。

【慇懃】一本には「慇懃」となすも今

は其意を取つて慇懃となす。

【儀式】一本には「義式」となすも今は意を汲んで儀式となす。

【次で復】一本には「次で復」となる

「迎客」とあるも意を取つて迎客となす。

す。

佛前に誓願を發して曰はく、「吾佛法に從うて常に要を求尋するに、三乘五乘十二部經、心に疑有て、未だ以て決をなさず。唯願くは三世十方の諸佛、我に不二を示したまへ。」と一心に祈感するに、夢に人ありて、告げて曰はく、「ここに經あり。名字は『大毘盧遮那經』と云ふ。是れ乃が要むる所なり。」と。即ち隨喜して件の經王を尋ね得たり。大日本國高市郡久米の道場の東塔の下にあり。此に於て一部織を解いて普く覽るに、衆情滯りあり。憚問ふに所なし。更に發心を作して、去じ延暦二十三年五月十二日を以て入唐す。初めて學習せんが爲なり。天應慇懃にして、載ち勅して渡海せしむ。彼海路の間、三千里なり。先例は揚蘇洲に至りて、買りなし云云。而るに此渡船七百里を増して衡洲に到るに礙り多し。此間大使越前の國の太守、正三位藤原朝臣賀能、自ら手書を作つて衡洲の司に呈す。洲の司披き省みて、即ち此文を以て已に了んぬ。是の如くすること兩三度す。然りと雖も、船を封じ人を追うて濕沙の上に居せしむ。此時に大使述べて云はく、「愁の切なること之れ今なり。抑大徳は筆の主なり。書を呈せよ。」云云と。爰に吾書様を作つて大使に替つて、彼洲の長に呈す。洲長披覽して啖を含んで船を開き問を加ふ。即ち長安に奏す。三十九箇日を経て洲府の力使四人を給ひ、且つ資糧を給ふ。洲の長好み問うて、借屋十三烟を作り住せしむ。五十八箇日を経て存問の勅使等を給ふ。彼儀式極り罔し。之を覽る主客、各各涙を流す。次で後、迎客の使を給ふ。大使に給ふには七珍の鞍を以てし、次次の使等には皆粧鞍を給ふ。長安人京の儀式説き盡すべきことなし。之を見る者遐邇に滿て

【大河開渠】一本には「大」の字なし今は原本に従ひ之を加ふ。

【五智】一本には「五部」に作る。

【葉】一本には「葉」となる。この一句の文今は「葉」に注して岸に著くとき一とするも、一本によれば「岸」に注して一となる。

【善女】一本には「善如」となるも今は善女となし、普通に稱する龍王の名に託ふ。

【人に託して】一本には「一人に託して」とあり。

【眞紹】一本には「眞照」となすも今は眞法大師十弟子中に眞照なく眞紹あるを以てなり。

【眞雅、眞紹、堅惠、眞曉、眞然等なり。】諸の弟子等敢て覺着難し。具に事の心を注して、内裏に奏聞す。少時の間に勅使和氣の眞綱、御幣種種の色物を以て龍王に供奉す。眞言道の崇めらるること、爾しより彌起れり。若し此池の龍王、他界に移り

り。此間大使賀能の大夫達向に國に歸る。龍れ延曆二十四年の電時なり。即ち大唐貞元二十一年に配れり。爰に少僧、並に橋の大夫、勅に准じて留學す。具には別記にあり。即ち小僧上都長安青龍寺の大師、内供奉十師師惠果大師開梨に遇うて、五智灌頂に沐して、胎藏金剛兩部秘密の法を學ぶ、及び一毘盧遮那金剛頂經一等二百餘卷を讀む。並びに諸の新譯の經論、唐梵合存せり。少僧大同二年を以て我が本國に歸る。此間海中の人人云はく、「日本天皇崩じたまへり。」と云云。是言を聞て謀めて本口の言を尋ねるに、船内の諸人首尾を論ずして都て一定せず。葉に注して岸に著くとき、或人の言に告ぐらく、「天皇某の日に崩じたまへり。」と。少僧悲しみを懷きて、素服を給はる。爾より以降、帝四朝を経て、國家に奉らんために、壇を建て修法すること五十一箇度、亦神泉蘭の池の邊にして、御願に法を修して雨を祈るに、靈驗具れ明なり。上殿上より下四元に至る。此池に龍王あり。善女と名く。元是れ無熱達池の龍王の類なり。慈みありて人のために害心を至さず。何を以て之を知る。御修法の此人に託して之を示す。即ち眞言の奥旨を敬うて、池中より形を現する時に悉地成就す。彼現せる形業は宛も金色の如く、長さ八寸許の蛇なり。此金色の蛇長さ九尺許の蛇の頂に居在せり。此現形を見る弟子等は實惠大師並びに眞雅、眞紹、堅惠、眞曉、眞然等なり。諸の弟子等敢て覺着難し。具に事の心を注して、内裏に奏聞す。少時の間に勅使和氣の眞綱、御幣種種の色物を以て龍王に供奉す。眞言道の崇めらるること、爾しより彌起れり。若し此池の龍王、他界に移り

【敢て覽着難し】一本には一敢て覽る者難し一となるも今は意を取り覽着け難しとなす恐らく覽付け難し或は覽ること難しの義ならん。

【御幣】一本には「御幣」となる。

【吳殷】一本には「吳殷」に作る正しき名吳殷なるが故に今は改む。

【小國】一本には「少國」となす。

【高雄】一本には「高尾」に作る。

なば、池淺く、水滅じ、世薄く、人乏しからん。方に此時に至て須らく公家に知らしめずして、私に祈願を加へよ。亦灌頂を授くる者、蓋し以て員多し、具に之を注せず。若し灌頂の流を存せば、我身より始めて秘密真言此時に而も立つ。夫れ師資相傳嫡嫡として繼ぎ來る者なり。大祖大毘盧遮那佛、金剛薩埵菩薩に授けたまひ、金剛薩埵菩薩、龍猛菩薩に傳ふ。龍猛菩薩より下、大唐の玄宗、肅宗、代宗三朝の灌頂國師、特進試鴻臚卿、大興善寺の三藏沙門、大廣智不空阿闍梨に至るまで、六葉なり。惠果は則ち其上足の法化なり。凡て付法を勘ふるに、吾身に至るまで相傳すること八代なり。

吾到りし日、彼大阿闍梨の曰はく、『我が命既に盡きなんとす。汝を待つこと既に尙し。已に果して來れり。我が道東せんとす。』故に吳殷が纂に云はく、『今大日本國沙門有つて來つて聖教を求むること、皆所學にして寫瓶の如くなるべし。此沙門は、是れ凡徒に非ず。三地の菩薩なり。内には大乘の心を具し、外には小國沙門の相を示す。』云々と。大阿闍梨の御相弟子、内供奉十禪師順曉阿闍梨の弟子、玉堂寺の僧珍賀、申して云はく、『日本の座主設聖人なりと雖も是れ門徒に非ず。須らく諸教を學ばしむべし。而るを何ぞ密教を授けられんと擬する。』云々と。兩三般妨げ申す。是に珍賀、夜の夢に降伏せられて摩且に來至して、少僧を三拜して過失を謝して言はく云云。又去じ弘仁七年に表を以て紀伊の國南山を請うて、殊に入定の處と爲て一兩の草菴を作る。高雄の舊居を去つて南山に移入す。厥峰は絶遙にして遠く人氣を阻てたり。吾が居住する時に、頻りに明神の衛

【法皇】一本には「皇」の一字となし太上天とすも今は法皇と改む。これ由ある記によつてなり。

【月餘】原本には「餘月」とあるもその意を取つて今は月餘と改む。

【允】一本には「免」とす。

【丹生津姫命】天照大神の妹神と云ふ。新加山縣伊都郡天野村天野神社の祀神なり。

【十町許】一本には「十町許」とす。

【巫覡】一本には「巫覡」に作る。

【尅】一本には「刻」とす。

護あり。常に門人に語るらく、吾が性山水に狎れて人事に疎かなり。亦是れ浮雲の類なり。年を追うて終を待つこと此窟の東と爲さんと。太上天皇轉あつて、請し下して申務に安宿せしめて供養すること月餘あり。遷つて更に高雄に居す。天長皇帝即位に少僧都に任ず。再三奏辭すれども允されず。公に在るに萬事に違なしと云ふと雖ども、春秋の間に必ず一たび往いて甯る。彼山裏の路邊に女神あり。名けて丹生津姫命と曰ふ。其社の廻に十町許の澤あり。若し人到り着けば即ち時に傷害す。方に吾が上登の日軍税に託して曰はく、妾は神道に在りて威福を望むこと久し、方にへて菩薩此山に到りたまへり。妾が幸なり。弟子昔現人の時食國難命、家地を給ふに萬許町を以てす。前は南海を限り、北は日本河を限り、東は天日本國を限り、西は應神山の谷を限るなり。冀くは永世に獻じて仰信の情を表す」と云云。如今件の地の中に在る所の間田を見るに三許町なり。常莊と名くる是れなり。吾去じ天長九年十一月十二日より、深く穀味を厭ひて、専ら坐禪を好む。皆是れ令法久住の勝計、並に末世後世の弟子門徒等がためなり。方に今諸の弟子等諸かに聽き、諦かに聽け。吾が生期今幾ならず。仁等好く住して、愼んで教法を守れ。吾永く山に歸る。吾入滅に擬するは今年三月二十一日の寅の尅なり。諸の弟子等悲泣をなすこと莫れ。吾即し滅しなば兩部の三寶に歸信せよ。自然に吾に代つて眷顧を被らしめん。吾生年六十二、臘四十一なり。吾初は思ひき、一百歳に及ぶまで世に住して、教法を護り奉らんと。然して諸の弟子等を恃んで念く永く即世せんと擬す。但し弘仁の帝皇給ふ

【自在】一本には

「自存」となすも今は意を汲んで自在となす。

【大德】一本には「國德」となす。恐らく書き誤りならん。

【今遙かに】一本には「今延」とす。今は意を汲んで遙かにとす。

【佛會】一本には「佛惠」となすも義通ぜるが故に佛會に改む。

【但し】一本にはなし。

【大師阿闍梨】一本には「大阿闍梨」となすも兩意相通ずるが故に敢て除かず。

に東寺を以てす。歡喜に勝へず。祕密の道場を成せり。努力努力他人を雜住せしむること勿れ。此れ狭き心に非ず。眞を護るの謀ごとなり。妙法圓かなりと雖も五千の分に非ず。東寺廣しと雖も異類の地に非ず。何を以てか之を言ふ。去じ弘仁十四年正月十九日、東寺を以て永く少僧に給はり、預けらる。勅使は藤原良房の公卿なり。勅書別にあり。即ち眞言密教の庭とすること既に畢んぬ。師資相傳して道場とする者なり。豈非門徒の者の猥雜すべけんや。

一、實惠大德を以て吾が滅度の後、諸弟子の依師長者となすべき緣起第二

夫れ以れば吾が道の興然たることは専ら此大德の信力なり。茲に因て示し告ぐる所なり。眞言を以て本宗となし、顯教を以て邊教となす。他に眼青あつて自在に融通す。人師國寶の本豈此大德に益すあらんや。仍て大經藏の事一向に此大德に預く。但し若し實惠大德不幸の後は、眞雅法師を以て處分せしめ、封納し、開合せよ。之に依て未だ情を知らざらん弟子等に封閉せしむること勿れ。愚情にして師師の長短深淺必ず他家に語らんか、慎むべし。慎むべし。亦菩提實の珠數は是れ大唐帝皇の給勅なり。即ち恩勅して曰はく、「仁此を以て朕が代となせよ。永く忘るること勿れ。朕初には公を留めて師とせんと謂ひき。而るに今遙かに東に還る。惟れ道理なり。後紀を待たんと欲すれば、朕年既に半ばを越えたり、願くは一期の後必ず佛會に逢はん。加之ならず、賞賜算算あり。以て先日、誤つて大師惠果の給ふ所と注せり。但し金剛子は是れ大師阿闍梨耶の給ふ所なり。亦諸の

道具は大師阿闍梨耶の付屬なり。毘輪んすべけんや。

一、弘福寺を以て眞雅法阿に屬すべき緣起第三

右の寺は是れ飛鳥の澤三原の宮の御宇、天武天皇の御願なり。而るに天長の聖主、勅を
降れて、永く常に東寺に加へて修治すべきの由畢んぬ。伏して惟れは聖恩は是れ少僧が
高野に通詣するに依て給ふ所の宿處なり。之に依て少僧永く師師相傳して修治すべき者な
り。但し眞雅法阿明の後、諸の弟子等の中に前に在つて出身せし者東寺を掌るべし。
年經の次第を承むべからず。本門能の御に一に成立せるを以て長者となすべし。長者たら
ん者、弘福寺を加掌すべし。佛陀宮と稱す。己が宿所とするのみに非ず。佛の修治を
くして宗計と爲せ。

【愛宕寺】一本に
は宿當寺となす

一、珍皇寺宇愛を以て後世弟子門徒の中に修治すべき緣起第四

右の寺建立の大師は是れ古祖師、故慶俊僧都なり。諸の門徒相共に付屬することあ
るに依て修治を加へ來る者なり。然れば則ち修治にたまたらん人を以て、寺の司に任じて
住持せしむべし。不請の者を用ふること莫れ。

一、東寺を教王護國の寺と號すべき緣起第五

夫れ以れば大唐の惠果大師、勅を奉じて青龍寺を師師相傳せり。元は大官道場と名
く。然れども大興善寺の大阿闍梨耶、勅を被つて秘密の場となし、改めて青龍寺と號す。
方に今彼に準じて東寺を以て教王護國寺と號すべし。額は是れ既に勅を奉ずるのみ。宜し

く此山を奏すべし。亦吾が漢號は遍照金剛なり。宜しく知り行ふべし。

一、東寺灌頂院は宗徒の長者、大阿闍梨檢校を加ふべき縁起第六

右の院は未だ造り畢らずと雖ども、且且傳燈の志を始む。此間に思ふ所千廻なりと雖も最早に山に入りて此志を遂げず。然れば即ち實惠大徳一向に造功し畢るべし。亦諸の莊嚴は先先に語るが如くすべし。但し恆例の灌頂阿闍梨は、門徒の内に最初に成立せん者を以て御願を修せしむべし。若し殊なる病妨あらば、次の人を以て之を請用すべし。若し是れ辭退せば永く吾が後生の弟子に非ず。門徒宜しく信奉すべし。

【二十四】一本には(二十口)となす【五悔】金剛界の讚文なり。

しむべき縁起第七

右大唐青龍寺の例を案ずるに、宗徒の大阿闍梨の童子、並に諸名徳達の童子等を食堂に會集せしめて、僧達一人童達一人、共に五悔を習學せしめて夜毎に藥に現はし、大衆所得の十分が一を闕いて、諸の童子等が紙墨料に充て行ふ。彼を案じて之を示すのみ。但し遠に成り出づべからざる者は、寺内に常住すと雖も更に強ちに喚んで此庭に列せしむべからず。器を見、品を惟うて之を催すべし。亦九方便は大阿闍梨の前に於て諸徳弟子の内堪能の僧等を召し集めて、毎夕に習誦せしむべし。昔、大師阿闍梨耶の曰はく、唯、諸の護法天神に法味を飡受せしめて乍ら場等を守護する者なり。彼は準じて此を示す。他事に違あらず。自ら駐むること勿れ。

【列せしむ】一本には「烈せしむ」と作る。
【唯】一本には「淮」に作る。

一、吾が後生の弟子門徒等、大安寺を以て本寺となすべし縁起第八

夫れ以れば大安寺は是れ兜率の構へ祇園精舎の業なり。尊像の釋迦は即ち智法身の相なり。初發心の本吾が祖師道慈律師、推古天皇の御願を遂げなす者なり。之に依て吾が大師石淵廣信正、彼寺を本寺となして、而も御弟子等を皆入住せしむるなり。隨つて吾彼寺を以て本寺とするなり。但し轉命に依て東大寺に渡りて、南院を建立す。此間に出世せる弟子等は、便宜に東大寺に入住するなり。方に今本章を穿するに、吾が先師の御寺大安寺は是れ勝地なり。先師地を管めて建立せられたり。須らく吾が弟子後生の門徒等、彼寺を以て本寺となして薄迦大師に住へ奉るべし。彼中に西塔院を以て根本の廟となす。具なる由は別の修多羅にあり。復師資血脈の圖は別紙にあり。一を得て萬を知れ。

一、眞言の場に宿住して師師の門徒とならんと欲はん者は、必ず先づ須く情操を以て本となすべし縁起第九

【大師】一本には「本師」となす。
【修多羅】一本には「多羅」となすもこれは經典の意なるが故に修多羅に作る。
【血脈】一本には「奘脈」に作る。血脈とは眞言密教を傳授せし系圖なり。

夫れ以れば大唐眞言宗の門徒は、本より自他徒を問へず。赤子の時より人の子を得て教へて弟子となす。螟蛉の他の子を以て己が子となすが如くして後に出家せしめよ。是の如くして佛性の門を繼ぐ者なり。然れば則ち彼に準するに赤子を看定めて勞り養うて心を決り彼の操行を備ふべし。若し當るべからざれば早く他家に却けよ。道理に叶はば留め護りて道を習はしめよ。若し門徒の内たらん者は、操行宜しき者は我が師人の資を簡はず、汲引して密教の性を繼がしめよ。設令ひ視しき弟子なりと雖も、操意不調ならば簡略して同

じく共にすべからざれ。何に況んや眞奥の道を授けしむべけんや。

一、東寺に長者を立つべき縁起第十

夫れ 以れば吾が弟子たる者、末世後生の弟子の内に成立せし僧綱は、上下の崩次を求めず。最初に成り出でんを以て東寺の長者となすべし。長者は既に是れ座主なり。唐の法に準じて座主號を奏聞せんと欲す。先より思ふと雖も山に入るの間、既に忘脱せしめて未だ此事を遂げず。須らく諸の弟子等必ず此事を遂げよ。皆是れ不要の言あるにあらず。併ら令法久住の謀ごとなるのみ。我が後の資、斯を難ずること勿れ。

【敬ふ】 一本には「驚」に作るも意通ぜざるが故に敬に改む。

【假使】 一本には「假令」に作る。

【互】 一本には「失」に作るも意通ぜざるが故に互に作る。

【敬尊】 一本には「驚尊」に作るも意通ぜざるが故に敬尊に改む。

夫れ 以れば、大唐の法は青龍寺の如し。然る所以は、彼寺は元來、他類あることなし。僧數千なりと雖も皆他の徒に非ず。厥中に若し一人も不和の者あれば、諸衆共に情操を和調して譏事なからしめよ。何に況んや疵を分て俗家に及ばんや。方に今翼くは、一家の徒假使ひ數千萬なりとも、各各互ひに護り惜んで他家に出すこと勿れ。一心に專念して將に座主官長を敬尊すべし。彼を誹り此を謗して相互に怨むこと莫れ。亦我が師、人の師、限別を爲すこと勿れ。亦慈眷を分つに我が資、人の資を簡ぶこと勿れ。但し處風に隨はず、宗の意に叶はず、放逸邪見ならば更に共にすることを得ざれ。都て吾が末資に非ず。一を得て千を知れ。

一、末代の弟子等、三論、法相を兼學せしむべき縁起第十二

夫れ以れば、眞言の道、密教の理、同天性の故に阿字の義に入らなり。然り而して萬物の意を案するに皆内外あり。然れば則ち密を以て内となし、顯を以て外となして必ず兼學すべし。茲に因て本宗を以てて本學を重んずること勿れ。宜しく吾が心を知つて兼學すべきのみ。但し人の器に任せて兼修るに堪えざらん者は、將に本業に任せて精進修行せよ。具たる由は別に在り。青龍寺の何事ら此のみ。彼に依て之を示す。亦宗分の講讀は定額の中には要望に非ざれども、修行の人を以て之を備ひ定めよ。

一、東寺に供僧二十四口を定むる緣起第十三

夫れ以れば、件の寺に供僧を定むること元官符に注するは五十口なり。今は二十四口に奏し定む。方に今未代の所有の志を伺ふに、本願聖靈の元處迹に崩じて、未だ造し畢るに堪へず。加以ならず未だ莊田正稅等を入れられず。寺大にして料少し、因て以て奏し定む。中に就て二十一口は修學修行の者、三日は即ち三綱造治雜預の者なり。是れ亦皆淨行の人を用ひよ。員外の人と有犯の僧を用ふることに勿れ。但し王巧意操風流有つて、修理造作莊嚴佛事に用ふべき者をば、淨不淨を求めずして、非入寺の權の三綱に置け。之に依て他家の穢俗等を猥雜することを得ざれ。阿闍梨耶、一を得て千を悟れ。

一、二十四口の定額僧を以て、宮中の正月後七日の御願修僧に、請用すべき緣起第十四

夫れ以れば、大唐青龍寺の住僧數千なり。中に就て供僧一百口を定む。皆秘密の徒な

【小伽藍】一本には「少伽藍」に作る

り。即ち内道場の御願、正月の修僧等に此を以て請用す。但し今物の意を案するに、我が日本國の修僧十五日の中に、大阿闍梨一人、入室の弟子一人。謂く入室の弟子とは、是れ佛舍利等を守らしむるためなり。三綱の中に行事一人。今は十二日を以て年替りに請用すべし。彼支度は皆式文あり。努力他僧を請用せしむること勿れ。須く先づ七日以前に修僧等の名簿を録して奏聞せよ。次に修僧を參入せしめ畢つての後亦奏聞せよ。若し殿上の仰に省き捨てらるる僧徒は、厥人なりと雖も速かに罷り出でしむべし。此に依て非門徒の僧を請補することを得ず。但し大阿闍梨の心に任せて門徒の中の智行者を簡定して、亦奏聞を経て請用せよ云云。

一、宮中の御願、正月修法の修僧等、各各所得の上分を分つて、高野寺の修理雜用に充つべき縁起第十五

夫れ以れば、大唐青龍寺の祖師、天台山下に私の小伽藍を建立せられたり。彼を新禪寺と名く。内道場正月の施物の上分を以て彼道場を修理せしむ。亦青龍寺の大衆の年中所得の上分を以て彼用に充て用ひしむ。此れ凡の政に非ず。師資の跡を芳しくする謀なり。後生の資を啖ひ難すること莫れ。

一、宗家の年分を試度すべき縁起第十六

夫れ以れば、件の宗分の度は、須く初め思ひしが如きは東寺にして試度すべきなり。然り而して山家を荒さしめざらんと欲ひ、更に官符を改め奏して金剛峯寺に申し下さんと

欲ふ者なり。敢て東寺を厭ひ南嶽を汲んや。今須く東寺の座主大阿闍梨耶、感事して之
 を改め直ぐせんや。亦諸の定額管の中の童子等をして、山家に於て誦經して
 即ち東寺の戒壇に於て具足戒を受けしむ。又座主山家に於て、毎十年修行せしめて、賦
 修各各に隨つて新戒を受學すべし。具には其の文にあるのみ。但し座主大阿闍梨といふ
 は、即ち東寺大阿闍梨の職なり。門徒の間に修學して、最初に成り出でて長者たらんものを
 言ふなり。萬歳を求むべからず。修學を業となして最初に成り立つものを長者とせよ。

一、後生東師の弟子、願望の恩を報すべき轉經第十七

夫れ以れば、東寺の座主大阿闍梨耶は、吾が東師後生の弟子なり。吾が誠度の以後に
 弟子數千萬あるん間の長者なり。門徒數千萬なりと雖も、併ながら吾が後生の弟子なり。
 願望吾が類を見ずと雖も、心ある者は必ず吾が名號を聞て恩徳の由を知れ。是れ吾が白屍
 の上に更に人の勞を欲するに非ず。密教の壽命を語り續いで精華の三處に聞かむべき
 謀なり。吾が開眼の後には必ず方に兜率陀天に往生して、彌勒菩薩の御前に侍すべし。五
 十六億餘の後には必ず慈尊と御共に下生し低養して吾が驚踏を問ふべし。亦且つ未だ下ら
 ざる間は、微雲管より見て信を棄すべし。是時に勤めあらば祐ひを得、不信ならん者は
 不幸ならん。努力努力後に味かにすること勿れ。亦僧尼令を棄するに曰はく、「菩提は制の
 限りに有るに非ず」と言へり。然れども間も常に密教の心を棄するに、此家に於て此事なから
 しむべし。然る所以はもし未練の僧尼に童子等は此遊を放されなば必ず後代の過あらん。

【龍華の三處】一
 本には、龍華の第一
 庭」とするも、此
 句もと龍華三處
 より來りしもの故
 今は龍華の三處と
 す
 【微雲管】金剛定
 中にあるての心な
 りとされば、中に
 「微雲管」とするは
 誤りなり。

何に況んや爾恭雙六をや。一切停止せよ。若強ひて此事を好む者は、都て吾が末世の資に非ず。刹利種性蔭子蔭孫を論ぜず。併ながら悉く追放せよ。一切寛宥を得ること勿れ云云。

一、東寺の僧房に女人を入るべからざる緣起第十八

夫れ以れば女人は是れ萬性の本、氏を弘め門を繼ぐ者なり。然れども佛弟子に於て親み厚くすれば詭惡の根源嗷嗷の本なり。是を以て『六波羅蜜經』にはく、「女人に視近すべからず。若猶親近すれば善法皆盡く」等云云。然れば則ち僧房の内に入居すべからず。若要言有て諸家の使至らば、外戸に立ちて速に返報して之を却けよ。時尅を矧すことを得ざれ。具に青龍寺の儀に準ぜよ云云。

一、僧房の内にして酒を飲むべからざる緣起第十九

夫れ以れば酒は是れ病を治するの珍、風を除くの寶なり。然れども佛家に於ては大なる過となすものなり。是を以て『長阿含經』にはく、「飲酒に六種の過あり」等云云。『智度論』にはく、「四十五種の過あり」等云云。亦『梵網經』の所説甚深なり。何に況んや祕密の門徒酒を受用すべけんや。之に依て制する所なり。但し青龍寺の大帥と共に御相弟子の、内供奉十禪師順曉阿闍梨と共に語ひ擬して曰はく、「大乘聞文の法に依らば、治病の人には鹽酒を許す。之に依て亦圓座の次でに平を呼んで數數用ふることを得ず。若必要あらば外より瓶にあらざる器に入れて、來て茶に酌へて秘かに用ゐよ云云。」

【四十五種】一本には「三十五種」となす。

【大乘聞文】一本には「大乘聞門」となす。

【主託】一本には「主託」に作る。

【内外の情】一本には「内外の汗」とす。

【吾が資末羽】此句中の羽其意辨へ難し。

【秘藏に存し】一本には「秘藏に在り」となる。

一、神護寺をして宗家の門徒長者大阿闍梨に口入せしむべき縁起第二十

夫れ以れば神護寺は是れ和氣の氏の建立、八幡大菩薩主託の庭なり。而るを眞綱大夫達の言へる所に依て、余頃年修住す。爰に眞綱大夫達、密教を建立するの言に於て、朝夕に宛も法を護るの想を示すが如し。茲に因て師境の期篤く肝軸にあり。加以らず、寺院を永代に付屬して、敢て内外の情なし。然れども後代必ず争ひ嗽くすることあらん。吾が資末羽等狀に隨つて進退せよ。一を得て萬を知れ云々。

一、輒く傳法灌頂阿闍梨の職位、並に兩部大法を授くべからざる縁起第二十一 秘密の條章は書き散す可らず守り惜むべし。

夫れ以れば密教は是れ大日如來の心肝、金剛薩埵の腦膽なる者なり。而るを輒く非器の者に授くれば、密教の主の御身より血を出すの罪あり。是を以て昔し大日尊金剛薩埵に勅して曰はく、「非器の者に授くべからず。若非器の者に授くれば密教久しからず。法身より血を出す罪自然に生ずべし。」と者へり。又金剛薩埵龍猛菩薩に宣はく、「伏して以れば大日如來は一切衆生のために密教を説きたまふなり。萬生の利益を蒙るに非ずといふことなし。但し此法は是れ如意寶珠の喩の如し。如意寶珠は名號は聞くことあれども實身を顯さず。然れども萬寶を出生して一切衆生を利益す。龍宮の秘藏に存し、龍王の肝に居すれども輒く身を顯さず。秘藏並に龍の肝に居すと雖も此玉は龍王の衆に攝せられず。是法も亦復此の如し。所以は何ん、密法は阿闍梨の心肝並に經藏にありと雖も、阿闍梨の心府に

【厭相】一本には「厭想」となるも今は意を汲んで相を取る。

【借む】一本には「借」に作るも今は義を取つて借むに改む。
【印契密語】印像なり。即ち密教の手印なり。密語とは眞言なり。
【五股】密教行法の時所用の器具なり。

任ぜられず、名號は聞くことありと雖も實身を顯さず。唯し威光を以て一切衆生を利益す。密教の最貴最尊の道理唯し是れ然なり。是故に阿闍梨耶、我能く道を知れりと欲うて己が私の劣心に任せて、非器の者に授くべからず。若頗る證器の者あらば、唯し尊法を授けて、定んで彼心器を看よ。然して後に金剛界大法の一部を授けよ。然も猶未練根の者に授くれば、必ず後に悔ゆることあるべし。何に況んや輒く兩部の大法を授けんや。但し兩部の大法を授けんと欲はば、顯に人器の氣色を見定めて後に、本尊界會に向うて能く祈願して夢に厭相を見よ。若感應あらば彼と學ばんと欲はん者、三箇月修行精進せしめて、然して後に兩部の大法を授くべし。但し傳法灌頂阿闍梨の職位に於ては、專ら然も授け諸すべからず。所以は何んとならば、非器の者に授くれば、金剛薩埵と密迹神と俱に呵嘖を加へたまふ。證器の者に授くれば大歡喜を作す。是れ則ち合法久住の緣なり。傳法灌頂位阿闍梨の職を護り惜むこと、己が肝神を護り惜むが如くすべし。輒く傳法の印契密語を知らしむべからず。若精進の者あつて望み仰げば、唯大阿闍梨、語言を以て許諾の言を呼んで、五智の五股を以て、仰人の首を加持すること、三般瓶水を散ぜよ。是れ亦證器の人を看定めて然の如くせしむべし。當是人を以て修法の處に於て諸の護摩雜道に充て用ふべし。亦尊法を以て弟子に一部を許し授くべし。兩部に於ては更に傳教せしむべからず。傳法の言を以て傳法の印契密語に於ては、能學の者のために練根已熟の弟子に傳授すべし。僧法を惜むべし。傳法の印契密語に於ては、能學の者のために練根已熟の弟子に傳授すべし。猶未熟根には、更に授くべからず。須く大阿闍梨耶、世間の人の赤子を求め得て、方便の

【是心を知て】

一本には知を「知」に書くも今は意を取つて知とす。

【土心水師】大師

人名を説せんが爲に特に原宇の冠、爾、作等を取つて察智し難からしめらる。ハ一山も山名なれども以上の如く其原宇の一部を示して全體を示さず。されば今は大師の御意に従ひ之が原宇を出さず。

【金剛峯寺云云】

この章一本には第二十一として今の二十一と相前後すれども今は高野山御影堂の所蔵の原本の文に依ひ之を以て第二十二とす。

【此條】一本には「此章」となる。

言を以て世俗を出離せしむべし。彼が操意を講せ量りて、出家入道得度せしめ、具足戒を受けしめよ。生年五十に滿ちて以後、轉法輪、阿闍梨耶の職位を授けて、密教の種性を繼がしむべし。哀しいかな、歎しきかな。眞道傳へざらんと欲すれば、法種を繼ぎつべし。之を傳授するときは宛も若き童子に兩舌の詞を持せしむるが如し。宜しく是心を知て、阿闍梨の職位を授くべし。非器の人の甘き語言を忍ばずして、是位を諸に授くれば、彼れ此れ會坐して、相更に密教肝心の印を授けせん。正教體に非ず、滅法の相自然に轉に至る。是罪は滅法の阿闍梨に得べき所なり。十傳大日の御前にして、百千劫懺悔すれども都て滅除せず。是を以て入室有譽の弟子なりとも、非器の者に於ては、更に是位を授くべからざるものなり云云。是章句は梵本にあり。經文並に義軌の内より取り離ち出して密かに納むる所なり。吾が三衣箱の底に納り置く。亦轉進峰の入室の弟子沙門、土心水師が所にあり云云。

一、金剛峯寺を東寺に加へて、宗家の大阿闍梨管務すべき縁起第二十二。

右件の寺は是れ少僧が互に建立する所なり。然れども官に遊めて御職の處とする者なり。宜く是心を知るべし。吾が弟子等の中、密に建立せん長者東寺の庫主大阿闍梨耶、一向に管攝すべし。遺告を誤ること莫れ。一を得て萬を知れ云云。

一、一山の土心水師が建立の道場にして、朝毎に遊覺の法三箇日夜を修すべき縁起第二十三。此條は文書に案内して散せしむべからず。猶ほ己が眼肝を守り護る如くせよ云云。

【凡の所傳に非ず】一本には「非凡の所傳」となるも義通ぜざる故に上の如くす。
 【大阿闍梨】一本には「大阿闍梨耶」に作る。
 【本尊海會】一本には「本尊界會」に作る。
 【念ひ煩ふ】一本には「思ひ煩ふ」に作る。

【沈】一本には「沈」とあるも誤りなるべきに付き今は沈となす。以下皆然り。

夫れ以みれば避蛇の法呂は此れ凡の所傳に非ず、金人の秘要にして、阿闍梨の心肝口決なり。具には別の意あり。東寺代代の大阿闍梨、彼を像想て法を修せよ。乍ら後夜毎に念誦の畢りに護身をなせ。道肝を精進の峰に籠め、亦本尊海會を彼袖に安せり。是秘密の呂は語らざれば知れず、念ひ煩ふこと千廻なり。専ら猥はしく聞かしむべからず。一を得て萬を知れ云云。

一、東寺座主大阿闍梨耶、如意寶珠を護持すべき緣起第二十四
此法を護り守ること宛かも 傳法の印契密語の如くせよ
 案に散せしむべからず。

夫れ以れば如意寶珠は、是れ無始より以來龍肝鳳腦等にあるに非ず、自然道理の如來の分身なる者なり。或は偏に鳳肝龍腦にありと云云。是れ大なる虚言なり。所以は何んとならば、自然道理の如來の分身にして、惟れ眞實の如意寶珠なり。自然道理の如來の分身と號するは、是れ祖師大阿闍梨の口決に任せて成生するは玉なり。密が上の密、深が上の深なる者なり。輒く儀軌に註せず。是れ大日如來の所設なり。成生の玉といふは是れ能作性の玉なり。須く九種の物を以て之を爲る。爾九種とは、一は佛舍利三十二粒、二は未用他色の沙金五十兩、三は紫檀十兩、四は白檀十兩、五は百心樹の沈十兩、六は桑の木の沈十兩、七は桃の木沈十兩、八は大唐の香木の沈十兩、謂く香木沈とは、専ら妙香木の沈ならんを以て之を用ふ。九は漢地の木沈十兩なり。是等の中に沙金五十兩、白銀五十兩に用ひず。是を以て合せて壺に爲りて彼三十二粒の舍利を安置す。即便永く壺の口を閉ぢて誦封して堅

【細絹】一本には細を油に作るも恐らくは細の誤りならん。

【芥子供】一本には芥子供に作る

く結んで彼六種香水の洗を以て、未用他色の鐵の口に入れて之を吞き、未用他色の絹の囊を以て之を漏ふこと七箇度、其糟も亦同じく吞き、末にして同じき囊に入れて之を漏へ。是の如くせば乍ち妨げなき物の、未用他色の眞漆を以て之を丸め、等分に合せ成して彼佛舍利の壺に入れ乍り、方圓合丸して高下等分にせよ。是の如くする間、大阿闍梨屏風を立てて清淨の細工を率して、屏風の内に入れ合丸せしむべし。彼細工の口に名香を含ませしめて専ら雜誤せずしてこれを丸めしめよ。又大阿闍梨耶は同じく口に名香を含んで不動の眞言三百遍を誦し、次に佛眼眞言一千遍を誦して丸を爲さしめよ。亦未用他色の香油を以て五方に明燈を炬せ、但し眞言は呪遍に滿つと雖も、事の畢るに及ぶまでは、尙員外に之を誦すべし。亦同門の間に、智行の僧十五口を以て、立て替へて乍ち一番二時を以て梵限となして、三箇の番を結んで不斷に修法せよ。此十五口の僧は、屏風を却ること三丈許なり。同門の僧なりと雖も事の心を知らしめされ。玉を造ること既に畢て而も事の發より始めて、七箇日夜の間不斷に修法せよ。此七箇日夜の法の前後に神供すべし。然して後、寶珠を以て楡の深き箱に入れ寶臺に安置せよ。其寶臺は水壇を作り、其中に細絹を敷て臺を立つべし。壇の廻りに五色の絲を引いて、然して後吉日を求めず。更に亦十五口の智行の僧は、親しく率ゐて大阿闍梨三時に念誦せよ。又五口の僧の内を以て毎時に芥子供せよ。是の如くして百箇日夜を滿つべし。十日の間神供せよ。また彼寶珠百箇日夜に滿つるに至るまでは輒く大阿闍梨耶も見ざるべからず。何に況んや他人に見せしむべけんや。百日に滿な

【頂戴】一本には「頂戴」に作る。頂戴の誤りなり。

【善性の心を擧ぐ】一本には擧ぐを攀るに作る。

【堪能】一本には「堪」の字なし。【怨親平等】一本には「怨心平等」に作る。親の誤りなるべし。

ん後は、赤色の九條衣を以て此玉を裹むべし。亦大阿闍梨再拜の言を誦す。口には再拜と曰ふとも而も實に拜すること三たびせよ。即ち手に玉を取て頂戴して月輪を觀行すべし。然して後、玉を赤色の袈裟に裹み乍ら、大阿闍梨隨身して毎事に歸命頂禮す。出入の前後左右に之を恃み仰ぐべし。又入室智行の弟子たりとも見せ知らしむべからず。假令箱ありと見ると雖も、寶珠の所在を見知らしめざれ。道理の意を案ずるに、大海の底龍宮の寶藏無數の玉あれども、然れども如意寶珠を皇帝となす。方に其實體を伺ふに、自然道理の釋迦如來の分身なり。何を以て之を知る。此玉は寶藏より海龍王の肝頭の下に通ず。藏と頸と不斷に常住す。或る時には善風を出し雲を四洲に發して萬物を生長し、一切衆生を利益せしむ。水府陸地の萬物誰か利益を蒙らざらんや。而も世間の凡夫等、己が愚なる口に任せて如意の玉は寶を涌すと。彼海底の玉は、常に此能作性の寶珠の御許に通じて、親近して徳を分つ。所以に、觀じて大阿闍梨歸命頂禮在大海龍王藏並肝頭如意寶珠權現大士等といふべし。三般之を誦して念觀して本尊の眞言を念誦すべし。凡そ一切の惡を卻け善性の心を擧ぐることを爲すべし。此法呂は『大毘盧遮那經』の文なり。然りと雖も密が上の密、深が上の深なれば、祕句を闡留めて唯阿闍梨の心藥となすなり。寫し散ぜしむべからず。若是を披露せば密教久しからず。親しき弟子の内なりとも彼心性不調ならん者には、更に授け知らしむべからず。代代の座主阿闍梨耶、若は自門の弟子、若は同門の内の相弟子、並に諸門徒衆等の中に、心に堪能ならん者を看定めて、怨親平等の觀行を以て預け

【頂戴】一本には「戴頂して」となす
【名山】一本には「名聞」となす

【能作性】一本には性的の字なし

識らしむべし。若し付法弟子の中の者を簡んで、杖杖に涉して大阿闍梨耶の手に留めず。門門に移して以て杖奪せむれば、不信の者遂に道を淡になるべく、自然に隱没しなん。茲に因て密教經に讀せんとす。然れば明も猶ほ東寺座主長者たらんに必ず付屬すべし。彼付屬を撰せんの日は、三箇日洗浴して兩萬の諸尊を觀念せよ。又普天の下、率土の上の冥官の衆を觀じ歸かし、四無量衆を發起して付屬せよ。慈ある父母なりと雖も之を知らしむること勿れ。此の如くに秘密することは即ち是れに密教の肝性を護るなり。但し大唐大阿闍梨耶の付屬せらるる所の、能作性の如意寶珠は、頂戴して大日本國に渡る名山の勝地に勞り施ること既に畢んぬ。彼勝地といふは調ゆる精進の峰、土心永師が修行の處の中の窟なるのみ。勞力努力後人に波志を知らしむること勿れ。是を以て密教劫に禁ふ法を守りて之を傳へん。復東寺大阿闍梨の歸舍利は、大阿闍梨須く密法の印契密語を守り惜むが如くすべし。何を以て之を言ふ。彼作性の玉は心本なるが故なり云々。

一若し末世に因襲非種等自て、密華圖を破せんと撰せんに、また修法すべき緣起第二十五。是秘密の神章を書き散せしむ。又かろず、之を守り惜しめよ。

夫れ以れば昔々竺國に、一の因婆一の非稱等有て、是密華圖を破す。爾時に華園の門徒の中に一の強信の者有て、鬼童子平の法昌を修す。七箇日夜、齋。又次ぎ次ぎに員度を修せしかば、彼因婆等自ら退きて爲に密華圖安寂となるなり。是を以て末世の阿闍梨耶、宜しく是由を相て必ず彼法昌を勤め守るべし。彼法昌は、入室の弟子、一由精進の嶺、土

【藥に在て】一本には藥に存して」と

【上件の遺告云云】以下の文及び法師六名の列名は高野山御影堂所藏の正本にはなし。但し他の本に之を加ふるものあるが故に今は特に線を入れて之を附加す。

心水師の竹木目の底にあり。然れば則ち大阿闍梨耶、是道を惜み護ること宛も傳法灌頂、阿闍梨の職位の印契の如くせよ。凡て須く傳法の印契密語のごとくすべし。並に凶婆を調ぜし法呂は、輒く非器の心不調ならん者に授くべからざるべし。若し是の如きの道、己がわたくし私の心に任せて、簡ぶことなく之を授け放さん時には、諸尊護法天等俱に共に聽たまふに非ず。大阿闍梨に於て大災を爲さん。善人を選び覺めて之れに授け放す時には、俱に共に大歡喜をなして法性の種を續かしむ。所以に阿闍梨の心肝の藥に在て、器の人を待ち覺めて、密教の子を斷ぜざるべし。當に知るべし、得ること易くして難きは、大阿闍梨の位なり。豈用心せざるべけんや。是を以て傳法の印密語をして猥雜せしむべきに非ず。存件の遺書、努力めて遺失することを得ざれ。故に告ぐ。

承和二年三月十五日

入唐求法沙門空海

上件の遺告を承る法師等

法法法法
師師師師
眞眞眞實
紹雅濟惠

法ほつ法ほつ
師し師し
眞まこと堅かた
曉あき惠めぐみ

御遺告ごいごう（二十五條）終

【一卷。是れ即ち弘法大師が末徒に遺されし誡にして法教錄に載する所なり。今は一は弘法大師全集、其他三本を參考して國譯したり。高野山得仁師の一、弘法大師年譜の一は遺誡木鐸を引いて遺誡二本とあれど、其二本の中は之に遺世に弘仁の遺誡と稱するは即ち是れなり。眞言宗末徒等云云。此一句一本にはなし。恐らく後人の追加なるべし。心警一本には縁一本には縁の字の上に因を加へて「因縁」となす。釋梵一本には「梵釋」となす。今一は底山上普通に讀誦する時の例に倣ひ「釋梵」とす。清淨一本には淨戒に作る。

遺ゆい

誡がい

弘法大師

眞言宗末葉の弟子等、宿業の故に甚だ以て愚迷なり。須らく文に就いて用意すべし。仍つて此文を以て常に座右に置いて心警の縁となせ。

諸の弟子等に語ぐ。凡そ出家修道は本佛果を期す。更らに輪王釋梵の家を要めず。豈況んや人間少少の果報をや。發心して遠涉せんには足に非ざれば能はず。佛道に趣向せんには戒に非ざれば寧ろ到らんや。必ず須らく顯密の二戒堅固に受持して清淨にして犯なかるべし。所謂、顯戒とは三歸、八戒、五戒及び聲聞菩薩等の戒なり。四衆に各各本戒あり。密戒とは所謂三摩耶戒なり。又は佛戒と名け、亦是發菩提心戒と名け、亦是無爲戒と名くる等なり。是の如きの諸戒は十善を本と爲す。所謂十善とは身三口四意三なり。末を攝して本に歸すれば一心を本と爲す。一心の性は佛と異なることなし。我心と衆生心と佛心との三差別なし。此心に住すれば即ち是れ佛道を修す。是寶乘に乗すれば直ちに道場に至る。若し上上智觀は即身成佛の徑路なり。上智觀は三大に果を證す。中智觀は緣覺乘、下智觀は聲聞乘なり。是の如きの諸戒、具足せざれば慧眼闇冥なり。此を知つて眼命を護るが如くすべし。寧ろ身命を棄つとも此戒犯すること莫れ。若し故に犯する者は、佛弟子に

【華開菩薩戒】一本「沙彌具足戒、十重六八戒」

【三昧】一名「三摩地」

【身三口四意三】一本には「身三、四、口三、一、意三」となる

【此を知つて】一本には「此意を解つて」となる

【此戒】一本には「此戒の戒」となる

【何んぞ能く】一本には「何んぞ能へて」となる

【三世の佛の戒】一本には「二、三世の佛の戒」に作る

【近求圓寂】一本「近求圓寂」とす

【棄く三菩提を證し】一本には「菩提を證し」に作る

【往き去れ云々】一本「往き去れ、住まることなかれ、往き去れ、住まることなかれ」とす

【仲夏之月】一本「仲夏月」とす

【仲夏月】一本「仲夏月」とす

非ず、金剛子に非ず、蓮華子に非ず、菩薩子に非ず、摩訶子に非ず。吾が弟子に非ず。我も亦彼が師に非ず。彼泥團折木と何ぞ異ならん。師資の道は父子よりも相親し。父子は骨肉相親しと雖ども、但だ是れ一生の愛にして生死の隔たり。師資の愛は、法の義を以て相親し、世間世間に苦を披き棄て與ふ。何ぞ能く比況せん。所以に慇懃に提擲して、之を注鵠に示す。若し我が師に隨はば即ち是れ三世の佛の戒に隨順するなり。是れ即ち佛説なり。是れ我が言にあらず。諸の近求圓寂、近求菩薩子等、此等の戒を奉行して精しく本尊の三摩地を修し、漸かに三摩地を證して疾く三菩提を證し、二利を圓滿し、四恩を救済すべし。所謂冒地薩埵豎に異人ならん。我が教誡に違ふは即ち諸佛の教に違ふなり。是を一聞と名く、長く苦海に沈んで何れの時にか覺ることを得ん。我も又永く共に住して誨いませ。往に去れ、往に去れ、住まること莫れ、住まること莫れ。

弘仁四年仲夏之月晦日

遺

終

遺

誠

【此一卷は又「重遺誠」と云ひ、或は「高野贈大僧正の遺誠」と稱するものにして、同じく法教録に載する所なり。即ち承和元年の弘法大師御遺なり。】
 【衣を染む】一本には「衣を著る」となるも、衣を染むの句、大師著作の論釋にもあるが故に之を取る。【意を等しくして】一本には「意を等しくするを云ふ」となる。今は取らず。
 【利益す】一本に「已れを獲る」と作る。
 【府所羅惡人は即ち一本には此全女なし。】
 【二三子】一本には「二三金剛子」に作る。
 【無上悉地を證すべし】一本には

諸の金剛弟子等に語ぐ、夫れ頭べを剃り、衣を染むるの如きは我が大師薄伽梵の子なり。僧伽と呼ぶ。僧伽とは梵名なり。翻じて一味和合と云ふ。意を等しくして上下等閑なく、長幼次第あり。乳水の別なきが如くして佛法を護持し、鴻雁の序有るが如くして、群生を利益す。若能く已を識るをば即ち是を佛弟子と名く。若斯に違ふをば即ち魔黨と名く。佛弟子は即ち是れ我が弟子なり。我が弟子は即ち是れ佛弟子なり。魔は即ち吾が弟子に非ず。吾が弟子は即ち魔の弟子に非ず。我及び佛の弟子に非ざるは所謂府所羅惡人なり。旃陀羅惡人は即ち佛法國家の大賊なり。大賊は即ち現世には自他の利なく、後生には即ち無間の獄に入らん。無間重罪の人は諸佛の大慈も覆蔭すること能はざる所、菩薩の大悲も救護すること能はざる所なり。何に沉んや諸天善神誰人か存念せん。宜しく汝等二三子、熱出家の木意を顧み、惟入道の源由を尋ぬべし。長兄は寛仁を以て衆を調へ、幼弟は恭順を以て道を問へ。賤貴を誦ふことを得ず。鉢單衣にして煩擾を除き、三時に上堂して木尊の三昧を觀じ、互相入觀して無上悉地を證すべし。五濁の濃風を掃じて三學の雅訓を勤め、四恩の廣徳を酬いて三寶の妙道を興せ。此れ吾が願ひなり。自外の誦誠は一ち顯密二教の如し。遠越すること莫れ。若故に遠越せば五大忿怒十六金剛法に依つて

「早く大悉地を證すべし」となる。

【内外】一本には

「五大忿怒」一本

には「五大忿怒」となる。誤りなるべし。

【十六金剛】一本には「十六大金剛」に作る。

【檢極】一本には

「檢録」に作る。

【五月二十八日】一本には「五月二十日」となる。

檢略せん。善心の長者等、内外の法律に依つて治擯せよ。一を以て十を知れ。煩しく多言せず。

承和元年五月二十八日

遺

誠終

一期大要祕密集

典教大師撰

多く密藏に依る。師に就いて受くべし。

【一】 夫れ一期の大要は、最後の用心に在り。九品の往生は、臨終の正念に任せたり。佛道を求むるもの、當に此の用心を習ふべし。出離生死は、只此刹那にあり。密藏の要義を集めて九種の用心となし、極悪の罪霧を拂つて九品の蓮月を望まん。若最後臨終の儀軌に依らば、破戒の僧尼も必らず往生を得、造惡の男女に定んで極樂に生ぜん。何に況んや有智有戒をや。何に況んや善男善女をや。此れ眞言祕觀の致す所なり。深く信じて狐疑することなかれ。

- 【二】 一に生命を惜むべき用心
病を療し安隱を致し往生の業を積まんと欲す。
- 二に生命を惜まざる用心
命期既に近づけば身を捨てて、更に精進せよ。
- 三に本住所を、移す用心
三界の火宅を出でて、九品の淨刹に入らん。
- 四に本尊を奉請する用心
諸佛の前に在つて轉法輪を請ぜよ。
- 五に業障を懺悔する用心
罪業の雲厚くも懺悔の風に散ぜん。
- 六に菩提心を發す用心
本覺本有の吾なれば、發心すれば即ち成佛す。

【一】 本書一卷は其題の示す如く、行者一期の要心を説きしものにて、全卷を九章に分ち、第一章には序論として人間生命の愛惜すべきを説き、第二章以下には正しく臨終の用心（第七章まで）及び（第八章）臨終の相（第八章）及び没後追福菩提の必要等を説き示す。されば今之を簡條書にすれば、簡條に及べば、往らに對かす、臨終正念を求むべし（第一章）二、人もし命終と定まらば身心を清淨にし、諸事寂靜を事とすべし（第三章）三、人もし命終近づけば、本尊を枕頭に請來してその引接を欣ぶべし（第四章）四、その人もし臨終を知らば懺悔業障を事とすべし。此章にては特

に中川實鏡上人の
 病中修行記を引證
 して、（第五卷）の必
 要及びその方法を
 説く（第五卷）五、
 臨終に際しては必
 ず心提心を發す
 るべし、この章にて
 は先づ三義、有願、
 三摩地、三種菩提
 心を説き、心月輪
 觀（十種）、阿字本
 不生の義（阿字と
 十義）及び心月と
 阿字に對する問答
 を載せて疑義を決
 擇す（第六章）六、
 眞言行者の植樂觀
 臨終の相（第八章）
 八、守護國界經の
 意によりて没後追
 福菩提の必要用心
 を説く（第九章）
 となる。

【一】 以下序言。

【九四】 上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生。
 【軌儀】 規則儀式。

【三】

一に身命を惜むべき用心。
 七に佛樂を切念する用心。緣樂實に外になし、我性常に内に樂しむ。
 八に決定往生の用心。乘蓮の佛、何くにか出づ、最後の念の中に來る。
 九に没後追福の用心。若し冥路の相を現せば、早く追善の光を放て。
 期限未だ決定せざるの間は、一向に身命を棄捨すべからず。且は佛法に祈り、且は醫藥を加へ、以て安身延壽の方術をなせ。是れ徒らに軀命を愛するにはあらず。唯眞乘を守る結縁を厚うせんと欲するなり。

【四】

二に身命を惜まざる用心。
 宿曜祿命を下は算道流弊に明して、命期を量り知らば、一向に菩提の行を修すべし。
 若病患、旬に互り、氣力日に衰へ、死の爲に吞まれんこと、必ず脱れ難きことを知らば當に緣務を息めて専ら正念に住すべし。

經に云はく、「一切の諸の世間、生ずるものは皆死に歸す。壽命無量なりと雖も必ず終盡する事あり」といへり。若き形日に衰へ老いたる體、夜夜に繋る。鮮なる花の色、程も無く即ち耗る。惜いかな留らずして木の木に散ずるの色、盛んなる人の命、乍に滅し、亦去る。鮮しいかな、還らずして焰の路に入るの體、無常の虎は貴賤を簡はず。先帝後民皆ことごとく食ひ去り、娼賈の徒は老少を斥ふことなく、若君老母等しく同じく遣ひ行く。昨日の死は人の家の中、今日の災は我が身の上なり。拙いかな、身命を抛つて早く佛道

即ち密教修法の規則形式等儀式に關する事を説けるもの。

【二】以下日次。轉法輪 佛の教法を法輪と云ひ、轉法輪と云ふ。輪は轉輪聖王の輪寶にて四天下を廻轉して諸の怨敵を摧破する故に輪と云ひ、教法も亦一切衆生の煩惱を摧破する故に此の輪寶に譬へて法輪と云ふ。

【三】以下本文、中に於て初め第一に吾人の生命を重んじ、身體を大切にすべき用意のこゝとを説く。

【四】以下は人間となり。佛法のこゝと。

に入れ。

經に云はく、「一切有爲の法は夢と泡影の如く、露の如く、亦電の如し。應に是の如きの觀を作すべし」といへり。

【五】三に本住所を移す用心。

若未だ出家せずんば早く鬚髮を除け。若本住所にあらば、心恐らくは生死に留らん。重病身を逼め段食喰し難く、醫藥驗なくんば命終近きに在らん。本任の空を起て無常の坊に居せよ。右の如く、用心すべし。

娑婆の穢處を捨てて極樂淨土を得る事を表する故なり。又品品の親屬を捨てて 種種の遺棄れ。唯三五の知識を具せよ。知識の所作後段

なり。覺めて早く此を出でよ。父母は謀魔なり、知つて疾く彼を放て。太子は域を出でて五智の嶺峯に登り、大師は定に入つて三密の醍醐に着きたまふ。移住の用心意只これにあり。身心の出家、この時に非ずんば何くぞや。一再停止して諸事寂靜にせよ。

【六】四に本尊を奉請する用心。

幡若は五色の絲、兼日に之を辨せよ。絲の長さ一丈二尺に經て合せて九尺を得。作法別にあり。已灌頂の人の所作なり。

『探玄記』に云はく、「西國の法に依らば命を捨てんと欲ふものあれば、面をして西に向つ

若し定命觀に決定しなば徒らに嘆かず臨終正念の用意をなすべきことを説く。

【宿曜】二十八宿と七曜なり。

【達摩】(Dharmā) 摩訶の義なり。

【有爲の法】爲とは造作の義にて造作を有するを有爲と云ふ。即ち因縁所生の事物は盡く有爲の法なり。

【五】以下は人もし病にて命終と定まれば汚穢なる木の住居を捨てて淨所に行き、身を清浄にして諸事寂靜を事とすべし用心の事を云ふ。

【常坊】無常堂即ち無上院のことにして臨命の病を置いて無常を觀望しむる所なり。

【三五の知識】四五人の善知識(高德の僧)なり。

て臥さしめて前に於て一の支拂の像を安置し、赤繩をして西に向はしむ。一の幡の頭を以て像の手の指に掛け、病人をして手に幡の足を提らしむ」と云云。

今は東に向つて手に五色を掛けよ。西に向ふは引集、東に向ふば東集なり。向東向西又人意に任せよ。年末の本尊何の諸佛菩薩なりとも、若は幡、若は經、像の手の指に掛け焼香せしめて、諸佛に向す。其合期を待つべし。

【七】五に要障を懺悔する用心。

【七】五に要障を懺悔する用心。絶師の意の云はく、中修行思に出づ。「惑業は是れ大菩提の障なり。久しく起遣する所必ず懺悔すべし。懺悔の方より、宜きに歸つて要を取れ。要は衣物の類を捨てて、漏呪等を誦せしめよ。廣智法、召罪、擲罪、悔罪、念、實徳、除障、光明、彌陀、滅罪、淨土の眞言、懺悔經、五十三佛名、懺法書なり、病者當に、彼眞言の體の咒字の義を念すべし。滅罪の眞言深く信じて歎ふこと勿れ。業は密教に依つて眞實相を思へ。當に惑業は業障より生ず、畏怖して縁に從ふ、業をか其本とせん。此の如く觀察する時則ち本不生縁に歸すれば、惑業即ち是れ本不生際なり。本不生際は之れ即ち法界、即ちこれ中道即きこれ實相なり。不實不妄にして定相あることなし。是欲に惑業實相の中には憂惱可毀の定相ある事なし。若爾らば豈に障道の用あらんや。妄執を堅執し、眞空を猶豫する事なかれ云云。重ねて眞法輪に住して其眞言を念誦せよ。阿彌身觀の中に菩提を違背する種あり。唯この種を斷ぜよ。次に法輪の印を結んで彼摩羅の輪を掛けといへり。

【太子】 悉多太子。即ち釋迦の初發心出家して雪山に向ひしを云ふ。

【三密】 身口意の三密。

【病人】 病人もし命終に近づきぬれば枕元へ本尊を奉請して其引接を欣ぶべき用心のことを示す。

【已灌頂の人】 既に秘密眞言の灌頂に入つて兩部不二の大法を受け阿闍梨位に登れる人を云ふ。

【六玄記】 華嚴探玄記。

【西國】 印度の事。

【引接】 或は印接と云ふ。佛菩薩の手に衆生を引き取ることを。

【七】 第五に中川實範師の病中修行記を引して懺悔業障の用心を機す。【實範】 中川流の祖。字は蓮光、少將上人と云ふ。天台、律を兼學び

【八】 六に菩提心を發す用心。別二あり

「菩提心論」に云はく、「我今阿耨多羅三藐三菩提を志求して餘果を求めず、菩提心決定するが故に、魔宮震動し、十方の諸佛皆ごとく證知したまふ。乃至其行相とは、三門を以て分別すべし。諸佛菩薩昔因地に在して是心を起し已つて、勝義行願、三摩地を成となし、乃至成佛に至るまで、時として暫くも忘るることなし。唯眞言法の中のみ即身成佛するが故に是れ三摩地の法を説く、諸教の中に於て闕して書せず」といへり、心を此文に懸け、又發菩提心の眞言日別三百遍を誦せよ。已上總論の發

一に行願の菩提心。論に云はく、「我當に無餘の有情界を利益し安樂すべし。十方の含識を觀するに猶し己身の如し」と。この文の中に二あり。一には利益の菩提心なり。二には安樂の菩提心なり。一に利益の菩提心とは、凡そ心あるものは、皆本覺の大日如來、阿闍如來、寶生如來、彌陀如來、不空如來の五智、一百八智、乃至十佛刹微塵數等の無邊の智佛、無數の理佛を具して一衆生として成佛せざるものなし、ことごとく勸めて當に菩提心を發さしむべし。故に論に云はく、「應に知るべし。一切有情は皆如來藏の性を含じて皆無上菩提に安住するに堪任せり、この故に二乘の法を以て得度せしめず」といへり。二に安樂の菩提心とは、一切有情は皆成佛の器なり。有識有情は當性の諸佛、遮那、釋迦は已成の如來なり。有情を惱すものは即ち如來を惱すなり。衆生を輕んずるものは諸佛を輕んずるに擬す。有情を逼めて、苦心を生ぜしむることなかれ。故に論に云はく、「既に一切衆

律儀を建てて密教を弘め人

【轉法輪】轉法輪法。即ち轉法輪菩薩密變法に於て調伏法中の首位を占む

【召罪】召罪の印、咒にして、密教行法中には先づ一切の罪惡を招き寄するの印明をなしてこれを集め然るのち摧擧の印明を結して一切を摧破するものなり

【佛眼】佛眼佛母の咒

【金輪】金輪佛頂の咒

【寶篋印陀羅尼】寶篋印陀羅尼

【尊勝】佛頂尊勝陀羅尼

【光明】光明眞言。編陀。阿彌陀如来慈及咒

【滅罪】滅罪の印明を指す

【淨三業】護身法五印の一、及明なり。この印明を以て行者の身の五處

生は畢竟して成佛すと知るが故に敢て輕慢せず、乃至衆生の願に隨つて之を給付せよ、乃至身命をも懼惜せずといへり

二に勝義の菩提心。論に云はく、一切の法は自性なしと觀すと、いへり。所謂一切の法とは此に九種の心法あり、異生羶羊心、乃至極無自性心なり、謂く、凡夫を聖者に望め、菩薩を佛院に比するに、菩薩相望して各無自性なり、故に大師の言はく、一九種住心無自性、轉深轉妙皆是因一とは、この二句は、前の所説の九種の心は皆至極の佛果にあらずと遮す。九種に云ふは異生羶羊心、乃至極無自性心これなり。中に就いて初の一は凡夫の一向に惡行を行じ、微少の善をも修せざるを擧げ、次の一は人乘を顯し、次の一は天乘を表す、即ちこれ外道なり。下下界を厭ひ上生天を欣つて解脱を圖樂すれども遂に地獄に墮す。已上の三心は皆これ世間の心なり、未だ出世と名けず。第四の唯蘊以後は聖果を得と名く。出世の心の中に唯蘊と拔業とはこれ小乘の教、他縁以後は大乗の心なり。大乘に於て前の二は菩薩乘なり、後の二は佛乘なり。かくの如きの乘乘、自乘には佛の名を得れども、後に望めば戲論となる。前前は皆不住なり、故に無自性と名く、後後は悉く果にあらざる故に皆是因と云ふなり。

三に三摩地の菩提心。夫れ應化の如来は秘して談せず、佛法の菩薩は置いて論せず。自性法身大日如来、自眷屬と與に各三密を説いて自受法樂したまふ甘露醍醐なり、これを

秘密莊嚴心と名くるなり。小機のもの爲には一字をも説くことなかれ。若し疑心を作さ

を加持し、其三業を清淨ならしむ。【禮儀經】金剛界禮懺。

【五十三佛名】過去現在未來三世の五十三佛の名號を稱へ禮拜すること【本不生際】不生不滅の本際なり。人人本有の自性清淨心に名く。

【八】眞言行者、一期臨終に際しては必ず菩提心を發すべき用心を示す【菩提心論】に云云。以下は總論の發菩提心を示す。

【菩提心論】金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論のこと。

【阿耨多羅三藐三菩提】(Anuttara-samyak-sambodhi) 佛智の名。舊譯には無上正通知、新譯には無上正等正覺と譯す。

【勝義】三種菩提心の一。劣法を止

ば無間の人にならん。信男信女當に此法を學ぶべし。論に云はく、「何か能く無上菩提を證する。當に知るべし、法爾に普賢大菩提心に應住せり。一切衆生は本有の薩埵なれども貪瞋礙の煩惱の爲に縛せらるるが故に、諸佛の大悲、善巧智を以て此甚深祕密瑜伽を説いて修行者をして内心の中に於て日月輪を觀せしむ。此觀を作すに由つて本心を照見するに湛然として清淨なり。乃至我自心を見るに形月輪の如し」といへり。謂く、心月の如きは義無量なりと雖も且く十種を擧げて觀心の要となさん。

心月圓滿の觀

月の圓滿なるが如く、自心も闕くること無し。萬徳を具足し、種智を圓滿せり。月の圓形を見て、心の滿體を觀ぜよ。福智を圓滿せる雙圓の性佛なり。

心月潔白の觀

月の潔白なるが如く自心も白法なり、永く黒法を離れて、常に白善を興す。月の白色を見て、心の白質を觀ぜよ。自性淨白にして性徳の本源なり。

心月清淨の觀

月の清淨なるが如く自心も無垢なり。自性清淨にして無貪無染なり。月の淨徹を見て、心の淨性を觀ぜよ。本より貪染なし。元これ淨佛なり。

心月清凉の觀

月の清凉なるが如く、自心も熱を離れたり。慈悲の水を灑いで、瞋恚の火を消せよ。

息し、勝義を觀じ

顯はす提心の觀

にこの名あり、昔

提心論は此の三種

菩提心一勝義、行

顯、三摩地一を説

くものなり

【行顯】三種菩提

心の一、行を修し

顯を發すの菩提心

なり、其中行とは

四弘誓、顯とは一

切衆生悉く細末歳

を含みて無上菩提

に安住するに堪ふ

るを念じ、大乘微

妙の法を悉く度せ

んとの顯なり

【三摩地】三種菩

提心の一、即ち行

月の涼光に觸れて、心の慈水を澄せば無量の悲燈、一時に消滅す。

心月明照の觀

月の明照なるが如く、自心も照朗なり。木より無間を離れて常にこれ遮翳なり。心月、

障に澄む、五障何ぞ闇からん。圓鏡、意を瑩いて、光明遍く照す。

心月獨尊の觀

月の獨一たるが如く、自心も獨尊なり。諸佛の尊ふところ、萬法の歸するところなり。

心殿に比なき、心王の如來、諸部に鼓び居すは、心數の眷屬なり。

心月中道の觀

月の中に處するが如く、自心も遍を離れたり。恆に中道を極めて、永く遮翳を越えたり。

顯教の邊を離れて、眞言の中に住す。應佛の國を過ぎて法身の宮に入る。

心月速疾の觀

月の遅からざるが如く、自心も速疾なり。秘密の輪を轉じて、刹那に證得し、心を淨土

に懸くれば十方遠からず。神通の車に乗じて、須臾に成佛す。

心月巡轉の觀

月の巡轉するが如く、自心も無窮なり。心水に漂り入つて、利物の波を起す。正法の輪

を轉じて、邪迷の闇を破し、萬徳無窮にして、二利斷ゆることなし。

心月普現の觀

心月普現の觀

【後菩提心の眞言】

唵 阿彌陀 佛

（心一母相兼攝）

（夜今我今）

（我今我今）

（我今我今）

【二】行願の菩提心云云。以下行願の菩提心を説明す。

【無餘の有情界】無餘なき事理至極せるを云ふ。有情(Ativa)とは、薩埵、譯して衆生(菩薩)有情(新譯)と云ふ。故に餘蘊なき衆生なり。

【本體】衆生の一體自性清淨にして一切の妄相を離れ照照靈靈として覺知の徳あり。是れ修成にして然るにあらず、本有自爾の性徳の故に本覺と云ふ。

【不空如來】不空成就佛即ち北方化他門の法身釋迦佛なり。

【一百八智】金剛頂經毘盧遮那一百八智は大智なり。一百八は元煩惱の數にして此煩惱斷除する智を指す。

【理佛】佛身の異名なり。佛三身の

月の普く現する如く、自心も遍く靜なり。化縁水靜なれば普く萬機に浮ぶ。一體を分たずして、九界の前に現じ、多身を假らずして十方の土に臨む。

【已上月輪。已下見字】八葉の白蓮一肘の間、見字素光の色を炳現す。禪智但に金剛縛に入れて、如來の寂靜智を召入す。

阿字の字義は亦無量なりと雖も、且く十義を擧げて以て無盡を顯す。

阿字平等の義
阿字は、諸法無分別の義なり。自體清淨にして垢染なきが故に、心體も本より離れて煩惱の染なし、本來清淨にして一味一色なり。

阿字無生死の義
阿字は諸法無生死の義なり。有分別無分別を離るるが故に、心體も本生なければ分段の分別と、變易の無分と、相寂常住なり。

阿字本不生の義
阿字は諸法本不生の義なり。忘念不生なれば淨法も不生なり。心體も無爲にして永く起滅せず、心海常住にして都て波浪なし。

阿字無始の義
阿字は、諸法に終盡あることなし、本來本有にして初起なきが故に。心體も本有にして

中、報身、化身を
非佛とし、法身佛
を理佛とす。

【二に勝義の云云】
三種菩提心のうち
以下は勝義の菩提
心をあらわす。

【九種の心法】大
日經疏、十住心論

等に説く十住心の
うち前九種の住
心に指す。即ち一
異生瞋心、二愚
童持心、三嬰童
無異心、四唯觀無

我心、五拔業四種
心、六遍修大乘心、
七覺心不生心、八
一道無碍心、九極
無自性心にして第
十は秘密莊嚴心な
り。

【大師】弘法大師。
【第四の摩訶】十
住心中の第四摩訶
無我心。

【拔業】十住心中
の第五拔業四種心
【他義】十住心中
の第六他修大乘心

【三に三摩地云云】
以下は第三に三摩

無始無終なり、法界に周遍して常住一切なり。

阿字無住の義

阿字は諸法無住處の義なり。死生にも住せず、涅槃にも留ることなし。心にも不住なれば決定不定なり、遍法界に遍してならずといふ所なし。

阿字無量の義

阿字は、諸法に限量あることなし。萬法唯阿なれば阿字も無量なり。我が心諸法なれば心即ち諸法なり。諸法無量なれば心も亦無量なり。

阿字無我的義

阿字は、諸法無二我の義なり。大我不生なれば法我即ち空なり。我が心即ち阿なれば衆生も即ち阿なり。阿阿にして無我なれば一阿にして法我なり。

阿字無爲の義

阿字は、諸法に無爲常住なり。有爲の萬法皆阿字に歸す。一阿を離れて妄の有爲を表することなし。三毒即して眞の無爲を顯すことあり。

阿字無闇の義

阿字は諸法無闇冥の義なり。體無明を離れて常に明了なるが故に、心無明を離る。これを大日と名く。生死の昼夜この時永く離けぬ。問ふ、「阿字と心月と同なりや異なりや。」答ふ、「同にして即ち異、異にして即ち同なり。同にあらす、異にあらす、亦是同、亦是異な

地の菩提心を説き示す。

【自性法身】四種法身の一。諸法各自に不變不改の性あり、之を自性と云ふ。四種法身とは自性法身、受用身、變化法身、等流身なり。
【自受法樂】法樂とは妙法の眞味を耽ひ自ら樂しむを樂ふ。然して其法樂を自身に受くること。

【秘密莊嚴心】十住心中の第十、最極の秘密眞言の行證果に當る。
【無間の人】墮獄の罪人。

【法爾】自然法爾或は天然、自然と云ふに同じ、他の造作を假らず、法の持ち前として自ら然るを云ふ。
【本有の薩埵】本有は修成、修生等に對する語、本來固有の性徳なり。薩埵は有情或は衆

り。十六重の義、今こは即ち菩提心の體性なり。爾と正しく之を觀する法云何ん。答ふ、口く之を略す。是れ即ち菩提心の體性なり。爾と正しく之を觀する法云何ん。答ふ、

「若しは丸、若しは月、之を圖造せよ、其形、白珂の色に染めて微妙嚴麗にして世に比類なくして持して淨處に懸けよ。四尺許りを去つて向つて端坐して眼を開くには下より上へ、眼を閉づるには上より下へ、出入の息に隨つて之を觀じ之を見よ。此の如く目を積むに、初心に見難けれども後心には見易し。眼を閉ぢて向はざるに漸く顯れ見え去る。若し顯るれば圖造の月丸に向ふなかれ。唯眼見を緣ぜよ。文に云はく、「此觀は萬行の尊主、諸定の帝王、出凡の正門、入聖の直道なり。疑謗の逆緣、論議權教の戒行に優れり。信歸の願因誰か顯上の智觀に比せん。何に況んや信修をや、何に況んや深行をや。三毒十惡は變じて覺茶の功徳となり、四重五逆は轉じて瑜伽の密行に歸し、一百六十の妄執は斷道を假らずして自から絶え、八萬四手の煩惱は對治を待つこと無うして、忽に消えぬ、三藏の長劫、之を半念に縮め、六度の廣行、これを一觀に攝す。煩惱生死の睡暗今永く斷え、菩提涅槃の覺月斯に始めて彰る。淺觀小行の人は、この身を捨てずして轉じて極樂の上品上生を得。深修大勤の類は彼心を改めずして變じて密言の大明大日となる。易修易證の道、既に斯行に超ゆることなし。難值難聞の法、豈に此門を過ぐることあらんや」文に云はく、

「此觀を修するものは所起の五逆、五重十惡、及び一闍提、是の如きの罪障ごとごとく皆消滅して、即ち五種の三摩地門を獲、云何が五となす。一には剎那三昧、二には微塵三昧、三には白縷三昧、四には起伏三昧、五には安住三昧」と。云云。深義更に問へ論に云はく、「若し

生と譯す。

【善巧智】 善巧とは善なり、巧はなる

方便なり、この智

に十種あり、了達

佛法具足、善巧智、

出生廣大、佛法善巧

智、宣說種種、佛法

善巧智、令人平等

佛法善巧智、明了

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

善巧智、善巧智、

鏡に見るものをば即ち眞實義諦と見ると名け、若し常に見るものをば菩薩の初地に入る

と云云。問ふ、已に覺字と心月と即ち菩提心の體性なることを知んぬ。未だ知らず、此心

に覺くの差別ありや。答ふ、廣すれば則ち無邊なり。略すれば二に過ぎず。一には能求の

菩提心、二には所求の菩提心なり。能求の道心とは、『大日經』に云はく、「自心に菩提と及

び一切智とを尋求す。何を以ての故に。本性清淨なるが故に」と云云。大師の文に云は

く、「我今阿耨多羅三藐三菩提を志求して餘果を求めず」と云云。大師の文に云はく、「能求

の心とは、譬へば人あつて善と惡とを爲さんと欲するには、必ず先づ其心を標して而して

後に其行を行するが如く、菩提を求むる心も亦復かくの如し。既に狂醉して三界の獄にあ

り、熱煎して六道の瘴に臥すことを知んぬ。何ぞ神通の車を駈つて、速に木覺莊嚴の床に

歸らざらん」と云へり。早く無明の眼を覺して五佛の眼を開き、速に煩惱の醉を治して

四曼の都に遊ばん。所求の道心とは、大師の云はく、「所求の心とは、所謂實盡莊嚴金剛界

の身これなり。大毘盧遮那四智法身、四無量壽、皆これ一切衆生本來平等に共に有せ

り。然りと雖も五障の覆蔽を覆り、三妄の雲翳に依つて覺悟することを得ず。若し能く日

月の輪光を經じ、覺字の眞言を誦じ、三密の加持を發し、四印の妙用を揮へば則ち大日の

明光廓、法界に開く、無明の障者忽ちに心海に歸し、無明忽ちに明となり、毒藥忽ち

に藥と爲る。五部三部の尊、寶藏として圓現し、刹影海滴の佛忽然として湧出す、此三昧

に住するを秘密三摩地と名く」といへり。問ふ、何んか觀じて能く其菩提心を發すや。答

ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

答ふ、

【五障】修道の五障なり。一に煩惱障、二に業障、三に五情障、四に法障、五に所知障なり。【金剛經】兩手を縛する印相を云ふ。これに二種あり。内縛と外縛となり。但し普通には外縛を指す。【阿含の云云】以下阿字の十義をあぐ。【分段】分段生死なり。衆生六道に輪廻して分段分段に生死する故に分段と云ふ。然して今は分段分段の分別なり。【二我】人我と法我なり。【三毒】貪瞋癡の煩惱。【問】阿字云云以下は心月と阿字に對しての問答釋【十惡】殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見の十惡なり。

ふ、文に云はく、夫れ無上菩提の心を發せんと欲へば先づ深心を以て佛の法身を觀せよ。性海深寂として無性無滅なり、衆生癡闇にして自ら覺るに由なし、諸佛如來、この輩を愍念し大悲の浪を起して生死の海に流し、大救の網を張つて、顯密の機を濟ふ。然るに我等今教網に遇うて既に羅れり、應に彼岸に近きこと知るべし。今度暇漏せば永く生死に留らん。當に深廣の大菩提心を發すべし。誓願して一切の惡法を斷除し、誓願して最上の法門を修習し、誓願して一切の有情を度脱し、誓求して速に無上菩提を證せん。所謂菩提とは即ちこれ諸佛法身の六大、亦これ衆生木覺の四曼なり。問ふ、「若爾れば此三摩地を修するものは幾くの時分を歴て成就することを得るや。」答ふ、「若相續修に據らば十二年を過ぎずして有相即ち成就し、無相も亦漸く現ぜん。」問ふ、「若爾れば唯此觀を修して成佛を得るや。」答ふ、「唯此觀に依つて全く餘習なし。懈怠小機のものは順次往生の大願を遂げ、精進大機のものは現身成佛悉地を得ん。何を以ての故に。一心に萬行を攝して行として行せざること無く、一觀に諸觀を合して觀として觀せざること無し。故に『大日經』に云はく、
 「若勞力の廣く饒益すること無くんば法に住して但菩提心を觀せよ、佛此中に萬行を具して淨白純淨の法を満足す」と説きたまへり。論に曰はく、「若人佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺の位を證す」といへり。」

【九】七に極樂を觀念する用心。
 師子三藏の意に云はく、「顯教に云ふ極樂は、これ西方十萬億を過ぎて佛土あるなり。

劫の略、即ち三大修の年時に善薩六地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天なり。
 【四曼】密教所立の三大中の相大にして大曼茶羅、三摩耶曼茶羅、法曼茶羅、羯磨曼茶羅なり。
 【四印】四智印なり。金剛界五智如来の中に大日如来の法界體性智を除きて他の大圓鏡智（阿耨）平等性智（實生）妙觀察智（無量壽）成所作智（不空成號）の四智なり。
 【五部三部】五部は金剛界にして一蓮花部、二金剛部、三佛部、四寶部、五羯磨部にして三部は胎藏界にして佛部、菩薩部、金剛部、五部に分つ。故に五部三部の尊とは金剛胎藏兩界の請尊となる。

この一人必ず有智の道心を用ふべし。病者、この一人に於て能引接の觀音の想を存すべし。病者の面少し南に依つて當る近く坐して眼を病者の面門印相に懸け、慈悲の心に住じて以て將護すべし。能引の心を起して同音に念佛せよ。若し病者普へ乙ならば知識甲にせよ。念誦經に一人の知識は久修練行の人。病者の東少し北に依つて當る三尺許りを去つて住止すべし。眼を病者の迹枕の左右に懸けて不動尊を祈念して慈悲の呪を滿つべし。天魔外道の障礙を避けて臨終正念にして其心に安住し、惡鬼邪神の留難を除いて極樂に往生せん。彼願を成せしめよ。一人の知識は病者の北方にありて依る所なくんば便宜の所にあり。金を鳴らすの時、微音高聲、病者の心に從へ、二人の知識は更に請つて居止して要事待つべし。若し時に合利せば四人同音せよ。此れ則ち五智の菩提を求むる臨終の軌儀なり。若病苦身に逼つて東西を知らずんば當に頭北面西に臥さしむべし。摩水、心を破つて善惡を辨へずんば、手を合掌せしめて面を佛に向はしむべし。又無記既に現じて分別の心なく陰魄一なり、殘つて猶し熟眠するが如く餘氣纒に通じて宛も死人に似たり。若此時に當らば出入の息を見て目を瞽も捨てず病者の息の延促を以て知識の息の延促に合せて病者と知識と息を同時に出入して必ず出づる息ごとに念佛を唱へ合せて我に代つて我が往生の深き憑みを助けよ。一日二日乃至七日斷息を期とす。捨てて去ることを得ざれば人死する作法は必ず出息に終る度の息を待つて當に唱へ合さんと欲ふべし。若唱へ合すことを得れば四重五逆等の罪を消滅して必ず極樂世界に往生することを得。所以何となれば病者餘氣を絶ちて虚しく命を捨つる時、知識、彌陀を呼んで實に利生を請へば本願、緣に

【畜生】梵語にては底栗車 (Tiryak Yoni) と云ひ、舊譯には畜生、新譯にては傍生とす。

んば、所謂滅惡趣尊の護摩祕法、急急に之を行じ、早早に之を濟へ。我閉眼の刻み、若惡相を見れば、且は忠孝の心に入り。且は慈悲の門に出でて速に追修の善根を植ゑ、疾く菩提の菓實を授けよ。婆婆の病惱猶堪へがたし。阿鼻の罪苦何ぞ忍び易からん。努めて遺言に違ふことなかれ。我を濟うて道を成せしめば、還つて必ず汝等を導かん。普賢の行願を行じて同じく無上道を證せん。

一期大要祕密集 終

三十七部三卷。悉て
三十七部三卷よりな
る。内容は上巻の下
序分の末尾等にもあ
る。如く、母への孝
養の爲に、又は母
を淨土へ導かんが
爲に書きたるもの
のにて、先づ上巻
は十二章に分ち、
佛法の大意、六趣
の一生、及び人間
の善惡の道理を辨へ
中巻には三界を厭
うて佛界を求めん
が爲に眞實の道を
顯はし、下巻には
正しく臨終正念往
生極樂の意を説示
す。此書の作者を
就いて本書の巻頭
に「高野山傳法院
覺養書」とあれど
も、其内容事情より
見れば後世の偽作
と見るべき點多
し。従つて諸學者
中にはこれを以て
るも、今は一般古

孝 養 集 卷 上

高野山傳法院覺養書す〔傳〕

【一】 佛道を願ふべき様、假名に書いて申すべき山承りて、人に尋ね註し申すなり。
夫れ極樂を願はんと思ひ食さば、先づ我が身を悦しみて、重ねて實の縁を結びたまふべし。其故は適う難き人身を受け、亦値ひ難き佛法に値ふ事は、是れ既に極樂を得ん基
のなり。實に願ひ求めざらんや。其教様經論にあり。但し其にたえずは、折に隨ひ琴の
音、笛の音、是に限らず。加様にやさしく、哀れを催す聲を聞いても、心を静めば事にふ
れて哀れを増すべし。春はめぐみ、夏は盛んなる木の葉も、秋は色付き冬はとまらず理り
哀れなれば、只だ惜むに足らぬ此娑婆を厭ひ、樂しみつきせぬ淨土を願ふべし。彼へ行き
ぬる程は、愁み悲しむ親子をも、永く相見る事なしと云へり。此故に彼極樂を願はんと
志しだにも、おはしまさば、行はんと思はん道は人に問はんが如く、問ひて後に行はん
事安きにあり。仍て聊か聖教の道理に付いて、其善惡を明らめ、實の道を顯さんと思ふが
故に、大いに分つて三巻とす。上巻には善惡を明らめ、中巻には實の道を顯し、下巻に
は臨終正念往生極樂の意を明らむべし。

【二】 上巻に善惡を明かにすとは、是に付いて十二あり。

來の説に従ひ、これを訂正せず。唯「傳」の一字を附加せしのみなり。
【一】序分。
【二】上巻の目次を明す。

【三】以下正しく本文。中に於て初に佛法とは如何なるものなるかを示す。
【十方】東西南北の四方に、この四方の中間にある東

第一 佛法と申す事を明むる様。

第二 人生るるより終る迄の有様。

第三 善を捨て悪を作る事。

第四 作罪に依りて地獄に墮つる相。

第五 穢臭道の愁ひの相。

第六 畜生道の悲しみ相。

第七 阿修羅道の安からざる相。

第八 人間の八苦の相。

第九 天人の五衰の現相。

第十 終人を六道の内には何處に生るべしと知る相。

第十一 終人の生るる處を知りて孝養すべき様。

第十二 功德を作して廻向すべき様。

【三】第一佛法を明かにすとは、大方經論の明文にあり。但し佛の説きたまへるを經と申し、菩薩の釋したまへるを論と名け、人の造るをば文と云ふ。又三寶と申すは、佛と法と僧との三なり。是を都て佛法と申すべきなり。其故は彼十方三世の諸佛菩薩と申すも、其説きたまふ所の法門聖教と云ふも、只だ我等が三界の苦しみの中にあるを省みて、淨土に參れと、のたまふ事、草木の葉に隨ふ露の如く、人に隨ふ教なり。是れ大恩教主釋迦牟

南方、西南方等の四方を加へて八方。八方に上下の二方を加へて十方とす。

【三世】過去、現在、未來の三世。有様を説き示す。

【西王母】支那の仙人。

尼如來、輒からずして説き弘めたまひし事を、諸の菩薩大師達、天竺唐土の嶮しく、遙かなるより、風波を厭はず、危き船に命を忘れて、之を渡したまふは、特に我が朝の衆生を助け給はんが爲なり。是を思ひ知るをば、善と云ひ、思ひ知らざるを、惡と申すべきなり。

【四】第二に人の生るるより、終る迄の有様とは、此世に生るる程の人、心に叶ひ久しくは、急がずしてもありぬべし。又惡道の苦しみ、ななめならずば、極樂を願はでも過ぎなん。然るに輪も、惡み少なきに、思を遙かに述て、千秋萬歳と祝ふ事こそ、實に迷の至りなれ。

昔四人の仙人ありき。各各此世に留まる謀を營み、獨り獨り或は山に隠れ海に入り、虚空に登り市の中にまぎれしかども、かかる仙人だにも四人の中に一人も留りたるはなし。或は唐土に賢かりし御門、此世に久しくおはせんとする御心を空に知れて、西王母が三千年に一度、華咲き實なる桃を奉るが程に成しかども、終に此死を遁れたまはず。或は命を惜みて臂ををりしも、其亦爾かなり。是に限らず、加様に謀あるもなきも、此世は實に假の栖なり。昔を聞くに只留まるは名のみ計りなり。古の人の形見には、只書置等のすさみなり。亦今も昔とならん事を、事新しくはかなしと云ふも、實に愚かなり。朝には華を見る人も、夕の風に隨ひ、香には月を詠る人も、曉の雲に隠れぬと云へり。實に常ならぬ事は、只をくれ先き立つ計りなり。設ひ久しかるべくとも何の益かあらん。又人

久しくは我を悲しみ、我久しくは人を歎き、恨を残さずと云ふ事あらじ。されば盛りならんを打ち、觀みて何か容しく過ぎん。猶ほ暫く留るとも世間の苦しみ其中にあり。或は天を憤み、地を危み、然るべきは人に勝れん事を思ひ、賤しきは人にひとしからん事を歎き、いみじき心ある人も心ならん事に随つて、たえぬことを、はげみ、人の心を憚り我が身を慎しみ、苦しきにも休む事なく、行きたきにも留り、時をたがへじと、はげみ終り、吉しと思ふ程に閑かなる暇なければ後世の事も知らず。自ら知る人も、はかなくよしなき、生間の營に心を留めて、しばしも急ぐべき後の世を忘れて、必ず人を恨み、いきどほりをなす。去り去りて、來らざるは盛なる年、來り來つて去らざるは衰へたる齡なりと云へり。實に高きも、賤しきも平等なり、其身衰へぬれば、随つて病出來、亦振舞しわざ事の外に見苦數までなるは、只年の寄る一の故なり。是を云ふに、數多の苦しみはれぬべし。又人を見るに鏡よりもあらはなり。然るに世の末はいよいよ人の命短く成り行くと云へり。況んや盛過ぎたらん人の、殘る月日を算へて急ぎても急ばざらんや。實に過ぎにし方の悦び歎き、只今と思ふらん。行く年月は夢見る心地して、こし方を思ふに、行く末も程あらじ。又年を恨るのみならず、心の外の事いくばくぞや。是れ色をさし數を記すに及び難し。只心靜に思はん。其人の前に細にあるべし。

【五】 第三に人は多く善を捨て惡を作るものなることを明かす。

【五】 第三に善を捨て惡をつくとは、夫れ不定の此世を祈る人は多し。一定の後世を知る人は少し。人は慕なし我は賢しと、いみじからん事を營む程に、恣に萬の罪を造る是

【優婆塞】(Uparaka) 清信士などといひ、三寶に親近し、五戒を受けたる男子の稱なり。
 【優婆夷】(Upasika) 清信女などと云ひ、三寶に親近し五戒を受けたる女子を云ふ。
 【淨願梨の鏡】業の鏡なり。閻魔廳に在つて罪人一生の罪業の事實悉く現前してこれを當人に見せしむと云ふ。

なり。但し後世を思ふにも人を嫌ひ、力によらば限りあり。然るに其品品に隨ひて佛數多に説きたまふ。或は罪の深き淺き、人の賢き愚かなる、物に堪ぬると堪ざると、又少きど老たると、病の有無までも捨てざる人に隨ふ教あり。隨つて妙なる事も一に非ず。野山の草木、海川石瓦にいたるまで、我が身を助くれば、佛に供養して功德にならぬと云ふ物はなし。是を分つに暇あらず。『法華經』の方便品を見るべし。殊に佛の御弟子、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷と云ふは、僭尼男女なり。彼此を聞くに漏れず遁れず。かかる世に遇ひて空しく過ぎなば、閻魔王の廳にして召し問はれん時は、何事によつてか叶はざりしと申すべき。只空しき計にて過ぎんだにも、實には恨みあり。何に況んや、よしなき名聞利養に耽り、造る罪併ら、淨願梨の鏡に浮ばん時、耻ぢざるべけんや。耻のみにあらず、かの苦しみ思ひやるべし。功德の見えんには嬉ばざるべけんや。嬉しきのみにあらず、苦患を免れん事、悦び何事か之にすぎん。人又さすがに木石にあらねば、實をこのんで習ふに、習はれずと云ふことなし。其故は暫しの此世を渡る方便に、行末も知らぬ海底の鱗の名を指して取り、或は空にかける姿も見せじと、雲にまぎるる翹なれども、手にす忍音に隨へ、ろきざしを背ぬ程に仕ふ人もさり、又物の色色折に隨ふ氣色振舞、事によりて事を計ひ、身を捨て人に替はり、耻を思へば命を捨つる、是のみならず。人の心深き事は、只世間の籌にあり。かかる惡の爲には賢きに、如何んが後世の爲には、心の愚かなるべきか。誰か見ずして知り、聞かずして覺る處のあるべき。但し動めはげまざる人のため

にはあらず。然るに佛言世間出世のたがはざる事、譬へば牛の二の角の如しと云云。世間の理を失はざるを以て、名付けて出世の理と云ふ。仁王經の意又或文には善を修すれば福を蒙り、惡を好むは福を招くと云へり。實に惡人は事に逢ひ、或は病をも久しき事をうけつれば、實の詮には逢ふ人もなく、亦長病には孝行の子なし。かかる惡人は親をも背き、佛をも信ぜざればなり。經に曰はく、「諸の佛は衆生を念ひ、衆生は佛を念はず、父母は常に子を念ひ、子は父母を念はず」

【天衆】天衆とは梵天帝釋等の天衆に屬する種類の總稱。

【三惡道】地獄、餓鬼、畜生のこと。
【放逸】唯識論二十隨煩惱の隨一、現行を守らざるものを云ふ。

此文の意は父母は常に子を思ふ、子は親を思はず。佛は衆生を思ふ、衆生は佛を思はずとのたまへり。哀れなるかなや。佛を思はざる衆生。情なき哉。親を思はざる我等。實に數多の子を、はぐくむ人も一人の親をば養はず。自ら不孝の子を恨むる人も、親の之恩をば知らず。凡そ惡人不孝の者は終る所も定めなし。病苦をませども天衆地類の感みもなし。亦佛を念はざれば、念佛の功もなし。亦兼ねてより、命終るの時の教をも習はざれば、病の始めより惡道へ行くべき相を顯して、既に終るときは、一のはげしき風身に來たれば、百の苦しみ其身に集る。されば心顛倒して、後世と云ふ事を知らず。知らねば則ち三惡道に墮つ。其時は猛き言も叶はず、諸の財も身に隨はず。佛是を説いて曰はく、「妻子珍寶及び王位は、命終の時に臨んでは隨はず。唯戒と及び施、不放逸のみは、今世後世の伴侶となる」。此文の意は妻子も寶も王位も命終るとき隨ふ者なし。唯戒と布施と放逸ならざると、此世も後世も侶となると仰せらるれ共信せず。既に妻子を養はんとして、諸の罪

を造りて惡道へ行くと見えたれども、彼妻子を顧るに力をはげまし、心を盡くす事懇なり。放逸にして親の爲には情なし。適孝を施すと云へども、只人目計りなり。誤ちて又夢幻の世を過ぎんとて、色色の財を我ぞ人ぞと諍はんよりは、只我が身を我と思はんずるには如かし。

冥途の旅には親しきも疎きも添事なく、闇闇として一人行く。重ねし袖も着る事なければ悔の泪胸に遮る。魂を奪ふ鬼は、高きをも敬はず、やさしきにも情なく、あられなき獄卒の手に懸り、閻魔王の庭には一人跪べき事の憚なさ思ひ遣るべし。しかのみならず昔造りし罪身にそふ影の如し。又彼罪に隨ひて生るる所の六道を下に明す。是を能く見るべし。

六道とは一には地獄、二には餓鬼、三、畜生、惡道なり。四には阿修羅道、五には人道、六には天道。總て之を六道と申すなり。

【六】第四に罪を作るに依りて地獄に墮つる相とは、大方地獄を云へば、其數多しと雖も總じて申さば、二種なり。一には八寒、二には八熱なり。等活、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間なり。

初の等活地獄のありさまは、此世界の下一千由旬にあり。高廣一萬由旬なり。亦其下に黑繩地獄あり。高廣前に同じ。是の如き次第にありて、乃至無間地獄は、大焦熱の下欲界の底にあり。無間は縱横八萬由旬なり。亦此八大地獄に、一一に十六の別所を四方に相

【阿修羅】(Asura) 非天と譯す。常に帝釋天と戰鬥をなす。六道の一なり。八部衆の一なり。
【六】第四に惡業によりて墮獄の果を招くことをあかす。
【八寒地獄】 八熱地獄に對して寒地獄を立つ。即ち頽部陀、尼刺部陀、頽嘶吒、歷歷婆、盧虎婆、嗔鉢羅、

摩訶鉢特摩の八なり。然してこれ八熱の堅に對して横に列次す。

【等活】八大地獄の

【等活】八大地獄の。有情地獄に墮ちて種種の所刺摩搥に遇ふも暫らく涼風に吹れなば又元の如く活き返る事、以前に等活の名が故に等活の名を付。

【黑繩地獄】この

地獄に墮すれば黒繩を以て支體を秤量して後に斬鋸する故に斬く名く。

【欲界】Desire World

三三界中の一、姦欲と食欲の強き有情的住する處を欲界と云ふ。即ち上は六欲天より始めて、中は人界の四大洲、下は八大地獄に至る迄を云ふ。

【先づ彼へ云云】以下地獄の苦患の相を示す。

具したり。其色の地獄の有様、罪人の苦しみの相、命の長き短き事、區區に經論に明れたりと云へども、具に明しがたき故に今略して少分を申すべきなり。

先づ彼へ越く罪人は、中有にして無量の苦しみを受け、しかのみならず閻魔王宮に召し付けられて罪の重き輕きをただし、具に懸つて獄卒請け取りて鐵の繩を以て縛り頭をむすび、或は焦熱ななどに墮る罪人は、六千八百由旬の、さまざまの驗しき處處を責め下し行きつき尙禁を副へて、又三十六億由旬の下へ向つて墮すなり。凡そ地獄に墮ちて悲しむ事をば云ふべからず、先づ地獄の聲を聞く計りに罪人の息絶え地に倒る。地獄の廣さ一萬由旬と云へば、一億六萬里に當れり。其中に大なる燈もえ登れり。高さ八千里なり。況んや地獄の中に墮ちて、大苦惱を受けん事をや。是を略して云へば、此中の罪人は或は鐵の爪を以て互に其身をさき破る。然して血肉を灰砂の如くになし、活れば亦前の如くにする事數を知らず。或は鐵の二の山の中に入りて責めひしぎ、或は臼に納れて、つきくだく事、屎灰の如くなり。或は鐵の、口ばしある犬、馬、虎、狼集つて其身を破り食ふ。或は糞の中に沈で、銅の口ばしある蟲其中に充ち満ちて罪人を喰ふこと、皮をうがちて肉に入り、筋を斷ちて骨にとほす。或は鋒劍を以て、さまざまに裂き切り、或は罪人を劍の林に追ひ昇すれば、彼劍、罪人に向ひて其身を裂き破る。しかのみならず手に取るも足に踏むも皆劍なり。或は罪人の一一身の皮をはきて、劍のやけたる欄の上に臥せて、其皮をはきたる身に、銅のわきかへる湯を一一に灑ぐ。或は、口をあけて銅の湯を入れる

【阿防】獄卒の名
或は又阿傍とも書
く。牛頭人手、兩
脚半蹄の異類な

れば五臟六腑焼破れて出でぬ。大方五體身分内外に少しも安き所なきを、名付けて地獄の罪人とは申すなり。さけばんとすれどもさけばれず、焔を口におほひ舌に釘をうたれてあればなり。逃れんとすれども逃るべき方もなし。一億六萬里の中にして東西見えねばなり。上には焔あがり下には鐵の湯わきかへる地なり。時に随つて毒の蟲雨の足の如くして降り下れば、共に随ひて焔いよいよ、さかりと成る。然るを獄卒等、各各鐵の杖と劍とを手に取りて、罪人を呵責す。彼獄卒の姿は或は足手長くして其身を驚かし、臂をいからし、眼をひからかす事電の如し。頭は馬牛に似て雷霆の鳴るが如し。色形其心、世間に情なき者は、閻羅獄卒にしくはなし、恐しく堪へがたき事は、地獄の苦惱に越えたるはなし。目に見る物は盛なる焔、耳に聞ゆる物は百千の毒の蟲のほえ叫ぶ聲なり。罪人の大苦惱をなす事、人間には譬ふべきことなし。地獄の火を人間の火に比ぶれば人間の火は雪の如し。又八大地獄は一一に十倍まさりて苦惱を受くといへり。罪人苦を受けて堪へがたきままに、など哀む心なき哉といへば、獄卒答へて曰はく、「異人作惡し、異人苦報を受くるに非ず。自業自得の果にして、衆生皆是の如し。文」此文の意は、人の造る惡に依りて我が苦しみを受くるには非ず。自ら造る罪、自らむくひて受く。衆生皆是の如し。汝愚なり。阿防、羅刹、閻羅、獄卒の情なきには非ず。是汝が昔造りし罪の、今汝を責むるなり。只自ら心を悔しめと云ふ。されば罪人其理に舌をまきて、我が身を恨みて聲も惜しまず叫ぶ。大方地獄に入ると、入りぬる人には父母も來たりて哀まず。妻子も替つて助くる事なし。

只自ら苦を受けて、獨り悲しむ計りなり。天に仰ぎ地をたたきて叫べども言のみつき、心のみ消えて助くる方もなし。かかる地獄の苦を受くるは只酒と、肉との誇の故なり。されば經に曰はく、一傳所生の處に於て、世出世の事を壞し、解脫を焼くこと火の如し。所謂酒一法なり。又、此文の意は佛のみもとにして、愚なる事を成し、現當二世の事を破り、佛道を燒く事火の如くなるは、酒の一なりと云へり。大苦惱を受くるも、一日二日にあらず。先閻王天は人間の五十年を以て一日一夜として、五百年を経るなり。彼天の五百年を一日一夜として、等活地獄の罪人は五百年を経るなり。此等活地獄の一日一夜は人間の九十萬年に當るなり。

次に黑繩地獄の命は、忉利天には人間の百年を以て一日一夜として、一千年を経るなり。彼天の一千年を一日一夜として、黑繩地獄の罪人は一千年を経るなり。乃至無間の命は一劫なり。但劫に數多の様あり。一説に云ふ方四十里、高さも四十里の石を、天人の衣を以て三年に一度づつ撫で、撫盡すを以て小劫と云ふ。亦六十里の石を撫盡すを以て中劫と云ふ。亦是八十里の石を撫盡すを以て大劫と云ふなり。但し地獄の命俱舎によると云へり。又何なる罪によりて是等の地獄に墜つと云へば、經に曰はく、人をころし、盜をし、婚欲を好み酒を呑み、若くは人を醉はし、若くは酒をうり、持戒の人を、わうわくし、そら言をし、亦食欲を好み人の食物を奪ひ僻事をし、人を苦しめ、人の妻を取り夫をとり、或は人に教へて罪を造らせ、或は人を罵りあざけり中言をし、人の爲に惡事を巧み、人の心を破り少き

【四重】四重罪に
して殺生、偷盜、
邪淫、妄語の罪を
云ふ。

者をおとし、人をたばかりて遠路に行かせ、煙にふすべ野山のかせぎ海河の鱗かかる諸の命有る物をころし、凡心を恣にして、人の物をとる。是の如き罪を昔造りし人、此等の地獄に墮つるなり。已上は七大地獄の相なり。

次第不同に註す。亦無間地獄には殊に重罪の人の墮つるなり。所謂五逆を造る人、四重を犯する人、空信施を受くる人、因果を撥無したるひと、大乘を誹謗したる人、亦父母師長に不孝なる人、佛像僧坊を焼きやぶり、三寶の物をとり人をうやし、ころし、人の科の有る無きを定めて物を取り、聖の物を取りたる人なり。

五逆とは一には父を殺し、二には母を殺し、三には羅漢僧をころし、四には和したる僧の中をいひたがへ、五には佛の御身より血をあやす。又因果廢無すとは三寶の教を背きたる人なりと云云。

大乘誹謗とは、萬の經論を誹り、一切の衆生に佛の種子おはしますと云ふ事を信ぜずして、殺し惱ますなり。四重とは殺盜姪妄なり。亦空信施を受くとは、念佛讀經等もせずして、人の供養を受くる者なり。亦無間の罪人、常の身の程にして、苦を受くるに非ず。或は八萬由旬に満ちふさがり、或は一逆を造れば罪人も身の長百由旬、二逆を造れば二百由旬、三逆を造れば三百由旬、乃至五逆を造れば五百由旬なり。苦しみを受くる事も一倍二倍亦爾なり。十住心論の意を取れるなり。凡そ諸佛菩薩、萬の法は説きつくしたまへども、無間の有様は皆説き盡くしたまはず。其故は聞く者、見る人も、目くれ、心きえて、其恐れありぬべ

【正法念經】正法念處經の略名。七十卷般若流支の譯の過患地獄等六道の業果を詳かにし最後に身念處の法を説く。

【七】餓鬼道へ墮ちしもの苦しみを描ぶ。

ければなり。

亦七大地獄并に諸の地獄の苦を以て、一として無間の苦しみは千億勝れたり。彼處の罪人は焦熱地獄を見ては、天上の樂を見るが如く、大苦惱を受くる事すこしも間無き故に無間と名く。彼は月日の光さす事なし。其中のくさき事、出山没山と云ふ二の山だにへだてず、其香人間迄も、かほりて滅し失ぬべし。若無間地獄の苦惱を有のままに聞けば皆人絶死なん。譬を取りても説くならば、聞く人、忽に血を吐きて、死なんと佛説きたまへり。正法念經の、されば、地獄に墮ちたりし昔を思ひ出でける羅漢は、衣の染る程に、身の血の汗を常に流しけるとなん。既に是を悟り得て、亦も地獄へかへるまじき。證果の聖人の昔を思出しけるすら爾なり。況んや是等の罪を造りてかかる地獄に墮べからん人、恐れても恐るべしと云云。能能懺悔すべし。十住心論に云はく、「人間三業の過は、冥路苦業多し、身口の業を放まにすること莫れ、動もすれば寒熱の躬を招く。文」此文の意は人間の過は、よみぢの苦み多し。三業の過を恣にする事なかれ。動もすれば地獄の苦を招く故なりと。

【七】第五に餓鬼道の愁への相とは、先住所をいはば二つ有り。一には地の下五百由旬を過て閻魔王界にあり。二には人天の間にあり。其中の愁の相を略して云ば、或は餓鬼あり。錢身と名く。身の長大にして、人に勝れたる事二倍なり。面目なし。手足は、かな輪の足の如く焔の中に満ちて其身を燒く。昔財を貪りて、人をほふり殺せる者、此報を受

或は餓鬼あり。食蟲と名付け、其身大にして半由旬なり。常につばきを求めて命をつぐ。食物を得る事なし。昔天として美食を喰つて妻子に與へず、妻として自食し夫子に與へざる者、此報を受く。或は餓鬼あり、人の病によりて、水邊林中にして祭を儲くる此香氣をかいで命をつぐ。是は食氣と名く。或は餓鬼あり喰法と名く、色黒き事雲の如く、涙流るること雨の如し。或は餓鬼あり、食水と名く、飢渴身を責め、水を求むるに得る事なし。若人河を流るに、足の下にふれ落る水を取りて命をかけたなり。昔酒を沾るに水を加へ、亦蚋、蛭をしづめなんとして、善報をなさざる者、此報を受く。或は餓鬼あり、希望と名く。若人水を結んで亡びたる父母にたむくるに、其を少し受けて命をかけたなり。若白水をとれば水を守る諸諸の鬼、杖を取て打つ。或は餓鬼あり、海の磯の中に生れたりと云へ共、水更になし。呑んとするに猛火となり、其所きはめて熱し、彼この冬の日を以て人間の夏にくらぶるに、過ぎたる事千倍なり。只朝の露を以て命をかけたなり。水の邊に住むといへども、彼が爲には焔と見ゆるなり。昔道を行く人の病を受けつかれたるに、其財物を取り、又は少しのあたひを與へて取る者、此報を受く。或は鬼あり、常に塚の間に至つて人を焼き、火を喰ふに足ぬる事なし。昔箆をあづかりて人の飲食を取る者此報を受く。或は鬼あり、樹の中に生れて、身を責らるる事とくさが蟲の如し。昔僧坊の林を切る者此報を受く。正法念經の或鬼あり、頭のかみ垂れ下つて、身をまとへり。其かみ、刀の如く

【六波羅蜜】大乗理徳六波羅蜜を經の略名。
【すずはな】皇言すすはなることの意

【實藏經】十卷元魏の吉伽夜王太子を以て父母を救ふ等百二十一條の因縁をあけて人に作福と持戒を勸む。

して其身をさし切る。或は鬼あり晝夜に各五の子を生む。うむに隨ひて是を食するに、
【常に備ふす】六波羅蜜の意。復自頌をわつて國を取りて食す。

或鬼あり、食すすばな、うみしる血又器を洗へるのこりを食して命をかけり。智度論の意を取る。

或は鬼あり、腹大なる事たいこの如し。若し手の細き事針の如し、物を喰ふ事叶はず。昔

所領の主となりて、威勢に憑こり、酒を呑み、人を輕しめ、人の食物を奪ひ取り、人をう

やし殺せし故に、此報を受く。或は鬼あり、常に二の鐵の輪兩のわきの下にありて、身

を締め縄なやます。昔樂僧のために餅をなすに濡み取りて兩の骨にはさみし故に此報を受

く。又鬼あり物を以て常に頭をいため、又常に人來て我を殺ん事を恐れて、心に常に恐をな

す。昔姦犯して人の見ん事を恐れ、或は其夫とらへ殺さん事を恐れて、内外に心を盡す。

故に此報を受く。佛經傳の意。亦人間の一事を以て、一日として年月を度して、命五百年種

類三十六に別たり。一切の餓鬼は、饑饉始の因縁による。【十住心論】に云はく、慳心

にして財を散せずんば、定んで餓身を慮じ來る。涕唾にも自在なることなく、河に臨めば

炎火騰く。前年には物あるべき色なれども、骨立つて、面灰の如し。今日の寒楮の樹、葉は

飛んで見る者哀しむ。親親も如間を絶ち、獨り長夜の臺に泣く。少を分つて甘を割く者は

居然として此実を脱がる。又、此文の意は、人饑饉にして、財寶を人に與へざれば、定

んで餓鬼の苦を受く、すすばな、つばき程の物を自在に食する事なし、河に望めば炎前に

滑ち、親しき者も問ひ助る事なし。但し少き物をも分つて施し、甘き味ひの物をも、さい

【八】 畜生道に墮ちし者をあらはす。

て人に與ふれば加様の災難を通ると云へり。

【八】 第六に畜生道の悲しみの相とは、其住所二あり。根本は大海に住む。末末は人天に交はれり。分つて明さば三十四億の類あり。總じて云はば三なり。一には鳥の類、二には獸の類、三には蟲の類なり。此等の類、殘害の苦しみ忍びがたし。大馬の地における末大獅子王のをそれを、まぬかれず。毒龍の海にわだかまれる、猶金翅鳥の難をはなれず。雉は亦鷹のためにとられ、蟻は蛇の爲に吞まる。何が殘害をまぬかるや。互に若くは吞み、若しは食して、暫くも安き時なし。水にすむ魚は、すなどりの爲に害せられ、陸に行類は人の爲に害せらる。少は大なる爲にくらはれ、短きは長きがために吞まる。其あやまち無と云共、或は羽の紋毛のまだら、肉の味ひの爲に人に殺さる。此故に、命の恐ひまなし。又人に近付馬牛などは鐵を其身にうたれ、口にはげられ鼻をうがちあけられて、其身常に重き荷を駄つて打責めらる。しかのみならず切爛破疲極めし病を受けたる上にもあへて憐みなし。常には繩を付られて行んと思ふ所へ行かれず、草水のほしき思切なりといへども心にまかせず。或は闇地の下に生れて月日の光も見えず。或は海の底に生を受けて佛法の名字を聞く事もなければ、三惡道を出づべき期なし。設心ある大海の龍王なりと云へ共、一日に、三度の苦を免かれず。命をいへば、或は一時、或は七時乃至一中劫を経て無量の苦を受くるもあり。亦如何なる罪を作りて此報を受くと云へば、三寶の教へをも背き、或は父母に不孝なる人、或は恩ある人を輕くす、善惡をわきまへず。亦諸の罪を作り、

【九】以下修羅道
の苦しみを説く。

【須彌山】(Sumeru)
新譯は蘇迷盧と云

ふ。山の名。妙光

の最下を風輪と

し、その上を水輪

とし、その上を金

輪即ち地輪とし、

その上に九山八海

あり。然して須彌

山はこの九山中の
中心の山にして、
水に入るに八萬
由旬、水を出るこ
と八萬由旬と云
ふ。その頂上には
帝釋天の所居あり
とす。

破戒無慚にして、徒に人の物を受け喰ひ、或は道理を失つて、妄なる事を好み、或は由なき思に心を留めて命を捨る人なり。大方聖教に背き、若は人の許さぬ物を取りたる人、此報を受くと云へり。猶罪の重き輕きに依て、後に此畜生道より地獄に墮る者あり。かかる故に此惡道を正しく厭離す可し。十住心論に曰はく、「賢聖の諷めを信ずること無し。寧ぞ後世の幸みを知らんや。悠悠たる彼狂子、此は是れ傍生の囚なり。文」此文の意は聖のいましめを信ずる事なく、後世の罪を知らざる人は、是畜生の囚なりと。故に心あらん人、畜生を見ては汝是畜生發菩提心と唱へて聞せよと。佛仰せられたるなり。是大なる功德なり。

【九】第七に、阿修羅道の安からぬ相とは、是に付て二の柄あり。根本の勝たる柄は、須彌山の北の大海の底にあり。末末は須彌山の四方に東洲西洲南洲北洲とて、山の巖の中にあり。彼等互に安からぬ心をなして、一日三度づつの合戦絶間なし。しかのみならず、天人の爲に害心を成て軍を集め、夜晝安き心なし、雷鳴は天の軍の鼓かと驚き、亦天に上れば四王雨の如くに剣を降す。住所へ至れば散雲霞の如く責め來る、故に凡起居に付て其身を破切らずと云ふことなし。其命をいへば人間の五百年を以て一日一夜として、其命五千歳乃至八百年を以て一日一夜として八千歳あるもあり。

亦如何なる罪に依りて此報を受くと云は、佛法を信ずる心なき人、諸の大善根を作りつ、多聞にして佛道に麴向せざる者、或は精進持戒の人來れば小分の物を布施にして、然

【詔曲云云】この文は十住心論第一卷の文なるを、中火の八句を略す。即ち、詔曲橋心作布施、命終必至修羅道、心貪甘露意天帝、天輪射網人蓮早、日輪射網放四光、見月時遊憂陀嶋、不忍四王如兩劍、昇天還羅幾要割、其身還羅幾要割、心性不直愛顛倒、壽命八千不顯出、冥冥長夜徒生老、是全文なり。

も其を疑ひ賤しみ嘲る人、或は軍いさかひ、口舌する人、或は人を集めて博奕等を以て人の財をあざむき取て僧に布施をする人、かかる詔曲不善の者此報を受といへり。阿修羅道の名を聞くにも恐しき所なり、よしなし。此報を厭べし。【十住心論】に曰はく、詔曲橋心を以て布施を作せば、命終には必ず修羅道に至る。壽命は八千、出でんことを願はず。冥冥として長夜に徒らに生老す。文一此文の意は、へつらひまがり橋慢の心を以て布施をなす者、終る時には、必ず修羅道に至る。命は八千歳出ん事を願はず。冥闇に徒らに生死す。共に取て、月蝕日蝕と申す事あり。是は此閻浮提に正法を行はず、父母に不孝にあたり、聖教を敬せず、法を誘ふ人ある時に、天人の力よはくなり、修羅勢をまして、天を打んと思ひて天上に登るとき、阿修羅日月に手をおほひ光を失ふなり。此を日蝕月蝕とも云ふ。亦天の蝕とも申すなり。是日月のなす處に非ず。我等が不孝不善なる故に諸大善神の、力を失ひたまふなり。

【十】第八に人間の八苦の相とは、是に三の相あり。一には不淨の相、二には苦の相、三は無常の相なり。

不淨の相とは凡人の身に三百六十の骨あり。足の指よりして頭の骨迄、一一に相ささへたり。此上に五百分の肉尙泥をすりたるがごとし。二十五の息の出る筋猶し窓の間の如し。一百七の、をこつりあり、亦八萬の毛あり。亂れたる草の覆るが如し。亦三百六十の血の筋あり、其中に三升の血ながれ、したたる亦九十九萬の穴あり、此より常に汗を出す。亦

【六腑五臟】六腑は大腸、小腸、膽、胃、三焦、膀胱、五臟は肝臟、心臟、脾臟、肝臟、腎臟なり。

九重の皮其上を一つみたり。腹の中には六腑五臟色色にして、長き短きあり。其中に諸の大小の蟲集れり、しかのみならず、大小便かすは鼻たり、うみしる足の爪より頭のかみに至る迄、内外に何が不淨あらぬ所ある。大方丸の穴より色色に出る不淨ありのまみに顯はしみせんには、おもはしき中と云ふ事あるべからず。其をば隠して、そぞろなる草の汁蟲の絲などを以てをり、色色に染めける物をかづきけつらふ。姿に眼をまどはされて、着をなす事、髻ばいろどり繪かきたるかめに糞穢を入れて愛するが如し。故に是に大海をかたぶけて洗ふとも、盡る事あるべからずと云へり。況んや命盡きて後塚の邊り、野のあたり捨てられて一日二日乃至十日など過ぎぬれば、やさしき體もうとましく、白き膚も青くなり、赤き肝も黒くなり、六腑五臟亂れあひて、くされる中には蟲うごめきわかかへる。上には青きは集つて脛脹爛壞たる姿、きたなき事は死したる犬にも過ぎ、恐しき事は偏へに鬼にことならず。然れば親しきも疎きも、顔に袖を覆て逃げ去り近付く者とは、犬馬集りて眼をぬいて東西へ飛び去き、足をくはへて南北に走り去り、有と知る所とは、彼ぞと指をさす計なり。是皆人ごとに、そなはる事なれば我と云ひ、人と云ふもかかる者よりあひて、或は上下を論じ或はたはぶれ誇るぞ愚かなる。只かかる不淨を知つては何の益かあると云へば、佛道に至るには觀念がいみじき事にて侍るなり。文に云はく、「未だ此相を見ざれば、愛染甚だ強く、若此己を見れば、欲心都て罷む。文一文の意は未だ此相を見ずには、心に愛すること甚つよし。若是を見をばりぬれば、欲心都て止み

ぬと云云。次に苦の相とは、人の身に萬の苦しみありといへども、都て申せば八苦なり。一には人界に生を受くるには先二百六十餘箇日の間母の腹の中につつまれ纏されて月満ち日定んで生るる時は、生たる牛の皮をはぎていばらからたちに當るが如し。是を生苦といふ。二には老苦とは年のよる苦なり。古へ見なれし友はすくなく成て、出来る人には、うとみ隔てられ、亦漸盛も過ぎぬれば、身も力も衰へ、腰膝も弱く、或は目もくもり、耳もうとく齒もをちて、頭の毛も白くなり。萬の病もをこり安く或は醫師にあひ、或は灸をすれども朽木に釘をうつが如し。亦死も近付やすし。是皆老苦の至る處なり。三には病苦とは諸の病の苦なり。其に取りて病に内外を分つ。内と云ふは心の病貪瞋癡なり。外には四百四病の病なれば、具に申しがたし。略して云ば人の病をば顧みねども、我身に病を受くる時には、痛み堪へ難くして冷き水もあつく覺え、甘き味もにがくなり。亦心つかれ、身不淨にして獨り臥たる時には、萬歳の契をなす人も鼻をおさへて去り、千秋の語ひをなす人も形を隠して情なし。若し來り見れども我身の苦やすまる事なし。遲遅たる春日暮し難く、漫漫たる秋の夜明しがたし。是に付けても地獄の苦を思遣て往生のいなみをせざる人は、後世もたのみなし。心細くして只露の命の消えん時を待つ。是を病苦と云ふ。亦病に三の品あり。一には四大の病、謂く、地水火風の四、四季の轉變に隨ひて六腑五臟の寒熱の時節相違して、をこる所の病なり。二には業病、謂く、過去の宿因にこたへて受くる處の病なり。或は殺生の過、或は人をなやまし、物を禁じ人の愁を蒙り、人のなげき

【咒咀】のろひ新ること。

【五蘊】色、受、想、行、識。

を願す、物の哀を尋へん類か、かる往因によりて受くるを業病と云ふなり。三には鬼病、謂く、人の咒咀、或は天魔のなやまし、悪靈邪氣亦是山神海神の過日土公疫癘の祟、或は行住坐臥に付、内外自他にふれて都て安き事なし。しかのみならず病に死を招き、病に依て老も近付く其外に或は弓箭兵杖のをそれ、刀劍鋒刃のあやまち、皆是病苦の一なり。四には死苦とは凡そ一切の有情は地水火風の四大の成す所なり。既に最後に越きぬれば、四大分分にさけ破れ、五體一に離れ去り、水大別れて去るときは身分悉く小えこまり、風大はなれ去るときは口鼻より出る處の息を持ち去りし。是具に彼苦を受くるとき思合すべし。五には別の苦とは別を惜み、契を惜む苦、是れ殊になさけなき苦なり。其故は、春の朝には共に花を散び、秋の夕には同く月を誅じ、つかの間も見ざれば心をいたましめ、亦兼てわかれを惜む中なりと云ども、只一時に其情を先だつて涙を友とす。誠に人の身に敷きても甲斐なく、恨でも叶がたきは、別の苦の成す所なり。是を愛別離苦とは申すなり。六には怨敵有苦なり。人となる日は、大小に付て若は敵あるを知らぬ人はあれども内外に付いて怨敵なき人はなし。是を怨憎會苦と申すなり。七には求めて得ざる苦とは、是は殊にうたてしき苦なり。是故に佛死苦をば受くるとも、貧苦をば受くべからずと仰せられたるなり。實に世間の人の世にあるならひ、百位萬の事に付いて心に物の叶ふ事なし。耻を思はんとすに、三惡道の罪を造るなり。是を求不得苦と申すなり。八に五蘊盛苦とは佛にならぬ程は、五體不調なる故に身心共に苦みて安き事なし。其故は地の下に入つて

【光音天】新稱は極光淨天。色界の第二禪の終天なり。此天音聲を絶ち、語らんと欲する時は口より淨光を發して言語の要をなす。故に光音と云ふ。

もあられず、水に入れば漂ひ、火に近づけば焼け、風にあたるも病と成る。空より落ちても損するなり。さればと云うて是を離れては一時も命ある事なし。此故に太刀刀と申す萬のをそれ侍るなり。かかる危き身を受けて、愚なる人は命をつぐを藥と名け、耻を隠して榮華を思へり。凡て人間の苦においては述ぶるに暇あらず。日を追うて言ふに計なし。然れども心ある人は各身に知れたる事なるべし。是を亦何の益かあると云へば、此身の厭はしく成て、佛身を願はしきなり。されば經に曰はく、「智者常に憂を懐くこと、猶し獄中の囚の如く、愚人常に歡樂すること、猶し光音天の如し。文」此文の意は、智者は常に憂を懐く事、ひとやの中に囚はれたるに似たり。愚人は常に樂を成す事天上の如しと云ふ。三には無常の相とは、萬の事は皆遁るる事ありと云へども、無常の一は長く遁るべからず。經に曰はく、「其人の命のとどまらざる事は山水よりも過たり。今日は存すと云へども、明日迄は亦持ち難し。何ぞ心を恣にして惡意に住せん哉」と云へり。實に無常の責るには更に退く方もなく、逃れ去るに亦處なし。我も人も、貴きも賤きも、何れも更に遁るる事あらず。何ぞ一生を徒にせんや。明日を待つにあたはず。樹しづかならんとすれども、風止むまでは靜まらず。子は養はんとすれども、親は待たずと云へり。殊に哀なる哉、無常の理、齡を譬ふれば、秋の木の葉に似たり。命を論ずれば朝の露にことならず。籠の中の菊も霜に隨つて色を變じ、草の上葉に結ぶ露も日の光に當りて消え失せぬ。形には常の主なし、主別れば家あばる。魂には常の家なし。籠破れぬれば鳥飛び失せぬ。實に理なる

【生滅滅已】滅滅爲樂【四句偈】文中の終句なり。即ち諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂を以て全文とす【無常】此所には釋尊の御人滅を指す。

【二】天人にも五衰の相あることを明かす。

【日月天】(Sūrah) 三十三天、欲界六天中の第二須彌山頂、其喜見城には帝釋天住居す。

【色界】三界の一、身體と云ひ、富麗國土と云ひ、物質

哉、形を背うて、冥途へ行く人は、多く百千劫燄の中に悲しみ、さびしき宿に留まる人は空しき床にひとり臥してぞ哀はまざる。如何せん、をしき人もとどまらず。悲しき我身も残すべからず。只華の色を見て我身を觀ぜよ。諸行無常、是生滅法といへる故に、月の前にしても心を削ぐよ。生滅滅已、寂滅爲樂とあればなり。返返も只出る息は入る息を待たざる事を、急いで日夜に佛法に歸依し、無常の歩歩に近づく事を恐れて偏へに淨土を願ひたまふべきなり。昔佛涅槃に入り給ひし事を餘りに母の悲しみ給ひければ、釋尊宣玉はく、「諸佛滅度すと雖も、法僧寶は常住なり。願はくは母憂愁することなかれ、諦かに無常の行を觀せよ。文「此文の意は諸佛は滅すとはいへども、法僧寶は常にあり。願くは母、愁る事なかれ。明かに無常の行を思ひしろしめせとぞ仰せられける。中にも人道は今住なれて執心ある所なり。明かに無常を觀じて必ず此度は厭む王ふべし。」

【二】第九に天人の五衰の相をあかさば、是に三あり。一には欲界天、二には色界天、三には無色界天なり。其相廣くして其に明しがたし。且く一所を明して其餘を例せん。彼忉利天の知きは樂み極りなしといへども、命の終る時に臨みて五衰の相現す。五衰とは一には頭の華かづら忽ちにしぼみ、二には天衣塵垢にけがる。三には脇の下より汗出で、四には二の目しぼしぼまじろぐ。五には本の居所を離はず。此相現する時、天女眷屬悉く是を捨つる事草木の如くす。林の間に捨られて悲歎きて云ふ、「此諸の天女は我常に哀みき。何ぞ一旦に我を捨つる。今は憑む方なし。喜見城の内をも別れ、歡喜苑の中にも遊ばず、

竹のもの總じて殊妙精好なれば色界と云ふ、四禪十八天あり。

【無色界】三界の一、この物質には色法と云ふ物質のものは一もなく、身體もなければ宮殿もなし。諸心の

み存して深妙なる禪定に住し居れば之を無色界と名く【喜見城】切利天にある帝釋天の居城なり。

【梵天】新編には婆羅賀摩天（Brahma）と云ふ。色界初禪天なり。

所謂欲界の婬欲を離れたる寂靜清淨なる天の故に梵天と云ふ。之に三天あり。即ち第一を梵衆天、第二を梵輔天、第三を大梵天（Mahābrahman）と云ふ。

【六落】捺落伽（Nagaloka）の略。地獄の罪人の禁名なり。

又四種の甘露も忽ちに食する事をえず。五妙の音樂も俄に聞く事をたちつ。悲しき哉、吾獨り此苦にかかれり。憐みを垂れて、我命を救ひて少しの口を延ば、亦樂まざらんや」と云ふとも救ふ者なし。當に知るべし此苦は地獄の苦よりも甚し。故に天上も又厭ふべし。

『正法念經』に曰はく、「天上の欲退く時、心に大苦惱を生じ地獄衆苦の患ひ、十六が一に及ばず。文」文の意は天上より退せんとする時、心に大苦惱を成す事地獄の苦み、十六が一にも及ばすと云へり。又天上の色無色界の中には此の如き苦みなしと云へども、其に

も退没の苦遁る事なし。大方三界は安き所なし。六道の中には天上の樂極りなしと云へども、彼大梵天の深禪定の樂も終には奈落の苦に隨ふ。悲想天の八萬劫の命も阿鼻地獄を免かれず。是れ何れの所か樂しみなる。されば『法華經』に曰はく、「六道の衆生を見るに、貧窮にして福惠なく、生死の險道に入つて、苦を相續して斷たず。文」此文の意は六

道の衆生を見るに、貧窮にして福惠なし。生死の險しき道に入つて、苦みたへすと云ふ。已上六道の相略して是の如し。『十住心論』に「往生要集」等の意を取る。是れ我等が昔より以來、劫を経て生死廻りありく事、譬へば車の輪の如くなれば輪廻といふ。生るる事を生といふ。死する事を死と云ふ。故に是を略して輪廻生死と申すなり。此彼に幾度か生れ、幾度か死し、何

なる悲をか受けし。されども知らず。是をまよひの凡夫と申すなり。是を構へて厭はせ給ふべしと云ふ。

【三】第十に終人を六道には何の處に生まるべしと知る相を明さば、命の終る時の相を

【二】人間生して
 來世には如何なる
 果報を得て何處に
 生ずるかを示す。
 【守護經】守護國
 界主陀羅尼經の略
 名。十卷、般若、
 牟尼室利の共譯。
 十一品あり。

以て知たり。守護經に曰く、「佛河闍世王に告げて曰はく、地獄に墮るに十五の相あり。穢染に生るるに八の相あり。畜生に生るるに五の相あり。人間に生るるに十の相あり。天人に生るるに十の相あり」と。先地獄の十五の相とは、一には妻夫從者を惡き眼をしてにらむ。二には兩の手を舉げて空をあがきはかる。三には善知識の教へに隨ふ事なし。四には悲み泣きむせびて汗を流す。五には大小便利を覺らず知らず。六には目を閉ぢてひらかず。七には正當に面を覆ふ。八にはをばさまに臥して物を吞みくらふ。九には其身口俱にくさし。十には是膝をわななかし。ふるひてさはがしくす。十一には鼻柱をばだちをばむ。十二には左の眼しぶりうごく。十三には二の目變じて赤くなる。十四には歯をうづぶして臥す。十五には身をかがめて左の脇を地に付けて臥す。

餓鬼の八の相とは、一には好んで其厨をねぶる。二には身の熱き事火の如し。三には飢渴の毒をして飲く。四には口をあきて合さず。五には二の目かれかほきて、鵝孔雀の眼のごとし。六には大小便利もらす事なし。七には左の膝生ひゆる。八には右の手を常ににぎつて物をおしむやうにするなり。

畜生の五の相とは、一には妻子を愛し思うて見ん事をわさぶりて捨てず。二には手足の指をかがむ。三には五體に遍じて汗を流す。四には荒しぶりたる髻を出す。五には口の中にあはをかむ。

亦人間に生るるに十の相とは、一には善心をなす。所謂柔順の心、たえなる心、歡喜の

【大威德經】大威
德陀羅尼略名
二十卷、隋の闍那
崛多の譯。

【提婆菩薩】人名
天と譯す。後一日
を以て神に施す。

心、愁へなき心を發すなり。二には身をいたみ苦む事なし。三には物語をするには父母の子を思ひたるに似たり。四には妻子に哀をなして常の如くして愛する事もなく、怒る事もなく、又耳に兄弟視しき人人の名を聞かん事を思へり。五には善惡にをいて心亂れず。六には心正しくして曲る事なし。七には父母親類眷屬の我を守るをよく知れり。八には我事を營み見て喜びほむる心を成す。九には家並に蔽の財を分ち與へて是を惜まず。十にはいさぎよき信を發して、三寶を請じ、對面して貴敬なり。天上に生るる十の相とは、一には憐愍の心を發す。二には善心を發す。三には微喜の心を發す。四には正念前に顯る。五には色色の穢はしく、くさき事なし。六には鼻ゆがみそばだつ事なし。七には心に腹立つる事なし。八には家の財物、妻子眷屬を心にかへ愛まず。惜まず。九には眼の色清淨なり。十には顔をあげほけて咲を含みて天人の來つて我を迎る事を見るなり。經文略して此の如し。但修羅道の相は是に見えず。餓鬼畜生の類にをさむる賦。又「正法念經」には「功德を造つて然も軍をして死する者は修羅の相なり。」と云へり。亦「大威德經」には「功一身の皮切れたゞれ、血などにあえば、地獄の相なり。」と知るべし。亦「支義」の三の卷に「金光明經」を引いて曰はく、「惡の友に殺さるる人は必ず地獄に墮つべし」といへり。されば此世を能能愼んで後世をばとるべきにこそ。或人の云はく、「抑人に殺されし者の必ず地獄へ行くは、提婆菩薩等の入、堅誓師子などと云ひし懸、人に殺されし、いつか地獄に墮ちたる」答へて曰はく、「其實に尋ねたり。但大善提心を發したりし人人の事な

故に迦那提婆(Kana-ti-pa)と云ふ。
【摩訶師子】摩訶師子、金毛の
聖婆の徳を念ふが
故に獅子のなかに
身を捨つと。即ち
釋尊の本生なり。

【木樹樹】俗に云ふ「モクロジ」のことなり。此木能く邪鬼を避くるが故に無患と云ふ。梵語にては阿梨瑟迦(Arizita)と云ふ。

り。天竺震旦の事を聞くに未來惡世の凡夫、況や惡を作つて人に殺されん事を、彼譬喩を引いて是を疑はんや。只よくよく後世を問給へ。左様の事を少智は菩薩の劫とは申すなり。正法念經（正法念經）、梵網經（梵網經）などの心をよくよくみるべし。又一瑜伽論（瑜伽論）には狂亂に上中下あり。然れば上中下まで別、少しも心亂れば即ち惡道の相なりといへり。人に殺れん物、何んが少しも心亂さざらん。亂れば即ち後へ落さざらんや。惣じて惡業成じぬれば臨終の時、其果を感じて、方に迷ひ苦まん。但、此の如き等の惡相は籤で顯ると云へども、最後の時用心して十念唱へたらん者は極樂に生るべしと見へたり。亦籤で聞なりとも終る時此相を顯さばなくたがふべからず。佛の證き玉へるが故に、是を正しく見んと思はん人は彼經論を見るべし。さては人の事をも見、各因果を知るべきなり。因果とは我身の當時の行様を以て去方行末を知る理なり。何をか知ると云はば、經に曰はく、「若人若くして樂く、老て貧きは先世に若かりし時、功徳を作つて老後邪見に成たる故なり。亦若きとき貧にして、老後樂しきは若かりし時、罪を作つて老後功徳を作りしが故なり」といへり。亦或經に曰はく、「若人の生子に直心福徳あるは知るべし。母の齋をし、戒を持ち、人を惑み、僧に布施し、木樹樹の數珠を持ちたる故なり」と。齋とは卯の明相現する時に粥を食し、亦午の時の前に飯を食するなり。其功徳を云はば正五九月の一日の齋をする人、是を三大齋と云ふ。此人は十方の淨土念するにしたがつて生安しと云へり。何に況んや六齋十齋若くは日日をや。亦或人曰はく、「功徳において勇ある人は知るべし。能所より來りて、能所へ行べ

【六齋間】毎月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、此六日は四天王が人の善惡を伺ふ日の故に之を慎む。

【十齋日】毎月十日を定めて八齋戒を保つを云ふ。

【觀經】佛說觀無量壽經の略名。一卷、宋慈良耶舍譯。

【大集經】大方等大集經のこと。佛、欲色二界の中間に於て廣く十方の佛菩薩を集めて大乘の法を説きし經を云ふ。

【痔瘻】をしのこと。

【ことどもり】言葉を食べることなり

【因果經】過去現在因果經の略稱。

【三】人其未來を勘へて孝養すべきことを示す。

きなり」と。又「觀經」の疏に曰はく、「若人有つて、淨土の法門を説くを聞けども、聞かざるが如く、見れども見ざるがごとくして、空する人は是は知るべし三惡道より來て、罪未だ盡きざる人なり」といへり。「大集經」に曰はく、「端正は忍辱中より來り、貧窮は慳貪中より來り、高位は禮拜中より來り、下賤は憍慢中より來り、痔瘻は誹謗中より來り、盲聾は不信中より來る。長壽は慈悲中より來り、短命は殺生中より來り、諸根不具は破戒中より來る。六根具足は持戒中より來る云云。」文の意は、形吉は、忍辱の中より來り、貧は慳貪の中より來る。種姓高きは禮拜の中より來る。下賤は憍慢の中より來る。をしことどもりは誹謗の中より來り、盲聾たる者は不信の中より來る。形體かたはなる者は破戒の中より來る。かたはに無者は持戒の中より來ると云へり。

此文は常に御覽すべし。因果を知ざるに依て、善惡を畏れざるなり。善は日出度く清淨の心を發して、修すれば日出度く清淨の所に生る。若不淨の心を以て修すれば不淨の所に生る。惡心を發して殺せば惡心を發して人に殺さる。大方萬の善惡に付いて因果の理にあらずと云ふ事なし。故に「因果經」に曰はく、「過去の因を知らんと欲せば、其現在の果を見よ。未來の果を知らんと欲せば、其現在の因を見るべし。文」此文の意は前の世をしらんと思はば、當時の有様を見るべし。後世の事をしらんと思はば、現在の事を見るべしと云へり。此卷に善惡を明すと云ふは即ちこれ等なり。

【三】第十一に終る人の生所を知つて孝養すべき様とは、或人かんがへて、「二期大要

【佛眼】 佛眼佛母
尊を念する法。

【金輪】 金輪佛頂
の法。

【理趣】 般若理
趣。

【寶篋】 寶篋印陀
羅尼。

【寶髻】 寶髻陀羅
尼。

【三十六種の佛鬼】
正法念經十六には
佛鬼の三十六種を
あぐ。今は名を略
す。

【五十三佛】 觀藥
王藥上菩薩等に列
名す。

【十甘露】 十甘露
見のことにして、
阿彌陀如來の大咒
なり。阿彌陀如來
を又十甘露王と云
ふ。

【雨寶陀羅尼經】
佛說雨寶陀羅尼
經。

【光寶般若經】 光
寶般若波羅蜜經。光
十卷、晋の竺法護
の譯。

集」と名けり。其文に曰はく、「彼地獄の相、一も顯れて終りたらば、即ち彼へ落て無量の苦を受くると知つて、急ぎ其苦を救へし。一、佛眼、一、金輪、一、正觀音、一、地藏の法を行すべし。若は彼尊を書き若は造り、若は供養し奉つるべし。一、理趣經、一、五十三佛名、一、寶篋、一、寶髻、一、光明、一、寶髻、一、破地獄、一、寶髻閉、一、寶髻菩薩說偈品、一、法華、一、等此を修して廻向すべし。亦爾東道の相一もあらはれて終りなば、三十六種の佛鬼の中に生れて無量の悲みを受くと知て急ぎ其苦を救ふべし。所謂寶生如來、虚空藏菩薩、地藏菩薩、千手僧波羅蜜經、佛鬼等の法を行すべし。亦一、五十三佛、一、十甘露、一、雨寶陀羅尼經、一、等是を念誦して廻向すべし。亦其行を致すべし。亦自恣の信を供養すべし。自恣の信とは、夏中修行したる信を七月十五日に供養する事なり。亦春生の相あらはれて終りなば、所謂阿彌陀如來、般若波羅蜜經、文殊利菩薩、金剛寶菩薩、馬頭觀音法是を作すべし。亦五十三佛名、光、寶髻、一、理趣經、一、般若心經、一、光寶般若經、一、等此を念誦して廻向すべし。以上各各此三寶は殊に三惡道の苦を救ふ給ふ本誓悲願餘に勝れ玉へり。亦若三惡道の相、彼是まぎれて何れの相とも見分けられずんば、滅惡趣、若は護摩の秘法を急急に行じて彼を救ふべし。人の眼をとぢんきさみ、彼惡相見えば憐みの心に入つて、速かに此道修の善根を致して、菩提の道を授けよ。婆婆の病苦すら尙たへがたし。何に況んや阿鼻地獄の苦惱を哉。若是を救はざれば、無量劫の間の悲みなり。急ぎ救ひて佛道を成ぜしめば、然れば汝を引導して、普賢の行願を成ぜしめて、同無上道を證せん。」已上彼の文の意さて遺言違

【阿鼻地獄】Avīci
八大地獄の一、無
間地獄のこと最苦
處にして極罪の人
これに墮す。
【報恩經】大方便
佛報恩經の略名。
七卷、失譯。
【地藏十輪經】大
乘大集地藏十輪
經の略名。十卷、唐
の玄奘譯。佛、地
藏菩薩の間に依つ
て十種の佛輪（佛
力）を説く。
【心地觀經】大乘
本生心地觀經の略
名。

ふ事なかれ。亦常の作法は、『報恩經』、『地藏十輪經』の如し。又或ひは曰はく、「若人怨敵に
て殺るる者なりとも必ず後世をば救ふべし。彼を救ふ事を仕つれば、此世には念を破らす。
後世には佛道に障なし。若救はざれば生生世世迄我彼に殺され、亦我彼を殺す。怨の輪廻た
へざる故に。我爲の敵猶此の如し。況んや相見し友達、夫妻、父母、師主においてをや」經
に曰はく、「慈父の恩、高きこと山王の如く、悲母の恩、深きこと大海の如し文」此文の意
は、父の恩の高き事は山の如し、母の恩の深き事は大海の如しと云へり。然るに人は我身
の罪によりて惡道に墮るにあらず、「心地觀經」に曰はく、「世人子の爲に諸罪を造り、三
途に墮在して長く苦を受く。男女聖に非ず神通無ければ、輪廻を見ずして報ふべきこと難
し。文」此文の意は、世人は子の爲に諸の罪を造つて惡道に墮ちて長く苦を受く。男女
に神通なければ生るる所を知らずして報ずる事難しと説玉へり。然るに幸に今已に生れた
る所を知る事を得たり。何ぞ情なからん。或ひは曰はく、「孝養の心ある人をば三世の諸佛
も悉く憐れみ、諸天善神も集りて守るとのたまへり」、亦「觀經」に曰はく、「父母に孝
養し、師長に奉仕すれば、三世の諸佛、淨業の正因なり。文」此文の意は、父母に孝養し、
師長に仕へ奉つるは、三世諸佛の成就し給ふ正しき道なりと云へり。斯様に諸佛の佛に成
り給ふも、只偏に孝養の力なり。かかる故に萬を捨て一心に各はげみ給ふべきなり。
時に彼人に問て曰はく、「抑功德は孝養に限て候歟。亦何れが申にも勝れて侍る歟。」彼
人答へて曰はく、「功德の方法是にかきらず、見玉はず哉。彼各各の三寶は殊に三惡道の衆

生を救ひ給ふ誓ひ世に勝れたる事なれば、何の功德とてか愚に侍るべき。其大方の功德の數は述るに及ばず、但中にも勝れたる事は眞の志ある、是を第一とす。又堂塔を造らば古きを修理すれば、更に造るよりも功德勝れたりと經文にあり。又施を行せば人をえらぶべからずと申すなり。亦隨喜の功德日出度事と見えたり、其功德を造る人を見て心の中にも喜ぶ顯れても盡力を合する事なり。是は造る人の得る處の功德に等しと云へり。亦中にも物の命を養ふ事、心も言も及ばざる功德にて侍る。是遠く申すに及ばず。我身をつみて思し召せとなり。さて亡者の後世を責くるには殊に光明眞言は勝れたり。安くして然も一定人の後世助かる法なり。去れば彼一の善根をば折折堪んに隨てなすべし。此眞言をば末の世までも怠るべからず。此方法を以て一寺の僧徒などに付て毎日に廿一遍させ給へ。孝養の爲には七珍萬寶をなげすよりも勝れたりと佛も仰られたり。此眞言をほめ給へり。是程の孝養はあるべからず。亦一日に「法華經」を書いて供養するは日出度事と申し傳へたり。昔女人ありき。一人の子を儲て僧になして、後世を申はれんと思ひ取つて、山寺へ登するとして、汝とくとく僧に成つて袈裟かけたらん姿を我に見せよと云ひて登せられけり。様様物を習ひなんどして僧に成つて見せん事を思ひて下りき。母を尋ねければ今日は死んで七日に成りぬ。生死無常の情なさは早失玉ひきとぞ答へ申しける。かけたる袈裟を見すべき母もなければ、其悲みにしづみつ、臂をくだきて學問しける程に神通を得たる程にも成にけり。其時に閻魔王宮に法會ありて彼人を導師に請じ玉ふ。請するにか

なひて至りぬ。亦法を説くこと閻魔王の肝に染ければ布施は七珍萬寶の數を知る事なかり
 けり。時に彼僧御布施をは給はらし、申すべき旨ありと奏す。時に閻魔王氣色違ければ、千
 萬の獄率もけしき荒く見えけれども、此母の忍び難き事を一に申して今日の御布施には、
 彼母の生所を承つて一目見んと申す。かく申すに任せて冥官を以てかんがへられけれ
 ば、焦熱地獄とかんがへ申し、彼へしるべを給はりて行けり。未だ行着ざるに地獄の方を
 見れば大威山のもゆるが如く焰あがりて見ゆ。母を悲むに非ずんば向ふべき心地もせざ
 りけれども、命を顧ずして行くに地獄の焰にも焼かれずして事なく近付ければ、閻魔王
 の使、地獄の門を叩きて様樣宣旨なりと云ひければ、暫あらせて鐘の前にすみの様なる物
 を貫きてぞ指擧げたりける。此人願はくは本の形を見侍らんと云ひければ、獄率活活と唱
 へき。本の形になりぬ。是を見るに目くれ心消えて涙にむせびつつ、昔見せよと宣ひし所
 の袈裟掛けたる後かくなんと見せ申しけるを、獄率又罪人の隙延ぬと云ひて嚴などを投
 る様に囚へて地獄にぞおとしける。其時此人大音聲を擧て、情なき哉、今日閻魔王の導師と
 成つて、母を再び地獄におとすとさげびければ、聽て同様にて出しける。其時にさても何
 して此苦をばまぬき奉るべきと問ければ母の云はく、「法華經」を一日に書き、供養するに
 しくはなしとぞ答へける。かくて其後東西も見えず覺えず去りければ、しるべに手を引るる
 様にして泣泣閻魔王の廳に参りてありつる次第を申しければ、閻魔王殊に哀なる氣色にて
 是は我する事に非ず。衆生自ら罪を造つて自ら受る所なりと申さる。さてとくとくとく娑婆に歸

つて見ければ弟子共は、師匠の活たるを見て悦びつつ涙を流しけり。亦死したる師匠は母に一度あひ、苦みぬる事を教けり。何と人問ければ、有つる事の次第然々と云ひて、頼て其日に彼經を書き、供養したりければ、其夜に母の既に得脱しぬとぞ夢に見けると記して是は多数に申、大方此經の故に、頼く佛に成る事は、事新しく申すに及ばず。さては孝養の爲に親しからん人をば、只僧に成すべき事なり。其故は、目連衣を染て佛の御弟子とならずば、何か母の生たる所を知つて、餓鬼道の苦患をぬかん。又此人に袈裟を懸よとをきてすは、八熱地獄に今までも母にえてこそあらましか。加之一子出家七世父母皆得解脱。此文の意は、獨の子出家すれば七代まで皆佛に成る事を得と、佛仰せられたるをや。されば唐土にも我朝にも、昔より今に至る迄、位を即ぐべき王子をかきてもさのみこそ見え侍れ。是至れる實の孝養なれや。子罪を遣れば親の墮ちたる地獄の焰彌ぞ増なる。追修善根の行るべき様あらら此の如し。又何に況や現在の孝養報恩におきては、視り在るべし。經に云はく、「當時の善根は十分に十分ながらえ、後の萬善は半が半だにも得ず」と云へり。凡思の酬い、契の真なる事は一つ木陰にやすみ、同じ流を汲むだにも皆是前世の契と申したり。況んや親子と成り、師弟子と成る、したしき中は此おぼろげの契に非ず。爾るに今の度虚しく相見る事を止め、生へだたりなば生生世世までも爾るべからず。實におくれ先立つなかばに、しばし留る吾も人も、面々の芳恩に在るべくばこそ後に行きても又も進まん。本意只此度に候べし。高き卑しき親しき疎き、皆同心に互に進みて一佛淨土に

【二四】已下は功德を作りて普ねく廻向すべきことを示す。

【輪王】梵語にては逝迦羅代轉底易羅闍（Takravatti）と云ひ、轉輪聖王等と譯す。此王身に三十二相を具し位に即く時天より輪寶を感得し其輪寶を轉じて四方を降伏すれば轉輪王と云ふ。

生れん事を願ふべし。】

【二四】第十二、功德を造つて普ねく廻向すべき方とは或云はく、「若人功德を造つて己が爲に廻向をすれば其功德少なり。設ひ少善なりとも、法界衆生廻向すれば即ち無邊の功德と成る。少雲の大虚に過するが如し。設ひ一善なりと云へども、菩提涅槃に廻向すれば盡きせぬ功德となる。譬ば一雨を大海に下すが如し」と云へり。故に廣く廻向するなり。又若し善根の心に任せて廻向せらるる事は、設へば海を渡に功德はすなごのごとし。廻向の心はかん取りの如し。何にも吾やらんと思ふ方へやらるるが故。大論の心を取。故に名聞利養にさへざられず。よしなき思に住まつて廻向すまじきなり。其は設ば直ひをば愚にして實の寶をば得ずして、由無き物と名を得て後にくやむが如し。其故は彼の輪王の位も七寶久しからず、天上の樂も五衰早く來る。是が浦山しからん。何況んや人をや。輪王の七寶とは、一には輪寶、二には馬寶、三には珍寶、四には女寶、五には主藏臣寶、六には主兵寶、是皆生滅の寶なり。爾れば早く其思を留て實の心に任して吾造る所の善根を以て三寶の境界一切衆生に廻向し奉つて彼衆生と共に菩提心を起して正極樂淨土に生れんと廻向すべきなり。是を最上の廻向とす。これば無始より以來造りおける功德今日より後、未來際に至るまで造らん善根を大小をえらばず此の如く廻向すべきなり。其功德にをきては思へし。一佛一菩薩一衆生の悦び給はんすら、それ空しからず。何に況んや十方三世の諸佛諸菩薩と申し法界衆生と云ひ、普く廻向する所をかへりみて、隨て又悉く悦び給ふらん功德をや。爾れ

ば彼の廻向の至る所をば已に衆生の心に任せて彼の功德の莫大なる事は三寶の御知見に任せて彼御心に轉づり奉る。設ひ一分の善根なりと云ふとも何か二世の大願をば成就せしめ給はざらん。

願はくば此功德を以て、普ねく一切に及ぼし、我等衆生と、普共に佛道を成せん。

南無阿彌陀佛 十念。

孝養集卷上 終

孝けう 養やう 集しふ 卷くわん 中ちゆう

【二】 中巻の内容
目次。

【一】 實まことの道みちを顯あらはすとは、之これに付ついて十五じふごあり。

第一だいいち 三界さんがいを厭いとふべき事こと。

第二だいに 信心しんじんを發はつすべき事こと。

第三だいに 極樂ごくらくを欣よろこぶべき事こと。

第四だいに 念佛にぶつを唱となふべき事こと。

第五だいに 菩提心ぼだいしんを發はつすべき事こと。

第六だいに 佛ぶつの制戒せいがいを持もつべき事こと。

第七だいに 修行しゆぎやう有あるべき事こと。

第八だいに 罪つみを滅ほし失うふべき事こと。

第九だいに 心こころを靜しづむべき事こと。

第十だいに 彌陀みだの白毫はくごうを觀みるべき事こと。

第十一だいに 往生わうじやうの業ごふを定まむべき事こと。

第十二だいに 法華經ほふわきやうを讀よむべき事こと。

第十三だいに 佛ぶつの御心ごしんに叶あふべき事こと。

【二】 三界を厭ふべきことを明かす

【十善】 不殺生不偷盜不邪淫不安語不兩舌不惡口不轉語不貪欲不瞋恚不邪見

第十四 佛の言を持つべき事
第十五 憍慢を恐るべき事

【二】 第一に三界を厭ふべきとは、上卷に申しつるが如く、夫れ佛道を願はんには先づ三界を厭ふべき也。此を厭はざる者彼を欣ぶによしなしといへり。然るに天竺に十六の大國、五百の中國、十千の小國あり。かかる國國の王の御中に忽ちに佛道を欣ばせ給ふけんもあり。亦近くは本朝の帝王其御ためしあり。爰に知んぬ、世間の難はなしといへども、後世の苦は甚無く見たり。是則ち昔の戒行の力賢くて十善の位にこたへて彌世をいとひ遁れ玉ふ者あらはに厭給ふと見えさせ給はざるも、惡を止て佛法を願ひまします國王は少し。實に今生を以て來世を知るべし。然るに我等昔行せざりければ隨つて擲き身を得たり。是は世に實業づべし。其上此中の三惡道の相を見るに遁るべしと見えたる所なし。其故は大方は罪とも思ひ寄ざりし事さへ重き業と成りけり。又世間の人はさのみこそはといへどもゆるさるとも見えず。又知らざりしと云はんとすれば重罪と云へり。是を遁れんと云はんも中尊なし。既に自業自得なれば夏の蟲の火をけたんと云ふに似たり。然れば世間には彼帝王の御ためしをまぼり、出生には三惡道を恐れて唯、各意のたくみをやめて、佛法の道理を尋ねんには如かず、實に佛由無き事を教へ給ふには非ず、ここに今生るるは始て生るるに非ず。亦終りも永く終りはつるに非ず、劫を經し事數を知らず。久きより以來六道に廻り、此の如き諸の大苦惱をうけ、徒に生れ死する事を此度はげま

【大論】 大智度論のこと。

【三】 人、信心を起し佛に歸依すべきことを明かす。

ずんば、何をか限りとも知らざらん事の心うさを是を厭へとなり。然るに六道の中に厭ふに力あるは、只人間界なり。其故は先惡道は苦を受けて覺る事なく、天上は樂を受けて後を知らず。然れば人間は苦樂相交つて老少不定なれば、無常目の前にして菩提心常にあり。又神も佛も力を加へて善知識の心にまかせたり。又かかる人界にて終りはてて後に生れて他の報を受けずば、さてもあるべきに、六道の中に人界の生を受くる事は靈は爪の上の土の如く、三惡道に生るる事は大地の土の如し。亦同じくまれなる事は天上より絲を下して大海の底にある針の耳に貫くが如しと云へり。是即ち無間の烟井へ難く、紅蓮の氷忍び難かりし處より纒に出て、今件の形を中宿にして只しばし休程なり。是故に我等息をもつきあはず歎くべき所に還りて悦をなして、諸の罪を造る事愚なり。されば「大論」に曰はく、「無常は已に近く、佛法は滅しなんとす。急急に常に白が心を驚かせ」と云へり。又「法華經」に云はく、「三界無安なること、猶し火宅の如く、衆苦充滿せり。甚だ怖畏すべし。文」の意は三界は安き事なし。諸の苦み充滿して尙し焼ける家の如し。甚だ怖れても恐るべきとなり。

【三】 第二に信心を發すべしとは、夫れ穢土を厭ひ淨土を欣ふべしと仰せられたる三寶の教を信するなり。唯世間出世、共に信を以て徳とすと云ふが如し。何の神佛にも一心に後世を申せば、其憐の餘には、必ず今生の利生までもありと云ふ。先達からぬ事あらばなり。去ばやらん、或人は憑しく思はん知識に能近付きて共示さん様を信じて、佛道に

【四】極樂の相を説き示し、欲求淨土の心を起す。

【善導和尚】唐の

光明寺の住、河西の道綽、淨土の觀經を講ずるを聞きて發心し、淨土門の宣説に努む。

【俱胝那由他】俱胝は即ち俱致（スベ）のことにし、他（Arya）も亦億と譯す。那由他と云ふべし。然しこの位に三等あり、即ち十萬、百萬、千萬なり。故に學者その數を定むる事不同なり。

は入らすべきなりとぞ云はれける。しかのみならず、「大論」に曰はく、「佛法の大海には信を以て能人ぞ」と教へ、「涅槃經」には「信心を以て佛に成る種なり」と説き、或經には「萬の如來は皆信より出給へるなり」と云へり。是故に一切の佛法において背く心なく、仰せて信じ深く敬ふべきなり。實に信なき人は冥顯に恐あり。現當に其益なし。「心地觀經」に曰はく、「法實は甘露妙良藥にして、能く一切煩惱の病を治す。信有るものは服藥して菩提を證し、信なきものは縁に隨つて惡道に墮す。文」文の意は佛の教は日出度業なり。能く萬の煩惱の病を失ふ。信有て其業を用ゆれば佛に成る事最易し。信なくして縁に隨へば惡道に落るなりと云ふ。

【四】第三に極樂を欣べしとは「觀經」に曰ふが如し。上品中品下品に各上中下を分て、人を漏さじと九品あり。極樂のしるべには、此經に如はなしとぞ善導和尚も云へり。又此人をば極樂の先達なりと云へり。故に彼經の意により、此人の教に付てあらあら申すべきなり。但し其一一の功德莊嚴の日出度業事は、凡夫の輒く述ぶべきに非ず。其故は佛曰く、「設ひ百千俱胝那由他の劫を経て、百千俱胝那由他の舌を以て、一一の舌の上に無量の音を出してほむともほむとも淨土の莊嚴はつくる事能はず」と説き玉へり。取なほし彼世界の廣さ計の邊を云ふ事、佛、我盡し難しと仰られたり。況んや凡夫をや。又深き罪人の終る時、若善知識の教に隨うて、生れて宿る下品下生の蓮華の中計り、或は千六百里乃至八千里なりとぞ見えたる。「雙觀經」には百由旬五百由旬と云へり。此中にし

【雙觀經】佛說無量壽經の略名。二卷ある故にこの名あり。
【神保】梵音には牟婆羅揭婆(Alaya Jyotiḥ)と云ふ。海中の大具にして背上の輿文章輪の渠の如しと。

【欄楯】手摺の横木を欄と云ひ豎木を楯と云ふ。

て初利天の如く樂を受けて其蓮開け、様様佛の御法を聞く云へり。先彼世界には琉璃を以て地とし、金の繩を以て其道をさかへり。其地ひとしくして高下ある事なし。彼地の上に七寶の樹あり、高さ八千里由旬なり。七寶とは金、銀、水精、珊瑚、琥珀、琉璃、神保是なり。其數生並相つづきたり。琉璃の色の中より金の光を出し、水精の珠の中より金の光を出す。此の如きの諸の寶樹色の光を出して互に耀あへり。又一のあいなみつづきたる樹の上に七寶の網あり。彼網に七寶の鈴様様に懸たり。其聲微妙の響を發して妙なる法門を唱ふ。彼網の一一の間に五百億の宮殿あり。天童其中に有りて様様に樂をなして遊び戯れ、夜其常に百千の伎樂を奏す。又十方の諸佛時に影向し給ふ。此一一の網の間に又一の淨土を顯はす。是の如き樹世界に充滿せり、又道の邊の樹の外に七寶の欄楯あり。欄楯の外に又七寶の池あり。八功德水其中に充滿せり、其水涼しく清くして味ひ甘露の如し。又常樂我淨の風吹けば苦空無常無我の波立ち、其こそ微妙にして種種の法門を唱ふ。是の如き一一の池の間に色色の蓮花あり。一一の花の中より隨て色色の光を放つ、光の中に諸の化佛坐て妙なる法を説き玉ふ。一一の花の上に菩薩有りて夜は花に遊び、晝は宮殿に歸り給ふ。此の如き衆寶國土の一一の境の上に五百億の樓閣あり、其樓閣の内に無量の天人ありて天の伎樂をなす。又常に空中に無量の樂器有つて打たざるに自ら鳴り、此諸の音の中に自然に佛法僧を念すべき心を成す。此の如き等の寶を以て莊りたる中央の寶池の上に大寶蓮華の御座あり。此座の有様は八萬四千の花葉具足して百寶摩尼の玉のかざり

【毘楞伽】 具には
轉經毘楞伽(Satya
Dharmacakra-samud-
dhanam)と云ふ。寶瓶
の名。

【曼荼羅花】(Tara-
shava)花の名。調
華、白花、蓮花、
蓮華花と譯す。

【淨土】(Sukhavati) 淨土
新世界の名稱。

耀けり。毘楞伽寶を以て蓋とし、摩尼珠を以て網とせり。是に阿彌陀如來闍浮檀金の色にし
て威德巍巍たり。佛眼摩尼臺の上に坐し、給ひて無量の相好御身をかざれり。眉間の白毫右
に廻り宛轉として五演佛の如し。七百五億六百萬の光明熾然時炎として億千の日月の
如し。又無量の化身菩薩衆の中に充滿して遍滿し、奉り給ふ。又菩薩に、蓮花座あり。其
上に觀音、勢至、各坐し奉り。又無量の天、無量の身、無量の如くに侍らなり。雲の如く
に集りて微妙の音樂を成して阿彌陀如來の相好をほめ奉る。空より曼荼羅花、摩訶曼荼羅
花、色香にして種種に降り下る事、鳥の空を飛びて然も下るに似たり。沈檀のかうばしきか
ほり、闍浮檀土に坐す。凡そ天地四方に色を見、音を聞くに、皆見佛聞法の因縁香かき、味を
なむる、悉く我心修行の方便なり。玉の瓊瑤飾を垂れ、寶の轉蓋天にひるがへる。極樂淨
土の莊嚴は見れども見れども、彌珍敷、阿彌陀如來の御聲は聽ども聽ども飽期なし。淨土
論一に曰はく、彼世界相を觀すれば、三界道に勝過せり、究竟して虚空の如く、廣大にし
て邊際なし。一文の意は極樂世界は三界にも勝れたり。究竟して虚空の如し、廣大にして邊
際なしと云ふ。是譬へを以ても知り難し。只細には各生れて御覽すべし。又樂を受くる
様は下卷に明すべし。攝十方に淨土多し。何ぞ偏に西方をすすむるとならば、先三の様
を申さん。一には人に隨ふが故に、二には時相應するが故に、三には其便を得たるが故に勸
むるなり。一に人に隨ふとは「雙觀經」に、「女人は殊に西方極樂の阿彌陀佛の利益深し
と見えたるが故に、二には時相應すとは、昔佛未來惡世の衆生は、偏に西方を欣ぶべしと

仰せ置れたればなり。三には其便を得るとは、此世界は是穢土の終の所なり。西方極樂は諸の淨土の初門なり。故に此世界の人彼國に生るるに便あり。尙し人を漏さじとて、淨土を九品に構へ、誓を四十八に立て、如來自ら來迎し給ふをや。されば十方佛土の中には西方を以て望とし、九品蓮臺の間には、下品といへども足りぬべしとなり。殊に二佛深く契をなして、釋迦は此方にして勸め送り、彌陀は彼國にして迎へとり給ふ。彼には迎へ、此には遣給ふ豈さらざるべけんやとこそ侍れ。意しかのみならず、一諸教讀を取るに、多く彌陀にあり。故に西方を以て、一准となす。此文の意は、諸の教に尋る處は、多くは彌陀におはしますが故に、西方極樂を偏に願ふ所なり。又彼西方を願はん人は西を跡にし後にし、彼方に向つて不淨を致し、大方愚にする事有まじきなり。聖教に其禁の多きが故なり。

【五】念佛の功德を説く。

【二十五菩薩】往生經に釋迦彌陀二尊、二十五菩薩を遣はして念佛の行者を影護するを説く。

【五】第四に念佛を唱ふとは、又善導の云はく、「彼極樂を願はん人は此念佛に如はなし」と云へり。只是何なる人も南無阿彌陀佛と云ふ事を知らざるは無しといへども、今一きは心を一にして唱るを實の念佛とは申すべきなり。或人の曰はく、「彼念佛の作法には、音をいと高からず又ひきからずして、我心のすむ程にして常に申すべきなり」とぞいはれける。又遠く思ふべからず、則ち阿彌陀佛言はく、「我國に來り生れんと思はん者は、只常に我名を念じて止む事なければ、則ち生るる事を得べし」との玉へり。又後世までとは思ふべからず。若人西方の彌陀を念じ奉つて往生を欣ん者をば我今より二十五の菩薩をつかはして護ら

【十王經】一卷、成都府大聖慈寺沙門藏川の撰なり。

【維摩經】羅什譯維摩詰所說經の略三卷。

【止觀】梵語にては奢摩他 (Samatha) 等と云ひ、定慧、止觀等と譯す。

止は停止の義或は止息の義あり。觀は觀達の義なり。

【悲花經】十卷、北涼の曇無讖の譯

【散提蘭國】久遠の過去に在りし世界の名。其王を無淨念王と云ふと。

しめて諸の鬼神の惱あらせずして、夜晝守つて安穩ならしめん」とぞ説きたまへり。【十王經】の取る凡そ佛の功德を申さば、維摩經に曰はく、「三千大千世界の衆生を阿難の如くに多聞第一にして、彼諸の衆生に各劫の命を與て説かしむとも、佛の功德を説盡す事有るべからず」又「止觀」には一彌陀一佛の御名を唱ふは十方の佛の御名を唱る功德にひとしと云へり」故に彌陀の御名を唱ふるに一切の諸佛ともに守り念じ玉ふ處なり。諸佛の御誓には男女親疎、貴き賤しきもえらみ給はず、心を致して常に念ずれば必ず迎んとつたまへり。殊に女人は彌陀の慈願を憑へ奉つて往生を遂ぐべきなり。其故は「悲花經」に曰はく、「昔此世界を散提蘭國と名く、其時に國王御坐き、御名をば無上念王と申しき。彼王、法藏佛に逢ひ奉つて誓を立て曰はく、我佛に成たらんに、十方世界の女人我名を聞て菩提心を發して念佛せば女身を轉じて往生せしめん」とい玉へり。然るに彼無上念王と申すは今の阿彌陀佛なり。妾に知んぬ、發心、發願、偏に此世界にましますをや、我等一界に生を受し間に、或は父母となり、或は夫妻となり、或は師長と成り、或は同行と成り、或は親と成り、子となり、生生世世互に恩ありき。しづかに昔の縁を思へば悲の涙みさへがたし。設ひ一念なりといふとも、何ぞ引攝を疑はん。十四大方彌陀の誓には、濁世末代の衆生を本とす。既に機感此時に當れり。極重惡人を捨ざれば破戒の我等も頼あり。されば文に曰はく、「極重の惡人は、他の方便なし。唯彌陀を稱へて、極樂に得生す」

南無阿彌陀佛 十念

【六〇】 人菩提心を發して佛道修行すべきことを説きあかす。

【心地觀經】 大乘本生心地觀經の異名なり。

【六】 第五に菩提心を發すとは、是佛道の本意なり、既に佛にならむと思ふ心なるが故に。但し菩提心にも教に隨つて淺深あり。然りと雖も詮ずる所は上求菩提下化衆生の二なり。其上求菩提と申すは、上佛道を求むる心なり。下化衆生と云ふは一切衆生を悉く度する心なり、又菩提の慈悲と申すは一切の人において有縁無縁をいはす、我獨り子の様に哀みをなす心なり。昔此心を發したりし人、今の佛といはれ給ふなり。されば菩提の慈悲を發さざらん者は、佛に成るべからず。六道の衆生は是餘所の者に非ず。我等が生生世世に此彼にて互に生れあひし父母、若し兄弟、親類、此外相見し人皆さきの世の親しき人なり。法門聖教と申すは、佛の教に隨つて佛道を成して人を救へとこそ侍るとかや。實に彼聖教をば覺れずとも、生死無常の理は偽りなければ、などか無常の理を觀じて穢土を厭ひ、極樂を欣はざらんや。又六道の衆生は是皆速き父母親類なれば行でか憐まざらんや。『心地觀經』に曰はく、「有情は生死に輪廻して、猶し車輪の如く始終無し、或は父母となり男女となり。生生世世互に思ひ有る。文」佛は加様に仰せられたり。實に彼等が堪へ難き苦を受けて、頼む方とては、親有れば子あればなんど歎かん所に、たのみ甲斐なく、地獄に落しなば、彼が爲にも情なく、亦我身の爲にも益なし。剎へ殺し、或は食し又は惱し苦しむる事あるは、あらうたてしき次第なり。されば道心をも發し、菩提心をも發さばやと思へども、よしなき世路にほだされて靜なる暇もなし。朝には夜をこめて急ぎ、夕には星と共にいとなむ程に、罪は彌重く成りて世を厭ふ心はなし。神に祈り、佛に申して浮世を

願ふ身と成るべき心を發さばやと思ひ侍るべきに、さも非ず。亦何なる人なれば、普菩提心を發し難行苦行して今佛菩薩といはれて我等を勸給ふに、我等いかなれば諸佛の教に隨はずして、亦終に惡道に墮んとするや。已に仏の難き難陀の悲願に遇ひ奉つて何ぞ菩提心を發さざらん。一念も眞心を發しつれば、永く惡道に歸らざる生死の闇晴れて、菩提の曉に至るべし。又菩提心を發す功德は百千の塔を立て、三千世界に寶を充滿して佛に供養し奉るにも勝れたりと、是處に寶のかるか成るには非ず。界には五道を極めとし、功德には菩提心を勝れたりとす。一重五道を逃れば、永く無間地獄におち、一念菩提心を發したらん者は極樂淨土に生るべしと云ふ事を是只申すに非ず。文には曰はく、「一念に菩提心を發せば、百千の塔を建立するに勝れたり。寶塔は破壞して微塵と成れども、菩提心の種は佛道を成ず。」

【七】 以下第六に佛の制し給へる五戒、十善の諸戒を保つべき由を説き示す。

【七】 第六に佛の制戒を持つべきとは、夫れ佛道を顯はんには是必ずあるべき事なり。但し戒もしなじなにて侍るなれども、一梵網經の戒品の意を申すべきなり。先づ戒の何には父母に孝養し、師長に仕へ、三寶を供養し奉るべしと云へり。其十戒の意を略して申さば、一には何にても生あるものを殺すべからざること。二には何にても盜すべからざること。三には何にても淫欲を行すべからず。四には何事に付けても空事を云ふべからざること。五には酒をうり、亦のみ、人にものますべからず。六には人のとがをあらはし云ふべからざること。七には我身をほめ、人を毀るべからず。八には人の物を求めるに惜むべからざること。

【三歸】 歸依佛、歸依法、歸依僧の三なりこの三歸を師より受くるを三歸戒と云ふ。
 【五戒】 不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒なり。

こと。九には腹を立て、そねみ、心亂るべからざること、十には三寶をそしるべからず。此を以て十戒の大意とすべし。人にもおかさせ、亦自も犯するを重罪とも申し、又は十悪とも申すなり。又犯さざるを十善とも申すなり。但し申しつる様に戒も品品なり。在家の人の持邦淫戒と云ふは、我妻計をば許す。其も六齋日、十齋日、八齋戒の時、若は堂塔の邊、親、師匠の居所、若は僧坊などにては是を成すべからず。又在家の人も設ひ酒は齋日ならずと云ふとも張りに用ひるはあしかるべし。此一一の戒を持たず破る罪の事は、上卷に申しつるが如し。三惡道の業なり。彼業を終て人界に生ると云へども、或は賤しき人、かたはなる人、みめわろき人、或は色黒き人、又は身の常にくさき者、或は人にくまるる者、若はまづしき者、或は寶を失ひ、男はわるき妻に遇ひ、女は悪しき夫に遇ひ、或は子もなく兄弟もなし、設ひ適子を講たれともかたはにして親に恩をかけ、若はしれ者にて人に惡まれ、或は盜をし、そらごとをし、或は悪しき友に遇ひ、わろき所に生れて佛教にあはず。又心を發し功德をつくらば、此等は皆破戒の者、世世に此報を受くと云へり。『大集經』「正法念經」又戒を持つも上品に持てば、善所に先づ生れ後に佛に成り、中品に持てば福德自在の輪王と生ると云へり。乃至下品に持てば閻魔王と成つて、地獄の中に於て自在なりと云へり。『心地觀經』に此意見えたり。又『觀經』の中に「一日一夜戒を持てば、極樂に生るる」と云へり。何に況んや日に持たんをや。佛曰はく、「若女人有て三歸、五戒、八齋戒、十無盡戒を、若は七日、若は三七日、若は五七日、七七

【轉女成佛經】一佛
說轉女身經の異名

若は一月二月乃至半年及び三年持たん女人は、現世には罪滅して、命終の時身より光を放つて西方極樂に往生する事を得べし。」と説き王へり。「轉女成佛經」又或經に曰はく、「設戒を受けて、後に破る其尙受けよ。破過によりて暫く地獄に落といへども、受けし功德によりて終に佛道を得」と説けり。又「智論」に曰はく、「若人大善利を求めんと思はば、實を致して戒を持つべし。戒を持って思ふ事叶はずと云ふ事なし」と云へり。只善惡の二の道へ行人、行しは戒を持つと持するにあり。或文に云はく、「諸道の昇沈は戒の持毀による。見佛不見佛は戒の緩急による」と云へり。又人界に生を得るとも、戒を持たざれば、是れ佛の弟子にあらず、又聲聞の弟子に非ず、我又彼が師にあらずと放ち捨て給ふ。亦戒を持つ者を「見佛經」に説給ふ様は「衆生、佛戒を受けつれば、即ち諸佛の位に入り、位大覺に同じければ、眞に是れ諸佛の御子なり」と、讃じ玉へり。されば此戒をば世間には、威儀たいはいと云ひ、出世には律儀と云ふ。此故にさも有らん人は、佛の教に隨つて戒を持つたり。實に是れ世間出世の守り、戒にすぎたるはなし。誰か心あらん人、戒を持つたんや、只戒をば貴き僧に遇つて暫しなりとも持つべし。

【八】以下第七に
往生決定を欣ぶもの
は先づ六度の行
をなすべき事をば
六度の一一に就い
て例を引き文證を
あけて説き示す。

【八】第七に修行を前とすと申すは、修行は佛道の爲になる善根の名なり。夫れ萬行とて侍れば、一一に申すべきに堪へず、但し如何なる難行苦行すれども、申しつる戒を持つて、其上に菩提心を發すべきなり。譬へば吉福地に、よき種を下して、彌吉しきが如し。「大論」の意、その行を略して言はば、布施と持戒と忍辱と精進と止と觀と此六なり。布施と

【精進】勇猛に善法を修し惡法を斷ずる心の作用を云ふ。

申すは、我が力に隨つて諸の衆生の求むる財寶、食物、衣服等を人の望むに隨つて施し、人を悦ばしめ亦萬の厄難を恐れ有る人を見、聞きては、とぶらひ、なぐさめ、心安き事を與ふるを壇波羅密と云ふなり。次に持戒とは、前にあらあら申しつるが如し。次に忍辱とは、人あつて我を觸まし、惡口を致し、事に觸れて人を云ひ掠り、若は殺害せんとするとも、少もあだ敵とも思はず、腹を立す、瞋をなさず。心に報をなさんとも思ふ事なく、人瞞らたずば何によりてか我忍辱を持たん。是然るべき善知識なりとて、彌忍心を起すべきなり。次に精進と云ふは、諸の善根において少しも懈怠の心なきなり。是れ持つに依て佛道とするなり。次に止とは、萬の事に、まじはるべき心をとどめ、靜かに佛道を修するなり。次に觀とは、生死を厭ひ菩提を求むる意なり。但し申しつるが如く菩提心を發さん人は、必ず智者の貴とからんを尋ね求めて其教に隨ふべきなり。構へて徒に月日を過すべからず。小智邪見の人には近付き隨ふべからず。喻ば貧しき人の心惡きは人の用ふるにも叶はず、富人の心よきは萬事を叶ふに似り。小智邪見の人は他に教ふれども我知りたる事計をよきと思つて、人の機根のまちまち成るには隨はず。又人の習ひ好く事をも惡くそしりて、人の心を亂すなり。其亂るる様は、或はかれは各別の事、又徒事なりと云ふなり。或は未だ聞き及ばざる次第なりなどと事に觸れて人を云ひ掠め、己はよくも明かならずして不審をなごしむるなり。若は功德の事も人の心の及ばぬ様に事しくいひなして、退屈の心を發さしむるなり。亦智慧ある人の貴きは心廣くして萬に心得たれば、人の心に隨つて

心得安き様に、法門の事をもいへば、明かに覺つて佛道をも願ふなり。譬を以て覺り得れば、一を以て萬事を知るが如し。されば經に曰はく、「若人佛惠を求めんには、常に多聞の人に聽ふべし」智者にしたがふは後世のみに非ず、今世迄もいみじかるべきなり。善人にかたれば何事もよし。譬ば形うるはしき人の鏡にうつる影もうるはしく、亦源濁りぬれば、流も濁るが如し。佛道には、只始めより終り迄、善知識の吉き智者にちかづかずしては叶はず。是故に「法華經」に曰はく、「善知識を捨てて、善友に親近せよ」文「されば返返す悪しき知識には近付くべからず。其悪しき知識とは親しき疎きをいはず。嬉しきつらきによらず、生死のきづなとなる。是偏に外見に非ず。彼に隨はば互に善縁を失ふべきが故なりと云へり。されば後世を願ふ者は人に知れず、人をも知らず。我人を知らざれば嬉きもなく、つらきもなし。人我を知らしざればほめらるる事もなく、そしある事もなしといへり。經に曰はく、「三界の中に沈轉して、惡業を離する能ず、惡業を棄て無爲に入るは、眞實の報恩者なり。文」但し上根上智の人をば措置き其外の中下根の人并に女人などは、心閑かに居て、病をつつしみ、身を苦しめずして、人の信施をも受けず。器量の堪しに隨つて佛に香花を奉つて、若は坐禪し、若は經を讀み、或は念佛の功德を積で往生を遂んには如かず。其故は女人の爲に速かなる行は禪門と淨土門とに過ぎたるはなし。法照禪師の曰はく、「萬行の中急用と爲すは、迅速なる淨土門に過ぎたるはなし。但し本師金口の說にあらす、十方の諸佛の共に傳へ給へるなり。文」さても行の口出度を云はば、此世界の一

【彌勒問經】彌勒菩薩所問經の略名一卷。元魏の菩提流支譯。

【彌陀の四十八願】阿彌陀如來因位の時。法藏菩薩となつても四十八願を立つても就中その第十八願を王本願となす。此第十八願文の最後に五逆と誹謗正法を除くべき由、但し書を附す。

【九】以下第八に早く懺悔し修行して一切の罪障を除くべきことを説き示す。

日にちの行ぎやうは極樂ごくらくの百ひやく日の行ぎやうにも勝まされたりと説たま給たまへり。是これは「彌勒問經」の説せつなり。或あるは人涙ひとなみだを流ながして申まをしける、其ひとれ人の行ぎやうを作つくさんを如何いか様さまにもそしる事こと更さらにすべからず。其その故ゆゑは三世さんぜの諸佛しよぶつの一一いちいちに佛ほとけに成なり玉たまひし引接ひんじやくにもれけるは、人の行ぎやうを誹謗ひぎやうしける過とがなり、是これをくやまずして、如何いかんが重ねて其咎そのとがをなさんや。又彌陀またの四十八願しじゅうはちがんの中なかにも五逆罪ごぎやくざいと誹謗ひぎやうの者ものをば除のぞくと仰おほせらる。其禁制そのきんせいの文ぶんを破やぶらん人は、彌陀またの引接ひんじやくを惡わるむにあらす。或あるは曰いははく、十惡じじやくもあり。法はふをそしり、人ひとを誘そしるは、遂つひに何なんの益やくかあらんと。取と實まことに君きみに仕つかふるは、名利めいりを求もとむる故ゆゑに、念佛ねんぶつを唱となへ、經きやうを讀よみ、坐禪ざぜんをするは成佛ぶつじやくを期もちする所ところなり。然しかに云何いんげが惡わるき詞ことばを出だして大事だいじの往生おんじやうを障さげんや。行基菩薩ぎやうきぼさつの誡いましめのごとくに、口くちの虎とらは身みを害はするが故ゆゑに、早はやく誹謗ひぎやうを慎つつしむべし、しかのみならず、「大論だいろん」に曰いははく、「自法じはふを愛樂あいらくするが故ゆゑに、他人たにんの法はふを毀くわすれば、持戒ちけいの行人ぎやうにんと雖ち、地獄ぢやくの苦くるしみを免まぬがれず云いふ」

【九】第八はちだうに罪つみを滅めつし失うふとは、大罪だいづみを造つくらずんば、地獄ぢやくを恐おそるべからず。或あるは云いはく、惡業あくごふは是大菩提だいだいぼつだいの障さりなりと。久ひさしく造つくる所の罪つみを懺悔ざんげすべし、若も懺悔ざんげせずんば佛道ぶつだうに礙さりありと云いへり。其懺悔そのざんげに數多かずたありと云いへども人に依よつて宜よろしきに隨したがふべきなり。罪つみは又また今生計こんじやう造つくるのみにあらず。經きやうに云いはく、「此六道このろくだうの中なかに一劫いつこふが間あひだ、生なれ死しせし事ことの共數きうすうを云いはば、三千世界さんぜんせかいの草木そうぼくを取とつて細こまかに切きつて、是これを以もつて一劫いつこふの中なかの父母ふぼを算あふるに尙なほしたらず。其間飲そのあひだむ所の乳ちちは大海たいかいの水みづにも過すぎたり」といへり。一劫いつこふすら尙なほし然しかなり。

【覺身の舍利】 佛舍利なり。

何況や、無量劫をや。又彼中にして其間造りける罪をや。罪無きは如何が三界を今迄廻るべきや。久しく造る所と云ふは、是なり。殊に女人は其罪淺からず。然りとはいへども、能懺悔すれば罪とどまらず。譬へば百千年刈積たる草に塵計の火をつくれば、其草残らざるが如し。此故に早く罪を懺悔すべし。其方法多しと申し、るは、教念佛讀經をもしつつ思ふべし。我無量劫より以來、諸の造る罪數も知らず、幸に今佛法に遇へり。隨つて此罪を佛も歎き給ふ、故に願くば、此諸の罪をほろぼしてたべと心にも思ひ口にも唱へ、恭敬禮拜をもすべきなり。故に經に曰はく、「我れ昔より造るところの諸の惡業は、皆無始の貪瞋癡に由り、身語意よりの生ずる所なり。一切我今皆懺悔す。文。此の如く意に思うて其障なくして、一切衆生を導かん、念力を致して、常に六根の罪を懺悔すべきなり。懺悔とは、其罪を懺むと成り。佛の御覽する所をば指置き、諸天善神迄も我等がなす所の行を見玉ふ。譬は明かなる鏡に向ひて影をうつして見るが如し。然に佛曰はく、罪をかくせば彌増長す。其罪を其かくさしめば自ら消滅すと云き玉へり。取意故に佛像又は遺身の舍利にも向ひ奉つて、昔の罪をも悔懺み、若は貴き衆人にも早く罪を申しあらはして、急ぎ懺悔すべきなり。經に『普賢經』に五種の懺悔を説く。其心を粗申すべし。一には心を直くして三寶を誹謗せず、出家する人を留めず。諸の聖者の爲に惡しき事を成さず。持戒の人若は持經者に常に供養を遣へよ。亦法門の道理を能能心得べし。二には常に父母に孝養し、師長に奉仕すべし。三には我力の及ぶ衆生に於て憐みの心を致して、道理を以

て國ををさめ、人民百姓の數きを止めて悦びを與ふべし。四には六齋日に當らん時は我國の境の内の殺生を禁斷すべし。六齋日とは、月の八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日なり。五には佛法の道理に任せて、能信佛を常に忘るべからずと云へり。是略して申す所なり。此一一の懺悔に其罪の留らざる事、經文の如し。志あらん人は、彼經を讀ませて聞しめすべし。但し罪障其色なければ、有るも知れず、失はるも見えすといへども、懺悔すれば其罪滅せずと云ふ事なし。其に取つて懺悔に淺深あるべし。若し血の涙をも流し、身より汗を出し乃至身の毛よだつ程に耻悔しめば、其に隨つて罪も消え失せずと云ふ事なし。譬へば冬に同山にふり積る霜雪あれども年打越し四方の山邊に霞引きのどけき日に照され、風和かに吹いて雨降らば、さて彼霜雪ありし物とも見えす成つて、萬の木草のめぐみきざすが如く、諸の罪障彼霜雪の如くに消え失て、草木のめぐむ如く我身の佛性もめぐみきざすべし、其故は悲の涙落つる時罪悉くきゆる折節は我身の中の佛顯れ給ふと經には説き侍ればなり。普賢經には曰はく、「衆罪は霜路の如く、惠日能く消除す。是故にまさに至心に、六情根を懺悔すべし。文一但し此等の懺悔に堪ざらん人は、只一心に彌陀佛を念じ奉るべし。一念の間に能く八十億劫の生死の罪を滅すと云へり。或處に云はく、「彌陀佛を一念せば、即ち無量の罪滅し、現に無比樂を受け、後清淨の土に生る。文一

南無阿彌陀佛

十念

【一〇】以下第九に
 數息觀等に依つて
 妄念妄執を除き六
 根六色を清淨にし
 て六欲を斷つべき
 事を説き示す。

【數息觀】五停心
 觀の一、出入の息
 を數へて心息の散
 亂を停止する觀。

【二】第九に心を靜むる様とは、靜かなる所を構へての上の事なり。念佛讀經をもするに、よしなき事とおぼえ思はるる、是を名付て佛道を障る妄念妄執とも云ひ、又妄心妄想とも申すなり。經に曰はく、「人一日一夜を經るに、八億四千の念あり。此皆三速の業なり」と云へり。實に生死盡せず、惡道の絶えがたきは、只是妄念妄執の成す所なり。彼妄念さまさまなる故に隨つて六道の形もまちまちなり。其罪の重き輕きあるが故に、三惡道の上中下あり。此故に能く妄念を止むべし。如何が止むべきとならば、常に無常の理に心を染めて、然も我身の不淨等を觀すべし。其相上卷の第八の段に申しつるが如し。是初心の人の煩惱を斷つ計ごと、心をしづかにする業なり。是の如く惡き心を止めて、次に我息の出入をかぞへて、一より十に至る迄、是の如く常に算れば必ず心はしづまるなり。さて常に息に心をゆるさされ、其故は息に心をゆるす時は、人驚き、さはぐによりてあやまちも有るなり。是れ則ち數息觀の意なり。實に是をやむるには其妄念を知つて隨はざるは是なり。或人あひ頼りたる人の許に後世を助け給へと云ひつかはしければ、只此文を書いて送りたり。或人は此文を守りにせられたりけり。其文とは龍猛千部の論の中の肝心と云へる「菩提心論」に曰はく、「妄心若起らば、知つて隨ふ勿れ、妄若息む時は、心源空寂なり」と云へる文なり。此文にて、後世はあるべきなり。日出度文なり。去れば萬德爰に具し、妙用窮りなきと云へり。此故に御覽せん人は、是を持って妄念の起らん時は唱へ給へ。さらば妄念は止むべきなり。此文の意を先あさきに付て申すべし。譬ば貪欲の弓を引き、瞋恚

【牛頭馬頭】 地獄の鬼なり。

【羅刹】 鬼神なり

のしもとを持擧ん時も其心を知つて隨はざれと説き給へるなり。其故は我等が身には夜晝六人の盗人、事に觸れ、時に隨つて、ひまをうかがふなり。一人は色の盗人、眼を仲人として來る、一人は聲の盗人、耳を仲人として來る、一人は香の盗人、鼻を仲人として來る、一人は味の盗人、舌を仲人として來る、一人は觸の盗人、身を仲人として來る、一人は法の盗人、意を仲人として來つてたぶらかすなり。是を六賊とは云ふなり。此中に意を迷はず盗人は第一の大將軍と云ふなり。故に此一心をしづむれば、餘は皆しづまるなり。眷屬なる故に。若此心をしづめざれば、此の如き六賊所所に經て、六根を仲人として夜晝をとらじ、まげじと追ひ來つて、纔に得たる菩提の寶を盗み取つて後、催し出し行つて、見せ聞する處なり。されば彼無間地獄の中の月日もなき處にいたりて、いなびかりの如くなる牛頭馬頭の眼の光を見せ、百千の雷の如くなる恐しき聲をきかせ、くさく堪がたき香をかかせ、舌に釘をうたん、身より焰を出して、我身を焼き、或は獄率の責に逢ひ、心は誠に是第一のかたきなりと責らるる事、彼色、聲、香、味、觸、法の六賊にたぶらかさるる故なり。しかのみならず惡業の馬頭、破戒の羅刹、貪欲の惡鬼、愛欲の虎狼などと申す、わが身の眼、耳、鼻、舌、身、意の仲人の催に隨ふ故に菩提の種を皆盜み取られて我も人も無始より以來心の別別に分れ行つて今日まで無量の苦を加様に受るなり。若し是より後、色を見、聲を聞き、香をかぎ、味をなめ、身に觸れ、意の欲はおこるとも、六賊が我をたぶらかすぞと知て隨はずんば、彼六賊も、又無間の迎ひも、惡業煩惱も力及ぶ

【淨名經】維摩詰
經の異名なり。

べからず。亦摩訶薩界にもたぶらかされど、今云ふ所の煩惱には皆智つて隨はざれとなり。是則ち妄念より生じけりと起じて心をしづめれば、彼六賊は自しづまるなり。譬へば草木の根を切り、枝葉力なくして枯死ぬるが如し。さて心しづまれば佛に成る事、譬へば波しづまれば水と成るが如し。謂ふ所の心の源は佛なり。されば非妄念の濁り止めれば、源の佛顯るるなり。此心則ち王となる。王と申すは則ち大菩提心なり。大菩提心と申すは一切衆生の心なり。されば若六賊力を失はば、佛性の威徳高く心の覺り實に明かならん。夫惡心を起せば、善心を失ひ、善心起れば、惡心力なし。釋摩訶衍論の意を取る。但し妄念は月におほへる雲、鏡にかかる塵の如し。又今來る客人の心なり。此故に隨ふ者は凡夫なり。隨はざれば本心の佛顯るるなり。此志念に迷はされて佛の利生をも疑ふ。彼功力のなきには非ず、妄念が信力を失ふ所なり。譬へば礮石、針をすふといへども、崩れる針をばすはざるが如し。琥珀、塵を取るといへども、きたなき塵をば取らず、大海雨霖をきはすといへども、死屍を置く事なきが如し。佛海量しといへども、心の淨からざるが故に、きははれて今迄覺らざるは我等なり。心を淨めて入りし人は佛なり。我等雖ても餘あり。願くば彼古跡を尋ねて同く佛界に入らん。『淨名經』に曰はく、「若淨土を求めんには、先づ其心を淨むべし。若し心淨ければ、即ち是れ淨土なり。又『又或所には、得道より來た法性を動ぜず、八正道より權造を垂れ、皆衆生の苦を解脫するを行たり。故に八轉大菩薩と號す。又』加様に名承給へども、同は心淨からん人の頭には住ん。若心きたなき人の頭

【二】彌陀の白毫を觀じて佛智見を得べき事を説き示す。

【白毫】如來三十二相の一、釋尊の眉間に白色の毫相あり。右に旋轉して宛轉せること目の正中する如し。之を放てば光明あり。初生の時長さ五尺成道の時一丈と云ふ。されはこれより起つて一切の佛體の眉間に寶玉を入る。此れ亦白毫相を象徴するなり。

には宿らじとの玉へるとかや。是の如く萬の神佛かやうに仰せらるる事あれば只心を淨くして、佛道を願へばこそあれ。既に華開きぬれば自然に蝶來て遊び、水精みがきて澄ければ、日月の光うつる事安し。實に心地の水淨く澄みぬれば、佛性の月影をぞとす。妄業の風に波起りぬれば、引攝の舟かぢを折りて空しと。是を心得給はざらんや。

【二】第十に阿彌陀佛の白毫を觀ずとは、是此中の至要なり、行者心をとどむべし。彼眉間の白毫と申すは眉の間の白毛なり。觀ずとは其を思ひやる心なり。有所に云はく、正しく西方に向つて身をととのへ心をしづめ、眼を閉て手をあさえて、思ひを西方にかくべし。先瑠璃の地を思へば、譬へば、はるかなる海の面に風しづまり、波たたず淨く澄るが如くに思ひて、其紺瑠璃の地の上に大寶蓮華玉の座ありと思ふべし。其座の上に百寶の色を交へたる微妙の瓔珞を垂れたり。其座の上に阿彌陀如來紫磨黄金の色にて坐し給へり。身量は眼の及ばんを限りとすべし。若大身を觀ずるに堪へざらん者は、丈六の身を思へ、三十二相八十種好は一一に觀じ難し。只微妙の相好を具し、威儀尊重にして、世間に譬へなし。あらあら其體相を觀じて、殊に眉間の白毫に心をかけて、此一の相を觀せば、八萬四千の相好も皆見つべしと云ふが故に、二の眉の間に中道の毫相ありと觀すべし。其白毫右に廻り宛轉として秋の月の雲を出るが如し。彼光明普く十方世界の念佛の衆生なり。深く生死を厭つて障る所の妄念を止めて心を澄し、彼相を觀じて罪を滅せんと一心に佛を念すれば佛の光明我を照し給ふ。光明我を照せば、其罪障消えずと云ふ事なし。罪ほろびぬれば

【遮那】異盧遮那の略。佛の眞身の尊稱なり。

【三身】法身、報身、應身。

【第一義諦】二諦の一、世俗諦に對する稱。又は眞諦とも云ひ、聖諦、勝義諦とも云ふ。涅槃眞如、實相、中道法界、眞空など總て深妙なる眞諦を稱して第一義

ば必ず引長を垂れ給ふ。文には「光」明は遍く十方世界を照し、佛を念ずる衆生を攝取して捨てたまはず。此文に付いて照すと申すは、日月の光の物を照すには只上を照して底をば照さず、佛の光は萬物に通じて同體に冥合して照し給ふ。日月の光の水精の珠を照すにぞ譬ふべき。玉に通じて其光あり。此玉の上に爰こそ光ならずと云ふ所もなし。光は則ち玉、玉は則ち光、正に一體なり。佛の我が一念の心を照し給ふも亦是の如く、念念に是の如く常に照して時として止む事なし。此光の我が心に満つるをさして、佛と申すなり。此光は西方の修因感果の阿彌陀佛の光なり。されば西方の佛の光の我が身の中に入り給ふを己身の如來とは申すなり。己身の佛と云ふは、西方の阿彌陀を離れて本より有りと申すは惡しく意得て申すなり。又本身の佛と申すも修得を離れて求むべからざれば、我が心既に是れ已證の淨佛なりと知るを賣の念佛とは申すなり。又菩提心を發すとも申すべし。能く能く知りぬれば、必ず極樂に生るるなり。如何なる衆生をも佛の光は是の如く照し給へども、我が心に照ると知らざる限りは三界を出ず、照し給ふと知れば始めて佛界に入るなり。此の如く、常に心をかくべしと云へり。是れ只大いに信ある人には必ず佛見え給ふべしとぞ申したる、其光を見ん事は垣壁のすきより日の光を目を當てて見習見習して、其あかりより佛の相好を見奉る思ひをなすべしと云へり。但し、如何なれば此觀念を成すに諸の罪滅して顯に佛に成ると云はば、是れ賣の佛を念じ奉る故なり。凡そ佛に三身いませども法身を賣の佛と申すなり。所謂、此肩間に中道を顯せば第一義諦なり。是を法身とも申

【觀佛三昧經】佛說觀佛三昧海經の異名、十卷。東晉の佛陀跋陀羅譯。佛の相好及びその功德を觀ずるを教へしものなり。

【二】以下第十一に淨土に往生せんと欲すれば先づ九品往生のうちこの規かを定めてこの文を參照して決定往生をはかるべき由を説き示さる。

し、亦是實相とも申すなり。されば經に曰はく、「若懺悔せんと欲せんには、端坐して實相を思へ」實に阿彌陀佛、昔我等が如く重罪の凡夫にていませし時、塔の中の木像の佛の白毫の相を瞻して罪を滅して、今、阿彌陀佛に成り給へり。何を以て知るとならば「觀佛三昧經」に曰はく、「過去空王佛、の眉間の白毫相、彌陀禮敬し、罪を滅して今佛を得たり。」此故に中にも至要なりと申しつるは我が本尊の佛となし給へる行なるが故に。但し此觀念は能く能く用意あるべし。その故は不淨橋慢の心を以て觀すれば、魔縁、佛のまねをして我が身心をたぶらかすと云へり。それを見分ける程は魔縁の光は左に廻る。佛の光は右に廻る。又魔縁は口をふさぎて見れば見えす、佛は見え給ふ。若しおぼつかなき事あらば能鏡を以て道場の壁にかけて影を寫して見よ。其故は魔縁は人の口をばまどはせども己が影を見知らず。せめて鏡なくば水をたたへて見すとす。それも只信不信によるなり、一子の慈悲は平等なりといへども、攝取の光明は念佛の衆生を照し、念佛の衆生は多しといへども、先信心の者を引攝し給ふと言へり。

南無阿彌陀佛 十念。

【三】第十一に、往生の業を定むとは、夫れ業を修して報を願ひがたし。かの事にて侍べるなり。但し往生の業多しと雖も、念佛是れ偏に勝れたりといへり。故に尋常の念佛の要を明すべし。或は曰はく、

上品上生

上品中生
毎日阿彌陀經十卷、念佛六萬遍、禮拜四十九度。

上品下生
毎日阿彌陀經五卷、念佛五萬遍、禮拜四十八度。

中品上生
毎日阿彌陀經三卷、念佛三萬遍、禮拜四十七度。

中品中生
毎日阿彌陀經二卷、念佛二萬遍、禮拜四十六度。

中品下生
毎日阿彌陀經一卷、念佛一萬遍、禮拜四十五度。

下品上生
毎日阿彌陀經一卷、念佛九千遍、禮拜四十四度。

下品中生
毎日阿彌陀經一卷、念佛八千遍、禮拜四十三度。

下品下生
毎日阿彌陀經一卷、念佛四千遍、禮拜四十二度。

下品下生
毎日阿彌陀經一卷、念佛二千遍、禮拜四十一度。

【最音聲經】阿彌陀菩薩聲王陀羅尼經の略名、
【平等覺經】無量清淨平等覺經の略名。

是は經に付いて先徳の傳へ給ふなりと云へり。又別時の念佛と申すは、一日、二日、乃至、七日の念佛なり。是は「阿彌陀經」の説なり。十日の念佛は「最音聲經」「平等覺經」に説けり、九十日の念佛は「止觀」に出でたり。經に曰はく、「昔難提國に那利王と申す王いましき、彼王、佛に申し給ふ様は、如何なる事をしてか佛に成り候ふべきやと。佛の曰はく、木糠子の數珠を以て二十萬過念佛すれば、天に生る、百萬遍申せば、極樂に往生す」と仰せられける。又三業相應して、念佛を唱ふれば、決定往生の業と成ると説かれたり。但し如何なれば、諸の罪は滅せども、善根は留まりて往生の業となると云ふは、功徳は眞善妙有の體なるが故に失せず、罪は虛安の法なるが故に失安し、又業となる事は願力に依てなり。其故は、罪は造れども、地獄に落ちて長くつかばじとは誓はず、功徳は小善なれども、極樂に生れて衆生を利益せんと誓ふが故に、往生の業となるなり。是故に、能く願を發して實に業を定むべきなり。云何んが發すとならば、譬ば、人有つて菓を食せんと思ふには、先づ樹木を植うるが如く、加様に衆生を利益せんと思ひて此念佛を唱ふるは、彼樹木を植うるが如し。極樂に往生するは華の開くるに譬へ、彼處にて菩提を證するをば菓となるに譬へ。さて衆生を利益するは既に食して本意を遂るが如し。文に曰はく、「念佛衆善を業因とし、極樂に往生するを華報とし、大菩提を證するを菓報とし、衆生を利益するを木懷とす。文」文の意は、念佛衆善を業因とし、極樂に生るるを花報とし、大菩提を得るを菓報とし、衆生を利益するを木懷とすと云へり。是故に此願を發すべきな

【起信論】大乘起信論の略名、馬鳴菩薩造二卷あり。

【三】淨土往生を欣ぶ徒は法華經を誦誦すべし。何となれば、法華經と阿彌陀如來とは同一性の故なりと説き示す。

【震鷲山】震鷲山、印度の山の名にして釋尊常に説法し給ふ所なり。

【五佛の女人】女人の身に具する五つの障礙なり。即ち法華經提婆品には一梵天王、二帝釋、三魔王、四轉輪聖王、五佛身等なる事を得ず。

り。是れ詮する所、彼樹木をする人は菓を食せんが爲、此念佛を唱ふる我等は衆生を利益せんが爲なり。此理に任せて念佛を唱へんには、設ひつれなくとも、などか心もおこり、争でか驚心あらざらん。加之、起信論に經を引いて曰はく、「若人、極樂世界の阿彌陀佛を專念し、修めし善根を取つて、彼世界に生ぜん」と、廻向し願求せば、即ち往生を得んと一文の意は、若西方極樂の阿彌陀佛を念じ奉つて、行する所の善根を廻向して、彼世界に生れんと願ひ求れば則ち往生することを得と云へり。

【二】第十二に「法華經」を讀むべしとは、夫れ三寶さまさまおはしますと雖も、殊に此世界に緣じます佛には、阿彌陀如來、法には法華經、僧には觀音なり。是を申せば一體なり。或は曰はく、「昔震鷲山に在り、法華と名け、今西方に在つて彌陀と名く。沙婆に觀音を示現して、衆生を利益すること同一體なり。文」文の意は、昔震鷲山に有つては法華經と名け、今西方にては阿彌陀と名け、娑婆にては觀音と名け、衆生を利益し給ふ事、只同一體なり。故に殊に此經にあひぬれば、女人いさみ有つて浦出しきに似たりと云へり。其故は、八歳の龍女は現身に佛になり、又五障の女人を既に西方極樂へ導き給ふ「藥王品」に曰はく、「若女人有て是經典を聞き、説の如く、修行せば、此命終に於て即ち安樂世界、阿彌陀佛、大菩薩衆の圍繞せる住處に往いて、蓮華の中の寶座の上に生ぜん。文」此れ妙法蓮華經は能く穢土にして、衆生を救はんが爲に海泥の中に生じ、諸佛の解脱は煩惱の源を求め給ふが故に、女人を殊にかく哀み給ふなり。此故に心を致して能く能く修行すべし。

【優曇華】具には
 優曇波羅と云ふ。
 譯して靈瑞、瑞應
 など云ふ。法華文
 句には「優曇華は
 これを靈瑞と云ひ
 三千年に一度現は
 る。現はるれば則
 ち金輪王出づ」と
 云ふ。

云何が修行すべきと云ふは、總て經の中に言ふが如し。若し受け、若し持ち、若し説き、若し讀み、若し誦じ、若し書かん。此の如きの功德無量なること、「法師功德品」の如し。如何なる所にて、如何なる作法にて讀み奉るべきと言はば、「法師品」に曰はく「寂莫として人の聲無からんに、此經典を讀誦せよ。我その時爲に清淨光明の身を現ぜん。文」

『法師品』と『安樂行品』と此二品に廣く説くが如し。但し具に左様に有らん事は難し、只其趣に付いて申さば、先づ彼時の作法には沐浴精進して、手を洗ひ、口を能く能くすぎて、淨衣を著し、新しき座をしき設けて御經の御前に香花を備へ、次に五體を地に投げて恭敬禮拜しつづ口に唱へ、心に思ふべし。我阿僧祇劫を過せしかども三寶の御名を聞く事なかりき、如何に沉んや、佛まれに世に出で給ひて説き給へる大乘至極の經に遇ひ奉り、讀み奉る事は、一眼の龜の浮木のあなに遇ひ、優曇華の三千年に一度咲けるよりまれなりと思ひ、小かの縁に非ず、是れ實に有難き緣、計り難き悦びなり。此經を讀み奉る所には必ず諸佛菩薩天龍八部等みちみち給ふと思ひて、國王などに向ひ奉る様に思ひなして、彼法座の上に居て、名香を手ぬり、御經を取り奉りて、いと高からず、卑くか
 らずよき程に心得て讀み奉るべし。又讀みはてて高座より下らん時、又初めの様に禮拜すべし。さて淨衣を脱ぎ、常衣を著して、常の有様になるべきなりとぞ申したる。又此經の功德を申さば、一偈一句を聞くより、或は五十展轉の末にて聞くすらその功德無量なりと『隨喜品』に説くが如し。況んや、自ら一部八卷讀み奉る人をや。されば現世安穩、

【大略】大和國大峰山、初に從行著し、同き經に於て觀摩羅大觀の觀きし所なり。

【三因佛性】蓮樂の說。一に正因佛性、二に了因佛性、三には縁因佛性なり。この三佛性は又空假中の三諦とす。即ち佛は空諦縁因は假諦、正因は中諦なり。

後生善處と説き、問淨觀の人の病の良藥なり、乃至、病は即ち消滅し、不老、不死となると云へり。大峯に由伏の迷ひたりけるに、經の聲の聞ゆるに付きて、行きて見れば、岩の洞の中に偈の年三十計りと見ゆるが有りけるを見て、是は如何んと尋ねければ、昔峯に入つて侍りしが、留りて此に八十年が間かくてあるとぞ答へける。其時、由伏、あさましく思ひて、いかが事の外に若き御給にておはするそと問ひければ、不老不死の文を讀して居たりけると答へり。實に現世後生、只此經にまします者なり。其に取つて此經を讀むに、如何にも實の心にして、能く讀みするべし。【萬力因】に曰はく、我が薄皮の後に於て、魔に正觀を受持すべし。是人、佛道に於て、決定して、疑ひあることなし。又一文の意は我が薄皮の後、此經を受持せん人は佛道に於て定んで疑ひある事なしとなり。報稱へて信を致して讀みするべきなり。さて一法華經と申すは、一切衆生の心性、眞如實相の理、これを妙法と申すなり。此故に生死不淨の所なれども、能く修行する人は彼妙法の種を具したるが故に、善根を顯し得ること、譬へば彼蓮華の種子あるに依りて、泥中より出で、花さき實なるが如くに侍るとて妙法蓮華とは申すなり。されば此經は我が身の中に皆備はりたまへる萬徳圓滿の無量劫にも無れ給はざりつるに、三因佛性の今すでに新に顯れ給へるなり。又是に過つて一定佛に成り安き事や侍んべらん。深く尋ね給ふべし、其事常にも人の申さぬ事なり。略して申さば、此經を讀み奉る時、心を一にして觀すべし、我が經を讀み奉る舌の上に、八葉の蓮華あり、其上に金色の佛います。其佛の口より六萬

【増上慢】 我は増上の法を得たりと慢心を起すこと。

【南岳】 高野山の事。
【天台】 比叡山の事。

九千餘の文字、一一に金色の佛にて出で、虚空に登りて光を放つて持經者を照し給ふと云へり。是故に彼法界に充滿し給へる若干の佛、各各六道四生の一切衆生を利益し給ひて、諸佛の知見に入つて三界を出さしめ給へと觀念して讀み奉るべきなり。其功德は唯佛與佛のみ知り奉り給へり。佛より外に知る人あるべからずと仰せられたり。實に志あらん人は、それを尋ねて知り給ふべきなり。但し、かゝる甚深最極の大乘經にておはしきす故に、愚にすれば、又深き罪となるなり。この故に能く能く用意して讀み奉るべきなり。此は是れ諸の國王大臣の御師なり。又三世の諸佛菩薩にも御師なり、又法身如來の全身の舍利なり。此故に經卷のおはします所には、諸佛菩薩あつまり、諸天龍神圍繞し守り奉り給ふなり。かゝる日出度き御經を懈怠不淨にして、或は酒を飲み、肉食をし、或は五辛を食する口にて讀み奉る事、ゆゆしき恐れの中の恐れなり。若彼増上慢の輩此經を讀明すべし、人を罵謗したりし罪の故に、千劫阿鼻地獄に落ちたりし事をば云うて只成佛したる事計りを聞きて、穴賢穴賢頓證菩提の縁を遠き縁とはなさせ給ふべからず。大方この經はかく日出度くおはしませば、南岳天台を初めて各各家には是を信ぜずと云ふ人はなし。只佛道のしるべは此經におはします。されば經の中にも、十方佛道の中、唯一乗法有るのみと云ひ、或は是れ如來の第一の法、諸經の中最も甚深とすなんど説き置かせ給へり。これ無上法王の髻中の珠なり。大覺世尊の祕密の奥藏にておはしますは、只此妙法蓮華經なり。彼一一の十羅刹女、讀誦の人を哀み給ふものなり。能く能く信じて受持

【摩訶衍】 大乘と説す。

【四】 往生を欣ぶには先づ佛の御心に叶ふべき由を説き示す。

し、讀誦し奉り給ふべし。妙法蓮華經は、是れ大摩訶衍なり。衆生は教の如く行せば、自然に佛道を成せん。文「意は妙法蓮華經は、是れ大菩提の正道なり。衆生教の如く行すれば、自然に佛道を成すべきとなり。」

【四】 第十三に、佛の御心に叶ふべき事とは、經に云はく、「佛の御心とは大慈悲心是れなり」大慈悲と申すは「法華經」に曰はく、「今此三界は、皆是れ我が有なり。其中の衆生は悉く是れ吾が子なり。文「文の意は、今此三界は皆吾が有なり、其中の衆生は悉く是れ我が子なり」と説き給へり。悉に知んぬ。佛より外には助け給はぬ我ぞと心得て、人知れず心をしづめて戀むべきなり。又西方世界へ向つて人の子の母よ母よと云はんが如くに阿彌陀佛、阿彌陀佛と申さんには、これを哀み給はぬ佛おはしまさざらんや、申にも「十方の如來の大慈悲は、皆一體觀世音に集まりて、西方を稱して阿彌陀となし、沙婆に觀世音を示現して、八寒、八熱、那落迦に、大悲は一人、代りて苦を受けたまふ。文」文の意は、如來慈悲の餘りに、紅蓮大紅蓮の底に入りて、我等に替つて慈悲の肝をください、焦熱、大焦熱の中に我等に替つて、忍辱のはだえをこがし給ふ。哀れなる哉、恩も知らぬ我等が故に、青蓮の背より紅の汗を流し給ふ。されば「大慈三昧經」に曰はく、「法身は諸の衆生に遍滿すれど、客塵煩惱の爲に覆藏され、我が身に如來あるを知らず、生死に流轉して出づるの期なし。文」といひ、「華嚴經」には「毘盧遮那の清淨の性は、三界の五趣の體と皆同じ。妄念に由るが故に生死に沈み、實智に由るが故に菩提を證す」と説き給へり。

【五趣】 五惡趣のこと、地獄、餓鬼、畜生、人、天の五なり。

【法性眞如】本然の眞理と云ふ程の意なり。

【横河の僧都】源信僧都のこと。

彼法性眞如の理は、十方の諸佛菩薩にも一切衆生にも蟻けらに至るまでも、露塵に變る事なく替ひませども、たふるぎ迷へる故に此生死には沈めり。所以に妄想を留めて、我が身の佛性を觀念すべきなり。我が心是れ諸佛の心なり、諸佛の心此れ我が心なり。法身同じきが故に、眞如一なるが故に、法身同なれば報身、應身皆同じ、三身皆同じければ一切の相好功德皆同じ。故に我身の佛性を觀するが則ち三世十方の諸佛を念じ、存る功德とは成るなり。是を三身とも佛性とも乃至眞如とも實相とも申すなり。殊にこの觀念をば女人の修すべき觀なり。其故は或は云はく、此の如く我が身の中に無始より佛おはしますと能く能く知ぬれば、骨をもくだかず命をも捨てざれども、彼龍女が如く最上利根の者は刹那に心を發して須臾に佛に成る。縱ひ龍女に及ばざらんものは須臾の間にこそ佛にならずとも、人の根性同じからず、或は一日二日、若は一月二月、或は一年乃至一生に覺るものもあるべしと云へり。正しく我が心中に佛おはします様を知らんと思はん人は、横河の僧都の母の爲に造り給へる、『眞如理觀』と云はるる文を見給ふべし。日出度き事にて侍るなり。但し是の如きの一切の衆生も三世の諸佛も唯一なりと承はりぬ。されども佛あり、衆生あり、又様様の形あり。此をば如何が一味同體なりと知らんや。彼人曰はく、佛も覺を開き給はぬ前には何となき衆生にてこそおはしつらめ、彼れ是れの隔ては妄念の謂なりと申すなり。或が云はく、迷の前の是非は是非ともに非なり、夢の中の有無は有無ともに無なりと云へり。されば『摩耶經』に曰はく、『我等長夜より來、無明の獄に縛着し。無智慧に昏迷して、

求道の處を知らず、又一文の意は我等長夜より以來無明の獄にこめられて、迷つて智慧な
ければ、佛道を求むる所を知らずと説き給へり。我も人も、生死長夜の間に、妄想轉倒の
夢を見るときは知しめさずや、是れを覺かす理なり。眞如實相と申すは、實相の外に更に
別の法なし、妄相分別するが故に、諸の苦惱を受け、菩提の中にして不清淨を見、解脱
の中にして纏縛を發すとも申すなり。心と佛と衆生とは三差別なし。其法身同體なりと常
に此思ひに住して、佛道を修行するを實の佛道修行とは申すなり。又問うて曰はく、是の如
く思ひ給ふべき人は皆佛ならば只凡人の操舞を離ふ事はあるまじきや。彼人の云はく、「そ
れも又あまりあり、譬へば、船は風にはしると計り聞いて、月の出、日の入り空の色も雲
の立様も知らずして走りなんとし、若は鳥の子の飛ぶと云ふ事計りを見て、翼もとののは
ず、木づたひ、杖うつりもしらずして事斬しく、高く飛ばんとせしが如し。」の取意されば
業の波を靜めて、生死の苦海を事なく渡り、智慧のつばさを生じて、三界の古翼を速に
出でて、後にいかにも口出度き處に遊び給ふべきなり。今勸め申す心は、凡夫の心をひる
がへして、功德を増さんが爲に、本有の佛を顯す所なり。此理を以て實の菩提心とは申す
なり。又その菩提心と申すは大慈大悲なり。大方、根なくして生ゆる草木は有と云へども、
慈悲なくして佛に成る者あるべからず。何を以てか知るべしとならば、「大日經」に曰はく、
「心性と虚空界と菩提とは三は唯一なり。慈悲を根本とす」と説き給へり。只機心に住し
て叶はざる是も修行あるべきなり。其故は、觀は是れ智慧の義、煩惱を斷する源なり。

【二五】信心者は共に俱に佛の御法を
持して忘るべから
ざる由を説き示す

行は是れ禪定の義、生死を出づる基なり。此定と慧とは、譬へば、車の兩輪の如しと云へり。若一つも剛けなば如何が侍るべからん、されば「法華經」に曰はく、「定慧の力をもて莊嚴し此を以て衆生を度す」と云云。文の意は、定慧の力を以て莊嚴して、是を以て衆生を度すと説き玉へり。此時又彼人に問うて云はく、「慈悲に任して佛性を觀念するが既に諸佛の御心に叶ふ」と承りぬ、さても行のあるべきと仰せらるるは何の行を成すべきにか侍る哉。彼人の云はく、「人に隨つて要を取つて申さん。尙尙、唯阿彌陀の三字なり。其三字と申すは空假中の三諦、正了縁の三因佛性、法報徳の三身なり。故に阿彌陀の御名を唱ふれば十方三世の諸佛菩薩の名を唱ふるなり。又八萬十二の顯密の教文をも唱ふるなり。三寶の功德多しと云へども、三諦の妙理を出ることなし。此故に阿彌陀の三字に皆悉くをさまり給ふなるべし。さればかく文字は少なくして、諸の功德の集り給へる事、譬へば、如意寶珠は其體小さくして、然も諸の寶を降すが如しとこそ侍りけれ。

南無阿彌陀佛 十念

【二五】第十四に佛の御言を持つべしとは、極樂のしるべと申しつる「觀經」に、佛の御言に説き教へ給ひし事を承つて、阿難、佛に申し給へる様は、「さて此經の要法をば云何が受持し候べきや」と、佛、阿難に告て曰はく、「汝能く此語を持つてと云ふは、無量壽佛の御名を持つてとなり。此故に一旦に骨を折らずして長く念佛の功を積み、佛の願力を以て往生の本意を遂げしめ給へと思は申す心なり。未だ此道には上下を論ぜず、老少を言は

す、只心に長く佛の言を持ち、忘れざらんを以て佛道とはすべきにこそ。或は云はく、高山の氷のしたたりは廣の面を越えり、長安のつるべの繩は石のゐげたをきるといへし。高きもいやしきも、是にて心得べし。又「法華經」に曰はく、乃至童子の戯れに、若は草木及び筆、或は指の爪の甲を以て、而して佛の像を畫作す。是の如きの諸人等、漸漸に功德を積み、大慈悲心を具足して、皆に佛道を成せり一文の意は乃至童子の戯れにも、若は草木及び筆を以ても、或は指の爪の甲を以て佛の形を作る。是の如きの人、漸く功德を積み、大悲を具足して皆佛道成じんと云き給へり。老いたるも少きも撰ばざる事は是を以て知んぬべし。龜の甲の上に積みたる塵を名けて蓬萊山と云ふ。自然に念佛の功の積もれるを又往生の業と申すなり。或は言はく、佛道を修行せん事は琴柱を立つる様なるべしと云へり。是は餘り急ならず、緩ならずあれといへる意なり。又云はく、人は必ず聲に隨つて習ひたつる事あり。彼を習つて、心得たる如くに是を修行せよとぞ侍べる。抑佛かく勲に教へ給ふは、誰が爲ぞや。生死に迷へる我等が爲なり。昔、此世界暗き時侍べりき、其時始めて阿彌陀如来の二人の御弟子に、日は觀音、月は勢至なり。是を哀れんで方方につかはして、日は出ても入り、月は満ちても闕くとさとれと度度示し給へるなり。是によりて天が下に住む我も人も云何が此佛を日日夜夜に忘れ奉るべきや。平生の朝には山の端より出でて山を照し給ふ。命終の夕には西より来て、西へ導き給ふ。或は云はく、是を勤めずして空しく死なば、後に必ず悔む心あるべし、と云ふ大賢の疏の意を取る。然るに我等世路に理を紛らか

され、名利に實の心はとられて、且には持つと云へども暮には破り、暮には心を澄すといへども、曉に又心亂る。かやうに月日はこび夜晝の移り行くに付けても無常を進め、明暮に付けても命をせむるに彌思ひを述べて空しく過ぎん事實に愚なる哉、慕なき哉、後をも知らざらんかなや。其故は斷金の契をせし人も、芝蘭の語をなす中も、徒らに成りて去りにし後は來る事もなし。隠れしも顯れず、有もあるに有るべからず。自隠れし人を相見し姿は夢にこそ見ゆる様なれども中よしなきかなや。昔の數今と覺めて鴛鴦の衾の中には人知れず涙にむせび、比日の枕の邊りには浮思こそまさりけれ。大方憐ぶ親の有る時は華の影に遊ぶ蝶の如し。悲む友のなき時は空しき園を廻る鶯に似たり。是身に知れて人を慰み心をかけて情あるべし。其故は上下の差別はあると云へども、歡きの差別はあるにあらじ。衆生の形は替れど涙の色は替らねばなり。如何なる寂滅の理り顯す人も、有爲の悲は忘れ難く、生死を知らざる武士も、別れの涙は押へ難し、哀れなる哉。實に樹にすむ鳥も終には立たぬ事なし。夫妻は瓦の如し。あひあうて離れぬはなし。つらつら昔を思へばうらめしく、行く末を思へば慙なし。かかるながらへして、然もあればなり。浮世の捨て難き事。只夢幻の中に劍を玉に取るが如し。其故は、思をとをせば心を苦しめ、又捨てんとすれば暇非ず。加様におそろしくうらめしき所なりと思ひて、心を一にして佛の御名を唱へて、早く日出度き所に生れんと思ふべきなり。百千の事を見ずとも、一心に阿彌陀の六字を持たんには如し。

南無阿彌陀佛 十念

【二六】佛道修行者は必ず憍慢心を除くべきことを説き示す

【初利天】(Chulita) 譯して三十三天と云ふ。欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の南、八萬由旬の所にあり。
【質多羅樹】質多羅は梵語譯して種と云ふ。或は又山の名。故に森林の意なり。
【憍曇彌】釋尊の母、摩耶夫人の妹と云ふ。

【二六】第十五に、佛道に憍慢の心あるを怖すべしと云ふは、其程度に隨つて證せざるを證したりと思ひ、心得ざるを心得たりと思ひ、乃至道心の起るについで、内心にも顯れども是れ怖れても恐るべきは憍慢の心なり。佛道の障り、魔縁のあらそひ此一事に依るなり。是を知つて然も隨はずんば其過あるべからず。「智論」に云はく、内に過なければ外より魔來らず、くさきものなきには蠅集らざるが如しと云へり。是れ皆心ある程の人の根に入らん物は業に出んと恐るる處なり。「往生要集」に曰はく、極樂をねがはん人は、譬へ、心ならず我が國を離れて敵國にとられ行きたらん、彼國より敵に知られずして逃げ歸らんと思はんが如く、此世を厭ひ、極樂を厭ふべきなりとぞ云はる。一取若此過を離れん者は生死を離れ、菩提に至らん。何を以て知るとならば「華嚴經」に曰はく、「若信解有つて憍慢心を離れば、心を發せば即ち如來を見ることを得ん。若論誑、不信の心有らば、億劫にも尋求すとも值遇する事なけん。又一文の意は、若信あつて憍慢を離れば、心を發すに佛を見ゆる。若論誑、不信の心ある者は億劫に尋ね求むとも逢ふ事を得ずと云へり。是れ名行の二つのきづなにさへぎらるればなり。其心を離るべきなり。昔、佛、母の恩を報ぜんが爲に、無量の聖衆と共に、初利天に登り、歡喜園の中の質多羅樹下に御坐し給ひき。先づ文殊師利童子をめて申し給ふ。我昔、閻浮提の王宮にして、生れて七日と申せしに母にをくれ奉り、伯母の憍曇彌にそだてられ奉つて人ととなり、佛道を求めて佛に成り

【六塵】色聲香味
觸法の六境を云ふ
此六境は眼耳鼻舌
身意の六根を有し
て身に入りて淨心
を汚す故に六塵と
云ふ。

き。初利天に母の生れていきますと云ふ事を知つて參つて侍るなりと。文殊師利童子、佛の勅を承つて摩耶の御所に參り、此由を申し給ふに、摩耶忽ちに無量の天人と俱に佛の御前に趣き給ふ。漸く彼に近づく程にも成りければ、佛、母の摩耶を拜み奉り給はんとて、大いにさはぎ座を立つて禮敬し奉り給ふ。摩耶も佛を拜み奉り玉ひて憐れみの御氣色いりに出る程に見えさせ玉ひき。大方諸の天人、聖衆、數多の菩薩達、親子の契り、息愛の情、哀れなる事に見奉て、各各聲聲に涙を流さずと云ふことなし。時ならねども、歡喜園に忽ちに華さき實なり、栴を吹く風五妙の音樂を奏しき。さて佛申し給ふ様は効かりし當初、母のおはしまさぬ事ぞと承りしより、道心を發して難行苦行してかくとの玉ふ。又摩耶は太子をうみ置き奉つていつしか宮の内を別れし心、只おぼしやれ、猶しうみ奉りし功德によりて天上し、加様になんと申させ給ふ仰せ有る事ども終りて、さて我が爲に法を説き給へ、承はらんと申し給ひしかば、時に佛、大光明を放つて、三千世界を照して、母の御爲に法を説き給ひき。先づ「三界は安き事なし、爰に生るるは名利の執心によりてなり。生死は無常なり財寶は我が物に非ず。我が無常に隨ふ日は散失せぬと云ふ財なし。衆生かかる空しき諸法を實にありと思ふが故に生死の業をなす。故に報ひを得るなり」と説き玉ひしかば、佛の力によりて摩耶は覺を聞き給ひぬ。我昔より六塵の境界にたぶらかされて苦を受くる事、或は焰の中にむすばられ、或は自らうむ子を食はんとせし事、或は重き荷を負うて打ちせめられし事盡すべからず。凡そ人間の八苦、天上の五衰都て六道を廻りし事

【七】以下中終の
むすびなり。

【法照禪師】白蓮社七祖の第四祖、大曆二年衡州の靈峰寺に止まり、慈忍戒定當時の宗師なり。嘗て僧堂の食鉢中に於て一寺を現じ、大聖竹林寺と題す。四年郡の湖東寺の五會念佛を講く。後五臺山に詣りて竹林寺を建て大曆七年寂す。代宗の時國師となす。

算へも盡すべからざる事を思ひ出して身の毛よだち、悲みの涙に洗みて日比の橋慢、邪見、嫉妬の諸の悪念をひるがへして、我が心を致へてのたまはく、「一心よ心、昨日まで汝に随ひき、今日より我に隨へ」と仰せられて、長く佛道に入り給ふと説き給へり。摩耶經の

【七】さても十五の段段、經論の文に付いて抄する所是の如し。時に彼人に問うて云はく、「抑心を一にして念佛せよと勧め給ふに十五の心の侍るは如何」と彼人答へて云はく、「返す返す申さずや。十五は別別なりと云へども、偏に勧むる理は念佛の一門なりと云ふ事ぞ。其故は、萬の佛道は皆是れ文殊の教なり。然るに法照禪師竹林寺の記に云はく、五臺山の大理竹林寺の大講堂の内にして、普賢、文殊、西東に對坐して無數の眷屬の爲に妙法を説き給ひし時、法照禪師忽に寶座の前に跪き問ひ奉つて云はく、未來惡世の造惡の凡夫は如何なる法を修行してか永く三界を出でて、淨土に生るる事を得んとあれば、大聖文殊説いて曰はく、淨土に往生する策りごとは彌陀の名號にしくはなし、頓證菩提の道只稱名の一門なりといへり。是を以ての故に、この卷に實の道を顯すと云ふ所なり。故に一心に稱念して、諸の衆生と共に、無上菩提を得よと勧むる所なりと。但し文言の狼籍を顧みず、理趣の存没を辨へず、愚懷に任せて、翰墨をほどこす所なり。後賢の嘲を恥ざるに非ず。偏に孝養の隨喜に此を怠るる所なり。

南無阿彌陀佛 十念すすむ。

孝養集卷中 終

孝養集卷下

【一】以下は下卷の序説。

【三寶】佛寶、法寶、僧寶の三を云ふ。

【一】臨終に正しく極樂に往生せん事を念ずるの意を明すとは、是れ貴きも賤しきもさすがに祈る所なり。仍て、一心實に靜まらば三寶納受し給はん。三寶納受し給はば、又十念必ず成就す。成就すれば九品蓮臺疑ひなし。この故に唯、往生極樂は臨終正念に任せたりと云へり。故に臨終のあるべき様を申したる文共十餘卷を集む、その中には人に隨つて要を取り、亦十に分けて細かに明すなり。只人界の本意は此卷にあるべし。既に受け難き人身も生るる朝あれば、亦限りある臨終の暮も如何んがなからん。去れば是れ一生の木意、最意の大意なり。

【二】以下は下卷の目次。

【二】第一、兼ねて臨終の用意あるべき様。

第二、道場を嚴るべき様。

第三、善知識あるべき様。

第四、病人に順つて勸むべき様。

第五、病人をして苦しますべからざる様。

第六、兼ねて日に十念を習ふべき様。

第七、正に最後一念に依つて往生を爲すべき様。

第八、佛と聖衆來り迎へたまふの様。

第九、淨土に生れて樂を受くるの様。

第十、淨土に生れ、娑婆に歸り、緣ある人、諸の衆生を淨土に導く様。

若し前の事あらば、第七を引いて見る可く、病人には第八を讀んで聞かせよ。

【一】以下は第一に人は臨終に及んで死を厭ひ歎き悲しまざる様を注意すべき事をば臨終の三愛心などを引いて説き示す。

【著婆局鵲】著婆 (Jiyaka) にして釋尊當時の印度王舍城の名醫、鵲は支那の名醫。

【二】第一に來れて臨終の用意あるべき様とは、夫生あるものは設け命長しといふとも、必ず哀へ年寄ることは世間の常の習なり。又年老りて後は病出來、其時に是はあるべき次第なり。但し、その命を左右なく捨つる事なかれ。人によりて日は三寶にも祈り、且は

病にも逢ひ、療治を加ふべくば是れ徒に命を惜むに非ず、世間相違の罪過なくして今日も命を延べて、念佛の功を信じて臨終の時心安からん爲なり。次に生死の無常には著婆局

鵲が病も藥も叶ふべからず。去れば限りある命をば果報に任せて、我と努努惜む事なかれ。其故は、臨終の時、三の愛心起るによりて生死に留るなり。一つには親子、夫婦、若くは弟

子、眷屬、諸の財物を愛し惜む心是なり。是を境界愛と云ふ。二つには我が身を愛し、命を惜む心、是を自體愛と云ふ。三には正しく命をはる時、此三界の内に生るべき所の様

様に應はるるに依つて環りに心を移して、後に生れんと思ふ心なり。是を當生愛と申すなり。この三種の愛心によりて生死に留まり、三界の厭ひはなれずして堪へ難く苦を受くる

なり。是を明に知つて離るべからず。先づ今此世を厭ふ事は別れ易くして、逢ひ難き故

又淨土を願ふ事は行ひ易くして、別れなきが故なり。又今生にも往生の人の子孫は七代まで

【肉團】 肉身即ち
吾等が五體のこと
なり。

歡よろこきなしと申まをしぬれば誠まことに是れ何なんの歡よろこきかあるべき、又家内うちうちの寶たからは皆朽くち失うせぬるといへども極樂ごくらくの寶たからは永く盡つきせず。七寶莊嚴しちほうじょうげんの宮殿樓閣みやてんろうかくなり。故ゆゑに厭いとうても厭いとふべきは今世いまよ、尙願なほねがひても願ねがふべきは淨土じゆつどなり。次に此肉團不淨このにくだんぶじゆうの身みを改あらためて、夜よの金色清淨こんじきしじゆうの膚かわとならん事争ことなかいたはしかるべき。次に努勞最後こつらうさいごに心こころの引所ひきどころに心こころを移うつして、亦阿鼻あびの習里じゆりに歸かへるべからず。是れ又本有もとあの心こころなり。是れ皆三界みなさんがいの内うちの執著しつちやくにして都すべては一心いっしんの成所じやうじよなり。能よく能よく是これを厭いとふべし。設たひ極樂ごくらくを願ねがふとも、この三界さんがいを厭いとはずんば、譬たとへば、只今ただいまの出で船ふねのともづなをとかすして船ふねを渡わたさんとするが如ごとし。又穢土たいどを厭いとふと云いへども、淨土じゆつどを願ねがはずんば、鞅あやを背せひて車くるまをやらんとするに似にたりと云いへり。此故こゝに永く三界さんがいを厭いとうて殊ことに極樂ごくらくを願ねがふべきなり。此時このとき厭いとはずんば誠まことに愚おろかり。身みを愛あいし、財たからを惜おしむ人ひと、誰たれか復歸ふたへるべき。是れ一生いっしゆ猶耻なほはぢあり何ぞ最後さいごの限かぎりまでの貪慾こんよくをや。恐おそらくは其心そのこころを知しつて、而も隨まふ事ことなかれ。若し隨したがはずんば又その失うちあるべからず。昔も死人しにたの顔かほに、はひあるく蟲むしありき。是は我が身みに愛執あいしつを留とどめて、我が身みに生あはせたる蟲むしなり。又女人おんなの鼻はなより、白しろき蟲むしと成なりて出ででたりし人ひとあり。是は我が妻つまに愛執あいしつを留とどめて死ししたりし人ひとなりと經きやうに侍まりけり。去まる病やまの時とき、我も人も用意よういの心こころあつて惜おししと思おもひぬべからん財たから、又妻子またごしなどをば尋ねざらん外ほか見みすべからざるなり。經きやうに曰いわく、「父母ふぼ、兄弟けいだい及び妻子ごし、朋友ともだち、僮僕どうぼく並ならに珍財ちんさい、死しに去まれば、一たび來きつて相親あひまむこと無し。唯惡業たひなありて常に隨逐ずいじゆくす。又一ひとされば彼寶かたからあらば、心安あやからん様に三寶さんぼうにも供養くやうじ奉たごり、又取とるべからん人ひとにも分わかち與あたふべきなり。さて遺言あや

心に任せて後は必ず古き居所をされ、心に留めじが爲なり。又堂塔、僧坊、佛の具、本尊に至る迄、努努是に心をとどめされ。譬へば車に心を留めて禁中に入らざらんが如し。是を力として極樂に参るべしと思ひて佛具、本尊を安りに愛して、之によつて生死に廻らん人も亦是の如し。如何なる大善根を作りたりとも努努心を留めされ。既に淨土に生れなば、無量の事心に任せて望みを遂げん事安きが故なり。又何くにて死なんと思ひ定むる事なかれ。何くか此三界の内にあらざる。善惡に付きて少しも此世に思ひを残さされとぞ此十餘卷の文どもに申されたる。されば病の初めよりして事事しく往生の沙汰をののしり、披露すべからず。其故は人知れば塵縁知る、彼知れば障りをなす故なり。但し見苦敷き山を云つて、知識の外に人に逢ふ事なかれ、逢ふと逢はざる人あらばその恨み多きが故なり。さては必ず病の初めより我が力の及ばん所の殺生を禁斷せよ。公私の事をば、とくとく心安からん人に申付けよ。若し是を聞くことあらば心亂れ悪しかるべきが故に。又文に曰はく、「其時心亂るる事出来ぬべし」と云へり。其をば兼ねてかく知つて、然も隨ふべからず。いよいよ浮世を厭うて淨土を願ふべし。是の如き等の事多しと云へども、これに順じて用意すべし。努努空しく過すべからず。又支度計りにて過すべからず。此身は露の命なり。電の間なり。若し是に着せば往生の大事忘るべきが故なり。

【四】以下は第二に病者若し臨終に迫らば、あたりの

【四】第二に道場を置くべき様とは、是に見えたる指圖の所なり。先づ西晴れて日の光のさし入りたる所にてあるべきなり。但し、是れ必らずしも有らん事かたし。若し是に有

人注意して、枕頭に佛を請來して佛の引接に備へなどして諸種の用意をなすべきこと、又病者自身も此を自覺して身を清め一心に稱名念佛して臨終正念を欣ぶべきの用心を説き示す。

【灌頂仕りたる人】眞言密教の儀式たる兩部灌頂の壇に入りて兩部の大法を傳授し畢りたる人なり。

増をいはば、或は僧坊、又は人の家にも便宜により、洗ひ淨めて新しき物を敷き、屏風の物を立てて、或は此を以てしつらひと成すべきなり。さて病者の終らん時は、居所に端坐して正しく西方に向へ、若し臥せんには佛の涅槃に入り給ひし様に、北枕にして西に向ひ臥せよ。何方と云ふとも云ふ事あらば、共に任せよ。其時、衣も袈裟も美麗なるを捨て、清くして然も宜しきを用ひよ。又沐浴の用意して、尋ねん時に隨へ。さて佛は三尺の立像の阿彌陀如來を用ひよ。又は坐像にてもしかるべし。設ひ何れの佛菩薩にても病者の心に隨へ。若しは繪像にてもあれ。又は經卷をも持せよ。只勸めて云ふべし。是れ皆佛の教なりと。故に人の心に皆思ふ旨あり。さて佛と病者との間遠からず、高かるべからず。その故は、遠きは最後の時、目かすみで見えざるが故に、又高きは見上る事能はざるが故に、其間五六尺の程は吉し。臥ながら眼を開かば聽て見ゆる様に計らへ。佛の左の御手に五色の幡、若しくは絲を付けよ。或は佛の右の手の指に付けて左の御手に引き通せとも云へり。則ち病者の右の手の指に懸取れめよ。五色の絲をば、十歳より前の女人に精進せさせて、清所に置いて、清麻をうませて能く能くさらして五つに分けて染めよ。一つをば青く、一つをば黄に、一つをば赤く、一つをば白く充の色、一つをば黒く染むべし。已上、五色なり。是の如く色に染めん事は、聖などにせさせて灌頂仕りたる人の許へ送り、よらせて受けよ。是をば世間の人に普く見せ知らせぬ事なり。絲の長さは一丈二尺に經つて九尺によらせよ。長くよる様もあり。又佛の御前には必ず香を燒き、花を備へ、火をとぼせ、

【椽】 たらひのこ

【三界の火宅】 三
界(欲界、色界、
無色界)を火宅に
喩ふ。

【博沙】 博河の砂、
即ち自便のちんち
ス河の土砂の意に

夜にならば佛の御前にも又病者の前にも俱に火をとほせ。其故は佛を病者に明に見せ、
知識も病者の息の出入眼の氣色を明かに見んが爲なり。さて枕下に一つの磬を置け。打ち
鳴らさんが爲なり。若し無くもば、せめて鐘にても有るべし。又病者のあたりに行るべき物
は屏風、又は日苦しき折折、病者の起臥苦しめど爲なり。又脇息、椽、手洗、紙等置くべ
し。餘の多き事どもあれども是に心得て餘の物をも置くべし。此等を盡て調べて置いて
後、是へ病者を渡さん事、急ならずば吉日を取つて渡せ。若くは吉時にても有るべし。男女
ながら其時にあらずんば、實の出家をして正しき佛弟子と成らん事は何れの時ぞ哉。如何様
にても事を調てよ。其功徳の無量なる事は、戒品にあるべきなり。さて病者を調めて、其心に
付きて是へは渡せ。其時病者と思ふべし、既に我三界の火宅を出でて九品の淨土に參ると
思ひ成して、是へ渡つて病者先づ手を洗ひ、口をすすぎて、三世十方の諸佛菩薩を悉く拜
し奉ると思ひて、八方上下を拜して心に念じ口に唱ふべし。三世の諸佛は出生生死の者を
守り給ふ、その一一の御誓は皆佛得道の因縁なり。然るに我今生死を厭ひ、菩提を願ふ。
此願必ず滿じ給へ。若し爾らば淨土に生れて、還つて一切の衆生を安く導かんと一心に
思ひ、又唱へて、是の如く請じ奉つて後、彼の諸佛の偈に勸め給ふ阿彌陀如来を一心にた
のみ奉るべし。經に曰はく、「此彌陀を念じ奉れば六方恆沙の諸佛護念し給ふ所なり」と
云へり。既に一佛の護念を蒙らん、何の願が滿たざらん。何に況んや六方恆沙の諸佛の我
も我もと守り給はんをや。此故に一心に彌陀を念じ、氣に往生淨土の思ひに住すべし。中

して、此所にては無量無數を現はす意なり。

【五】以下の文は第三に病者若し臨終に近づかば善知識(大徳の高僧のこと)或は在家の行者にてもよし五人を其病者の側につかして種種臨終の用意をすべきことを説き示す。尙此章を讀むには便宜「一期大要秘集」の第五をも参照すべし。

にも罪重き者、頼る所は唯彌陀の悲願にあり。故に文に曰はく、「若し罪障重きもの有つて、淨土に生ずるの因無ければ、彌陀の願力に乗ずれば、必ず安樂國に生れん。文」故に今靜かに成つて、偏に念佛を申すべきなり。中卷の十一に申しつるが如し。六萬遍も四萬遍も身に隨つて申すべきなり。其謂は佛の曰はく、「若し善男子善女人あつて、阿彌陀佛の名を保持つて一日若くは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、心を一つにして彌陀を念ぜば、其人の命終らん時、阿彌陀と聖衆と共に其所に御坐して、此人の終らんととき、心顛倒せずして、則ち阿彌陀佛の極樂に往生することを得べし」と云へり。是れ朝夕人の讀經に非ずや。平生尙勵むべし。況んや無常の使と云ひたる病をうけて、なごか一日二日勸まざらんや。文に曰はく、「無量壽の國は、果報勝れたりと雖も、臨終の時、懺悔して念佛せば、業障便ち轉じて、即ち往生する。文」ことを得ん。

【五】第三に善知識の有るべき様とは、其知識の数は、三人若くは五人にてもあるべきなり。是を請じて、兼ねて有るべき様を能く契るべし。又知識病者に向うて云べし、今善知識に參る事は、是れ一世の縁に非ず。定んで多劫の契りなるべし。此本意を受くるは、知識等が年來の行業をば汝に譲り奉るべし。況んや一心に勵まさん事、力の及ぶ所を限りとすべしと言ひ聞かせよ。是れ則ち彼心を強くして往生の思ひを成さしめんが爲なり。其謂は、佛の曰はく、「往生の固きに非ず、善知識に遇ふ事の堅きなり」と。是故に、其知識には、かまへて道心者の意うるはしくして、又病者に志し深き人人を用ふべし。又其有

【金】 誓のことなり。
【十念】 南無阿彌陀佛の六字の名號を十遍稱へ念ずることなり。

【三業】 身口意の三業なり。

るべき次第は一人は、必ず知識を用ひよ。是は病者の面少し南によりて居て、病者に眼を放さずして偏に哀れみの心に住して、佛法の環りを以て往生のいさみの心をなさしめよ。又病者も此知識をば、既に觀音の御坐すと思ひを成すべしと云へり。又一人は有驗の人を用ひよ。是は病者の車の後ろ少し北により、枕に當りて、一二尺計りのきて居よ。則ち病者の膝と枕と左右に眼を放たずして一心に不動明王を念じ奉つて、慈救の呪を滿せよ。是れ偏に魔界の障をあらせしが爲なり。是れ則ち病者の後ろに大聖明王御坐して我を守り給ふべしと思ふべしと云へり。又一人は念佛者、是は病者の北少しのきて居て、智者の教のままに念を心得て鳴らし、哀れの音を和らかに出して其聲に付いて、病者に十念を滿てさせよ。此人殊に心あるべき人なりと云へり。又一人は持經者、是は病急ならずば、云ふ所の知識の休まん間、代り居て時時常よりも剛か成る様に經を讀み、病者の心を澄ませよと云へり。又一人は病の身にそへて彼れ此れ用に隨へ。五人の知識あるべき様斯の如し。此外には努勞他人よる事なかれ。此知識も其間は殊に勇猛精進にして三業をひそめて、聲高くする事あるべからず。又此人人に常に吉物を供養して、明瞭にあたれと云へり。是の如く然るべき人人を兼ねて語り侍べるは此時の料なり。但し是を悉く調べ量るべき事は難かるべし。あち増の事なり。若し一人あらば病人の前に居て、聽て金を打ち勤めよ。二人あらば一人は後に居て勤めよ。心得ざる人餘り多く有るは中中惡しきなり。設ひ僧なりとも心得ず、器しからんは惡かるべし。若し心得たらば俗にてもきはらず、是れ殊に精進なるべし。又後

【神咒】陀羅尼のことなり。即ち神祕なる咒語の故に神咒と云ふ。
【轉法輪等】轉法輪等以下の眞言、經、經等以下の眞言、名などは一期大要、祕密集の第五章業

にあらん人は、南無大聖不動明王と念じ奉るべし。彼御誓ひは生生世世までも守らんとのたまへるが故なり。さて病者に常に云ひ聞かせよ、魔縁は必ず佛を念せぬ間を伺ふ、謂く、心亂るる時、又湯殿にある時、或は物を食する時、若しは一人ある時、又腹の立つ時、さればかかる時も佛を忘れ給はざれ。心を努努亂す事御坐さざれと言ふべし。又起臥の折にも、今御心亂り給ふべからずと申し聞かせよ。若し病者に、惡縁障を成して顯れ見えば、急に有驗の人「不動」、「大威徳」の法を以て祈らせよ。又知者は縁として、彼魔縁が出離すべき教化を成せ。又「法華經」等讀みて聞かせよとぞ。有る人は申されける。かくすれば則ち魔縁去る事を得るなり。魔縁の對治多しといへども、知者の心に讓る。若し病者の所にあやしからん物の氣顯れて見えば、中卷の第十に申しつる様に鏡を懸けて影を見せよ。又左様の物は入口をばたぶらかせども心無く影などをば見知らぬものなり。若し魔縁なりと知らば、即ち意得て能く能く對治をなすべし。次に臨終の惡相見えば、上卷の第十を引いて見よ。さて祈をもせよ。文に曰はく、「食物と着物と若しは餘物にても布施にして、神呪を誦せしめよ」と。所謂「轉法輪」、「召罪」、「摧罪」、「佛眼」、「金輪」、「寶篋」、「尊勝」、「光明」、「彌陀」、「滅罪」、「淨三業」の眞言等、「理趣」、「禮懺」、「五十二佛名」、「懺法」等なり。又文に曰く、「釋迦」、「彌陀」、「藥師」、「彌勒」、「普賢」、「文殊」、「地藏」、「虚空藏」、「空羂索」、「千手」、「十一面」殊に「不動明王」是等の法を眞言師請じて行せしめば、魔縁遠く去り、罪障消滅して、往生すること安かるべき故なり。是悉くすべきに非ず。人に隨

障を懺悔するの用心の冠註を参照すべし。

【般若理趣分】六
百卷の大般若經中の第五百七十八卷なり。即ち大般若十六會中第十會を般若理趣分と云ふ。【普賢の十大願】四十華嚴經普賢行願品には次の十願をあげ、一、敬讚諸佛、二、稱讚如來、三、廣修供養、四、懺悔業障、五、隨喜功能、六、請轉法輪、七、請佛住世、八、常隨佛爲、九、恆順衆生、十、普皆迴向。【二〇】以下は第四に將に臨終に際しての用心を説き、兼ねて中品中生の往生に就て述ぶ。【三途】一、火途（地獄の猛火）二、血途（畜生趣の相食む所）三、刀途（餓鬼趣の相争ふ所）。

ひ所によりて人にあつらひても祈れ。數多の文の意なるが故なり。又中卷の第八を引いて見よ。病者には常に菩提心を心に染めよと教ゆべし。又一觀經、雙觀經、小阿彌陀經、などを能く先づ讀み明めて、心得安く其理り亂れがはしからずして正しき佛の教に付きて勤めよ、其れもしげからず、怠りしからずして、機嫌に隨へ、珍らしき程に勤めて信を養ひしめよ。皆是れ經文の意を取るなり。又一つの文に曰はく、般若理趣分、或は「普賢の十大願」を説き、病人に聞せよと云へり。是は人によるべきか。又病者の作る所の善根を記し置いて、其功德を讀み擧げ讃へて聞かせよと云へり。大方往生の本意を違ふ事は、只善知識の力なり。或は云はく、鈍き刀の物を切る事、砥による故なり。重き車の輕く行くは、油の縁によつてなり。心なき金木すら斯の如しと云へり。泥んや心あらん人、善知識に逢うて争か往生極樂を遂げざらんや。されば佛も善知識をば是れ大因縁なりと説き給へり。

【二〇】第四に病者に請ひ勤むべき様とは、其人に賢き愚なるあり。又病に重き輕きあり。故に其れに隨つて勤むべし。但し病人思ふべし、熱からん病に付ても煩らの中の衆生を思ひやれ。又寒からん病に付ても氷の底の罪人を思ひなぞらへよ。加之いたみ耐へ難く人の恨しからんに付いても彌惡趣を厭ひ、殊に極樂を願ふべきなり。彼國には永く三途八難の恐れを遁れ、生老病死の苦しみなきが故に之に依て今しばらく讒の病をなげき、努力人を恨むる事なけれ。中にも知識の教へを違へされ。又知識も心有つて病者の心に隨つ

【八難】見佛開法に障礙ある八處なり。即ち地獄、饑鬼、畜生、鬱單越、長壽天、瞽盲瘖啞、世智辯聰、佛前佛後なり。

【梵網經】梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十の略稱【維摩經】維摩詰所說經、三卷、羅什譯。

て勸むべし。其に取つてこの文には始めより智者聖人の事をばいと申さず。只愚なる者の爲なり。其様を云はば、兼ねて彼人の教を一一に承つて、それを違へぬなり。尙し何方に向つて、手に如何なる印を結び、口に何れの眞言を唱ふるとも、其は心に任せよ。中間につくろひ聲を出して心を亂すことなかれ。唯、ひそかに金を鳴して努勞餘の人を近付くることなかれ。さて既にと見ん時に云ふべし。知食たりや否や、今最後臨終の時なりと二聲計り耳に當てて聞かせよ。聞き入れたりと見ん後は余の言を云ふ事なかれ。其時、身に障り、手をさへ、はたらかすこと努勞あるべからず。次に中品中生に生るる事を明むべし。上下は是になぞらへよ。中品の人と申すは、善惡において半なる人なり。但し下品の者は、心無うして聞きより聞きに行くべし。是をかへりみ、哀むべし。其謂は佛曰はく、「諸の功德の中には乞巧人と病人を哀むを第一の福田と云ふなり。又施を行する中にも、最下の病者に供養すると、諸佛に供養し奉る功德等し」と言へり。「梵網經」「維摩經」又行基菩薩の教なり。されば或は三寶を供養するとも思ひ、且は世間の情あるべし。殊に我が臨終を思はん人は彼無縁の乞巧人と病を受けたらん者を殊に供養し憐むべきなり。此十餘卷の文どもの心、此謂れ其數あり。故に力なき者に力をそへ、憐む人なき者にあはれみをなして、眞の慈悲志をつくすべし。今此文に云ふが如きなり。又近邊の人にてもあるれ、又は師君にてもある。此次第を以て彼を勸めよ。但し別しては佛法を背き、因果を撥無する邊地下賤の者の爲なり。殊に是を憐みて彌慈悲を垂れよ。せめて恩愛の方便を以

【上中下】 上中下品のこと。

【七】 以下第五に病人に付添ふ者はよく病者を看護して努めて詫びしめざれと云ふ意味を説き示す。

て勸めよ。云ふ所の知識を請じて稱へて佛道をなさしめよ。此心ある人をば佛菩薩と等しき心ある人と申すべきなり。是は愚なる心を以て押し計つて申すに非ず、正しく聖教に説いて曰はく、「一切衆生の根性不同にして、上中下有れば、其根性に随つて佛皆勸め給ふ。無量諸佛の心を専念せば、其人の命終らんとする時、佛と衆衆と自ら來つて迎接し、盡く往生を得るなり。」

【七】 第五に病者を苦しめ間敷候とは、先づ一院の僧徒哀の心を以て番を結んで、病者の人二人死して病の始めより是を護れと云へり。此故に萬事をさし置きて、知識は病人をいたはり、病者は心安くして一心に念佛を申すべし。若し一度正念を失へば、永く三途を免れず。是れ聖人すら善惡の縁による。況んや凡夫をや。然れば則ち淨土に非んば何くか思ひ叶ふ所あらん。聖衆に非んば誰か心に隨ふ人あらん。是故に病者も是になぞらへよ。看病の人も亦爾なり。但し病者をば賤しきとて蔑に言ふ事なかれ。又愚なりとて、心無う言ふことなかれ。敬はん事は佛の如くにし、憐まん事一子の思をなせと佛宣玉へり。されば諸のすくひにのみみじからん業、色色の好物を尋ね集め置いて常に興へくはせよ。時ならぬ物を願ふは病者の常の習なり。彼を興へざれば、心を留むる故なり。されば看病の功德は計りなき事に侍るにこそし。佛曰はく、「若し人、如來と父母と病者とを供養する功德は我れ説き盡し難し」と曰へり。況んや病を受けたらん親を供養する其功德はまして計りなき事なり。是れ正しく「因果經」を引いて御覽すべし。又看病の者も心あれ、病者によ

【因果經】 過去現

在因果經の略稱、
別に佛說因果經、
羅什譯。

しなき言を盡さずする事なかれ。看病の人の中に、殊に驚しく心悪からん人をば努努よすべからず。中にも酒肉五辛此等を食したらん人寄すべからず。若し來れば魔縁便りを得て諸の怖あるべきが故なり。酒肉とは、酒とししむらとなり。五辛とは、大びる、山のき、にら、いえのき、くれのをもなり」又曰はく、「からし、大根、蘭、加様のくさきもの、或は、くさびらも悪し」と云ふ人あり、又病者あつて此等を願ふ事あらば、先づ心安く尋ねん由を答へて、さて後に彼に似て然もことならん物を與へて心をすかして後、心得て云ふべし。仰せられし物は臨終の行儀に障りなりと申すと云へ。然れどもその氣色に隨ふべし、兎角いはざれ。其ならぬ物を食せばとて飽ほどに食せざれ。又食すとも色色様様にして構へて食事を得させよ。是れ則ち力を失はせじが爲なり。又夏冬の折節を顧みよ。次に病人をば、家の外に構へて出すことなかれ。病人は廁等に行きて、倒れて死する事多くあるが故なり。必ず病人の爲に、心安からん人を一人づつ結び具して守れと云へり。護らん間は香を焼き、時を知つて一時二時など番にもるべし。久しければ眠りに、牙に悪しきが故なり。若し急ならぬ病ならば善知識をば病者の聲の聞ゆる程に休めよ。是は最後の時の爲なり。さて心あらん者は病者の前、知識の居所にかはり居て、少しも病者の眼に口をはなさざれ。人の正しく終る時をば見知る事かたし。又病者のつよき由するを知らずして誤るが故なり。人は必ず病の宜しき様にして終る事多し。是を努努油斷することなかれ。又病者も思ふべし。設ひ病の苦しきは有ると云ふとも、かかる悪世に事なく病を受けて幸に知識

【八】以下第六に彌陀十念の功徳を説き、兼ねて臨終の病者にこの十念を授くる用心を示す。

にあへる代び、是れ幾計ぞと笑に知り、又往生の宿善有ると云ふ事を、かかる故に、病の苦を受くるは還つて淨土の樂を受くべき相と思ふべし。生死に終りあり、今生を穢土の終りとせん。又菩提に結あり、後世を淨土の結めとせんと思ふべきなりと云へり。

【八】第六に十念に習ひ有るべき様とは、夫れ何事も兼ねて習ひなき事は、時にのぞんでさはがしきなり。譬へば、疾の走り火は心さはぐといへども用意の爰の火は心亂れざるが如し。あつけれども兼ねてより思ひ定めたる故に驚かず、又最後臨終の苦しみにあると雖、兼ねて用意したらん人の臨終も亦以て此の如し。されば佛、大王に告げて曰はく、「人善行を積みたるは死する時悪念なし。譬へば樹伐に終りには必ずゆがめる方へ倒るるが如し」と。又はげしき風一度至れば百の苦しみその身に集る。是故に前よりの習ひなくんば以何が思ひを遠ぐべきと意得て、各各志しを同じくして十念をなさしめよ。意殊に彌陀の本願に曰はく、「設ひ我れ佛を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、我國に生ぜん」と欲し、乃至十念して、若し生ぜざれば、正覺を取らじ」と誓ひ給へり。深くこの誓願を頼んで能く十念を習ふべきなり。但し何れにも佛の教を信すべし。其故は、一心顛倒すれば、獄牽器械を振ひ、十念成就すれば、聖衆蓮臺をかたぶくと云へり。爰に知ぬ、鐵杖に恐れあり、蓮臺は心にありと云ふ事を、抑、云ふ所の十念に付いて多くの釋ありと雖も、唯心を一にして十遍南無阿彌陀佛と唱ふる、是を十念と云へり。故に構へて一心なれと勸むべきなり。但し勸め始めん事は病者の心に付いて始めよ。闇に金を鳴して哀の聲を和かに

【鐵杖】地獄のこ

出し、南無阿彌陀佛と唱へよ。斯の如く十度唱へて、知識數を取つて、金を打つて發願すべし。南無西方極樂教主彌陀如來の本願誤り無く、聖衆と俱に來つて必ず行者を引接し給へと。又知識、病者に向つて云ふべし。既に十念成就しつ。若し加樣におはしまさば、御往生は疑ひなしと思しめせと。又知識問うて言ふべし。何事か見えさせ給ふやと。又病者も有りのままに答へよ。若し妄念の山を云はば、知識それに隨つて教化せよ。又魔縁の山を言はば、其對治先きに申しつるが如し。又歌うたふ様なる音常に聞ゆると云はば、尚佛を念じ、能く能く懺悔をし給へ。其れ即ち地獄の聲なり。然りと雖、能く彌陀を念じ給はば其罪は近れ給ふべきなりと。經に曰はく、「若し五逆罪を作るとも、六字の名を聞くことを得れば、火の車自然に去つて、蓮臺即ち來迎すべし。文」文の意は、若し五逆をつくると云へども、終る時、南無阿彌陀佛と云ふ六字を聞く事あらば、地獄の迎へ去つて、極樂の迎來るべしと云へり。既に六字の名を聞いてさへ、地獄の迎去つて、極樂の蓮臺來るべしと云へり。況んや、一心にして自ら唱へんに、さりとともこそ覺え候へなどと云へり。亦既に佛を見奉ると云はば、彌心をつよくして念佛を申し給へと云ふべし。若し兼ねて往生の告ありといへども、知者、知識の外に更に餘人に云ひ廣むることなかれ。様様の功德多しといふとも、萬を略して志す所は、只最後の十念にあり、文に曰はく、「種種の法門皆解脫にあり、西方に往くに念佛に過ぎたるはなし。上一形を盡し十念、三念、五念に至らば佛來迎し給ふ。文」意は極樂世界に生るるは念佛に過ぎたるはなし。一生非退せざ

【九】以下第七に看病者病人の臨終に際しては十念能はずば一念、一念能はずば唯阿彌陀如来の一阿一の字なりとも授け、且つ彌末塵に及んで、は末期の水を與ふる事及び病者の書き置きの書き様などを示す。

るにも、又十念三念五念にも佛來迎し給ふ所なりと云へり。

南無阿彌陀佛 十念。

【九】第七に最後の一念によりて往生すべき様とは、是れ此中の大要なり。先づ此時に

は、殊に靜かにして、知識の外に尙尙人を近付けず、異なる音を聞かせず、五色の絲を手に取り、又印を結んで一心に往生淨土の意になるべし。佛の相好に非ずよりは他の色を見ることなかれ。佛の法音に非ずよりは、外には餘の音を聞することなかれと云へり。別して臨終正念の意地に安住して、西方往生を忘れざれ。さて知識必ず約束をなせ。寢入る様に思召さん時は、則ち臨終の時にて、飲べきなり。我等其を見て、今ぞと申さば、御心にも此時彼時と思し召せと言ひ聞かせよ。さては殊に十念の思ひ是にあるべし。其念と云ふは、彼時に思ふべし、阿彌陀如来も迎へんと御誓あり、我も今參らんと思ふに、既に何もかも我が身もぬけがらの如くに思ひ忘れて、一心に南無阿彌陀佛と唱へて、出る息の終らんに付けて、體て極樂へ參るなり。十念一念は只妄にあり、年比祈る所の思ひも又願ふ處も只此かみすぢ切る程の思ひなり。努力方忘るる事おはしまさざれ。如来説き教へて曰はく、

「乃至一念、彼佛を念じたてまつりて、至誠心を以て、其國に生ぜん」と願すれば、この人臨終に、夢のごとくに彼佛を見たてまつりて、即ち往生を得ん。文一意は乃至一念も阿彌陀を念じ奉つて、至誠の心を以て彼國に生れんと願はんに、此人の終りに彼佛を夢見て則ち往生する事を得ると説き給ひぬ。又先徳も心に要法を全うして、善心相續して十念に至

【往生要集】三卷
惠心僧都の著、廣
く經論に依つて念
佛往生の要文を撰
集せるもの。

【四重】四重罪或
は四重禁と云ふ。
即ち邪淫、盜殺
人、大妄語の四波
羅夷なり。

り、或は一念成就すれば亦往生を得ん云云、意は能く相續して十念を至し、或は一念成就すれば、往生することを得と仰せられたるなり。能く能く意得おはしませ。『往生要集』に云はく、「時所諸縁を論ぜず、臨終の時、心亂らずして念佛せば往生すること得、と云へり。若し人、佛を念ぜずして終る時は、魔緣魔界の諍ふ事、誓へばかた人無うして、人屋より出る時、諸の敵の打ちあふが如し」と。此故に一心に佛を念じ奉れば、佛百千萬の聖衆と俱に來迎し給ふ、故に萬の罪を近れて極樂世界に生るるなりと云へり。仍て一念の間の信心は、無量劫の間の業みなり。努勞他念なかれ。往生は心を強くして、信心の音を出して、終れと云へり。故に心に彌陀を念じ、口に名號を唱ふべし。佛に一念も心を懸け、一度も御名を唱ふれば、化佛菩薩、聲を尋ねて來迎し給ふと云はるるが故に、若し南無阿彌陀佛の六字までも唱ふる事あたはずば、阿彌陀の阿の一字を唱へ給へ。其にても萬足ぬべきなりと云ふべし。去れば人の定んで終る時は出る息に命は終るなり。構へて目を放たずして、其命終らん度の息に、南無阿彌陀佛とも、若くは阿とも申させん事を、知識も祈り、病者も思ふべきなり。正しく終る時の息に、十念を申し終る事を得れば、四重五逆を犯せる罪人も往生を得べしと云へり。又兼ねて誦經物を備け置いて、最後と見し時、近き寺にて誦經を行へ。是れ正念をまささんが爲なり。但し寺無き所にては、知識等の中にして行すべし。若し正念亂れずんば、往生誰れか疑ひあらん。然りと雖も病、日比より重り、様々衰へて苦しみ、理りをも忘れ、聞く物見る物かすかになつて、心失せる時の料に

【三惡道】三惡趣
のこと。即ち地獄、
餓鬼、畜生なり。

もなり、善知識と云ふは是を顧みて、彌哀を成し様様にして十念を満てさせよ。又清き水
を置いて、紙にひたして唇をぬらし、又蛤の貝を以て、唇を常にぬらせ。其上に聲
力をそへて、十念を常に唱へさせよ。若し次第に氣色たがひて息荒くならば、此時に云ふ
べし。佛の見奉り給ふ哉、經に曰はく、一たび彌陀佛を見たてまつらば、必ず三惡道を免
かる。何に況んや者號を稱へたば、決定して菩提を成せん。一文の意は、一度も彌陀佛を見
奉らば、必ず惡道を免かる。何に況んや名を唱ふる者は定んで佛に成ると云へり。一度見
奉るすら頼もしき事斯の如し。既に往生の時近付きて見えさせ給ふ。闇に聞し召す、年
來の念佛の功德と云ひ、又諸の善根と云ひ、亦臨終正念の祈と申し、此の如き等の上に、
兼ねて申せし所の善知識等が年來の行業をば今既に汝に譲り奉る、又其上、一心にはげ
む所の大聖明王、後に守り給ふ。御心に隨つて實に見えさせ給はん。定んで阿彌陀如來も
影向し給らん。御誓に永く譲りなければなりと云ひ聞かせよ。此時に必ず病者に隨つて
三の淺深の意有るべし。一には宿因實き人ならば、殊に信心を發したる氣色を顯して十
念を高く申すべし。然れば病者の音を亂らすして、金を鳴らし、知識の聲をほそめよ。さ
てよはる所に申しそへ、申しそへせよ。又彼音ひきくならば、知識の聲を少しあげて十念
を聽めよ。二に常の様に勸めよ。三に病者、事の外にはより聲を出す事能はざるの兼ねて
云ふ所の阿字なり。御心亂れ給ふや。只此阿と云ふ一字を以て萬に足ぬべきなりと云ひ、
それも叶はざるには、只西方に佛御坐すと云ふ思ひを忘れ給はずば、御往生遂げ給ふべき

なり。其故は、佛の言はく、「若し人臨終の時、念を作し能はず、但し彼方に佛有ると知り、往生の意を作さば亦往生を得」と云へり。是く如來の仰せられたる事は、一つも誤り候はぬぞ、只一心に斯の如く思し召せなどと云ひ聞かせよ。若し又、東西も知らずば、手を取り合つて、西方に向けて、病者の出息と同じく、知識の息を俱に出入せよ。彼に替りて彼を助けよ。尙し知識と頼らば此時の料なり。一日、二日乃至七日までも見放さずして、彼息終る度の息に、念佛を申し聞かせよ。若し聞きて往生の思ひをなさば、彼國に生るべきなり。經に曰はく、「其れ佛の本願力により、名を聞きて、往生せんと欲せば、皆悉く彼國に到り、自ら不退轉を致す。又一故に念するにも生れ、唱ふるにも参り、名を聞くにも至る所なり。専ら正念によるべき事是の如し。殊に最後の時に言はば、少くして云ふべし。病者、知し召したりや。今往生の御時なり、彼一念は覺えさせ給ふや。臨終の一念は百年の善根にも勝れたりと申すは只今の事なり。必ず上品上生に参りて一切衆生を安く導き給へと言ひ聞かせて、後には只言を留めて十念にて其息を留むべきなり、若し十念申し足らずば、知識、一念にして不足の分を申し請てよ。又自ら十念成就したらんに於ては、決定往生と知るべし。文に曰はく、「若し衆生有つて大心を發し、彌陀の名號を十念せば、臨終に必定して極樂に生れ、上品蓮臺にて無生を得ん」文の意は、若し人菩提心を發して、十念を唱ふれば臨終に必ず上品蓮臺に生れて、則ち覺を聞く處なり。只今病者の心は夢の如し、臨終正念は必ず知識の力を憑む。往生極樂は偏に彌陀の本誓に仰ぎ奉

【合殺】念佛などを數人にて合唱することなり。
 鳥瑟沙摩明王 (Tichuzana) 或は又鳥極摩とも書く、善して不淨穢穢等と云ふ能く不淨を清じて清淨ならしむる明王なり。

る。若し爾ば、設ひ、彼本誓は誤りなくとも、是を勸むる人なくんば如何んが造惡の凡夫忽に九品の臺に登ることを得んや。只百千萬人の往生も、三五の知識の力なり。是故に、知者の寂滅の理りは只此時にあり。願くば往生の相を顯し給へ。又有驗の久修練行のしるしには、爰に徳を聞き給へとたり。既に今善惡の基なり。又是生死の纏を截る所なり。次に病者の息絶えて後、行るべき様は、尙尙、闕にして善知識各、一佛眼、一大日の眞言を誦てよ。有驗の人油斷することなかれ。殊に念力を致して守るべきなり。又合殺をせば、餘の知識にせさせて、二時も三時も有驗の人は立去るべからず。さて、不動明王、鳥瑟沙摩明王を共邊に懸けて、立ち去るべきなり。合殺とは、彌陀の御名を唱ふるなり。返送、さはきのむしろ、況んや恩愛の悲みの音勞勞聞かすることなかれ、旁旁恐れあるなり。さて十念を耳に當て、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と常の様に唱へ入れて、時移りて後には常のさまにあるべきなり。さても往生極樂は嬉しかるべけれども、生死無常は哀れにこそ覺ゆれ。是れ一生は過し安し、萬事は夢の如く、誰も冥途近きにあり。各各加様に急がせおはしませと。

南無阿彌陀佛 十念。

以上十餘卷の臨終の行儀の心による。一の文に云はく、「病者の書き置くべき事。三箇日の内に善惡を分かつたず、土用、諸社の忌など忌はざる事、右在生の時起請する所件。の如し、某甲、判有り」加様に書置せつれば、後の善惡の日、時方萬の嫌事なし。此は跡に有

【十】以下第八に命終者が極樂に往生する時の状態を述べる時、極樂往生の時、聖衆の來迎と法音等あり、地獄へ墮つる時は、歌の聲聞え、女人の迎へありなど、と説く【紫磨金】また紫磨黄金と云ふ。紫磨は紫を云ふ。垢濁

人の崇尤、恐れなき様なしといへり。

【十】第八に佛の來迎の儀式とは、來人の臨終の時、心若し顛倒せずして一心に南無阿彌陀佛と念じ唱へ終るに、此時に又長く誤りなき御持なれば、行者今思良しあれ、遂に西方を聞かば、音樂ほのかに聞えて、異香且匂ひ、既に行者の身心安く成り、目を開きて西方を見らば、紫雲空にたなびき、諸の聖衆と俱に阿彌陀如來紫磨金の粧にて、相好も珍しくましまして光明家の中を照し給ふ。而るに大悲觀世音は、百福莊嚴の御手に寶蓮華臺を捧げて行者の前より給ふ。又大勢至菩薩は無量の聖衆と俱に、同じく御手を捧げて導き給ふ。是れ行者親り見るにいさましき事限りなし。既に大悲觀世音は、かたじけなくも、檀金の御足を跪いて、彼寶蓮華臺をよせ給はば、亦大勢至菩薩は、金色の御手をのべて、行者を抱き、觀音の蓮華にのせ給ふ。是に行者あなうらを結びて、彌陀如來の御後に隨つて、一念の間に西方淨土の微妙の寶池の中に生るる事を得つ。此時に五百の化佛、無數の菩薩、百千の天人、聖衆空中にして様様の伎樂を奏し、微妙の音聲を出して、各此行者の功德をほめ給ふ。來迎の儀式略して斯の如し。抑無始より以來離れざりつる生死を出でぬる事は何なる功德に依つてかや。此は是れ偏へに御念佛の功の成す所、大聖明王の力なり。此故にたしかに不動明王を憑み奉り、同じく彌陀尊を念じ奉らば、正しく淨土に生るべし。亦迎に來りし蓮臺は常の華に非ず。文にははく「此界に一人佛の名を念すれば、西方に便ち一蓮の生ずるあり。但し一生常に退せざれば、此

【辨慢國】 閻浮提の西方十二億那由陀、極樂國に至る中途にある國にして、この國の人皆國土の快樂に染著して懈怠憍慢を起して進んで極樂に生ぜずと云ふ。

【禪定】 禪は梵語禪那の略にして思惟修或は靜慮と譯す。定は梵語三昧の譯なり。

【二】 以下第九に極樂淨土の有様を説き示す。

華嚴にて此國の境に到らしめん一文の意は、此世界に一人念佛すれば極樂に一の蓮生ず。常に蓮をざれば乳を飲つて遊べしむと云へり。或は云はく、なほ、淨土に生れて佛の御法を聞かん迄、心から離念なかれ。其故は、淨土と娑婆の間には佛慢國と云ふ國有るが故に、又來迎にも或は魔縁をふらかし、或は魔障の迎にまぎるることあるべしと云へり。其を如何と知り分くるとなれば、佛を念すれば魔縁は光を失ひ、極樂の來迎は佛を念すれば魔障をますなり。又地獄の迎はいみじき女人の形にして來る。淨土は女に非ず、佛と聖衆と計りなり。又地獄より來るは、獸の聲にして來る。極樂の迎の音は歌に非ず、唯法門のみなり。或は我が在所は諸の下淨、又は屍など有ると見え、或は淨相を現じて來るは極樂の迎に非ず。極樂の迎は加様の相どもなし。只靜かにして禪定に入るが如し。是等は知つて彼に隨ひしが爲の用意なり。又不動明王を惡みたり、眞に佛を能く念じ奉れば魔縁來らずと云ふ事先に申しつるが如し。是も又數多の文の意を略して取れるなりと云ふ。

【二】 第九に淨土に生れて樂を受る様とは、佛の曰はく、「是より西方に世界有り、名けて極樂と云ふ。其世界の佛の御名を阿彌陀如來と申す。今現在に法を説き給ふ。其國に生るる人は、諸の苦しみあることなし。唯萬の樂をのみ受くるが故に極樂と云ふ」と。阿彌陀經に説かれたり。但し彼國に九品の差別あり。暫く、その中の中品中生に生るる人は臨終の時に一日一夜諸の戒を能く持つて、乃至三世の諸佛の教に隨ふが故に佛來迎し給ふ

【三十二相】具には三十二大人相と云ふ。印度の人相説なり。三十二相は佛に限らずすべからず。大人の相なり。この相を具するものは家にありては輪王となり、出家すれば無上覺を開くと。

て即ち極樂に行き、蓮花の中に生れ、又七日を経て蓮開く、始めて華開くる時樂を受くる事無量なり。譬へば盲たるものの俄かに明なる眼を得。又賤しき者の忽に王位に至るが如し。則ち自身を見れば皆、紫磨金の色となり、三十二相備はりて身には瓔珞莊嚴の衣を着、濃き薄き顔に随つて重なれり。其身には旃檀の香を薫じ、口より青蓮華の息を出し、凡そ内外俱に清淨にして常に光ありて、彼れ是等に照す。又宮殿は金銀瑠璃を以て鏡を磨き、玉を磨き、彩りて立てたるが如し。又彼宮殿樓閣の玉の簾、鉦の帳の内には、寶衣を敷けり。是に諸の菩薩聖衆と俱に在つて萬心に任せたり。亦百味の飲食、甘露を調へて時に随つて來る。實に食する事なけれども、見るに悉く飽滿しぬ、又瑠璃の庭の上には妙なる寶衣を著く敷けり。籬の内の金の草にあける露は玉を貫いて面白く、銀の樹にさける華は葉を彩つて耀けり。又池の邊に行かば、天人、聖衆、龍頭、鵝首の船を浮べ、簫、笛、琴、箏、篋の曲を調べて聞かせ、又天の諸の童子汀に遊べば、百寶色相の鳥、人に馴れて法を囀る。又池の間には、鳧、鴨、鸞、鷺波に戯れて浮き沈む。江の邊りには、孔雀、鸚鵡のやさしき姿色色にして、音音に日出度き法門を唱へつつ、或は近付き又遠のき、むらがり飛び遊ぶ。さざなみ閑にして、心澄法を説けり。又池の蓮華なつかしくして宿りに遊ぶに妙なり。又金の池の底には銀の砂有り、銀の池の底には金の砂あり、水精の池の底には瑠璃の砂有り、瑠璃の池の底には水精の砂あり、加之、諸の玉の砂は色をかへて敷き、様様の池の水は光を交へて流れたり。是れ皆手に取り、身にふるるに彌樂をます。又四方の緑の空

晴れて天の音楽靜かに聞え、紫雲たなびいて色色の花を四方に雨らす。瑠璃の池明かにして
 十方淨土の姿をうつし、梅檀の林珍敷くして金銀の枝葉を交へたり。此故に心猶留まらば黃
 金樹林の々の色、涙留まらば上品蓮臺の曉の樂と云へり。是の如くにして宮殿より又
 宮殿に行くは樂みますます珍敷く、林地より又林地に至るに尙相續いて樂みのみあつて苦
 みある事なし、各相愛敬の形を備へて年の寄る事もなく、命の終る事もなし、又苦しく
 わびしき事なし、故に極樂と云ふ。只是一所のみ、此の如くなるに非ず、十方世界の百寶
 の地の上、七寶の林の間、八功德水の池の邊にも各各聖樂樂みを受けて様様に遊び戯れ或
 は衆生利南の如く十方の世界より來り生るるを見、或は聖樂其數多くして無數の佛土より
 來るを見る。或は樓閣に登りて十方を見る者あり、或は空中にして籠を讀み、法を説く者
 もあり。是は靜にありて心をしづむるものもあり。加之、各空を飛びかけり遊び戯る
 る事皆心に任せたり。又彼衆生を觀音、勢至、普賢、文殊等の諸大菩薩の哀れみ給ふ事
 は、譬へば、親の鬚子を見て悲むが如く、彼觀音、勢至の哀みこしらへ給ふに隨つて漸く
 見れば、彌陀如來の所に參り、又沙婆にして御名を唱へ心を懸けしに、既に恭なくも如來百福莊嚴
 の床に踞まりて、萬徳の尊容を拜し奉らんと思ひしに、既に三界の苦を出たり」と哀みほ
 の御手を以て行者の頭を撫て曰はく、「汝、善哉善哉、既に三界の苦を出たり」と哀みほ
 め給ふ。加之、各各に人の心に隨つて法を説き給ふ。法の理肝に染めて歡喜の涙留まら
 す、渴仰骨に通る。

【兜陀羅尼】眞言
と云ふ程の意なり
【無生忍】無生無
滅の理に安住して
動かざるを云ふ。
仁王經に五忍を説
く内の第四なり。
或は初地の證の名
とし、又は十地の
名とす。中七八九地の悟の

既に如來の御誓によつて、衆生各各果を覺り得るなり。故に十方世界を見んと思へば、立つ事なくして既に見る。又無量の淨土へ行かんと思へば、須臾の程に行き歸る。又諸供に遊び戯れば、菩薩聖衆は、皆是れ昔別れを惜みし親子の契り深かりし人人なり、と云ふ事を一一に皆知んぬ。又この故に彌淨土なつかしく、尙尙佛道の心つよくなりぬ。故に佛に成るべきはかり事を廻して、或時には御法を聞き、或時には如來に仕へ奉る。朝には色色の華を取つて佛に獻り、夕には諸の香を焼いて供養し奉る。斯の如くするに隨つて、彌覺を聞く、又聖衆も諸方よりかはるがはる來て、様々に佛を供養し奉り給ふ。或は八方上下の佛國よりも供養し奉る事又然なり。凡そ地より天に至り宮殿より萬物に至るまで見る事は、日出度く妙なる色を見、聞く事は、悉く佛に成るべき法の音なり。故に進む思ひのみ有つて、齧る心なし。又衆生各各昔佛道を求めし事を悟る。或は父母に仕へて孝養せし故と云ひ、或は念佛の業によると云ひ、或は坐禪し、或は經を讀み、或は兜陀羅尼を誦し、或は戒を持ち、或は禮拜をせし故、皆是れ善知識の教なりと云ふ。加之、今淨土に往生することは、皆是れ昔の善根に依つてなり、故に人の上下にはよらず。只、前世の功德勝れ、慈悲の心に染めて、我身も衆生も、皆佛なりと覺りし人、彼國の上品の衆生と成るなり。又然して無生忍の位に叶ひぬれば、大光明を放ち、大菩提心を發して自在の位となり、又事として心に叶はざると云ふ事なし、衆み數を知る所に非ず、千劫萬劫説くとも盡さじと云へり。彼國に生るる衆生は皆是れ是の如し。設ひ

【二】以下最後に極樂に往生し人が再び娑婆に歸る事あるを説き餘ねて結論をも述ぶ。

【宿命】宿命を知る言なり。

【六道四生】六道は六趣に同じ。即ち地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上なり。又四生とは胎生、卵生、濕生、化生の四なり。

疾速ありと云ふとも、終に佛の位に至る者なり。是れ偏に如來の悲願によりてなり。凡そ三世の諸佛の哀れみは、闍陀如來におはします。十方淨土の樂は西方極樂に極めたり。而に彼百千無量の樂も只最後闍陀の一念にあらん。故に行者邪見を翻へして三寶の教を信ずべしと、佛のべたまはく、若し衆生あつて、是説を聞く者は、當に發願すべし。彼國土に生れんことを一意は、若し人極樂世界に生るる様を聞かん者は、正しく願を發して、早く彼國に生るべしとなり。

【三】第十に極樂に生れたる人の、沙婆に歸りて緣ある人を始めとして、諸の衆生を導くとは、彼國に生れて、云ふ所の無生忍に叶ひ、智慧明にして、神通即なる事を得つれば、生生世世の思ある人を知つて、心のままに導かずと云ふ事なし。既に天眼を以て生るる身を見、天耳を以て言を聞き言をきく、宿命智を以て其心を覺り、神境を以て近き縁となり。方便力を以て教へ導く、凡そ智慧、神通自在なるが故に、越方行末今の事は只明かなる處に向つて聲を見るが如し。仍て六道四生に散じ別れ、三途八難に浮き沈み、諸の苦を受ける衆生を見れば、皆是れ先世の父母、或は妻子なり。此等が各歎き悲しみ思ひ願ふ所皆一に知り、是を見終つて助くべき方便を廻して、假に國王となつて惡事を止め親子、知識となつて功徳を勸む、乃至極樂の聖衆となつて臨終の時に來つて迎ふ。又是の如くして、若し一人を導く事を得つれば、彼も又諸の衆生を一に導くが故に、今淨土を願ふは此れ又我が身の樂みに非ず、思へば衆生の爲なり。縦ひ、罪業重くとも必ず引攝を

垂れ給へ。法華經。阿彌陀經。觀經。雙觀經。多くは往生要集の心による。

已上上中下三卷に分つて、三十七段の注する所皆以て極樂に廻向す。願くは此功德を以て一切衆生と共に彼國に生れて、普賢の如くに菩提心を證せん。事の緣此より發る故に、此文を便りとして生死を厭ひ、菩提を願はん人をば殊に阿彌陀如來來迎し給へ。既に昔の大いに誓ひき。設し我れ佛を得んも、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修し、至心に發願して、我國に生ぜんと欲せんに、命終の時に臨んで、大業と與に其人の前に現ぜずんば正覺を取らじ。文。此文の意は、若し我れ佛に成る事を得んに、人菩提心を發して我が國に生れんと思つて、命終らん時に、其人の前に聖業と共に顯れずと云はば、我れ佛に成らじと誓ひて、既に成佛し給へり。知んぬ、是故に信心我に有り、誓願頼み有る所なるをや。但し普く救はん事、彼誓願力に任る處なり。殊に行者が憑み奉るべしと云ふ所の不動明王、願くは一持祕密咒の誓にもとづきて生生世世加護し給へ。初發心従り、守護し增長し、乃し成佛に至るまで、身を捨離せず。文。是れ正しき御誓なり。又心中に憑み奉る所あり。無比の誓願を發し、邊地、異域に墮つて、晝夜に萬民を憐み、普賢の悲願に住せん。文。仍つて各各、且は本願に趣き、且は哀愍を垂れ、所願を成就し給へ。親となり子となる事、是れ前世の契なり。此故に人知れず涙を流して、母の爲に是を密に記す。故に孝養集と名付けたり。唯志の至る處をば、定んで照覽し給ふらん。只返返、恐を願ざるには非ずといへども、我身の年半を過るに、亦親の齡の衰へ給ふを見奉つて驚いて憚りなが

らんを思す。然れども、私の意樂に非ず。かく出家して山中に住する所に、田舎に侍る母の
 許より佛道願ふべき様を尋ね記してとの仰せに依つて、孝養の志しは深しといへども、心
 の及ばざる事を嘆き思ふ處に、三人の聖人出来て哀を成して一夏の間經論の文を引き、
 或は文を集めて抄し給ひたる所なり。然る言を波田舎に准らへ文字を書き和ぐる間、定ん
 で私の親りもや侍らんか。爰に披覽の人も深き心を發し、聽聞の族も眞の思をよせ、
 不壞の身にも孝養をはげます事、三寶の理を肯かずんば、得失此に准へて、云ふ所の
 臨終正念往生極樂の本意を達げしめ給はば、彌諸佛菩薩の大慈大悲の金言の實成る事
 を仰ぎまらんのみ。

市無阿彌陀佛 十念。

光明眞言土砂勸信記卷上

明恵上人作

【本書二卷。梅尾明恵上人高辨の作にして光明眞言二十三字をば字義句義の釋を以て説き或はその功德を説く。就中この眞言を以て加せる加持土砂の功德をば種種の因縁故事を引證して説けるものなり。】
【明恵上人】 紀伊國在田(有田)郡の人。承安三年正月八日に生る。城州梅尾山高山寺の開基。初は華嚴宗の學匠なりしも後に眞言に歸す。諱は高辨、建仁寺の榮西と親しく、又後鳥羽上皇、建禮門院、後堀河天皇、平泰時等の歸信を受く。其著七十餘卷。貞永元年正月、寂、壽六十。詳傳は元享釋書、本朝高僧傳にあり。
【不空成就佛】 法身の釋迦如來にして大日如來の化身

夫れ光明眞言の土砂と申すは、一切如來の大祕密の法なり。先づ光明眞言は、世間に流布して在家出家の人持念します。是れ一切の諸佛菩薩の通用の祕密眞言なり。一切の諸佛と申すは皆五佛にをさまりまします。五佛と申すは、大日、阿闍、寶生、阿彌陀、不空成就佛なり。此五佛の功德の體性は、則ち五智なり。云はく、法界體性智、入圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智なり。この眞言は此五佛の體性、又五智圓滿の密語なり。いはゆる阿謨迦吠嚧遮囊と申すは、法界體性智のことにして、是れ大日如來の體性なり。摩訶勃陀羅と申すは、大圓鏡智、是れ阿闍佛の體性なり。摩尼と申すは、平等性智のことにして、是れ寶生佛の體性なり。鉢頭摩と申すは妙觀察智のことにして、是れ阿彌陀如來の體性なり。入縛羅と申すは成所作智のことにして、是れ不空成就佛の體性なり。此故に人ありて纔かに此眞言を信する心あれば、其心に此五智のたねをむすぶ。譬へば大地の石無き所に草木の種子をうゑつれば、能くさかうるが如し。衆生の心性は本不性に於て、もとより一切如來の所證の心地なり。不信の石あれば功德のたねさかえず。信心あれば大地のうるほひのごとくして、萬善をさかやかすなり。しかるに眞言につきて、物を

門に於ける位なり
【五智】五佛を五智に配することは大日經疏を始め諸書の冠註に説明したれば今は略す

【阿訶伽】(Amogha) 功德空しからざるの義なり
【吠嚧遮義】(Vajra) 舊譯には毘盧遮那と作り法身佛の梵名即ち大日如來なり

【摩訶勃陀羅】(Mahamudra) 大印と譯す

【摩尼】(Mani) 珠寶、離垢、如意等と譯して一般に寶の總稱とす

【鉢囉摩】(Patra) 植物の名即ち蓮花の事なり

【入持】(Ichi) 光明或は燈光と譯す

【加持】(Kaji) 佛の光明が衆生の心水に加るを云ふ、即ち衆生の心水清ければ佛日の影此れに影ずるを加と

【加持】(Kaji) 佛の光明が衆生の心水に加るを云ふ、即ち衆生の心水清ければ佛日の影此れに影ずるを加と

加持すると申す事あり。其作法は眞言行者のならひつたふる事なり。此眞言にて、すなごを加持しつれば、此すなごはすなごはち眞言の一一の文字となりて、此眞言の字義を具足し、句義を成就して、且すなごを亡者のかばれ、墓のうへにも散らしつれば、此亡者一生のあひだ、をもちつみをつくりて、一分の善根をも修せずして、無間地獄等に落ちたれども、この事は、たちまちに眞言のひかりをはなちて、罪苦のところにと及ぶに、其つみおのづから消えて極樂世界へ往生するなり。しかれば青丘大師と申す祖師は、「遊心安樂道」と申す極樂往生のふみをつくりたまへる中に、問答していはく、「善緣にあひて九品の往生をとぐる事は聖教の文義さかりなれば、うたがひをなすにたらず。若し衆生ありて罪業をのみつみて、すべて善根のたくはへなきもの、すでに三途にをちて苦報をうくるを、方便してかれをすくひて極樂界に往生せしむることありや」と問じて、これを答するに、此光明眞言の土砂の利益をいだせり。則ち「不容闕素經」をひきていはく、「もし衆生ありて、十惡五逆等のもろもろのつみをつくりて惡道にをちたらんに、此眞言加持の土砂を、もしは、かばねの稱にも、もしは、はかの上にもちらさば、かの亡者、地獄、餓鬼、修羅、畜生の中にもあれ、此一切如來眞實本願大灌頂光明眞言加持土砂のちからによりて、光明その身に及ぶことをえて、もろもろの罪報をのぞきて、極樂國土にゆきて、蓮華より化生して、すすみて無上菩提をうべし」といふ經文をひきて、そのすゑに述懐する中にいはく、「他作自愛のことはりなしといへども、緣起難思のちからあり。則ち知りぬ、此咒砂に

云ひ一その佛の光明を衆生が受け持つ事を持と云ふ。然して今の加持は清浄なる土砂に行者が光明眞言を唱へながら祈念を疑らず所の儀式の如く解すべし。

【字義】眞言を釋するに初めには字相として世間普通に解せらるる當意の釋に従ふものを云ふ。即ち法(價)字なれば作業と釋するが如きものにして今此を字義にしては作業不可得と深義に釋す。

【句義】一句一句について義理を釋すること眞言を釋すること初めに字義を釋し、次に此句義の釋をなすを例とす。

【無間地獄】八熱地獄の一。梵名にては阿鼻旨(こご)と云ふ。五逆罪の一を犯せるもの墮する所なり。

あはずば、かの罪人うかぶことなからん。さいはひに此光明眞言にあへり、土砂に合することかたからず。心あらん人たれか奉行せざらん。』といへり。この大師は華嚴宗の祖師にして其行徳はかり難し。

新羅國大王のきさきの重病をうけたまひけるに、方藥しるし無くして醫王手をたむだくところ、占師におほせつけてうらなはしむるに、此國のちからはかたふべからず。他國にとぶらはるれば、しるしやあらんと、うらなひけり。大王使をたてて大唐へつかはすに、勅使海路をわたるに、波のうへに龍神のつかひうかびいでて、勅使をひきて龍宮にいりぬ。其時の龍王を黔海となづく。『金剛三昧經』と申す經を、此勅使の、はぎをさきていれて、此經を講讀せしめて、一心に信仰して、御聽聞あるべし。ただし經王の義理ふかくして講讀するに人あらじ。ただ一人の大智者あり。元曉となづく、佛法の棟梁なり。世界の日月なり。此大師を召請して講讀あるべし、と云ひて勅使ををくりかへしつ。すなはち龍神の奏狀のごとくにをこなはれけり。此大師はことに心を法門にすまして、其ありさま人にまぎれたまはざりけり。ひかりをかくし、徳をつつみて、まかせぬやうにおはしましければ、あるとき國王の百座の仁王會のありけるに、國王は智行を信じて召請せんとおほせられるを、其行徳を知らざる人申しさまたげて、やみにけり。此龍宮の奏狀に彌ほまれをあらはしたまひけり。

經文うたがふべからざるにあはせて、かかる行徳不思議の大智の呪砂にあふをもて有

【青丘大師】華嚴宗の祖師なり。

【九品】上品、中上品、中下品、下上品、下下品、九品なり。即ち上品上生等と呼ぶなり。

【下空門宗】下空門宗の祖師なり。

【十惡】殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見。

【五逆】父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、佛の身より血を出し、五和合僧を破るを云ふ。

【修羅】阿修羅の略。常に帝釋天と

縁とすと仰せられたる、頼母しきことに非ずや。呪砂と申すは即ち此土砂なり。有縁とすと申すは、自業自得は、つねのことほりなれども、有縁のことになりぬれば、他人のなすところ期ちあがことにも成るなり。

されば、此眞言加持の土砂をはかの上にちらさんと思ふ人の心にかけられて、此すなごにあふ縁のある人なれば、重罪を滅し大功徳をうることのやすきなり。しかるに、眞言

にあふことこそ大事なるべきに、すでに眞言師にはあへり。すなご、又、いくらもあり。眞言師又世にあれば、この眞言にて砂を加持すること、又やすし。この土砂を、はかの上

にちらさるる縁あらば、出離得脱も又やすしと云ふなり。一生のあひだ、すべて善根なき人、たほしこの利益あり。いかにいはんや此眞言をみづからうけたもたん功徳をや。また此人此土砂にあはん利益いかにばかりぞや。又たとひ、此眞言をうけたもたずとも、餘の善

根もあらん人の利益は、また無量無邊なるべきなり。おほよそ佛法の見聞の功徳、はなはだふかし。須彌山と申す山は、金銀琉璃珊瑚鐵寶と申す四寶に成せられたり。もろもろのとり、其方面にとぶことあれば、悉く具色に同す。北方は黄金なれば、きたにそひ

てとぶには、とり金色になる。餘方も又しかなり。この眞言の功徳も、又かくのごとし。土砂此眞言加持を得て、土として眞言の功徳をそなふ。衆生此土砂に近づけば、又土砂の功徳をうつすなり。しかれば、青丘大師の土砂にあふ縁とすと判じたまへること、い

みじくおぼゆ。まことに、佛法に縁なきことこそかなしむべきに、この土砂の方便により

戰闘する鬼神なり
【難思】 佛法の義
廣大深遠にして思
議し難きを云ふ。

【呪砂】 光明眞言
を以て加持したる
土砂を云ふ。

【金剛三昧經】 佛
說金剛三昧本性清
淨不壞不滅經の略
稱。二卷あり。譯
者不明。

【元曉】 新羅國黃
龍寺の僧、湘法師
に從つて入唐す、
華嚴唯識の達識な
り。

【眞言師】 眞言行
者のこと。

【出離得脫】 苦界
を出離して菩提涅
槃の解脫を獲得す
ること。

【吠瑠璃】 舊譯に
は昆瑠璃或は轉頭
梨等に作る。寶珠
の名。

【類紙通】 (Y. 115)
即ち水精の
こと、舊譯には玻
璃に作る。

【八用】 一に總相
二に別相、三に同

て衆生をして佛法の有縁を成ぜしめんことやすき事なり。大師の縁起難思のちからありと仰せられたるは、大小顯密三世の佛教のならばは、みな縁起の義を宗とす。その中に、ことに華嚴宗にこまかに此法門を談せり。六相圓融十支縁起となづけて諸門の縁起の義をつくせり。即ち世間に流布して受持讀誦するに普賢行願經に、禮敬諸佛等の十願をとくに、一微塵毛端刹海の中に無量廣大の佛刹ありて、一切の諸佛眷屬圍遶して法をときたまふを、わが身その中にありて禮敬したてまつる。此禮敬の業、念念に相續して間斷あることなし。第二の稱讚如來と申すも、則ちわが身の此毛端刹海の廣大佛會の中にありて無盡の妙音聲をいだし、無盡の辯才海をわかして如來の功德をほめたてまつる。これまた念念に相續して間斷なし。一二遍の禮敬稱讚等十方に遍じ、三世をつくす。無盡重重の禮讚の業となる事を、則ち普賢菩薩みづから行願力と深信解力とによりて、此不思議の業を成ずるときたまへるも、則ち縁起のちからなり。是は、十地等覺の位の菩薩なんどの神變にもあらず。ただ様もなきわれらが、ふかく大乘の法を信じ、ねんごろに佛德歸向したてまつるころを逸すとき則ち此不思議の業を成ずるなり。されば世間に講の式ををこなふ總禮にも、「我此道場如帝珠、十方諸佛影現中、我身影現諸佛前、頭面搗足歸命禮」と誦するは、是れ普賢十願の中の周遍無窮の禮敬なり。

又、十支縁起の中の因陀羅網境界門の道理なり。此法門のことはり、さかりに人の心にうかびぬれば、因位に果德ををさめ、凡夫も佛身に同ず。これらもみな、縁起難思のちか

相、圓に異相、互に成相、六に榮相なり。

【十家兼也】十家

門とも云ふ。密宗の所立、門無礙界の中の事、事無礙法界の相を示したるものなり。故に玄門と云ひ、これに十あり、然してこの十門が互に兼となりて他のものを越す故に縁起と云ふ。

【普賢行願論】大

方廣佛華嚴經八十卷なり。四十一卷なり。

【十論】普賢十論

のこと。即ち一、敬禮諸佛、二、稱讚如來、三、廣修供養、四、懺悔罪障、五、隨喜功德、六、請轉法輪、七、請佛住世、八、常隨佛學、九、廣順衆生、十、普皆迴向の十大願のこと。【十地】十地には大種あるも今は大

なり。すでに此不可思議奇特の事、縁起のうちからによりて成ず。いはんや六塵を眞言の文字とす。諸法實相を所詮の一理とす。土俗すなはち色塵なり。色塵に又實相あり。密加持の方便によりて其功德相融す。三途の苦惱をのぞき淨土の法樂を成就せしむることたとへば飲食水火の功効によりて、そのあぢはを調和し、人の身の内に入りて飢渴の苦をのぞくがごとし。あなごちにかたしとするに足す。しばらく純論傳記の説をばおく。この世の眼前の境界に、諸分の縁起實思の不思議あり。此山寺のうちの一の人の住僧、是年くさびらに染ふことあり。さめてのち病中のかたををかたるに、此くさびらとりてあたへたる下僧、其母ととりて來たりて、かたはらにはなれずして居たるを、とく見へかへりいねかしと思ふに、たもはなれずしてゐたるを、むづかしさきはまりなくおぼえつる由をかたる。此事不思議なり。くさびらにをひて身心むづらふとも、あなごちにとりて來れる法師かたはらにあはべきや。又其法師こそくさびらをとられたれば、みゆるにても、其法師の母、かたはらに在るべけんや。愚僧業障のいたりにや。かやうのことをきくに、如來の功德ところにそまり、佛法の道理もおもひ知らる。至相大師の「唯識章」に、「當に知るべし、聖教にあらはすところの道理は、諸法有るに非ず、唯一眞如にして、無我の實性なるを以て究竟と爲す」と釋したまへるは、則ちこのくさびらに染ひたる治方なり。此多ひごころの本をたづぬれば、法師の母この法師を産めり、法師くさびらをとりにきたる。人又これをくひたり。此衆縁和合して、此多ひごころをなす。しかれば其母うますば、くさびらをとる法師

乘菩薩の十地にし、歡喜地、離垢地、發光地、焰慧地、極樂地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地にして、此所にては第一地法雲地を指す。

【等覺】大乘五十二位階中の第五十一位の菩薩を云ふ。

【因陀羅網境界門】十玄の一。因陀羅網とは常釋天の細と、故に因陀羅網とはこの天にある實網にして、この網の線と珠玉とが交絡するを取つて物の重重無盡に交絡渉入するに譬ふ。

【八塵】色聲香味觸法の六境を云ふ。この六境が眼耳鼻舌身意の六根をして身に入り以て淨心を塗汚する故に六塵と云ふ。

【至相大師】支那の華嚴宗は唐の杜順を以て始祖とし次にはこの大師を

もあらじ、法師なくば、くさびらをもとりて來らじ。くさびら無くばこれを食はざらん。この本心ゑはずして法師をも見ず。母をもみざらん。これ則ち實の本心ならん、まさに知るべし、このゑひは夢の如く、まぼろしのごとし。香象大師の、三界四相は唯一の夢心なり、みな根本は無明の力に因ると釋したまへるは、則ちこの心なり。

かやうのことによせて佛法の道理をおもふべし。この土砂を信じて功德を得んことも、また是にことならず。土砂はくさびらのごとし。これをときたまふ佛は法師のごとし。三世諸佛一相の説をなす。展轉同説するは、母の法師をうめるがごとし。衆生これに信ぜばくさびらを食ふがごとし。信仰受持して功德をうるは、くさびらにゑふがごとし。十方一切如來、此人を護持するは、ゑふによりて法師の母とかたはらにあるがごとし。是に翻する衆縁和合して罪人となる。また此罪縁に翻する衆縁和合して善人となる。これらみな縁起難思の力なり。ただし人の御不審ありぬべき事は、法師も母も實には來らず。ただゑひごころの變現にてこそあれと云ひつべし。それ衆生得益のやうは、ただ因縁和合のちからによる。夢をひるがへしてうつとなすは、ただ究竟成佛のくらゐなり。しかれば出世の佛は皆變化身なり。所化の衆生はまた四相流轉の凡夫なり。此中にたほし重重變化あり。むかし如來在世に勝軍王五百の群賊をとらへて、眼をくじりて、はやしに捨つ。群賊苦にせめられて如來を念じたてまつるに、風たちまちに雪山のくすりをふきて其眼に滿つ、眼あきらかなる事をえて、如來を其前に見たてまつる。歡喜愛敬して説法をきく。みな勝利を

以て第二祖とす。然して賢首大師はこれに次ぎ、華嚴の教義を集大成す【香象大師】華嚴宗の第三祖、釋法藏なり。所謂賢首大師の事なり。【三界】欲界、色界、無色界なり。【四州】生住異滅の四洲なり。【雪山】印度のヒマラヤ山なり。

【三寶】佛法僧の三寶なり。

得て、つゑをすててかへりにき。其つゑ林となりて慈悲の利益をあらはせり。かの林いまにあり、得眼林と名づけたり。もろもろの比丘おほく其林中をして坐禪處とせり。法眼開明の益、ことにいちじろしくやあらんとおぼえて、山海をへだつるうらみ、ことに押へがたし。如來このことを説き給ふに、ただわが大慈大悲のちからありて、衆生われを念ずるにかくのごときの益あり。まことに、わが身のいたることはなかりきとおほせられたり。しかれば、母と法師とまことに來らせれども、ゑひごころのくるしみむなしからず。いはんや佛徳の不思議、眞言の加持において、なんぞあながちに假實のあらそひをなさん。しかれば、ただ此土砂を信じて病席にふさんときより、くびにもかけ、こにもにぎり、もしは、かたはらにも置きて、一切如來の光明の照觸にあづかると思ふべし。若し病苦身をせめて、持念にいとまあらず、幸向たちがたくして、潔齊わづらひあらんにも、かくのごとく信敬せば、無量の罪業をけし、無邊の功徳をあつめて、光照の利益のちの世にをよぶべし。不善をつみ、善根なき衆生なほし得益あり。いはんやかくのごとく信敬せんものは、ながれにさほさすがごとし。

むかし戒戒の比丘ありき。三寶物を用ゐて、その罪報ををちて、寶をあつめてこれをつぐなふ。いのちをはりて無間地獄をつるに、いまだ其大火の中に入らざるさきに、あやまりて、人間の温室とおもひて、温室に入る。呪願の文を誦するに、このこゑをきく衆生皆地獄を出づ。比丘また切利天にうまれぬ。この比丘、罪業によりて地獄につれども、

又餘善によりて地獄を人間の温室とおもひて、咒願の文を誦す。いはんや咒砂を信じて身に帶して、信心運運に相續して臨終までにいたらば、すなはち無間地獄の猛炎、くびのしたの土砂に映じて、かならず眞言の大光明に變ずべし。かの罪業の比丘、餘善によるが故に、無間のけぶりをみて、人間の温室とおもふがごとし。かやうのこと、あまたあることなり。

地獄の罪人獄卒の治罰をかふむるとき、其器械かなへにあたる聲を聞きて、かねをうつおもひして佛を念するに、罪苦をまぬかれたることあり。かやうのことになぞらへて、たのみを懸くべし。土砂を身に帶せんことは、經文に、かばねの上にならし、はかの上にならすべしといへるほかに、證據をもとむるにおよばず。しかるに、しばらく經説をばおく、この世の見聞の明縁をいだすに、日藏上人は延喜の年中の人なり。笙のいはやにこもりて、無言斷食のあひだに絶入す。そのあひだに金剛藏王の威神によりて、天土地獄等を見めぐるに悶絶のうちにいはやに入りしとき、持せるところの本尊持經等を帶持せり。則ち彼魔王宮にいたるに、大王問うていはく、『禪僧のせなかの上に持せるはなにものぞ』答へていはく、『山に入りしとき持する所の佛經なり。』大王とひていはく、『なに經、なに佛ぞや。』答へていはく、『大日、釋迦、彌勒、觀音等の像、又兩部の曼荼羅なり。又小字の法華、涅槃、最勝、仁王、金剛理趣般若等の經、又三部大法の儀軌次第等。大佛頂、隨求梵本の陀羅尼かくの如きの佛經なり。』大王則ち合掌頂禮して、手をとりにて相みちびきて、はしにのほ

【日藏上人】三善清行の弟、十二歳にして金峰山の椿山寺に入つて出家し、爾來金峰に往來すること二十六年来、天慶四年金峰山の窟に斷食祈念して、且つ菩薩を感じ、かつ地獄を見る。【兩部曼荼羅】金剛界、胎藏界の兩曼荼羅なり。

【法華】 妙法蓮華經の略稱

【涅槃】 涅槃經のことにしてこれに大小乘二種の經あるも今は大乘の涅槃經なり

【法華】 最勝王經

【仁王】 仁王經

【金剛】 金剛經

【三昧大法】 胎藏界、金胎界、蓮華界、三昧の大法と云ふ

【大佛頂】 大佛頂如來密因修持了義諸菩薩萬行普賢經の略名

【隨求梵本の陀羅尼】 隨求陀羅尼の梵本

りて、たまのゆかに坐せしめて、隨喜讚歎して、法要をきかんと乞ふに、法師略して法要をとく、大王たちて禮拜して「善哉、善哉」と、ほめたまひけり。しかればその身に帶せば、すなはち冥途に、はなれざるごと、たのもしき事なり。

問うていはく、「臨終に正念に住して、土師の功德をももはれたらん人は、まことにしかるべし。臨終に狂亂して、正念をうしなひてをばらん人は土師の利益もたのみがたくやあるべき。答へて云はく、「臨終に正念みだれずしてをばらん人は、なんぞかならずしも土師の利益をたのまん。一生善分なき、人他人散破の利益をうく。またたとひ正念不亂の人なりとも、臨終には、たげ稱名、佛等の行をばげまんに他事あるべからず。かならずしも南無土師と稱すべきにもあらざらん。ただ頓死無知の人には、かたはらの人、土師をばなたざるの用意あるべし。病席にふして目數をおくらんに、ふかくその功德を信せば、まさしき臨終のときは、不知不覺なりとも、其ときに土師の利益をおもはれたりし功德利益かならずあるべきなり。是れ則ち重罪無量の極重罪人、ただ他人散破の力によりて淨土の寶華にかたちをうくれれば、いはんや生前にわづかにも信仰をいたし、發願せられん人は、たとひ罪人なりとも、速疾の勝利、うたがふべからざる事なり。

問ひていはく、「臨終正念と申すは、命終のくらゐのぞんで、念佛等の善根あれば、是は當來の得益もうたがはず。臨終よりさきに土師を信する功德によりて地獄の報を轉すべしといふこと、信じがたくやあるべき。」答へていはく、「さきに重重申すがごとし、咒砂の

【瑜伽論】 瑜伽師
地論の略名。
【悟昧】 無智にし
て眞如の理に暗き
事。

【儀軌】 密教の本
經に於ける佛菩薩
諸天神等を念誦供
養する儀式軌則を
記せる書を云ふ。

利益は、ただ無善根の人の得益を不思議の勝事として、其外はみな棄すべきことなり。しかれども、三界の果報をつくことも臨終のさきの心による。咒砂の利益も又然るべし。瑜伽論の第一にいふが如し。又一諸の衆生將に命終せんとする時、乃至未だ悟昧想に到らざる位に、長時に習ふ所の我愛現行す。此方に由るが故に我當に便ち自身を愛すること無かれと謂ふ。此れに由つて中有の生報を建立す一といへり。義便に此文をいだし。無智の男女等は、ただ咒砂の利益の一定になりたる證據なりとおぼしめされば、をなじことなり。智人の前には文相を諷するにいとまあらす。

問うていはく、「しばらく來世の得益をばおく、ただ物のほしからんとき、此眞言加持の土砂をくはんに、忽ちに變じて飲食のごとくならば、冥益をも信すべし。もし現益しろしなくば、冥益を信じがたし。又ただ光明眞言を首に掛くべし。土砂も眞言の力によりてこそ功能も深ければ、眞言をきて、土砂をもてなすことはり信じ難くやあるべき。答へていはく、「眞言の功能ははじめて是れを論ずるにあたはず。ただし眞言の體は、能証に約すれば無漏の念慧の心所なり。所詮に約すれば、一切諸法の實相なり。然らば無漏の念慧は登地以上であり。諸法實相は佛智これをきはめつくす。大虚空界のごとくして、その邊際を得ず。またここにも觀えず、手にもとり難し。紙墨の文字はただ住持假立の法實の擇なり。受持觀念のところは利益ふかしといへども妄情分別のまへに、たちまちにそのしるしを得難し。ここに「儀軌本經」に相應物と申して、草木土砂等を加持して悉地を成就する

【悉地】梵語にして成就と譯す。
【業増上力】増上とは勢力の強きを云ふなれば衆生が強く勤むる力を譯すべし。

【増上果】五果の一、増上縁に依つて生ぜしものなり即ち眼識の眼根に於ける如き眼識は増上果と云ふ。

事をとけり。その中に今此土砂を加持して、與樂拔苦の悉地を成ずる事は眞言の體性は甚深なり。土信はもとより衆生の業増上力に依りて變現する體性なれば、衆生妄情の所縁なり。如來の大智の力、光明眞言の法力を是に加ふれば、土砂是をたもちて、一切如來色塵の法門身となる。則ち衆生身に合して一體となるが故に、其得益すみやかなり。しかもかの眞言の體と無二無別なり。たとへば法海は水にして、物にあはざれば、是をすなごにくみかけて、煎じかためて、これを用ゐる。しほをやくといふは、則ちこの事なり。是又かくの如し、眞言の體は、海水のごとし。土砂を加持するは、すなごにしめて、煎じかためたるがごとし。衆生身と合して罪滅生善の用をなすは、しほをしるあはせに依りて調和して愛用するがごとし。しかも此しほは海水と無二無別なり。眞言の體は如來所證の境界なるが故に、凡夫のためには、うしほのあはくやはらかなるがごとし。

土砂は衆生業力の増上果なるがゆゑに衆生の身心に合するは、やきがためたるしほのしるあはせにあふがごときなり。然るに眞言の功德をば、順理の信心をもて信ずれば、心性に薰じて利益をなす。口に食ば、ただ色塵を又我身の色塵なるにくはふれば、かたくしてまたのんどにも流りて、障礙あるべし。土砂を信する利益によりては、後生に別の功德身をうべきなり。此現身にはあづけざるなり。しかればこの不審は、妄情の前のひがごとなり。眞言の功力は稱性の談なるがゆゑに例同すべからざることなり。

問うていはく、「土砂は衆生業力の増上果なるがゆゑに得益相應すといはば、一切の草木

【瑜伽】(一) 諸物と相應すること。故に瑜伽行法とは三密双修のこと。【事相】 密教行法の作法形式等を云ふ。

【凡夫二乗】 世間を凡夫と云ひ、聲聞と緣覺を二乗と云ふ。

等みな増上果なり。かれを加持して光明の益をなすべし。なにによりてかいさごを加持するや。答へていはく、此重は秘密甚深事相なり。ただ信をこらすべし。たやすくことばをおこすべからずといへども、瑜伽行法のならひ、おほく事相の所標につきて觀念をまうけたり。則ち水をそそぎて物をきよめ、火になげて諸尊の受用をあらはすがごときなり。いまこれになぞらへて、所標を推するに、いさごをかぜのふきたてたるは、くもきりのごとくして、光明を標するにたよりあり。又その數おほくして、如來の無量の光明を標しつべし。しかれば一切如來の五智の光明を標するとき、いさごをもちひて、相應物とするなるべし。又詳しく眞言の句義を釋するとき、一一相應することあり。いはゆる經の中に、この眞言の持者、功德をとくに、一切如來の大摩尼種族となり。一切如來の大蓮華種族となり。一切如來の大金剛種族となるといへり。いはく、大摩尼と申すは、眞言の中の摩尼の句なり。いはく、一切衆生はみな無漏の功德をたくはへず、貧人の珍寶を得ざるがごとし。聲聞緣覺はわづかに人空無漏の珍寶をえたりといへども、たからにともしき人の、つきなん事を恐れて、人にあたへざるがごとし。一切如來は無盡福德の大摩尼寶を持して、無量のたからをふらす。自他受用に、きはめつくす事なし。たまたまこの眞言をたもつに、凡夫二乗の境界をこえて、如來の無量の功德を成就するがゆゑに、一切如來の大摩尼種族となるなり。

種と申すは、種類なり。族と申すは、族姓なり。大蓮華種族と申すは眞言の中の鉢頭摩

【大地法】 俱舍宗
 所立の心所法四十
 六の中、愛想等の
 十箇の心所あり。
 一切の心と相應し
 て起るが故に之を
 大地法と名く。
 【大善地法】 俱舍
 の心所法四十の
 中、信等の善の心
 所十箇を云ふ。此
 れ一切の善心に相
 應して俱起する爲
 なり。一切の善心
 を大善地と名く。

の句なり。いはく、此眞言の行者は、煩惱の泥にけがれず。かならず生死の水をいづるなり。大金剛種族と申すは、眞言の中の入縛羅の句なり。いはく、此眞言の行者かならず金剛の佛智をたくはへたり。此中に佛智と申すは、はじめて、此眞言を信するより佛にならまての智慧を佛智となづく。そのゆゑは、五位の功德はみな佛智の一分をわけたり。たとへば、とり、大虚をとぶに、そのとびとほるあとは、みな大虚の一分をゆくがことし。この中には世のつねの有智無智を論せず。ただ信ふかくしてねんごろに此眞言をたふときことたりと知るを智慧となづくるなり。是則ち一切如来の大金剛種族なり。是にぞさらへていへば、此土砂のままにたれど、摩尼種族をあらはす。みづのそこにて朽す、けがれず、蓮華種族をあらはす。かたきことは金剛種族をあらはす。かくのごとき甚深の義をあらはすに、一一にたふあり。これによりて此土砂を相應物とするなるべし。但しかくの如く申せば論義者の前に法相荒量なるやうに聞えつべし。をりめきびしく法の相をいへば、小乘によらば、大地法と大善地法とに、各十の心所あり。信は大善地法の中にあり、慧は大地法の中にあり。大乘によらば、信は善の十一の中にあり。慧は別境の五の心所の中の一法なり。これらの法相をくはしく知らずして、ただ信慧一體なる様にいひなす、ひがごとなりと云ふそしりもあらば、又土砂の信もをこたりぬべし。此問を答せば、土砂を信するくらゐに、此土砂は如来の祕密法なりと簡擇するところ、則ち是れ智慧なり。しかれば上にたふときことなりと信するを、智慧となづくといはずして、知るを智慧となづくといふは、いささか

【十信】菩薩五十
 二位の修行中の位
 なり。即ち佛の教
 法に入らんとする
 ものは先づ信を以
 て能人とする所以
 なり。一に信心、精
 進に念心、三に精
 進に定心、六に不
 退心、七は護法心
 八に廻向心、九に
 戒心、十に願心な

この信とともなる智慧の功能にゆづらんがためなり。十信と申すくらゐは、十の心品にみな信の總名をたつ。其中に智慧もあるなり。是は、大小乗の法相門につきて此談をなすといへども、宗家に深法をおきて信心をおこすは、其信は聞慧より生ずと判することあり。是は信慧の類なり。しかれば、かやうの事は能詮の教文をたれば、所詮の義まぢまぢにおこる。かぜあらければ波たかきがごとし。諸義ひがごとなければ、みな一つの正理なり。正理は無名無相にて、ひそかに衆生のところにさしはさめり。然れば無智なるに似たれども、ふかく佛法を信する人あり。法相名数にうとければ、われも愚癡人となる。順理の信あれば、その心ただちに三寶の功德を所縁とせり。能所相順するがゆゑに餘道に稽留せず。此信ある人の、はじめて佛法を信じつるは、わづかに信をおこすより、諸佛の護念かたければ、生生世世見佛聞法の益ありて、ただちにすすみて退轉せず。本性正定の菩薩と名けたり。さきに大金剛種族の義をのぶるに、世のつねの有智無智を論せず、ただねんごろに此眞言をたふとしとおもふと智慧となづくと申すは、この人をさすなり。世間の男子女人の中に、かかる信徳ある人はいくらもあれども、我この徳ありと知らず。しかれども、得脱はそれにはよるべからず。眞如法性は方所なくして、諸菩薩の所證なり。淨信みづからひらけず、かならず近友聞法の開發をまつなり。その開發をまつと申すは、則ち正法をききて、ふかく信受する心をおこすなり。諸佛の出世も此を開發せんがためなり。ひそかに正教の文理をおもほへて、そらにやはらぎ申せども、なほしわたくしの安立に似

【三昧耶】(Samaya) 一本誓と譯す。

【一行阿闍梨】密

教傳授八祖の一。

大唐制の人にして

著撰異三藏支那に

來りて大日經を講

ずるに當り其口説

を筆記し大日經疏

二十卷を著はす。

【法】大日經疏の

こと

【密經】秘密瑜伽

宗の人、遼の燕京

回廊寺の沙門。總

秘大經と號す。

【密經抄】大日經

義經撰密經抄の略

名、十卷あり。沙

門覺施、大慈國天

新皇帝の大曆三年

勅命により撰著す

る所なり。

たるは、はばかりに在へず、此れ諸大乘經のころなりといへども、その中に一種の證據をさすに、大日經の第六、三三昧耶品第二十五に、衆生發心して佛法をもとむるに、

三重のところ、相ひ次ぎておこるを、三の三昧耶となづけたり。三昧耶といふは、ひとし

と云ふ梵名なり。此三重相ひつゝおこるは、中間に邪心小心相交りて、佛果を成ずる事をえ

ず。三重はしく相ひつぎておこれば、三三昧耶といふは、三等心といふなり。第一の三

摩耶をとく經文に、初心には不親自性とといへり。一行阿闍梨の疏、ならびに覺苑師の演

密鈔に、此文を釋するに、衆生はじめて佛法をさくに、いまだわが身の本性に、いかな

る功德ありともしらざるに、生死のなかにして、はじめて發心して佛道を愛す。此慧性あ

る、是れはじめの三摩耶なりといへり。此心次に如實の智おこりて、是は功德なり、こ

れは功徳にあらざるなり等の、邪正のことばりを分別す。これ第二の三摩耶なり。この心
の次に、大慈悲心おこりて、衆生ををしへて、わがごとくに佛法に悟入せしむ、是れ第三
の三摩耶なり。此三種は第一は發心、第二は智慧、第三は慈悲なり。第一の發心の行相を
釋するに、疏の本文にいはく、而も未だ能く自ら己身の本性に了達せず、何の功德がある、
但し此慧性有つて、能く生死の中にして最初に發心して而も佛果を求む、此れ初めの三摩
耶なりといへり。其行相もつともあさし。いまだ己身の本性をしる觀照の智慧なければ、
第一を發心のくらゐにして智慧を第二とせり。しかもまた、但有此慧性と釋せり。これ
はさきにいだすところの華嚴宗に信は開慧より生ずと判するに同せり。これは三三摩耶な

んど申せばことごとしきやうなれども、深く佛徳を愛樂せば、すなはちわれらが身のしな
 なるべし。三等の義につきて、先づ浅く云へば、すずめのこにも、この三等の義あり。は
 じめには、かひごにして目鼻もなし、父母のすずめがかひごなりしくらゐにひとし。つき
 には、かひごよりいでて、目鼻あり、父母が、かへりたりしくらゐなり。つきには大人す
 ずめになりて、子をまうけて、あたためあはれむ。ちちははとひとしくなるなり。この三重
 相つぎてすずめとなるなり。是れすずめの三三摩耶なり。われら濁悪の世に生れながらこ
 の教文をきく、如來の功徳愛樂せば則ち第一の三摩耶なり、人まねのくまのまうでといふ
 ことわざあり。まことに一人發心の人あらば、諸人もまた學ぶべし。是れ則ち如來種姓を
 おこすなり。「深密鈔」にこの三三摩耶品を釋するところに、「瑜伽論」の四種發心をひく中
 に、第四の發心の行相をい出す。其文ひろし、いま略鈔していはく、「或は一類の衆生諸佛
 の神變微妙の正法を見聞せずといへども、末劫末世にうまれて、もろもろの濁悪の衆生の多
 愚癡、多無慙愧等の種種の大過失をみて此念をなす。今濁悪世にして、もろもろの憒亂を
 おこし、下劣の聲聞獨覺の菩提心をおこすとも、かの小果もなほ成じがたし、いはんや無
 上菩提においてをや。われすべからく無上大菩提心をおこさば、諸の衆生われにまなび
 て、又大菩提心をおこすべし。末劫の中に無上大法をえがたきことを思ふによりて、大菩
 提心をおこす」といへり。若し無上道を求むる心あらば、われらは此文の正爲なるべし。
 はげむべし、はげむべし。しかればさきに如來祕密加持の方便ありとしりて、此土砂をた

ふとしと思ふを智慧にして、大念無常觀といふなりと申すは、これの文理をかもはへたるなり。後の法門にも、ただかちのりところを、一くちづつ申すあひだ、相續二門の義、ともにあしからしきこと論べし。しかんども、いときて主師の利益に結歸すれば、ことなき防論にいとまあるや。かそくに以て申すのふる意趣は、みなもと一人の請にかなへども、ふでをそのつるならはば、つばさなけれど、かたくとひ、はづあなけれど、遠くゆく、然るにたまたますはれぬうち、かかやくといへども、いまた法體の光を見ず。しほのいほりのした、樂しといへども、さらに無財のたくはへにともし。その中の春華秋月のたはふれ、萬歳千秋のさいまひ、悉く無常解脫のみちをふさぎ、輪廻生死のまごをへらぐ、あはれなるかなや、かなきかなや、彌命すでにかたふき、無常たちまちにいたらんとき、歌堂舞臺はすてかへらず、象馬車乘は悉く他の有となるべし。天神の眞蹟も、轉王の威力を、是をたすくるにあらなし。おそらくはこの書にいたらん處ごとに、ことばを廣談になぞらへて、ねんごるに主師の信仰を申しこふ。すでに同體の大悲によりて、弘濟の秘術をいそへたまへり。信仰し歸依せば、いかなる罪かきえざらん、いづれの徳をか成せざらん。しかれば、處にみづらしきうれ木を植えて、花さき木の實をむすぶをまつがごとくに、佛法の中に一の事相の行につきて、現世より後生にいたるまで、順次ぞて速疾の利益をたのみんと思ふに、秘密藏の中に此主師の甚深の功能あり。青丘大師またふかくこの文をあたはれたまへり。大師この文をひきて、追懐してのたまはく、よくやしきかなや、罪業

【不空三藏】密教付法の第六祖。梵語には阿日法跋折羅(Cangra)と云ひ織して智藏と云ふ師子國(錫蘭)の人なり。金剛智三藏より兩部の大法を皆傳し専ら梵本の諸經を翻譯す。

みづからつくりて、苦果かけのごとくにをふ。いたましきかなや、ひとりたしなみ、ひとりあやぶみて救護するに人なし。同體の大悲と弘濟の祕術とにあらすよりは、たれかよくかへりて剛健をひらきて、たすけて華台にのぼらしめん。他者自受の理なしといへども、縁起難思のちからあり。すなはち知りぬ、呪砂にあふをもつて則ち有縁とす。もしいさごをかふむらすば、何ぞ脱期を論せん、おもんみれば大悲無方なり。長舌たぶらかすことなし。信ぜずばあるべからず、後悔をよぶことなからん。然れば則ち信用せざるものは、いたづらに厚恩ををひて、報ずる日うたたとほし。順行することあるものは、たましひを、華蓮に接し、孝順則ち立す。』といへり。これその正文なり。諸佛如來は衆生の苦しみを悲しみ、みましませば、この眞言の祕術を信ぜざれば、佛恩をになひて、報ずるに口なし。是を信すれば佛恩を報ずる孝順の佛子なり。

密教の祖師不空三藏、又此一章を翻譯して、眞言の儀軌としたまへり。然れば、まことに此密行に會へることをよること。初後夜日中三時練行のついでに、此加持の法を修すれば、呪砂連連にもなる。是を大きなるひつにうつしおきて、親疎こふことあれば、要にしたがひて是をあたふ。ねがふところは十方に分散し、三世に周遍して眞言の利益つくる事なからんがためなり。

光明眞言土砂勸信記卷上 終

光明眞言土砂勸信記卷下

問うていはく、佛像等は諸根相好をきざみあらはせば、是を拜したてまつるに、信心おこりやすし。此土砂は其かたち極もなきすなごなれば、ふかき功能をきくといへども、信心おこりがたし、信心またからずば、功能もまたからずやあるべき。答へていはく、一分の善根なき衆生、いのちつきてさりぬ。その骸にちらずに、なほし大利益を成す。しかればききて信ぜざらんにもよるべからず。但し佛像を信ぜん人はなし。なんぞ是を信ぜざらん。ともに如来の念ふより出でたり。何ぞかれをとり是をすてん、佛像も繪に描き木に刻む。眼耳等を知るはただ心識の分別なり。凡夫を耳目のともがらとなづく。その心ただ耳目の境界を分別す。聖智の知る所は皆諸法の道理なり。凡夫はげみて心をおこせば、あるは信じ、あるは信じ。見聞の因縁むなしからず、終に無上の佛果をきはむるなり。青丘大師のせめのごとし、後悔およぶことなからん。少水の魚のごとく、屠所の羊に似たり。須臾にしにさりなんとす。はげむべし、はげむべし。但し無道のすすめは、かへりて人の不信をます。きみが疑心をくだかんために、一言の反語をもうけん。きみがまなこの前に、世のつねのいさごとみて、心の内に加持の境界を信ぜざるは、一ついさごと知らばいさごはこれ何ものぞや。答へていはく、いさごと申すは、青黄等の色のことにして、方

圓のかたち同じからず、かたく細かにして一聚をなせり、これをいさごと名く。問うていはく、「しからは草木等も、青黄等のいろ、方圓等のかたち異り。これはいさごとなりとやせん。」答へていはく、「かれは大にしてかたからず、いさごはかたくしてこまかなり。問うていはく、「しからはほしいひをこまかにくだきたるは、かたくして細かなり。これいさごなりとやせん。」答へていはく、「かれはやはらかなるを、干しかためたり、いさごはもとよりかたくしてこまかなり。問うていはく、「然らば金鐵もとよりかたくして細かなり、是はいさごなりとやせん。」答へていはく、「然なり、世間に砂金と名く、則ち是れいさごなり。」問うていはく、「かれは砂金なり、是は土砂なり。しかれば、砂金にあらずして土砂なりとやいふべき。」答へていはく、「土砂はひかりなし、砂金はひかりあり。然れば土砂にはあらず、ただ是れ砂金なり。いはく、「然らばこまかなる水精は、ひかりありて、しかもちひさし、是れ砂金とやせん。」答へていはく、「水精は白し、砂金は黄色なり。しかれば、水精は砂金にあらず。問うていはく、「然らば、土砂の色一色にあらざれば、黄色にして光りある土砂あり、かれは砂金なりとやせん。」答へていはく、「なほ土砂は砂金にはあらざるなり。問うていはく、「きみもとより青黄等のいろ殊に、方圓等のかたち同じからずして、かたち細かなるをいさごといふに、砂金土砂にみなこの義あるを、いづれのところをわけてか、土砂砂金同じからずといふや。」答へていはく、「砂金は珍寶にて、箱の底につつまおけり、土砂は寶にあらずして、ただ大地に充滿せり。例すべからざるなり。問うていはく、「然

心は砂金を掘りいだすところには、箱の底につつまぬかすして、土のなかに充滿せるは、
 實にはあらすや、答へていはく、なほこれ實なり、問うていはく、すでに大地にみどり、
 心にをさめず、はるにたくはへず、たれかこれを賣とすや、又をさめたくはふるは、
 人のなすところなり。しかれば、ただのすなごをも、をさめたくはへば、是れ實なりとや
 せん。また大地に金砂を多くまきたらば、實にあらすとやせん。答へていはく、なほ砂金
 はこれ實なり、問うていはく、すでに諸箱の義をつくしつ、砂金土砂高下なし。このうへ
 になほ、砂金をたかるとするは、たれ人なりとやせん。答へていはく、此平等の談をきく、
 といへども、なほ砂金はほしく、ただのすなごはほしかられば、すなほち、われ砂金を賣
 とするなり、問うていはく、きみもし砂金のぬしたらば、世間の領所のぬしは、そのさ
 かひを領するごとく、さだめてその金砂の分利をしるべし。しからば、きみにとふべし。
 その金砂は地水火風を徳とすや、色香味觸を具足すや、小法なりや、大法なりや、有法な
 りや、宗法なりや、業法なりや、淨法なりや、凡法なりや、聖法なりや、砂金をとふがご
 とく、土砂の糞もまたおなじ。もしいさごとしりて、佛智の境界を信受すば、これらのこ
 とはり、さだめて心中にみてらん。すなほらかに答へらるべし。答へていはく、われただ
 砂金、土砂と知るばかりなり。またたま知れるやうをば、さきに申しをばりぬ。具外はさ
 らに知るところにあらず。詰していはく、もしみれば、いさごをもしらず咒法をも知らず、
 もしともに知らずば、たれ大聖の所説を信受べし。大聖いさごをもしり咒法をも知り給へ

【二諦】眞俗二諦なり。俗諦とは迷情所見の世間の事相なり。又眞諦とは聖智所見の眞實の理性を指す。【極微】有部宗の意によればこれに三位あり。即ち一は極微の微、二は色聚の微、三は微塵なり。

り。諸佛常依二諦說法といふは是なり。佛智の知るところは、因人知らずといへども、隨機の説くところ、分分に是をきく、其中に大小諸教不同なり。しばらく大意をいだすに、いさごはこれ衆多の極微合成せり、極微は聚集してかりにあり、離散しては、その體むなし。心識これを變じ、因縁これを合す。その體は、性に約すれば眞如法性の一理なり。縁に約すれば無量無邊の諸法なり。三世諸佛その中にゐて、十方佛國をそのうちににおく、すなはち是を眞言の文字とするなり。然るに世間の文字を用ひて眞言の道を説くとき、種種の文字の眞言あり。其文字は大小乘に法數をたつるとき、名句文の不相應行法の中にをさめたり。字義句義ありて、みな諸法の實相を詮じあらはせり。その實相にかならず甚深無盡の功德あり。其功德を信すれば、凡夫の身心の中に無量の佛徳ををさめて、如來の眞子となるなり。たとへば、世間の人の子の、父母の精血をうけつれば、その子息にして、そのかたち父母に似たるがごとし。佛は父母の如し。其功德を信ずるは精血をうくるがごとし。佛を信すれば斷惡修善の事をこのむは佛に似るなり。今この光明眞言につきて、その字義句義ありて、諸法の實相を詮じて、しかも、土砂に反似する義をいはば、阿謨伽と申すは、いさごによせていはば、阿をきくとき凡夫もなしと知り、聖者もなしと知る。然るに凡夫は定性を執するがゆゑに、實有實無の二執をこる。是れ妄執なり。聖者は縁生としりて實有にあらず、有無とともに一性なり。しかれば聖智のまへに、この土砂不生なり。謨字をきくときは、吾我不可得の義を知る。吾我と申すは土砂の體性なり、不生

【不可得】空の異名なり、諸法の空無にして所得の實なきを云ふ。
【迦字】五大の内空大の種子なり。

【淨定】淨は梵語禪那の略にして思惟修（高僧）と譯す。定は梵語三昧の略なり、一地に定止して散動を離るる義なり。

【波羅蜜】(Parasita) 波羅蜜多の事にして究竟、到彼岸、度無極及不單に度と譯す。菩薩の大行なり。

【信敬】(信三三三) 樂観と譯す。然して此所には阿僧祇の意味即ち無數の意なるべく從つて無數劫の意なり。

なるがゆゑに、其體性むなしきなり。御字をきくとき、一合相不可得の義を知る。土砂の實體不生なるがゆゑに、土砂をつくる業縁能く合相不生なり。これを土砂の實義とす。凡夫はこの道理にまどふ。如来はこれを知りたまへり。凡夫のまどひのところには必ず如来の大智あり。しかればきみ土砂の實義にまどふところに必ずまた如来の大智あり。本質と影像のごとし。彼凡夫の妄執に就いて、如来この道理をときたまふ。しかれば、此阿彌伽の句義を不容といふは、則ちこの三字の義となりて、凡夫の妄執の土砂を空すれば、必ず佛智の照す所の眞實の土砂の義、むなしからざるなり。是はすなはち佛智なり、佛智を凡夫の土砂に加ふるとき、土砂佛智の用をたもつによりて、光明となりて照すなり。是れすなはち加持の義なり。餘の句に一一に、かくのごときの深義あり。瑜伽行者の了達するところなり。土砂すでに無量甚深の義理をふくめり。その上に佛力法相加らんとし、いかなる不思議のこともあらんに、なんぞあながちに、かたしとするに足らんや。問うていはく、一しからは、かくのごときの眞言加持の境界、まなこの前に現前すべし、しからざれば、後の世を得つにも又うたがひおこりやすし。答へていはく、現世の果報は前業につくりかためられたるがゆゑに、心境ともにあらく現前して、過去未來のことをしらす。しかれども禪定をふこし神通を得て、其ことを知る方便あり、況んや佛智の境界は甚深微妙なり。罪業をさばりとし、功德を因縁とす。凡眼の前にたやすくあらはれざる、そのいひあることなり。さればこそ、諸波羅蜜の行、僧祇曠劫の修行をつみ、三點四徳の妙果、は

じめありてをはりなし、是をねがふを菩提心となづけ、是をこのむを大菩薩となづけたり。さのみたやすくば、無上のくらゐにあらざらん、かくはあれども、事識の分別すこしきしづまれば智眼の照見うかびやすし。みを山林にやどし、心を法門にすます人、心月を法佛のひかりと見、相風を轉輪のころにきかん。かつがつ妄情の執着をとほざかれれば、心やうやく證果の道にちかづく、大白はまだらなるがとし、大成はかけたるにたり。かやうの人のうるところ、かたはらにして誰かはからん。又必ずしも可ならん。又必ずしも入聖證果のみち近づかざれども、現報すでにかたぶき、當果まさのぞみなんとするとき、夢のごとくして眞言加持の境界をみることあり、愚身そのかみ、たかをの山に住せりしとき、痲癘さかりにおこりて、諸人わづらふことありき。其中にふぢゐの按察の入道の子息、宰相阿闍梨性憲と申しし人ありき、いまは亡者なり、その人をさなくして、たかをに住せり。もつてのほかに、大事にやみて絶入するに、先師行慈上人、其かたはらにゐて、うりを加持して、其くちびるにぬらる、蘇生してかたりていはく、「我は、死にたらば魚になるべき物にて、ありけるやらん、我が身水中にあるに、口のうちに、甘くめでたきものをふくめり。其あぢはひ、きはめてよくいみじくおぼえて、いきいでたれば、上人のうりを加持して口にふくめらるるが、甘きものとはおぼえけり」と。あはせながら、水中に處せることをば、魚になるべかりけるやらんといひき。このごゑ思ひあはすれば、われも眞言加持のちからによりて、うりのみをうるほすによりて、蘇生するしるしにてありけりとお

ぼゆ。

【阿闍世】Ajatasattu 王の名。即ち佛在世當時の摩竭陀國王舍城の治者にして、父は頻婆波羅、母は韋提希なり。

【摩耶夫人】(Māyā) 神母の母なり。

【波羅】(Pāṇḍya) 中尺管、波羅奈國にあり、行尊成道の後始めて此所に來て四諦、法を説き、佛陳如等五人を定すと、

【拘尸那】拘尸那提羅(Kuśinara)の略稱。城の名、角城と譯し、佛迦如來入滅の處なり。

むかし、阿闍世王信心ふかきこと巨海のごとし、如來涅槃にいらたまふことをききたまはば、必ずおもてより血をわかし、身體もくだけ散りたまひぬべし。智臣ありて方便をまうけて、一つのおかがねの池をつくる。其中に淨香油をいれみて、大王をしてその中におろしたてまつる。白紙のおもてに、如來の本行の像を圖したてまつる。はじめ都率天より下りて摩耶夫人のほらにやどりたまふより、菩提樹下にして正覺をとり、鹿野園にして、はじめて法輪を轉じたまふ。乃至狗口野城沙羅林中にして、涅槃にいらたまふまでの所行を、悉く神にかきて、大王にみせしめたてまつるに、涅槃のところをいたりて、たちまちに心さおき、かたち變じたまふとき、香油五分が一分そのみにしみるとほる。かはけるほりに、水をまかせたる様に見えけり。この方便によりて、大王の命をたすけ奉りけり。これも眞言加持のちからによりて、うりのみをうるほすによりて、水中にありとおぼえけるにこそ。この現世の果報は前業につくりかためられたるがゆゑに眼前の境界にこそ眩轉して其しるしを見ざれども、此果報すでにかたぶきて、當果ちかづかんときは、その利益心におぼえ、またこにうかぶべし。又愚僧が多年の侍者の下僧に、定龍と申すものあり。さりし貞應元年八月二十八日に重病にしづみて、數日をおくるあひだ、問絶せるがごとくして、はるかなる途を行くに、蹠路におもむきて、もろもろの罪人の執縛をかふむるを見る。一つのおほきなるはかりに、もろもろの人をかけはかる。此事をみるに、怖畏き

はまりなくして、一心に光明眞言を誦す、赤面蓬頭なる大童子のごとくなるもの、たけ八尺ばかりなるありて、定龍法師を、このはかりにかけんとするに、弓箭を持したる俗體の人ありて、これを制止してかけしめず、この後しきりにこの定龍を敬重す。俗體の人しめしてはいはく、「はやく本郷へかへりたまふべし」といふに、よろこびをなして歸らんとおもひみて、みかへりたれば、たちまちに暗暗としてさらにみるところなし。さらに心をはげまして光明眞言を誦するに、其聲につきて白青なる光明諸方より定龍が前に飛びあつまる。急急にこれを誦するに光明「明こごりあつまりて周遍して虚空にみちぬ。其後かへらんとするにまた身のちからなくして、あゆむべきこちもせねば、又はげみて眞言を誦するに、其身かろくあがりて、虚空のなかに處す。則ちそらをとびてかへることをおもひてさめぬ。この小僧年來の光明眞言の持者なり、是によりて此勝利あるなり。眞言の勝利かくのごとし。土砂のしるしもまた同じかるべし。問うてはいはく、「眞言加持の功能もつとも是を信すべし。但しかくの如く如法に加持する呪砂を、糞穢等充滿せるところに尸骸あり、この上に散らさんは、はばかりやあるべき。」答へてはいはく、「いまだこの土砂に文證をみずといへども、餘の眞言加持の事をとくなかに、眞言加持の藥物を人の身分の不淨所につくることあり、これになぞらふるに、いまだ散らさざるさきには、呪砂を尊重すること仰舍利のごとくすべし。もし尸骸の在所にのぞみては、不淨所にもこれを散らすべし。是れ則ち文證なり。又理證をいださば、不淨をみるまなこは、ただ土砂の色塵をみる。

【毘那夜迦】天の名。
人身にして象鼻、
常に人に隨侍して
障礙をなす惡鬼神
なり。

眞言加持の功力は、不淨にけがれざるがゆゑにこれを散すにはばかりあるべからず。又此土破加持の方便は、一切如来の大慈悲本願力よりいでたるがゆゑに、淨不淨所きらはず、ただ尸骸の在所に散すところとすべし。眞言の文字を糞穢なんどの中になげれば、はばかりあるべし。是れ又土破の殊勝の功能なるべし。問うていはく、「しからは眞言誦ふかき山の中に住せられんに、そのほとりには細砂あるべからず、しかるにこの機能をききて土破を要せん人、里の不淨所の土破をとりて深山へおくりて加持を申しうけん事ははばかりならんや。」答へていはく、「かへすがへすあるべからざるなり。眞言加持の法は諸事きはめて清淨にして、成就することなり。もしけがるることあれば、大力の毘那夜迦等、たよりをえて、その悉地を障礙す。しかれば、たとひ山をこえ、谷をへだつるわづらひありとも、きはめて清からんところのいさごをとりて、あたらしからん器物にいれて、眞言師のもとへおくらば、眞言師又大願をおこし慈悲に住して、本尊のみまへにして、ねんごろに祈願す。光明眞言を本體とすれども、瑜伽行法のならひ、密印をむすび、眞言を誦するに、一二にかきらず、多種の相應の印言あり。又大智大悲相應の甚深の三摩地に住してちからをばげまし、心をいたせば、あるひは夢想、あるひは好想にもあれ、隨分に成就のしるしを感ずることあるべし。しかれば、きはめて清からんところのいさごをもちひるべし。愚身この事を一大事にして、はじめにきはめて人とほき海中のほとりのしまのいさごを尋ねよせたることありき。その中に貝のくだけましはりたる事ありしかば、すててこれを用ひず。此

【高山寺】京都府下葛野郡榊尾にあり。作者明恵上人高辨の別荘。
 【石水院】京都加茂にありし寺なり。
 【閻伽井】閻伽(阿伽)の略にして水と譯す。然し今は特に佛に奉る水を云ふ。閻伽井はこの佛供水を汲む井戸なり。

高山寺のうち、石水院と申す所は、諸房の水かみなり。いはほ高くはげしくして、こまかなるいさごはすくなきを、きはめてきよきにあはせて、愚僧多年のあひだ隨分に顯密の法門につけて、此所にして自利利他の行をつめり。然ればこのところ荒荒しきいしを取りて、其ほとりに閻伽井をかまへてこれをすすぐ、したしふるひて礫石をさけ、細砂をとりてこれを用ひる。しかればわづらひ極めて多けれども、二人の同法同心に發願して此苦勞をいたす。此前のきよたき河に細砂充滿せり。これをすくひとらば少しのわづらひもあるべからず。しかれどもけがれたらんことをはばかりて、これを用ひず。しかればこの土砂を信ぜん人は、先づこのいさごの淨穢を簡擇すべし。淨信恭敬のかたちここにはじめてあらはる。眞言加持の悉地において、おほきに成就することを得べし。かやうのことを流布するに、また不法の相交ることをおそる。然ればこの問答殊に至要のことなり。問うていはく、「この眞言淨土のはては、ただ極樂世界にかぎりて餘方の淨土には業因とならずや。」答へていはく、「十經にこの眞言の持者の悉地成就するとき、七大善夢をうることを説くなかにいはく、「一切佛刹の門一時にひらけて持者の心にまかせて遊往す」といへり。又一切如來の祕密眞言なるがゆゑに、眞淨土果は極樂淨土にかぎらず、各各持者のところにまかせて、其本尊の淨土にも往生すべし。」問うていはく、「もし人ありて一人の爲に一聚の土砂を加持して其要事をなしをばりなば、ただその亡者をのみ利益して、後にはつねのいさごにやあらん。又この加持を受くる土砂は、能加持の眞言の功力の如く、つねにこの功能を具足したる砂

【譯釋】(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (一百)

にてあるべきか。善へていまく、一説大海におちぬれば、海水とともにかはく、佛法一たび衆生海に入りぬれば、必ず衆生海をつくすなり。天竺の所所に如来の遺跡とどまれり。劫壞のときにもつぎずして長く衆生の所歸なり。その中に、如来太子たりしとき、もろもろの釋尊とともに、あからをあらそひたまひしとき、じつめくろがねのつづみを、いとほして、その平地をうがちていりぬ。そのあとより水わき出るを、もろもろの病人これをくみて用ひるに、病いぬることを得。又石の上に如来の御足のあとあり、羅刹ありて石をこれに當ててうちくだきて其を食ふを人間へば、羅刹答へていはいく、「これやまひをいやさんがため」に厭して、くすりとするなりと答へけり。かやうのことはただひと信心ありて、如来の遺跡を信じて、かの源泉の水を用ひる、羅刹また信心ありて、從信にふるいしをもて、くすりにすれば、その信心にしたがひて、現實の勝利おなしからざれども、源泉はただ太子とましまししときのみからわざのあとなり。輪石はまた滅後の遺尊をあはれみて、これをとどめたまへり。必ずしも病人にも羅刹がくすりにもあてたまはず。しかれども信心の利益むなしからず。ただ現身に障礙のしるしを、うるのみにあらず、また滅罪生善證大菩提までの利益もあるなり。これらは如来を慕慕したてまつるとききの御形見には、定にめでたし。

石の上に輪石ひかりをうらね、土の中に箭跡いづみをたたふかのところののぞみて、まのあたり此遺跡をがむに、いかばかりあはれにかなしからん。しかれども如来ことばをは

【輪廻】六道の中を生れかはり死にかはりすること。

【木頭】犯戒の人に比す。佛の言説

きて、是れは衆生の滅罪生善のみづなり。離苦得樂のいしなりともおほせられず。しかれども、利益かくのごとし。いはんや此土砂は、なにとなきすなごなれども、十方一切刹土三世一切如来、みな同時に右の手をのべて、菩薩のいただきをなでて、この眞言をときて一切衆生にあたふ。又此土砂の方便をさして、衆生の罪業を消し、廣大の利益をさづけたまふ祕術とせり。しかればひとたび眞言の加持をうけば、一人にかぎらず、一時につきざらん。機縁にしたがひて利益つくることなからん。

蠅蚊蚊虻よもぎのしたにはらばひ、虎狼野干かばねのほとりにちかづく、ただくさきかほりにふけり、きたなきしむらをあらそふ。ついでにわづかにこの土砂にふるることあらば輪廻の苦惱をのぞき、菩提のたねをむすぶべし、あはれなるかなや、かなしきかなや、われ等邊地小國のなか、末代惡世のするにうまれて、罪業はまなこのまへにつもりやすく善根は心のそこにたくはへがたし、また佛世を去ること二千年、遺跡をへだつること數萬里なり。佛像にむかへども戀慕渴仰のまことなく、聖教をひらけども如説修行の思ひへだてり。つらつら身の不幸をおもふごとに諸佛菩薩の慈悲方便、龍天善神の加被護念も、みな過分のおもひをなし、悉くみみのほかにきくがごとし。まことに木頭のたとへ、畜生のなぞらへ、金言あやまらず、みな身の上にあつまれるなり。なにごとをなげきてなみだをながし、なにごとをよるこびてゑみをふくむらん。しかるにこの土砂の勝行にあへる、宿縁まことにたのみあり。青丘大師の勸誡のごとし。信ずる人は孝順の佛子なり。信せざ

るものは後悔およぼざらん。有心の人ふかくこの得失を察したまふべし。

昔漢上の智興律師大業十五年の十一月に鐘樓にのぼりてかねをうつ、一人の亡者あり。

夢のうちはその妻につげていはく、われ、いのちをはりて地獄にをつ、苦をうくることきはまりなし。今月の一日、禪定寺の智興律師のかねをうち給ふひびき、地獄のなかにふる

ふ、同業受苦のもの一時に解脱してすでに樂所にうまれぬ。その恩を報じたてまつらんと

おもふに、きぬ十疋をたてまつりて、ならびにわがころざしをのぶべしといふ。その夢

さめて人にかたれるに信するものなし。かされて又夢にみる。そののち旬日をへて、又そ

のしるしあり。則ち夢にみるに符合せり。いよいよ信仰して、きぬをたてまつる。律師き

ぬを得て、おまねく業僧にわかちあたふ。業僧おどろきて、其因縁を問ふに、答へていは

く、「さらに他術なし。我、付法藏傳ならびに『阿含經』に、ふかくかねの功德をとくを

みて、ふかく信心ををこす。寒天に樓にのぼるに、冬風みをきりぬれども、心をいたして

發願す。まづはもろもろの賢聖おなじく道場にいらたまふべし。つきにはもろもろの惡道

の衆生をして、俱時に苦をはなるることをえしめん。かくのごとく誠心に發願してかねを

うつに、此勝利を感ずるなり。」と答へたまひけり。

さらにし承久元年の十一月一日、此山寺の大願主督の三位、はじめて鐘道の住持等に、

供料をつけらるるとき、かたりていはく、「かねのころは惡趣にきこゆなり。我が子息の小將

に、是をとくきかせばや。」といはる。いまだ定日をもさだめざるに、すでに供料ををくら

【付法藏傳】付法藏因緣傳の略名、六卷。元龜の吉野夜等譯。道榮等二十四人の付法の因縁を説く。
【阿含經】(一)經三十一。小乘教の總名なり。此に四種あり。增一阿含、長阿含、中阿含、小阿含なり。もし五阿含とする時は長阿含、中阿含、僧育多阿含、鹿野多羅阿含、屈陞羅阿含なり。

るるときくとところに、しからば今日こんにちのうちにはじむべきよしを寺僧じそうにふれて、木堂ぼんどうの佛前ぶつぜんに衆僧しゆそうをあつめて、高辨たうべんみづから鐘堂しやうどうにいらてうちはじめんとす。侍者じやくしやきたりて、諸僧しよそうすでに堂前だうぜんに集會しふゐのよしをつぐるに、かねをならす用心よしんのやうをみんながために、律書りつしよをひらくところに、この興律師きやうりつしの鳴鐘めいしやうの利益りやくをしるせるに、大唐大業五年十一月朔一日たいたうたいぎやうごねんじふいちがつせついちにちとしるせるをみる。年來ねんざいは、この日記にちぎをおもはへたることなかりき。ときにのぞんで信心しんじんきもに銘めいじき。すなはち佛前ぶつぜんに詣ゆして願主ぐわんしゆのころざしを啓白きやくはくするに、ただいま此日記このにちぎをみる。和漢わかんさかひとほく、古今ここんときことなりといへども、感應かんおう符合ふあひせるよしを申まをすに、聽衆ちやうしゆみないろをあらためて、律書りつしよに鐘聲しやうしやうの離苦得樂りきとくたらくの因緣いんえんを釋しやくしていはく、『罪者ざいしやの善ぜんにあふを因いんとす。打者うちしやの發願はつがんを緣えんとするがゆゑに、聲こゑつたはり、苦滅くめつすることをえて、自然じわんに感應かんおうす。』といへり。まことに願主ぐわんしゆ貧苦びんくをはばからず、重心じゆんしんの供料くりやうをてらにつけらるれば、諸僧しよそう隨喜ずいぎの思おもをこらして佛前ぶつぜんに集會しふゐす。愚身ぐしん隨分ずいぶんに信しんをいたして、かねのうちに寶樓閣ぼうれうかく善提ぜんたい場ぢやう光明くわうめい眞言しんごん等の種種しゆんしゆんの眞言しんごんならびに、『華嚴經けわげんきやう』の文等もんどうを書寫しやうしやして、まことをいたして、是これをうちはじめむるに、おのづから智興ちきやう律師りつしの慈悲じひ利生りしやうの日にあへること、ときにのぞみて信仰しんぎやうほねにとほりき。此れ罪者ざいしや遇善ぐぜん爲因ゐん、打者うちしや發願はつがん爲緣えんの釋しやくの心こころ、青丘大師せいきうだいしの呪砂じゆさにあふを有緣うゑんとすと釋しやくしたまへると同ぜり。鳴鐘めいしやうの得益とくやくかくのごとし。呪砂じゆさの利益りやくも又またをなじかるべし。此このことをば記きするとき、後夜ごやのかねのおとをきく、則すなはち是これを發願はつがん廻向くわいぢやうのかねにもちゆべし。ねがはくは十方聖衆じつぱうしやうしゆ衆此道しゆぢだう場ぢやうにいりて、土砂どしやの功德くどくを證明しやうめいし、三途さんずの業生ごうじやう法利ほふりをえ

【感堂院】明惠上人の住持、建永元年（貞和元年）上皇より賜ふ所なり。

て、感堂の繫縛を解脱せん。

ときに安貞二年十一月九日の夜の寅の時、高山寺感堂院の草庵にして是を記す、其眞言ならびに土師の深義は、句義釋たらびに、土師義等のなかにとくがごとし。

光明眞言土師勸信記卷下 終

秘密安心略章

豊山正僧正 法住撰

此書一部十四章は其題號の示す如く、大略眞言宗の安心を叙述せり。即ち眞言の教義は甚深無相の境界を説示するものなるも此無相の有相なる離れざるの無相なる故（第二章の大慧の樓根の中劣相を以て其有相を以て其有相は無相に即する意の）第三章の大愚癡の凡夫は無相を信じ（第四章の大意）なば有相の行が即大日覺王の境地に到る（第五章）と安心決定すべきなり。されば彼顯教に所謂三劫十地の修行も斯く觀じ來れば本然功德を聞きたるものと（第六章）説き又それが實修實行旨とし（第七章）自

【一】古今一統章

有る人問うて云はく、他の淨家には安心決定を宗の大事とし、十六家の異説材にしげきかづらの如し、禪家にも南北兩宗、薨を並ぶ。法門の盛んなるにあらすや。然るに秘密宗には楞伽法佛の説とかやは有難けれど、唯手に印を結び口に眞言を誦するのみにして、安心決定の沙汰も聞えず、何の勝ることのありて神通乗と稱し玉ふや、いぶかしくこそ侍れ。答へて曰はく、顯密は人に在りと述べ玉ひて人機に隨へばこそ且く他宗とはいへ、法に何の隔てもなく、皆以て大聖世尊の流を汲めば、其流の盛なるは、其源の深き故ぞかし。されどその流の涇渭清濁、瀬瀬に分れて合ふことのなきぞうたてき。嗚呼奇なる哉。妙なる哉。我等襲承する秘密の安心は自性清淨法身如來の帝都に透る唯一すぢの大道にして天地聞けし昔より劫末の今に至る迄、異國本朝何の異議もなく、誰の疑ひを入るものなれば、佛祖の言葉に任せて神通乗と稱しぬるなり。誠に安心決定は宗の骨目なれば終日盛んに談じ通夜工夫することに侍れど、唯一すぢにして絲をみだし、何等の異なりはしも聞えざれば、何の沙汰もなしとや思ひぬらん。安心のまぢまぢなるは法門の盛なるに似た

秘密安心略章

利利他の萬行を是れ事とし(第八章)口つ加持感應を樂つて(第九章)尙捨劣財樂の向上心を持する(第十一)章)ならば日常世間の生業動大日圓滿の十尊を發揮し一第大願見を得ること又密教には一門即普門の深旨嚴有する事即ち諸尊を信ずる事一第十三章一を説き最後に是等諸問題の疑義を決す

【法住】法住は新

義眞言宗豊山の法持第三十二代に字第三智幢和四石上郡樺木中村の人なり。幼時文殊菩薩を信じて願樹連智となれりと云はる。十六才にして出家、學を成して後根來山に請ぜられ山務を執れど、大道の岐なり。古へ岐に哭しし人もありつとなん、何相してぞ知らるる。此中にして切瑛琢磨の功を馳すべきや否やは、安心の大事なれば多岐分れては此生證悟の大道一定しがたし。是故に當に知るべし。千波萬浪同一鹹味にして古今遠近の歸てもなし。一と。されば大日經にはまづ住心品を説いて、此安心決定を一經の大意とし、第七卷流通の頌には、一深無相の法は劣慧の堪へざる所、彼等を度せんが爲の故に兼て有相の説を存す」と説き玉へり。無相に即する狼存有相説に非ずや、疏家の隨釋、宗家の真略二論、殊に龍猛大士の菩提心論、皆是れ祕密曼荼羅の安心決定なり。列祖の論議を指して廣説とし、大れに對して是を略章と名く。必ずしも本寺末寺の八祖相承の大事を傳ふる阿闍梨達の爲にはあらねど、祖師の遺訓に未づきたれば少し補ひなきにしもあらじ。正しくは山奥野末の小寺門徒及び新發意、尾入道の爲に平假名に記して傳ふるものなり。猶了知しがたからん在家の信男信女には別に又略して授け傳ふるなり。されど疑霧尙はれやらすば同行どち語り合ひ、先祖禮の奉りの折ごとにひたすらに尋ねとひ、教ふるも教へらるるも必ず懈り玉ふべからず。但し淨家の安心は安住にして重ねれど、心は他の悲願を信する第六意識にして輕し、釋家は佛心印に安住すれば俱に輕きには非されど、參禪の落處我が法に應住普賢大菩薩心の法爾法然と相應し安住せしまさに安住するといづれぞ。かく濫あれば住心とは稱しぬらん、則ち安心決定のことなれば今は易きに隨ひ、祕密安心略章と名け侍るなり。

ること十三年、嘗て根山の前任常明の秘傳を傳へ切めて新古異議の疑雲を晴らし、管絃相承義を述作す。後寛政三年能化職に擢てられ法柄を執ること六年、豊山の義學は此時代を以て最も隆盛を極むと云はる。寛政十二年五月十日入寂。時に壽七十八。其著右の相承義二卷の外、大日經玉振鈔十卷、攝八轉義論五卷、金七十論私記二卷等あり、本書又師の述作する所なり。

【一】緒言、本書製作の理由を述べ且つ眞言の安心の他宗の安心勝ることを述ぶ。

【神通乘】眞言宗は神通力によつて目的地に到る如く速疾に成佛する教なる故に云ふ。

【疏家】善無畏三

【二】無相卽相章

世に「吾が道一以て之を貫く」と云へり。佛教にも愚癡の尼入道には唯一すぢに念佛せしめ、または五時八教は四十餘年末顯眞實にして、法華に至れば今は已満足なるの一佛乘の御法に歸して受持讀誦し、暇なき身には一部の總標たる題目を持せしむ。修行一途にして趣き易し。此密教には機に隨ひて有相無相と分れ、安立無量乘とかや、とりしめなくて煩はし、この疑ひ後世に甚だ利益多し。凡そ八萬の契經何れも病を救ふ妙藥ならずと云ふことなし。中に此教に宿習の縁なきものには、止むことを得ず應化佛を現す。卽ち釋迦牟尼如来なり。夫れ夫れ機に隨ひ一經一經を説き、誘ひ教ゆる法門なれば遂機の教と云ふ。教意一致にして聞え易きも宜なり。我が法佛自内證の法門は法爾法然のまま何の爲作遺作もなくて、本性を移さず動かさず、其まます妙薬の方便なれば、知り得んことはかたけれど、法爾のままを直ちに教ゆれば、勝劣の機に向ひ無相有相の教となり、機根萬差なれば自ら無量乘となるなり。無量乘乗分れ分れて限りなけれど、何れも皆佛天人の所作にもあらず。法佛自内證の此上もなき有りがたき法門なり。此有相の無量乘乗直ちに卽ち十界輪回し、無盡無盡横卽堅堅卽横にして言心俱絶し、十地等覺の大菩薩たりとも一向に知りがたく、絶て手のつかぬ處なれば第三重の極位無相と稱す。有相に卽する無相なれば相なしと云ふにはあらざるなり。此極位無相のまま、無相勝慧に被れば、則ち直ちに第二の重の甚深無相法と稱す。極頓機は一念にも卽到し、次頓は三大劫を一念の阿字に越え、

【宗家】 弘法大師のこと。

【八祖相承】 密教の相承は大日如來より弘法大師まで八祖を立つ。

【淨家】 淨土教の宗派。

【佛心印】 衆生が本具する一心を云ふ。これは本來大覺の靈なる故に佛心印と云ひこれを究明することを直指人心見性成佛と云ふ。

【應住普賢大菩提心】 菩提心。法爾應住普賢大菩提心と云ふ。

【一】 密言の教は甚深無相を説く、而も無相は有相を離れたるものに非ることを明す。

【五時八教】 天台の判教、佛一代の教は五時八教に分るもみな最後の方法同教に歸すべきものとす。

【安立無量乘】 機

機

機

機

機

唯微細妄執のみ十地に次斷す。また稍下れば三妄を地前に斷じて初地に即極す。是等は皆甚深無相の顯現なり、今時劣慧の衆生は絶えて知り得がたき處なれば、彼を總じて無相の法と稱し、上もなき有りがたき法なりけりと、ひらに仰き信すべし。其無相法門が我等如き尾入道の劣慧のものに被れば何の五劫の思惟もなくて、其まま夫れが直ちに初重となつて、末世相應の易行の法門とはなりぬるなり。易行有相なればとて、甚深無相法の外に別に設け施すには非ず。重重無盡積聚不二の法が、且く無相は裏と隠れ有相を表とし現するのみ、法爾自然の法なれば有相の機に隨ひながら、稱性の本師と仰ぐなり。機に隨ひこしらへ教ゆる蓮華の教とばしおもひ誤り玉ふべからず。大小の風にいざなはれ、千波萬浪さまさまにたちかへれど、甚深無相の大海水を離れて寄せくる磯邊はなしと譬をとりて「同一鹹味所謂如來解脫味」と演べたまふ、金口の直説なり。何れの浪を汲み得とも無相の大海水を本より離れぬものなりけりと、安心決定するのみなり。水波の相とまでは楞伽の説に似たれども、同一鹹味と宣べたまふを深く味ふべし。無相のままが直ちに有相なれば有相を行じて、無相勝慧の大菩薩と一筋の道を等しくつれ行く。此生證悟の一大事の因縁なり。

【一】 濟愧兼助章

しかし此有相を行する劣慧には別に善巧方便あり。無相勝慧の者こそ佛の本意を達へず法のまま行すべきを行すれ、劣慧なればかなひがたし。落着易き有相を行じ、無相勝慧と

根の萬差に隨ひ無量の種類の教を立つること、密教はこれなりとす。
【宿習】前世に於てその教を習ひ縁を作ること。

【法佛自内眷】法身大日如來が他の爲に説きしもの非ず自愛法樂として自己の證悟の境をそのまゝ説きたるものなること。

【五劫の思惟】阿彌陀佛が四十八願をたつる前五劫の間これを思惟せりと無量壽經に説くは漸愧心をもつて有相を修行すべく而もその有相は無相に即するものと知るべきことを明す。

【五百山句の寶處】法華經化城喻品に五百由旬の險難を越えて寶處あるを説く。

德を並べおくれはせじとかけ入らんには、かく淺ましき拙き身なりとも、深信の大刀を眞向にあて、慚愧の甲に身をかため、内外の魔障の矢先を凌ぎ、自ら顧み他を慮り、進をみては俱に勇み、怠る胸に一策あてて、逸足はやくはせたまへ。薩埵の釋經に萬善是よ増長すと云へり。慚愧の心に助けられ、有相劣慧を引きさてて、有相の行を行じながら、無相の大士とをとりなく、神通乘にうち乗りて五百山句の寶處に至ることこそ有がたけれ。若又無相頓大の機ならば、理智不二事故一體の無相行を行じて、本旨に任せて曼荼羅行を究めたまへ、など難きに倦みて有相の易きに就くべけん。たとひ八萬の法門いか程の難行苦行たりとも、法門無邊誓願學と誓ひたまひし願に違はず行したまへ。顯の六度萬行をも世の孝悌忠信をも、法身内證の所流所日なれば開會し取つて餘したまふな。劣慧は劣慧の分を知り、分に應じて有相を修し慚愧を加へて補ふべし。内に慚愧を懐きなば外に勝るる人を見ても慕ひ願ふ意ありて、神儒の人のそしりを恥ぢ、自暴自棄とはならざらまし。かく無相に即する有相の法門が無量の人に陥ひて無量の法門と分る。是を機根萬差針灸殊と云ふ。各各其病を治せずと云ふことなし。されど即せざれば其功能も離れ離れなり。假令黃昏人參なればとて食滯には用ひがたく、氣虛の人に敗毒散正氣散は何の用なきが如し。一一五劫に思惟せずば決定的中覺束なし。尙我が家には總じて一元氣を養ふ法身内證十界輪回不思議の神藥あり。無相に即する一子相傳の本法、同一鹹味所謂如來解脫味なり。廣くは大日經の如し。

【四】愚癡の凡夫は甚深無相の法を一心に信じ日當の信心生活をなすこととが無相をはなれずと信じて安心に住すべきことを明す。

【實多心】(二三三) 慮細心、即ち分別をなす心作用。

【干栗太】(二三三) 干栗太とも作る、眞實心、又は堅實心と譯す、如來藏心のこと、密教には直にこれを人の肉團心(心臓)とする。

【調柔數息】數息經等をなし心を平靜に測へること。

【掉擊】大頗羅地法の一、心を浮き揚らしむる精神作用を云ふ。

【蓮月阿字】月輪觀、阿字觀を云ふ。

【灌頂受職】灌頂を受けて祖師、阿闍梨たるの位をつぐこと。

【四】正住安心章

如來解脫味の一粒、丸は甘露醍醐のごとく、其名をきくすらめでたく覺え侍れど、其直

貴くして賤山が手が手には入りがたし、他の易きに就んにはしかじ、何を認めて他は易し

と云ふ。易からざればこそ十六の異計も分れたれ、以心傳心の類業も東西南北まぢまぢな

り。我が安心も教相の談にては、菩提心論には「法爾に應に普賢大菩提に住すべし」と云

ひ、無畏三藏は「自心に菩提を發し即身に萬行を修し因従り果に至るまで無所作を以て其

心に住す」と云へり。能住の實多心も普賢大菩提心、所住の干栗太も亦無所作の心、無始

以來無能所の能所なるを不二心と稱し、法爾法然に相應し、安住せし其ままに相應し安住

する、さもむづかしき安心決定なり。又或る上人の山奥ふかく人事をいとひ、調柔數息に

掉擧を離れ、唐猷卷舒に心を練る。蓮月阿字の祕密觀心は阿闍梨の坊の多くは得がたし。

況んや田舎の尼入道をや、今はかく小むづかしき方經沙汰をさし置きて、深山の奥の木こ

るをのこ、溝邊に墮没む賤妻も行じつべき、易行の安心を唯一口に示し侍るなり。猶家傳

を慕ひて更に問へ。宿世の縁のめでたくて遇へば即ち成佛する。この御業を不思議に得て、

あまの命の安心決定することぞ有がたけれど、一すぢに信じて常に忘れだにせずば足りぬ

べきことなり。中にも祖師古徳達の建て置きたまひし、山山の僧徒、通路よき都がたの寺

家、たとひ野末の荒法師たりとも、たまたま出家し如來の御使たる數にも入りぬる人は無

相に即する理を隨分に心がけて、遠くは灌頂受職嫡嫡相承の佛祖、近くは剃髮染衣の

【十二日、二十一日】興教大師と弘法大師の命日、興教大師は康治二年十二月十二日入寂し弘法大師は承和二年三月二十一日入定す。

師恩を深く顧み、はた檀家の男女にも我が道の有がたきさまを懇にさとし誘ひ、過去の亡魂をも無相に即する旨をもつて隨分に觀念し、其印爾たる師資相傳の秘訣を授け血脈をも與へて、即身成佛あやまたざらんやう、大切に引導したまふべし。一期の大事等閑ならざらんやう肝要なり。又在家の老若男女は、朝夕からきなりはひの、うき世渡りに暇なみ、等閑ならんこと理なれ。せめて祖師の報恩どもして、十二日二十一日には月ごとくに寺へ參り、佛祖を供養し、代代先祖の墓をも禮し、師の坊をも訪ひて同行どち語り合ひ、無相に即する安心にて、我等ごとき拙き身なれど、知識と共に即身成佛せんこそ有がたけれど、無二の信心を發すべし。此深信をまたは白淨信心とも云ひて、ひらに信ずる信なり。正しく淨菩提心の體にして、佛樹の芽を生ずる種子なれば、尙土かひて、もえ出でんやうに、師の坊よりも、五字の眞言、光明眞言、十甘露、寶篋印、尊勝陀羅尼など、分に應じて口づから授かり受け、佛祖の報恩をもし、先亡の有縁無縁にも廻向したまふべし。其唱へらるる有相口稱の眞言こそ、全く即する所の第一實際妙極の身は語に等しく、語は心に等しく、平等平等の法佛の三密なりけれど、念念に安心決定すべきなり。愚癡無智なれば即するさまは知れねども、法身白內證の不二心に本より即せるものなりけりと、ひらに信じて唱へたまへ。ひたすらに信する心絶えせずは知り得んことは遠くとも、無相の場をば離れざるなり。無始より以來貪瞋癡の病深く入り、無明の闇に迷ひ來て、得がたかりし事こそ淺ましけれど、常に慚愧の心を懷き、くさぐさ積りし罪咎を耘り、五日の風十日

【芥石の劫】芥子劫、盤石劫の略。量無の時間を云ふ。【珍伽】一致冥合すること。

【三力】我が功徳力、如来の加持力及び法界力を云ふ。

【四有爲】有爲の眞法の御相たる生住異滅を云ふ。

【五】眞言の教法は有相の行も直ちに大日法身の境地即ち果上の顯現なことを明す。

の雨、時を得て法相の芽葉花果の生ひ茂らんやうにしたまふべし。さすれば大れが直に無相の中に安住して、離れぬやうにするの決定なり。必ず無相に即するの有りなれば、有相さへ行すれば、かたき無相は得ずとも苦しからずと、自ら限るべからず。限る意が障りとなりて、芥石の劫にも覺束なからん。常に即して離るまじ離るまじと、願ひ願ひても得ざらんは、無明の咎なれと、願ふ意の絶えせずば、絶えせぬ念こそ功徳力なれ。行者の心水澄ぬれば、諸佛大悲の月影清く、水月互に法界輪廻し、三力冥に和合して無明自然に薄らぎつつ、即身成佛疑ひなし。目くら法師の善光寺詣で、物の阿色は見えねども、杖一本を頼みにて、藪のまうけも有やなし。武藏野の末遠きより、はるばるここにきそ路山、信する心あづさけ、ひきもはなたぬ四有爲相、うすら時の輪きも一心不亂の張り強く、絶間しなくばやうやうに、淺間のみねと悔みわび、造分かぬる二船の、道を導く善心と、ふりあふ袖も浅からぬ、霧をはらひてよしやあし、千千の草むらそれながら、ちくまの流おし流り、程なく向ふ御佛の、深き誓そたふとかりける。

【五】 果上三句章

安心のさま有りがたく委しく承りぬ。此上にいかが発心修行し侍らんや。示したまへ。たとひ少し安心したりとて、猶毛の風に隨ひて東西するが如し、などか決定といはん。安心決定して涙ながら、身の毛よだちなんほどの時こそ、則ち發菩提心とは云ふなれ。論には是を法爾應住普賢大菩提心とぞ云ふ。此大菩提心をけふもあすも念念に積み積むを修

【華勞】 煩悩の異名。

【五轉】 發心、修行、證菩提、入涅槃、方便究竟を云ふ。行者の修行の進解する状態を五つの階段に分ちしもの大日經疏秘藏記に用づ。尚これに中國(本覺門、本有の立場)と東國(始覺門)修生の立場との二義あり。【三句】 菩提心爲因大悲爲根方便爲究竟を云ふ。大日經住心品に説く。

菩提行と云ふなり。其修行究竟して明けがた近く、明相の現するごときを諸法明導等正覺顯現と説きたまふ。明相現するに隨ひ、長夜の闇もうち晴れて物の阿色もありと見え分るを除蓋障三昧と稱し、八萬四千の摩訶も八萬四千の寶聚門となる。既に日輪山の端に出でて一點のくもりげなく、心内固有の無盡莊嚴金剛寶藏顯現の時を満足一切法と説き下ふ。此五轉を合すれば因根究竟の三句の法門なり。三五を異なれど、普賢大菩提に相應し安住する安心決定の外に出ることなし。此三句五轉の法門は生死の流れを渡り彼岸に到る爲の船筏にて侍るや。法身自内證の法門はさはなきなり。自内證の説に縁なき衆生の爲には止むことなく報應化を現じ、其機に應じ説き王ふ逐機の教とて、佛大悲の餘り生死の疾き流れの渡りがたきを渡さん爲に、假に船筏をこしらへて渡し玉ふなり。渡り終れば船筏は捨てて彼岸に到り、有爲を離れて無爲に入る假の善巧方便なり。機縁いよいよ遠ければ大悲の光いよいよ遠し。他教なればとてかまへて謗法の罪をな招き玉ひそ。今此密不共自内證の法門は果上の法を其まま直ちに因地の行位の體として行じ侍るなれば、則ち夫れが無相に即するの有相の行なり。自内證の外に別にこしらへ與ふる法にはあらで法身法位のままを因位の三句五轉の行爲とし、果上の三無盡莊嚴藏を直ちに凡夫に行せしむる三密の行の行體とし、説のごとく行するを「直に眞言を以て乘となす」と云ひ、神通乘に喩へ「發意の頃に於て便ち所詣に至る」と云ふ。船筏と遲速同日には論じがたし。猶船筏は風はげしく浪あらきには、水も入り秤もくだけ、櫓もをれ、危きこと云はんばかりなし。

【六八】眞言に云ふ修行の位次たる三劫十地は果上師に於ける功徳を聞きしものにして、その行體は六大法界身、阿字門なることを明す。

【四方四佛】中央大日如來の四方に位する阿闍、寶生彌陀、不空成就の四佛を云ふ。
【四隅】中央大日の四隅に位する普賢、文殊、觀音、彌勒の四菩薩を云ふ。

是を智度には「或は至り或は至らず」と云へり。安心決定しても安心の振り異にして、決定往生は覺束なく侍る。されど其船筏も即すればまた神通乘なり。杯をうかべて生死の海を恐れずもなくうちわたり、飄蕩から出る験も十萬億土ただ一策、いづれにまれ神通乘は決定して、何の危ぶむべきことなし。知識と共に二心なく安心なし、片時も早くいそぎ玉へ。

【六八】行位行體章

四位の行位行體、明ら果上の法門を行すと云ふこと、いと上もなき獨歩の宗教と聞え侍る。中につき行位は三劫十地の事歟、果上の法なる理、委しく示し給へ。謂く、爾り。されど寶藏門には唯果上に即する因行なりと、大途を示すのみにて事足らん。廣すれば、若くは道くさに隙どりて、道はかどらざることもやなりなん。心を用ひて初心を導き玉ふべし。且く密の地前を顯の三劫に擬して三劫とし、地上を密不共にして自家佛乘の十地十六生に昇進修行する習級とす。此階級則ち果上なることは兩部曼荼羅、八葉の四方四佛は智德にして果上の横堅不二の因行證入なり。是を機人に寄すれば則ち修證顯得の次位となつて、何地の始めは發心、發心より第十地までは修行位、第十地の滿に證入ありて、則ち四佛の主どる所なり。四隅は定慧慈悲の三昧にして位位を補ふ定德なり。定慧究竟すれば中臺自性法身なり。字門の秘旨は更に問へ。更にまた地前次觀の行位を下りて、顯の三祇に擬して、密の修生の深淺を教るを三祇の行位と云ふなり。合しては一の勝解行住とも

【十六大生】十六
大菩薩のこと。

【七】眞言の行は
自己の功德力如來
の加持力、法界力
の三者の具はるべ
きことを明す。

云ふなり。則ち曼荼羅外三重の果上やつ此三祇の淺深差降と懸はるるなり。疏の第三卷、第六卷廣し。金剛頂經の十六大生も例して知れ。是を篤と思惟して我等凡夫が修行するも則ち曼荼羅上を行じて無相に即するの行なりと安心決定し玉ふべし。行位は略ぼ聞えぬ、行體如何。謂く、行體殊に肝要のことなり、法門の總體に體相用あり、即身義のごとし。六大法界は體大にして曼荼羅の本體理智不二金胎冥合の能造の六大法界身なり。相大に法三大羯の四曼分れたり。此體相を字門に約していはば阿字門なり。故に法身毘盧遮那の種子眞言として大日經一部七卷唯此字の義を説くとは、高祖大師の開題の御釋なり。此阿字の體相に不思議の妙用あるを用大と謂ふなり。凡そ開口の始めいまだ阿とも聞えざれど、喉中自然に阿のひびきあり。阿字第一命とし、既に身に動き口に發し意に並びたつを三業と云ひて、外に三の業分るれど、皆是れ開口の阿字の動搖なれば、至つてまた「身は語に等しく、語は心に等し」といふなり。第一實際妙極の境にして第六卷の疏には此眞言の體相は十地の菩薩も見聞することあたはずと演べたり。其第一實際に即する三業なれば我等が修する三業なりともなごか果上の外に出んや。即する理を知り得ん人は論なし。知らざらん愚癡の尼入道たりとも、即する理有りと聞いて、ひたすらに信じて安心し修行すれば、知れる人ひとしく、即身成佛せんことこそ有りがたけれ。慚愧もて補ひ修せんこと先のごとし。

【七】 自他必具章

【自調自度】 龍藤の二乗が持戒智慧によつて自己獨り身心を調へ三界を出離して、敢て他の力をからず又他の利益せぬことを云ふ。

【三力】 我功德力、如來加持力、法界力を云ふ、大日經悉地出現品に説く。
【一因計】 世界萬物をただ一因より生起せりとすの外道の見解。

果上の法門を凡身として直ちに行せんことは獨歩の宗教驚き入り侍りぬ。なれど何とやら自調自度とかやになりもやせんと覺束なし。拙き凡夫は一筋に五劫思惟の悲願に任せ、彌陀佛身の廣大の力を頼み奉らんは末世相應の御法なれば誠にたふとく覺え侍るなり。實にたふとき彌陀の悲願かな、誰人が御がさらんや。猶も無相に即すと安心せば無相無上の極樂淨土、蓮法界の彌陀如來、十方諸佛同俱に補佐し大悲願力彌まして光明遍くさすままに、四重五逆の高原陸地、必死已死の枯木にも蓮花化生の廣大利益と唯一筋に住し玉へ。はた日稱の御名のみならず、即すれば則ち法體稱可の如義眞實、唯如義眞實のみならず、身等於諸語等於心、平等平等の三密輪力も彌陀佛の大悲願力にて此妙極の三密輪を我等凡夫をして直に行せしめ玉ふことこそ有がたけれ。また唯他力のみとおもひしに、其悲願の廣大無邊を稱賛し玉ふも、また則ち行者をして其功德力を勇躍倍増せしめん爲ぞかし。誠に往生の因種子となるは、此行者の功德力なり。楓だねなくして大悲願力の雨露水土のみ富みたりとも、安養淨土の上もなき果を得べけんや。是理り有ることなし。況んや此三力一つもかけては佛法の大宗たる因縁和合成就がたくこそ侍れ。經には若は一日、若は二日乃至七日一心不亂と云へり、一心不亂に念佛するなど、行者の修行にあらずや。他の他力本願を勧め玉ふも、行者の信力を増長せしめん爲の方便にやあらん。唯だ他力のみならずれば一因計に墮するの恐れもなく三力和合し。唯自力のみならずれば何で自調自度になりもやせんと疑ふべき。尙我が宗には法界力を加へ説きて三力和合の妙不思議とす。

【心續生】淨心が相續し展轉昇すること。

【八】眞言の行は無相に即する行なる故にわづかの行も三摩地平等の行具して自利他を具することを明す

方量壽の軌及び兩部の大經等源底を盡せり、法身の通説なり、仰ぐべし。法界力とは阿字無量壽、六大法界互爲主伴、無礙常瑜伽の妙用なり、在家の信男信女は深くして了知しがたきもあらん、即する所の無相の理なりと、ひらに信じて仰ぎたまへ。此法界力に更にまた兩徳あり、鳥の兩翅車の兩輪のごとし、月輪は「法法位に住して相も無く、爲作も無し」の大虚空に即して自然に澄み登る、捨劣得勝心續生の金剛の智徳なれば行者の功德力を増長す。他に眞如の内薫と云ふが如し。蓮花は自性清淨の妙理にして、大悲胎藏に即すれば同體大悲是より發り、諸佛の加持力休む時なし、法界力もまた還つて二力に助けられて、法身の慧命を増長す、兩輪の助けあればこそ、車の總體力用まし、速きをもあへて厭はず、至るべきにも至ることを得ん。此三力を鼎の三足に喩ふ、即ち神前の御湯釜なり、一足かけても古釜なり、明日の供御をもしがたし、魔醜首羅の三日、伊字の三點の譬もあれど、日本の俗には遠し。老若男女の知り得易きは、物ほし棹の三枝なり。一本二本にては立ちがたし、二本結合すればいか程の重きにも堪へ、はげしき無明の風をも防ぎ、貪瞋癡の穢れを洗ひ、偏に唯自力、唯他力、自他共力の根深く入りししみをもうすらげ、法身毘盧の長目にさらす。三力和合不思議の棹なり。小鳥が崎に鹽波む袂、天の香具山にほすてふ衣、賤が軒端にかけ置きて、時に隨ひ事に觸れ、なす業ごととにぞかしこけれ。

【八】二利並修三章

三力和合不思議の法門は、經説といひ道理といひ、誠に超絶に聞ゆ、何人か仰がざらん

にはあれど、功候あり。大悲加持力は諸佛因行ましましし上の果後の化他たれば覺行圓滿候ひなし、行者の功德力は我等ことを指き身なれば、此眞言陀羅尼を誦持せん功德、たとひ少しの自他はありとも、諸大乗の自他兼ね違ふにはほど遠からん、阿闍梨の坊の壇を執り火など候こたす事も、童子由伏にさもにたり、何の六度萬行のいさをしかあらん、いぶかし、尋ねらるる意にては確自力とのみ云ふべし、など功德力とは説き難く、護摩灌頂の大事は論なし、一華一言の微少の供養にても、または一密二密の此些の行たりとも、無相に即する一華一言なり、果上を行する眞言陀羅尼なりと、一筋に安心決定すれば、其時を眞實の發菩提心といふなり。けふも安心し、あすも決定するを修菩提行と稱して、萬善實行此一華一言に星の如く判り、八萬の法門此一の眞言に雲の如く集り、自利利他兼ねずと云ふことなし。殊に北總密行を三摩地と稱す、平等の義にして、因果不二自他平等の行なり、因果不二なれば果上に即する因行なり、自他平等なれば自行即化他なり、是れ三摩地行と云ふなり。宗の意、阿字月輪のみならず、一密二密の行にても、護摩灌頂の法にても、三摩地平等の行と云ふなり。菩提心論に「勝義行顯三摩地を滅となし、乃し成佛に至るまで時として暫くも忘るることなし」と云へり、教門にては勝義は捨劣得勝心續生の上へ自利、また行願は攝化度生下轉利他の行にして、三摩地行の外に別に行するやうなれど、實證門はさはあらで、一密の三摩地行が上諸佛に向へば勝義自利の捨劣得勝と呼ばれ、下衆生に對すれば行願利他の大悲度生と稱せられて、二利を前後別別に行する

【九】眞言の行者は佛との加持に現身法不思議を得。又法界力の加持によつて一行の中に無邊の功德あることを明す。

には異なり、此三摩地の平等不二、などか劣るといはん。果上すでに平等の三密倫にして、是に即するの内行なれば、「行せずして行じ、到らずして到る」の神通乗の行に即すと、安心決定せんことのみ、肝要とし忘れ給ふな。即すればこそ一華一香十方に遍じて諸佛を供養すれ、即すればこそ此一密二密百億に分れて衆生を救済すれ、是を又一體速疾力三昧と云ふなり、況んや三密具修をや、況んや晝夜四時の精進修行をや。奇なる哉、妙なる哉、一念一生の行にして、現世に歡喜地を證得し、父母所生身速證大覺位の神通乗こそ上もなく有がたけれ。

【九】 加持感應章

三力妙に和合し自他普修すれば加持感應道交の不思議の妙境顯現すと承はりぬ。尙委しく示し給へ。私に辨するに及ばず、即身義の御釋明かなり、曰はく、「加持とは如來の大悲と衆生の信水とを表はす、佛日の影衆生の心水に現するを加といひ、行者の心水能く佛日を感じるを持と名く」と。一華一香の饒かなる行も法界力に即すればこそ、供養雲海ともなれ、一密二密たりとも其行體三密の行なればこそ、諸佛の三密に加持せられ、不日に不思議の加持感應をも速得すれ、唯加持顯現のみならず、究竟一切智地をもまた致しつべし。かく所得の果の若は速得者は究竟、父母所生の肉身のまま、一念一生に速疾に證得せんこと、本此三力の妙不思議の功力なり。新發意の道俗の爲には遠けれど、其理を略知つて、三力不思議を信じ、安心決定せん助けにもやとてなん。其名を法界力といふは眞如

法界の大海水に喻ふるに似たれど、彼は無明の風縁に隨ふのみにして、其體は無相無爲なれば、法界とはいふべくとも、何ぞ力と云ふことを得ん。法界力と稱しぬるこそ我が密の不共なれ、仰ぐべし。金剛頂部には智に就いて法界體性智といひ、宗家は理に約して最極大悲法界體といひ、興教大師は身に隨へて法界身とは六大法身と稱し給ふ。彼は此を礙へず、此は彼を礙へず、瑜伽相應し、無礙自在なる大海の一滴を汲み得、是に即する二力の廣大無邊なるを推し量るべし。諸佛の加持も法界力に即すればこそ、三世十方の諸佛を通融し、利益終盡なきなれ、假令彌陀佛の大悲深重なるも、即せざれば唯西方の一佛なり。即すれば三世十方の一切諸佛、同共に集聚して彌陀佛を補佐す。唯十方佛の證明するのみならず、同時に加持して常恆說法す、ひとり報應の利益のみたらんや、偏に執すれば十億土なり、即すれば遍法界身なり、彌陀佛を云ふが如く、佛佛同道何の偏頗か有らん。人入加持し法法加持して、利益無盡なる是を稱して加持力と云ふ。行者の功德力もまたしかり、即せざれば我等縛地の所行、などか功德と云はん、即すればこそ功德力とは稱すれ。假令光明眞言を持する人も法界力に即すと安心せざれば唯一遍の功德なり、即すと決定するが故に過去遠遠より唱へしも、未來恆恆の功德も同時に現じて無量無邊なり。唯我が唱ふるのみならず、一切衆生十方世界に唱ふる眞言、一時に來つて稱麻竹葦す。唯光明眞言のみならず、餘の眞言は言ふに及ばず、法華、華嚴、八萬聖教、題目でも念佛でも集聚せずと云ふことなし。即して隔てなき故に我が一念に集聚することく、我もまた一切時

【稱麻竹葦】すきまなく立ち並べる形容。

【二〇】世間日常の生業は無相に即する行なる故そのまま眞言の行にして功德無量なることを明す。

一切處に遍じて、補助せずといふことなし。因果不二自他平等なり、無相に即する安心を決定せんこそ肝要なれ。念佛無間禪天魔を隔つる心に礙られて、肩臂はりて鼻高く、愛宕の峰に雲を凌ぎ、於佛一乘の妙なる床で未顯眞實の毒にあたり、無間の底に宛轉于地す、即すと知つて隔てなければ、八雲の池の汀幾もと蓮の清らかに劍の山も春めきわたり、迦陵頻迦のここかしこ、ほころびうたふ御法の聲、隔つると即すると手のうらをかへすがごとし、必ずおもひ違へ給ふな。

【二〇】世間即道章

三力和合二利並修加持感應の御法、祕密安心の功德覺えて感じ入り侍る、されど愚癡の凡心泥土のごとく、信水濁りて澄みがたし。出家沙門は且くさし置く、同じ形に同じ衣、尼入道の身、又たとひ在家たりとも、子に世を譲り柴の戸たてて何の業もなき身ならば、密二密の分に應じ、作禮誦經もなしつべし、多くは公に宮づかへ、或は老たる親を養ひ、星見えて出で星見えて入り、からき世渡る其中に、妻子眷屬のきづなに絆がれ、一華一香の行も何の安心決定も出来ぬぞほいなき。今語り申さるるは皆以て人たるものの勤むべき道なり、随分に怠り給ふべからず、中にも公に仕ふるには身をうち忘れ、まさかの時の心がけこそ肝要なれ。古より忠死の者多かれど、佐藤嗣信がさまこそいとど涙を催さるれ、又父母は其病を患ひ給へば在まさん時は遠く遊ばず、在まさんとも身體髮膚ことごとく其遺體なれば、曾子の教深く身に入れ思ふべし。かく忠孝趣き反するに似たれども皆天然よ

り出て一貫なり、其本を二にせんや。内外の教異なりといへども、無相に即すと安心せば、忠は天忠となりて周遍法界六太無礙し、孝も大孝となりて無盡莊嚴金剛寶藏となり、立つる朝の誓そくとも大富貴の人と敬はるべし。殊に女は柔徳なれば三従の道を守り、嫁しては舅姑にかしづき、従も道理ある中なれば義を本として仕ふべし。天の性とかやは知らねども、天然のままなしつべきに隨ひて忘れはせじ、離るまじとさへせば、人の道には背かざらまし。人と生れて人の道に背かば人畜心とかや、はた士農工商其道を朝な夕な怠りなく、先祖より受け續ぎし業を成ましに榮え成んこそ、人道の第一なれ。則ち夫れを取もなほさず無相に即する行なりとし行ひ給ひなば安心決定足りぬべし。人道則ち最貴の行にして山深無相の人と同じく伴ふ勇進の者とも稱しつべし。治生産業それぞれに糸うみなならぬ無相ながら即すれば皆無量無海、苗とり植るは身業手印、田歌の律は口業眞言、秋の稻穂の穂を期して、怠りなき心密輪の田植三昧、第一實際妙極の境に即せん人こそ奇特なれ。必ずしも第一實際無相の妙極はかくこそあれ、安住せんさまはかくこそあれと、明得たるにはあらずとも、無相に即すと安心して常に無相の海水に洗み入り、めかり落着ふ無の身も、いづれにもまれ安立無量米のうち寄する波に浮ばすと云ふことなし、まして一草一木の供養をや、泥んや瓦目念佛をや、即すとさへ安心せば秘密の題目念佛なり。

【二】 捨劣得勝章

【二】 いづれの行も即身成佛の道とは云へ劣機は勝れたる眞言の行によるべきことを明す

【四度加行】眞言宗の僧が必ず修すべき四度法の修行。四度法は十八道、金剛界、胎藏界、護摩の四なり。この修行の次第は流派により相違あり。

尙いぶかし、濱邊の網引、山家の狩人、かくうたてのなりはひも世の仕ならはせなれば、是でも即身成佛の直路とやいはん。自然法爾の法なれば、頓入無相の機には十界輪圓表徳實相なり、狩漁とても何の苦しきこともなくこそ侍れ、されど劫末濁世には甚深無相の機は鱗角よりも尙とぼしく、多くは有相劣慧にして刀病飢饉も堪へがたし、況んや地獄の極苦をや、偏に光明眞言彌陀の大呪を、無相に即してかすかず誦じ慚愧し懺悔せんにはしかじ。尙世の中のさまをおもふべし、鯛鱈鱈の呼び聲より、奈良晒鳥さらしなりはひは、無相に即せんに即しやすく、曲りし木をばまがらぬやうに、曲尺に意を正さんより、山田の畝をそれながら種まきちがふ銀しごと、すきのままなる明け暮し、安心決定起り易し。二乗より尙三乗一乗轉深轉妙皆是れ因なり、夫れに擬儀する一密二密、本より無相に即すれば易きが中の易きなり。光明眞言稱かりながら、あびらんけん麥まきながら、つま子の膚をふさがんにも、さのみ障りにはならざらまし。懇にこふ信男信女、易きに馴れて深信ゆるみ、安心怠り給ふべからず、ひつち稻のみ、をさ念佛、箕風に簸やる粉糖陀羅尼、だらだらばらばらまきたりとも、妙なる芽はおひはせじ。偶偶佛の御子とある糖陀羅尼、だらだらばらばらまきたりとも、妙なる芽はおひはせじ。偶偶佛の御子とある出家は別して頼むべし、新發意の初より眞實に菩提を求め人の規ともなり給へ。第一四度の加行護摩灌頂、慇懃丁寧ならざりしを見るに、後にいろいろ障り有つて、出世多くは遂げがたし。經論とやら學問とやら道草がちの出離三界、人間ばかりの大香象は、兎馬の族も笑はれん。總じて腹の痛むには金丹圓でも萬金丹でも、直服丸藥教に任せ、夫で事

の足ることを、小しやくな筆が先へ出で、まづ方書をと、包紙燈火消ゆれば火うちからち油がないは、燈心よと、飛び飛び讀んでも心はあとさき、隙ごろうちに痛はまし、方書遺つて身を終る、他の耻よりも書耻まさる、耻を耻とし耻給へ。

【二二】 萬機皆成章

【二二】 萬人が如何なる教によるも無相に即してなす故結局は眞言甚深の法にかなふことを明す。

上界輪回安立無量乘の御法、誠に殊勝に聞ゆれど餘り廣博にして取りしめもなく、何を本尊として信をも流し専一無雜に進趣すべけん。我等は凡夫愚癡の衆生なれば唯一すぢに後世の大事取違へざらんやう安心決定し給へ。簡要の尋にして利益少からず、凡そ内典の去常一機に臨ひ一經を説き、萬機に應じて八萬の聖教あり、何れも病を治する妙藥ならずといふことなし、夢喰ふ虫もすきすきの機を違へぬが教なり。今肝要とする所も其千波萬浪さまさまなるは相似たれど、其さまさまを其ままに同一鹹味の無相に即する安心をのみひたすらに勤め侍るなり。假令ば突に獨の信女ありて、一向專念に歸陀佛を信じ、若くは一日若くは二日乃至七日一心不亂、無雜に即して修行せんを、誰もいなとて隔てはせじ、十萬億土の衆生即すれば直ちに遍法界輪回の曼荼羅行、此上もなき往生ならん。はた至誠の信男子、無二亦無三に法華を仰ぎ明けても暮れても題目三昧、無相にして唱ふる聲は夫れ

がそのまま妙法蓮華の最深秘處、大悲胎藏生曼荼羅王、百界千如の無盡無盡、誰がささへて念何眞言取り替へ引き替へ華嚴も般若も聲はり擧げて轉讀し、五穀成就は尙更に子孫繁昌も禱るべしとはいはせじ、況んや一密二密の行者をや。虚空藏でも地藏でも宿植善本の

【三】 一門即普門なる故、一心に一等を信すること、他の諸尊を拜することとなることを明す。

縁にまかせ、法爾に住する心のまま、日まぜもなごで無相に即し一心不亂に安心し、けふもそのまま、あすも違はず、やがて久しく月を重ね年を積み行じなば終に必ずつきにけりの、信する處の同於本尊、唯一尊とおもひしは則ち夫れが普門法身、即する所の甚深無相、唯唯安心決定を返す返すも忘れ給ふな。

【三】 一心正助章

一佛一尊無二無三、無相に即する安心決定、やうやう意に落ち着きて有りがたく承はりぬ、されど尙疑ひあり。むかし母に誘はれて、初瀬寺へ詣でしに、母我に手を組ませ、行末何の障もなく生立つやうに護らせ給へと、涙ながらに南無觀世音菩薩と唱へし聲の小耳にとまり、子意ながら有りがたしとおもひし後は、觀音を母ともしたひ侍りぬ、しかるに彌陀は觀音の本地とて常に御首に戴き給へば、等閑ならぬ佛ならん。釋迦牟尼如來は一代表教主、釋迦出で給ひたればこそ、觀音の利益も知らるれ、文殊は三世覺母と聞けば、母の由縁と捨てがたく、地藏は六道能化にして後世の闇路の道しるべ、彼方此方と意の岐、迷をさけて唯一筋に示し玉へ、母の教の觀世音、宿植善本の本尊なれば、無相に即する觀音と、唯一尊に擬して念じ給へ。一筋の大道なれば岐に迷ひ入りはせじ、即せねばこそ觀音の外に地藏もあり、彌陀も釋迦もおはしませ、無相に即する觀音なる時は、三十三身無量身雲、況んや一門即普門、本地自性妙法身、十方三世の諸佛菩薩、八部人天俱に集聚し、觀音の攝化を補佐し給へば、何の隔てか有らん。無相に即する觀音と仰ぎ信する信

水で、六道流化の思をもおくり、母の肉縁の覺母にささげ、彌陀をも、釋迦をも、恭敬供養し、
 殘る處もあらじかし。一向專念一心不亂、一信一尊を信じなば、難善難行と誤りそしる者
 もあらじ。即する無相が重重無盡互爲主伴、たがひに補ひ付け給ふ曼荼羅王、正助も分れ
 て救世度人、因縁和合の大宗をも願成し、祕密安心決定し、成佛を期して怠り給ふな
 川鶴啼きたる和歌の浦浪、千鳥も通ふ淺路島波、幾夜ねさめの須磨の波、岸うつ音は住
 吉の波、山良の舟人末しら浪、熊野の奥にかかる荒波、名に負ふ聖門の満まく波、八十嶋
 嶋の大波小波、さまざまなれど大海の水に即せし同一鹹味、所謂如來鹹味の法身自内證
 の無相安心決定し、神通變にうち乘りて、五百由旬の始めより、豊けき寶渚の春の詠め、
 盡きの海をえんことを、頼もしくも、まためでたけれ。

【二四】種種の疑問に答ふ

【一】さらば今時云々
 今觀く所は本宗の極底に非ずして兼有相説なり。

【二】しからば云々
 阿字義、月輪義。

【二四】展轉遺疑草

同一鹹味所謂如來解脫味は法身の眞説、有りがたく承はり侍りぬ、則ち阿字本不生に
 して此宗の極底の處にて侍るや。しかり是に何の疑ありや。さらば今時我等に示し給ふ
 が、直ちに甚深無相の行にて侍るや。禪宗にこそ信心印を傳へて直ちに無相に安住し、何
 の階梯もなくして、言つき思絶ゆるにいたれ。我が宗にては甚深無相法は勝慧の所行にし
 て、今日劫末劣慧の業生には兼有相説とて、其甚深無相に即して兼有相の行を説き
 給ふなり。されば愚癡の我等ごときも行ぜらるる易行の行を行ぜしめ給ふなり、しかし無
 相に即するなれば、さながら偏に有相行にも非ず侍るなり。しからばたふとき阿闍梨の山

【息増の祈り】息
災、増益等四種五
種の祈禱。

奥深く引きこもりて阿字月輪の觀行を專一に行じ給ふを無相行と稱するや。夫れも禪宗
 などとは緯異なり。阿字月輪の形を鼻端に觀ずるは有相の行にして、行にも階底ありて行
 じやすき觀行にて侍るなり。されど有相の阿字月輪を無相に即して觀せんは、無相に即
 する中の第一殊勝の行者にて侍るなり。他の人天三乘の六度萬行をも開會し取りて無相に
 即して安心せんも、また今教へ示す所に侍れど即せん中には稍うとし、たとひ一密二密た
 りとも、本より即する行なれば即せんに即しやすく、即する行成じやすし。三密具修は
 また即しやすく、花水供養護摩修行はまたまた易く一門よりは普門、受明よりは傳法灌
 頂、初重よりは二重、二重よりは三重が易きが中の易きなり。阿字月輪の觀行も開合理
 智の異なれば、是とひとしく即せん中に即し易き第一にて侍る。されば出家沙門の毘盧法
 身灌頂の大事を傳へし人は、一時の讀經、一座の供養を行ぜんにも、此大事を必定して
 忘るまじきことに侍る。又又隱遁の人のみならず。たとひ寺持の世務を兼ね、息増の祈り
 多く、減罪の檀用繁き身なりとも、阿字月輪の即せん中の第一なれば必ず懈るまじきこと
 なり。平常阿字觀は行任座臥何れの時も行せらるる易行の行なり、行ぜざらんは怠るるに
 もやならん。或は出入の息に隨ひてひそかに阿字を誦せんは開山大師の傳なり。阿月の形
 を觀じてよし。今在家の信男信女の事しげき人の爲に無相に即する安心決定を肝要とし
 教示すことは、正しく阿字月輪の觀としも云ふにあらねども、けふもあすも念念に無相の
 場を離れざらんやうにさへなさしめなば、平常阿字觀になりもやせんと、經論兩祖の跡

【平等阿字觀云云】
眞言の法を限り
に授けざる理。

【たとひ無相云云】
眞言安心の補助
の法。

【四念處】
心受身
法の不淨、苦、無常
無我なることを觀
する觀法。

を踏みて安心決定を許要とし教へ侍らなり。たとひ在家たりとも、有信心にして至誠に修行せん人ならば護身法を授與し、又自行清淨の無相に即して功德力を増長し、三部の諸尊の大悲加持護念を被り、自利利他何のかけもなく、一心不亂に知行進修せん人には、無相に即する第一の平等阿字觀を別に授けて行せしめんもまた宜しきなり。

平等阿字觀無相に即する第一なること有りがたく侍ら、さらば在家の我等にも、何ぞ其平等阿字の觀心を示し給はざるや。今家事相の大事は限りに教へざるなり、常さまの人は法身自内證の法門ともおもはで、手を曲げ、舌を引じ、鐵杵のやうに押しめて、他家の人にも語り、眞儒の輩ともあざけり笑ひ、講法の大眾を招き、さらでも易きに駢れて怠りうみ、放逸無想の人となりません。下野の耶を小兒に與へざる、深くおもふべし、故に今正しく大日親の大意を明し給へる文に依り、大海の波濤を汲みて無相に即する安心を教へ、阿闍梨の觀を行ずる人と同く道邊にせんとして侍らなり、觀を見て示さんこと肝要なり、慎むに非ざるなり。

たとひ無相に即する安心を教へ示し給ふこと、散亂憍意放逸慢著の者少なからず、外に助けとし給ふことありや、示し給へ、憍慢心深く自他を顧ること多からば、萬善是より増長して事足りぬべし、されど自無始中身の爲に障へられて進行しがたからんには、更に四念處の苦不淨は散亂の病を除き三界の牢獄を重れ易く、空無我の行相は逸慢の患ひを避け、無相に即しやすし、必ず小乘の法とばし輕しめ給ふな。天台大師の四念處觀おもふ

【干將莫耶云云】
死者の引導に眞言
の大事を授くる理

【亡魂の云云】眞
言の祈禱讀經の心
得。

べし、況んや愚癡謗法の小兒など、容易に干將莫耶を持たしむべけんや。

干將莫耶の戒さもありぬべし、さらば何とて新戒の引導に灌頂の大事とやらまで授け給ふやうには承はるらん、過當の至りなるにはあらずや、いぶかし。既に世を去りゆきし人には、あざけり笑はん謗法の恐れ無ければ大事を授けんに何の苦しきことかあらん。たとへ一華一香の善をもなさで空しくなりけん人たりとも、宿善の因縁あればこそ闍梨を迎へ侍るなれ、猶も未來の善縁に、灑水をそそぎ五股を興へ、灌頂に擬し初重の印璽を授け、祖の血脈をも傳へやりなば、閻王の廳のいひわけの端にもやなりなん、光明眞言等の秘呪を誦じ土砂など散じて怒りに廻向すべし。まして現世に一密二密の行を積み、無相に即して信を凝らし、金剛の種子を法性の心田に下して功德力の有りなん人には、如來の御使宗祖の手代りとして、引導し加持せば三力冥に和合して、菩提樹王の莖葉華果盛んならずと云ふことあらじ、出家者たりとも大途初重なり、至つて信心の亡靈ならでは極秘には及ばず、用不は導師の心得あるべし、三三平等の觀、無相に即する引導、無上の肝要なり、いと懇ろに正路に導き給ふべし、亡後の滅罪も准すべし。

亡魂の引導はさもありぬべし、現在施主の願にて四種五種の祈りを修行せんこと、如何心得得べけんや。存亡人ごとに息増法別なれど、心佛衆生是三無差別なれば、何れも行者と佛と衆生と、若しは施主、若しは亡靈等の各各の三密平等の觀と稱す、秘藏記のごとし、八祖相承の大事にて一切の法に通じ肝要と習ふことなり、されば祖師達の座を立たずして

萬里の外に大軍を遣け一滴の水を瀆きて天下の早魃を除きしごときも、此觀に徹し無相に即す。理に注し給ひし故ぞかし。劫濁亂時の凡僧たりとも、隨分に其中に決定せば、など其驗無しとせん。一座の護摩を修せんも、本尊と爐と行者との三平等を現するをもて内護摩と稱す、分に隨ひて其利益もありぬべし、しからずは外道の火祠なり、恐るべし。總じて朝夕の齋經一座の供養も天下泰平五穀豐茂、師父の報恩、先亡の追福も此三平等の無相に即す。要領のなかりせば、如義實成の有相の末に流れて、道家の偽術に沈み法身の印璽も空甲の地に落ちて戯場の掉動にひとしからん。請ふ我が門葉の徒衆、懇ろに相即無相の秘密安心を決定し、無量乘乘の涙痕を其まま、不二一心の泉源に融じ、甘露醍醐の妙味を汲み得て兩祖の流れを萬世の末までも長く久しからしむべしと云。

享和二年壬戌 秋七月

根嶺八十老人艸

一派 有信道俗衆

秘密安心略章 終

本書は密宗安心の

の大事を示せるものにして、著者釋良基は高野山金剛峯寺第三百七十六世檢校。姓は藤原氏、享和三年に生

ず。勤王の事跡少からず。明治八年六月大教院の院務を管

長となる。同十年十一月十六日寂。年七十五。師は國

典に通じ、和歌を好む。其著又多し。

【前佛】釋迦如來を指す。

【後佛】彌勒菩薩を指す。上生經によればこの菩薩は五十六億七千萬歳を経て下生し一切衆生を濟度すと云ふ。

【津梁】津はワタリ、梁はハシなり故に凡夫が生死海を捨てて佛果の彼岸に到る濟度のこ

密宗安心鈔

大教正 釋良基 述

初めに略して因由を叙ぶ。

夫れ前佛既に滅し、後佛未だ下生せず。一佛の中間に當り、跡を吾が日東に垂れ、津梁を虚空に誓ひ、能事を五十六億七千萬歳、龍華の春に期し給ふは、其れ唯吾が宗祖大師遍照金剛か。

其發心の初、恆に數じて曰はく、「堤葉凋落して久し。龍葩何れの春をか期せん。吾が生

の愚なる、誰に頼つてか源に還らん。」と。乃ち佛前に於て祈誓して曰はく、「吾佛法に於て、常に深要を求む。三乘、五乘、十二部經、心神に疑ひあつて、未だ以て決せりとなさず、唯願くば三世十方の諸佛我に不二法門を示したまへ。」と。誠精早く佛心に通じて、乃ち經王を大和國久米の塔柱に感得せり。

一部絨を解くに豪情、滯りあつて、彈問するに處なし。遂に天命を承りて入唐し、京城青龍寺大德惠果阿闍梨に従ひて、南天の鐵塔所傳の金剛、胎藏兩部の秘藏を授かりて、以て歸朝したまへり。扶桑、是に於て始めて眞言祕密の道、曼荼灌頂の風あり。灌頂祕密とは、凡身即佛の法なり。不二法門と云ふは、其れ斯れ、之を指すか。

とに喩ふ。
【虚空に三十八】高

野山萬般會の顯文
に一處空書き象生
書き、學業書きな
ば我が願も考きな
ん。の大師の誓願
の文を取りし。此
の顯文は又華嚴
經第三十四卷の文
による。

【提葉云云】この
四句は六師御作
の詩集、性靈集一
の序の文なり。提
葉とは菩提樹の葉
御ち釋尊に喩ふ。
【提葉】龍華樹の
花也。御ち菩提樹
に喩ふ。

【三乘五乘等云云】
これは阿耨多羅三
三菩提の弘法大師
二十三歳の時の新
誓と云ふ。
【十二部經】龍多
羅(契經)。或(重
頌)。和伽那(法記)
伽陀(孤包)。優陀那
(自說)。尼陀那(因
緣)。阿波陀那(譬
喩)。伊帝目多伽(本
事)。闍陀伽(本生)

蓋し凡身即佛の法たるや、良に時を待ち機を擇ぶ。王將の誠嚴なるを以て、苟くも三昧耶を慎しむに非ざれば、則ち片言隻辭、輒く之を談ずることを得ず。

然りと雖も、若し黙して寤も漏さざれば、何に由りてか有縁を誘かん。故に以て且らく結縁の爲に普通淺略の方法に就て一二を指示せん。若し要問の者は灌頂の法に入れ。

授與方
法而授

一に正しく本旨を明すに二に分つ。初めに本有に約して明すに二。初めに總じて顯に對して辯ず。

前來の顯教の如きは階位を生佛の間に設けて、信解、行、證の深淺の差を降し、三大僧紙、并石影鳥たり。具行たるや萬法を空し、妄念を拂ひ除きて、菩提を得と云ふ。得る所の菩提は云何なる者ぞと云へば、青黃赤白の色に非ず、方圓三角の形に非ず。詞も盡き、心も絶えて、無相空寂、知知と知知智とのみ獨尊の位と云へり。

今眞言密宗の意は地位の漸階を削り、等妙の顯旨を聞くとて、初め阿闍梨の誠示を蒙りて、發心し菩提を得るに、妄念妄境を捨てて、無色無形の處を期するに非ず。現前父母所生の肉心の色身が即ち阿字本不生なり。即ち六大法身、金剛胎藏兩部の大日如來なりと知るを菩提を得と云ふなり。

二に別して密に就て辯ずるに二。初めに色心に約して本有を明す。所謂、凡夫の色心の中に、色とは、我等が五大の依身にして、地水火風空の五輪なり。

毘佛略(方廣)阿浮
達摩(未會有)優波
提舍(論義)なり。

【天命】 延曆二十
三年五月十三日、
天皇の命により入
唐求法せしこと。

【京城】 支那長安
の都。

【惠果阿闍梨】 眞
言傳持の第七祖、
即ち弘法大師に密
教を授けし師なり。

【南天の鐵塔】 眞
言密教の兩部大經
はもと龍猛菩薩が
南天竺の鐵塔中よ
り感得せし所と云
ふ。

【曼荼灌頂】 曼荼
羅の祕密境に入り
て密教の大法を受
くる儀式。

【不二法門】 密教
のこと。

【干將】 吳の人名
なり。吳越春秋に干
將と其妻の英邪
と劍を作りし事見
ゆ。即ち此れは越三
昧耶の罪を愼しむ

法性の五輪は上佛界より下捺落迦界、乃至、非情數の山河草木まで皆此五大を離れず。心とは識大とて、前五大の中に徧在せり。いはゆる五輪即ち見れ五智輪の故に、即ち五智なり。此五智を合して一識大とす。識は因位に約すと云ふ邊にては、等覺以降、三界六道乃至空中地中、飛走蠢動まで、念念現起する寸慮をも攝して漏さず。智は果位に名くる義にては五智、三十七智、一百八智、乃至、十佛刹微塵數の圓明の智體なり。

夫れ凡夫の色心は羶穢微劣に似たれども、法身如來聖見の前には、佛天の作にも非ず、神明の造にも非ず。因果を遠離し、法性自爾として十界に通涉し、瑜伽無礙自在にして、金剛胎藏兩部曼荼羅なりと照して、常恆に加持護念したまふ。

『大日經』には「云何が菩提とならば、謂く、實の如く自心を知るなり」と説きたまひ、『疏主三藏』は「即ち是れ如來の功德寶所を開示するなり」と釋し、大師は之を「理具の即身成佛」と科したまへり。

二に依主に約して不生を明す。
正報の色心既に是の如くなれば、所依の娑婆界即ち密嚴華藏界にて、我等が蓬生の草庵のまき、木覺莊嚴の玉殿ならざるは無し。

『法華經』の中に「如來の如實智見は三界の如くに三界を見たまはず」と説きたまへり。以て聖見の凡見に同じからざるを信知すべし。
二に修生に約して明すに二。初めに問。

の譬とす、
【前來の顯教】眞言宗以前の七宗を指す。

【階位】俱舍法相には五位を立て成實には二十七賢聖を立て、天台には六即位を華嚴には六位を立てて衆生が佛に到る階級を示す。

【心を絶え】心行處。

【無相空寂】言斷心識の境を指す。

【如如と如如智云】經論の文なり。如如は眞如、

如如智は一心にして、一心眞如を證するを顯教の極果とす。故に獨尊の位と云ふ。

【地位の漸階】華嚴探玄記に「十住十行十迴向十地を滿して後、方より著に至り、階位漸次なり」とあるを云ふ。

【等妙】頓に等覺

問ふ、理具本有に約せば、凡身即ち佛、穢土即ち密嚴華藏界の義、誠に宜しく然るべし。然れども、此は是れ所信所知の境なり。かく信知するのみにて事足れりや。將た之に契證する方法有りや。

二に答ふに、一、初めに所修の行を明すに二、初めに法身の三密に即して、能同の行を明す。

答ふ、其法あればこそ、即身に成覺をも遂ぐるを得れ。豈、空手にして龍を捕ふべき者ならんや。宗祖大師、命を萬里の滄溟に殉へて求請したまひしこと、豈他有らんや。青龍和尙言はく、「同地の得難きに非ず、此法に遇ふことの、易からざるなり」と。金剛頂五密經に、「三密の全備を増上縁となし、能く毘盧遺教三身の果位を證す」と説きたまへり。

夫れ法身の三密は、高廣無際にして三種世間を管攝し、甚深微細にして等覺十地も測量すること能はず。而も凡夫の身手以て能く之を結ぶべく、凡夫の口舌以て能く之を唱ふべく、凡夫の心識以て能く之を觀するに堪へたり。

彼の顯教の愧乎怍乎たる無相空寂の理觀に比すれば、却つて甚だ易修易行にして、凡夫有漏の三業をしてさながら法身無漏の三密に冥會せしむるの方便、復此に越ゆる者あることなし。法身の三密、凡夫の三業門に加被し、凡夫の三業、法身の上に通融し、水月感應し、上下道交す。是れ「大日經」には「大悲を根となす」と説きたまひ、「疏主」は

妙覺の佛果を證すること。

【阿闍梨云云】密教に入るには先づ阿闍梨(禪密眞言の傳持者、即ち師匠)に従つて曼荼羅壇に入り、灌頂の法を授かるを指す。

【五輪】方、圓、三角、半月、團形の五輪なり。

【法性】法は軌持軌則の義、性は法然不壞の義なり。

その色相宛然法備の道理にして如来の所作にも非ず、人天の作にもあらざるを云ふ。

【上佛界より云云】十界を指す。十界とは地獄、捺落迦界、餓鬼、畜生、餓羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩佛なり。

【五智を合して一識大とす】法に約すれば地水火風空の五輪、人に約すれば法界體性智、平等性智、妙觀茶

「能く三業をして本尊に同ぜしむ」と釋したまふの分齊なり。大師は此を「加持の卽身成佛」と名けたまへり。

二に傳受の功を明すに二。初めに傳持の人の徳をあぐ。

夫れ傳國の寶冊は帝帝相附し、三密の印璽は佛佛傳授す。始め法身摩訶昆盧遮那如来より乃し今日に及ぶまで、師師以心傳心し、弟弟子授相承して、系統絶ゆることなし。法身

如来の加持力に非ざるよりは、何ぞ能く是の如くならんや。我等微劣の質を以て、遺弟の末に列るを耻づると云へども、然れども所傳の三密に至つては則ち法身如来の手づから結

ばせたまふが如く、今之を結ぶ、法身如来の口に唱へさせたまふが如く、今之を唱へ、法身如来の心に觀じたまふが如く、今之を觀す。一印謬らず、一字誤らず。一念舛はず。四

十餘代聯綿として分明に傳へ來りしさま、今以て有緣の四衆に面授する所相違なし。

二に受者の心を明すに二。初めに信修の益を明す。

されば今各各が手を合はすは、法身如来の手を合はしたまふに異ならず。各各が口に唱

ふるは法身如来の口に唱へたまふに異ならず。各各が心に觀するは法身如来の心に觀じた

まふに異ならず。若し人、堯の服を服し、堯の言を誦じ、堯の行を行ふ時は、是れ堯なら

んのみ。法身の威儀を整へ、法身の言を誦じ、法身の三昧に住する時は是れ法身ならくの

み。何の故に凡夫所行の三密が直ちに法身の三密と異ならざることになるぞとならば、契

印は法身の身觀なり、眞言は是れ法身の言相なり。觀念は直ちに法身の心徳なるが故に、

智、大圓鏡智、成所作智の五智となる。然かもこの五智は又其の如來の故に大日如來の法界體性智の一智に歸す。故に智く云ふ【三十一】五智四波羅蜜、十六大菩薩、八供養、四攝の三七七尊なり【百八】五佛四波羅蜜、十六大劫十六尊、外金剛部二十天、五頂輪王、十六他金剛、十波羅蜜、地水火風の四大神との一百八尊なり

【圓明】圓は具足不缺の義、明は神用無比信光顯の義なり

【通步】通步沙入相與と譯す

【護念】加持の舊譯にして、佛所護念又は三所護念と云ふ。加持と同義なり

凡夫若し三密を行すれば、乃ち法身の身徳と法身の言相と法身の心徳とが、凡夫の三業の上ののりうつり、現行ましますことになるなり。是を以て、行者僅かに一指を擧ぐるに心佛業生、此中に攝し盡す。有情非情も此中に攝し盡す。一唱の眞言、一念の觀想も亦以て爾なり。是れ即ち大菩薩の滿、終に明を證らす、無礙三摩耶力の故に、行者所行の自功德力の故に、及び不思議法力の故に、三力和合し、因縁相成して此れ成佛すれば彼も成佛し、彼成佛すれば此も成佛して上方法界、有情非情平等に成就せすと云ふことなし。然れば則ち行者一印を捧るも煩惱よりも無量の思ひを凝らすべし。一字を唱ふるも含千理の旨を存すべし。一月輪を觀するも遍照法界の想を作して、而も所有の所行皆一切衆生の所行となると信知して懇懇に之を修習すべし。しかせば自他共に三三平等通融して早く大悉地を得るに康護からん。

二に未注の用心を示す。

但し行人未だ實の如く心自證心、心自覺心の位に至らざる際は、且暮に無始以來の罪障を懺悔し、未起の煩惱を伏滅し、惡業を懺むべし。五戒十善は言はんも更なり。眞言宗の四重禁の第一に「退菩提心」と云ふは自心を菩提と信知せざるを云ふ。又一「住無爲戒」と云ふは畢竟自身是佛を戒とする意なり。意あらん智人之を思へ。

後に所得の果を明すに三。初めに得果の所由を明すに三。初めに他の正像末に對して、今宗の行證、時を揀ばざるを明す。

【疏主三藏】大日經疏の説者善無畏三藏を指す。
【大師】弘法大師なり。

【理具の即身成佛】眞言宗にては理具加持、顯得の三種即身成佛を立つ今是其第一なり。

【宗祖大師命を云】弘法大師の唐求法のこと。

【青龍和尚】大唐青龍寺の惠果和尚即ち弘法大師の師

【胃地】梵語にして菩提のこと。即ち覺悟なり。

【金剛頂五秘密儀】金剛頂修儀金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌のことにして不空三藏の譯。

【三密の會闍】身口意三密の行。

【増上縁】三密金剛の力を以て増進勝上するの縁とする義なり。

【毘盧遮那三身果位】法報應三身に於て佛部、蓮華部

若し夫れ他宗は正像末の異を論ずれども、密教には修行に正像末を論ぜず。信修するの時、是れ則ち其正法なり。悉地に時を簡ばず信修するの時是れ則ち其時なり。

二に今愚の流弊を糺して、佛見の正理を述ぶ。

凡そ今の人、口には自心是佛を是とすれども、凡夫の儘佛なりと云ふは石瓦を黄金なりと言ふが如く思ひ取らざる者、滔滔たる字内幾人かある。殊に知らず、佛知正見の前には元より一切衆生を佛なりと見そなはずなれば、即身成佛と云ふは、小判を小判と呼ぶに均し、何の怪しきことかあらん。

三に現在の修顯を責む。

我等既に毘盧遮那の具體を固有するのみならず、又之に契證すべき方法に逢へり。何ぞ更らに曖昧として知らぬ行末を待つべけん。現前凡夫のまま佛に成られん者か。將た成られざらん者か。須らく其法則に就て修して試みよ。興教大師は「若し鑊が言を疑はば修して之を知れ」と誠め給へり。況んや悲智深重の宗祖大師、何に由つて、我を欺き給はん。

二に機類を簡擇するに二、初めに極頓と極劣を揀ぶ。

機根萬差にして趣入多途なるが如きに至つては、或は一念に相應して三昧現前するあらん。此を極大頓機と稱す。或は一生成就を得ずして、若しは順次二生、若しは三生に辨ずるも有らん。此を劣慧愚鈍の人とす。並に今の撰に非ず。

金剛部の三部なり

【三種世間】器世間、衆生世間、智正覺世間なり。

【德乎悦乎】老子には「道之爲物尊

倫而德一」と、即ち微妙不測の貌。

【寶冊】傳國の章なり。

【四十餘代】眞言宗は師香相承の口訣を以て長受するが故に、師が弟子に密法を授くると同時に血脈と稱して、大日如來より代代繼承して絶ゆることなき系圖を授與す。然してこの鈔の作者良基大教正まで大日如來より四十餘代を經ること十を云ふ。

【契印】大日如來の智拳印なり。

【心佛衆生】心と己身と佛との三と全く相等しと歎ずる三平等觀なり。

【三方和合】大日經疏に所謂「白の善根と及び如來の

二に信解及び深信に就いて證果を明す。

若し深智深信ありて、互相三密を行ずるの人、是を機教相應、眞言正所被の人とす。假令深智なくとも深信ありて感勸に手に印を結び口に明を誦じ、心に月輪阿字を觀ぜん人は初心と云へども永く生死の輪廻を離れ、行住坐臥、菩提に於て無時暫忘なることを得るなり。眞教大師、末代の眞言行者の用心を釋して曰はく、「何なる心を發はす者、必ず悉地を成就するや。謂く、深信有らざる者能く悉地を成就す。何をか深信と謂ふや。謂く、久久修行して法眼をあらはさずと雖も、疑慮を生ぜず、退心を生ぜず。是の如きの人必定して悉地を成就す」と。若し然らば深信の人は行功の有無に拘らず、只修すべし。求むべからず。

三密の行、竟に成就するに至りては、十方融通して一佛土となりて、有應の處として密嚴華藏界ならざることなく、永く生死に自在を得て二利の洪願を天壤と俱にせん。此を「經」

には「方便爲究竟」と説き給ひ、「疏」主は「醍醐妙果三密の源なり」と述成し給ひ、

「大師」は之を「獲得の即身成佛」と判じ給へり。是に於て、始め所信の境と、終り所成の智身と全體合一することを得、いはゆる「達悟に及び已れば去來今なし」と云ふものなり。

如上三種の即身成佛は日く次第すれども、一生の上に辨ずる所にして、均しく是れ即身成佛と稱すること簡り。又之を三句に配するに、三句は即ち眞言行者の一生一身の上に具足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

足して更に臨生經歷の義には非ず。

加持と法界力とに由るが故に所爲の妙業皆成就することを得一の意。

【一月輪云云】一月輪を廣して三千大千世界に遍滿せしむる觀。

【三三平等】自己衆生の三密と佛の三密各三平等と觀じて入我我入互相涉入すること。

【悉地】梵語にして成就と譯す。

【心自證云云】大日經の任心品疏に「唯是れ心自ら心を證し、心自ら心を覺す、心の中知解の法もなく、始解の者もなく、始めて開曉するにも非ず、亦之を開曉する者もなし一の文を引く。

【四重禁】大日經受方便學處品にあり四種根本罪にあり即ち誦諸法、捨離言衆となり。然し

密宗安心鈔

三に眞の成佛及び眞の淨土を結勸す。

抑成佛の途多差なる中、今殊に即身成佛を主張すること、之を要するに即事而眞、阿字諸法本不生の宗意より出でて、此に非ざれば眞の成佛に非ざればなり。『大日經疏』の中に「自心を佛と觀ぜざれば永く成佛せず」と釋し、興教大師は「娑婆の儘淨土なりと得可

はぬは眞の淨土に非ず」と判じ給へり。是れ即ち凡夫と大日如來とは元より二體に非ざれども、無始妄薰の爲に早くより大日如來の覺體を忘れ、穢土と淨土とは本來異處に非ざれども、衆生枉げて穢土と誤認すればなり。是の如きを無始の闇闇といふ。されば自心の外

に認むる佛は眞の佛に非ず、礫石の外に玉を求むるに同じ。娑婆を離れて指す淨土は眞の淨土に非ず、波を除けて水を要するに似たり。是に由つて之を觀すれば、自心是れ佛なり、娑婆即密嚴華藏界なりと體するの外に復至極の成佛究竟の淨土あること無しと決定諦信して、若し此れに異なる説は、皆凡夫而二の隔執に符順せるの一往にして、隨自了義の談に非ずと了知せよ。

後に因論問答結旨。

問ふ、「眞言家小野廣澤の先德、或ひは安養を欣求し、或ひは都率を仰願し、又は諸天修羅宮に入りしも有り。最初發心より大日覺王を期して悉地を頓成し給ひしことの顯著なるに至りては、興教大師其撰なり。何ぞ意樂の多趣にして、安心の一定なきや。末徒願る望洋たり。知らず、如何が伐柯して可ならん。」

九

て今の異苦提心とは其の第一なり。【住無爲戒】無作戒とも云ひ、眞言行者所具の佛性の上に来來具足する三業の高潔正願の功能を云ふ。【正像木】大乘同性觀などに於有教有行、有果の時代を正法、一千有年、無差別の時代を像法、一千有年とし、有教、有行、無差別の時代を末法、一萬有年とす。【極大華嚴六六】これは大山經疏卷六に所謂密教の類、漸、漸の三機を明かすなり。【五相】これは菩提心論等の文意による。五相とは一に通達心、二に金剛心、三に金剛心、四に金剛身、五に金剛堅固身にしてこの五相具に備れば方に来來の身となるなり。

答ふ、前修の芳願皆宗意に戻らず。到底必ず一致に歸するの深旨無きに非ず。元來三世諸佛、みな淨佛國土、成、就衆生の願行ましませば、諸佛の淨土は十方に徧在し、虚空に充滿せり。其機に應ずるや因縁の宜しきに就いて成就の易からんことを要するのみ。若し深教より之を習せば、至到一處ならざるなし。是を以て「正流の口訣」に「安養は華藏の淺路、都率は密嚴佛國の淺路なり」と記せり。若し夫れ大師は「安養都率は木來胸中なり」と言へり。されば淺を擯して深に従へば安養、都率は即ち華藏密嚴佛國なり。謂ふ所の密嚴華藏は畢竟何れの所ぞ。亦唯行者の一心の本居のみ。彼三品悉地を差して、共に即身成佛なりと談ずるが如き、誠に所由ある哉。又何ぞ勝劣難易を其間に論ずべけん。是に由つて之を思へば、當處即ち法界宮の知見の前には安養も可なり。都率も可なり。諸天修羅宮も亦可なり。皆是れ密嚴華藏世界なりと聞達するが故に。

密宗安心略示

夫れ時に、正像末ありて、末代には行證二道成じ難き由を申すは、淨土門等の沙汰にして、眞言宗の意に非ず。眞言宗には、悉地時を挿ばず。信修する時即ち是れ正法の時なりと意得る事なり。されば最初阿闍梨の許に於て、誠示を蒙り、發心する位より、一迷未斷の凡身を直ちに佛身と成す所の本有法身如來の三密の祕法を授かり申すことなれば、先づ打ち向ふ道場は、自性法界宮殿と意得、拜し奉る所の佛像は法身如來の影現ましませ

【達悟云云】 菩提心論の文。
【無始妄薫】 無明妄想なり。

【隨自了義】 隨自とは隨自意語なり。究竟眞實則ち了義の義にして、顯教には了義不了義を云へども今は顯教を不了義とし、密教を了義とす。

【小野】 京都山科にある仁海信正の開創にかゝる曼荼羅寺隨心院を指し或は又眞言流派の一小野流を指す。

【廣澤】 京都醍醐に寛朝僧正開創の遍照寺(大觀寺)を指すものにして後に益信本覺大師廣澤一流の祖となる。後世小野廣澤の流儀を野澤十二流と稱す。

【菩提修羅宮】 等流身の土なり。

【華藏】 華藏世界は最上の妙樂、その中にある故に極樂と云ふなり。

【密宗安心鈔】

密宗安心鈔

る姿と存じ申すべし。阿闍梨より兩手を合せ、五字明を唱へ、我れ即ち大日如來なりと想へとの示あらば、示の如く之を結び、之を唱へ、之を觀想すべし。是の如く、信受して疑なく行する時は、煩惱は直ちに菩提となり。生死は即ち涅槃となり、凡身は即ち佛身となり、穢土は、直ちに淨土となると決定して、餘事を思ふこと勿れ。天に二日なく、國に二王なく、佛に二佛なし。大日如來は一切諸佛の本祖にして、自餘の諸佛菩薩、金剛天等は、皆大日如來の差別智印の一徳たり。五字明は、一切の眞言陀羅尼の本體にして、自餘の眞言陀羅尼法文は、悉く此五字の流派、無盡の一分なり。五字を約むれば、阿の一字となる。凡そ口を開けば、阿の聲あり。口を閉づれば息あり。是れ即ち阿字なり。又五大皆響有りとして、萬物の音響阿字ならざるはなし。爾のみならず、諸法は阿字一字の轉なりとて、佛界、生界、器世界、山河大海、大地草木に至るまで、皆阿字のかくの如き姿に顯はれたるなれば、萬境に向ふ毎に皆阿字なり、本不生なりと觀すべし。三無差別の故に皆平等通融すと知るべし。貴賤僧俗共に身の勤くにつけ、口の言を發するにつけ、意の物を思ふにつけて、皆阿字なりと云ふことを忘れざる時は、吾が動くも、吾が言ふも、吾が思ふも、皆阿字の徳となり、萬事の舉動、皆阿字の舉動となる。若し又無事ならん時、或は夜間休息の時などは、特に身も口も意も、自心本有の阿字に安住すとの思ひを凝すべし。動くも本有の阿字の動き、靜なるも本有の阿字の靜なるにて、動靜共に平生の體を改めずして、其儘本不生なりと思ふべし。本不生と云ふは、中道實相の理とて此上もなき微

【大師】弘法大師の秘談記の文。

【自餘の諸法云云】密教胎藏界にはその十三大院の佛菩薩金剛天等は皆中尊大日如来より流出すと云ふの意を返る。

【三無差別】心佛衆生の三平等を云ふ。

妙の境界なり。假令、深智無くとも、深信ありて疑心を懐かず、決定諦信して之を行する時は、大日如来の位になり、密教華藏界に安住して、生死に自在を得、自利利他を天地と共にせんことも、豈難からんや。

密宗安心鈔終

〓當和讃は眞言宗の安心問題をば簡略なる和讃にしてその内容は上根上智と下根劣慧の二機根に分別し、上根のものに眞言の法に依つて如説に三密の修行すれば今生に於て即身成佛し、下根のものに光明眞言を稱ふる功德によつて往生淨土を決定するとの意を説けるものなり。

眞言安心和讃

歸命頂禮大日尊
 一切如來の祕要にて
 十方淨土の諸聖衆は
 開きて示せし尊なれば
 青龍阿闍梨の教誠に
 眞言祕密に逢ことの
 二佛出世の中間に
 いかなる宿世の種因にて
 五濁惡世の此ごろも
 如説に修行する時は
 一念一時一生に
 無盡の功德圓滿し
 下根劣慧のともがらも
 一度神咒を唱ふるも

八葉四重の圓壇は
 衆生心地の曼荼羅なり
 大日普門の萬徳を
 密嚴國土の外ならず
 菩提を得るは易けれど
 得がたきなりと演たまふ
 果報つたなく生るれど
 解脫の時を得たりけん
 上根勝慧の者ありて
 正像末のへだてなく
 三密加持の不思議にて
 即身成佛せらるなり
 決定諦信いたしなば
 無明を除くと説たまふ

眞言安心和讃

弘法大師の誓願は
この中間の衆生を
濟度するにあり。
【五濁】一に劫濁
二に見濁、三に煩惱濁、四に衆生濁、五に命濁なり。
【神呪】眞言陀羅尼の明呪と見るべし。
【一審】身口意三密のうち、何れかの一審なり。
【口稱の功力】唯口に稱する功德が三密又修の大功徳と一致すること。

一審おこたることなくば

三審具足の時いたり

過去に造りし報にて

生れて法門きくことと

諸佛の慈悲にも渴ぬべし

他力の方便勝れたる

中にも光明眞言は

一字に千業を含むゆゑ

信じて唱ふるわれわれは

往生淨土と一筋に

南無大師遍照尊

南無大師遍照尊

増上縁の力にて

終には佛果を證すべし

盲聾瘖啞の輩に

唱ふることもならぬ身は

かかる衆生を救ふには

眞言陀羅尼にしくはなし

諸佛菩薩の總呪にて

無邊の功德備はれり

口稱の功力を因として

安心決定致すべし

南無大師遍照尊

眞言安心和讃 終

光明眞言和讃

言二十三字の功徳を説けるものにして眞言宗には下根劣慧の機根はこの光明眞言を稱ふることにより往生淨土決定すと説く。

【灌頂】眞言密教の曼荼羅に入る儀式なり。

【光明眞言】陀羅尼の名。此眞言を誦ずれば佛の光明を得て諸罪報を除く故に此名あり。

【ラシ】胎藏界の陀羅尼に、金剛界の陀羅尼には剛界の語を冠し、藏記には唵字に攝伏、三身の五義ありと云ふ。今は供養の義にとるか。

【アホキヤ】阿謨伽。功徳空しからざるの義。

【ベイロンヤナウ】毘盧左翼。或は吠盧遮那に作る。又舊譯には毘盧舍那

歸命頂禮大灌頂
 諸佛菩薩の光明を
 字の一字を唱ふれば
 香華燈明飯食の
 丸と唱ふる功力には
 二世の求願を得せしめて
 大日如來の御身にて
 一切衆生をことごとく
 福壽意の如くにて
 唱ふるその人は
 華の臺に招かれて

光明眞言功徳力
 二十三字に藏めたり
 三世の佛にことごとく
 供養の功徳具はれり
 諸佛諸菩薩もろともに
 衆生を救けたまふなり
 唱ふる我等が其まに
 説法したまふ姿なり
 生佛不二と印可して
 菩提の道にぞ入れたまふ
 此世をかけて未來まで
 大安樂の身とぞなる
 いかなる罪も消滅し
 心の蓮を開くなり

光明眞言和讃

に作る。法身佛の
梵名即ち大日如來
なり。

【マカボダラ】摩
訶母捺囉、大印と
譯す。

【マニ】摩訶、或
は摩尼と書く、珠、
寶、摩尼如意等と
譯す。

【ハンドマ】鉢納
摩、蓮花のこと。

【シンバラ】入勝
擲、光明或は微光
と譯す。

【ハハハリマヤ】
外護、護野。

【ウン】神又は合
と書き諸天の徳種
子にして阿彌陀
四字合成なりと。

【七者の爲に云云】
光明眞言土砂加持
の功徳を説く。

【七】唱ふる光明に

【七】數多の我等を攝取して

【七】【七】我等も隔てなき

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】【七】【七】【七】【七】

【七】無明變じて明となり

【七】有縁の淨土に安きたまふ

【七】萬の願望成覺して

【七】神通自在の身を得べし

【七】罪障深きわれれが

【七】忽ち淨土と成りぬべし

【七】土砂をば加持し廻向せば

【七】速得解脱と説きたまふ

【七】餘教超過の御法にて

【七】説くともいかで盡すべき

【七】南無大師遍照尊

光明眞言和讃 終

【舎利讚】當和讚は佛舎利の功德を在家の人に解し易からしめんが爲に書けるものなり。

【五智坊融源】眞言宗新義大傳法院の高僧。興敦大師の親族にして師に就き教相の秘義を傳ふ。嘉應元年後白河上皇高野山に幸ありし時、師を召して見えんとせらる。師風姿ありて見えず。上皇乃ちその庵に幸し給ふも師木片を撻きて腰背を炙り、前驅御幸を告ぐるも敢て顧みず。上皇その徳を尊び後より拜して去り給ふと。

【身語意密】三密のこと。

【金剛幻】大日經に所謂十縁生句の中に幻の如く、密教に明かず如幻の法門を云ふ。

【道樹云々】釋尊成道を云ふ。即ち

舎利和讚

根來寺五智坊融源阿闍梨作

歸命毘盧遮那佛
 大悲神變妙にして
 法身自樂の境界は
 況や我等が凡夫なる
 如來是を觀じてぞ
 衆生是に依てこそ
 金剛幻の應月は
 一切時處に悉く
 根樹熱せし朝には
 化縁盡きぬる夕べには
 一代化儀事をへて
 大悲方便止すして
 供養歸依の輩は
 變化法身佛舎利
 化導利生勝れたり
 等覺十地も入り難し
 争か見聞覺知せん
 加持の門には出でたまふ
 身語意密覺りけれ
 隱顯縁に任せたり
 起滅邊際得べからず
 道樹に花を散び
 雙林色を變じてき
 四徳の都に歸れども
 舎利を留め置きたまふ
 福德果報量りなし

釋尊は菩提樹下に於て正覺し給ふ故に花を散ぶと云ふ

【體林六六】釋尊入滅を明す。釋尊入涅槃は沙羅雙樹の間なるが故に雙

體と云ふ

【四德】大乘の大經所具の德にして常樂我淨の四

德なり

【三十二相】佛は三十二種の相好を具し給ふ故に常と

なる字を三十二相納めつつと云ふ

【四無礙智】或は四無礙智と云ふ。即ち一に法無礙、二に義無礙、三に辭無礙、四に樂説無礙なり

【八音】如来所得の八種の音聲なり

即ち、極好音、柔軟音、和適音、智慧音、不女音、不謬音、深遠音、不竭音なり

【紫摩金】又は紫摩黄金と云ふ。紫は紫色、摩は垢濁

は紫色、摩は垢濁

生身供養する人と

一度供養を興すれば

數數實義を觀すれば

三十二相納めつつ

日月輪の形にて

紫摩金の蓮臺に

白珂雪の月光に

遍一切處の身なれば

常恆三世の法なれば

佛は無餘の同寂に

威儀を納めて億千萬

不壞の化身誰人ぞ

常住佛性何物ぞ

同寂外に求むまじ

佛身疎くましまさず

佛性我が身に備へたり

かかる指南に値へる世に

正等なりとぞ説きたまふ

生天解脱の因となる

即身成佛誓からず

四辯八音やめたれど

祕密語をぞ説たまふ

本地法身相現じ

圓海廣佛色澄めり

全體一粒ことならず

生身舍利一つなり

入りぬと集會は悲めど

舍利と成りてぞおはします

今の舍利にはいまさずや

金剛堅固の駄都ぞかし

われらが眼の前にあり

衆生本有の悟りなる

舍利三寶世にいます

願みて佛道求むべし

なきを云ふ。
【駄都】(Dhatu)
と云ふ。界、體、同性
の自體を云ふ。故
に此所にては如來
の舍利を云ふ。即
ち金剛不壞の身界
なればなり。

此身は實に程もなし

空しく此世を過しては

凡そ生死の輪廻こそ

何をいかにと營みて

昔の天の樂しみも

今の人の榮えとて

楮堂臺室何かせん

綾羅錦繡常ならず

多生曠劫過ぎしかど

此度舍利に値遇せり

歸命頂禮佛舍利

眼を閉ぢん夕べには

願求諸衆生、往生安樂國
悟入阿字門、速證大覺位

朝の露にことならず

いつをか生死の際とせん

思へば泪もとどまらぬ

今迄三途に廻るらん

先の夢にて忘れにき

後に有りや頼むべき

永く留る人ぞなき

終には誰か身を嚴らん

見佛聞法有りがたし

しるべき契のいますなり

神力加持を捨てずして

必ず淨土に置きたまへ

舍利和讃終

弘法大師和讃

「當和讃は眞言宗在家信者のため開祖弘法大師の一代行狀をば簡略に誌したるものにして、一般信者の常に唱ふる所なり。」

【照應】弘法大師の灌頂。即ち大師親ら、遍照金剛一と署名せられしにより大師の稱號とす。

【實德五年云云】弘法大師誕生のことと誌す。大師は實德五年六月十五日、讃岐國多度郡屏風浦（今の善通寺の地）に誕生、初めは眞魚と云ひ、養育見て靈奇なりしを以て人呼んで貴物と云ふ。

【力の獄云云】大師七八歳の頃佛法弘通の誓願を立て我拜山（俗に捨身が嶽と云ひ、館より百丁計り西北の山）より身を投ぜるに天人天降りてこれを受け元の

命、眞言宗の祖師と稱す。王深歸りてふ、岐浦御歳七つの其時に五の獄に立雲の遂に乃ち延曆の藤原姓の賀能等としるしを残す一本の弘めたまへる宗旨をば眞言宗旨の安心は片塊不二と定まれど、眞言を宿障何時か消えはてて不轉肉身成佛の誓は龍華の聞くまで

實德五年の六月に屏風が浦に誕生し、衆生の爲に身を捨てて立る誓ぞ頼もしき末の年なる五月より雲日船にのりを得て、松の光を世に廣く眞言宗とぞ名けたる上根下根の隔てなく下根に示す易行には行住坐臥に唱ふれば往生淨土定まりぬ身は有明の菩の下忍士を照らす遍照尊

誓は龍華の聞くまで

所に置くと云ふ傳説を取る。

【しるしを】残す一本の松

入唐求法して歸朝の砌、大唐の濱に於て、手に持て

三鉢を日本に向つて投げ給ふにそ

三鉢飛び來つて今の高野山伽藍所御

影堂前の三鉢松にかかると云ふ。

【拈は龍華の】開くまで弘法大師は

五十六億七千萬歳彌勒菩薩が正覺を

取り龍華三會の曉一切衆生を濟度す

る迄此婆娑世界(忍土)の凡夫を救

ふを以て誓願とす【神泉苑】京都二

條城の東にある池にして大南淳和天

皇の天長元年に勅命により此所に於

て請雨の法を修す驗ありしを云ふ。

【金口の眞説四句の偽】釋尊所説の

一諸行無常是生滅法一毎四句なり。

仰げばいよいよ高野山

結ぶ縁の葛かづら

昔國中大旱魃

其時大師勅を受け

甘露の雨を降しては

國の患を除きたる

吾が日本の人民に

金口の眞説四句の偽を

いろはにはへどちりぬるを

うるのおくやまけふこえて

いかなる無智の稚子も

されども總持の文字なれば

僅に四十七字にて

思へば萬國天の下

猶も誓の其中に

家運長久智慧愛敬

殊に見る日も淺ましき

雲の上人賤の男も

繼りて登る嬉しさよ

野山の草木皆枯れぬ

神泉苑に雨請し

五穀の種を結ばしめ

功は今にかくれなし

文化の花を咲せんと

國字に作る短歌

わがよたれぞつねならむ

あさきゆめみしゑひもせず

習ふに易き筆の跡

知れば知るほど意味深し

百事を通ずる便利をも

御恩を受ざる人もなし

五穀豊熟富み貴き

息災延命且易産

業病難病受けし身は

【八十八】 四國八十八ヶ所の靈場。

八十八の遺跡に

悪業深きわれわれは

生死の苦海果もなし

爰に三地の菩薩あり

救済たまへる御慈悲の

南無大師遍照尊

南無大師遍照尊

よせて利益を成したまふ

繋がぬ沖の捨小舟

誰を便の綱手繩

弘誓の船に櫓棹取り

不思議は世世に新なり

南無大師遍照尊

弘法大師和讃 終

興教大師和讃

歸命密嚴大尊者

哀憐衆生 智行 徳

聖儀の奥はしらぬ火の

寛助の室にすみ染の

南都修擧の夜の月

春日摩頂の春の花

青蓮 聖に値遇しては

明寂開裂を尋ねては

八度聞持の救世の願

千日無言の自利の行

稻荷に精祈の神助には

信貴に懇修の冥被には

聖慈親王謁しては

鳥羽法皇に參じては

興教大師大權化

我今略述 讚聖儀

肥前藤津に降誕し

衣かへてご修したまふ

後圓明を非しつづ

終に果實を結びけり

祈りし法器と嘆ぜられ

互に師資と敬はる

我等を悲愍の外ならず

誰が爲苦忍の勤ぞや

券主莊をぞ喜捨しける

天王珠をば親授あり

所願にかなふ助業あり

御夢に達はぬ御感あり

富和讃は興教大師覺鑊の一代行状を簡明に讚歎せるものなり。興教大師は新義眞言宗の開祖。嘉保二年六月十七日肥前國鹿島に生る。十三歳鳥に生る。仁和寺の寛助僧正の門に入り。後南都に行き、二十歳東大寺戒壇に受戒し、同冬高野山に登る。後大治五年、鳥羽上皇の勅信により大傳院と住房たる密嚴院とを興す。長承三年大傳院兼金剛峯寺座主となり。満山の僧徒これに抗み、後保延六年大傳院と金剛峯寺の僧徒相争ひ、ために根來山に退き、一乘山圓明寺を創してこれに居り、康治二年十二月二十九日寂す。三年興教大師の諡號を受く。

肥前

【しらぬ火】

興教大師和讃

の此言葉

【實助の家】大前

十三歳にして

寺宣助僧正の門に

入り、後二十七日

にして、阿闍梨の

き、高僧の頭を受く

【善通寺】永久二

年十二月、大前

野の山、阿波上人

青蓮師、往生此の

門に入り

【明徳寺】永久

二年二月、大前は

高野山景徳院阿闍

梨上人について、阿

闍梨を授け

【八雲閣持】大前

は高僧八雲に就つ

て、虚空藏閣持法を

傳して、自ら悉地を

得とす

【聖徳太子】白河

法皇第五皇子、聖

德太子、花藏院宮

と號す

【二季】春秋二期

の傳法會

【莊園興丁云云】

長承元年十月、鳥

羽上皇高野登高、大

御願によりて小傳法
 所造巧徳の縁縁は
 落座眞の久曼徳
 當夜はじめて傳法會
 修學修行春秋の
 法皇御壽普願なく
 總教の諸流白他門を
 小野風澤に三井の流
 小野の官邸を召れては
 鳥羽の宮院開きては
 青龍和、尙の後身とは
 白河聖上の様者とは
 珍流の傳法問答に
 教院圖系は影向に
 二世の孝養思はれて
 孝養集の三卷を
 白他の罪責悲しみて

大傳法院密嚴院

我等に對向の種因なり

法皇行幸公御供奉

二利成海の軌則とて

二季の法會ぞ是なる

莊園興丁と此縁せり

大成せまくれを請ひ

燒らす漢とりたまひけり

世に無き徳藏を聞せられ

大御龍王賜はせり

忠道公の奉に見え

珍也法師の業に知る

博覽深智を感嘆し

密教善識と崇奉せり

慈父の追福慈母のため

認して母に贈られぬ

身口顛倒意馬のため

等莊園及び砂金千兩を賜ふ。

【忠道】藤原忠道公。

【青徳和尙】弘法大師の師。眞言傳持の第七祖。

【教尋】大傳法院學頭。永治元年三月二十三日歿。

【發露懺悔】上人の作。密嚴院發露懺悔文一を指す。

【鐵鎖不動】保延六年大傳法院へ金剛峯寺の僧徒亂入して上人を搜したるに本堂には不動尊の像あり。僧徒木像の不動尊を巢にて鐵みしに鮮血したると云ふ。

【五智房】六云。上人の家後高野山五智院開基。五智房藏源無野より歸り閉棺に對して經を誦むに棺中より經頭を取れりと。

【廣澤六法】眞言宗本相根本の小野廣澤の二流の法流にして、この廣澤

發露懺悔の四十四句降魔の威力示現には

阿字月輪の修觀には

聞持の峯には忽に

楓樹の上には時時に

水輪定には水湛へ

塔外に天眼通たかく

白山神術を誓ひては

春日鎮護を契りては

一世の化益成滿し

康治二年の冬の空

無量壽なれど四十九に

五智房理趣を誦じぬれば

廣澤六流の隨一祖

大悲根來の本ふかみ

徳香萬世にかほりては

法流諸州にうらひては

作りて弟子に貽されぬ

雖鑽不動の靈をたれ

寺壁院池に影現す

五百佛頭を出現し

眞然僧正影向す

阿遮等至には火炎充つ

和歌に圓鏡力ふかし

妙理偉服の神となり

行滿了髻の重となる

諸弟に遺誨垂示して

十有二月十二日

不滅の法を取たまふ

翁より首句を誦じたまふ

初位三昧の居士にて

三秘密敬授しげく

普聞普黨の益をなし

遍滿遍至の徳なせり

流には西院、華藏
院、忍辱山、保壽
寺、大傳法院、保壽
和寺、御流の六流あり。

唯願大尊者、慈眼視我等
離障具福智、成密嚴果人
南無密嚴尊者興教大師

興教大師和讃 終

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月十日發行

昭和國譯大藏經 宗典部
第二卷

不許複製

發行所

編纂者

新編和國譯大藏經編輯部
代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院

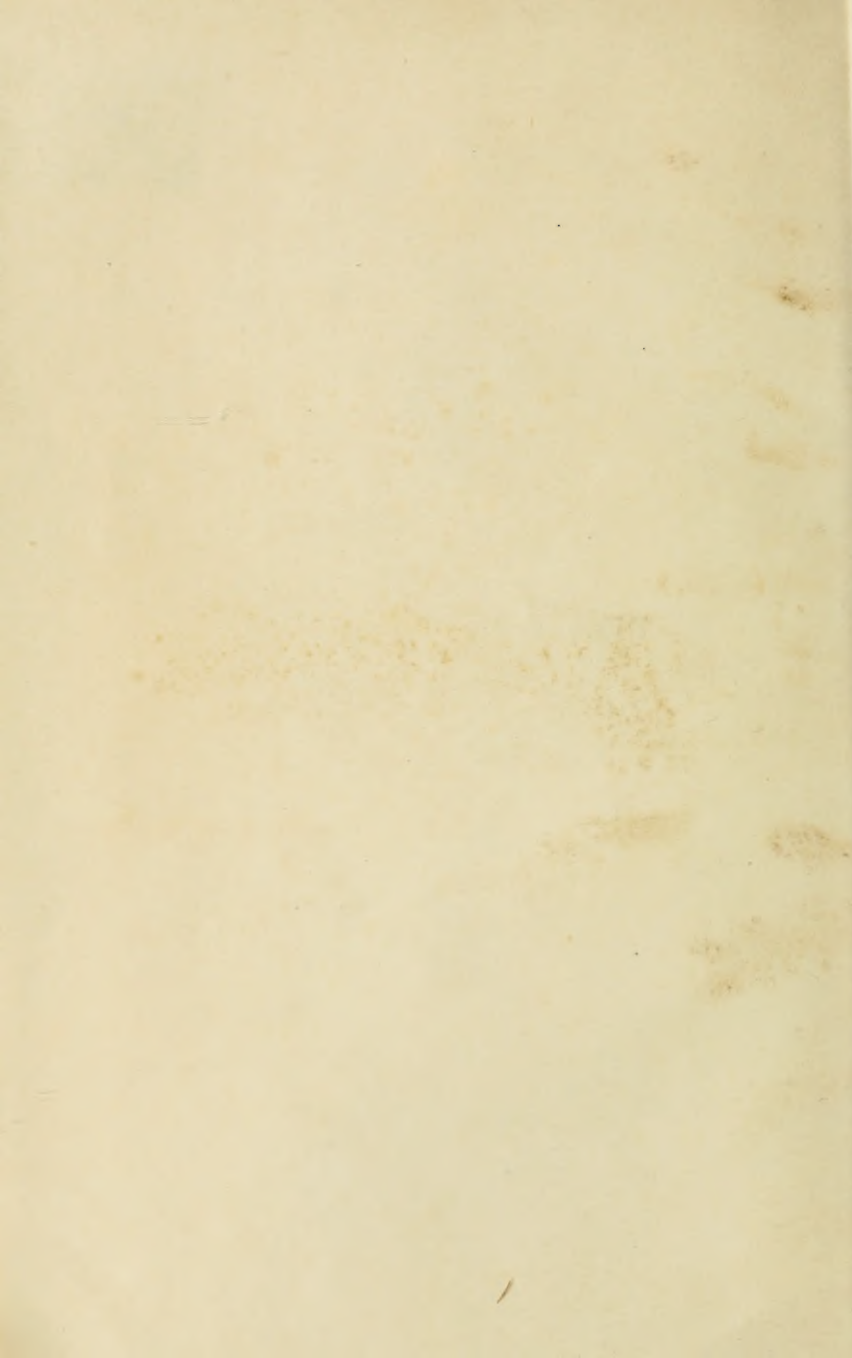
印刷者

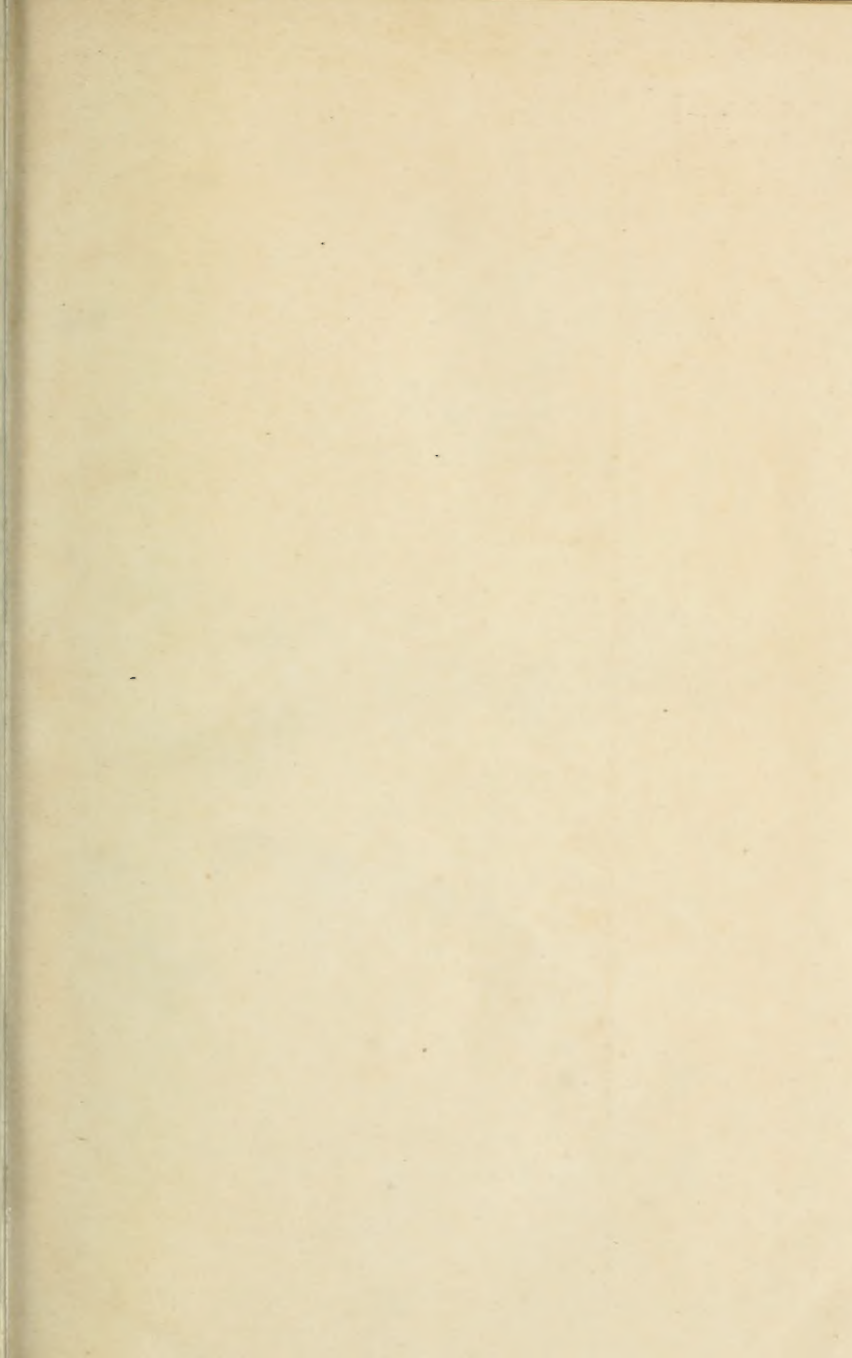
東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社 東方書院

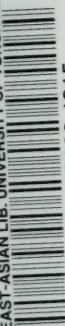
電話下谷四二五九
振替東京六八一





東原市京東
山喜房佛書
林書佛房喜山
〇〇九一京東管振
一六三五石小話電

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 4215